

ひぐらしのなく頃に～ただひたすら圭一と魅音がイチャイチャする  
だけ編～

Java—Lan

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

雛見沢で起きた恐るべき惨劇と滅びのループ。

それは終わったはずであった。

しかし、何者かの手により再演が始まる。

昭和58年6月：

前原圭一、園崎魅音、竜宮レナ、古手梨花、北条沙都子の五人は、いつものように楽しい毎日を過ごしていた。だが、彼らは知らない。本来の世界と、この世界に相違があることに。

それは確かに雛見沢なのだが、どこかズレている世界。

同じ人々がいるにも変わららず、思考のボタンが掛けまちがった世界。

そして、

前原圭一が園崎魅音に告白した世界。

「魅音、俺と付き合ってくれないか？」

そう、ここは、

全ての不安要素と惨劇フラグがへし折られ、

ただ、ひたすら前原圭一と園崎魅音がイチャラブするだけの世界！

誰かが望んだ、ラブラブでハッピーな物語が始まる！

# 目次

## 第一章・恋人編

第1話	1日目(木)	A「ロツカー」	1
第2話	1日目(木)	B「見分け方」	15
第3話	2日目(金)	A「女らしさ」	21
第4話	2日目(金)	B「無許可の許可」	28
第5話	3日目(土)	A「嫉妬の鬼」	37
第6話	3日目(土)	B「虫取り合戦」	52
第7話	3日目(土)	C「初泊り」	61
第8話	4日目(日)	A「平行世界」	77
第9話	4日目(日)	B「キズモノ」	85
第10話	4日目(日)	C「ひぐらしのなく頃に」	95
インターログ「鷹野三四」			104

## 第二章・婚約編

第11話	5日目(日)	A「始まりの日」	113
第12話	5日目(月)	B「超難易度」	125
第13話	6日目(火)	A「膝枕」	133
第14話	7日目(水)	A「両手に花」	147
第15話	7日目(水)	B「後悔と償いと」	157
第16話	7日目(水)	C「I LOVE YOU」	170
第17話	8日目(木)	A「先生転倒」	180
第18話	8日目(木)	B「腕相撲」	190
第19話	8日目(木)	C「夕餉」	202
第20話	8日目(木)	D「鬼の刺青」	209
インターログ「野村」			222

第三章・結納編

第21話	9日目(金)	A 「成人教育」	230
第22話	9日目(金)	B 「大人の矜持」	242
第23話	9日目(金)	C 「確定分岐点」	250
第24話	9日目(金)	D 「風船割り」	263
第25話	9日目(金)	D 「腕の中の宝石」	275
第26話	9日目(金)	E 「憎悪の瞬間」	285
第27話	10日目(土)	A 「殺意の末に」	303
第28話	10日目(土)	B 「ヒーローの条件」	321
第29話	11日目(日)	A 「交差する運命」	337
第30話	11日目(日)	B 「デート」	356
インターログ		「古手梨花」	388

第四章・婚前編

第31話	12日目(月)	A 「ご褒美の誘惑」	398
第32話	13日目(火)	A 「決別への覚悟」	416
第33話	14日目(水)	A 「本心への問い」	439
第34話	15日目(木)	A 「記念写真」	456
第35話	15日目(木)	B 「園崎家逗留」	474
第36話	16日目(金)	A 「忌まわしき想い」	493
第37話	16日目(金)	B 「共白髪の誓い」	513
第38話	17日目(土)	A 「終末の日」	537
第39話	18日目(日)	A 「オヤシロ様」	587
第40話	32日目(日)	A 「帰結」	628
エピローグ		「ハッピーエンド」	691

EXTRA

カーテンコール

724

e x. 大学生・綿流し祭

739

e x. 平成18年・雛見沢廃村

751

e x. TEAKE 2

763

## 第一章・恋人編

### 第1話――1日目（木）A「ロッカー」

「1日目（木）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」  
唇をそつと離した。

「圭ちゃん…」

魅音がうるんだ瞳で俺を見ている。

「魅音、その…ちよつと熱くなってやっちまったけど…これは俺の、本当の気持ちだぜ」

自分の顔も紅くなっているに違いない。

それはわかっている。

勢いでやっちまったが、もう後戻りはできない。

後悔しているのか？いや、そんなことは無い！

すっかりしろ前原圭一。ここで決めなくてどうする。

魅音のために、俺のためにも、ここで決着をつけなきゃダメなんだ

！

「魅音、俺と、いいよな？」

いいよな。つてなんだ。馬鹿なのか俺は？

はつきりともう一度断言しやがれ「付き合ってくれ」と。

「…おじさんで、本当にいいの？」

いいの、じゃない。

魅音でないとダメなんだ！

「その、圭ちゃん…嬉しいよ。本当に、嬉しいよ」

魅音がゆつくりとうなづく。

これは、その、つまり、なんだ。OKってことか。

よかった。もし断られたりしたら…

バンッ！

ロッカーの扉が開いた。

レナが満面の笑みで俺達を見ている。

「魅いちゃん。圭くん。お疲れ様。罰ゲームの時間終了だよ☆だよ

☆

「あ、ああ、そうかレナ。そんな時間か」

「アハハハ。長いような短いような時間だったねえ」

俺と魅音はぎこちなく笑った。

この日、俺達は学校の放課後に集まり、

俺：前原圭一、園崎魅音、竜宮レナ、古手梨花、北条沙都子の

五人で部活をしていた。

部活というのは、このメンバーで、罰の有るゲームをして遊ぶという内容だ。

しかし、そこに手抜きは一切存在しない。真剣勝負！

なにしろ、毎回恐るべき罰ゲームが存在するのだから！

：が、今日に限って俺の成績は散々だった。

毎回、決まったゲームで遊ぶわけじゃない。

そのせいで、負ける人間が固定されているのは回避されてはいるが、それでもトータルで見れば勝負に強い人間、弱いに人間は出てくる。そして俺は、どちらかと言えば負けの多い方だった。

だから今日もゲームで最下位であっても、それほど驚くことじゃない。い。

だが今回は、なぜかどの種目においても圧倒的強さを誇っていたはずの部長の園崎魅音がボロボロに負け、俺と同着ビリという散々な成績だった。

「ちえー圭ちゃんと一緒に。ついてないなあ」

それはこつちの台詞だぜ！

と言い返したが、珍しい事もあるもんだ。

どちらにしても二人しての罰ゲームは免れない。

敗者代表として俺は、罰ゲームが書かれたメモの入った箱の中に手を伸ばす。

罰ゲームは毎回決まっているわけじゃない。

勝者が勝手に決める場合もある。

ただ、今回は箱の中に入っているメモをを引き出す。

という方式をとった。

ちなみにメモは、ゲーム開始前に各々が書いて、箱の中に入れたものだ。

何を書いてあるかはわからないし、自分で書いた罰を自分で受ける可能性だってある。

どんな罰ゲームがあるか考えるだに恐ろしいが臆してはいけない。それが部活メンバーの心意気つてもんだ！

そして、

そこで引いて書かれていたのは

―ロツカーの中に15分間入る―

というものだった。

：なんじゃこりや？

こんな罰ゲームを考えるのは

大方、ちびっ子の沙都子か梨花ちゃんだろう。

まあ、確かにロツカーの中に入るのはいい気分じゃない。

暗いし、狭いし、変な臭いはするし。

そして今は六月にあるまじき暑さだ。相当に蒸すに違いない。

いやいや、多分それだけじゃすまない。

中に入ったとたん、外からモツプの柄だか何かで叩かれ、騒音と恐

怖の渦に叩きこまれるかもしれない！

しかし、ここはあえて何もしないで

『いつ、何かが襲ってくるかわからない』

という精神的恐怖を狙う可能性もある。

沙都子あたりがロツカーに入ったのなら

「いゝやゝゝゝ出して下さいませ!!!」

と暴れて可愛いかもしれない。

：そう考えると、

梨花ちゃんが考えたような気もするぞ。コレ。

「何をしているのでございますか？早くロツカーに入りませ」

そんなことを考えていたら

沙都子にせかされた。



残念だが今回ロッカーに入るのは沙都子じゃなく俺だ。

あ、いや、魅音も、か？

「えっと、おじさんも圭ちゃんと一緒ににはいるわけ？」

沙都子と梨花ちゃんは嬉々として魅音を押し入れようとする。

「どうせんでございませう？・ね？・梨花？」

「一緒に入るのですよ。ぎゅうぎゅうなので☆にはく」

レナが笑顔でロッカーの扉をあけて、俺と魅音は向かい合わせに一緒に入った。

苦しい。寿司詰めだ。というか。目と鼻の先に魅音の顔がある。

この雛見沢分校に通っている子供達は少ない。

そのため、下は小学生から上は中学生ぐらいいまで、かなり年齢層がバラけて同じクラスにいる。

魅音と俺は歳が近いせいもあって身長もけっこう近い。

梨花ちゃんと沙都子は、小学生なので、身長があうことはほぼほぼ無いが、

魅音の場合は別だ。

ロッカーの中に押し込められれば、

目と鼻差の先に相手の顔があるのは当然の然。

つまり、恥ずかしいことこの上ない！

「け、け、圭ちゃん！顔が違いつて！」

「ご、ごめん、魅音！」

俺は顔を背けたが、そんなに首が動くわけでも無い。

それは魅音だって同じだ。

「じゃあ、圭一君に、魅いちちゃん。今から15分間カウントするからね」

レナの声に「おう！」と俺は答える。

たかが15分間。なんてこないぜ！

マンガを読んでいれば、一瞬じゃねえか。

そして扉を締められたが…甘かった！

これは結構きついぞ！

狭いロッカーに詰められた二人！

聞こえるのは、魅音と俺、お互いの呼吸音のみ！

しかも、六月にあるまじき暑さの為に、熱気がロッカーに広がり、汗もとめどもなく、出てくる！

幸いな事に、四方八方からモップで攻撃されるということは無かったが、それでも十分にツライ。

「お、おい…もう十分だったか？」

「圭」さん、まだ五分もたつていませんのことよ？

案外、根性が無いのでございますのね」

沙都子の意地悪い言葉が帰ってくる。

おのれ沙都子、ロッカーを出たら、いの一番におまえの頭を搔きむしってやるぞ。

「圭ちゃん、大声出さないでよ」

「わりい、魅音」

長時間、横を向いていれば首も痛くなってくる。

人間はいつまでも、首を横には向けていられない。

しかたなく正面に戻すと、

…うおっ。

びっくりした！

そこに魅音の顔があった。

「け、圭ちゃん」

熱いんだろう。

魅音の顔が火照り、汗もかいている。

俺にかかる息も熱い。しかし…

「こうしてみると魅音も結構セクシーだよな、うん」

「ふえっ…っ？」

あ、しまった。暑さで、思わず顔に出してしまったか。

俺は直ぐに顔に出してしまう悪い癖がある。

そのせいで、今、何を考えているのか知られてしまうのだが…

「いや、いや、圭ちゃん、声に出して言ったよ…っ？」

「え、マジで…っ？」

「うん」

…やっちゃまった。

こういうのは言わないようにしていたのに。

魅音とは、年が近く、転校してきたとき声をかけてもらった事からも、よくつるんでいた。

あまり男女として考えた事は無く、そのせいでどちらかといえば最近まで男同士の仲間という印象の方が強かった。

だけど、あの日、玩具屋で人形を渡した事で、少なからず魅音を「女の子」として見るようになってしまった。

だって人形って、女の子が欲しがるともんだらう？

魅音はどうだ？欲しいのか？欲しいならやるよ。

俺はそんなノリで手渡した。だけど、俺はそこで気が付いてしまった。

魅音も女の子だって事を。

…不覚だ。

いや、初めから魅音は女なのだから、むしろそう思わない俺が失礼なんだけど。

だけど、それを深く考えると俺と魅音との関係性が壊れてしまう。

気軽に叩いたり、笑い合ったりするのも、女だとか考えていなかったからだ。

だから、今まで考えないように、言わないようにしてきたんだが：

「アハハハ、おじさん男だし、全然女の子っぽくないのに。圭ちゃんも良く言うよ」

「そんなことねえよ。魅音は、女の子っぽいぜ」

「ふえ…」

俺はぶつきらぼうに言うが。内心はドキドキだ。

当たり前だ。幾ら女だと思わないだなんて言っても、今、魅音という全存在を目の前に叩きつけられて…正確に言えば、押しつけられて。それを否定するのは無理だ！

諸君、考えてみてくれたまえ！

ロッカーの中で、魅音の体と俺の体。

正面から押しつけ合っているんだぞ！

魅音の腕！脚！腰！胸！吐息！匂い！

これをどうやって否定しろっていうんだ？

俺の心臓の鼓動はさつきから止まらないし、これで「女じゃない」と言い張るのは無理あるだろ！

「魅音、お前はさ。自分で言うほど、おっさんでもないし、男でもねーし。俺に言わせれば十分、魅力的な女の子に見えるぜ」

「.....」

さすがに正面向いては言えなかったが、言いたいことは言っちゃった。

そもそも、よく考えれば、俺が魅音を女扱いしたところで

俺と魅音の関係性が壊れるってことは無いんじゃないか？

だいたい思いつき「女の子」しているレナや、梨花ちゃんや沙都子とだって、部活メンバーとして普通に付き合っているぞ。

「ほ、本気でいっているの？圭ちゃん？」

「本気も、本気、大真面目だぜ。というか、むしろそこは『なんで女扱いしないんだ！』って、お前が怒るべきじゃないか？」

「あ、いや、アハハハ……」

恥ずかしがって魅音は視線を落した。

こうやって見ると、やっぱり魅音は可愛い。

……よし。

男としてみていたが、もうおためごかしは止めだ。

今日からお前を女として見てやるからな。覚悟しろ！

「……じゃあ、じゃあさ。圭ちゃんが。もし、もしも、だよ？」

これ、仮の話だからね？鵜呑みにしないでね？」

「なんだよ」

「私が告白したら、OK。してくれるかな？」

熱で、頭がぼおつとする。

ああ、思考力が落ちているのが分かる。

でも、魅音の言っていることは分かっているし、問題はねえ。

魅音が告白したら、どうするか？

そんなのきまつているじゃねえか。

「当たり前だぜ。むしろ俺から告白したいぐらいだ」

「ふええ…本当に？本気でOKしてくれるの？」

何を言っているんだよ。

さつきから、そう言っているじゃないか。

ああ、クソ。暑さで頭が回らない。

クールになれ前原圭一。そうだ。ええ…と。

なんだっけ？そうだ。告白だ。

「だったら試してみるか？魅音、俺と付き合ってくれないか？」

「う、ヴェエエエエエエ！」

なんだその返事は、面白すぎるぞ。

「あだツ!?だらりや！け、圭ちゃん。冗談で言っている事と悪いことがあるりよ！」

「冗談じゃないぜ。本気だ」

「ほ、ほ、本気って…だっておじさんなんだよ!?レナじゃないんだよ!!全然可愛くないし！女の子っぽくないし！がさつだし！それに！それに！…」

あああああ、もうなんなんだよお前は！

こっちも暑さと、お前の体の熱でオーバーヒートぎみなんだぜ！

もういい！魅音、お前がその気なら、こっちにも考えがある！

「わかった！もういい魅音！俺は今から、お前にキスをする！」

それで嫌だったら、顔を背ける！それなら俺も諦める！

もう二度とお前を女だと思わないし、俺もきっぱりとこの件を忘れる！それでいいな！」

「…え!?」

「いいな魅音！キスするぞ！」

俺は魅音の指とを絡ませあい、体を押し付けるように顔を近づける。

そして、そこまでやって我に返った。

…いや、俺、なにやってんだ？

って、なに魅音にキスをしようとしている!?

ちよっとやりすぎだろ俺!!!

だが、もう止まらない！

眼の前に魅音の顔が…

「圭ちゃん!?待っ…んっ…!」  
冒頭に戻る。

ロッカーから出た俺達二人を

部活メンバーが三者三様で見ている。

レナが可愛いモードで、笑顔で俺達を見ている。

「あれえ?・魅いちちゃん。なんだか。すっごく可愛いよ☆はう〜!」

梨花ちゃんが、ニコニコしながら俺達を見ている。

「きつと、中で色々していたのです。ロマンスなのですよ☆にぱー」

そして、沙都子が目を据わらせて俺達を見ている。

「何を言ってますの梨花? あんな狭い所で、ロマンスも何もあったものではありませんわ」

俺は急に恥ずかしさが込み上げてきた。

おいおい、なんてことしちまつたんだ俺は!

部活中に、魅音に告白するなんて!?

しかも、レナが可愛いモードに入っている。

これは間違いなく、俺と魅音の関係を察している。

レナは異常なまでに、勘が良い。隠し事をするのはまず無理だ!

まず、バレていると思って間違いない。

梨花ちゃんはどうだ?

梨花ちゃんも雛見沢の守護神であるオヤシロ様の生まれ変わりというだけあって、物凄く勘が良い。

そして、ときおり高い見識と直観力で大人びいた喋り方をする。

ニコニコしているが、わかっているかどうかは五分五分ってところだ。

「ところで、魅いちちゃんと、圭くん。ずっと指を絡ませているのはなんでだろうな☆なんでだろうな☆」

「あっ!」いつの間にも!

キスをしたときか?

慌てて絡めていた指を離したが、もう遅い。

もう三人には見られている！

それでもバレるのが恥ずかしいのが、すかさず魅音がフォローをはじめた。

「いやあく。おじさんさ、ちよつと圭ちゃんに指のマッサージをお願いしていたんだよ。アハハハ！」

…いや、フォローになっていないな。

その言い訳は

苦しいにもほどがあるぞ魅音。

ちら見をするが…

レナは可愛いモードのままだし、

梨花ちゃんもニコニコしている。

驚いた様子が無い所を見ると…

終わったな。もう完全にバレている。

いや、そもそも隠し通すことなど不可能なのだ。

この部活メンバーには！

「あんな真つ暗で狭い所で指のマッサージをしていたのですの？閉じ込められる時に、指でもぶつけられました？魅音さん」

「え？アハハ、まあ、そんなところ？」

あ、どうやら、沙都子だけがわかっていないみたいだ。

可愛い奴だ。頭を撫でてやろう。

「はあく、もういい。魅音、話そうぜ」

「けけけけ、圭ちゃん!?話すつて、何を!?!」

「全部だ。どうせもうバレている。それに仲間に秘密を持つのは良くないと俺は思うぞ」

「いや、それは、それはその。だけどさ。そのさ…」

魅音が体をもじもじさせている。

恥ずかしいんだよな。わかるぜ。

確かに、告白したと宣言するのは勇気がいることだ。

しかし、このまま黙っているわけにもいかないだろう。

後で何を言われるかたまったもんじやないからな。何より仲間だ。

「え？なんだろう？なんだろう？☆ハウ〜」

「きつとすごく良い事なのですよ☆にぱ〜」

「…さきほどから、皆さんが何をいつておられるのか、よくわかりませんわ」

目を輝かせているのが二人に

不審な顔をしているのが一人、

それに何か何かとクラスメイトが集まってくる。

怯えるな。前原圭一。これは、そうなんでもないことなんだ！

事実を発表する！それだけだ！

「あー、こほん。静粛に。静粛に…」

前原圭一と園崎魅音は、この場を借りて…

正式にお付き合いまする事を宣言するものである！」

＼オオオオオオオオオ／

俺の宣言と同時に

部活メンバーの歓喜がおき

クラス中が一斉にざわめいた。

レナと梨花ちゃんは喜び、

沙都子はあるつけに取られている。

「はう〜☆おめでどう〜！おめでどう〜！魅いちちゃん!!」

「これは吉報なのですよ〜！めでたいのです！」

「な、な、なんですって！圭一さんと、魅音さんがお付き合いまする！」

魅音は顔を真っ赤にして、湯気を出している。

ああ、予想通りの反応だ。可愛いぜ魅音。

「よろしいのですか魅音さん！圭一さんなんですわよ！

こんな口先の魔術師にたぶらかされて本当に大丈夫ですの!?!」

沙都子、お前、後で頭ぐしゃぐしゃの刑だな。

「うん。その…アハハハ。おじさん、まいっちゃったな〜」

魅音が頭をかいて照れている。

一体何がまいったのかは謎だ。

それより、レナがスカートをたなびかせて回転し始めた。

「はう〜☆可愛いな！魅いちちゃん可愛いな！」



「それで、先ほどロッカーの中でどんなことがおきたのですか？☆にぱく」

「ま、まさか、圭一さん！魅音さんにロッカー内でいかがわしい事をした!?」

沙都子、お前の俺に対するイメージはそんなにも悪いものだったのか？

俺は悲しいぞ！

「あ、うん・・・」

そこは否定しろ魅音。

「ふ、不潔ですわ〜！圭一さんの不潔う!!!」

ざわざわ・・・

周りが騒めいている。

いかん、これは非常にまずい。

沙都子や部活メンバーはともかく、クラスの皆にもよからぬ目で見られてしまう！

初手で、悪いイメージをもたれば、払拭するのに一苦労だ。

ここで何とか手をうたないとダメだ！

ちいッ沙都子、後でお仕置きだな！

「沙都子、それは違うぜ・・・」

「なんですの！圭一さん！近づかないで下さいまし！ケダモノ〜」

「ケダモノで何が悪い！」

「・・・え？」

「いいか沙都子、よく聞け！俺は魅音が好きだ！愛していると言っても良い！だから告白したし、キスもした！好きな人を求める行為の何が悪い？本能で行うことが全て悪というのであれば、愛というものも、否定しなくてはならなくなる！」

「・・・え〜と」

「沙都子！お前は、人を愛する事が悪いと！不潔だと思うのか！」

「それは、その・・・思いませんわ」

「そうだろう！人を愛する行為というのは気高く、美しく、そして崇高なものなのだ！そして、俺はそれを魅音に対して行った！それが悪い

事だと断じるのであれば、それは愛を作り出した人類文化の否定！人類という種族の否定にほかならない！」

「……………」

「沙都子、俺はお前に、そんな…悪の秘密結社みたいな考えを持って欲しくはない！」

愛とは尊いものなのだ！だからこそ、俺は、俺がこのロッカーで行った全ての行動に対して誇りをもって、お前に確信をもって言える！俺の行ったことは全て魅音に対する愛情行動であり間違っていないかったと！」

「……………」

沙都子は黙った。目を点にして。

そして、クラスは静まりかえっていた。

よくみると、

部活メンバーだけでは無く

クラスメイトも全員目を点にしている。

あれ？思っていたのと反応が違うぞ。

どうなってるんだ？

誰かが裾を引つ張っている。魅音か？

「圭ちゃん…なにも…キスしたのまで、ばらさなくてもさあ」

うおおおお!! やっちまった!!!!

口先の魔術師モードに入ると、一切の羞恥心を忘れちまう!!

魅音に何度か「圭ちゃんさあ、今、すつごく恥ずかしい事言っているからね？」

と言われた事を思い出したが後の祭りだ。

というか、俺ってそんなに何度も恥ずかしい事を言っただけ？

覚えが今一つないが…

だが、一つだけわかる。

すくなくとも、俺が今やったのは相当恥ずかしい行為だったのは確

実だ！

＼オオオオオオオオ／

再びクラス中で一斉に歓声が沸き起こった。

「え？なに、委員長と圭一さんがキスしたの!？」

「なに、なに?!付き合っているの!!!」

「ロツカーで!しちやったの!!きゃー!!!」

レナは壊れたバレエ人形のような動きを始め、梨花ちゃんは嬉しそうに思いつきり拍手している。

沙都子だけがやや納得していない顔をしてたが、しばらくすると笑顔に変わった。

「まあ、圭一さんの想いはわかりましたわ。しっかり者の魅音さんとならお似合いですよ」

とりあえず祝福はしてくれらしい。

「魅音……」

俺は魅音に声をかけようとしたが……

あれ? いないぞ?

「お、お、おじさんさ、今日はアルバイトがあるのを思い出しちゃった!アハハハ!!じゃ!!!」

物凄い速度で教室から出て行く魅音。

お前、今日は確かバイトがなかったら部活をしたんじゃないのか?

喧騒の中で、ひたすら回転するレナの

はう☆魅いちちゃん可愛いよお

の声だけがいつまでも、続いていた。

## 第2話 ─── 1日目（木） B 「見分け方」

「1日目（木）：興宮詩音宅：夜間：園崎詩音」

深夜に電話が鳴っている。かけてくるのは誰だろう？

予想してみよう。私の双子の姉・園崎魅音。どう？あたってると？

「もしもし、詩音？」

はいビンゴ☆

今日の私は絶好調じゃない。

さて、お姉は一体何の話を聞かせてくれるのかな？

「あ、お姉どうしたの？」

「詩音聞いてよお、圭ちゃんがさあ〜」

あ〜また圭ちゃんとのいざこざですか。

はいはい、わかっていますよ。デリカシーが無くて困っているんですよ？

まったく、既にお姉のハートは掴んでいるんだから、さっさと告白すればいいのに。

まあ、悟史くんがちがつて、鈍感な圭ちゃんにそんな細やかな気遣いなんてできるわけないだろうけれど。

「告白してきてさ〜」

お、圭ちゃん。やるじゃない。

見直した！80点あげちゃおうっかな？

「それを皆の前で速攻でバラしちやっつてさあ〜」

前言撤回。

ありやりや、やっぱり圭ちゃんダメだわあ〜

「キスしたことまで言うんだよお！信じられる!？」

「あははは、まあまあ、良かったじゃないですかお姉。このまま永久に進展しないと思っただ関係が進んで」

「…ん…まあ、それは…エへへへ」

「それで？」

「え？それでって…?？」

「いや、皆の前でバラされたんでしょ？ちゃんと『前原圭一の彼女・園

崎魅音です☆』って、アピールした?」

「……………」

「……………」

「…してない」

してない。

ってどういうことよ?」

「…その、恥ずかしくてさ…逃げた」

は?」

お姉、アンタ、バカなの?」

「いやだつてさ!いきなり暴露されたんだよ!そりや気が動転するつてもものさ!」

「いや、お姉、そこじゃない」

「…へ?」

「あのねえ、圭ちゃんが、皆の前で彼女だつて紹介したわけでしょ?」

「…うん」

「なのに、お姉は逃げたんだよね?」

「…え?いや逃げたつていうか…その…」

「圭ちゃんからしてみれば、どういうふうに見えると思う?」

「へ…?」

…ダメだ。

お姉は、確かに優柔不断な所があるが、

基本的に決断力も判断力も高く、スペックが高い。

だのに、慣れない恋愛事で完全に頭がパニックってる。

恋愛が絡むと、人はかくも、ここまでポンコツになるものなのかな

?

…

…:…まあ、なるよね。

私もそうだったからさ。

似なくてもいいのに、こんな所まで。

「落ち込むんじゃない?だって、自分の彼女!つて紹介した後逃げられるんだよ?」



「なに？圭ちゃん？」

「お前、詩音だろ？」

「…」

……

「……………なんで？」

「やっぱりか。」

「カンでわかる。って前にも話をしなかったっけ？」

「カンかあ、そういえば圭ちゃんに前に聞いたような気がする。いつだったかな？」

「本当は少し違う。本人達はよくわかっていないようだが、魅音の役をやっている詩音は微妙に口調のニュアンスが違うんだ。」

「詩音の方は魅音よりも話し方が鋭い。それもほんの少しな差だが見分けるには十分だ。」

「だけど、まあ、説明しづらいので本人達には言わないけどな。」

「魅音に頼まれたのか？」

「頼まれたというか、まあ、姉妹ですから手助けをちよつとね…」

「てか、圭ちゃん。私達姉妹を見分けるのは親族でさえできないのに、よくわかりますね？」

「もしかして重度のお姉マニアですか？ちよつと引きますよ、それ」

「失礼な奴だぜ。」

「そもそも「恋人だからな」

「はい。言質頂きました☆その音声、お姉にも送っておきますね」

「なんだよそれ！…って音声？」

「音声ってなんだ？言葉で無くてか？」

「何を言っているんだ？」

「今度大手電機会社から発売された録音機を防犯テスト用に改造して家に設置したんですよ。葛西が持ってきたんですが、コレ17万もするんですよ！凄いですよね！」

「えっと、つまり、この電話は…」

「はい！全部録音しています！」

「詩音ツ!!てめえ、ハメやがったな！」

「恋人だから」だなんてキメ台詞を、本人に聞かれたら恥ずかしいだろうが！

「あれれえ〜？クラスメイトの前でつきあっている所を暴露される方が、よほど恥ずかしいとおもいますけれど？」

うぐ。それを言われると反論のしようがない。

実際、ぶつちやけすぎたと少し反省はしている。

「これで、お相子ってことで良いんじゃないですか？というわけで圭ちゃん」

「なんだよ」

「お姉攻略おめでとです☆」

「え？ああ、ありがとう」

変なタイミングで祝福されても反応に困るぞ詩音。

「そこで、妹の私から適切なアドバイスをしたいと思います」

「アドバイス？」

「あのね。恋愛漫画だったら、告白してENDですけど、現実はそのじゃないんですからね。そこはわかっていますよね？」

「え、ああ、まあ当然だよな。わかっているぜ」

「なら、よろしい！恋愛に必要なのは、継続的なアフターフォロー……これこそが重要なんです」

「おう」

「だから、ちゃんと、お姉に定期的に「好き」って言わないとダメですよ？釣った魚に餌をやらない！なんていう人が言いますけれど、餌をあげないと釣った魚も死んでしまいますからね？」

なんだよ、その例えは…

というか誰がそんな例え話をしたんだ。

「秘密です☆じやあね。お姉を大切にして下さいね？不幸にしたら…」

詩音が、

一呼吸置く。

……私、許しませんから。

俺は声が出せなかった。



声質に詩音の本気度がわかる。

一瞬、体全体に冷気を感じるぐらいに。

しかし、定期的に「好き」って言えばだなんてな。

これはかなりハードルが高い気がするぞ。

### 第3話——2日目（金）A「女らしさ」

「2日目（金）：通学路：朝：前原圭一」

朝、家に迎えにきたレナは、最初から可愛いモードに突入していた。何が嬉しいのかよくわからないが、スカートをひるがえして、くるくる回りながら道を進む。

そういえば格闘キャラクターで、こんな奴がいたな。

今のレナなら、スカート連打で360連撃ぐらいやれるかもしれないぞ。

「だって☆だって☆今日の魅いちちゃん、きつと、すつごく可愛いんだよ！はう☆」

レナとは俺の家で、魅音とは途中の道で待ち合わせをしている。

時間が合わない場合は魅音と会えなくなる時もあるが、

今日はいつもの待ち合わせ場所に魅音がいた。

「よ、おはよう魅音！」

「魅いちちゃんおはよう！」

俺とレナは元気に挨拶したが、

魅音は伏し目がちでこちらを見ると、小さな声で挨拶をした。

「おはようレナ、おはよう圭ちゃん…」

頬を赤くしてる魅音。

いや、顔面真っ赤と言ってもいい。

うむ。間違いなく魅音だ。断じて詩音では無いだろう。

ただ、あまりにもしおらしので、そこは魅音には見えない。

「なあ、魅音…」

「なに、圭ちゃん？」

今日はしおらしいな…と声をかけようとしたが、前に約束していたことを思いだした。

あれはたしか、初めて俺が詩音に会い、

詩音は魅音の別の姿だと勘違いしていた時だ。

実際には、詩音と魅音は双子の別人であるとわかったわけだが、

実は、この時、魅音は詩音に化けて俺のために色々してくれてい

た。

魅音は普段は男らしさというか男っぽい行動をとっていた。

そのため、魅音は普段しないような女性らしい行動をとるときに、照れ隠しで双子の詩音の格好をしなければならなかった。

魅音と詩音は一卵性双生児だ。

格好を変えれば見分けがつかない。

だから俺も最初は全く気が付かなかった。

だが色々あつて正体が分かった時、

魅音は詩音の姿で、こう言った。

：これなら素直になれるかなと、思つてさ。

魅音の時は男らしく自分を表現している。

だから女らしくあるときは詩音の格好をしている。

そう魅音は語っていた。

そして、俺はその話を聞いたときに魅音にこう伝えた。

—魅音のままでも同じ事を言つても、笑つたりしないぜ？

—魅音も詩音も一人の女の子なんだから：

と。

：おいおい、前原圭一。

ここが、つまり、そういう時なんじゃないか？

魅音がしおらしく、女の子Verの雰囲気を出している。

その女性らしさを肯定してやろうぜ、恋人として！

「魅音。お前のそういう、女の子っぽい所も好きだぜ」

俺は最大限クールに決めた。

エフェクトで歯も、キラリと光っているはずだ。

魅音は目を丸くしている。

効果はバツグンだ！

「へっ？あ、その…うん。ありがとう圭ちゃん。

おじさん、今、そんなに女の子っぽかったかな？アハハハ」

…よく考えれば、これは結構脈絡が無い言い方だったかもしれない。  
い。

挨拶の後に「お前、女の子っぽい所も好きだぜ」って何なんだ。

「うんうん、今日の魅いちちゃん。すつごく可愛いよ！」

レナも激しく同意してくれたが、しかし。急激に恥ずかしさがこみあげて来たぞ。

もしかして、俺、やっちまったか？

「その、き。行こうぜ魅音！」

「そ、そうだね圭ちゃん、い、いこう！」

声が上がっているな魅音。

かく言う俺も声が上がっているんだが。

おそらく、俺も顔が真っ赤になっているんだろうな。

ちくしよう。仕方ないだろ！

恋人になったことなんて初めての経験なんだからき！

「魅いちちゃんも、圭くんも、か、か、か、可愛いよお！はう☆」

俺と魅音の顔を交互にみながら、レナが恍惚としている。

まあ、レナが楽しそうなのは何よりだ。

しかし、魅音の手にもっているその大きな風呂敷はなんだ？

かなり大きそうな荷物だけどき。

「あ、アハハハ！これね！実は、その…昨日のおかずの残り物が多くてさー！」

まさか、これ全部弁当か？

前に境内で食べたレナの弁当ぐらいの量があるぞ!?

重箱何段だ？五段か？六段か？いや…七段か？

「一つ聞いていいか魅音？」

「ん？なに？」

「昨日、宴会でもあったのか？親族会議とか？」

「い、いやあ、そういうのは無いんだけどさ。ほら、いつもの夕飯を

ちよつと作りすぎて…」

魅音、お前の家は、

毎夜懐石料理のフルコースでもだすのか？

「きつとねえ、今日の為に魅いちちゃんはりきったんだと思うよ！

今日はお昼、楽しみだね！楽しみだね！」

魅音が真っ赤になってうつむいている。

そうか、魅音は俺のために料理を作ってくれたのか。そういえば、魅音は既に家人としてあらゆる技術を身につけていると聞いた事があったな。

普段はめんどくさいから、そういう技術は使っていないらしいが。それをつまり、今回は俺のために使ってくれたってことなんだな。嬉しいぜ魅音。

「あ、はははは！早く行かないと遅刻するよ！」  
声をかけようとしたが逃げられた。

まあいいさ。誉める機会なんて、学校に行けば幾らでもあるだろうし。

「2日目（金）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

机に広げられる魅音の弁当。

いや、弁当は弁当だがこの量はまるで大人数のキャンプ食材の如くだ。

だが、驚くべきは質だ。

量自体は、たまにレナが気合いを入れて弁当を作ってくれる時があるるので、

それ自体はたしかに驚くべきことではあるが慣れてはいる。

しかし魅音がもってきた弁当はあきらかに

冷凍食品では作れないものが大半だ。

というか、これでは季節外れのお節料理じゃないか！

「その…まちゃんの口にあうかわからないけれど」

魅音が箸をつかって、おずおずと煮物を掴み、俺の前に差し出してきた。

俺は反射的に口に入れる。もぐもぐもぐ…

おお、これは美味しい！

「あは、こりや美味しいぜ魅音！こんなに美味しい煮物は始めてだ！」

「そ、そう？よかった。そういつてくれるとおじさんも嬉しいよ」

魅音が顔をほころばせた。

ちくしょう。それを見てみると俺も何だか嬉しくなってくるぜ。

「ほら、皆も食べ…」と、俺はそこまで口を開いて止まった。

恍惚としている可愛いモードのレナ。

笑顔の梨花ちゃん。

そして、しかめつつらの沙都子…

「圭一さん。子供じゃないですから、きちんと自分のお箸で食べなさいませ。」

魅音さんも、甘やかしすぎではございませんこと?」

恥ずかしさが急に込み上げてきたぞ。

さつきやつたのは、いわゆる恋人同士がやる「あーん♥」というやつじゃないか?

横目でちらつとみると、魅音も顔を真っ赤にして湯気が出ている。

そういえば、昨日も湯気が出ていた気がするな。

もしかして、この謎を説明すればあらたな蒸気発電が可能かもしれない。

恋愛発電所か。なんかどこぞかの恋愛小説にありそうなタイトルだぜ。

梨花ちゃんがニコニコ笑うと、沙都子の頭を撫でた。

「みー☆沙都子、恋人同士で食べさせてあげるのは良い事なのですよ。

ここは目をつぶって、二人のロマンスを見守るのです」

「さようございますか? 恋愛とはよくわからないものでございますね」

「沙都子も、もう少し大人になればわかるのです☆にはー!」

梨花ちゃんが、沙都子を諭しているが、今一理解しきれていないようだ。

沙都子はお子様だからな。仕方がない。

「かかかか、可愛いよお! 魅いちゃん可愛いよおお!!」

なんか、昨日からそればかりだなレナ。

でも、うん。楽しそうだから良いか。

でもレナの気持ちもわかるぜ。

確かに昨日今日の魅音の可愛らしさは異常だ。

天使と言っても過言では無い!

…いや、言い過ぎた。

これはおそらく俺の恋人偏向フィルターが存分にかかっているせいだとはわかっているが。

でもさ、そう思うのは勝手だろ？恋人なんだからさ！

って、俺は誰に言い訳しているんだ!?

「2日目（金）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

授業も終わり、帰りの時間となった。

今日は昨日に引き続き部活をやるとうという話になり、さっそくゲームを開始した。

犯人、凶器、場所、の三つをあてる推理ゲームだ。

前に同じゲームを遊んだが、その時はこてんぱんにやられてしまったため、

今回はリベンジをかねて気合いを入れてやることにしたのだが…

「あ、圭ちゃん。それ凶器ね」

「お、サンキュ！魅音！助かったぜー！」

魅音が積極的にサポートしてくれなので、圧倒的な大差で俺が一位となっていた。

なにしろ、魅音はこのゲームが得意だ。

魅音が支援してくれるのなら、これほど心強いものは無いぜ！

だが沙都子は、そんな魅音に苦い顔をしている。

どうした？

「魅音さん。圭一さんをサポートするのは、まあよろしいとしても、ご自身の勝敗をあまりにも無視をしておいでではございませんか？それでは会則違反でございましてよ」

そう、魅音は俺のサポートに徹するあまり自分の勝率は無視していた。

というか、一点も稼げていない。

まあ、レナが誤回答して失敗すれば、0点以下になり何もしくなくても勝てる場合もあるのだが、

今回はレナも一度正解して得点を入れている。

つまり、魅音は今最下位なのだ。

「アハハハ、今日のおじさん、調子が悪いみたいでさあ」

嘘だろお前？

魅音のサポートのおかげで俺は大勝中だぞ!?

どうみたって絶対調じゃねえか!!

明かなこの嘘に対して、

なぜか可愛いモードで激しく呼吸して見守るレナ。

よく見ると、

梨花ちゃんが沙都子に何か耳打ちしている。

「沙都子、このまま勝負がつくと、魅音が最下位で、圭一が一位なので  
す。」

つまり、今日の罰ゲームは、圭一が魅いに下すことになるのですよ」

「それはわかっておりましてよ。ですから魅音さんに…」

「にぱー☆」

「…?梨花?さっぱりわかりませんわね?」

ん?さて、なんだか空気がおかしいぞ?

もしかして、俺、ハメられているのか?

「おい、魅音、これって…」

胸が高鳴った。

視線をうつした先にあった魅音は、唇と瞳を濡らし、

何かを訴えるような表情でこちらを見ていたのだ。

「あははは…圭ちゃん…さ。」

何でも言っていないんだよ。罰ゲームだから…さ」

くっそ…

やはり俺はハメられたようだ。

誰にだ?レナか?梨花ちゃんか?それとも…魅音にか?



## 第4話――2日目（金） B 「無許可の許可」

「2日目（金）：通学路：放課後：前原圭一」

一位の俺が、最下位の魅音にどんな罰ゲームを下すのか。  
部活メンバー達は興味津々で俺達二人を見ている。

皆が何を俺達に、いや、俺に期待しているのかは分かっている。  
わかってはいる…が！

正直、いくら仲間だからって、  
皆の前で何かやろうと思う気力はわからない。  
なので俺は、

「今日は、魅音と二人で帰る。その途中で、その…魅音に頼む！」  
と宣言した。

反発があると思ったが、意外にも沙都子以外には反対する者はいなかった。

「なんですのー！」と暴れる沙都子の口をレナと梨花ちゃんが塞ぎ、  
「いいよ☆いいよ☆二人で帰るといいと思うよ☆はうー！」

「二人で仲良く帰ると良いのです☆にぱー！」  
と、見たことも無いような眩しい笑顔で校門まで送ってくれた。

一体何だったんだ？俺の考えすぎだったのか？  
いや、逆か。何か考えがあつての事なのか？  
わからない。

この世は不思議と謎で満ち溢れている…

魅音と二人で歩きながら、  
そんな限りなくどうでも良い事で思索していると、  
魅音が体を寄せていることに気が付いた。

「魅音？」

顔を見ると恥ずかしそうに紅潮させている。  
可愛い。と、思った。

さつきも天使のようだと思ったが

魅音は、こんなに可愛かったっけ？

…可愛かったんだらうな。

それを今まで俺は気づけなかった。  
だが、今は気が付いている。それは大きな違いだ。  
青い鳥は身近にいるとはよく言ったもんだぜ。  
周囲を見るとここは農道のだ真ん中で人はいない。  
草むらが幾つかあるぐらいだ。  
俺達の後方にある草むらが、  
風も無いのに何故か揺れているが、それは気にしないことにしよう。

ふと、気が付いた。

手の甲と手の甲があたっている。いや、触れている。

もちろん自然じゃない、これは間違いなく魅音のアプローチだ！

前原圭一！このアプローチを見逃すなんてことありえるのか？

いや、無い！

男ならこのアプローチを肯定するべきなのだ！

俺は視線を前に向けると、手をつないだ。

魅音の体が、ビクツと、軽く身を震わせる。

俺は、そしらぬふりをしてそのまま歩き続ける。

お互いに無言だ。

この沈黙は嫌いじゃないが問題がある。

ドキン、ドキン、ドキン：

：俺の胸の鼓動がうるさくてたまらない。

落ち着けよ前原圭一。魅音と一緒に帰っているだけだろ？

そんなに激しく心臓を動かしてどうするってんだ。

精神を集中しろ！別なことを考えるんだ！

その時、昨夜に詩音の言葉を思い出す。

〈定期的に好きだって言わないとダメだからね〉

好きだって言う？簡単じゃねえか。

昨日沙都子の前で、あれだけ魅音を好きだって言ったんだぜ？

今朝だって、クールに「女の子っぽい魅音は好きだぜ」って言った

ばかりじゃないか。

たった一言、二言、言うなんてわけが無いさ。

ああ、言つてやるよ。魅音によ「好き」だつて。

そしたら、きつと驚くだろうよ。そして、少しはにかんだ笑顔で答えるはずさ。

うんうん。そう。楽勝だぜ。

さあ、言うんだ前原圭一、魅音に好きだつて！

「あ、うあ…」

声が、出ない。

上ずつてる。なんだこれ。本当に俺の口かよ。

ほら、どうしたのか気になつて

魅音が見ているじゃないか。

「圭ちゃん、どうしたの。大丈夫？」

「…うん」

うん、つてなんだよ！もつと気の利いた言葉をかけろよ！

ほら、いつもの軽口で、

—なんでもねえぜ魅音！お前がちよつとまぶしかつただけさ！—

…とか言えるだろ？言えないか？言つた事無いか？

オチツケ俺、コンナノ何デモナイ

「昨日、さ…詩音から聞いた」

「え、あ…うん…」

魅音から声をかけてくれたせいとか、落ち着いてきた。

…てか、聞いたつて？詩音に話を？昨夜のか？

「…えつと、録音？」

「うん…圭ちゃんが、私と詩音の見分けがつくんだつて話を聞いて…嬉しかった」

そういえば親族でさえ見分けがつかないとか、詩音は語っていた。

そのせいで「重度のお姉マニア」とか言われたんだよな。

「それなのに、圭ちゃんは私を見分けてくれた。

つまり、それつて、その…肉親以上つてことだよな」

「魅音…」

「私と詩音は同じもの。でも、同時に別のものでもある。

詩音は魅音で、魅音は詩音、でも個性があるんだ。それがわかつて

くれる人がいるって、

きつと、とても幸せなことだとおもう。だから…」

「バカだな。魅音は魅音だろ？心配するな、いつでもお前を探し出してやるよ」

そういつて、俺は手をつないでいない方の手で、魅音の頭をくしゃくしゃになで回した。

魅音のはにかんだ笑顔が見える。予定とは違ったが、結果オーライだろう。

そして俺は魅音と見つめ合った。

「…そういえば魅音、今日の罰ゲーム、まだだったよな」

「うん、そうだね」

魅音が何かを期待するような目を俺を見ている。

その期待の意味は、俺もわかってるぜ魅音。

キスしても、いいか魅音？

…と、言おうとしたが、止めた。

それだとキスが罰ゲームみたいじゃないか。

俺は魅音が好きでキスをするんだ。罰ゲームなんかじゃない。

視線を外し、

少し悩んでから口を開いた。

「どうしたの？何でも言つてよ。圭ちゃん」

「…うん。それじゃあ」

今後は魅音の許可を取らずにキスをする。それでさ、いいかな？」

「え？あつ…許可あ？」

予想外の答えだったようで、素っ頓狂な顔で驚いている。

なかなか面白い顔だぞ魅音。

「思ったんだけどさ。キスするときに、ほら、一々『キスしてもいい？』とか聞くのもなんだか、野暮かなって思つてさ。恋人同士なんだから、そういうのは無しにして、その、良い感じになったらするってのは…さ、どうかな…？」

むしろ、恋人同士だからこそ、聞くのが良いのかもしれないけれど、正直そのへんの塩梅はよくわからない。だからこそその提案だったん

だが：駄目なら取り下げるだけだ。

そんなに重要な事でもないし、魅音に怒られなきゃそれでいいさ。ん？それじゃ、罰ゲームにならない気がするぞ？…でも、まあいいか。

「アハハハハ、圭ちゃんって本当に面白いね！いいよ！いいよ！好きな時にキスしてくれて！」

「お、本当か？いやあ、よかったぜ！聞くのって結構、心理的にくるからさ」

「あ！ただ、時と場所と状況によって、拒否することもあるから。」

それだけは肝に銘じてもらえればいいかな？それ以外の時にならうん。いいよ…」

「おう、わかったぜ！魅音が嫌がる時はしない。これでいいだろう」  
そして顔を近づける。

「圭ちゃん…」

「ああ、分かってる」

俺と魅音は、風も吹いていないのに何故か草木が揺れている草むらに手を伸ばすと、

中にいたナニカシラの襟首を掴んで持ち上げた。

「梨花ちゃん、何をしているのかな？」

「梨花ちゃんじゃないのです。ネコさんなのです☆にやー☆にやー」

無理があるにも限度があるだろう梨花ちゃん！

梨花ちゃんがいるということは、沙都子もいるはずだが。

見つからない。

もしかして一人だけでついてきたのか？

それともどこかでトラップをしかけているとか？

しばらく周囲を見ると、草むらの一角が動きはじめ、垂直に伸びた。

いや、伸びたんじゃない。草で完璧にカモフラージュした沙都子が立ち上がったのだ。

なんて奴だ沙都子。まるで気が付かなかった。

お前なら本当に自衛隊にも勝てるんじゃないか？

その沙都子といえば、迷彩を外して体の埃を叩き落とすと捕まっている梨花ちゃんの姿を見て、あきれ顔だ。

「だから止めろと申しましたのに。」

梨花はそれほど魅音さんと圭一さんの逢引きをご覧になりたかったのですの?」

「にぱー☆猫ちゃんなので何もわからないのです☆にやー☆にやー」学校の方から、駆け足でレナがやってくるのが見える。

「どうやら、梨花ちゃんと沙都子が俺達を追跡していったのに気が付いて、とんできたらしい。」

「んもう!梨花ちゃんも、沙都子ちゃんも邪魔したらダメだよ。馬に蹴られちゃうよ!蹴られちゃうよ!」

俺は、梨花ちゃんをそつとレナに引き渡す。

「お持ち帰りしていいぞレナ」

「み、みい〜!」

「ほ、ほ、本当にいい!?お持ち帰りなんだよ!圭一くんが許してくれたんだよ!!☆はう〜!☆お持ち帰りい!!!」

欲望の赴くままに梨花ちゃんを頬ずりするレナ。

まあ、沙都子も一緒にレナについていくようなのでひどい事にはならんだろう。

責任をもつて梨花を家まで送りますわ。とは沙都子の言。

頼もしいぞ沙都子。やっぱり、お前がナンバーワンだ。

「ふう〜やれやれだぜ。これでようやく静かになったな」

「アハハハ、いやあく梨花ちゃんも好きだね。こういうの」

「お、でも、逆の立場なら魅音も同じように追跡していたんじゃないか」

「クククク…それは否定できないね!おじさんも、気になったら見たいタイプだし」

魅音と顔を合わせて笑う。

とても楽しかった。そしてみんなと一緒にいることが嬉しかった。

そして笑い静まると、そつと顔を近づけ。

影を混じらわせた。

好きだ。とこの時ちゃんと言えたかは、少し自信が無い。

〔2日目（金）：興宮詩音宅：夜：園崎詩音〕

電話がかかってきた。お姉だ。

さて、今日はどんな話を聞けるのやら。

「はあ〜い。お姉、どうだった?」

「えへへへ、上手く行ったよ。ありがとうね詩音」

ふむふむ。わざと圭ちゃんに負けて、言いなりになる作戦。

へタレのお姉にはピッタリだったみたい。

圭ちゃんの甲斐性の無さだけが、ちよっぴり心配だったけど…

よくやってくれたみたいで安心した。

奥手なお姉を持つと苦労するわ。本当。

「それで、今日はどのくらいまでいったの?」

「帰り道なんだけどさあ、キス、しちゃって…エへへへ…」

「ほほう。それはそれは、ごちそうさま!で、ちゃんと『好き』って言う

てもらえました?」

「えっ…と」

「ん?そこ、悩むところ?」

「いや、あはははは…キスしているときに、頭まじろろになって、よく

覚えていないんだよね」

はあ〜。まったくお姉は、二回目なんだから

もっとしつかりすればいいのに。

「で、で、でも、朝はちゃんと行ってもらえたから!」

「ふーん。本当にいい?」

「本当だつて!信じなよ!」

「…ま、いいや。そういえば、ばっちゃんに報告はしたわけ?」

「へっ…?ばっちゃんに報告?」

待て待て、おねえ。

アンタ自分の立場をわかっているのか?

「えっと、お姉…次期当主の自覚。ある?」

「なんだよ。藪から棒に!イヤだけどさ、あるよ!」

「その次期当主様がよ。殿方と付き合うってことは…これ大変な問題

なわけよ」

「えっ？えっ？でも、ほら、婚約者とか、そういうんじゃないし…」

「甘い！甘すぎる！」

あの園崎お魷のバアさんが、何も口を出さないと思っているのか！  
「あのね。お姉。もし、バッチャやが圭ちゃんのことを『あんな若者すつだらしらん！当主としての気構えがたらん！』なんてことを言ったら、これは大事よ？あつという間に引き裂かれるって！」

「えー！！やだやだやだ！圭ちゃんとわかるなんてヤダ！」

「だからよ。先じて、お姉の方から言わないと！」

「…バッチャ、許してくれるかな？」

「大丈夫じゃない？ほら、先日の沙都子の件で、バッチャも、お母さんも圭ちゃんのことを気に入っているようだし」

沙都子の件というのは、親権者である沙都子の叔父・北条鉄平に沙都子が連れ去られ、虐待を受けていた所を圭ちゃんが助けた話だ。

この時の圭ちゃんの活躍はすさまじかった。

かつて、この村で起きていたダム闘争。村中がダム建設を反対していた時期に、

雛見沢ダム建設の賛成派を形成して、主流の反対派にケンカを売った者達がいた。

北条沙都子の両親は、その反対派の首謀者として活動していたために、ほとんど村八分のような状態になっていた。

そのため、北条沙都子の両親が落下事故で死に、叔父に引き取られ、ひどい虐待を受けていたが村人たちは全員見て見ぬふりをしていた。

北条家の一族の者は苦しめられても仕方がない。

だけど圭ちゃんは、そんな空気が蔓延している中で、クラスメイトや村の人々、そして旧鬼ヶ淵死守同盟の幹部を説得し、最終的には雛見沢の最高権力者である、お魷のバアさんでさえ説き伏せ、沙都子を救う事に成功した。

この一件で、圭ちゃんは、お魷のバアさんに相当、気に入られているとか。

お魷のバアさんの側近で、うちの母・園崎茜がそう言っているの



だから間違いは無い。

そういえば、あの時も確か母さんは圭ちゃんを捕まえておけ的なことも言ってたっけ？

「…うん」

「それに、バッチャに許可を貰えば、父さんも何も言えなくなるしね」「アチャク…そっちもあつたか」

祖母のお魘のバアさんも問題だけど、父の方もさらに問題。

なにしろヤクザの親分なのだ。圭ちゃんが気に入らなければ簀巻きにして鬼ヶ淵沼に放り投げても不思議じゃない。

だが、それもバアさんに許可をもらえば丸くおさまるはず。父はお魘のバアさんには逆らえないのだ。

「というわけで、四方八方丸く収めるために、バッチャに報告ね！」

「ありがとう詩音！本当に助かる！感謝する！」

「うん。いいって。お姉ならさ、私の場合と違って問題無いと思うしね」

「…詩音」

「あ、ごめん。湿っぽい話は無し！もう切るね。お休み！」

お姉が何か言う前に電話を切る。

ハア、失言。

去年を思い出して、憂鬱な気分になっちゃった。

みんなが、あえて気遣って言わなかったのに、当の自分からふるだなんて。

ダメだな。私。

いびつに曲がった三枚の指をなでる。

そういえば、剥いだ爪って時間が立てば綺麗になおるものなんだろうか？

あの時は、本当につらかったな。爪三枚だもん。途中で意識を失ったっけ。

そういえば、お姉も爪を…

まあ多少歪んでいたとしても圭ちゃんなら気にしないか。

良くも悪くも、そういう所あるしね。

第5話——3日目（土）A 「嫉妬の鬼」

「3日目（土）：前原屋敷：朝：前原圭一」

時計を見ると、どうやら少し寝過ぎしまったようだ。

マズい！もうレナが来る時間じゃないか！

階段をおりると、どうやらすでにレナが来ていたようで、

母さんと楽し気に話をしている。

またろくでもない俺の過去の話で盛り上がっているんじゃないだろうな!?

急いで着替えて大慌てで玄関に向かうと、

お袋は意味ありげな笑いをして、俺の背中を叩いた。

「がんばりなさいよ」

一体何を頑張れというんだ：

というかレナ、お前は何を話した。まさか：

「何もいっていないよ。ただ、圭一くんに気になる子がいるって話をしたっただけかな？かな？」

おいおい、十分言っているじゃないか！

気が付くと玄関には、なぜか親父もいた。

ちよつと待て、

今まで親父が玄関に出迎えにきたことあったか？

「圭一、今度彼女を連れてきなさい」

それを言いたかったのかよ！

ちくしょう！気が向いたらな！

俺はレナの手をとって速攻で家を飛び出す。

全く、だれもかれも、人の恋愛事情に首をつっこもうとしゃがる。

そんなに楽しいのか、お前ら！

「はう☆」

まあ、レナは楽しそうではあるようだけどさ！

いつもの待ち合わせ場所に行く。

今日も、魅音がしおらしく待っていた。

手には昨日とおなじく風呂敷に包まれた弁当がある。

さすがに昨日ほどではないにせよ、

今日もかなり弁当の量は多そうだ。重箱三段か？

「圭ちゃんが、さ。昨日美味しいって言ってくれたから作ってきちゃったんだ」

「お、サンキュ、魅音！今日もお昼が楽しみだぜ」

偽りのない本心だぜ。

魅音は嬉しそうに俺に近づいてきて…：…というか、少し近すぎないか？

すぐ目の前に顔があるんだが。

「へへへ…圭ちゃんあのさ。昨日の夜バッチャに聞いたんだけどさ、交際してもいいって！」

「へ？あのバアさんが俺達の交際を認めてくれたのか？」

魅音のバアさんのお麴には、前に沙都子が叔父の北条鉄平に軟禁されたさいに、手助けしてほしいと頼み込んだことがある。

そのさいに、まったく首を縦にふらない姿に俺も少しキレて

「てめえは俺達の敵か、ならお前殺して魅音を当主にしてやる！」

と啖呵をきったことがあった。

会談が終わった後に、快く手伝ってくれたので見た目ほど怒っていないとはわかつちやいたけど、交際を許してくれるとは正直思わなかったぜ。

「はは、とりあえずよかったな魅音。これで。こそこそ付き合わなくてすむぜ」

「だね。圭ちゃん」

魅音は俺に体を寄せる。魅音が交際を認められて嬉しいのはわかる。しかし、左手で、執拗以上に俺の右手を触ってくるのは何なんだ？

まさか握りたいのか？

いや、待て。ここにレナがいるだろ？

さすがにレナの前で手をつないで登校するというのはどうなんだ。

「圭ちゃんも、魅いちちゃんも、見つめ合ってどうしたのかな？かな？遅れちやうよ！」

あ。と声をあげるまえに、レナが魅音の手をつないで歩きだした。咄嗟に魅音は俺の手を握り、おれもつられて握り返す。

さしずめ、三人一緒に手を握って歩くような光景が…

いや、なんなんだこれは。

俺達は仲良し小学生か。

「3日目（土）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

そんなこんなで学校についてのお昼時間。

いつものように机を合体させてお昼の用意をしていると、詩音がやってきた。

「詩音、なんであんたここにいんのよ。学校はどうしたの？」

「今日は、創立記念日でお休みです☆」

「あれ？前日も同じこと言っただけじゃなかった？アンタの学校創立記念日何回あんのよ」

「アハハ。それよりお姉。随分と豪華なお弁当ですねえ」

俺の前に広げられた弁当は昨日ほどでは無いが、

重箱三段もある豪華なものだ。

魅音が、どれだけ気合いを入れて作っているのかわかるってもんだぜ。

「まあ圭ちゃん。こんな豪華な弁当は今だけですから気にしないで下さいね。」

お姉はめんどくさがりやなので、しばらくすれば、普通のお弁当に戻ると思えますから」

「ちよつと詩音。あんた何をいつてんのよ！」

「あら、じゃあお姉は、こんな豪華な弁当をこれからも毎日、圭ちゃんのために作ってくるつもりなんですか？結婚したら大変ですね」

「け、け、け、結婚!？」

魅音が真っ赤になり、詩音がクスクス笑っている。

この学校では無敵の魅音が、詩音の前では簡単に手玉にとられるのがなんだか面白い。

「詩音嫌い！詩音嫌い！詩音嫌い！早くどっかいけー！」

「やなこつたー☆私は、沙都子に用があるんですー」

お姉こそ、圭ちゃんと一緒に、運動場の裏でイチャラブしてたらどうですかー?」

「へ、へえ?! い、いちやらぶ?!」

「まあ、根性なしのお姉には無理かもねー☆アハハハ!」

「詩音嫌い! 詩音嫌い! 詩音嫌い!」

口ではどうこう言っているが、二人のやり取りを見てみると、本当に仲が良いんだなっというのがよくわかる。俺には兄弟がいないからちよつとウラやましい。

詩音は当然のように沙都子の横に座る。

常には一緒にいないが、詩音も俺達の仲間だ。

自然な流れで、

一緒に俺達と弁当を食べはじめ。

途中、詩音の弁当箱の中身が山盛りのカボチャだとわかり、沙都子が逃走しようとする一幕があったものの楽しく食事をする事ができた。

「しかし、圭ちゃんには驚かされましたね。私とお姉の違いがわかるだなんて」

「あん? この間の話か」

確か、詩音が魅音のふりをして、夜中に電話をかけてきたんだよな。

「俺は魅音の彼氏だから、わかるにきまっているだろ!」

いやあく啖呵切った圭ちゃん、かつこよかったですよ」

魅音が顔を赤くして口をパクパクさせている。

それを見ている詩音とレナが実に楽しそうだ。

かく言う俺も楽しい。

魅音は表情が豊かだな。

「まあ、そりゃ詩音と魅音は『好き』っていう一言でも、だいぶ感情がこもり方が違うからな。

見分ける事なんて簡単だぜ」

「へえくすると、私の好きって言葉より、お姉の『好き』って言葉に、重みがあるってことですか?」

「へへ、そりゃそうさ。なんて言っても魅音は…」

…

…

……あれ？

「どうしました？」

「いや、よく考えたら、魅音に『好き』って言われた事無かった気がするぞ？・俺？・」

視線が一斉に魅音に向けられる。

「お姉、本当ですか!？」

魅音がちいさく「あうあう」と口を動かした。

それは、どういう意味だ。

いや、それはこのさいどうでもいい。

そうだ。俺は未だに

魅音から「好き」だと言われていない。

これはかなり問題じゃないか？

俺達恋人同士だよな？

「魅音、正直に教えて欲しい。俺の事…好きなんだよな？」

「け、け、け、圭ちゃん、何をいつているのさ！そ、そりやそうだよ！

アツハハハ！」

「恋人同士、なんだよな…？」

「え？うん、そうだよ…」

魅音は顔を真っ赤にして小さく頷く。

そうか。なら安心だ。実は前原圭一の1人相撲だった。

なんて話だったなら洒落にならないところだったぜ。

「お姉、だったら、今、ここで圭ちゃんに『好き』って言ってみてくだ

さい」

「ふえ!？」

詩音がいきなりハードルが高そうなことを言う。

皆の見ている前で、好きだと告白するなんて通常なら罰ゲームに近い。

だが、詩音の目は本気そのものだ。

いや、むしろ、鬼気迫るものを感じる。

一体どうしたって言うんだ詩音？

「あ、アハハ！トイレ、おじさんトイレにいつてくるよーじゃー！」

魅音は立ち上がると、制止する間もなく飛び出していった。

レナと梨花ちゃんはニコニコしているが、

沙都子と詩音は渋い顔をしている。

「圭ちゃん、ごめんなさい」

「え？何がだよ」

詩音に謝られたが、

理由がわからない。

「前に電話で、好きって定期的に言って欲しい。と頼んだことあったと思うけれど」

「ん？ああ、あつたなそんな話」

「あれ、お姉にも言っとくべきだった」

いや、しかし…

さすがに付き合って日がたち、魅音に好きだと告白されたことが無かった事に気が付かなくなった俺にも落ち度があると思うぞ。

「魅音さんも存外だらしがないんでございますね。」

好きだと伝えることがそれほど難しいのでございますの？」

少し沙都子は手厳しい。

レナと梨花ちゃんが素早くフォローする。

「魅いちちゃんは恥ずかしがり屋さんなんだよ！なんだよ！」

「沙都子も好きな人ができればわかるのですよ☆にぱー」

うんうん。

ここは魅音の名誉のために俺も少しフォローしておくか。

「いや沙都子。想いを強くこめればこめるほど、それは言いだしにくい物なんだ。」

言ってみれば強い想いつてのはペットボトルのふたのようなものだ。

一回あければ簡単にあくが、その最初の一回が難しいって奴なのさ」

「…圭一さんが何をおっしゃられているのか、さっぱりですよ」

さすがに少し例えがへたくそすぎたか。

もう少し、直接的な表現でいくか。

「例えばさ、前にフワラズの勾玉の時に、

レナが俺に「好き」だって告白したことがあるだけだよ。」

あれって、レナの心ははいっていないから簡単にいえたことなんだけ？」

「……………」

「逆に言えば、心がこもっていれば、なかなか言い出せないってことだ。だから……」

「……………」

ん？

周囲が急に静かになったのを感じた。

いや、静かなだけでは無い。冷気のようなものを感じる。

ひどく冷たい。冷房？いや、教室にはクーラーも扇風機も無い。

季節外れの六月の暑さのはずが、なぜ、今、これほど寒いんだ。

言うなれば、氷、いや寒波。氷河期。

眼の前にいる全員の顔から血の気が引き、視線は俺の後方に向けられている。

俺は恐る恐る振り向いた。

そこには、いた。鬼が。

「……レナが、圭ちゃんに『好き』って言ったの？」

教室の入り口にたっていた魅音の顔に影がかかり、

髪の毛が逆立ち、目が真っ赤に光っていた。

目の錯覚か？いや、違う！

お、鬼だ。鬼がいる！

「お、おい。落ち着け魅音。あの時は勾玉の力のせいだって、

知っているはずだろ？なあ梨花ちゃん」

「み、ミー☆あれは勾玉のせいなのです☆レナは何も悪くないのですよ」

「でも、言ったんだよね。圭ちゃんに『好き』だって」

おい、言葉が通じてないぞ!？」



魅音ってこんな嫉妬深かったのか？

「だから、あれだ魅音。レナの言葉はあくまでも勾玉の力に乗っ取られたモノだから、

全然レナの本心でも無いし、俺も相手にしなかったし…なあ、レナ？」

「う、うん。そうだよ。あれは、その…勾玉のせい、少し。おかしくなっちゃって」

「そうそう、あんな力を感じて受けた告白になんて価値なんて全くな  
いぜ。」

正直、全然心にも響かなかったし、ああ、心にも無い言葉って、  
こんなにも揺さぶられないモノか。って気分だったしな！」

「うう…そこまで言われると、ちよつと悲しいかも」  
悲しませてすまんレナ。

しかし、この状況を打開する方が先決だ。

「ふうん…そうなんだ

でも、言った事には間違いないんだよね『好き』だって」

だが、魅音は聞こえているのか聞こえていないのか、  
体を左右に揺らしながら近づいてくる。

これはヤバイ。逃げなければ。

と、逃亡しようとしたその時、詩音のやたら冷めた声が聞こえてき  
た。

「で、お姉のその怒りは何に対しての怒りなんですか？」

…え？

何の怒りって、それは。

えっと、なんだ。どういう意味だ？

「どういう意味よ、詩音？」

その言葉に魅音も、

かなり戸惑っているようだ。

「どいういう意味も何もないでしょお姉。圭ちゃんが告白された。だ  
から怒る。なんで？」

それは圭ちゃんが奪われるかもしれないから。そうでしょ？」

「……………」

正鵠を射たのか魅音は動きを止めて無言になった。  
つまり、誰かに奪われるかもしれない嫉妬心から怒りが沸き起  
る。

当たり前前の話だが、言語化されると結構きついものがあるな。

「レナは圭くんを奪わないよ!」

すかさずレナも話に乗ったがそれはスルーされた。

詩音は続ける。

「あのね。お姉、怒るならレナちゃんじゃなく「好き」だと言えない  
自分の不甲斐なさを怒るべきでしょ?」

「そ、それとこれとは関係が…」

「あります。」

ピシヤリ

「あのね。世界には六十億の人類がいて半分が女性なんですよ。

つまり、お姉のライバルは三十億人もいるわけです。言っている意  
味わかりますか?」

なんか壮大な話をし始めたぞ。

というか、そんなにモテないだろ。俺。

「今のお姉に必要なのは、嫉妬の鬼になることではなく、圭ちゃんを誰  
にも奪わせない、

圭ちゃんを誘惑し、魅了し、ハートをがっちりと奪い離さない…略  
奪鬼となることです!」

鬼に例えるのはわからなくもないが、

なんか例えが物騒だな。おい。

「そのために必要なのはなんだと思いますか?自分の想いを相手に伝  
える事。

つまり、自分から『好き』だと告白することです!

一方的に圭ちゃんに与えられる愛に浸るだけで

何の努力もしないで、心をつなぎ留められますか?否!断じて否で  
す!

圭ちゃんに呆れ果てられ、捨てられて、落ちぶれるのが関の山です

！」

「いやああああああ!!!」

…いや、そこまでいうのはどうかと思うが。

「圭ちゃんお願いだよお捨てないで！」

圭ちゃんに捨てられたら私ッ！」

おいおいおい、さっきまで鬼だった魅音が泣きついてきたぞ!?

「お、落ち着け魅音。俺が魅音を捨てるわけがないだろう?」

「ほ、本当に?捨てない?」

「当然じゃないか。俺達は仲間で…その、恋人同士なんだぜ?」

詩音の奴脅かしすぎた。

魅音が半泣きで鼻水までたらしているじゃないか。

せつかくの美人の顔が台無しだぞ。

「…魅音さんって、こんな一面もおありなんですね。意外ですわ」

「沙都子も誰かに恋をすればきつとわかるのです☆にぱー」

「なんか、さつきから梨花そればかりですわね。これなら別にわかりたくもありませんわ」

やたらと冷めている沙都子と笑顔の梨花ちゃんをしり目に、

俺はティツシュで魅音の鼻をかませる。

とにかく魅音は冷静になったようだ。

ひとまず良かった。良かった。

「そうだ。良い考えがあるのですよ」

梨花ちゃんが立ち上がると珍しく提案をしてきた。

一体なんだ?

「圭一をつかって部活をするのです☆」

「俺を使って部活って…どういうことだい梨花ちゃん」

「圭一に全員で告白して、一番圭一をドキドキさせた方が勝ち。

というゲームなのですよ☆にぱー」

はああ?!

なんだそれは。

「梨花ちゃま。それはグットアイデアですよ!これならお姉も告白できるはずですよ」

「はう、圭一くんに告白するの？魅いちやんの前で？」

「ちよつと梨花あ、告白だなんて、私、圧倒的不利でございませんこと？」

「そんなことないですよ。『圭一に〜に〜☆大好き♥』と言えば、

圭一はイチコロなのです☆にぱー」

「いやああ梨花ああ!!それは私も大ダメージではございませんの!!!」

なんだか、

わけのわからないことが始まったぞ。

ぐいいいいいい!!!

がつ…!!なんだ!後ろから羽交い絞めされた!

誰だ?魅音か?

「ダメ!ダメだつて!圭ちゃんは私のなんだから!」

俺の所有権を主張するのは百歩譲って許そう。

だが、そんなに強く締めるな魅音…苦しい…つて…

「くくく、お姉、これは来たるべき圭ちゃん争奪戦のプレリウドですよ…」

園崎家次期当主たるもの。己の伴侶は自分の力でハートをつながないかね」

完全に俺は玩具にされている。

だが、それはまあいい。問題はこの後の展開だ。

もし、告白合戦が始まったらどうなる?

魅音は嫉妬でおかしくなって、凄惨な未来が訪れるかもしれない。

もしかして血の雨が降る可能性だつてある!

いや、なにより嘘とは言え、全員に告白されるのは恥ずかしい!

なんとしても回避しなければ…

「コホン…ちよつと皆、良いか」

おれは後ろに羽交い絞めしている魅音に、素敵な笑顔を見せて落ち着かせると、

全員の顔を眺めて口をひらいた。

「俺に対する告白ゲーム。面白いが、言わせてもらおう。」

梨花ちゃん。これは『否』だ。認められない」

「みー!? 圭一なんですか!？」

「まず、理由の一つは…これは100%魅音が勝つからだ。だってそうだろう？」

俺は魅音が好きだ。大好きだ。だからこの中の誰かが告白したとしても、俺は魅音以外を選ぶつもりはないし、そこに公平さはない。つまり、八百長…というか、結果のきまったゲームに価値なんて無いんだ」

俺は、魅音にウィンクして見せた。

魅音は顔から湯気を出して椅子に倒れこむ。

よし、わかりやすく助かる。

これでしばらくは落ち着くだろう。

「そしてのもう一つの理由…このゲームは、誰もが恥ずかしい。

つまりある意味、罰ゲームもかねているといってもいい。

告白される俺も、魅音も、レナも、沙都子も、詩音も…

が、一人だけ特に恥ずかしくもない人物がいる…それは梨花ちゃん、君だ！」

「み、み〜!？」

梨花ちゃんを捉える俺の指先が光る！効果音が鳴り響き、画面は揺れる！

その迫力たるや某裁判ゲームの『異議あり!』のシーンを彷彿とさせるだろう！

いや、この場面は異議じゃないんだけどな！

そう、この告白ゲームは皆が恥ずかしいのに、梨花ちゃんだけは恥ずかしくない！

梨花ちゃんはこう見えても結構…というか、かなり腹黒だ！

心にもなく「圭一好きなのですよ☆にぱ〜」などというのは、朝飯前！

つまり、自分一人心の余裕を持ちつつ、皆が恥ずかしがって悶えているのを見て喜ぶつもりなのだ！

沙都子が呆れた顔で梨花ちゃんを見ている。当然だ。

「梨花、あなた…」

「何のことかわからないのですよ☆にぱ〜」

さすが腹黒梨花ちゃんだ。

「ここまで指摘されて全くこたえてないのはさすがだぜ。」

「つまりだ。安全な所で一人だけ楽しむゲームをするというのは、公平さにかける。」

やるなら全員が同等のペナルティをくらうものにならないとダメだと俺は思うんだ」

そこで俺が今日の部活で提案したいのが虫取りゲーム。

これはどういう内容かと言えば、

全員が虫取り網をもって、虫では無く、お互いを捕まえるゲームだ。

「…それでは告白とは何の関係もありませんわね」

「お、よく気が付いたな沙都子。そうなんだ、本来部活と告白とは別の話なんだ。」

なのに誰かさんはそれを利用して自分の楽しみに利用しようとしたわけさ」

「…梨花あ」

「何のことかわからないのです☆にぱ〜」

さて、この虫取りゲームの肝は

部活ペナルティとはべつに

外付けペナルティもあるということ。

つまり『捕まえた相手はお持ち帰り可能』という点だ

「え!?お持ち帰りしていいの!いいの!り、り、り、梨花ちゃんおもちかえりい!!!!」

それを聞くとレナが興奮して可愛いモードに突入する。

可愛いモードに入ったレナは、あらゆる困難と障害を打破し、

可愛い物をお持ち帰りする。

こうなってしまった以上、梨花ちゃんの命運はきまったも同然だ。

「み、み〜!?まつのですーこれは特定の誰かを狙い撃ちにしたズルい

ゲームなのですよ!」

「梨花、諦めなさいませ…それでよろしくてよ」

うんうん。悪い子にはお仕置きが必要だぜ梨花ちゃん？

魅音は特に否定もせず、詩音はとうとうしばらく考えていたようだ  
最終的にはOKを出した。

「まあ、それでもいいですよ。私が勝ってお姉に色々させますから」  
「うゝ詩音嫌いゝ」

―その勝負、待った！―

何者かが、教室の中に入り込んできた！って監督!?

「沙都子ちゃんをお持ち帰れるというのであれば、この入江京介、戦わ  
なくてはなりません」

「…いや、なんで監督が学校にいるんですか?」

監督こと入江京介さんは、雛見沢にある病院・入江診療所の所長さ  
んだ。

雛見沢ファイターズという野球チームの監督もしているので、通称  
監督と呼ばれているが、

俺達のいる雛見沢分校で何をしているんだ。もしかして野球部の  
練習があつたとか?

「いえいえ、保健室の定期点検です。」

あまりお会いになりませんが、結構学校にはきているんですよ」  
そういうえば、そういう話を前にもしていたな。

うちの学校には保険医はいないけれど保健室は一応あるんだっけ。

「圭一君、いやK! 貴方、魅音さんとラブラブハッピーENDを迎えた  
ようですね」

「あ、はい。おかげ様で…」

「ならば、今度は沙都子ちゃんと私のハッピーENDをお見せしま  
しょう!」

監督が大きく手を沙都子に向けるが、

沙都子の態度は冷ややかだ。

「お断りですわ」

即答。

「な、なぜ…!?!」

「監督の事が好きかどうかと問われれば、決して嫌いではございませ

んのよ?」

「なら…」

「でも、監督の好きなのは『今の私』であって

北条沙都子そのものでは無いのではございませんの?」

「え…いや…そんなことありませんよ…?」

「だって前に『今の私』でないとダメだからといって、

惚れられ薬を作っておいでではありませんか」

ああ、そういえばそんな薬、監督前に作っていたな。

俺は記憶がほとんどないので覚えていないが、周囲は相当ドン引き  
だったらしい。

「くっ…ちがうんです。沙都子ちゃん…!」

ただメイドに…小さな専属メイドになってほしいだけで…

やましいことなど何一つないのです!」

ああ、監督。

フオローに困る発言は止めてくれ。

そして俺を見るな。同類だと思われる。

「…まあ、勝負は勝負ですから。

監督に捕まえられたら診療所でもどこでもお連れになって頂いて  
も、かまいませんけれど」

「わかりました。この入江京介。沙都子ちゃんを獲得するためにあえ  
て鬼とも修羅となり勝負にいどみましよう! さあ、始めましよう圭一  
君! 私のメイド・イン・ヘブンのための戦いを!」

監督は気合いを入れたポーズをとって、その本気度を俺達に見せつ  
ける!

さながら、燃え上がる炎の効果音と、監督の立ち姿背景画面が表示  
される如くだ!

今、男のロマンをかなえるための熱き戦いが始まろうとしていた!

圭一「…いや、なんなんだよ。この流れは」



## 第6話 ─── 3日目（土） B 「虫取り合戦」

「3日目（土）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

ゲーム開始十秒で監督は撃沈した。

梨花ちゃんと沙都子を狙うレナの猛攻に耐えきれなかった。

入江監督、いやイリー。アンタは頑張ったよ。

ただ努力は結果についてくるとは限らない。それが人生つても  
なんだ。

俺は魂の同志であるイリーに心の中で敬礼をした。

：現実世界では同類と思われたくないので、

心の中にとどめたのが最大の理由なんだけどな。

さて、監督の話はともかく、

虫取りゲーム（正確には人取りゲームか？）だ。

範囲はグラウンドを含む学校の敷地内。

公平をたすために、全員の場合はクジで決め、

四方八方に散らばった。

おおむね、水鉄砲で遊んだときと同じだ。

ゲームに参加するのは、

俺、前原圭一、魅音、レナ、梨花ちゃん、沙都子、詩音に監督の計  
7名。

ルールは、全員が虫取り網を持ち、

頭から網を被らせられたら『捕獲』となり

お持ち帰りの対象となる。

最後まで生き残った者が勝利者だが、

お昼休みの終了のチャイムが鳴った場合は、捕獲した人数で勝者を  
決める。

という感じだ。

ちなみに総どり制なので、

2人捕らえている相手を捕獲すれば、

捕獲者を含め合計3人獲得できることになる。

ただ、その場合、お持ち帰りできるのは

あくまでも「直接捕らえた相手」のみだ。  
：そうになると、このゲームの全体の流れは、  
始まる前にほぼ予想できる。

レナと監督は即座に梨花ちゃんと沙都子を狙うだろう。

「捕らえた相手は、お持ち可能」というルールに、

監督とレナには、能力向上ぶつがかかっているはずだ。

だが、相手がレナでは監督が競っても勝ち目はないだろう。

ドン！ドン！

空気銃の音。

ゲーム開始の合図が始まった。

「げふっ!？」

監督の声。

予想通りレナに一蹴されてしまったようだ。

監督に心の中で敬礼を行う。

あとは、レナは梨花ちゃんと沙都子を執拗に狙うはずだ。

だが、今回はここからが味噌だ。

『捕まえたらお持ち帰り可能』であって

『ゲームに勝ったらお持ち帰り可能』では無い。

つまり、虫取り網で梨花ちゃんと沙都子を捕まえた段階で、

レナがゲームを続行する理由の五割ぐらゐは減る。

つまり能力向上バフが無くなるのだ！

：いや、これはあくまでも希望的観測だ。

カワイイモードのままである可能性も高い。

しかし、その場合でも、少なくとも動きが止まるはずだ。

おそらく、しばらくは二人を頼すりしているに違いない。

となれば、俺の相手は

魅音と、詩音の二人に絞られる。

だが、おそらく沙都子のお姉ねえさんねえを

自称している詩音は沙都子狙いにいくだろう。

とはいえ慎重深い詩音のことだから、

監督のように無暗やたらに突撃するとは思えない。

おそらく物陰や何かで沙都子や、それを探すレナの動向を見て対応するはずだ。

だとすれば俺が対応するのはただ一人……!

「圭ちゃんいただきー!」

ブンツ

俺はとつさに身をひるがえしてよける。

案の定だ。そこには魅音が立っていた。

「へへへ、やつぱ、魅音か。最初に俺を狙うつてのは、わかっていたぜ!」

「ふくん。さすがだね圭ちゃん。どうしてわかったのさ?」

「そりやお前、今、一番お持ち帰りしたい相手といたら……」

恋人の俺にきまつてるだろ?

……と、声に出しかけて、どれだけ恥ずかしいことを言いそうになつたかに気が付いて赤面する。

たぶん、魅音も俺が何を言いたいのか気が付いたんだろう。

俺達二人して無言で顔を赤くして視線を落してしまう。

つて、お、おいおい前原圭一。何をやっているんだ!?

眼の前に相手がいるんだぞ?なんてドジだよ!

相手が動きを止めたのなら攻撃しろよ! 恥ずかしがるな!

最初に赤面したのは俺なんだけどさ!

俺と魅音が距離をとつたのはほぼ同時。

虫取り網を構えて臨戦態勢を取る。

「と、とにかくだ! お持ち帰りさせてもらうぜ魅音!」

虫取網を叩きつける、払う、突く!

ことごとく、魅音にはじき返されてしまう!

だが、魅音の攻撃も、俺はさばいて、さばいて、さばいた!

「やるね圭ちゃん! 私相手にここまで戦うなんてさ!」

魅音は良家のお嬢様だ。

おそらく真剣や木刀なら手慣れているにちがいない。

もし、手に持っている獲物がそれらだったら

戦いにもならず瞬殺されたはずだろう。

しかし!

攻撃速度が比較的遅い虫取り網ならなんとか対応できる！  
だが、そんな俺の考えを読んだのか、  
魅音はニヤリと笑って左手をスカートのポケットに入れた。

「甘いよ圭ちゃんー！」

飛び出してきたのはロープ！

グラウンドに白線を引くときに使う長いロープ！

結構長くて太いそのロープを俺めがけて投げてきた。

しかも、なんとも上手いぐあいに俺の両手に絡みつく。

「ちよつと待て?！」

そんな長いロープ、スカートのポケットに入りきらないだろう！インチキだ！」

俺の抗議は笑顔で無視。

魅音は、たまに物理法則を無視して物体を収納してくる！卑怯だろ

！

これは絶体絶命のピンチだ。

俺はこの事態を打開するために今すぐ判断をしなければならない。

後ろに下がるか？魅音を引っ張って、力づくで！

いや、ダメだ。相手をこちらに引きずろうとした瞬間、飛びかかってくるだろう。

そうなれば俺が後ろに倒されてOUTだ。ゲームセット。魅音にお持ち帰りされてしまう。

…よくよく考えてみたら、それでもいい気がする。

いやいや、それはダメだ。

会則第何条かは忘れたが、どんな勝負でも最後まで本気で戦わなければいけない。

すると方法は一つ！

後ろが駄目なら前に飛び出す事だ！

いつだって活路は前にあるのだ！

「魅音ッ！覚悟ー！」

俺は魅音に引っ張られて倒される前に、飛び掛かる！

だが魅音はそれを予想していた。会心の笑みを浮かべている！

これはマズったか？しかし、もう遅い！サイは投げられたんだ！  
「圭ちゃん。残念だよ！こんな罠にひっかるだなんてさ！」  
「うるせえ！今日はお前をお持ち帰りして、俺の両親に紹介してやるんだよ！」

「…ほえ？」

バサ：

俺の虫取り網は、見事に魅音の頭を捕らえた。

勝った！魅音め、俺の勢いに飲まれて動きを止めたな。

これぞ作戦勝…

「…圭ちゃん。ご両親に紹介するって…どういうこと？」

魅音は顔を顔を赤くして、

ぼくと俺を見ている。

…あ。まずい。

特に深い意味はなく、勢いで口走っただけだなんだが。

魅音にあらぬ誤解を与えてしまったみたいだ。

これは釈明しないと。

「あ、いや…その、変な意味じゃなくて…」

「じゃなくて？」

「あのさ、今日、出かける時さ…その、親父が『今度、彼女を連れ着て』  
と言っていたから…」

「…そ、そうなんだ。」

…だから圭ちゃん、私を御両親に紹介したくて、お持ち帰りした  
かったのか…アハハハハ」

「そうなんだよ。アハハハハ」

俺達はお互いに照れ笑いしていた。

…というか釈明とか何でもないな。

普通に事実の羅列だ。え、と…間抜けか俺？

バサ：

「はい圭ちゃん。色んな意味でごちそうさまです♥」

虫取網が俺の頭に！

誰だ!? あ、詩音っ!? なんでここにいんだよ!

「お前は、沙都子を追っていたはずじゃ…」

「圭ちゃんとお姉が、ここでラブってる間に、沙都子と監督はGETさせて頂きました☆」

…監督？あ、そうか。そういうことか！

我ながら度し難い。考えればわかることじゃないか！畜生！

レナが開始早々、監督をブチ倒しても、

レナは梨花ちゃんを逃すタイムロスをさけるために虫取り網で捕まえずに

まっすぐ梨花ちゃんの元へ向かったんだ！

何しろ『虫取り網で捕まえた相手をお持ち帰り』できるのだ。

レナにとっては、監督など眼中にない！あくまでも目標は梨花ちゃんと沙都子だ！

詩音はそれを見て、すかさず倒れた監督を捕縛する！

次にどうなるか？

おそらく、梨花ちゃんと沙都子は、レナのお持ち帰りを恐れて結託したはずだ。

そうなれば梨花ちゃんを囮にして、沙都子はトラップを仕掛ける。

そういう作戦をとるだろう。

しかし、トラップを仕掛けるということは梨花ちゃんと沙都子は離れなければならない。

沙都子が一人になったら、詩音が捕縛。

可愛そうに沙都子の援護が受けられない梨花ちゃんは、

レナの餌食に…

「…そして間抜けにも魅音とロマンスをやっていた俺は隙をつかれましたってわけか。やれやれだぜ」

「ま、私の予想ではお姉が圭ちゃんを捕まえたと思ったんですけどね。

さすがお姉く惚れた弱みってヤツですか？」

「し、詩音く!!」

その時、お昼休みが終わるチャイムが鳴った。

部活は終了。勝者は詩音だ。

皆が集まり、今回の結果を確認。

場を取り仕切るのは勝者となった詩音だ。

「はいはい☆それでは罰ゲームを発表します！」

まず、捕らわれた梨花ちやま、沙都子、お姉は

抵抗せずに、しつかりとお持ち帰りされることー！」

「は、は、は、はう☆梨花ちゃんお持ち帰りなんだよ!!」

「み、みい〜!!!」

「レナさんは、まっすぐ梨花ちやまをお持ち帰りして下さいね！」

監督がおずおず手をあげる。

「あのおく詩音さん、私は？よろしければ車で興宮の自宅までお送りしますが。」

もちろん、沙都子ちゃんと一緒に一泊しても…」

「お心遣い、ありがとうございます監督。それでは、車に乗せてもらいますね！」

でも、お泊りはNOサンキュウです☆監督は、むしろ、お持ち帰りしない方が

罰ゲームになりますからね！」

「そんな〜」

「沙都子♥今夜は、ねーねーがたっぷりカボチャのフルコース料理をふるまってあげますからね☆」

「い〜やあ〜誰か助けてえ〜！詩音さんにごろされるう〜〜！」  
ん？あれ？

俺に対する罰ゲームは？

「圭ちゃんには…」

おぞましい笑みを浮かべるな詩音…

「お姉と一泊してもらいます♥」

俺&魅音「ハア!」

「ちよっと待ってよ詩音ーお泊り!?圭ちゃんちに!?

着替えの用意なんかもってきてないし、そもそもバッチャの世話どうするのさー！」

「あんれえく？今日、バッチャは興宮の実家の方にいるんじゃないかっ  
たでしたっけ？」

「…うっ」

「いやあ、偶然にも今日、私、うっかりアルバイトの日と間違えて、  
着替えもつてきてしまったんですよね…というわけで、持って行っ  
てお姉☆」

「そんな偶然あるかー！詩音、あんた最初からー!!!」

なおも抗議しよう魅音に、着替えの入ったバッグを押し付ける詩  
音。

謀ったな詩音…だが…

「いや、待て待て、詩音！まず、俺の家庭の事情も考えてくれ！

いきなり彼女を連れてきて、『今夜泊ませたいんだけどいいか？』  
なんて

いくら何でも、うちの親が許してくれるわけねーだろー！」

現実にはエロゲーじゃないんだぞ！

そんなこと許されるわけないだろ！

だが、何が面白いのか詩音はケラケラ笑う。

「アハハ☆そうでしたねーじゃあ、圭ちゃんには『いつでもいいので  
お姉と一泊する』で、いいですよ！とりあえず今日ダメだったら、今  
度一緒に旅行に出かけるとかして一泊してみてください。それなら  
良いでしょ？」

…確かに、それならハードルがぐっと下がるし、なにより俺が拒否  
できない。

くそお詩音の奴め。味な真似をしやがる！

罰ゲームが決まった事で、解散となった。

レナは梨花ちゃんをお持ち帰りし、沙都子と詩音は監督の車で興宮  
まで行くことにした。

詩音の乗り物が学校に置くことになったが、

どの道、明日沙都子を連れて雛見沢までくるので、その時回収する  
らしい。

「…じゃ、さ。俺達も帰るか魅音」



「…うん」

皆と別れの挨拶をすると、俺と魅音は手をつないだ。

そういえば、魅音を両親に合わせる約束もしていたよな。

今日はこのまま、まっすぐ家に帰るとするか。

第7話 ─── 3日目（土）C 「初泊り」

「3日目（土）：通学路：夕方：前原圭一」

手をつないで歩くこと自体は、もうすっかり慣れたが気恥ずかしさはまだ抜けない。

魅音の手は温かい。こうしていると少し安心する。

いつまでもこうして握っていたいと思ってしまうのは俺だけなのか？

うなだれた感じの魅音の顔を見てもよくわからない。

…やばいな俺。

少し魅音中毒になっているのかもしれない。

俺は照れ隠しに魅音に語りかける。

「まったく、今日は詩音にやられたぜ」

「…うん」

「最初から、そうするつもりだったんだぜ、あいつ」

「…そうだね」

魅音の反応が鈍い。

というか、ずっと下を向いてボソボソ何かつぶやいている。

一体どうしたんだ？

「魅音。調子が悪いのか？」

「い、いやあく、ほら、圭ちゃんの御両親に挨拶するってんで、おじさん、その心の準備が…」

大げさな。

たかだか顔を見せて、挨拶して、うまく行けば一泊するだけじゃないか。

…いや、考えてみると結構大事かもしれないなコレ。

「お、おちつけよ。何も結婚の挨拶にしくわけじゃ…」

「け、け、け、結婚!？」

マズい。俺も何をいつているんだ？

これだと余計魅音をあがらせるだけじゃないか。

話題を変えよう。うん。それがいい。

「そ、そういうえば最後に別れる時に詩音が、魅音に耳打ちしていたけどさ。」

「一体何を話していたんだ？」

「え？いや、アハハハ…おじさんもよくわからないけどさ」

「…ん？わからないって？」

「その〃お姉、いばつつキメてこいて〃って…」

「決めてこい？」

ああ、なんだ。俺の両親に挨拶に行くっていうんで、おどおどしている魅音に激励しただけが。

「詩音らしいぜ。魅音が俺の両親の挨拶に緊張しているから、心配したんだろうぜ」

「あ、アハハハ。そういう意味か！そうだよね！おじさん、一発キメてくるかね」

「そういう意味って…」

全く、それ以外のどんな意味があるっていうんだ。

そういうしているうちに、俺の家が見えてきた。

恋人を連れて来るなんて初めての経験なんで緊張してきたぞ。

もつとも、魅音の方がはるかに緊張しているだろうけどな。

顔が青ざめているし、体もなんだか硬直している。

「というか、体の動きもぎこちない…」

「み、魅音？大丈夫か」

「け、け、圭ちゃん。正直に言っただけいい？」

「お、おう。いいぜ」

「アハハハ、お、お、おじさんさ…ダメだわあ

ダム闘争で機動隊に突っ込んだ時や、牢屋にぶちこまれた時より緊張している」

比較対象が凄すぎて、逆にピンとこないが、

少なくとも極度の緊張状態だというのはわかった。

「お、お、お、落ち着けよみりょん…」

かくいう俺も緊張が伝播したのか、急に緊張し始めた。ろれつが回らない。

おいおい、なんだこれ、親に「彼女が恋人だ」って言うだけの話だろ？

なんでこんなに緊張しているんだ。それこそ結婚報告をしに来たってわけじゃないのに。

「圭ちゃん…」

落ち着け、クールになれ！

ほら見ろ、魅音が今にも泣きだしそうな顔でこちらを見ているじゃないか！

しつかりしろ前原圭一！

どこの世界に自宅前で恋人を泣かせる男がいる？

緊張するのは仕方ないが、せめて虚勢だけでも張って安心させろ！

それが男ってヤツだろ！

俺は両手で自分の頬を叩いた。

気合いの入れなおしだ！

「よし！魅音、キスをしよう！」

「ふえ…!?!」

突拍子も無いが、こういう時には刺激がある方が良いに決まっている。

言葉が良くわからないが、カンフル剤という奴か？

前に見た漫画でも描いていただろ、

大きな火災は爆薬で吹き飛ばすのが一番だってな！

…ん。

俺は魅音の返事をまたずに唇を重ねる。

最初は少し抵抗していたが、次第に魅音の体から力が抜けていくのを感じる。

途中から魅音の方も、腕を俺の体に回して積極的な受け入れ態勢になった。

一分？二分？しばらくして唇を離す。

「大丈夫だ魅音。俺がいる」

「…うん」

濡れた目で俺を見る魅音の額に、軽くキスをする。

もう緊張感は無いみたいだ。

咄嗟にやったがうまくいったみたいだ。

結果オーライだ。これ上手くやれるはずだぜ。

魅音と二人で頷くと

玄関口にふりかえった。

「あ、どうも。前原圭一の父です」

「母です」

そこに親父とお袋がいた。

「3日目（土）：前原屋敷：夜：前原圭一」

危うく卒倒しかけた魅音を支えて家の中に入った。

半分意識が無いせいか、意外に重い。

決して、体重が重いからではないだろう。多分。

両親曰く、家の前に俺達がいるのがわかったが、

中々入ってこないなので出迎えにきたらしい。

「いや、そしたら目の前で、お前、キスしているじゃないか。

さすがに父さんもな。声をかけないぐらいのデリカシーはもって

いるぞ？」

親父に何かツツコミを入れたいが、

どう突っ込んでいいのかわからないので無視をした。

恥ずかしいったらありやしない。

魅音じゃなくても、卒倒するわ！

それで当の魅音はというと、しばらく放心していたが気を取り直す

と、夕飯を作っているお袋の元へと赴き食堂のフローリングの床で古

式ゆかしい三つ指ついてのお辞儀をした。

「初めてお目にかかりますお母さま。園崎魅音と申します」

「これはこれは、ご丁寧にありがとうございます。前原圭一の母でござ

います」

お袋も、慌てて料理の手を休むと正座をして頭を下げ返す。

いやいや二人とも、そのやりとりはフローリングの床でやるもの

じゃないだろう。

「魅音も母さんも、椅子に座って……ここは畳の上じゃないんだからさ」

魅音は立ち上がると両親に深々と頭を下げ、俺に足されるまま椅子に座った。

しかし、さすがは魅音だ。

入る前はあれほど緊張していたのに、実際に家の中に入ると実に綺麗な所作で対応している。

「しかし、随分と上品なお嬢さんね圭一」

「まあな。魅音は雛見沢の名家の出身らしいぜ」

「ふむ。てつきり恋人というからレナちゃんを連れて来るんだとばかり思っていたが」

親父、それは余計な一言だ。

ほら、魅音の顔が引きつっているじゃないか。

「そうだ。魅音ちゃんは、今夜は食べて行かれるんでしょう？」

「あ、それなただけどき、母さん」

せっかくお袋から提案があつたんだから、それに乘ってみよう。

ダメで元々だ。

「今日、魅音の両親は興宮の実家の方について家には誰もいないらしくてさ。」

ほら、雛見沢って田舎だろ？一人でいるのは寂しいと思うから、ウチに泊めてあげたいんだけどいいかな？」

まあ無理だろうな。

常識的に考えて。

「あらくそれなら是非泊って行ってね！」

え？マジかよ？

「ほ、本当にいいのかよ、母さん？父さん？」

「もちろんだ。遠慮はいらないぞ魅音ちゃん。自分の家だと思って過ごしたまえ」

「あ、ありがとうございます。お母さま。お父様」

というか、親父もお袋も、そんな微笑みで魅音と俺を見ているんだ。

二人が何を考えているのか、俺には少しも理解できんぞ。

「だが、ウチに泊まるとなれば魅音さんのご両親にもご連絡を差し上げないといけないな。」

「ご自宅にいなければ、きつと心配なさっているはずだ…興宮のご両親の電話番号を教えてもらえるかな？」

俺と魅音は顔を合わせる。

そりやそうだ。両親の許可も無く勝手に泊まれるわけがない。

だけど、魅音の実家に電話をかけて大丈夫なのか？

交際は許可してもらったとは言っていたけど…

「よろしくお願いいたします、お父様。これが電話番号です」

魅音は、懐から名刺みたいなものを取り出すと親父に渡す。

どうやら、大丈夫みたいだな。

親父は電話をかけに部屋から出て行った。

お袋は今日の夕飯を作るといって俺も追い出したが、魅音は手伝いをしたいと残った。

それなら俺も何か手伝おうかとも思っただけれど、お袋に

「アンタは、むしろ邪魔になるからお風呂に入ってきなさい」

と言われたので、しぶしぶ廊下へ出るはめになる。

手もちぶさだ。

仕方が無いので、

言われる通り先にお風呂にはいることにするか。

シャワーを浴びて、湯船につかる。

これがエロゲーなら、魅音が入ってくるところだが…

「圭一、湯加減は大丈夫？」

「母さん！問題ないぜ！」

まあ、そんなところだろう。

ほっとしたが、同時にがっかりもした。

やはり現実にはエロゲーじゃない。

タオル姿の魅音がお風呂場にはいつてくる…なんて、そりや、ないだろうな。うん。

…いや、こんなことを考えていたら、

魅音に殴られるかもしれないけど。

風呂からあがってみると、食事が四人分用意されていた。

既に電話を終えた親父も戻って席についている。

興宮の魅音の御両親からは「よろしくお願いします」とのことらしい。

「それにな、圭一…」

「なんだい父さん？」

「ま…あとでな…」

「…ん？」

夕飯は実に華やかで…

俺にとっては苦痛に満ちた物だった。

「ねえ、圭一のどこがよかったのかしら？」

「そうですね、お母さま…圭ちゃんと、一緒にいると楽しいんです。圭ちゃんは…」

「魅音ちゃんから見て、圭一はどうだい？」

「はい、お父様。うーん…そうですね圭ちゃんは…」  
食事中に聞く話は、

俺のどこが好きになったのか？

学校での俺の態度はどうなのか？

子供の頃の俺はどうだったのか？

そればかりだ！俺、俺、俺！

正直、恥ずかしくて耳を塞ぎたい！

なんで俺の話題ばかりするんだお前らは！

そんなに俺が好きなのか!?

とはいえ、三人が楽しそうにするのに、

俺だけが憤慨しているのもおかしなもんだけどさ！

ああ、くそ、詩音め！たしかにこれは罰ゲームだ！

かなり高度な嫌がらせだ！

俺はムスッと黙り、

そそくさと食事を終わると、二階の自室に戻る。

「あら、今日はもうご飯いいの？」

とお袋に言われるが、もう心もお腹もいっぱいだ。

返事もせずに、そのまま二階へと上がる。

「照れているんだよ圭一は。アハハハ」



親父は本当に余計な事を言う。

まあ、とりあえず詩音に言われたミッションは終了した。

これで今日は寝るだけだ。

俺は布団を敷いて、仰向けに倒れ込む。

時間はまだ早いけど、今日一日の疲れが出てきたのか、眠くなってきた。

当たり前か。

緊張はしたもんな。

「…圭ちゃん。部屋に入っついていい？」

目を半分つぶり、

うつつら、うつつらしていると、

部屋の入口から魅音の声が聞こえてきた。

「ああ、いいぜ」

一目見て、ぎよっとする。

そこには、湯からあがったばかりの火照った体に浴衣姿の魅音がいた！

なんてこつたい…！

お風呂上りのちよつと上気した顔の魅音ッ！

こ、これは…俺の、どツボじゃないかッ!?

赤く火照ったからだに、ほんのりただよう蒸気の温もり、

そして、洗い立ての体から匂うボディソープの香り、

やばい。心拍数が上昇し、眠気がふつとぶツ！

破壊力が凄まじすぎるぞ上気魅音ッ！

「み、み、み、魅音？」

「あ、アハハハ。詩音から借りた着替えがさ…」

ちよつと着にくかったから、お母さまから拝借してきちやつて」

詩音から借りてきた着替え？

そういえば、アルバイトが無かったから。とか言つて

魅音に着替えのバッグを渡していたが…

まさかアルバイト先の際どい制服が入っていたのか？

いや詩音ならありうる。まったく…あいつは本当に…

あれなら、うん。確かに家の中では着にくいな。

親父はよろこぶかもしれないけど。

いやいや!!、魅音のそんな姿を見せるわけないはいかないぞ!

「どう…かな? 圭ちゃん」

魅音がおずおずと聞いてくる。

正直、普段とは違う浴衣姿に俺もどきまぎしている。

しかも、お風呂上がりの上気した姿というのが、またポイントが高い。

似合うかどうかと言われれば、そりや完璧に似合ってる。

浴衣美人とはこのことを言うに違いない。

「その…うん。とても似合っているぜ魅音」

「あ、ありがとう圭ちゃん…」

二人して正面にすわり、

もじもじしている。

なんだこの光景は?

「いや、というか魅音。なんか、ようか?」

「ふえ? きちや、ダメだった?」

「い、いや、もちろん魅音が俺の部屋にくるのは大歓迎だぜ?」

でも、荷物はさ…泊まる部屋に先に置いておいた方が良いと思うぞ」

「?…いや、お父様から、今日は圭ちゃんのお部屋に泊まるようになって…」

おやじいいいい!!!!

何を考えているんだ!!!!

俺の家は、雛見沢では「前原屋敷」と言われている。

芸術家の親父のために、自宅とアトリエが兼任した作りになっており、また出版社のパーテイなどもひらくため、かなり大きな住宅と なっているため、そう言われていた。

ということは、当然、来客用の部屋もあるわけで、

魅音も来客用の部屋に泊まらせるのだとばかり思っていた。

っていうか、普通はそうするだろう?

どこの世界に年頃の男女を一緒に寝かせる家庭があんだよ！  
うちの親は、相手の御両親に申し訳が無いとか思わないのか！  
俺はダツシユで一階に行くと、  
親父にくっつかかる。

「正気か親父！俺の部屋に魅音を泊めるって、どういう了見だ！」

だが、親父は微動だにしない。

むしろ、真剣なまなざしで俺を見ている。

俺はその姿に気圧された。

一体これはどういうことなんだ？

「父さん…？」

「先ほど途中で言うのを止めたが、園崎のお母さんから言付けがあった」

園崎のお母さん？

魅音の母親ってことか。

『もし、手違いが起きても園崎家が全責任を持ちますので、ご心配な  
さらないように』ということだ」

…は…？

…はああああああ！

どういう意味だよそれは！???

「圭…」

親父は俺の肩にゆっくりと手を差し伸べた。

「決めてこい！」

とりあえず俺は親父をグーで殴り。

大急ぎに部屋に戻った。

なんなんだこれは？

魅音を家に泊めるまでではない。

しかし、キメてこい？

責任を取るから大丈夫だあ？

何の冗談だ！これも詩音の差し金かよ！?

そーいやアイツも「一発キメてこい」とか魅音にいつていたな。

もしかして、そういう意味で言ったのか？

いやいや、何かを考えているんだ。

俺も魅音も、まだ学生で未成年だぞ！

世界がぐにやりと歪んだような気がする。

現実だとは思えない。

もしかして俺は、魅音に告白した時点で、

謎のアウトワールドに突入していたのかもしれない。

「圭ちゃん？大丈夫？」

俺の異常な興奮状態に驚いたのか、

魅音は目を見開いている。

「魅音。お前、布団で寝ろ。俺は今日は毛布で寝る！」

「へ？どういうことさ？」

「その言葉の意味通りだ！じゃあな魅音！」

おれは毛布を取り出そうとしたが、魅音に引っ張られた。

「お、おい魅音……」

「そんなのダメだよ圭ちゃん！一緒に寝ないのなら、おじさんも毛布で寝る！」

何を言っているんだこいつは？

年頃の男女が一緒に布団に寝るだなんて、頭大丈夫か？

「どこの世界に彼女を毛布で寝かせる奴がなんだよ！魅音は布団で寝ろって！」

「嫌だよ！嫌だって！圭ちゃんと一緒にがいい！」

「駄目だ。駄目だ。魅音は布団で寝ろって！しまいにや怒るぞ！」

「なんで!?!どうしてダメなのさ！背中を見せないでよ！私を拒絶しないでよ！」

「はあ？何をいつているんだ。み……」

振り返った先の魅音は目に涙を浮かべていた。

その瞬間、俺は雷に打たれたのような衝撃を受ける。

この…前原圭一のバカ野郎ツ!!!!

お前、本当に何考えてんだ!?!

家の前で泣かせる恋人がいるかって言ったばかりなのに、  
家の中で泣かせてんじやねえ!!!!

そうだよ！魅音の気持ちになってみればわかることじゃないか！  
食事の時は俺は離れて部屋にいつて！

部屋に来た時は、何で部屋にいるのかと言われ！

一緒に寝れないと突っ張られて！

魅音が、どう思うか考えなかったのか!?

どんだけバカなんだよお前は!!!

魅音が疎外感を感じて、

苦しんで、悲しむのは当然のことじゃないか！

ああ、そうだ！全部！全部！今の話は「俺が恥ずかしい」だけだ！

そこに魅音の気持ちなんて一ミリだって入っちゃいねえ！

全て「俺」でしかない！

なんだってんだ！これで魅音の恋人？魅音の大事な仲間？

ふざけんなよ、前原圭一！お前、確かに決めただろ！

魅音を傷つけた時、もう絶対にあんなことをおこさないって！

…魅音を、傷つけた？いつ…？

いや、いつだつていい！俺は確かに魅音を傷つけたんだ！

何度も何度も、裏切つて、傷つけて、泣かせて…

それなのに、俺は全く魅音の事を考えて無かった…！

自分が傷つくのだけ恐れて、魅音がどれだけ傷つくのか考えていなかった！

許してくれ魅音！すまない魅音！

俺は、もう二度と、お前を傷つけないと決めたのに！

「圭ちゃん…？」

「ゴメン、ゴメンな。魅音、俺、またお前を傷つけてしまった」

いつの間にか、俺は泣いていた。

涙が止まらなかった。

魅音に対する申し訳なさと、

自分のバカさ加減に気が付いて悔しくて泣いてしまった。

それを見て魅音は少し驚いたようだったけれど、

俺はそれを無視してそのまま抱きしめた。

「もう二度と、魅音を傷つけないって…ゴメンな…本当にゴメン…」

「圭ちゃん…泣かないで、私も…言い過ぎたから…だから…」

「違う。違うんだ。全部俺が悪いんだ。だから謝らなくていいんだ」

「圭ちゃん…ごめんね。私も、ごめんね…家に入ってからずっと、圭ちゃん怒っているようだったから、私、なにかしたのかわかって…ずっと、怖くて…」

ああ、前原圭一。お前は本当に大馬鹿野郎だ！

魅音はずっと自分が何かしたから、俺に突き放されたらと悩んでいたんだ！

俺が怒ったから食事の時に席を立ち、部屋から出て行けと言われ、布団と一緒に寝られるのを拒否されたと思ったんだ！

ああ、クソ！クソ！

レナのナタがあつたら、この場で、てめえの頭を力チわってやりた  
いぜ！

こんなにも、俺のことを思ってくれている素晴らしい彼女を泣かせる  
だなんて！

「生まれて初めて恋人を連れてきたら、俺も勝手がわからなくて…

だから、恥ずかしくて、魅音に、その、ひどいことをしてしまっ  
たんだ…ゴメン…」

「…圭ちゃん」

「だけど、これだけはわかってほしいんだ。俺は、魅音の事を大事に  
思っている」

「うん。わかっているよ圭ちゃん。わかっている。エへへ…」

俺は、そのまま魅音をベットまで誘導した。

もちろん、そのまま一緒に寝るためだ。

もう、別々に寝るだなんてバカなことは考えない。

何があっても、俺は魅音と一緒にだ。

布団の中で魅音を優しく抱きしめる。

温かくて柔らかい。そして良い匂いがする。

ああ、なんだろう。凄い安心する。

きつと、魅音と一緒にだからだ。

視線を下すと浴衣から魅音の胸元が見える。

って、こいつ。下着をもしかしたらつけていないのか？

詩音から着替えを預かっていた気がしたが。

服だけではなく下着も着替えなかったのか？

まあ、さすがに姉妹とは言え

相手の下着を着るわけにもいかないか。

ドキ、ドキ、ドキ…

わ、わ、落ち着け、俺の心臓。

魅音に聞こえちまうだろう！

「圭ちゃんがお風呂に入っている時に、私も興宮の実家に電話したんだよ」

俺が魅音の体温を感じて胸を高鳴らさせていると

魅音は口を開いた。

「そしたら、母さんがさ。泊まるんだったら決めてきな！って言うんだ。

おかしいとおもわない？詩音と同じ事を言うんだよ」

そういえば、親父も同じことを言っていたな。

「だからさ、その、圭ちゃん…いいんだよ」

ごくり。と唾をのみ込む。

“いいんだよ”とは、つまり…

…待て。さすがにそこまではやりすぎだ。

クールになれ前原圭一。

今、魅音を大事にすると言ったばかりじゃないか！

舌の根も乾かないうちに魅音の襲うって、そりやいくらなんでもア

ホの所行だろう！

俺は大きく息を吸うとゆっくりと吐いた。

「魅音、今日はこれで…もう寝ないか？」

「ア、アハハハ、そうだよね。おじさんの体って、あんまり女の子っぽくないしね」

そうじゃねえ！

「逆だ魅音。むしろ、魅音の体は俺好みだ。むしろ俺の為に存在すると言ってもいい。」

できるなら、今すぐ押し倒して色々してやりたいぐらいだぜ」  
「…ほえ？」

押し倒してやりたいって言葉は、  
布団で一緒に寝ているときに言う台詞でも無い気がするが、まあ、  
いい。

魅音の額に自分の額を当てると、俺は魅音の頭を撫でた。

「…ん、圭ちゃん」

魅音は気持ちよさそうに、撫でられている。

「だけどき、周囲に流されるつてのは違うと思うんだよな。魅音はど  
う思う？」

「へっ…どうって？」

「いや、だから、魅音的にはさ。周りに言われたから…そのするつての  
は…」

「あ…いや。その、おじさん、そういうこと考えた事ないからさ…」  
うむ。

俺も無い。

正直、この状況にかなり戸惑っている。

「言っておくが魅音。俺が本気でこのまま襲ったら容赦はしないぜ？  
なにせ相手は初恋の相手だ。魅音だ。きつと俺は限界を超えちま  
う。そう言うなれば

ナイアガラの滝を上る鯉のようにハッスルするはずだ！」

「あの…圭ちゃん。意味がわからないんだけど…」

失敗。

「じゃあ、分かりやすく言ってやる。

魅音、俺が本気なら、お前を今から三十分以内に妊娠させてやる自  
信がある！」

「に、妊娠ツ…!？」

おお、魅音の顔が真っ赤だ。

可愛いぜ魅音。ご褒美に額にキスをしてやるぜ！

…本当は、そんなことしたことないし、やり方もよくわからないか  
ら



30分で妊娠させるなんて無理なんだけどさ。

「でも、それって、俺達がお互いが欲しい時にするものじゃないか？  
周囲に言われてやるものじゃないだろ？」

「え、あ、うん…まあ、そうだろうね。それにうちらまだ学生だし」  
「そういうこと。まあ、魅音がどうしても…っていうのなら考えても  
いいぜ」

「…いや…アハハハ…おじさん、わかんないや…」  
「ごめんな魅音。」

これは少し意地悪な質問だよな。

魅音がうつむいて俺の胸に頭をこすりつけてきた。

俺はそのまま魅音の頭を撫で続ける。何度も。何度も。

「なら、今日はこれで寝ようぜ魅音」

「うん…わかった…」

魅音は小さく頷いた。

よし、これで万事大丈夫だ。後は寝るだけさ。

でも、その前に…言っておかないとダメだな。

これだけは。絶対に。

ああ、もう自分でここまで言っているのに、

本当に情けないぜ！

「…なあ、魅音。今、色々言ったんだけどさ」

「なに、圭ちゃん？」

「その、我慢できずに色々イタズラしたら。ゴメンな…」

「アハハハ！もう、最初から『いいよ』って言ってるじゃん。

圭ちゃんもさ、損な性分しているよね」

我慢しなくても良いのに。

魅音はそう笑顔で答えてくれた。

第8話——4日目(日) A 「平行世界」

「4日目(日)：前原屋敷：朝：前原圭一」

魅音と一緒に寝たのは良いが、興奮して眠れなかった。そりゃそうだ。だって腕の中に魅音がいるんだぜ？眠れるわけないってんだ。

それでも、早朝にまどろみを感じはじめ、少しは眠ってしまったよ  
うだ。

腕の中に魅音がいなくなっていることに気が付いた。

よく見ると、部屋のドアの前に

着替えを終えた魅音が立っている。

「あ、ゴメン圭ちゃん。起こしちゃった？」

時計を見ると、午前五時だ。

「興宮の実家から親類一同が、今日来る予定になっているんだよ。だから一足早く、家に戻ろうと思つてき」

ほとんど眠れてないせいか

今頃になって俺に猛烈な眠さが襲ってきた。

そうか…

瞼の重さに耐えきれず

そう答えるしか無い。

ああ、そうだ帰るなら送つてやらないと…

「大丈夫だよ圭ちゃん。圭ちゃんはそのまま寝てて」

でも、よお魅音…

「圭ちゃん、昨日は、その…すごく嬉しかった。

あんなにも私の事を大事に思っていてくれただなんてき…」

当たり前前だろ…だって、魅音なんだぜ…？

「じゃ、また…今度はき、うちに泊まりに来て。約束だよ」

魅音…

魅音は俺の頭に軽くキスをすると部屋を出て行った。

俺はというと手を動かそうとするが、それが限界だ。

ああ、情けない。

魅音を送ることもできないだなんて。

そして俺は意識を失った。

目を覚ました時は午後二時だった。

一階に降りると、冷蔵庫にお袋のメモが貼ってあった。

へ大切な用事がありますので、先に出かけています。

魅音ちゃんと一緒に食べてね」

どうやら俺と魅音の分の朝食を作って出かけたようだ。

残すのも勿体ないので、魅音の分も平らげる。

「そういえば、魅音、朝も食べずに帰ったのか。あいつ、お腹減って無  
いだろうな」

ピンポーン

なんだ？チャイムが鳴ったので出てみると、そこにいたのは詩音  
だった。

「ハロロ☆圭ちゃん。もしかして、おはよー！かな？」

「詩音か？ああ、沙都子を送るとか言っていていけど、その帰りか」

「そうですー！学校までバイク取りに行く途中なんですけど、一緒に  
取りにいってくれませんか？」

沙都子と梨花ちゃんが住んでいる神社と、俺の家は学校を挟んで反  
対側にある。

つまり、沙都子を送って、バイクを回収してまっすぐ帰るつもりな  
ら、その途中で俺の家に行くはずがない。

「いいぜ、ちよつとまってな」

魅音の事で話したいんだろうな。きつと。

「4日目（日）：通学路：昼：前原圭」

「いやあく圭ちゃん。朝は大変だったんですからね」

速攻で着替え、詩音と二人で学校へ向かったが、

その道すがら、とりとめもなく詩音の話が始まった。

「お姉ったら、昨夜はどれだけ圭ちゃんに大切にされたかをずくずく  
と言っているんですよ！

こっちは、沙都子の朝ごはん作りの為に必死だったのに」

「そ、そうなのか。それは、まあ、大変だったな」

「大変なんてものじゃありません！」

少しはノロケ話を永延と聞かされる方にもなってみろって言うんです!」

アハハハ

俺としては笑うしかない。

「所で圭ちゃん」

「なんだよ」

「お姉、抱かなかったんですか?」

ぐっ…

ストレートに聞いてくるな。

「いや、なんでそんな話を俺に聞いてくるんだよ。魅音に聞けよ」

「はあくその反応。やっぱり昨日の夜はダメだったみたいですね。」

せつかくお姉のために、色々な衣装を入れた着替えのバッグを持たせたってのに」

何をバッグに入れたのか聞くのは良そう。

どうせろくでもないものにちがいない。

「ん、まあ、お姉には圭ちゃんとの間で既成事実をつくって、

しつかりゲットしろってアドバイスしてたんですよね。

でも、無理かーお姉だもんね。仕方ないかーハァー」

「それ、攻略対象の俺に言う台詞なのか?」

「じゃあ、逆に言えば誰に言えってんですか?沙都子に言っても『なんて下らない事でさわいでいらっしやるんですの』って目で見られるだけなんですよ?」

相手が沙都子ではなあ。

「それに…」

「それに?」

「お姉が好きになった圭ちゃんが、どんな人かって。ほら、確かめたいじゃないですか」

「今更かよー!何度もあっているだろう!」

「今更ですよ?アハハハ」

相変わらず詩音は手ごわいな。

捕まえようとする、こう、するりと手の平から逃げていく。  
そんな感じだ。

でも、逆に言えば俺よりも物事を距離を置いて見ているような気がする。

そうだ。そういう詩音だからこそ。

昨夜の話を、してみるか。

「なあ、詩音：俺の話も聞いてくれるか？」

「なんですか？圭ちゃんも、ノロケ話を聞かせたいんですか？だったらNOサンキュウですよ！」

「あ、いや、むしろ、その逆なんだけどさ……」

「ふくん。なんですか？」

俺は昨日の夜、魅音を疎外感を与えてしまった話をした。

魅音に対して、他の部屋に泊まるように行動したり、ベッドで一人に寝るように言ったり、

おおよそ、恋人らしからぬ行動について、聞いて欲しかった。

詩音は最後まで話を聞くと、少し困った顔で聞き返した。

「それで、圭ちゃんは私にどんな返事を求めているんですか？」

「あ、いや……その、悪いことを魅音にしてみました。って思ってます」

「で、お姉はそのことを怒っているんですか？」

「え？いや、それは無い。と思う……」

「なら、それでいいじゃないですか。もうそれで、この話は終わります」

え？：終わり？：それでいいの？

「……圭ちゃん。よく聞いて欲しいんですけど。お姉は昨夜のこと悪い思い出だなんて、全く思っていないですよ？私が電話で聞いた限りでは、圭ちゃんと素晴らしい一夜を過ごしたと思っています。きつと、お姉には初めて圭ちゃんの家に行った思い出は、何よりも大切な宝物になっているんですよ」

「そう……なの……」

「なのに、圭ちゃんがそんな『悪い事をしてしまった』なんて考えていたら、

それ、どういうことになると思います?」

「どうって…」

「お姉の中にある、圭ちゃんのと素晴らしい一夜の思い出が、圭ちゃん自身によって踏みにじられることになるんですよ!」

「え…」

俺が、魅音の思い出を踏みにじる?

そんなこと、考えもしなかった。

「自分の落ち度に気が付いて、それに対応したのは褒めてあげてもいいですけど、

逆にそれに囚われていては本末転倒です。謝ったのなら、それでお願いします!」

許されたのなら、それでOK!

だから、この話は二度としないでください。私の前でも、もちろん、お姉の前でも!」

「あ、ああ、そうだな。すまない詩音」

「ん、まあ、でも〴〵らしい〴〵ですけどね」

口調は怒った感じだったが、なぜか詩音自身は嬉しそうだった。

それが何故かは俺にはよくわからないんだが。

そうこうしているうちに、学校にたどりついた。

詩音のバイクは裏手の方にあるらしい。

手を振って別れようとしたが、詩音は最後にこう言い残した。

「圭ちゃん。圭ちゃんがお姉を大事にする気持ちはとても立派だと思いますし、素敵だと思います。だけど、あまり大事にされ過ぎると逆に、疎外感や孤独感を感じる事もあるんですよ?」

たまには肉食獣になって、お姉をガブリとたべちゃってください。たぶん…うん。絶対美味しいですよ♥」

何を言いたいのか半分は分からなかったが、

だが半分はわかった。魅音を孤独にさせないこと、疎外感を感じさせない事。

昨日やってしまった俺の過ちについて、詩音を伝えたかったに違いない。

「ガオー☆ガオー☆なのですよ!」

「うわっ…!!」

突然声をかけられて驚く。

「…って梨花ちゃん? 沙都子!?!」

振り返ると、そこには両手をあげて狼? 熊? の真似をしている梨花ちゃんと、その後ろに隠れている沙都子の姿があった。

「あれ? 沙都子? 詩音なら今、校舎に向かった所だから走れば追いつけるぞ」

「詩音さんに声をかけるだなんて、ゴメンですわ! 昨夜から今にかけて、

どれほどの悪夢を詩音さんにみせられたことか…!」

「沙都子は、詩いに拉致されて、三食カボチャ料理だったので☆にぱ」

三食? ああ、夜に、朝に、昼か…

しかし、詩音…お前、ここまでやると、逆に沙都子のカボチャ嫌いが加速するんじゃないか?

「じゃあ、詩音にお別れを告げに来たんじゃなければ、なんで学校にきたんだ?」

「それは沙都子が宿題を学校に忘れてきてしまったからなのですよ」  
「うう、これから土日分の宿題を帰ってやらなければならぬのですわ。」

カボチャ三昧でさらに宿題…この世は苦しみで満ち溢れておりますのよ…!」

そうか、そうか。大変だな。

だが沙都子、その苦勞がきつと、お前を立派なレディにしてくれるはずだぜ。

「圭一さんに言われなくても、私は立派なレディでございますわよ」  
「立派なレディはカボチャを嫌わないと思うぞ」

しかし、不思議なもんだな。

「何がでございますの?」

「あ、いや。魅音と付き合っただけがさ。最初はただの…って言い

方もおかしいけど。

こう、なんとというか男友達って感じで、あんまり、女扱いしてなかった気がするんだ」

それが今では、恋人同士だ。

世の中どう転ぶかわからない。

「世の中には色々な可能性があるのですよ。

圭一は今回は、魅いとお付き合いをする。という選択を選んだのです」

梨花ちゃんはそう意味深に語る。

可能性？選択？

たまに梨花ちゃんは不思議な事を言う。

これって、やっぱりオヤシロ様の巫女だからかな？

「それってSFでよくあるパラレルワールドというやつか？」

「みー…その言葉の意味はよくわからないのです。ただ、世界には色々な可能性があつて、例えば圭一が、レナと付き合う可能性、魅いと付き合う可能性、沙都子と付き合う可能性の中で、

魅いを選んだ。そういうことなのです」

世界には様々な可能性ある。その可能性の世界は、いくつものあつて俺はその中の一つにいる。

面白い解釈だが、沙都子は今一納得はしていないようだ。

「すると、私が圭一さんとお付き合いする世界があるというのですか？

にわかには信じられませんわね」

「きつと、その世界では沙都子は、

圭一に“圭一にーにー♥圭一にーにー♥”と甘えているのですよ」

「な、な、な、な、梨花あ！変な世界を生み出さないで下さいませ！」

俺は笑つて、

沙都子の頭を撫でてやる。

なるほど、すると幾つもの可能性の中には、

監督のメイドをしている沙都子とかもいるわけか。

「いえ、それだけはありませんわ」



即答か。

イリー、あんたの夢は中々ハードルが高そうだぜ。

キュルルル…

車の音が聞こえる。振り返ると黒い車が止まり、中から髭を生やしたおっさんが出てきた。

あれは、たしか葛西とかいう詩音のボディガードの人だったようなな。

「えつと…葛西さん？ですか。詩音でしたら、校舎の方に…」

「いえ、今日は詩音さんでは無く、前原圭一さん。貴方に御用があつてきました」

俺に？葛西さんが？

「…園崎本家の方々がお待ちしております。どうぞ、車にお乗りください」

園崎の本家。魅音の家族が俺に何のようだっていうんだ。

考えられるのは魅音のことだけど…

でも、確か園崎のバアさんからは交際の許可を貰ったと言っていた気がする。

あまり良い予感がしないな。

何か理由をつけて逃げるべきだろうか？

だが、そんな俺の前に沙都子と梨花ちゃんが立ちふさがると、二人とも満面の笑みを浮かべた。

「圭一さん。何をそんなに怖がっていらっしやるんですか？せっかくのお向かえなんですから、

お乗りあそばされたらいかがです？」

「みー☆圭一、行くと良いのです。後でボクたちもいきますのですよ☆」

二人に、そう言われれば、行かざるをえないな。

よし、男・前原圭一。覚悟を決めて園崎本家へ行くとするか。

## 第9話——4日目（日）B「キズモノ」

「4日目（日）：園崎本家：夕方：前原圭一」

魅音の自宅はかなり大きい。

それもそのはずで、園崎家はこの雛見沢を支配する御三家の一つだ。

だから、邸宅はかなり大きいし、敷地も相当広い。

一度話を聞いた話では周囲の森や山まで園崎家が所有しているという。

普段、この家には魅音と、お魎のバアさんが二人つきりらしい。

だから自宅前は基本的に閑散としている。

だけど、葛西さんに乗せられた車の中から見る限り、屋敷前にはかなりの数の人達が集まっているようだった。そういえば、今日は親族が集まっているという話を魅音はしていたな。

邸内に入った俺は、葛西さんに誘導されるまま大広間へと入った。

上座には、園崎家当主のお魎のバアさん。

左右に、魅音の母親の茜さんと、魅音の父親がいた。

あと後方に何人かスーツ姿の人達がいる。

視線をずらすと：

魅音がお魎のバアさんの少し前のおかれた座布団の上に、正座をして縮こまっていた。

その隣の座布団が開いているという事は、ここに座ればいいってことか。

「魅音…」

俺は魅音に声をかけると「圭ちゃんごめんね…」と、呟いて下を向いた。

一体、どうしたってんだこれは？

何が何だかわからない。

だけど、一つわかることがある。

お魎のバアさんには、沙都子を助ける時に強力な後押しをしてくれた恩がある。

今度会う時はポン刀で追いかけてまわされるとか何とか言われた気がするが…それは、忘れよう。

せっかくお礼を言う機会が訪れたんだ。  
言わないわけにはいかないだろう。

「あの…沙都子の時はありがとうございました」

「…そんだったらこつと、どうでもええ」

バアさんから想像以上に淡白な返事が返ってきた。

まだ「てめえをぶつ殺して魅音を当主にする！」って言った事を怒っているのか？

…いや、さすがに怒っていても不思議じゃないよな。

「今日、何で呼ばれたか。アンタ、わかっているのかい？」

声をかけてきたのは魅音の母親の茜さんだ。

美人だが、黒い和服を着て相当な迫力がある。

誤魔化しても無意味だ。

正直に答えよう。

「いえ、わかりません」

「ハアくなつちやいないね」

茜さんは周囲に聞こえるように

大きな、ため息をしてきた。

くそ、一体何だつてんだ！

こういう大人なやりとりつてのは、俺はあんまり好きじゃねえぞ。

「魅音のことさね」

俺の心臓が高鳴る。

「あんた、昨日の夜。魅音をキズものにしたろ？」

「どういう了見だい」

「キズもの？俺が、魅音を傷つけた？」

「園崎魅音つてのは、そんじよそこらの小娘じゃないんだ。」

園崎家当主代行であり、次期、園崎家の当主であるんだ。

「アンタ、そこをわかってキズものにしたつてのかい？」

「そうか、そういうことか。そうだよな。」

詩音はああいつていたけど。やはり俺は魅音の心を大きく傷つけ

ていたんだ。

それを茜さんに話して：

だから、この席を設けた。

そういうことか！

クソツ！クソツ！そうだよ。俺は魅音を傷つけちゃった！

それは間違いの無い事だ！

「すいません。俺は確かに昨夜、魅音を傷つけました」

「ほう、アンタ、魅音をキズもんにしたこと…認めるってのかい？」

ああ、すまない。魅音。俺は本当にダメな奴だ！

認めよう。魅音を傷つけたことを！そして言うんだ！

俺がどんなに、魅音を好きだっただけかを！

俺はそのまま体を倒して土下座する。

「昨夜だけじゃありません。俺は魅音が何を考えているかも考えずに行動して、

何度も魅音を傷つけ、苦しめ、悲しませました。クソ馬鹿野郎です。それは否定しません。

謝ります。俺は確かに、魅音に辛い思いをさせました」

「…ほう。殊勝な心がけだね。で、どうするつもりだい？」

「もう二度と、こんな過ちを繰り返しません。

俺は、魅音を、魅音の心と体を守るために、全力を尽くします」

「圭ちゃん…」声の方を振り向くと、魅音が泣きそうな顔で俺を見ていた。

心臓が握られたような感覚がする。苦しい。だけど魅音はもつと苦しかったはずだ。

「言葉だけなら、なんとも言えるさ。アンタにその覚悟はあるのかい？」

茜さんは手に持っていた鞘から日本刀を抜き

俺の首筋にあてた。

だけど、恐怖はみじんも感じない。

なぜなら、俺は仲間を、魅音の信頼を踏みにじり、裏切り苦しめた記憶があるからだ。

それはいつの記憶かはわからない。でも、はっきりと覚えている。魅音に、苦しい想いをさせてきた。

それに比べれば、俺の首が斬られることなんて屁でもねえ。

でも、今はクビを跳ね飛ばされる時じゃない！

俺は、魅音を幸せにする責任がある！

しなきゃダメなんだ！

俺は倒した体を戻し、

茜さんを見据えた。

「あります！俺にとって魅音は…」

仲間？恋人？友達？…違う！いや違うわ！全部だ！

俺の愛する全部なんだ！だから言うんだ！はつきりと！

「俺の全てです！」

「…」

「魅音は、おれにとって友達で、仲間で、恋人で…」

かけがいの無い存在です！許されるなら…いや、許されなくてもいい！

俺は何があろうとも絶対に魅音を支えていく！ここで別れろと言われても、

それだけは曲げられない！表からで無くてもいい！影からでも！

魅音の仲間として、家族として！そして、この世界が全て敵に回ろうとも、

俺は魅音を裏切らない！今も、そして、これからもずっと！」

「それは魅音と生涯添い遂げるって意味かい？」

血まみれの魅音の姿がフラッシュバックした。

これはなんだ？いつの頃の思い出だ？

だが、わかる。わかっている。

俺はかつて、魅音を殺したんだ。

バットで殴打して殺した。

何度も、何度も殴って、

俺の為に尽くしてくれた彼女を殺したんだ。

そして俺は、自分の罪深さに泣いて、泣いて、泣いた。

今の魅音は、あの時の魅音じゃない。  
でも、同じ魅音なんだ。

だから、俺が全身全霊を尽くさなきゃダメなんだ。  
ああ、そうだ。

俺はこれから一生魅音につくそう。

それだけのことを俺はしたんだ。

それだけのことを俺はしなければならぬんだ。

「はい。おれは一生、魅音と共にいます！」

俺の中に覚悟が芽生えた。

もう、良いも悪いも無い。

俺は魅音と一生共にいる。

もし、ダメだと言われたら？

速攻で、魅音を抱えて俺はここから逃げる！

できるか、できないかじゃない。やるんだ！

でも、それを魅音が望まなかったら？

その時は、茜さんの刀で首を刎ねられれば良い。

簡単なことだ。魅音が望む全てを行う事。

それが、俺にとつて一番重要な事なんだから。

…ふえ、ふえへへへへ

ん？なんだ？お魍のバアさんが笑った？

「アハハハハハ！」

「フフフフ」

あれ？茜さんも？

魅音の親父さんも？

ハハハハハハハハハハハハ

アハハハハハハハハハハハハ！！！！！！

ていうか、大広間の周囲から笑い声が聞こえるぞ？

どういふことだよ！

四方八方にある大広間のふすまがひらく。そこには

背広姿の大人が隙間なくずらりと正座している。

これはどういふ…？

茜さんが、高々と刀を振り上げた。

「園崎家当主・園崎お魎の名において、

ここに園崎魅音と、前原圭一の婚約を認めるものである！

異議のあるものは、十を数える間に名乗りでな！

この園崎茜が相手になつてやる！

そうでなければ、拍手を持って二人の門出を祝福するんだよ！」

／＼パチパチパチパチパチパチ／

／＼パチパチパチパチパチパチ／

／＼パチパチパチパチパチパチ／

「おめでどう！前原君！」

「おめでどう！前原圭一君！」

自分の倍も歳をいつている人達が次から次へと近づいてきて、俺に握手と祝福をしてくる。一体どうなっているんだこりゃ？

魅音：

目を向けると、右手を挙げて片目をつぶり、しきりに態度で「ゴメン」と語りかけている。

「つまり、圭一は、魅いと結婚するのですよ☆にばー！」

梨花ちゃん？

大人達の群れが二つに分かれ、梨花ちゃんが現われた。

その手に二つの指輪の入った箱を持っていた。

俺と魅音は、それぞれ指輪を受け取ると梨花ちゃんの

指示にしたがつて左の薬指に指輪をはめる。

「これで二人は正式に婚約者同士なのです☆

圭一、魅い、おめでどうなのですよ！」

その言葉に周囲は盛大に沸き起こる。

：なにがなんだかわからない。

梨花ちゃんに手を引かれ、

俺と魅音は、お魎バアさんのいる上座に誘導された。

いつのまにか、茜さんの前に3つの座布団が敷かれている。

俺と魅音は梨花ちゃんに足されるまま座り、なぜかお猪口を持たさ

れた。

左から、梨花ちゃん、俺、魅音、茜さん、お魴バアと、魅音の親父さん

という順番だ。

大広間にきていたおっさんとおばちゃん連中は

梨花ちゃんにお祈りし、俺のお猪口に何か液体を注ぎ、魅音に言葉をかけ、

茜さん、バアさん、親父さんに頭を下げると言う流れになっていた。

この段階になっても、今一状況を把握しきれなかったが、

俺の親父とお袋が来てからようやく完全に理解できた。

…ハメられた！

よくわからんが、俺はハメられた！

「圭一、やったな！父さんは嬉しいぞー！」

親父とお袋、今日は大切な用があるから出かけたと書いていたが、このことだったのか！

どうりで俺の指にジャストフットする

完璧なサイズの指輪が用意されていたはずだぜ！

おふくろはさめぎめと泣いていて、対処に困ったが、

親父には遠慮なくグーで顔面パンチをくらわした。

「ははは、うちの息子は恥ずかしがり屋で…！」

うるせえ！次は本気で殴るぞ！

そんな心温まる俺の親子の触れ合い（？）

を見ていた梨花ちゃんはニコニコしながら周囲を指さす。

「圭一のお父さんとお母さんだけでは不十分ですよ。喜一郎もいますし、皆もきているのです」

喜一郎？って、公由喜一郎？雛見沢の村長さん!?

よくみれば、立派なスーツを着た大人が、マイクの前で「私は興宮の市長ですが…」とか言っているじゃないか！

もうわけがわからない。

お猪口に入れられた濁った飲み物を口の中に入れると  
なんだが、苦い味が広がる。



「梨花ちゃん。もしかして、これ…未成年が飲んじやいけない泡麦茶じゃないのか？」

「気にしなくてもいいのですよ圭一。ボクなんてオリジナル版だとワインを飲んでいたのに、

コンシユマー版だとブドウジュースに置き換わっていたのです。でもここは、良い子が見る

場所では無いので、何も問題は無いです☆にぱー」

梨花ちゃんが、

なにを言っているのかさっぱりわからない。

「圭一には、甘くて透き通った水の方がよかったですか？」

そして、梨花ちゃんは背後から大きな瓶を取り出す。

ラベルには「大吟醸」の文字が…

「いや、これ、絶対にダメな奴だろ！」

「甘いので、これなら羽入でも大丈夫なのですよ☆にぱー」

羽入って誰だよ？

全く、梨花ちゃんはたまにわけのわからないことを平気でいつてる。

俺が視線を前に戻すと

黒くて大きい影が眼前に広がった。

「へへへ、こりやえらい若いボンが、婿養子にきたもんですな」

誰だ？一人のいかつい顔をしたおっさんが、

汚い笑顔で、俺のお猪口に濁った液体を注ぐ。

その目は、笑顔に反して笑っていない。

俺を値踏みするかのような目で睨んでいる。

妙な不快感を感じる。

いや、このオッサンを一目見て思った。

…こいつ、嫌いだ。

これが、生理的嫌悪って奴なのか？

そそくさと離れて行ったので、俺は隣に座る魅音に耳打ちする。

「なあ、魅音、今の奴なんだけどさ…」

「今、圭ちゃんに注いだ人？ミフネっていうお父さんの組の偉い人。

たしか対外交渉を任せられているっていったかな？ほら、外国のマフィアとか

そういうの担当。バアちゃんに忠実でさ、可愛がられているらしいよ」

お魘のバアさんと仲良しか。

よく見るとバアさんとおっさんが、向かい合って笑っているな。

見た感じ、完全に悪だくみをしている代官と越後屋だな。

「というか、さりとマフィアとか言うな。

周囲に聞かれても大丈夫なのか？」

「大丈夫だって、ほら、あの市長にお酌している人、

あの人なんてさ……」

あー、もういいや。とりあえず今日は。

現状でも頭パンパンなのに、裏社会の情報は、お腹いっぱいだぜ。

人の流入はおさまらないどころか、ますます増え、

大広間の中の喧騒も、ますます過熱していく。

お膳も次々と並び、いつのまにかやってきた芸者さんが中央で踊

り、さながら年越しの大宴会状態となっている。

俺の目の前にも、それはそれは立派な膳が並べられたりもしたが、

正直、今何を食べても味がしない。大人達が祝いと言って次々とお猪

口に入れてくる苦い水にもうんざりだ。

芸者や、酔っ払ったオツサンの踊りをみても楽しいとも何とも追わ

ない。

とはいえ、俺はこの宴の主賓らしかったので離れるわけにもいかな

い。

ちよつとした拷問だな、これ。

そのうち、羽目を外した、おっさんたちが俺の周囲にあつまり、

「そうだ、圭一君、雛見沢の綿流し実行委員をやらないか？」

とか言い始めた。

はあ？何をいつてんだ、この人たち！

綿流しって、確か祭りだろ？俺に祭りの実行委員になれって!?

俺が実行委員なんて大層なもの、やれるわけないだろ!?

「そうだね。圭ちゃんは口が上手いから、

今年やるオークションの司会とか、うってつけかもしれないね！」

よせ、やめろ魅音。お前、酔っているのか？

泡の出ている麦茶、飲みすぎじゃないか!?

「おめえらよ。うちの婿養子にたたき売りさせようっていうのか？」

おっさんたちがビビっている！

よくいつてくれたぜ、お魍のバアさん！

「お魍、叩き売った後に、魅いと圭一のお披露目をするのが良いと思うのですよ」

何を言っているんだ梨花ちゃん!?

「どうだね、お魍さん。圭一くんに親しみやすさを覚えて貰って、梨花ちやまの演舞前後に、

魅音ちゃんとの婚約を大々的に発表するってのは良い考えかもしれないね」

き、公由の村長さんまで何をいつているんですか!?

「ふん、まあ、好きにすりやええ。

ただ…名、落す真似だけはすんなよ」

うぎやあああ!?

なんだこの展開は、もうついていけないぞ俺は!!!

さすがに、一度に色んなことが起きて、頭がオーバーヒートする。

俺は風にあたりたいと切り上げて、外廊下へと逃げだした。

第10話「4日目(日)C」ひぐらしのなく頃に」

「4日目(日)：園崎本家：夜：前原圭一」

外は日も落ち、綺麗な月と満点の星空が広がっていた。

都会にいた時はこんな風景を見ることは無かった。

スモッグが凄すぎて、星空なんて一切見れなかったもんな。

ひぐらしが鳴いている。

朝と夕方ごろにしか鳴かないとおもっていたけれど、今の時間でも鳴くのか。

もつとも、もつと遅い時間になったら聞こえなくなるのだろうけれど。

俺は腰をかけてのんびりと月夜をみていたら、

足音が聞こえてきた。魅音だ。

「圭ちゃん、ここにいたんだ」

「おう、魅音。月が綺麗な夜だよな」

「あははは…こんな月夜なら、死んでも…いいかな？」

おいおい、婚約した途端に死ぬつもりか？

月が出ているとは言え、随分とルナティックな事を言うんだな魅音は。

「おいおい、ロマンチックだけど。そう簡単に死んでもらったら困るぜ？」

「あはははは、そうだよな」

「俺はいつまでもこうして魅音と月をみていたいぜ。月は、ずっと綺麗なままだろうしさ」

「うん…そうだね。あなたと見る月なら、ずっと…」

「だろ？」

「あ、あのさ…圭ちゃん、わかってて…言っているんだよね？」

「ん？何がだ？とりあえず、立ってないで早く座れよ」

「あ、あははは！まあ、いいか！」

随分笑うが、やっぱり、

泡の出る麦茶を飲み過ぎたなコイツ。

魅音は俺のすぐ横にすわると、俺の体に寄り掛かった。

「今日はゴメンね。圭ちゃん」

魅音が言うには、こういうことらしい。

興宮の実家から本家に来た母親の茜さんに、

昨夜、どれだけ素晴らしい体験を俺としたかを語った所、

それを聞いていたお魎のバアさんにより

「そんだったらいい男だったら、先に結納を済ませっか」

という話になったらしい。

普段なら、そんな話が出てもさすがに一旦は冷静に考えるものだが、

まず魅音の母親の茜さんが乗り気だった上に、不幸にも（幸運にも？）ちょうど、

親族が集まっていたのが決定打になり、実行にうつされたそうだ。

「ほら、バッチャも歳だからさ。早く私の結婚相手の顔が見たいって、

言ってきかなくったんだよ」

「そうか。なら、仕方ないよな」

ん？それじゃあ、「魅音をキズモノにした」ってどういう意味だったんだ？

「あ、アハハハ。それは、おじさんもよくわからないや」

「そうか、俺はてつきり…」

…圭ちゃん。お姉の中では昨夜の思い出は、宝物になっているんです。

だから、圭ちゃんが傷つけたりしたと思ったり、謝ったりしたら、その思い出を足蹴にしたことになるんですからね。二度と、そんなことを言わないで下さい。

「ん？なに？」

「いや、知らないうちに魅音を傷つけちゃったのかな。って思ってたさ…」

「…圭ちゃんは、私を傷つけたことないよ。でも、あんなに真剣に母さんの前で言ってくれて、

その…さ。すごく嬉しかったよ」

「魅音…」

俺は魅音と見つめ合う。

月の光に照らされた魅音は、神秘的で神々しく美しかった。

「圭ちゃん、嫌じゃなかった?」

「何がだよ」

「えと、いきなり、その…婚約って話が出て…」

ああ、なんだ。そんなことか。

まあ、付き合っていればいつかはそうになっていたと思うぞ。

それが少し早まっただけだ。

それに魅音の母親の茜さんに言われて、俺もすっかり覚悟完了したし。

おそらく、あの場で言われなくても、いつかはプロポーズしていたはずだぜ。

だから、それは気にはしていないけどな。

「ただ、まあ…」

「なに、圭ちゃん?」

「プロポーズだけは、してみたかった…なんて、思っただけさ」  
「……………」

「今日、みたいな月夜の綺麗な晩とかに」

見晴らしの良い所で、二人っきりで向かい合い、

緊張して震えた体で指輪を取り出してプロポーズを行う。

そういうシチュエーションは、

もう出来ないかと思うと少し残念だぜ。

「今じゃ…ダメ、かな?」

「え?」

うるんだ瞳で魅音は見つめてくる。

年齢は足りない、収入も無い。指輪だってもっていない。  
だけど、想いだけは伝えられる。

本来ならプロポーズはずっと先のはずだった。

しかし、周りの人たちによって、良くも悪くも俺達は婚約すること

になった。

だから、もうプロポーズをすることは無い。

だけど、もしも、するのであれば、おそらくそれができるのは今夜だけだ。

俺は魅音の両肩に手を置いた。

心臓の鼓動が高まっていく。

おいおい、既に婚約をすませているつてのに、何を緊張しているんだ前原圭一？

おちつけよ。俺の心臓。これはある意味、ただの確認作業のようなものだろうか？

だけど、心ではわかっている。

これは、違うんだ。周りが勝手に決めた婚約じゃない。

本当の意味での、

魅音に俺の心を伝えるプロポーズなんだ。

「…魅音」

「…は、はい」

「俺と、結婚してくれないか？」

「……………」

「……………」

「…うん」

魅音が恥ずかしそうに頷いたのを確認すると、

胸の中に何か広がっていくのを感じた。

言葉には言い表せないこの感情は、

なんとというか、幸福感のようなものなんだろう。

魅音の体を引き寄せる。抵抗はしない。

目をつぶり、俺に全てを任せている。

俺はそつと顔を近づけ唇を重ねり合わせた…

ひぐらしの音が聞こえてくる。

まるで、俺達の婚約を祝福するように。

そう、俺達は今、結婚したんだ。

ひぐらしの鳴く頃に。

／＼パシャ！パシャ！パシャ！！！！／

な、なんだ!?!突然の発光がッ!?

「お、ほほほほっ！トランプは、最後の最後、ほんの少し行うだけで良いのでございますのよ！」

沙都子！そして、その後ろにいるのは…

フリーカメラマンの富竹さんじゃないか！

「やあ、ごめんね圭一君。」

今日は境内にいた梨花ちゃんに、圭一くんの婚約披露宴があるからって誘われてね」

「そ、そうだったんですか」

ん？婚約披露宴があるから誘われた？って…

梨花ちゃんも、沙都子も最初から知っていたのか！

葛西さんの車が来た時点で！

「それで、沙都子ちゃんと梨花ちゃんが、

どうしても月夜に佇む二人の写真を撮って欲しいって言うもんだから。つい、ね。」

許可も取らずに、写真を撮ってごめんね圭一くん」

な、すると、今のフラッシュは、カメラのシャッター音と富竹フラッシュ!?

まさか、プロポーズした瞬間のキスを俺はとられてしまったのかあああああ!?

「はう☆☆み、み、み、魅いちちゃん！か、か、か、可愛かったよお！可愛かったよ!!」

「最高の瞬間が撮れたのです。これでコンテスト入賞は間違いないのですよ、富竹☆にぱっ」

いや、沙都子と富竹さんだけじゃない。

鼻血をダラダラ流すレナと梨花ちゃんもいるじゃないか。

「ボクは最初から、全員いると圭一に伝えておいたはずですよっ。」  
そういえば梨花ちゃん、そう言っていたな。



ニヤニヤ笑いながら詩音も現れる。

「ま、一夜を共にしても手が出せない

ウブな二人には、これぐらいが丁度良い関係ですよね？」

詩音の奴も、今夜の事を知っていて学校に連れてきたんだな。

すると何か、俺は全員に騙されていたってことか？

ちくしよう、油断したぜ。

完全に隙をつかれた。

これが祝い事じゃなかったら、完全に人間不信真っ逆さまルートだぞ！

魅音なんて真っ赤になった顔を抑えて悶絶しているじゃないか。

わかるぜ、魅音。俺もこの場で顔を覆って、ゴロゴロしたいぜ。

ん？もう一人、奥から出てきた。

あれは富竹さんの恋人？の、看護師の鷹野三四さん？

「あら、あら、圭くんやるわね。その年でプロポーズだなんて、

ジロウさんにも見習ってほしいわ」

「あ、いや、困ったな…アハハハハ…」

鷹野さんが、

なんでここに？

「それはもちろん、鬼ヶ渚村を支配する御三家のトップ。

鬼の血を引く正統なる後継者である園崎本家の邸宅に入る機会があるだなんて

そうそうは無いもの。こんな機会を逃すわけはないわ…クスクス

クス…」

ああ、そうだ。オカルトマニアの鷹野さんは、こういう人だった。

というか、その言い方だと今の園崎邸は、誰でも入れる状態なのか

？

沙都子が玄関を指さす。

「圭一さん、入口の方を見てごらんあそばせ。

雛見沢中の皆さんが、圭一さんと魅音さんを祝うために駆けつけていらっしやいますわ」

ゲツ…なんだこれは…？

入り口の前が、ちょうちん行列になっているじゃないか!?

というか、出店まで出て無いか?これは、ちよつとした祭りだぞ!?

「園崎家の次期当主、跡取り娘の魅音ちゃんの結納だからね。」

これぐらい盛大にやっても不思議じゃないかな?」

そういうと、富竹さんは、ちょうちん行列や、出店の写真も撮り始めた。

こういう風景を見ると、改めて自分は凄い家にはいることになったのだと身震いするぜ。

「ところで、圭一君。」

覚悟は良いのかしら?」

そんな俺を見て、

鷹野さんは笑みを浮かべた。

「覚悟、ですか?」

「そうよ、鬼の住処に入る、覚悟…」

雛見沢村には陰惨な過去の歴史がある。

それはこの村が、かつてに鬼と交わり。半鬼半人の仙人として住み着き、

恐ろしくも、おぞましい数々の所行をしてきたという歴史だ。

その因習が今でも残っている。

園崎家は、この雛見沢の支配者であり、

そして、それらの歴史の暗部を引き継ぐものとして君臨しているのだ。

いや、歴史だけでは無い。

現在も、雛見沢、そして興宮周辺のに顕然たる勢力を持ち、

暴力団などの裏社会への影響力を持つているのだ。

「圭一君、貴方が園崎魅音さんと結婚するということは、

闇の歴史と、裏の社会を引き継ぐと言う事なの

それは、貴方の心に、魂に、とても重くて、辛く、絡みつくものよ?」

まったく、鷹野さんらしい御祝だぜ。

冗談でも本気でも、目出度い席上でいうものじゃないだろう。コ

レ。

実際、この話を聞いて、富竹さんは困った顔をしているし、レナも沙都子も梨花ちゃんも詩音も露骨に嫌な顔…というより非難するような顔で鷹野さんに向けている。

でも、まあ、俺にとつては、この問いはいつか通る通過点だつてことぐらいわかっていた。

そういう意味じゃ、鷹野さんに感謝しないとな!

不安そうに俺を見つめる魅音の肩に手を回して、引き寄せる。

「そんな辛い環境なら、余計、魅音一人に抱えさせるわけにはいかないよな!」

「圭ちゃん…」

「一人より、二人の方が重荷は軽いってものだろ?」

裏の歴史だあ?上等だ。裏だろうが闇だろうが、そんなものは全部飲み込んでやる!

心配するな魅音。お前が鬼つてんなら、俺だつて鬼になつてやる! いや、鬼を従える閻魔大王になつてやるぜ! 敵がいるなら上等だ、かかつてこい!

魅音の敵は俺の敵だ!それが家族を守るってことなら、いつだつてやつてやるさ!」

「圭ちゃん!」

ぎゆうううううう!!!

おわっ…魅音、嬉しいのはわかるが全力で抱きしめないでくれ。く、苦しい…

お、おいお、レナも沙都子も、梨花ちゃんも詩音も…笑顔で拍手していないで助けてくれ…

「あらあら、ごちそうさま。ふふ…いらぬお節介だったわね。

では、そろそろいきましようか、ジロウさん?」

「あ、ああ…じゃあ、皆。また!」

と、富竹さんツ、鷹野さん…!

た、助けてから行つてくれ!!!く、く、くるしい!!!

「圭ちゃんツ!!好きツ!好き!もう、私、恥ずかしくないよ圭ちゃん

！

圭ちゃんの事好きだった！ずっと前から大好きだった！これからはずっと一緒だよ圭ちゃん！もう、圭ちゃんが嫌だっけっていても離さないんだからね！！だって、もう夫婦なんだもん！圭ちゃんを独占したって誰も文句は言わないよね！」

おお、初めて、魅音に好きって言われたぜ…！

だけど、ちよつと…苦しい…！

わかった。わかったから離してくれ魅音…

い、意識が…あ…

俺は薄れゆく意識の中、

仲間達の喜びの歓声が悲鳴に代わっていくのに気が付いた…

## インターログ 「鷹野三四」

「4日目（日）：入江診療所（入江機関）：深夜：鷹野三四」

あらあら、こんな時間になってしまったわ。  
随分見て回ってしまったから仕方ないわね。

それにしても、圭一君はやるわね。あの歳でプロポーズするだなんて。

あの積極性は、ジロウさんにも見習ってほしいものね。

もう何年も一緒にいるんだから、勇気をもって一步踏み出して欲しいわ。

そうすれば、私だって、ナース服を着て被写体になってあげるのに。  
そりゃ、若い子には負けると思うけど、

これでも結構いける方だと思うわよ？

まあ、それはいいわ。

今は、これね…

鷹野三四は、アタツシケースをテーブルの上に置くと、暗証番号を入力しロックを外した。

この中には、鷹野三四の私的財産：億の金が積み込まれている。

この金は、元々鷹野三四が後援者から譲り受けた支援金であった。

しかし、意外にも上手く物事が運んだために、今まで使うことも無く保管されていたのである。

「…このお金を、使わせて頂きます」

かつて自分を信頼し、この多額の資金を渡してくれた老人の顔を思い出し。

彼女は黙祷を捧げた。

入江診療所・入江機関は、高野一二三博士が研究していた雛見沢症候群を

その孫である、鷹野三四が研究するために作られた施設であった。

そのため名目上のトップは入江京介であったが、実質的には鷹野三四が取り仕切っていたのである。

「東京」と呼ばれる超党派でつくられた組織の支援の元に「雛見沢症候

群の治療」として

研究がおこなわれていた。だが、真の目的は、核兵器を持たない日本が、その代わりとして

もてる生物兵器としての運用であった。

当初は順調であったが、転機が訪れた。

彼女の支援者であり、東京という組織の有力者であった老人が亡くなったのである。

組織には派閥があり、トップが死ねば権力の再編成がおきる。

そして壮絶な内紛の末に「東京」の権力機構がかわり、方針も180度変わる事となった。

すなわち、生物兵器の開発を中止することが決定されたのである。

それは、生涯をかけて研究して誰も認められなかった祖父の研究を解明しようとしていた

鷹野三四の努力の終焉をも意味していた。

鷹野三四は怒りはすさまじかった。

祖父の夢をこんなところで終わらせるわけにはいかない。

祖父の無念を晴らすために、その研究を引き継ぐため、努力を重ねて勉強し、

人脈を得て、派閥をの力を後ろ盾にようやくここまで来たのだ。

上層部の方針がかわりましたので、これで終わりです。

では納得しかない。彼女は上申し、直接上層部に訴えることにした。

なんとか、この説得で研究の続行を認めさせようとしたのだ。

しかし、ここで思わぬことが起きた。

出発前に、何気なく見た祖父との思い出のアルバムの中に、

自分あての手紙があることに気が付いたのである。

それは、鷹野三四への幸せを願う祖父の温かい心が書かれていた。

祖父・高野一二三が死ぬ直前の彼女に送った手紙には「研究が認められれば、それは人々に伝えられ神となる」だから、己が研究し認められなかった「雛見沢症候群」の解明を引き継いでほしいとの願いが書かれていた。

しかし、アルバムに挟まれていた手紙には、研究を引き継いでほしいとの思いとは別にもう一つ、

「自分の研究が三四の幸せの足かせにならないように」との願いが書かれていたのである。

この手紙を読んだ瞬間、鷹野三四は死んだ祖父、

そして次に富竹ジロウの顔が浮かんだ。

そして、彼女は嗚咽した。祖父の自分の対する優しい心に泣いて、泣いて、泣き続けた。

涙が止まった時、彼女の中にあつた祖父の研究に対する狂想的な情熱は失われて、客観的に物事を見えるようになっていた。

「雛見沢症候群」の研究は中止になったが、実をいうと、ある程度の全容は解析されており、

また、治療方法もほぼ確立されつつあつた。

兵器としてではなく、治療法に重点を置いていた入江京介所長の努力により、

三年後の終了までに、一般的な病院でも治療が出来るレベルにまで到達できそうなのである。

つまり、「雛見沢症候群」という病状の治療という表向きの看板だけみれば、

確かにこの研究はもう既に終わりを迎えたと言っても過言では無い。

それでも鷹野三四が研究続行に拘つたのは、この病気の特質性でもある「人間の行動に影響を与える」という部分が解明されていないからである。

雛見沢症候群は、女王感染者を中心に活動を行っていることが予想された。

これは、感染者は蜂やアリののように、一人の女王に統率されているという説である。

雛見沢には「オヤシロ様の生まれ変わり」と言われる古手梨花という存在がある。

雛見沢の住民に信奉されている彼女こそ女王感染者であり、だから

こそ、雛見沢の住民から崇められている…

だが、この論はある程度は構築されたものの、まだ実証できているわけではない。

人間の行動学見地から言っても、これらを解明できれば人類文化史と医学史に大きな足跡を残すことは間違いない。

「だけど、これらを信じる人がいるかしら、ね」

祖父の手紙を読んだことで、完全に冷静になった鷹野三四は、寄生虫が人間の行動を支配するという説が、あまりも一般的には受け入れがたく、逆に荒唐無稽にしか思われないことを理解していた。

いや、最初からわかっていたのかもしれないが、

今までは、ひたすら雛見沢症候群解明への情熱が先走り

無意識に蓋をしていたのかもしれない。

なので、上層部に直訴にいったときはその部分を伏せて行うことにした。

しかし、特に目新しい要素が無い事は、説得する意味もないということである。

当然のように研究続行は不可と判断された。

だが、鷹野三四はとくだん取り乱したり、不満をぶちまけることもなかった。

今まで研究に尽力してもらったことと、三年間の猶予を頂い事に感謝の意を伝えり、

深々と頭を下げるに留まった。

「君が、この研究で力を発揮したことは我々も十二分に理解している。また、何かあれば我々も力を貸そうではないか。君には期待しているよ」

リップサービスからもしれないが、

上層部から、このような言葉を貰ったのは得難い物であった。

たしかに今回、これで雛見沢症候群の研究はいったん中止になる。しかし、これで自分の人生が終わったわけでも無い。

またいつか機会が訪れるかもしれないし、いつかは自分が力を持ち、



新たに研究を行うこともできる可能性だつてあるかもしれないのだ。

とはいえ、長年追い求めていた祖父の研究が中止になったことによる

鷹野三四の精神的ストレスは相当なものだった。

そのため直談判に失敗した帰りの夜道に、

屋台で何杯も酒をあおるのも仕方が無い事とも言えた。

——三四の幸せを望む——

祖父の手紙を思い出しては、彼女は富竹ジロウの顔が浮かんでくる。

「私、そんなにジロウさんの事好きだったのかしら？」

そう自問するも、今まで出会った人間の中では確かに一番好意をもったのは確かだ。

次に好意をもったのは、竜宮レナだろう。

何故かは知らないが、一時期猛烈にアピールされたことがあった。

そのため、自分の妹分にしてあげようかと思つたほどであったが、結局、最終的に竜宮レナに拒絶されてしまったため、なし得なかつた。

この件を思い出すと結構はらたらしい。

せつかく、毎朝タイを直してあげようとおもっていたのに！

しかし、意外だったのは自分にレズビアン要素があつた事だ。

「いっそ、その道を進むのもありかもしれないわね」

鷹野三四が、そのような不埒な事を考えていると、一台の高級車が彼女の近くに止まった。

中から美女が車内へと誘っている。

ほとんど無警戒にその車に乗つたのは、酔っていた事と、

レズビアンに対する素養を自問自答したことに無縁では無いだろう。

だが、その美女：野村と名乗つた女性が提示した内容は彼女の酔いを醒ますには十分なものであつた。

「あなたの祖父を神へと昇華させる。それが貴方の願いではありません

んか？」

その美女は巧みに数日前まで鷹野三四が望んでいたであろう願望を口にした。

そして、彼女と祖父の研究を蔑ろにした連中に目に物を見せるための計画を口にした。

それは、雛見沢症候群の女王感染者を殺す事で

一斉に雛見沢の住民を発病させ、大規模災害を引き起こすと言うものであった。

さすれば、鷹野三四と祖父が書いた論文を、政府機関の者達は必死に読んで対応することになる。

すなわち、もう誰も「雛見沢症候群」について、無視する事はできなくなるのだ。

一見すると魅力的な提案に見えた。

もし、鷹野三四が祖父の手紙をよんでいなかったのであれば飛びついただろう。

だが、実際は違った。

この計画を聞いた瞬間、鷹野三四の全身が焼け焦げるほどの激しい憎悪が沸き起こったのだ。

自分と祖父の研究を否定した、東京の上層部や世間には無い。この野村とかいう女にだ。

たしかに、上層部は彼女の研究を足蹴にした。それは憎い。

だが、ものをわからぬ愚か者どもに目くじらを立てるのは時間の浪費にすぎない。

しかし、この女は違う。

彼女の、そしてその祖父の研究を、踏み台にしようとしている。

いや、踏み台どころではな。研究を何かの政争に利用しようと考えているのだ！

それは祖父が一途に行っていた研究に対する許しがたい侮辱行為であった。

この女の言うとおりにすればどうなるか？

確かに多くの人が祖父の研究を見るだろう。

それは快感に違いない。

お前達が否定した研究を、こぞつて読み漁る。痛快だ。

しかし、それは同時に、多くの犠牲者を出すことになる。

それは、優しい祖父が望むことだろうか。否。望むわけが無いのだ。

実の孫では無い三四に、あれほどの慈愛を望み、死後にまでその幸せを願った祖父ならば、

むしろ、多くの犠牲者を出すぐらいなら、研究を捨てても良いときえ言い出しかねないだろう。

だからこそ、鷹野三四は怒りに震えた。

この怒りは、おそらく、この野村という女だけではなく、

きっと、祖父の手紙を読んでいなかっただらば応じていたであろう

自分自身に対するものでもあった。

「返事は、また今度で構いません。

連絡先をお渡しします。しかし、チャンスがいつまでもあるとは思わないで下さい」

野村と呼ばれる女は、怒りに震える三四の姿を見て、

よもや、その怒りが自分に向けられたものとは思ってもいかなかったのだろう。

自分の説得が功を奏したという確信に満ちた笑顔で

連絡先を書いたカードを渡し、去っていった。

しかし、鷹野三四は応じる気はいっさいなかった。

それどころか、祖父の研究を己の勢力争いに道具にする者達に対する怒りに燃えていた。

だから入江研究所に戻り、彼女が真つ先にやったことは、この事実を研究所の監査をしていた富竹ジロウに告げて、連絡先が書かれたカードを渡す事だった。

—— 恩人への黙祷が終わり、見開いた鷹野三四の瞳には燃えるような激しい怒りの炎が宿っていた。

入江機関は東京と呼ばれる組織の中でもトップシークレットに位置する存在である。

それを知るだけでなく、そのトップである自分に接触しているのなら、施設内に奴らのスパイがいても不思議では無い。

だが、それがただの職員や研究者ならまだ良い。

警備隊に、奴らの手が伸びていたら最悪だ。それは籠の中の鳥を意味している。

なら、どうするか。鷹野三四が出した答えはこうだ。

「敵に寝返る前に、こちらに抱きかかえれば良い」

裏切り者は、裏切っている最中には裏切らないものだ。

「失礼します。なんばようですかい？」

男が一人、入ってきた。

この入江機関を守る「山狗」部隊の隊長である小此木鉄郎だ。

カモフラージュとして雛見沢で造園会社をいとなんでいるため、妙な訛りをしている。

「あら、時間どおりね。小此木二尉。

今日は貴方と山狗部隊に、私から個人的に特別ボーナスを支給したくて、お呼びしたのよ」

「へえ、ボーナスですか。そりやありがたいですね。それで、何を頂けるんでしょうか？」

「良いものよ。このアタツシケースの中にあるもの。全部、貴方達にあげるわ」

「アタツシケース？へへへ、あけてびっくりってヤツですかい？」

ヘラヘラ笑っていた小此木だったが、

鷹野三四が開いたアタツシケースの中身を見ると、目つきが一瞬にして変わる。

「…で、俺達に何をしろと？」

「別に、任務に支障がでるようなことは命じるつもりはないわ。

ええ、そうよ。貴方達にはただ命令を忠実に実行して欲しいだけ：

この入江機関を守り、梨花ちゃんを守ると言う任務を、ね」

小此木は無論、目の前にある札束が、ただの任務続行にともなうボーナスとは考えてはいない。

そう言い放つ鷹野三四の瞳に燃えるような怒りが彼にも見て取れ

だからだ。

何か重要な命令が下されるに違いない。だが、それが何であれ拒否することはできないだろう。

その目の前に提示された億という金銭は、受け取る者に身命を賭して命令を実行させるには十分な額なのだから。

## 第二章・婚約編

### 第11話「5日目（日）A「始まりの日」

「5日目（月）：通学路：朝：前原圭一」

ふあく眠い。寝不足だ。結局昨日の宴会は夜の二時ぐらいまで続いた。

だので眠い。瞼も半開きだ。

そういえば、未成年者は夜8時だが、9時だかまでしか働いてはいけないことに

なっていたんじゃないか？これっていいのか？

まあ、結納を労働といえるかどうかはわからないけどさ。

帰宅は親父の車だった。

驚いた事に親父は、あの大会で一滴も酒を飲まなかったらしい。自分の父親ながら「偉いな」と思っていたら、満面の笑みでこう言われた。

「いやあ、絵を描いていると伝えたらね。次々に『個展をひらかないか？』『絵を見せて欲しい』『購入したい』と、ひっぱりだこだね。とても飲んでる暇なんてなかったんだよ。ハハハハ」

なんだそりゃ。

つまり、あれか、園崎家の婿養子の父親の立場を存分に利用して、商売してたってことか？

「それじゃ、俺は父さんのダシに使われたってことじゃねーか」

「ハハハ、お前は親孝行ものだよ」

ちえ。

まあ、俺を抱きしめて、さめざめと泣いているお袋よりはマシか。

「圭一は、もうすこし一緒にいられると思ったんだけど…少し早いわよね…」

俺は愛想笑いをして、お袋に抱きしめられ続けるしか無かった。

そんなこんなで、家に帰って寝たか寝ないんだかの睡眠をとったわけだが、

正直言つて学校に行く気はゼロ。

いつそ、学校を休んでやろうかと思つたが、お袋に「とりあえず学校に行くだけいきなさい」と言われ、またレナも迎えにきたので仕方なく行くことにした。

「おはよお〜圭くん〜ふああ〜」

レナも眠そうだ。

二人してあくびをしながら、魅音との待ち合わせ場所に行く。するとそこには、

「圭ちゃんー！レナーー！おつはようー！」

元気いっぱいの魅音がいた。

というか、少しテンションが高くないか？

「おはよー魅音。お前、元気だな。片付けがあつたから、俺以上に寝てないんじゃないか？」

「あははは、まあね！で、圭ちゃん。どう体調は？」

「ん？ああ、大丈夫。大丈夫。むしろ、睡眠が足りない事の方が問題かもな…ふあああ…」

昨夜は、魅音にあまりにも強く抱きしめられ意識を失うと言う珍体験をした。

よくドラマとかで見えるが、まさか自分の身におきるとは思わなかつたぜ。

その後、すぐに魅音の母親の茜さんに活を入れられ俺はなんとか意識を取り戻したが、魅音はというと、その後茜さんとお魘のバアさんにしこたま怒られたらしい。

「いやあくもう、本当、あの大会が一気に静まるぐらい怒られたよね！

『結納の日に、婚約者を殺す気か！』って、さ…あははははは！』

いや、全然笑いごとじゃないぞ魅音。

実際、あの時、天使姿の沙都子が何人か目の前にいた気がする。

監督が見たら、喜んで昇天しただろうな。

「まったく、こんな夜なら死んでもいいかな？だ。

これじゃあ、こんな夜なら、死んでみろ！だろ」

「へく魅いちちゃん。こんな夜なら死んでもいいかな？つて言ったんだ」

俺と魅音の間にひよっこりレナが顔を出す。

不思議だ。なぜか、とても嬉しそうな顔をしている。

「ああ、俺が月が綺麗な夜だつて話したら、そんな返しをしたんだ。

言ってることやってることが正反对だぜ。全く」

「そうなんだ。月が綺麗な夜だつて言われて、魅いちちゃん。そういう返しをしたんだ」

さらに、笑顔が一ランクアップしたぞ。

なんだ。ゲームなら後方にハートマークのエフェクトが発生している感じた。

「け、け、け、圭ちゃん！おじさんは先に行くね！」

魅音が慌てたように走っていく。

元気な奴だな魅音は、見習いたいぜ。

ツンツン…

なんだレナ？

なんで突つつくんだよ。

「ねえ、圭一君。圭一君つて夏目漱石つて読むかな？読むかな？」

「あん？夏目漱石？そりゃ、進学校の試験にも出るからな」

「じゃあ、問題！でーん！」

「お、なんだ、クイズか？よっし、こい！」

「夏目漱石は『I love you.』をなんて訳したでしょうか！」

「ははは、なんだ。簡単な問題じゃねえか。」

有名な話だ「日本人は、私は貴方が好きです。とは言わない」だから、こう訳したんだ。

—— 月が綺麗な夜ですね。——

あつ…

レナの顔を見る。

レナは笑顔から可愛いモードに突入していた。

これは確変、当たりの印！

なるほど、そういうことだったのか！



「サンキューー！レナ！」

おれは走って、魅音を追いかけた。

なぜかガニマタで歩いていた魅音の横に並ぶと、手をつないで、おれは微笑んだ。

「な、なに、圭ちゃん」

「魅音にさ、今朝も月が綺麗だつて言うのを忘れててさ」

「はあ？今朝つて月出てたっけ？」

「ああ、魅音のここに」

俺は魅音の胸元を指さすと、耳元でささやいた。

「綺麗なのは、きつと魅音と見る月だからだと思っぜ」

魅音はみるみる顔を赤くすると、

俺の腕にしがみついた。

「なんだよ圭ちゃん！わかっていないと思つてたのに！」

「そんなわけないだろ？魅音の反応が可愛いからスルーしてただけ  
や」

「あー圭ちゃん、イジワルなんだ！あはははは！」

後ろを振り返ると、レナがガッツポーズしている。

俺もつられて親指を立てる。

ゴメン魅音。嘘をついた。

でも、まあ、幸せな嘘なら許してくれるよな？

俺と魅音は腕を組んでそのまま登校した。

魅音は終始上機嫌で、俺も嬉しかったが学校が見えてきて腕を離そうとした時、

それは起きた。

魅音が、がっしりと捕まえて離さない。

「お、おい魅音？もう学校は目の前だぞ？」

「いいじゃん。いいじゃん。もう夫婦なんだしさ」

おいおい、何を言っているんだお前は？

だが、俺の困惑をよそにずんずん進んでいく。

そして腕を組んだまま、そのまま学校の中にまで入ってしまった。周囲の生徒達の俺達への視線がちよつと痛い。

下駄箱でいったん腕が離れたので、このまま逃走しようとしたが瞬時に魅音に捕まる。

「圭ちゃん、逃がさないよ」

魅音はニヤリと笑って、腕を絡みつかせる。

おい、おい、勘弁してくれ。

これはちよつと、上機嫌にさせすぎたか？

月の下りは無視した方が良かったかしれないと、少し後悔。

レナに助けを求めようとするも、

可愛いモードで、助ける気などみじんも感じられない。

俺は諦めた。

ぐいぐい進む魅音に引きずられ突き進み、

魅音は俺と腕を組んだまま教室のドアを元気よく開けた。

「やーやー皆の衆！おはよう！月は出ているかね！」

なんだその挨拶は、クラスの皆や、

沙都子も困惑しているじゃないか。

「えつと…今朝は月が出ていたんですの？全然気が付きませんでしたわ」

そんな沙都子の頭を梨花ちゃんが無でる。

「沙都子も、いつか月が見れると良いのですよ☆にぱ〜」

「頭を撫でられるような事ですて？月なら、いつも見てましてよ？」

どうやら梨花ちゃんの方は魅音の月発言をわかっているようだ。

本当、理解力が高くて助かるぜ。

その後、一旦離れて席につき、朝礼。

そして授業に入った。

さて授業。と一口にいつても、うちの雛見沢分校は

小学生く中学生が混在している1クラスしか存在しない。

そして先生は、校長先生を除けば知恵先生1人だ。

そうになると、知恵先生は小学生グループの授業を受け持ち、

高学年グループは、進学校にいた俺が教えることになる。

という感じで授業が進む時多々ある。

…魅音は、俺より上なんだから、どちらかといえば

教える側にいなきやならんと思うのだが、なぜか俺はレナと一緒に魅音も教えている。

さて、そうなると思いを動かして、高学年グループ同士でセッション、つまり一緒に勉強しあうことになるんだが…

「魅音…」

「んー？なに、圭ちゃん？」

「…近いぞ」

「あはははは。こうして近い方が教えやすいでしょう？ね？」

あははじゃねえ。近いというか、密着の域だ。

体温を感じるし、なにより、腕に魅音の胸が当たっている。

「も、もう少し離れないと。ほら…当たっているだろ？」

「あたってるって、何が？胸？だったら大丈夫だよ。これあたっているんじゃないくて、さ

…当たってるんだから」

魅音は口端を大きく上げて俺を見る。

それは笑顔は笑顔でも、獲物を前にする猛禽類の笑顔だ！

「あ、当たってるってなんだよ…お前は詩音か！」

そこでハタと気が付いた。

そういえば、詩音と魅音は親族が見分けがつかないほど似ているという。

ということは、わりと傾向も似ているというか、要素も多分同じものを多く含んでいるに違いない。つまり、何がいたいかと言うと…

詩音と同じように、男をおちよくる遺伝子を持っていても不思議ではないのだ！

…って、いうか、よく考えたら二人は一卵性双生児だ！

「ん〜？なに、なに〜？」

そうでなくても密着しているのに、

さらに体をこすりつけるようにすり寄ってくる。

匂いつけか！

ネコかお前は!?

これは勉強どころでは無い！

助けを呼ぼうにも、レナは俺と魅音のやり取りを可愛いモードで鼻血を出しながら見ている！

「魅いちちゃんと圭くん、仲良しだよ☆はう☆はう☆」  
くっそ、凄く嬉しそうだなレナ！

仲間のイチヤラブを見て楽しめるだなんて、

お前、本当に良いやつだぜ！

というか、鼻血を出し過ぎじゃないか？

そのうち出血死するぞ、お前!?

「魅音さん！圭一君！いい加減にしない！」

その時だ。

体を震わせながら、知恵先生が立ち上がった。

いかん。これは相当怒っているぞ！

「いいですか！貴方達二人が仲良しなのは知っています！」

しかし限度があります！二人で腕を組んで登校したり、授業中に体をこすりつけあったり！

おそろいの指輪をしたり！これはもう不良です！不純異性交遊の域ですよ！」

…いや、それは言い過ぎじゃないですか知恵先生？

そう俺が言う前に、すうつと魅音が立ち上がり、こぼれるような爽やかな笑顔を周囲に見せた。

「あ、先生。先生の家にはまだ回覧板が来ていないようですのでお話ししますけれど、

私達、園崎魅音と前原圭一は、昨夜、婚約を致しましたので報告いたします」

「こ、婚約ッ!?!」

／パチパチパチパチパチパチパチ／

クラス内に拍手が巻き起こる。

どよめきが起きないのが、ほとんどのクラスメイトが既に知っていたからだろう。

まあ、昨夜は雛見沢中の人間が来ているんじゃないかという勢いで園崎の本家に来訪者がいたからな。もしかしたら、知らなかったの

は知恵先生ぐらいじゃないか？

「はい。なので不純異性交遊にはあたりません。

あえていうのなら、むしろ純粹異性交際。

むしろ不良ではなく良人ですね！結婚的な意味で！」

「け、結婚ッ!？」

魅音の言葉の節々で、

知恵先生が激しくダメージを受けているのがわかる…

「あと、このおそろいの指輪ですが、もう説明しなくてもわかると思いますけれど婚約指輪ですので、外すわけにはいきません。というわけで知恵先生。披露宴には是非、来てくださいね！」

「ひ、披露宴ッ!？」

最後の言葉で、知恵先生は崩れ落ちた。

「そんな。生徒に先をこされただなんて…」

あ、なんかこれ。デジャヴを感じるぞ。

知恵先生は力なく立ち上がると

「自習にします」と一言だけ呟き、教室から立ち去って行った。

「お、おい、知恵先生大丈夫なのか？」

レナもさすがに困った顔をしている。

「知恵先生、ああ見えて結構、婚期を気にしているんだよ〜はう〜」

さすがに、少し気の毒になったのか

魅音もため息をついた。

「カレー好きの先生のためにカレールーを十箱

いや、ビールケースを送った方がいいのかねえ」

おいおい、なんでやけ酒を想定しているんだよ。

終わりのチャイムがなった。

結局、知恵先生は最後まで教室に戻ることなく。

今日一日の授業は終了した。

普通の学校なら大問題になるところだが、

この雛見沢分校なら別に問題になることはないだろう。

むしろ、知恵先生のメンタルの方が気になる所だぜ。

さて、今日の部活は魅音がアルバイトしに行くと言うので中止に

なった。

全員が集まらなければ、基本的に部活は行わない。というわけで解散するという流れになったんだが、

魅音に「ちよつと圭ちゃん、こつちに来て」と引っ張られ校舎裏までやってきた。

「どうしたんだ魅音」

「アハハハ、ちよつと圭ちゃん成分の補充をしようと思ってさ」

圭ちゃん成分の補充。なんだそれ？

俺がそう聞くまでもなく、魅音は俺の体に抱きついて、胸の所で頬すりしはじめた。

「お、おい魅音…？」

「はあ、圭ちゃんの匂いがするよお」

魅音大丈夫か、お前？

なんか心配になってきたぞ。

魅音は、俺の胸に当てていた顔をあげると

俺と視線を合わせて満面の笑みを浮かべる。

「あのさ、今まで変になったかと思われたくなくて言わなかったんだけど…言ってもいいよね圭ちゃん？」

「ん、ああ、なんだよ魅音」

「圭ちゃんの匂いつてさ。すつごく安心するんだよ」

安心？俺の匂いが？

「二日前に圭ちゃんの家泊まりに行った時も、布団に圭ちゃんの匂いがして、

すつごく嬉しかったんだ」

「えっと、それって匂いフェチとかって奴か？」

一瞬重度の匂いフェチかと思っただが、

魅音は心外そうな表情をしている。

「あー、違う違う。圭ちゃんだって、ほら、無い？お母さんの匂いに安心するとか、そんな感じ」

「それは…わかるかも…」

そういえば、俺も魅音を布団で抱きしめている時に凄い安心感を覚

えたよな。

「こうしてみると、少女漫画とかで彼氏のぶかぶかのYシャツに手を通すって理由、

よくわかる気がするよ」

「ああ、あるな。ぶかぶかのYシャツを着る恋人って、あれはかなり萌え度が高いよな」

「あれって結局、恋人の匂いに包まれて安心したいからなんだよ。きつと」

なるほど、そういうことでもあるのか。

じゃあ、魅音、俺のYシャツを着てみるか？

「…ん、まあ、それもいいんだけどさ。」

それよりも、もっと良い方法があるとおじさんは思うんだよね」

「ん？なんだ」

「圭ちゃんに、抱きしめられること」

ニツコリ微笑む魅音。

つたく、可愛い顔しやがって。

俺は両腕を魅音の背中に回しゆっくりと抱きしめる。

表情は見えないが。多分、幸せそうな顔をしているんだろうな。

そう思うと、俺も何だか嬉しくなってくるぜ。

「ねえ、圭ちゃん。おじさんもアレしていいかな？」

「アレ？アレってなんだ？」

「ほら、前に罰ゲームで『許可をとらずにキスしても良い』ってあったじゃん？」

あれ、おじさんにも適用していい？」

つまり、俺の許可を取らずにキスをしたってことか？

「別に構わない…」

んっ…！

最後まで言い終わらないうちにキスしてきやがった！

そしてこいつ…唇を動かして、吸いついている！？

少なくとも今までの、触れるか触れないかのキスじゃない！

これはデープキスって奴か？

しかも長い！一分？二分？いや、もつとか!?  
ちよつと、息ができ…

……ふはあ!!!

「ゲホゲホ…お、おい魅音ツ…お前…!」

「サンキューー圭ちゃん！これで今日一日、圭ちゃんに会えなくても、おじさん頑張れそうだよ!」

そう言い残すと、

魅音は颯爽と離れて行つた。

なんて奴だ。まるで嵐だぜ。

俺は踵を返して校舎に足を向け、

物陰からこちらを見ている3人に声をかけた。

「じゃあ、みんな帰ろうぜ」

レナ、梨花ちゃん、沙都子。

いつもの部活メンバーが出てくる。

「はう☆」

「にぱ☆」

「ですわね」

部活メンバーに付きまとわれることも影から見守られることにも慣れてきた。

なので、もう何も言わない。

というか、恥ずかしがりそうな当の魅音が隠す気ゼロになつてい  
る。

なら、俺も開き直つて良いだろう。

そうだ。

今日は、魅音もいないし、久しぶりにレナの宝探しを手伝うか。

「せっかくだから久しぶりに宝さがしに行こうぜレナ」

レナは元ダム工事現場で良く宝探しと言つて粗大ごみの山を漁つ  
ていた。

前は良く一緒に探していたが、俺と魅音が付き合いだしてから一緒  
に行くことが無くなつていた。

なので、声をかけたんだが…



「ごめんね圭一くん、

今日は、いいかな…かな…」

だいぶ、歯切れの悪い返事が返ってきた。

おい、おい、一体どうしたってんだ？

いつもなら、喜んでOKしてくれるじゃないか。

「だって、魅いちちゃんに連絡してからじゃないと…、

圭一君を独占しているって怒られちゃうかもしれないし」

うっ。その可能性は否定できない。

前にレナが、心ならずも言った「好き」の一言で

魅音が嫉妬で暴走しかかっていた。

もし、何の言伝も無しに一緒にいったら

—なんで、おじさんに黙ってレナと一緒にいたの？—

と、無表情で問いかけられない。

「だ、だな。魅音に一言伝えておかないと、後が怖いからな」

「でも、圭一君が来てくれるなら魅いちちゃんと一緒に☆いい☆いいな

それなら、直ぐ近くでカワイイ魅いちちゃんと、圭一君が見れて☆

はう〜」

レナの目の中に、イチヤイチャしている俺と魅音がいる。

おいおい、そんな感じで魅音と一緒ににはいていないぞ。

…今のところは。

「やれやれ、魅音さんとお付き合いされるのは良いですが

中々、めんどくさいんでございますわね」

「沙都子、恋は戦争。夫婦は独占契約なのです。

負けられない戦いがそこにはあるのですよ☆にぱ〜」

「魅音さんと戦争？ゴメンこうむりたいでございますわ

勝てる気がしませんもの」

レナと一緒に帰れないのなら、今日はこれで解散だな。

仕方がない。まっすぐ家に帰って漫画でも読むか。

## 第12話「5日目（月）B「超難易度」

「5日目（月）：レストラン「エンジェルモート」：夕：前原圭一」

家に帰ると、親父からエンジェルモートへと行こうと誘われた。

どうやら今夜は、お袋がいないらしい。

特に拒否する理由も無かったので、そのまま親父の車に乗り込みエンジェルモートへと向かう。

そういえば、エンジェルモートでは詩音がアルバイトをしていたはずだが

今日は会えるだろうか？

エンジェルモートに入り、俺を待っていたのは…

甲子園ピッチャーで、俺の魂の盟友亀田くんだった。

「ケエエエエー！話は聞きましたよッ！」

恋人どころか、結婚したって話じゃないですか！どうということっすか！」

いや、どうということも何も…

そういうことなんだ亀田くん。

あと声大きい。

怒られるぞ。

「そんな、俺達…同じジャンボパフェをつつつきあつた仲間じゃなかったんですか！」

ある意味、義兄弟以上の仲…それなのに、俺を置いて行くだなんて

…あんまりつすよ！」

なんか、その言い方だと

俺が亀田くんを捨てて、他の女に走つたみたいだぞ…

なんか、周囲の客も変な視線を送っているし、

勘弁してくれ。

「そうですねよ前原さん！」

「僕たちもずるいと思います！」

おお、物陰から立ち上がったのは、

同じ雛見沢分校にいるのにもかかわらず、

今まで出番が一切なかった、富田くんと岡村くん！

「雑な紹介ありがとうございます！」

「でも、そんなことはどうでもいいんです！」

前原さんが、魅音さんとラブラブしている姿を見て、

僕たちはどれだけ心を掻きむしられているかわかりますか！」

いや、確かに今日の魅音は大概だったが、

それに因縁をつけられるいわれは無いぞ！

俺は、富田くんと岡村くんの二人を肩をがっしりと掴む。

「良いか。富田くん、岡村くん。」

君達の気持ちは同じ男としても非常によくわかる。

しかしだ、これは『告白』という超難易度イベントを克服した者にのみ

与えられる祝福なんだ！もし、君達もラブラブしたいというのなら  
恐れずに、梨花ちゃんと、沙都子に告白するべきだと俺は思うぞ！」  
そう、

富田くんは沙都子萌え！

岡村くんは梨花ちゃん萌え！

成功しても、誰も傷つくことは無い！

レナが一人残ってしまう事だけは気がかりだが。

その時はその時で考えよう。

だが、二人視線を落とす。

「うう、そんなの、沙都子ちゃんに

声をかけてもトラップにハマって撃沈されるだけです」

富田くんは泣いた。泣いていた。

「無理です。無理なんですよ…梨花ちゃんは難攻不落…

数々の男の子が笑顔で撃沈されたんですよ…」

そして、岡村くんも泣いていた。

この世にはどうにもならないことが数多く存在する。

二人は己の力の無さに泣いていた…

「そんな沙都子ちゃん梨花ちゃんを落せたのは唯一、圭一さんのみです！」

「僕たちには無理なんですよ!」

ハッ? いつ俺が沙都子と梨花ちゃんを口説いた。

全然記憶にないぞ、そんなこと!

「ケエエエエエエイ! なんなんですか、アンタ!

! 次々女を口説き落しているんですか! アレですか! ジゴロですか!

女殺しの圭一なんですか! 俺にも、俺にも、女の子を紹介して下さいよ!!」

「お、落ち着け亀田くん...! いや、口説きも何も、亀田くんは甲子園ピッチャーなんだから、

女の子にはモテモテ、皆からキャーキャーじゃあないのか!」

常識的に考えて、プロのスカウトに大注目されている亀田くんがモテない方がおかしいだろう。

むしろ、とつかえひつかえしてもおかしくない気がするが...

「...は? K、何を夢見てんすか?」

なんか素で返されたぞ。

「野球部なんて、朝から晩まで泥まみれで練習して、残った時間は勉強に没頭する!

家に帰ったら寝るだけで、遊ぶ時間も、女の子に声をかける時間もないんですよ!」

美人マネージャーに、タオル貰ってキャプテン♥そんな場面なんてねえよ!

現実には漫画じゃないんですよ、ケエエエエエイ!!!」

!!!」

これが恋人がいない野球部員の魂の咆哮なのか...!

亀田くんの必死の叫び声が店内に木霊する。

いや、ここまで大声だと営業妨害だぞ。

「あの、すみません。他のお客様にご迷惑となっておりますので、静かにしては頂けませんでしょうか?」

ほら、怒られた。

って脇から来たのは詩音か。

エンジンモーターの際どい衣装が良く似合っているぜ。

そうだ。詩音には彼氏って、確かいなかったよな？

「詩音は、どうだ。亀田くんの彼女…？」

「はあ？」

うっ、詩音の目を見て俺はたじろく。

その瞳は雄弁に「殺すぞお前？」と語っていた。

だが、亀田くんは気が付いていない！

「詩音さん、お願いします！お、俺の彼女になってください！」

「あ、あのお、申し訳ないんですが。」

ちよつと、甲子園のピッチャーの亀田さんに、私は不釣り合いと言いますか、

力不足と言いますが…きつと、もつと素晴らしい女性が見つかると思いますよ？。」

亀田くんの必死の願いは、

詩音に、一蹴された。

ガンンという効果音が文字で見えるぐらいにショックをうけているのがよくわかる。

声をかけようとしたが、半分放心状態の亀田くんは、声をかけるの  
もはばかられた。

だが一応謝っておこう。

「なんか…その…すまん！亀田くん！」

「…ふ、ふふふ…いいんです。わかっているんです…Kと俺じゃ、住む  
世界が違うってことは…」

あんたは結局ケーキより、現実の女を選ぶ…そんな男なんですよ  
…」

その言葉に、ショックを受けた。

自分でも信じられんほどショックを受けた。

亀田くんは確かに俺と魂の波長があうレベルの仲だった。  
朋友とさえ言ってよいだろう。

そうでなければ、ジャンボパフェを男二人でつつつきあうわけが無い！

しかし、そう、しかしだ…！

魅音と、ジャンボパフェ、どちらをとるかと言われたら

俺は魅音をとるしかない！間違いない！確実に！…なんの躊躇もな  
く！

友情を取るか？彼女を取るか？

この究極の問題に、俺は明確に答えを出してしまった。

ああ、すまん…亀田くん…俺にとっては…

魅音は何よりも優先するものなのだ…！ジャンボパフェよりも！

でもな、亀田くん、忘れないでくれ。

二次元少女を愛する資格があるのは、リアル少女を愛する者だけだ  
ということ…

少女に見立てたジャンボパフェをめぐる資格のあるものは、リアル  
少女を尊重できる者だけであるということ…

トボトボと店を出て行く、亀田くん。

その後姿には哀愁が漂っていた。

ぐい…

つて、襟首を噛むのは誰だ？

詩音か？笑顔なのに、もの凄い怒りの炎が見えているぞ…

「いや、圭ちゃん。なに余計な事してやがってくれてんですか？

私は、沙都子のねーねーとして忙しいんです。今度男なんぞあてが  
おうとしたら

四肢を斬り落として、箱詰めに入れて、お姉の元に送りますからね

？」

お、おいおい怖いぞ詩音。

「大丈夫ですよ。お姉なら、箱詰めになった圭ちゃんを

ちゃんと、お世話してくれるはずですから」

いやいやいや…

「むしろ、圭ちゃんを独占できるって、喜ぶんじゃないですかね？お姉  
？」

勘弁してくれ。

俺が悪かった。許してくれ！詩音！

「ま、これぐらいでいいかな？」

ところで、今日のお姉は、何かありましたか」

ふうふうようやく解放されたぜ。

ところで、今日の魅音？あぁ…

「なんか…すつごく、攻められたぜ」

「責められたって、何か圭ちゃん、悪い事でもしたんですか？」

「いや、責め、じゃなくて、攻め…あぁ、言葉じゃ伝わりにくいぜ…！」

仕方が無いので具体的に説明するか。

今日、魅音に体を擦りつけられたり、胸を押し付けられた事を話す。

最初は笑いながら聞いていた魅音は、途中から表情が変わり、

最後の方は困り顔になっていた。

「あの、圭ちゃん…

お姉って怖がりだから、あまりやりすぎても怒鳴ったりとかしないでくださいね」

「いや、怒鳴りはしないけど…怖がり…？」

繊細ってことか？」

「要するにへタレなんです」

へタレって…

随分バツサリだな…

「圭ちゃんに、そういうことをするのって、

セクシャル・アピールでも何でもなくて、ただ甘えているだけなんです。

もう自分が、圭ちゃんに嫌われないって確信しているからできるんですよ。

私、お姉のそういうところが本当に…」

「…詩音？」 口調が少しづつ荒くなり、感情的になってきたので、

思わず声をかけてしまった。

詩音も気が付いたんだろう。

目が覚めたような顔を見ると、ニッコリ笑って親父のいる席の方に手を向けた。

「アハハハ、まあ、お姉はじゃれているだけなので、

あまり本気で怒らないで下さいって事で☆

：それじゃ、お客様。席について下さい。邪魔ですから」

詩音に足されて、というか乱暴に突かれて、

親父のいる席に座らされた。

ウエイトレスとは思えない粗暴さだぜ。

そのくせ、親父には丁寧にあいさつしている。

畜生、詩音の奴め…！

親父はというと、一部始終を見て楽しかったようでご満悦だ。

「ハハハ、圭一。詩音ちゃんにこつてりしぼられたみたいだな」

「全く、あんなのが、俺の妹になるってんだから世も末だぜ」

「まあ、そういうな。良い子じゃないか。」

それに年上の妹なんて、欲しいと思ってもできるもんじゃないぞ  
？」

甘い！親父は詩音の本当の顔を知らないからそういうえるんだ！

何が年上の妹だ！詩音は、鬼だ！悪魔だ！詩音だ！

「はい、お父様に、圭一お兄い。」

決まりましたら、呼んで下さいね♥」

詩音は、わざとらしい笑顔を俺と親父に向けると

席を離れていきやがった。

くそ、いつかへこませてやるぜ。

「しかし、圭一が、雛見沢に来てこんなに元気になるだなんて父さんも  
考えて無かったよ」

「それについては感謝しているよ父さん。」

俺も、こんなに楽しい日々を過ごせるとは思わなかったぜ」

それは本心だ。

さすがに結婚するとまでは思ってもみなかったけど、親父につられ  
れてきて、過ごしたこの数週間は、今まで生きてきた人生のその全て  
に匹敵するほど輝いていた。

「お前に、何かを伝えられるのも、あと数年かな」

「父さん…」

「だから、お前にはきつちりと話しておきたいことがある」



「なんだよ父さん。あらたまつて」

「制服学についてだ」

…はい？

「この店の制服はいかに素晴らしいかは前にも話したと思うが…」

いやいや、親父、アンタ、何言つてんだ？

今、ちよつと、親父のこと尊敬していたんだぞ？

それを一瞬で崩すのか？

というか、なんか、いかに制服とはすばらしいものかと長々と話はじめたぞ。

どうするんだこれ。息子として聞かなきゃいけないのか？

「いや、前原さん！その論にあえて口を挟ませてもらいましよう！」

誰だ!?か、監督…イリー!?

「ほう、これは入江先生。私と語り合いたいと？」

「ええ、貴方の論は素晴らしいが完璧ではありません。」

このイリー…貴方と魂をかけて語り合おうではありませんか…」

止めてくれ…

そして俺を巻き込まないでくれ。

だが、俺の願いもむなしく、

この二人の口論は実に二時間三十分にも及び、

客足に影響が出ると判断された店長と、スタッフにより、

ガムテープに巻かれて、店舗から放逐されることになった。

## 第13話「6日目（火）A「膝枕」

「6日目（火）：通学路：朝：前原圭一」

「アハハハハ！義郎おじさん、すっごく怒っていたよ！

『魅音ちゃんの婚約者と、その一族じゃなかったら、今頃鬼ヶ淵沼に沈めていた』だつてさ！」

魅音はそういつて笑う。

全く面目ない話だぜ。

出入り禁止になつていないのは奇跡かもしれない。

親父は俺に、というか俺の婚約者の魅音に感謝するべきだな。

今日はレナは色々用事があるからといつて、先に学校へと向かつていつた。

そのため、俺は魅音と二人つきりで登校している。

魅音が遅れることがあるので、レナと二人つきりで登校することはわりとあるが、

魅音と一緒に登校とは、かなり珍しいかもしれない。

今日の魅音は腕を組んでいないが、

ステップしたり、くるりと回転したり楽しそうだ。

俺も魅音のそんな姿をみて顔がほころぶ。

ふと、俺は昨日の詩音とのやり取りを思い出した。

「そういえば、昨日、詩音に亀田くんを紹介したら、物凄い剣幕だったんだが

詩音つて、今は恋人とかいないんだよな」

「えつと…」

魅音の顔が曇った。

これはつまり…

「その、悟志のことを…？」

「うん…」

魅音は立ち止まった。

俺も足を止める。

そこには苦渋に満ちた魅音の顔があつた。

「悟志は、転校したんだよな…？」

「去年の綿流しの祭りの時に」

「転校とは行方不明の隠語だ。」

「俺達はそう言っただけ、あまり表に出さないようにしてきた。」

「うん」

「魅音は、こつくりと頷いた。」

「悟志は、つまり、恋人の詩音と、沙都子がいたのに転校したってことなんだよな」

「詩音は、その…：どうだろう。恋人と、まではいつてなかったかもしれない」

「でも詩音、好きだったんだらう。悟志の事？」

「うん。詩音は、今でも、悟志のこと、好き…：だと思っ」

「歯切れが悪い。何かを隠しているのか。」

「それとも言いたくないことがあるのだろうか。」

「魅音はうつむき、」

「立ち止まったまま動こうとしない。」

「俺もあえて、声をかけなかった。」

「待っていた。魅音の次の言葉を。」

「圭ちゃん、あのね。」

「詩音は、悟志くんのために爪を三つ、剥いだんだよ」

「爪を剥いだ？」

「一体何の話だ？」

「圭ちゃんも聞いたことあるでしょ。去年、詩音は聖ルチアを脱走したんだ。」

「あれ、本家にも無断でおこなって、しばらく潜伏していたんだよ。でも、去年の綿流しの時に」

「悟志くんが叔母殺しの容疑者になって、詩音は悟志くんを助けるために名乗り出た」

「そんなことがあったのか。」

「知らなかった。」

「俺は何も言わず、」

黙って聞く。

「園崎本家に知られた詩音は、爪を三枚剥がされた。詩音が本家に逆らい脱走し

悟志君を助ける代償だった。それで、悟志君は助かるはずだった。でも！」

北条悟志は鬼隠しにあつて失踪した。

「圭ちゃん私ね。爪、剥いだんだ。詩音と同じように。詩音があまりにも可哀想だったから。

その痛みを少しでも分かち合いたかったから。物凄く痛かった。でも！でも！

私、分かつて無かった！理解していなかった！」

魅音の指先にある爪、三枚が少し歪んでいた。

自然に爪が歪む形になるのは、無い事も無い。

しかし、実際は違った。

それは、人間の意思で行われて歪んだものだ。

俺は想像もできない。爪を剥がすだなんて。

爪の間に針が刺さるだけでも壮絶な痛みだというのに。

「圭ちゃんを好きになって、付き合つて、どれだけ詩音が辛い思いをしてきたから、本当の意味で理解できた！私も、圭ちゃんがいなくなつたらと思うと、想像するだけで胸がはりさけそう！潰されそう！えぐられそう！」

「魅音！」

俺は、魅音を抱きしめる。

「圭ちゃんが、いなくなつたらと思うと、私、それだけで頭がおかしくなりそうになる！圭ちゃんのいない世界なんて考えられない！それを詩音が去年体験した！私なら耐え切れない！今ならわかる、詩音が鬼になりそうだった本当の理由が！」

俺の腕の中にいた魅音は振るえていた。

そして泣いていた。

「詩音に謝りたい。全然わかつていなかつたつて。貴方の苦しみの万分の一も理解してなかつたつて、でも、出来ない…だつて、詩音はも

う私を許したから。だから、もう許してくれない。もう、私は許されない！詩音ゴメン、詩音ゴメン、詩音ゴメン、詩音ゴメン」

魅音はまるで、子供のように顔をくしゃくしゃにして泣いていた。俺は黙ってそれを受けとめ頭を撫でた。撫で続けた。

そして、落ち着いてきたところで、

魅音の耳元に、そっと呟いた。

「魅音、俺が許す」

「圭ちゃん？」

俺も前に、同じ事があつた。いつの頃かは思い出せない。

自分の過ちに気が付き、許されることの無い罪におののき、苦しみ、悶えた。

その時、俺は梨花ちゃんに許してもらつた事があつた。

それがどれほど自分の助けになったことか！

今度は、それを俺がやる番だつた。

魅音の梨花ちゃんに、俺がなるんだ。

「俺は詩音じゃない。だから本当の許しは与えられない。

でも、俺は魅音を許す。魅音は気が付いた。それはとても偉くて尊いものだ、

だから、俺は許す。魅音のしてきたことを全て」

「圭ちゃん…」

魅音は大量の涙を目に貯めて俺を見ていた。

俺はというと照れ臭くなくなって、思わず魅音の瞳から視線をそらしてしまう。

たぶん、今、俺の顔は真っ赤になっているんだろうな。

らしく無い事をするもんじゃないぜ。

「ま、まあ、これは梨花ちゃんの受け入りなんだけどさ…」

それでも、魅音の心が少しでも楽になるなら、いいだろう？」

うん。うん：魅音は何度も頷くと、俺の胸に顔をうずめる。

セミの鳴く声が聞こえる。

ああ、そうだ。もう夏なんだな。

「そうだ。魅音、これから川にいつて水浴びでもしないか」

「え？学校は？」

魅音は、俺の突拍子も無い提案に驚き…というより不思議そうな顔で答えた。

それを俺は不敵に返す。

「こんな暑い日に学校なんていつてられるかよ！

川で水浴びでもしていた方が、よっぽどいいぜ！よし、いくぞ！」

「え、ちよつと圭ちゃん!？」

俺は、魅音の返事も待たずに手を引つ張って沢にむかう。

綺麗な川が流れる沢に到着すると、

おれは有無も言わずに川の水を魅音にかける。

最初はとまどっていた魅音も、

何度も水をかけられるうちに応戦し始めた。

いつしか俺達二人は笑いながら、水をかけあい。

どちらも、体中をびしょびしょにぬらして、倒れ込んだ。

太陽が照り、風が気持ちいい。

だけど、川沿いというのは石がごつごつしていて、

そこに寝転ぶと、背中が痛くなるだけだ。

ちよつと気持ちよきは無い。

「というこで、魅音。」

俺のカバンを下にひいて、俺の膝に頭を乗せろ」

「へ…？なにさ、それ」

「なんでもいいから。魅音、早く」

俺はずぶ濡れの魅音を仰向けにすると

両ふとももの上に、魅音の頭を乗せた。

「あ、あのさ、圭ちゃん。こういうのって、普通、逆じゃない？」

膝枕ってヒロインがやるもんだと思うんだけど」

「なんだ。せつかく膝枕しているのに、嫌なのかよ」

「いや、嫌じゃないよ。確かに圭ちゃんの脚、硬くてちよつと寝心地は

わるいけどさ」

ちえ、人がせつかくやってるのに。

「圭ちゃん…」

「なんだ魅音?」

「…ありがとう」

沢のせせらぎの音がする。

俺が微笑みで返すと、

魅音も優しく微笑んだ。

しばらく見つめあっていると、魅音は目をつぶりしきりに顎を上に向ける動作をしはじめる。

これは、あれだ。キスして欲しいって事だな。

可愛い事してくれるぜ魅音。

おれは、ゆっくり上半身を前に傾ける。

が、体が今一、前に曲がらない。

そこで少し体をひねり魅音の唇に触れようと…

グギッ…!

!!!

!!!全身をつらぬくような音がした!

「圭ちゃん…?」

体中から力が抜ける。

倒れる。動けない!

「圭ちゃん!圭ちゃん!!!」

「魅、音…」

動けない。腰どころじゃない、足も、腕も、何もかも…

自分の体じゃないみたいだ。

力が入らない。まるで全身タコになったような感じだ…!

やばい。これはやばい!

「すぐに、学校まで連れて行くから、待ってて圭ちゃん!」

魅音は俺を背負うと颯爽と走り出す。

早い。そして機敏だ。

あつという間に、学校につく。

教室のドアを開けると、何か言おうとした知恵先生が、背負われている俺に気が付き、魅音を手伝いすぐに保健室へと向かった。

「圭ちゃん、大丈夫?すぐベッドに寝かせるから」

た、助かった…

ベッドに寝かされると、ようやく安心する。

知恵先生が教務室に戻り電話をしているはずだ。おそらく監督の所に。

直ぐにきてくれるに違いない。もう大丈夫。何も問題は無い…

「6日目（火）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

監督が俺の体に当たっていた聴診器を外し、知恵先生の方に振り返った。

「ギックリ腰ですね。しばらく動けないと思いますので、

保健室で安静にされていると良いでしょう」

知恵先生と、魅音が同時に大きく息を吐いた。

そして、知恵先生と魅音が話をしはじめた。

会話の流れから、どうやら今日、魅音が授業に遅れたのは、

姿の見えなくなった俺を魅音が探して、沢で倒れている所を発見した。

という感じに話をまとめたらしい。

まあ、確かに、ずぶぬれでぎっくり腰になっている俺の姿を見れば、

その説得力は圧倒的だろう。

だけど知恵先生は頭をひねっている。

「なんで、圭一君は沢で倒れていたんでしよう？

ま、まさか、世をはかなんで自殺を…？」

とんでもない事を口にして青ざめはじめる。

一応、そこに魅音が口を挟んだ。

「先生、それはないですよ。だって、こんな素敵な婚約者がいるんですよ？」

圭ちゃんが自殺なんてするわけないじゃないですか」

素敵な婚約者って、自分で言うのか。

「おおかた、圭ちゃんのことだから、悪戯心を出して

遠回りをしようとして、足を滑らしたにちがいないですよ。ねー圭ちゃん」

流れるように嘘をつく魅音。



さすがだぜ。

知恵先生は今一納得しきれていなかったようだけれども、

魅音を連れて保健室から出て行こうとした。

しかし、

魅音は「私は圭ちゃんの婚約者ですから」の一点張りで離れようとしなかい。

最終的には、

「確かに誰か見ている人は必要かもしれませんがね。お願いしますね魅音さん」

と言い残し、知恵先生は魅音を残して部屋を後にした。

ちなみに、知恵先生がいなくなったあと、

監督は俺達二人をニコニコしながら見て、

「ぎっくり腰は、筋肉の皮が、骨の間にはさまっておきるものです

さて、前原さんは、どんな体制でぎっくり腰がおきたのでしょうか？

お二人とも、随分濡れておいでしたが、あまり変な態勢でオイタをするのは

お勧めできませんよ」

そう言っ立ち去って行った。

素晴らしい洞察力だぜ。

と、褒めたいところだけどき。

監督には悪いが、ただ前に体を傾けただけで、

全然へんな体制じゃなかったんだよな。

つまりなんだ。

俺の体が硬いのが原因か。

今度から柔軟体操でもするか？

「圭ちゃん、また二人つきりになったね」

魅音は俺の手を取る。

が、ぎっくり腰で、体中の力が抜けている俺には握り返す事もできない。

「圭ちゃん、ありがとう」

…魅音

魅音は俺の拳を握りしめ

目に涙を浮かべて微笑んでいた。

ああ、畜生。こんな時に限って力を入れられないとは、

前原圭一、一生の不覚だぜ！

今すぐにも、魅音の頭を撫でて

「そんな顔すんなよ。恥ずかしいぜ魅音」って言ってやりたいのに！

「魅いちちゃん！圭一くん！」

レナの声がする。

保健室にレナが来たのか。視線をずらすと

梨花ちゃんと、沙都子も来たみたいだ。

「みー、圭一大丈夫ですか？ギックリ腰はつらいのですよ」

「しかし、ぎっくり腰ってお年寄りになるものだとばかり思っていましたわ。

圭一さんのような年齢でもなるものでございますのね」

魅音が満面の笑みでレナ達に振り返る。

「いやあくよかった圭ちゃんが無事で。

結婚前に未亡人って、本当に洒落にならない所だったよ」

「だね☆圭一くんは魅いちちゃんに感謝だね！感謝だね！」

「感謝、感謝なのです。圭一は魅一の尻にしかれること決定なのですよ☆にぱ〜」

「まあ、これにこりたら、お一人でどこかへ行くなんてお止めあそばせ。

そうでなくとも、圭一さんはわりと突っ走るクセがあるんでございますから」

このお〜好き勝手いいやがって、

でも、まあいい。俺が悪いってオチになれば、それで丸く収まるならそれで。

これは、いわばお約束ってヤツだ。

〔6日目（火）：前原屋敷：夜：前原圭一〕

結局、その日は丸一日立ち上がる事すらできなかった。

夕方ごろに、連絡を受けた親父が車で迎えに来て、俺は魅音と親父

に担がれて帰ることになった。

魅音も一緒に車に乗りこみ、家の中まで運ぶのを手伝う。

「どうやら、そのまま俺の部屋まで入りこんで看病したかったようだが、

バアさんと家の世話を無視するわけにもいかず、しぶしぶと家へと帰っていった。

ちなみに、帰り際に俺の頬にキスをして

「明日、迎えにくるからね」と部屋から出て行こうとしたので、動かせるようになっていた右手で、頭を撫でてやった。

「おう、待ってるぜ魅音」

「アハハハ、なんだ。そんなに元気なら安心だね圭ちゃん」

照れ笑いしながら、親父とおふくろに挨拶して、家から出て行く後姿を見て、

全く、可愛い奴だと思うのは、まあ、俺の恋人偏向フェルターによるものだろう。うん。

夕飯頃になって、ようやく体を動かせるようになり、ぎこちない動きで歩けるようになった。

今夜はカレーだ。

スプーンだけで食べられるようにしてくれたらしい。

ありがたい。お袋に感謝だ。

「圭ちゃん。園崎の妹さんからお電話よ。」

まだ回復していないんだからほどほどにね」

食事を食べ終わって部屋で休んでいると、

詩音から電話が来た。

どうせ、今日の俺の話をどこからか仕入れてきたんだろう。

まったく、耳ざとい事だぜ。

「やつほー☆圭ちゃん、腰、大丈夫？ギックリしたんだって？」

「ああ、詩音か。何とか体を動かせるまで回復したぜ。しかし、ギックリ腰って凄いなだな。」

全然、体が動かせなくなっちゃったぜ」

「アハハハ、ギックリ腰はクセになるらしいから、注意した方が良いで

すよ

ほら、お姉と腰の運動をしているときにグギってなったら、最悪ですから」

魅音と腰の運動って何だよ。

「まあ、しばらくフラフラで遊ぶのはナシだな。

ところで、今日はなんだ。もし笑いものにしたってんなら、明日にしてくれないか？」

「あ、ごめん圭ちゃん。そうだよね。

まあ、お姉の話を知ったんだけど、調子が悪いなら、また今度ということまで……」

「魅音のことか？何かあったのか？」

「何か。って……それは圭ちゃんの方じゃないんですか？」

「どういう意味だよ」

「だって、圭ちゃんが、悪戯心で遠回りで学校へ向かっている途中でギツクリ腰になって、

それを、たまたまお姉が発見したって、なんだかおかしくないですか？」

鋭い。

「……………」

「思うに、お姉と圭ちゃんが、ちよつとロマンスして、それでやさしくたんじやないかなーって」

「……………」

「いやいや、言いたくなかったら話さなくてもいいんですよ。大体、想像ついちゃいますから！」

どうする？

おため誤魔化しても、いい。

だけど、それだと不誠実な気がする。

……不誠実？誰に？

魅音か、詩音か、それとも俺の良心か？

「えーと、圭ちゃん？調子悪かったら、本当にいいですよ？話さなくても……」

「…詩音」

「はい」

「本当に、聞きたいのか？」

俺は、十分注意して、

覚悟を問うように聞いた。

これで、おちやらけて返すようなら

おれも、そうやって返そう。

でも、真剣に聞いてくるなら、その時は…

「…圭ちゃん。沢で何があっただんですが？」

真剣に聞いて来た、か。

わかった。なら話す。ゴメンな魅音。

「悟志の事だ」

「悟志…くん？」

「魅音は、お前に、詩音に謝っていた。俺と付き合って、

ようやく詩音が、悟志のことについてどれだけ辛い思いをしていたのかわかったらしい。」

「……………」

「だけど、詩音、お前はもう魅音のことは許している。だから魅音は苦しんでいた。」

ようやく詩音の気持ちが理解できて、どれだけ辛かったのか実感できても、

もう謝ることもできない。だって、詩音、お前はもう許しちゃったんだから」

「…そう、だったんですか。」

アハハ、バカですね、お姉。もういいって言ったのに」

受話器の向こうで、詩音が力無く声を出していた。

口ではそういつているが、詩音の心に、なにかしらの衝撃を与えたことは受話器越しでもよくわかる。

「だから、俺、その、詩音には悪いんだけど…許しちゃった」

「…圭ちゃんが、許す？」

「あ、いや、そのゴメン！もちろん、俺は詩音じゃないし、

詩音の代わりになんて全然ならないんだけどさ、魅音が苦しんでいたから

俺、とっさに…魅音を許しちゃった」

沈黙。

受話器の向こうから何も聞こえてこなかった。

長い静寂の時間が訪れた。一分、二分。五分。

俺はどうしてよいか、少し途方にくれはじめたころ、

受話器の向こうから笑い声が聞こえてきた。

「アハハハハ！全くですよ、圭ちゃん、一体何様なんですか？

私の代わりに許すって、何の、どの立場で物を言っているんですか？

全く、圭ちゃんは、本当に困った人ですわね！アハハハハ！」

予想外すぎる反応で、俺は若干戸惑う。

てつきり怒鳴られるのかと思ったのに。

「あ、いや、本当にゴメン！俺…」

「ま、いいです。許してあげましょう。じゃあ、

今度、買い物に付き合ってくださいいね☆」

「ああ、もちろんさ…いつでも大量の買い物袋もってやるぜ！」

「…それで、お姉。圭ちゃんに『許す』って言われて

なんて返したんですか？」

…え？

一瞬声が出せなかった。

俺は今日の記憶を遡る。

あの時、魅音は俺の膝枕の上で、こう答えはずだ。

「…ありがとう。って言っていた」

「そっか」

再び、少しの間が開いた。

詩音が何を考えているのかはわからない。

でも、俺はその答えを待たなければならぬはずだ。

そして、それはたぶん、間違っていないと思う。

「ああ、お姉が羨ましいなあ。そこまで丸裸の心を抱きしめる人が側

にいるなんて、さ」

「詩音…」

「悔しいけど、今日の圭ちゃんに100点あげます。」

まあ、園崎魅音の恋人としては、及第点つてところですね！」

100点で及第点つて、ちよつとハードルが高すぎないか？

もしかして500点満点とかか？

「あ、でも、勝手に他人になりかわって許しを与えるなんて、

ふとどき千万なのでマイナス70点かな？」

「うお、ペナルティが結構大きいぜ…！」

「あははは。まあ、いいですよ。今回だけは特別です。感謝してくださいよ。」

それと圭ちゃん。圭ちゃんに私から謝辞を送りたいと思います」

「…なんだよ」

「…私の代わりに、

お姉を許してくれて、ありがとう」

電話口から俺は確かに、

詩音の、魅音に対する温かい心を感じた。

## 第14話「7日目（水）A 「両手に花」

「7日目（水）：前原家：朝：前原圭一」

圭…ん…ほら、起きて、圭…ちや！

ああ、お袋か。ふああゝ

今起きるって、そんなに揺らすなっ

…もしかして、まだ調子が悪い？

いやいや、そんなことないぞ、

今、起きる。すぐ起きる。

…そう、よかった。

朝食の用意ができているから、おりてきてね。

ああ、わかってるって。

…チユ♥

「どわああああ!」

突然のキスに驚いて、飛びあがるように起きた。

何だ、今の、って、魅音？目の前に魅音がいる！

「アハハハ、圭ちゃんおはよう！そんなにビックリするなんて、

面白いなあ、来たかいがあったよ」

「え、何で魅音、お前がここにいるんだよ!」

本家のバアさんはどうした？」

「大丈夫。ちゃんとバツちゃんの朝の用意は終えて来ているから」

そ、そうなのか。

しかし、驚いた。さすがに朝から魅音が部屋の中にいると想像もつかなかったぜ。

「昨日、来るって、言ったじゃん？それと、圭ちゃん、感謝してもいいんだよ？幼馴染が朝起こしに来るっていう、夢のシチュエーションをおじさんが体験させてあげたんだからさ」

それは、どちらかといえば

毎朝迎えにくるレナの方が近いと思うが。

でも、そんなことを言ったら血の雨が降りそうなので止めておこう。



「そうそう、朝ごはんできたから一緒に食べよう圭ちゃん  
お義父様も、お義母さまも、待ってるよ」

「あ、ああ…」

今朝は、両親と魅音、俺がそろって朝食をとることになった。

親父たちは、朝、魅音がバアさんの用意をしてから家に訪れて、うちの朝食の準備を手伝った事をほめちぎっている。

「ごめんね。大変でしょうに」

「いえいえ、でも、昨日倒れた圭ちゃんが心配でしたので。

むしろ私の方こそ、朝早くから失礼させて頂いたのに、

笑顔で向かい入れて下ったお義父様と、お義母さまには感謝しかありません」

「そういう堅苦しいのはいいのよ魅音ちゃん。もう家族なんですからね」

「はい。ありがとうございますお義母様！」

全く、俺の両親の前だと

無限に猫の皮をかぶっていられるな魅音は。

腹黒梨花ちゃんもびっくりだぜ。

「圭、昨日は命を助けられた上に、今日は朝早くから見舞いに訪れてくれたんだ。

こんな良い娘は、そういない。ちゃんと魅音ちゃんに感謝して、尽くすんだぞ。」

「わ、わかってるって父さん。魅音、サンキューな！」

「こら、そんな感謝の仕方ががあるか。全く、お前は一家の主になるのだから

魅音ちゃんをみならって、礼儀正しくしなさい」

「へいへい…」

事情を知らない両親にそう言われちゃ

俺も首をすくめるしかない。

「でも、お義父様。圭ちゃんは、学校でも、集会でも、

皆をひっぱって楽しませる。素晴らしいエンターティナーなんですよー。」

なんか、褒めているのかどうか微妙な線なんだが。

しかも最後に「きつとお義父様の背中を見て育ったんですからね」とかなんとか、ちゃっかり言つて点数を稼いでいるし。

「そうだ圭」

「なに母さん」

「今日は仕事の都合で、父さんと母さん泊まりになるから、今夜適当に食べてね」

最近、親父とおふくろは仕事で忙しいらしい。

これも、魅音と俺が婚約したおかげで、仕事の依頼量と、依頼料の二つが

同時にあがったのが原因だとか。

これってあれか。

二人とも園崎家にお近づきになりたい奴らの下心を利用して商売してるってことか。

まったく、息子の婚姻にあやかつて大儲けするなんてよくやるよ。

「それでしたら、お義父様、お義母さま。

今夜は、私が圭ちゃんのために夕飯を用意させて頂きます」

魅音はそうしやちこまつていうと、お袋は「ありがとうね魅音ちゃん。そうだこれ」と家の合い鍵を魅音に渡した。

魅音は合い鍵を手に、顔を90度まげて俺を見るとニヤリと笑う。

ついに俺の両親完全攻略か。

魅音の心から「ククククク」という声が聞こえてきそうだけ。

お前は、本当に良い性格をしているよ。全く。

「あ、そろそろ時間だ。圭ちゃん、急ごう！

レナがきちやう」

そうだ。ゆっくりしすぎた。

俺は急いで、ご飯を喰い終わると、魅音と一緒に部屋に戻る。

そういえば昨日は調子が悪くて寝込んでいたので、何の準備もしていない！

服を着て、学校道具を用意しないと。

だが、部屋に入り慌てて服を着る俺とは対照的に、

魅音はテキパキと動き、部屋の中から学校道具の用意をしていく。  
いや、というか：なんでお前、俺の筆箱やら教科書やら、

置いてある場所が分かるんだ？

「クククク。圭ちゃんが中々起きてこないんで、色々見させてもらっ  
たからね。」

圭ちゃんの可愛い寝顔を見ながらの探索は面白かったよ。ま、これ  
が三文の徳ってやつだよね」

ぐわっ！俺のプライバシーは!?

「夫婦にプライバシーは無い!」

い、言いきりやがった。こいつ!

「それより圭ちゃん、髪はとかさなくて大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。いつもどおりのヘアーだぜ」

「歯は磨いた?」

「問題無いぜ」

「お薬は飲んだ?」

「いや、お魎のバアさんじゃないんだから、そういうのは無いぞ」

「じゃ…」

「おいおい、魅音。なんだお前、俺のお袋か!」

チ、チ、チ：

魅音は、人差し指を左右に振る。

「圭ちゃん違うよ。こういう場合は、こう言うんだよ」

∨ 魅音は俺の嫁! へ

おそらくゲームなら、この瞬間、

自信満々の魅音の姿を中央に置き、ピカー!という効果音の後に  
まっ黄色なフラッシュ背景が表示されていただろう。間違いない。

びんぽーん!

そんなバカなやり取りをしていたら、チャイム音があった。  
時間的にレナがやってきたに違いない。

俺達二人は急いで玄関口へと向かう。

「あ、圭ちゃん失敗した」

「なんだ、何か忘れものか魅音!」

「パンを喰わえていれば、完璧だったのに！」

「お前、こんな時に、一体何を表現しようとしているんだ!？」

玄関のドアが開くと、そこには笑顔全開なレナがいた。

あまりにも眩しい笑顔なので、可愛いモード直前なのが良くわかる。

「はう☆魅いちちゃん。圭くん。おはよー☆なんだよ！おはよー☆なんだよ！」

「おはようレナ」

俺と魅音はハモリながら挨拶を行うと靴をはく。

玄関に出迎えに来た両親に、魅音は一礼する。

「それでは、お義父様。お義母さま。圭ちゃんをお預かりします」  
そう言い終わった瞬間。

俺は右腕を魅音に、左腕をレナに組まされた。

「お、おいなんだコレ」

「くっ、くっ、くっ、圭ちゃん。今日は逃げられないよ」

女の子の二人に腕を掴まれる。

文字にすると、ピンク色かもしれないが、実際問題この状態で通学路を歩く姿は非常にシユールだ。だいたい、二人とも恥ずかしくないのか？

「みんなで話し合っただよ。圭ちゃんを一人にすると危ないから、

必ず誰か一緒にいるってさ」

1人になると危ないって。

どういうことだよ魅音。

「圭ちゃんを一人にすると、どこで野垂れ死にするかわからないからって、

沙都子と梨花ちゃんが、外にいるときは部活メンバーができるだけ一緒にいようって話を昨夜電話で提案してきてね。おじさんも圭ちゃんに一日中、ついてるわけにもいかないし、そうしようって話におちついたんだよ」

俺がベッドでダウンしてたときに、

そんな話をしていたのか。

「それじゃ、俺がレナと一緒にゴミ山に漁りに行っても良いってことか?」

「あく…というか、レナと一緒にゴミ山がOKというか、ゴミ山に行くならレナと一緒にが良いって感じかな?」

なんだ、その政治家の答弁のような言い回しは。

魅音の言葉の端々に、どことなく嫌がっている感情があるように見えるのは、

多分気のせいじゃないだろうな。顔も、引きつっているし。

まあ、仕方ない。

これも辻褄合わせってヤツだ。

第一、ぎっくり腰になったのは事実だしな。

「それは、わかった。で、魅音とレナに挟まれているのはなんで?」  
レナがニコニコして答える。

「圭一君が、また通学路を無視して変な道を歩かないように、ロックしているんだよ。」

だから☆はう。今日は三人仲良く通学なんだよ!なんだよ!

俺の信頼はどうやら地に落ちていているらしい。

言い分は理解できたが、何も両腕を掴んで登校させてくれなくてもよくないか?

これじゃアレだ。FBIに連行される宇宙人じゃないか!

「いやあく圭ちゃんも男冥利につきるよね。こんな美少女二人に腕を組まれて登校だなんて」

ニヤニヤ笑う魅音に、どう返事してやろうか。

幾つか候補があがったが、おそらくこれが一番効果的のハズだ。

「そうだよな。確かに男冥利につきるぜ! 雛見沢生粋の美少女のレナ!

将来の美人女将・魅音! 俺はもしかして、今、世界で一番の幸せ者かもな!」

魅音がレナに嫉妬する可能性もあったが、賭けだ。

ちなみに美人女将という言葉、勢いで言っただけで、特に意味は無い。

「そっか、そっか。やっぱり圭ちゃんもそう思うよね！じゃあさ、レナもつとギユつとしてあげようか！」

「はう☆圭くん、痛かったら言っただけ！」

え、ちよつと待て？

想像と反慮が違うぞ!?というか、そんなに強く掴むな！

うぎゃー!!!

二人の愛ゆ!強さに、体をボロボロにして登校してみるとちよつと登校してきたばかりの知恵先生とバツタリあう。

これはもしかして怒られるんじゃないか？

と、思ったが、知恵先生は、むしろ怒るところか、両脇に抱えられた俺を心配そうな顔をして見ていた。

「大丈夫ですか圭一君。顔色が悪いですが、まだ調子が戻っていないようです。」

無理してはいけませんよ」

…いや、先生。今日、調子が悪くみえるのは両脇にいる二人のせいです。

「安心してください先生。圭ちゃんは、私とレナがしっかりと面倒をみます」

「はう☆」

「そうですか。お二人とも、よろしくお願いしますね。」

圭くんも何かあったら、いつでも先生に相談してください。けっして、自殺なんて考えてはダメですよ」

いや、自殺って…知恵先生の頭の中で、

俺は一体どうなっているんだ？

〔7日目（水）：雛見沢分校：朝：前原圭一〕

教室の中に入ってようやく解放されたが、

その後の授業では、魅音が腕を組んでベタベタと体をすりつけてくる。

もう容赦なしだな。

「…あんまり、やりすぎるとまた知恵先生に怒られるぞ魅音」

「大丈夫。へーきだつて、ほら、知恵先生、小さい子たちの授業に集中

しているし…」

それはむしろ、こちらを見ないようにしているだけでは？

そう思ったが、魅音は少し、怯えたような顔で俺を見ている。

「あ、あのさ、こういうの…圭ちゃん、嫌？」

…お姉は怖がりな人で、あまり強く怒らないで下さいね。

詩音の言葉を思い出す。

「いや、嫌じゃないぜ。俺だってさ、魅音とはこうしてイチャラブしたいけど、

ほら、やつぱり人前でやりすぎるってのはよくないと思うんだ。それに、ほら、こうも言うだろ。

普段、自制して、はっちゃけるとときに、はっちゃける。その落差が最高だってさ」

この説得は、効果があるのかは今一自信が無かったが、

魅音は、組んでいた腕を離すと、襟を正した。

「そうだね御免。すこし、やりすぎたかもしれない。

圭ちゃんの言う通り、公私の境目はつけるべきだよね」

「ああ…」

ベタベタされていたときは、うざったいとは思ったが、

こうやって、離れられると少し寂しい。

自分自身のことながら

人間なんて、勝手なもんだぜ。

「じゃさ、体を預けるだけですますよ。それならいいでしょ？圭ちゃん？」

につこり笑って、体を傾ける魅音に、俺は何も言いかえせない。

ただ、恨めしそうに見ている知恵先生の視線だけが痛かった。

授業が終わり、放課後。

昨日は俺がぎつくり腰で部活がやれなかったの

今日はやろうという話になった。

皆は俺の体調を心配してくれた

どんな部活をやるのかを一任してくれた。

「今日は、圭ちゃんのやりたいゲームでいいよ。何にする？」

ありがたい話だが、少し迷う。どうしようか？

しばらく考えて、ふと二日前にレナと話していたことを思い出した。

「そうだ、今日はゴミ山に宝探しにいかないか？」

あの時は確か、魅音に怒られるから俺と二人つきりでは、

ゴミ山へといけないという話だった。

とりあえず、今後は俺の体の事もあるからレナと一緒にいっても問題ないだろうが、レナ自身もできるなら、俺と魅音のイチャラブを近くで見たいと言っていたし、部活メンバー全員で行くのが良いかもしれない。

レナが、沙都子と梨花ちゃんに目配りをする。

「圭一君、ゴミ山はいいけど、体は大丈夫なの？」

俺はここぞとばかりに胸を張った。

「大丈夫だぜ！今の俺なら、ゴミ山のスクラップを全て掃除してやる自信がある！」

そんな俺を見て、沙都子があきれたように口を開く。

「心配して損しましたわ。そんなに元気なら問題ありませんわね」

憎まれ口を叩きやがって！

まあ心配はしてくれたんだな。ありがとう沙都子。

俺は、沙都子の頭を撫でる。

皆は安心したようで、ゴミ山へ行く話は、そのままスムーズに決まった。

勝敗方法だが、魅音がゴミ山にある幽霊談を引き合いに出し、

「殺された工事現場の監督の幽霊が探しているという

死体の一部を探しだせば、その時点で勝利！

それ以外は、ゴミ山で一番可愛いのを探してレナに進呈した人が勝利ってどう？」

という勝敗方法を掲示した。

幽霊と死体の一部はさすがにアレだが、可愛い物を見つけると言うのは

レナにとってご褒美だ。



もちろん、レナは大賛成。  
俺達もそのルールでゴミ山へと向かう事にした。

## 第15話「7日目（水） B 「後悔と償いと」

「7日目（水）：ゴミ山：夕方：前原圭一」

ゴミ山は相変わらず、ゴミの山だった。

数多くのスクラップが山のように無造作に捨てられ、

一体何のゴミが、どこにあるのかでさせ把握できない状況だ。

話によると、ダム闘争時代：ダム建設反対派が、ダム工事を送らせるために

わざと、雛見沢や、近隣の興宮から粗大ごみや産業廃棄物を捨て去ったらしい。

ただ、実際にこの場所に産業廃棄物を捨てる会社も存在し、

ゴミ山が増えていることも時折あるという話も、前に聞いた覚えがある。

「今日は、みんなと一緒にだから可愛いものが見つかるの良いな☆はう〜」

今日は部活のメンバーと一緒にでの宝探しだから、レナは上機嫌だ。

レナは手慣れているのか単身で探し始め、

梨花ちゃんと沙都子は二人組となって動き始めた。

そして、俺は魅音と一緒に行動を開始したが：

「圭ちゃんちよつと…」

開始早々に、ゴミ山の影に誘われて抱きつかれた。

「お、おい、魅音。近くに梨花ちゃんと沙都子もいるんだぞ？」

「ククク…だからさ。早めに終わらせようよ圭ちゃん」

終わらせるって、何を…？

んっ…

魅音が俺の唇を塞ぐ。

そして唇をもぐもぐさせる。

ああ、これは俺の成分を吸い取る吸引キスだ！

おい、病気明けの体力を奪うとは本気か？

いや、厳密には病気ではないけどさ…！

「ん、んん…」

魅音は、すっかり、俺との吸引キスにひたりきついている。くそ、このままやられっぱなしじゃないぜ。

見ている、魅音！

俺は、右手を魅音の背中に回し、左手を魅音の頭にさせる。

そして、少し唇を離すと、唇を触れるか触れないかぐらいの数回行い、落ち着かせる。

「圭ちゃ…」

「目を閉じて」

何か言おうとする魅音を黙らせ、

俺は頭を撫でながら、唇に優しく触れるキスをじっくりと行う。

吸引キスで激しく求めていた魅音の体から次第に力が抜け、

俺のされるままになっている。

俺の勝ちだな魅音。

俺は唇を離すと会心の笑みを浮かべた。

だが、魅音は俺の袖をつかみ、潤んだ目で見つめてきた。

「圭ちゃん。もつと…」

訂正。

俺は負けたのかもしれない。

結局、この場所から離れたのはさらに十分過ぎたころだった。

ロスタイムも甚だしいが仕方がない。

…俺も楽しかったし。

「いい。圭ちゃん。勝つためには努力をおしまないのが我が部のモツ

トーなんだよ。

おじさんが圭ちゃん成分を取るの、いわば、車にジェット燃料を流し込むようなもの。

フル充電したからには、ここから一気に攻め立てる！二人で大勝利をめざすよ！」

普通の車にジェット燃料なんて入れたら爆発しないか？

というか、今回の部活はチーム戦だったのか？

まあ、ツツコミどころは多いが、気にしないようにするか。

世の中、突っ込んだら負けの場合も色々あるからな。

俺と魅音は手分けして可愛い物をみつけようと分かれたが、その途中で、梨花ちゃんと沙都子を発見した。

二人とも、冷蔵庫の前で佇んでいる。

一体どうしたんだ？

「あ、圭一さん…」

「どうした沙都子。調べなくて良いのか？」

「いえ、その…なんだか、入ってそうで…」

入っていそう、何がだ？

「死体が」

ドクンツ。心臓が高鳴る。

確かに、この冷蔵庫は、なぜか見覚えがある。

何故だ？いつ？ドラマか何かで？いや、違う…

「あ、あけないのか？現場監督の死体の一部があれば勝利だろ？」

冗談として言ったつもりだが、二人ともニコリとも笑わない。

それどころか、顔面蒼白になっている。

この、冷蔵庫に、死体が入っている。

ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ…

冷たい汗が流れる。

そうだ。死体が入っている。俺はそれを知っている。

そして、その死体を見つけたら、今までの日常が終わる。

バカな！そんなことが、あるわけない！

じゃあ、なんでだ？なんで、そんなことを思う？

わからない。わからない。だけど俺は“知っている”

俺は、何かに導かれるように、その冷蔵庫の前に立った。

梨花ちゃんと、沙都子の方を振り返る。

「…開けるぞ」

二人は黙ってコクリと頷いた。

俺はゆっくりと冷蔵庫のふたをあける。

そこには…

…

…

…なにも、無かった。

「圭一君、梨花ちゃん、沙都子ちゃん。どうしたのかな？」  
ぎよつとして振り向くと、

ゴミ山の上でナタを持ってたたずむレナがいた。

「いや、その…」

俺は声が出せない。

梨花ちゃんも、沙都子も震えている。

いや、まて、なんで俺達はレナを怖がっているんだ？  
これじゃ、まるでレナが…違う！そんなわけがない！

「死体がさ、入っていると思って」

上ずった声で俺はレナにそういった。

いや、おかしなことは言っていない。そうだ。

そういう話だっただろう？死体を探すって、さ。

「ああ…」そこにあると思ったんだ。わかるよ、レナ、その気持ち  
…」

わかるって、なんだよ。ソレ。

「私も、最初、そこに」ある」と思ったんだ。おかしいよね。

私も、何度もここに、調べたのに。今でも、ふと思うんだ。「ある」っ  
て…」

何故かな？何故かな？」

「思うって、じゃ、レナが殺したんじゃないのか」

俺は、とんでもないことを言った事に気が付いた。

え？俺は、レナが誰かを殺して、この冷蔵庫にいられたと思ったのか  
？

誰を？まさか工事現場の監督を？

おいおい、無茶苦茶だ。一年前に引越してきたレナが  
五年前に現場監督を殺せるわけないだろ？

そもそもレナが人を殺すわけ無いだろう？常識的に考えて！  
なら、一体レナが、誰を殺すっていうんだ！

「…なんで、圭一君、そのことを知っているのかな？」

…え？

沙都子が引きつった顔で口を開いた。

「それって、どういうことですか……？」

「どういうことって、そういうことだよ沙都子ちゃん。」

三人とも、どうして知っているのかな？もしかして……」

レナの瞳が大きく見開く

「魅いちちゃんから、聞いた……？」

奥歯がガタガタ震えだした。

手足も震えている。

一体、なんだよこれ!?

なんで、俺はレナを怖がっているんだ!

落ち着け!オチツケ!

冷静になつて、反論するんだ……!

そうさ、何も聞いていないツ!

魅音からは何も聞いてない!

俺が、そう叫ぼうとした。その時……

魅音が姿を現した。

「あれ?みんなしてどうしたのさ?」

なんて能気な声をだしているんだ!

眼の前に、ナタをもったレナがいるんだぞ、魅音、早く気が付け!

「魅いちちゃん。みんなに、お父さんの話、した?」

「いや、してないけど……どうかしたの?」

「うん、圭一君と、梨花ちゃんと沙都子ちゃんが、知っているようだったから……」

……ん?

……ん?

えっと、どういうことだ?

これは、魅音が、レナと結託していたってことか?

「そうなの?三人ともどつかで聞いた?」

俺と梨花ちゃんと沙都子は、視線を交差させた。

どう答えていいのかわからない。

だが、ここは年長者として俺が口に出すべきだろう。

「いや、聞いてはいないけど。レナが、その人を殺したって、その……」

レナが人を殺すわけないじゃん！

魅音から、そういう返事が返ってくるかと思ったら意外な答えが返ってきた。

「ああ、そうだね。確かに、あの時のレナは人を殺しそうな勢いだったしね

その時のレナの姿を思い出しちゃったのかな？」

レナがゴミ山から下りてきて、申し訳なきように頭を下げた。

「ごめんね皆。もしかしたら、レナ。皆を怖がらせてしまっていたのかも知れないね」

「えっと、どういうことだ。きちんと話をしてくれないか？」

レナが言うにはこういうことだ。

レナは昨年、両親が離婚して、父親と一緒に雛見沢に戻って来たらしい。

だが、そこで、父親は悪い女性にひっかかり、財産を奪われそうになった。

レナは、一時期真剣に悩み、本気でその悪い女を殺そうと考えたという。

「たぶん、皆がその冷蔵庫を見て死体が入っていると思ったのは…

レナがその冷蔵庫に、死体を入れるつもりだったから。だと思っ

もしかしたら、その時の情念とか、のりうつっていたのかも」

そんなことがありうるのか？

だが、俺達三人は確かに、あの冷蔵庫に死体が入っていると感じた以上、

レナの言う通り、情念なり、思念なり、生霊なりがとりついていたのかもしれない。

その後、レナは悩んだ末に、魅音と相談して父親としっかり話し合うという道を選択した。

「今だから笑い話ですむけど、当時のレナはひどかった。

憔悴しきって、本気で今すぐにも殺人をおかしかねない雰囲気だった」

「それを魅いちちゃんが救ってくれたんだよ☆」

「いやいや、おじさんは何もしてないよ。レナが気が付いて頑張ったんだよ」

そうか、そういうことだったのか。

急に肩の力が抜けた。

梨花ちゃんも、沙都子も安心したようで、その場でへたり込んだ。

「びつくりしましたわ。冷蔵を見た時の全身を駆け巡る悪寒をはつきりと感じましたもの」

「みー☆あの冷蔵庫にはレナの憎悪が封印されていたのですよ」

「アハハハ、でもね。レナもあの冷蔵庫を見るたびに思うんだ。

死体が、入っているんじゃないかって」

レナはそういって、冷蔵庫のドアを閉める。

しかし、おかしい話だ。

俺は一瞬でもレナが殺人鬼にでもなったのかと思っただぜ。

「ふえ!?レナ、圭くんをおそったりしないよ!」

「だよな!アハハハ!」

しかし、魅音はニヤリと笑みを浮かべる。

「でも、レナが襲い掛かってきたらかなり強敵だよね。

あのナタを振り回すんだから。」

「もう、魅いちちゃん!冗談ひどすぎだよ!」

レナがぶんぶん怒って、魅音を追いかけまわす。

それを見て、梨花ちゃんも沙都子も、俺も笑う。

「でもさ、そういうことがあったのなら、俺達にも言っただけで欲しかったぜ。仲間だろ?」

「ゴメンね」レナが申し訳なさそうな顔をして謝った。

魅音はそれを見てフオローする。

「まま、でも圭ちゃん。家族内の事だから話をしたくなかったのはあると思うよ?」

それに、もし手に負えなくなったら、きつとみんなにも話をしていたはずだよ」

「でもさ…」

たしかに家族内のことで、あまり立ち入ってもらいたくなかったの



かもしれないが、

殺人を意識するほど追い詰められていたのなら、話をして欲しかった。

もちろん、魅音に話をして解決したのってのはあるかもしれないけど。

それでも、頼られなかったのは少し悲しいよな。

「仲間なんだから、隠し事は無しにしようぜ！」

沙都子はその言葉を聞いて笑った。

「あらあら、圭一さん、ご立派なことですけど、

圭一さんは隠し事は全く無いんですの？！」

「もちろん、俺は……」

ドクンッ……

沙都子の問いに、俺の心臓は大きく高鳴った。

瞳孔が大きくひらいて、全身から大量の冷や汗が出て止まらない。

「圭一さん？」

ある。

そうだ。俺には“ある”秘密が。

俺は口を塞いだ。

胃液が逆流する。止まらない。

先ほどの冷蔵庫の後ろに回ると、四つん這いになって胃の中の物を全て吐き出した。

「圭ちゃん、どうしたの!？」

見るな、魅音！ダメだ！、お前にだけは見せられない！

俺の汚い部分は、魅音だけには！

……だけど、分かっているだろう？圭一？無理だって。

俺の中の俺が眩く。

お前は、過去に罪を重ねた。

その報いを受ける時がきたんだ。

「やめろ……」

なあ、わかっていたはずだろ？

一度罪を犯したのものは、決して逃れられない。

「やめろ!!!」

涙が止まらなかつた。自分の過ちに、愚かさに絶望した。

この苦しみはわかっている。今の俺が幸せだから。

だから、その幸せを逃したくなくて、それが怖くて。

苦しいんだ。でもダメだ。気が付いてしまった。もう終わりだ。

いつかバレるのなら、今、ここで、

まだ結婚しないうちに伝えるしかない!

魅音が困惑気味に俺の背中をさする。

「圭ちゃん、どうしたの!? また調子を崩しちゃった!

御免、それならゴミ山になって連れてこなければ…」

「違うんだ。違うんだ魅音」

俺をおもんばかり魅音の顔が眩しい。

数分後に失うこの顔を眩しい。

だけど、もう、後には引けない。

俺は、魅音には相応しくない男だと気が付いてしまったのだから!

「俺は、お前と結婚する資格なんて無いんだ」

「…え?」

「すべて話すよ。俺の隠し事…全部。」

雛見沢に引越してきた理由も」

俺は頭が良かった。勉強をすればするほど人に褒めて貰えた。

だが、それが途中から当たり前になり、誰も褒めて貰えなくなった。

ただひたすら勉強を行うだけの日々に、俺はストレスが溜まって

いった。

そんな時だ。エアガンで、人を襲う楽しみを覚えたのは、

自分より小さい子供にエアガンを発射し、怖がらせるのは楽しかつ

た。

エアガンで襲う不審者情報が広がり、皆が右往左往する姿は痛快

だった。

そんな時だ。俺の撃ったエアガンを目にあたった女の子が、倒れ、

苦しんだ。

この時、ようやく自分がやったことの意味がわかったんだ。

自分の愚かさに震えおののき、それでも自分自身で決着をつけることができず。

俺は、両親に連れられて自首をした。

「……………」

「…魅音、すまない。本当はお前と結婚できるような人間じゃないんだ。

俺は、屑でみじめで、独りよがりなだけの…ただの…クソ野郎だったんだ」

「……………」

「でも、それが怖くて、知られるのが怖くて。

魅音と一緒にいられなくなるのが怖くて、俺…」

そうだ。無意識に記憶を封印していたんだ。

本当は、もっと早くに言うべきだった。

婚約までして、あんなにも口づけして魅音を穢してしまった。

そうなるまえに、俺はこのことを話すべきだったんだ。

「…魅音、お前を穢してごめんな。

俺は、お前の側にいられるような人間じゃない

だから…この婚約は…」

「知ってた」

…え？

「全部知っていたよ、圭ちゃん」

それって、どういうことだ？

全部って、いつから…

「バツちやがさ。圭ちゃんを気に入って、興信所で調べさせたらしい。

沙都子の件で、本当に婿養子にしたいって、考えてたみたい。

まあ、おじさんの周囲にいる仲の良い男子。つてのも理由かもしれないけれど」

え、ちよっと待ってくれ、

じゃ、魅音は全部知っていたうえで、俺と付き合う事を決めたのか？

「うん」

じゃあ、バアさんも、

俺の過去を知った上で付き合うのを許可してくれたのか？

「そうだよ。バツちゃんも…全部知った上で、許可してくれた」

なんで、なんでだよ…

こんな屑みたいな人間に、どうして。

「バツちゃんは言っていたよ。人間は倒れる時がある。でも立ち上がる  
ことができる。」

問題は、その立ち上がり方だって」

……

「圭ちゃんはさ、雛見沢に住んで、それで沙都子や…

みんなの為に尽くして、戦ったわけでしょ？

やっぱり大事なものは過去じゃなくて、今なんだと思う。

だから、大丈夫だよ圭ちゃん」

魅音…

「そうですね圭一さん。幾ら雛見沢に来る前の圭一さんが善人でも、  
も、こちらにきて

嫌な奴でしたら、相手にもしませんわ」

沙都子…

「圭一、過去の罪は一生背負うものなのかもしれません。でも、それを  
忘れずに

正しく生きて行こうとするのなら、それは誰にも否定されないもの  
なのですよ」

梨花ちゃん…

「圭一くん。みんな、誰もが人に言えないようなことがあると思うよ。  
誰も生きていれば綺麗に

生きていけないと思う。でも、みんなそれを乗り越えて生きている  
んだよ。きつと」

レナ…

俺は、魅音に抱き着くと嗚咽した。

「ごめん。ごめん。ごめん…」涙があふれ、何度も御免と謝り続けた。  
それが、誰に、何について謝っているのか、自分でもわからない。

ただ、無性に謝りたかった。

そんな俺の背中に、魅音はそつと手を差し伸べた。

「圭ちゃん。圭ちゃんがさ、昨日、やってくれたことを…私もやってあげるね…」

「魅音？」

「圭ちゃん、圭ちゃんの罪を許せるのは、圭ちゃんが被害をあたえた人達だけだと思う。」

「だから本当の許しは与えられないし、もしかしたら許しは永遠に与えられないのかもしれない」

「……………」

「でも、私は圭ちゃんを許す。圭ちゃんのやってきた全てを私は許す。」

「圭ちゃんがもし、苦しくて、せつなく、辛くなった時…私も、その半分の背負う」

「一生、私も背負い続ける。だから圭ちゃん。私と一緒にいて、ずっと」

魅音の優しい言葉に俺は胸から、温かな感情が込み上げてくるのを感じる。

俺に寄り添ってくれる嬉しさと、申し訳なさ…とてつもない安心感で、自分の心が満たされ、外にまで溢れていくのを感じる。

「そうだ。俺は、今、魅音に心をさらけ出した。」

「そして、それを優しく魅音はその手で受け止めてくれた。」

「この心に広がる温かさは、」

「魅音がその手で包みこんでくれた温もりなんだ。」

「魅音、お前ってヤツは…」

「…本当に、俺なんかでいいのかよ魅音？」

「こんなダメ人間を…夫なんかにして…後悔しないのか？」

「ちがうよ。圭ちゃんじゃなければダメなんだよ」

「園崎魅音の夫は、前原圭一。これはもう決めた事なんだ。」

「誰でも無い私が。園崎魅音が決めた事なんだから」

「チクショウ…なんで、こんなにいいやつばかりなんだよ。」

「魅音、レナ、梨花ちゃん、沙都子…そして、お魍のバアさん…」

みんな、みんな、なんでこんなに温かいんだ。

「ね？圭一君、言ったでしょ。お麴さんは、本当はとっても優しいんだって！」

レナが笑っている。

梨花ちゃんの、沙都子も笑っている。

そして、魅音は優しく俺を見つめている。

ああ、なんて眩しい。世界はこんなにも暖かだなんて、俺、初めてしっただぜ。

「魅音、こんな事されたら、俺、お前のことが好きになりすぎちゃうだろう

。旦那を惚れさせてどうするんだよ」

「お、自分も同じ事をされて、どれだけおじさんを好きにさせてきたか、

やっと、わかったみたいだね。ようやく同じ土俵に上がったみたいで、嬉しいかぎりさ」

俺は笑った。魅音も笑った。皆も笑った。

ゴミ山で笑い声が響いた。

最後に魅音は、俺の耳元で、俺だけに聞こえる声で呟いた。

「安心していいんだよ。」

もし、圭ちゃんの過去を暴く奴がいたら…全員消してあげるから、  
さ」

第16話「7日目（水）C」I LOVE YOU」

「7日目（水）：前原屋敷：夜：前原圭一」

ゴミ山でのゴタゴタに時間がとられ、日が暮れてしまったため今日の部活は次回持ち越しということで解散となった。

俺は魅音と一緒に、そのまま自宅へと向かう。

魅音は時間が無いらしく夕飯を作り終えたら、園崎本家へと帰るらしい。

買い物はしなくて良いのか。と聞いたら

「今朝、冷蔵庫に何が入っているか全部把握したから大丈夫だよ圭ちゃん」

と答えた。

さすがだぜ魅音。

朝食の時点で夕飯の用意を考えているとはな。

家に入ると、さっそく魅音は夕飯作りを始めた。

俺も何か手伝いたかったが、魅音からは

「ありがとう圭ちゃん。嬉しいよ。」

でも、今日は、いいかな？時間無いし。また今度お願いするね。

そうだ。食器だけ出してもらっていいかな。あとご飯の用意も」という返事をもらった。

その言い方、まるで俺が手伝うと、料理の時間が増えるみたいだな。

だが否定できるほど間違っていない気もするので「おう」とだけ答えて、

食器の用意と、ご飯の盛り付けをおこなう。

じりりーん。じりりーん。

一通り食器の用意が終わった時、

電話の着信音が鳴り響いた。

「あ、圭ちゃん。電話、お願い」

「任せとけ」

電話に出ると、お袋だった。

「ごめんね圭一。どうも話が長引きそうなの。明日も帰れそうにない

わ

「そうなんだ」

「それでなんだけど、魅音ちゃんに代わってもらえる？」

お袋からの電話を魅音とかわり、食堂に入る。

すでに、食卓には二人分の料理が置かれているが椅子に座って魅音を待つ。

「はい。お義母さま。圭ちゃんの面倒は、私がしっかりと見させていただきます」

どうやら明日も魅音のお世話になりそうだな。

電話を終えた魅音が戻ってくる。

「ありや、待っててくれたの？先食べててくれても良かったのに」

「そういうわけでにもいかないだろう？食べようぜ魅音」

大皿に置かれた野菜炒めに箸を伸ばし、口に入れる。

「どう？美味しい？」

間一髪聞いてくる魅音。

俺も反射的に返事をする。

「美味いぜ！」

「…よかった」

魅音の顔がほころぶ。

口に入れた瞬間に味がわかるわけがないのだが、

俺は魅音の料理が美味い事を知っているので気にしない。

そして実際に味わってみると、うん。美味い。

「魅音は良い嫁さんになるよな」

「ふえ…そ、そうかな…」

「うんうん。きつと結婚した相手は幸せだと思うぜ」

まあ、その結婚相手というのは俺なんだけどさ。

「あ、アハハハ。」

うん。そうだね、がんばるよ圭ちゃん」

二人で笑いながらする食事は楽しい。

だけど、今日はそこでおしまいだ。

食器洗いは俺に任せて、



魅音は早々に荷物をまとめて玄関へと向かった。

「じゃあ、圭ちゃん、もう、帰るから。」

戸締りチェック忘れないでね。あと、電気の消し忘れも気をつけて」

「ああ」

「明日の朝は、時間無くてちよつとこれないから、冷蔵庫にある

納豆を食べて。お昼は用意してくるから安心してくれていいよ」

「ありがとうな。助かるぜ」

「それと、面倒だからって、お風呂に入るのもわすれないでよね。」

髪と体を洗うのを忘れちゃダメだから。忘れたらエンガチヨだよ」

「おう」

「あと、宿題と明日の用意も。ちゃんと教科書をカバンに入れておくんだよ。」

あとご両親がいないからって、夜更かしは厳禁！美容の大敵！わかった？」

「…なんか、本当、お袋みたいだな」

「クククク…圭ちゃん、朝も言ったよね？」

「ああ、そうだったな」

＜魅音は俺の嫁！へ

本日二回目の、エフェクト効果音有り、

フラッシュ画像表示だ。

「あ、それとも圭ちゃんって

自分のパートナーを「ママ」とか言っちゃうタイプ？」

パートナーの呼び方？

考えた事も無かったな。

夫婦によつてはパパとママと言っているのは知っているけどでも、それって子供がいて、両親を認識させるためにたために行う家庭の話じゃないか？

「まあ、それはおいおい…一緒に住むようになってから考えようぜ」

「そだね。今、決めちゃうと、楽しみがなくなっちゃうし」

魅音が靴を履き終わった。

これで、もうお別れだと思うと名残惜しいぜ。

「じゃあ、圭ちゃん。また明日」

「ああ、今日はありがとうな魅音」

「アハハハ、夕飯ぐらいいつでも作ってあげるよ」

「いや、それもあるんだけどさ…その…」

今日一日のこと…全てさ、ありがとう」

「…圭ちゃん」

魅音が俺の手を取る。

「書類上だと、まだ結婚はしていないけれどさ…」

圭ちゃんにプロポーズされたあの時から、私は夫婦だと思ってる。

だから、さ。圭ちゃんも何かあったら、いつでも頼ってくれていいんだよ。

もしかしたら、何もできないかもだけど…

それでも、きつと、圭ちゃんの苦しみや悲しみを半分にしてあげられると思うから…」

「……」

……………

ありがとう魅音。お前は、俺の…最高の嫁だぜ」

どちらともなく顔を近づけ、キスをした。

できれば抱きしめてやりたいが、もうタイムアップだ。

「それじゃ、いくね。」

圭ちゃん。愛してる」

「ああ、俺も、愛してる」

魅音は、元気に手を振り、ドアの向こうに走り去っていった。

そして姿が見えなくなると、急に気恥ずかしさが沸き起こった。

おいおい、なんだよ愛しているって…

俺、今、すげえ恥ずかしい事いつてなかったか？

考えるな。考えたら負けた。

クツソ、魅音の奴…どんどん可愛くなりやがって。

そろそろ、俺の手に負えなくなってきたか？

女神か？女神なのか？魅音は！

さてはラクシユミか!? 弁天様なのかよ!!

「…いや、待て。」

そういうえば、弁天様って離縁の神様だったような」

今の流れは忘れよう。うん。

とりあえず、風呂に入って髪と体を洗おう。

明日魅音にエンガチヨされると困るからな。

「7日目（水）：前原屋敷：深夜：前原圭一」

夜更かしは美容の大敵。と言われたが、中々寝られず

マンガを読んでいたら、午後11時を回っていた。

さすがにそろそろ寝ないとマズいよな。

と思いはじめて矢先、電話の音が聞こえてくる。

こんな夜中に誰だ。魅音か？

「こんばんは圭ちゃん。まだ起きていたんですか？

早く寝ないと明日の朝つらいですよ？」

この喋り方は詩音かよ。

「そういうお前だって起きているじゃねーか。

なんだ。何かようか？」

「アハハハ。今日の園崎魅音はどうだったかな…って思いまして」

なんだ。昨日も話もしたのに、今日も聞きたいのか。

二人って、本当に仲良しだよな。

「まあ、その…アフターフォローって大切ってことですよ！

それで、なんですけど、どう…です？」

「どうって、何がだよ」

「ほら、最近、すっごく攻めの姿勢じゃないですか。

そういうのを嫌じゃないかなーって思っ…少し気になったんで

す」

「確かに。告白した最初はしおらしかったのに、婚約が決まってか

ら

一転攻勢って感じだもんな」

「…圭ちゃん的には、しおらしい方が好きですか？」

「……………」

「圭ちゃん？どうしました？」

なにか違和感があるな。

たしかに口調は詩音なんだが、言い回しが詩音らしくないというか。

詩音は口調は優しくても芯がある強い感じで話す。

こんな儂いようなしゃべり方はしない。

最初に出会った時は確かに、こんな感じだったけど、

あれは俺をおちよくるためにやっていたはずだ。

これじゃまるで詩音に化けた：

…いや、さて、そういえば一度も自分を詩音とは言っていないぞ？

もしかして、魅音なのか？

「もしもし。圭ちゃん、聞こえていますか？」

「ああ、聞こえているぜ。ちよつと考えていたんだ」

まあ、どっちでもいいか。

俺は自分の心に素直に言うぜ？

しつかりときいてくれ。

魅音、いや詩音。

「…しおらしい魅音と、攻めの姿勢の魅音なんだが

正直に言って良いか？」

「…はい」

「どっちも最高だ！」

「…え？」

「しおらしい魅音。それは日本古来のつつましく、お淑やかで、奥ゆかしい

まさに日本の誇る大和撫子を彷彿とさせる存在だ！正直、俺は男子の三步後ろを歩くべき

なんてのが今一よくわからなかった、おしとやかな魅音みて、魂で理解した！

これが、そう日本の誇る女性の真の有り方だと！」

「……………」

「そして、攻めの姿勢の魅音！いつもの魅音に恋愛という要素が加わり、そのパワーアップは当社比200%！部活のモットーである、一位をめざすための努力を恋愛に置き換えた事により、様々な手段で俺に訴えてくる姿は、もはや感動ですらある！だって魅音が胸をあててくるんだぜ!?この誘惑に勝てる男なんているか？いや、いない！それが、本来惚れている俺ならなおさらだ。魅音はどちらかといえば恥ずかしがり屋だと俺は思っている！しかし、魅音はその羞恥心を乗り越え、俺にアプローチをしてきた！これを受け止められずに、なにが男子だ！何がヤマトオノコだ！」

「……………」

「そして、その二面性をあまなく俺に見せてくれることにより、これは壮絶なる相乗効果を生み出し、大きなギャップ萌えをも生み出している！そう、これは新たな新時代の美少女のありかたといえるのではないだろうか!?そなわち、それはツンでありデレでもある、いわゆるツンデレといわれる落差から生み出される可愛らしさの境地を魅音は「しおらしさ」と「攻め」という姿勢で獲得したのだ！すなわち、お菓子で言えば、一つで二度おいしいと言う事であり、魅音はどこをとっても、俺にとっては最上級の甘味、すなわち極上スイーツと言えるだろう！ありがとう魅音！俺の嫁になってくれて！俺は、今も、高らかに言いたい！魅音は俺の愛すべき最高の嫁であると！」

「……………」

俺は一気にまくし立てた。

ただ魂の赴くままにしゃべった。

もちろん、これらの評はただの独りよがり

他の人にとっては全く感じ得ないモノかもしれない。

しかし、それでもいい。

好きとは、本来その人が求める魂の形なのだ。

ここに、俺の好きが具現化した魅音がいる。

それは、他に無い確かなものなのだ！

「……………」

「……………」

返事が無い。

いや…

「…ふえ」

「ふえ？」

「ふええええええ!!!!圭ちゃん、私が電話に出ていると知ってて言うてるでしょ!!」

この、鬼!悪魔!閻魔大王ツ!!」

酷い言われようだな。

しかし、まあ、予想通り魅音だったか。

「あれ?もしかして、詩音じゃなくて魅音だったのか?」

いや、全然、全く、パーフェクトにわからなかったぜ!」

「嘘だツ!絶対に嘘だ!嘘!嘘!最初から分かっていたくせに!

この嘘つき!詐欺師!ペテン師!バーカ!バーカ!」

ちよつと待て、なんで最初に俺を騙そうとした魅音に

嘘つき呼ばわれされなければいけないんだよ!

そしてバーカ!バーカ!つて、お前、小学生か!?

そこまで言うならわかった。

魅音、お前を修正してやるぜ!

「…なあ、魅音。お前に二つ言わなければいけないことがあるんだけどな」

「なにさ!」

「一つは…なんで、詩音の真似なんてして電話をかけてきたんだ?」

「ふえ!?!」

ふえ、じゃない。

「まさか、また、詩音の真似しないと俺と話せない。とかじゃないだろうな?」

「ち、ち、ち、違うよ!ほら、なんていうか、いつも雰囲気かえてみよるかと思つてさアハハハ!それにおじさん、電話中、一度も詩音だつて名乗って無いよ!け、圭ちゃんが間違えただけじゃん!」

確かに一度も自分で詩音とは言っていないな。

ま、いい。そこは。

「じゃあ、そこは良しとしよう。そしてもう一つ…

魅音、誤解しているようだが言うぞ」

「な、なに…?」

「今の話は、相手が、詩音でも〴〵する〴〵」

「うぎやあああああああ!!!」

おもしろいぜ魅音。!!!

きつと電話の向こうでゴロゴロ転がっているんだろうな。

受話器の配線がきれなきやいいけど。

「な、魅音。俺がどう思っているのか気になるってのはわかる。

でも、なにも、こんな遠回しな言い方しなくてもいいんだぜ?

玄関口でさ、愛してる。って言いあつた仲なんだしき。」

さすがに自分で言ってる。顔が赤くなってきた。

思い出すたびに、やっちまった感が半端ない。

「ひああああ、圭ちゃん!タイム!それタイム!!!」

それ言ってる玄関から出た後、もう恥ずかしくなって、

まともに顔、あげてらんなかったんだから!」

「なんだ。魅音も、恥ずかしくなったのか。アハハハ安心した。

俺だけじゃなかったんだな」

「け、圭ちゃんも…?」

「おう、魅音が出て行った後、すっげー恥ずかしかった」

「…そ、そうなんだ。あはははは」

声に落ち着きに戻ってきた。

やれ、やれて手間のかかるマイ・ワイフだぜ。

「というわけで魅音。」

俺は、そのままのお前が好きだ」

「…うん」

「だから、今度は直接聞いてくれよな。

また詩音の姿になって腹の探り合いだなんてゴメンだぜ?」

「…うん、わかった。ゴメン圭ちゃん」

「あははは。そういうしおらしい魅音も大好きぜ」

「…でも、そのさ。」

また、とつさにこういうバカなことやったりしても、嫌わないでいてくれる、かな？」

それこそ、バーカ。だよな。

魅音、お前を嫌うわけ無いだろ？

「最大の努力を園崎魅音に要求する！が、ダメな時は仕方ない。

詩音でも、魅音でも、好きな真似してどんとこい。ただ、どんな対応しても恨むなよ

俺はそんなに器用じゃないからな」

「圭ちゃん…ありがとう。」

その、私も好きだから。エへへへ…」

最後の言い方は、詩音とも魅音とも判別がつかなかった。

でも、言い方なんてどちらでもいい。俺は魅音が好きだ。

それはかわらないことなのだから。



## 第17話「8日目（木）A「先生転倒」

「8日目（木）：通学路：朝：前原圭一」

朝起きると、俺は魅音に言われた通りに冷蔵庫を開けて納豆をとり出した。

コンロの上には昨日魅音が作ってくれたみそ汁が入った鍋もあったので温める。

これで海苔があれば完璧だったが、見つからなかったのもそのまま頂くことにしよう。

うむ。ご飯、納豆、みそ汁。シンプルだが完璧な日本の朝食だ。

丁度出かける用意が終わった所にレナが迎えにきたので、靴を履いて一緒に出掛ける。

昨日が言った通り、朝は忙しかったんだろう。

いつもの待ち合わせ場所に魅音がいない。

魅音が待ち合わせ場所にいなかった場合は、

先に学校に向かっても良い事になっているが、俺は魅音が来るまで待つことにした。

最近、魅音は俺の為に重箱三段ぐらい昼飯を用意してくれている。

これがいつまで続くのかはわからないが、今日もそうだとしたら走って持つて行くのは大変だろうしな。

「レナは遅刻するとまずいから、先、学校へいってろよ」

「圭一くんが待っているなら、レナも待つよ。」

圭一くんを一人にするわけにはいかないからね」

ありがとうなレナ。

しばらくして、息をあげて魅音がやってきた。

やはり重箱三段ぐらいの弁当を持ってきている。

「ゴメン、圭ちゃん！レナ！待った!?!」

「おう、待ったぜ！その弁当をもってやるから貸してみろ！」

「結構重いよ。大丈夫!?!」

重箱は風呂敷に包まれているが、上の方をつかんで走ったら、中身がミキサーみたいになっちゃう。

なので走るのなら重箱の下の方を持つしかないが。  
ズン…

おう、結構ずつしりくる重さだ。

魅音、お前、ここ最近毎日こんな重さの弁当を持ってきていたのか？

そういえばレナも凄い量を持って来るときもあるよな。

雛見沢住民の基礎体力は大したもんだぜ。

この量を持って走るのは大変だけど、

泣き言なんていつてられない。

「余裕だぜ！何しろみんなで食べる弁当だからな！」

俺のために作ってくれた弁当といっても、

一人で全部食べるのではなく部活の仲間で食べる。

お昼はそれぞれの仲間が弁当を出し合うピツフェ方式だ。

つまり、各々、持ってきた弁当を好き勝手につまんで食べるのが俺達流。

この俺の腕にある重箱三段の弁当は、俺のものであって、俺のものでは無い。

いわば皆の弁当なのだ！

だからこそ、弁当の中身はぐちゃぐちゃにならないように、なるべく死守しなければならぬ！

「いそごう！魅いちちゃん、圭くん！遅刻するよ！」

レナに促されて俺達は走る。

魅音と腕を組めないのは残念だが、

そんなことを言っている余裕はさすがになかった。

俺達が教室に入ると、チャイムが鳴るのは、ほぼ同時だった。

知恵先生は「遅刻は厳禁ですよ！」と言っていたが、一応セーフにしてくれたいらしい。

助かった。

しかし、走ってきたので、相当弁当は上下に揺れた。

中身を空けてみるのが、少し怖いぜ。

梨花ちゃんは激しくゆれたであろう弁当を撫でる。

「きつと、ぐちやぐちやのドロドロでジュースになっているのですよ☆」

梨花ちゃんはさらりと怖い事を言う。

「8日目（木）：雛見沢分校：朝：前原圭一」

「圭ちゃん。いい…?」

先生！ちよつとトイレにいつてきます」

「なんだよ…うおっ…!」

授業が開始されると、早々に魅音に教室の外に連れ出された。階段の裏手に引きずり込まれて、体を頬擦りされる。

「お、おい…魅音。今日はコレするのが早く無いか?」

「いや、だつてさ。今朝は会えなかったし、手も繋げなかったからおじさん、深刻な圭ちゃん成分不足なんだよ」

だから、その圭ちゃん成分つていうのは何なんだ。

とはいえ、抵抗しても教室に戻るのが遅くなるだけなので、体を優しく抱きしめて、頭を撫でてやる。

色々言うが、俺もこうして魅音を抱擁する瞬間は好きだ。

魅音に対する愛しさが込み上げて来る。

「早くしないと知恵先生に怒られるから、ほどほどにな魅音」  
「ん〜わかつてる。もうちよつと〜」

わかかつてる。というわりには、なかなか離れない。

そうは思うものの、俺も一度抱きしめた魅音を離したくはない。お互いの利害が一致した結果の抱き合い。

とは言えば聞こえが良いが今は授業中だ。早く戻らないと。

困ったぞ。その時…  
ガタツ…!

音がした。

「……………」

誰だ、知恵先生!?

知恵先生がこつちを見ている!

「あ、いや、先生これは…」

やばい!怒られる!

すう…

……バタ

あ、倒れた。

……つて、ええええ!?

俺と魅音は大慌てで知恵先生を保健室に連れて行く。

当然クラスも大騒ぎとなり、

入江診療所に電話して、監督を呼ぶ事態へと発展した。

クラスメイトによれば、俺達が戻ってくるのがあまりにも遅いので、

知恵先生が何かあったのかと探しに来てくれたらしい。

……魅音とのロマンスに夢中になりすぎて

時間感覚がおかしくなってしまうっていたなんて。

とんだ大失態だぜ。

さすがにここまでくると、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

事態が一段落すると、俺と魅音は

校長室に呼び出され、海江田校長先生から静かに諭された。

「君達が婚約しており、仲が良いのは周知の事実である。

だから、君達が仲睦まじくしていることに、何かを言うつもりはない。

ただ、知恵先生を悲しませないで欲しい」

頭ごなしに怒鳴られるより、はるかに効いた。

結局、知恵先生が目を覚ましたのは、お昼近くになってからだだった。

ベットから上半身を起こした知恵先生の横で、

俺と魅音は、ちよこんと座り頭を下げる。

「その……御免なさい。知恵先生！俺が、悪いんです！」

「ううん。圭ちゃんが悪いんじゃないんです。私が悪いんです！」

俺と魅音は交互で謝り続けた。

それを見ていた知恵先生は微笑んで、俺達の手をとる。

「先生は、わかっていますよ…」

魅音さんは、圭一くんの心のケアをしていたんですね。」

……え？

「圭一君は沢で自殺を考えるほど、つらかったのですよね。

それを魅音さんはわかっていたからこそ、ああやって

積極的なコミュニケーションをとっていたのですよね？」

…どうやら、知恵先生の頭の中では、

あのギックリ腰事件は俺の自殺未遂だと決定されてしまったよう  
だ。

そういえば、昨日も自殺しないように心配してくれていたっけ。

実際は違うんだけど。

ただ、それを否定すると余計に面倒な事になりそうなので、

俺は黙って聞くしかない。

魅音が頷く。

「…この何日間、圭ちゃんは凄く大変なおもいをしてきたと思います。

私は、圭ちゃんの婚約者として、ううん。妻として。圭ちゃんに少  
しでも

人のぬくもりを与えられたらって考えて、こんなことをしてしま  
いました」

魅音、お前…凄いな。

しかも、涙まで浮かべてやがる。

知恵先生も、

なんか感化して目をうるましているし。

「ええ、わかっています。園崎さんは優しい人ですから。

でも、その行為は多くの人に誤解を与えてしまうかもしれません。

この学校には小さな子たちもいます。

今後は、なるべく、ああいった行動は、学校を終えてからにしまし  
よう、ね？」

俺と魅音は小さく「はい」と言って頭を下げた。

監督が保健室に来たので、入れ替わりに離れ、ドアを閉めると、

知恵先生の号泣する声が聞こえてきた。

—私は、私は、教師失格です！園崎さんが前原くんのケアをしてい  
るのを見て…

バツがわるくなった俺達は、そそくさと教室へと戻った。

「8日目（木）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

ほとんど勉強らしい勉強もせずに、

お昼時間へと突入した。

走って持ってきた重箱三段の弁当は、予想を裏切らなかつた。

この場合の予想を裏切らないと言うのは、つまり中身は散乱してぐちやぐちやに掻き混ぜられているという意味だ。

「見た目はあれだけど、食べられるから」

魅音は、そういうと煮物と漬物が混ざりあつてのつかっている

タマゴ焼きをお箸で切つて、俺の前に出した。

パク。

俺は食べる。甘くて美味い。

魅音に食べさせてもらっている俺の姿を見て、

すっかり沙都子は呆れている。

「また、魅音さんに食べさせてもらっておりますの？」

本当に、圭一さんはお子様ですね」

しかたが無いだろ、目の前にタマゴ焼きを出されたら

食べるしかないじゃないか。

「圭ちゃん。あーん」

パク。

さらに魅音が摘まんで目の前に出してきた煮豆を口に入れる。

出されたら、食べる。

もう条件反射。パブロフの犬だな。俺。

でも目の前で、俺に食べさせて喜んでいる魅音の顔を見ると、

これで良いかって気分になつてしまう。

うん。やっぱり犬だな。

色々な意味で。

レナが重箱の煮物に手を出してため息をつく。

「でも、さすがに今回はやりすぎたよね。

魅いちちゃんと、圭一くん、仲が良いのはいいけど、

少し自重した方が良くかも」

梨花ちゃんも同意する。

「知恵が、イチヤラブを見てショックで倒れるなんて  
今までの、どの世界でも見た事無いのです。

もう少し、セーブするべきだと思いますよ。みー」  
確かにその通りだ。

人のイチヤラブを見てぶっ倒れるって、  
なかなかあるこっちゃやない。

が。それに対して、当の元凶の魅音は  
口をとんがらせて抗議した。

「そうはいうけどさ。おじさんもちゃんと考えて圭ちゃんに甘えてい  
るんだよ?」

今回だって、階段の裏に隠れてやったしき。むしろ、覗きにくる皆  
が悪いんじゃないの?」

お前、罪悪感ゼロか。

3みたいな口しやがって。

「そういう圭一さんだって、どこか他人事ではございませんの?」

魅音さんの恋人でいらっしやるのなら、その行動をきちんと教育す  
るのも

パートナーの勤めではございましてよ?」

ぐっ：沙都子に、沙都子に、正論を言われた…!

なんか、沙都子に正論を言われると悔しいぜ。

「…圭一さんにそう思われると腹ただしくはございますわね」  
心を読むな。

エスパーかお前は。

とはいえ、俺も言うべきことは、

きちんと言うべきだろうな。

「なあ、魅音。そういえば、お前、『圭ちゃん成分が足りない』  
とか言っていたけど、あれ、なんなんだ?

あれを抑えれば、今回の悲劇を防げたんじゃないか?」

『圭ちゃん成分』って、何かな? 何かな?」

おい、なんでレナが身を乗り出してくるんだ。

しかもちよつとカワイイモードが入っているぞ。

魅音はコホンと咳をすると

俺達を見渡し、親指を立てる。

「圭ちゃん成分っていうのは、

おじさんに必要な三大欲求のことなんだ。」

「…えっと、なんだそれ？」

「つまり、簡単にいえば、おじさんには

食欲、睡眠欲、圭ちゃん欲つてのがあって、

それが足りないと、圭ちゃん成分を補給しなければならぬんだよ」

「おい、おい、魅音。人間の三大欲求は

食欲と睡眠欲と…」

…性欲。

俺は手で口を閉じると、すかさず沙都子がフォローが入った。

「魅音さんの場合は、ゲーム欲だと思いましたがわ」

「みー☆今の魅いは、ゲームより、圭一欲なのですよ」

ナイス援護だぜ沙都子！

俺は沙都子の頭をなでる。

レナに視線をうつすと、激しく息をあらげて興奮していた。

「け、け、け、圭ちゃん欲なんだ！魅いちちゃんには、圭ちゃん欲が必要なんだ！☆はう〜」

実に楽しげだ。

沙都子は俺に頭をなでられつつ、目を三白眼にして口を開く。

「想像以上に下らない理由でございますわね。それって、

つまり、圭一さんに甘えたい。ってことではございませぬの？」

「沙都子は最近、圭一に甘えられないので、圭一成分が不足しているのですよ☆にばー」

「り、梨花！余計な事は言わなくてもよろしいのですのよ！」

ああ、そうか。近頃沙都子が少し尖っていたのは

俺の成分が足りなかったのか。よし、よし、今日は念入りに撫でてやろう。

「そっか、沙都子。圭一にーにーがいっぱい撫でてあげるぞ☆」



「そ、そんなことをされても、全然嬉しくなんてないんでございますから……!」

素直に頭を撫でられているのに、口先だけは威勢がいいな。

おいおいツンデレか沙都子? お前未来に生きてるぜ。

それを見ていた魅音が体を寄せてくる。

「ねー圭ちゃん。私にもー」

「魅音には、さつき、したばかりだろ……」

「したって、どこでかな? どこでかな? どこでやったのかな!」

言葉尻をとらえてレナが鼻息荒く食いついてくる。

いやいや、聞かなくてもわかるだろ。そんなこと。

それで知恵先生がぶったおれたんだから。

とりあえず、レナは無視して魅音の頭をくしゃくしゃに

撫でてやったが、沙都子につめられた。

「まあ、ともかく。圭一さんも、魅音さんもしばらく

学校でイチャイチャするのはお止めになるのが吉でございますわね。

心労がたたって、知恵先生がお倒れになりましたら、雛見沢分校存続の危機でございますよ!」

…それはまずい。

この雛見沢分校は、教員は、校長先生が1人、知恵先生1人という構成になっている。

その知恵先生にしたって、教育委員会と相当揉めて来たと聞いている。

つまり、知恵先生の代わりに赴任するような教師は、まずいないって事だ。

知恵先生がいなくなったら、廃校の危機まっしぐらだ。

魅音の口は3のままだ。

まあ、心の中では「えーいやだー」ってことなんだろうが、さすがにこれからは、そういうわけにはいかないだろう。

梨花ちゃんが魅音の後に回り頭を撫でる。

「魅い。減りに減った圭一成分は、放課後、しつかり分捕ってあげれば

いいのです。

圭一をミイラにしちゃうのですよ」

いや、なんで、

いつも怖い事を言うんだよ梨花ちゃんは。

## 第18話「8日目（木）B 「腕相撲」

「8日目（木）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

お昼が終わると知恵先生が戻ってきた。

調子は良さそうに見えるが大丈夫なのだろうか？

魅音は俺に体を預けるようなことはせず、

距離を保って勉強をしている。

だが、妙に震えているのは何故なんだ？

「震えているけど、大丈夫か魅音？」

「う、うん。圭ちゃん成分が足りてないけど

おじさん：頑張るよ」

俺は麻薬か何かか？

その午後の授業も三時で終わり、知恵先生が教室を出ると、

俺は魅音に校舎の外にある簡易トイレに連れ込まれ、たつぷりと圭ちゃん成分とやらを奪われた。

「ぶはあー！甘露、甘露！

おじさん、この一杯のために生きているようなものだよ！」

そうか良かったな魅音：

おれは少しふらつくぞ。

これから毎日コレか？

俺の体は持つのか。この吸引に。

「洋ゲーのテーブルトークRPGにエナジードレインっていう魔法があつてさ。

HPとか精神力を吸い取る魔物がいるんだけど、これってちょうどそんな感じだね。

つまり生命力を吸いとって、体力にしちゃうんだよ」

ちよつと待て。

それだと最後は命まで吸い取られるんじゃないか俺は？

まあ、そんなこんなで放課後になった。

放課後と言えば部活。

部活と言えば放課後。

とはいえ、俺はたつぷりと『圭ちゃん成分』を魅音に吸い取られて調子が悪いということで、体力勝負ではなくテーブル・ゲームとなった。種目は

「麻雀」

麻雀は、俺も親父に何度か誘われて打ったことがある。

だから、ルールを知らないと言うわけでは無い。

沙都子によれば、去年の冬頃に部活でもやっていたらしい。

なので、部活メンバーも結構打てるだとか。

なるほど、これは勝負を楽しみだぜ！

…と、思っていた。ゲームが始まるまでは。

「タンヤオピンフドラドラ、イーペーコ…」

役貫頂きだよレナ！」

「はう~~~~~！」

ゲーム開始して何順もしないうちに、レナが飛んだ。

「飛んだ」というのは、全ての点数を失ったということだ。

魅音に狙われて、あっさり吹き飛ばされたのだ。

今回は1ゲーム（半ジャン）ごとに入れ替わりで行う方式だった。

最初に、魅音、レナ、梨花ちゃん、沙都子で、俺は予備だ。

順番が来たら入れ替わる予定だったが、

さっそくレナが飛んだことで、俺が代わりに席につくことになった。

だが、俺も席について早々、

コテンパンに魅音にやられてしまう。

「はい、ローン！」

「マジかよ!?!」

「さすが圭ちゃん。おじさんの婚約者だよ。

わざわざ振り込んでくれるだなんて夫の鏡だよ。クククク…」

魅音が嫌らしい笑いをしてこちらを見ている。

尋常じゃなく魅音が強い。

引きの強さもそうだが、戦略も相当なものだ。

狙われたら最後、点棒がみるみる減っていく。

最終的に2ゲーム目が終わるまで、俺も点棒を全て無くした。

とはいえ、麻雀は四人でやるゲームだから一応、頭数合わせのためにそのまま座る。

もちろん、ゲームには参加せずに適当に牌を切るだけだ。

しかし、なんで魅音はこんなに強いんだ？

確かに、冬は大雪で外に出れないから、家の中で麻雀をやるって話は、どこかで聞いた事がある気がするが、ここまで強いとは聞いてなかったはずだぞ。

そんな事を思っていたら、

魅音がトンデモないことを言い出した。

「いやあくおじさんは、結構、詩音と一緒に代打ちしているからねえ。最近も、母さんの役目を引き継いでやることも多いし、ま、経験の差だよな」

ちよつと待て。代打ちって何だ？

俺の知識に間違えが無ければ、代打ちってのは麻雀に強い人間で、頼まれたら代わりに麻雀やる人間の事を指す言葉じゃなかったか？

それに、魅音の母親って、たしか裏世界の人間だろ？

そういう人間が出るような勝負事に代わりに打つって相当なものだぞ。

「不本意ではあるけどさ、詩音と組んだ時の勝率はほぼ10割だからね…」

ま、今日みたいに、事前にこちよこちよ用意すれば一人でもやれるけど。クククク…」

「それってイカサマしているという意味ではございませんのー！」

「魅いはひどいのです！オニちくなのですよー！」  
沙都子と梨花ちゃんの絶叫がとどろく。

無論、この抗議は若干の外れなのだ。

我が部のモットーは、勝利のためにいかなる手段を用いる事。

仮に、魅音がイカサマをしたとしても、勝負中に発見されない

以上、

それは、非難されるいわれはない。

負け犬の遠吠え以上の何ものでも無いのだ。

もちろん、沙都子も梨花ちゃんも、そんなことはわかっているはずだが、

ここまで圧倒的だと抗議をしたくなるのも人情ってやつだろう。

勝ち誇っている魅音は勝者の余裕なのか

沙都子と梨花ちゃんの抗議に涼しい顔をしている。

「んじやさ、沙都子も梨花ちゃんもイカサマをしてみなよ

目に見える形でも無視してあげるからさ。で、成功したら続行でいいよ。

ただ、雀牌を崩したら失敗とみなして二人とも失格。どう？やってみる？」

ここまで言われたら、沙都子も梨花ちゃんも引っ込みがつかない。

梨花ちゃんが、

沙都子に声をかける。

「こうなったら秘儀を見せるのですよ沙都子！」

「梨花ッ！無茶ぶりも良い所ですわ！」

でも、やるしかないようすわね!!」

なんだ、秘儀って。

そんな大勝利を確定させるイカサマがあるのか？

魅音は、ニヤニヤしながら聞いている。

「去年の冬、そういえば散々練習してたみたいだもんね。

ま、頑張つて。沙・都・子♥」

その言葉を聞いて、さらに梨花ちゃんが沙都子に発破をかける。

意を決した沙都子が何かを仕掛けたようだが…

バラバラバラ…

「いやあああああ〜〜〜！」

やっぱり無理でございましてよ!!」

牌は見事に散らばった。

何をしようとしたのかはわからないが、

誰がどう見たって大失敗なのは明らかだ。

「はい。ぶぶー！沙都子も、梨花ちゃんもアウトー！」

あはははは、こりゃ、おじさんの一人勝ちだね！」

クククク…と笑う魅音が実に憎たらしい。

魅音以外は全滅という、さんたんたる状況だ。

それで今日の罰ゲームはどうなるんだ？

全員ってことになるのか？

魅音の目がきらりと光る。

「今日も圭ちゃんの御両親がいないみたいだからさ、うちに泊まってもらおうと思うんだよ」

「あく、そういうええ前にも『今度泊まりに来い』って言ってたしな」

「そうそう。それでね圭ちゃん。監督じゃないけど、

古式ゆかしい日本風メイド「割烹着にエプロン姿」で、一緒に料理をつくってもらおうかな。

昨日はせっかく手伝ってくれるって言ったのに、断っちゃったしね。

もちろん、レナも、梨花ちゃんも、沙都子も、一緒に割烹着を着てお手伝いしてもらおうよ

今夜は一緒に、みんなのうちでご飯食べよう」

それってつまりアレか。皆で一緒に園崎家でお食事会を行うということか。

そういえば、沙都子を救出するときに、お魘のバアさんも沙都子に伝言したつけ。

「今度、一緒に遊びにきなさい」って。

今日はそれを実行する良い機会でもあるってわけだな。  
なかなか洒落た事をしてくれるぜ魅音。

それはそうと…

「手伝うのは構わないけど、俺、料理できないぜ？」

「まあ、圭ちゃんに、そんなには期待していないよ。

でもカレー対決のように材料を切ることぐらいはできるでしょ？」

「…うん。まあ、それでいいなら、いいけどさ…」

「圭ちゃん、圭ちゃん。『厨房は女の仕事場！』なんて考えは古いよ。

これからの夫婦は、夫も料理を手伝えるぐらいにならないとね。

それが新しい夫婦のありようつてもんじゃない？」

そう言われると、ぐうの根も出ない。

沙都子も得心したようにうなづく。

「男は厨房に入るもんじゃない。という割には、料理人は男ばかりですものね」

「日本には不思議な因習が多いのです☆にぱ〜」

不思議な因習がある雛見沢の巫女が言うんだから間違いはないな。

まあ、罰ゲーム自体はそれほど拒否するものではないが。しかし…

「魅音。でも、それって罰ゲームの二重取りじゃないか？」

「へ、どうことさ圭ちゃん？」

魅音の話には、罰ゲームが二つある。

「割烹着を着て料理を手伝う事」と「園崎本家に泊まる」という二つだ。

他の部活メンバーに、泊まるように指示はしていないので、

これは俺個人に対するものだろう。

「あくそうか。そういう風にとらえられちゃったか。

これは、おじさん、失敗だったかな」

魅音が困った顔をしている。

「どうやら、魅音にとってみれば、婚約者の俺が園崎本家にお泊りするのには」

常識の範疇であって、罰ゲームとは考えていなかったらしい。

確かに内心はともかくとして、

「婚約者の実家に泊まりに行くことは罰ゲームとは言わないだろうな。」

だが、せっかくなんでごり押しさせてもらうぜ。

「じゃ、さ魅音。俺達二人だけでエクストラ勝負しないか？」

「圭ちゃんと二人だけで？」

「そう。もし魅音が勝ったら、魅音の家に泊まることは罰ゲームとは今後一切思わない！」



俺の時間と用事が合えばだけど、いつでも呼んでくれていいし、誘ってくれても構わない」

「ほほ、それはいいね。圭ちゃん。その話のつた！」

魅音が会心の笑みを浮かべて乗ってきた。

まあ、正直、こんな約束しなくたって、部活以外の時に誘われれば、ついて行きはするんだが、

それは、その場のノリってやつだ！

「条件は圭ちゃんが出したんだから、勝負方法はこっちが決めてもいいよね？」

安心して麻雀は、選ばないからさー！」

「おう、いいぜ魅音」

一体どんな勝負でくる？

頭脳戦か？それとも、体力勝負か？

「…腕相撲、でどう？」

はあ？腕相撲？

「おいおい、それって…」

「ちよつと、そんなの勝てるわけがありませんわ！」

沙都子が叫ぶ。そりゃそうだ。

幾ら何でも男の俺と、女の魅音が勝負したら戦いにならないだろ？

そもそも部活で腕相撲なんてしたことがない。

当たり前といえど当たり前だ。

こんな腕力勝負なんてすれば、

ちびつこの梨花ちゃんや沙都子は絶対に不利。

だから今まで、選択としても存在しなかった。

だが、魅音はそんな俺の表情を見破ったのか、笑みを浮かべる。

「甘いね圭ちゃん。男女つてのは思春期だと圧倒的に女の方が成長率が高いんだ。

それに、圭ちゃんは都会っ子でしょ？子供の頃から雛見沢に住んでいる私達とは

体力が違うんじゃない？」

うっ、それは否定できない。

都会にいた時は、勉強、勉強の、また勉強の毎日。とても、体を動かして何かするってことは無かった。体を動かしたのは雛見沢に住んでからの、ここ数週間。よくよく考えてみれば

凄腕バツターの沙都子や、ナタを振り回すレナとか

長年雛見沢に住んでいるメンバーは、確かに体力も腕力もケタが違う！

というか、レナはともかく中学生チームに交じってホームラン打てる

沙都子って凄すぎるだろ。常識的に考えて！

「いや、でも…ほら…」

「…まさか圭一さん。梨花になら勝てる。と、おっしゃりたいわけではありませんわよね」

沙都子の視線が冷たい。

梨花ちゃんは「☆にぱー」と笑っている。

そして俺はぐうの根も出ない。

「…いや、まて、するとさつき、沙都子が言っていた

『勝てるわけありませんわ！』って…俺の事をいつていたのか？」

「圭一さんが腕相撲で魅音さんに勝てるわけがありませんわ」

少なからずショックを…

いや、だいぶ、ショックを受けたぞ。

いつもは、男女の差なんて考えた事無かったが、ここまで全否定だと

さすがに男としての尊厳は結構ボロボロだ。

「どうする圭ちゃん。不戦勝でも一向におじさん構わないけど」

ぬおおおお、魅音ッ!!!

未来の夫を舐めるなあああ!!!!

俺はがっしりと魅音の手を握る!

やってやる!男として、ここで逃げるわけにはいかない!

「圭一くんも、魅いちちゃんも頑張れー☆」

そいって、レナは、俺と魅音の手の甲が当たる場所に、さりげなく

タオルを置いて行く。

その心遣いさすがだぜ!

「それじゃ、梨花ちゃん。開始の合図を頼むぜ…」

魅音、お前が仲間で恋人で婚約者で未来の嫁だからって、手加減しないぜ…?」

「ふふふ、圭ちゃんさ。声、震えているよ?」

震えてねえ!

「それでは魅いも圭一も…ふあいと、おー!なのです!」

俺は一気に勝負をつける!

…つもりだったが、う、動かない!?

「あれえ〜圭ちゃんの腕の力って、そんなもんだったの?」

「く、魅音、お前が相手だから力をぬいてんだよ!」

「アハハハ、そつか。じゃ圭ちゃん…そろそろ本気、しよつか?」

くっそ…!挑発しやがって、そんな口先で俺がつけられると…

って、おい、魅音!お前、何をしている!

勝負の最中に唐突に、

魅音が胸元のボタンを開け始めた。

「いやあ〜六月にあるまじき暑さだからさ。おじさんも汗かいちゃつて…」

こ、こいつ、魅音のくせに、お色気作戦だと!うお

腕が10度ほど、陣地に押し込まれる!

これには部活メンバーも驚きを隠せない。

「はわわ、み、魅いちちゃん!?えつちだよ!えつちだよ!」

「魅音さん、手段を択ばなくなってきましたわね。」

「少し、詩いっぽいのですよ☆にぱー」

さらに魅音は口先で攻める。

「圭ちゃん。どこを見ているのかな〜

まさか、おじさんの胸元に興味があるってこと、ないよね?」

「お、お前、汚いぞ魅音!」

実は、詩音じゃないのか!?

「アハハハ、圭ちゃんは、魅音と詩音を見分けつくんじやなかったけ?

今のおじさん、そんなに詩音っぽい？」  
ぐい、ぐい…

やばい。さらに五度ほど押し込まれている！

「圭ちゃん、約束だからね。今日はゆっくり泊ってもらって…

にひひひ、夜、楽しみだね。圭ちゃん♥」

おお、さらに押し込まれる！

も、もうこれ以上は、無理だ…！

が、ここに転機！幸運が舞い降りる！

あまりにも攻める魅音の姿勢に部活メンバーが引き始めたのだ！

「魅いちちゃん。その…あんまりそういうのは止めた方が良いと思うよ」

「魅音さん。少し、下品がすぎませんか？」

「みー☆さすがに今の魅いは、ちよつとやりすぎだと思うのです」

「ええーちよと、みんな、そんなに引かないでよ」魅音の意識が勝負から離れた！

反撃の時は今だ！いくぜ！

「み、魅音。胸が丸見えだぜ」

「ふえ丸み…!?ええ!!」

咄嗟に胸を隠そうとして力が弱まる！

腕の角度が持ち直した。いける！

「ちよ、圭ちゃん！ズルイ！」

「ズルくねえ！そもそも、胸元みせてたのは魅音だろ！」

俺がお前が好きなのをやって、そんな真似しやがって！

さつきから、俺、ずっとお前の胸元だけを見ていたんだぜ！」

「ふ、ふえええええ!!」

魅音の顔が真っ赤になり、力が抜ける！

策士、策に溺れるとはこのことだぜ魅音！

形成が一気に逆転だ。

「圭ちゃん、ちよとタイムー！力が出ない！力が出ない！」

勝負の最中にタイムなどあるか！と、いつもは言う所だが、素直に力を緩める。

あんまり、素直に緩めるものだから、魅音が驚いた顔をしている。

「そういえば、魅音。俺が勝った時の条件、言っていなかったよな？」  
「え？ああ、そうだね。そういえば……」

「もし、俺がこの勝負で勝ったなら……魅音、お前に男のロマンを実現させてもらう」

「ロマンって……何さ？」

「裸、エプロンだあああああ!!!」

「<<<は、裸エプロンツ!!? >>>」

部活メンバーが一斉に大声をだしたものだから、教室内にいたクラスメイトが集まってきた。しかし、黙るものか。ここで、一気に決めさせてもらうぜ!

「そう、裸エプロン!それは男が恋人や婚約者や、妻に求めるロマン中のロマン!それは

裸という非日常素体に、エプロンと言う日常の衣服をまとわせたことにより、本来はうまれる

ことは無い魅力が放たれる小宇宙<sup>コスモ</sup>!いうなれば、それは一つの銀河<sup>ギャラクシー</sup>に生れた超新星<sup>スーパーノヴァ</sup>であり、その瞬間的破壊力は宇宙開闢<sup>ビッグバン</sup>に匹敵するのだあああ!」

周囲に集まったクラスメイトの中から現れる

同志・富田君に岡村君!

「け、圭一さんツさすがです!!!」

「こんなこと真昼間の教室で力強く主張できるのは前原さんだけです!」

君達も賛同してくれるのか、このロマンに!

なんとという将来の有望な人材!これは日本の未来は明るいぞ!

「……………」

口をあけてポカーンとしている。魅音の手を軽くひねる。  
ポス。

魅音の手の甲が、レナの置いたタオルの上に優しく倒れる。

「俺の勝ちだ魅音んんん!!!」

ハッ!?

!!!

負けた事に気が付いた魅音が、その場でもんどり返る。

「うぎゃあ!!嘘お負けちゃったああああ?!?!」

激しい戦いだっただぜ。

だがな、魅音。どんな悪辣な手を使おうと、

最後に勝つのは正義なんだ。

そうだろうか?みんな?

俺は爽やかな笑みを浮かべて部活メンバーを見ると。

そこには絶対零度のカミソリのような顔をした皆がいた。

「圭一くん…さすがに、裸にエプロンって…魅いちやんが可哀想だよ」

「圭一さん、見損なつたを超えて、見下げ果てましたわ」

「みー…世の中には、やっていいことと、悪いことがあるのですよ」

うわああああああ!なぜだ!!!

俺は、勝つための最善の努力をしただけなのにッ!!!

「圭ちゃん…さすがに、裸エプロンはさあ…」

袖をひっぱって、半泣きの魅音がいる。

うう、仕方がない。さすがに、これを強硬すれば

部活メンバーから、三下り半をつきつけられるかもしれない!

「な、ならさ。アレにしようぜー」

「アレってなにさ?」

「ほら、詩音がもつてきた着替えバッグの衣装。アレで、俺我慢するぜ」

「いやああああ!!あんなの着て圭ちゃんの前になんか出れないッ!!!」

「婚約破棄されちゃうよ!!!」

詩音、お前、一体どんな服を用意したんだ!?

結局、この勝負結果は一旦保留ということだ。

俺達は、魅音の住む園崎本家へと、行くこととなった。

## 第19話「8日目（木）C「夕餉」

「8日目（木）：園崎本家：夕方：前原圭一」

野菜を切り刻む音、みそ汁の煮える音。

そして、ご飯の炊ける音。

園崎本家の台所では、俺達五人がせわしなく動いていた。誰がどう動くのか、てきぱきと指図しているのは魅音だ。

さすが当主代行だけあって人を動かす術は長けているよな。

俺達は指示に従い、よどみなく作業をしている。

「いやあ、今日はみんな来てくれて助かったよ。

お手伝いさんが急に休んじゃってさ」

「よく言うぜ。手伝わせせる気満々だったんだろ？」

「あはははは、まあ、今日は美味しい夕飯を御馳走するから」

今日は魅音の家で料理を作ろう。

という罰ゲームだったが、その料理の前に大量の買い物と、広間の掃除と片付けがセットになっていた。

さすがに話が違うじゃねーか。

という事になったのだが、魅音は頭を掻いて釈明する。

「いや、だから、今日は皆に変な格好もさせないし」

一緒に夕飯取る形にしようかなーって思ってたさ」

…まあ、いいか。

園崎本家は大きく、親戚一同があつまるため台所も相当大きい。

俺達五人が同時に料理を開始しても悠々と動けるスペースがある。ここで仲間五人と一緒に料理作っていくのは、

キャンプをしているような一体感があつてとても楽しい。

しかし、予想外だったのが入江監督がいたことだ。

「はあ、いいですね〜沙都子ちゃん可愛いですよ」

「あ…監督。邪魔ですので、すこし、どいては頂けませんこと？」

「これは、これは失礼しました〜☆はう〜」

「ハア…とんだ罰ゲームでございますわ」

監督に付きまとわれて肩を落とす沙都子。

魅音が言うには、監督はお魎のバアさんの定期健診に来ており、今日はたまたま、その日だったらしい。

せっかくだからということ、監督も夕飯も一緒に食べていくことになった。

監督の分も追加で作ることになったが、監督にしてみれば、

台所で『古式ゆかしい日本風メイド「割烹着にエプロン姿」を身に着けている沙都子を見るのが一番の幸福だったろう。

ちなみに俺は、魅音の指示で食材を切り終えた後、うっかり

「監督はてつきりヨーロッパ風のメイドが一番かと思っていました」と話題をふってしまったために「欧州におけるメイド服の歴史と傾向について」を数十分ほど聞かされるハメになってしまった。

だが、そのおかげで沙都子に「監督の注意を引き受けて下さいましてありがとうございますございましたわ」

と感謝されたので、良しとしよう。

「そろそろ、夕飯もできあがるし、

バツちやを呼んでくるよ」

魅音がそういつて台所を出ようとしたので、俺は声をかけて引き留めた。

「なに、圭ちゃん？」

「俺も、一緒に行かせ欲しい。お魎のバツちやにさ、俺…一言伝えたいんだ」

「……………」魅音は数秒ほど無言で俺の顔を見ると、

一言「来て」と、呟く。

俺は魅音の背中を追いかけ、お魎のバアさんの部屋の前に来た。

「バツちや。夕飯できたよ。あと…圭ちゃんが、バツちやに話がしたいんだって…」

魅音はふすまを開けると中に入り、

お魎のバアさんは上半身をゆっくりとあげる。

「圭ちゃん。いいよ。来て…」

俺は一礼すると、お魎のバアさんの前に正座をする。

バアさんは俺を見ている。



俺は、伝えたかった。

こんな下らない過去を持つ人間であった俺と、魅音との交際を許してくれたことに感謝の言葉を伝えるつもりだった。

だが、バアさんの前に出た俺は…声が出なかった。

言いたいこと。伝えたいことがいつぱいあるのに。

胸がいつぱいになって、言葉がでず。

泣いていた。

自然に涙が零れ落ちてきた。

「え、ああ…圭ちゃん。どうしたの?」

そんな俺の姿を目の当たりにして、少し狼狽している魅音に気が付き、

なんとか必死に言葉をしぼりだそうとした。

だけれども、

ほんの小さな声がしか出ず…

「すいません。俺のような奴との仲を認めてくれて。すいません…」  
うつむきながら、そういうのが精一杯だった。

それ以上は、口から出なかった。出せなかった。

困惑する魅音をよそに、

お魎さんはゆっくりと口をひらいた。

「あんな、人間ってのはようけコケよるもんよ」

俺は顔をあげた。

お魎さんは泰然としてそこにいた。

「コケたらな、立ち上がらなきゃならんよ。

でもな、世の中にあ、上手くたちあがれんもんもおる。

魅音がな。コイツが…コケたら、助けてほしいんよ」

俺は涙を手で拭って、

頭を下げた。

「はい、俺は一生、魅音を支えます」

「圭ちゃん…」

廊下をパタパタ歩く音が聞こえる。

梨花ちゃんだ。

「お魎、夕飯の用意ができましたのですよ」

「おお、梨花ちゃん。ようけ、きてくんさつたんねえ」

梨花ちゃんは、顔をほころばせたお魎の前にくると、ちよこんと、その膝の上に座った。

「圭」。魅いに聞きましたですよ。ボクが圭一を許した事、覚えていてくれたのですね」

「え、ああ……」

そうだ。過去に……いつだったか……よく覚えていないけど……

梨花ちゃんに許してもらった。その事を覚えていた。

「圭」、ボクも許しました。お魎も許しました。

だから、何も気がねすることは無いのです。

魅いを、幸せにするのですよ☆にぱー」

その言葉を聞いて俺は頷く。

そうだ。俺は魅音の夫になるんだ。

今はまだ力も知恵も無いかもしれない。

でも、いつか、魅音が辛い時、悲しい時に

支えられる夫に俺は必ずなつてやるんだ。

「さ、みんな。いこうか。」

夕餉が覚めちゃうよ」

魅音に足されて、夕飯を用意した大広間に向かう。

大広間に席をつくると食事がはじまった。最初にお魎のバアさんが沙都子に「すまんことしたの」と謝り、沙都子はそれを笑顔で返す一幕があつたが、その後は和気あいあいと夕食が楽しんだ。もつとも沙都子はお魎のバアさんに少しびびり気味だったが、それは仕方がないことだろう。

「ごちそうさまでした。今日は楽しかったよ！魅いちちゃん！」

「みー☆沙都子がお魎を怖がついて、かわいそ。かわいそなのです」  
「べ、別に、怖がついていませんわ！梨花、帰りますわよ！」

楽しい時間は終わるのも早い。

玄関口でレナと、梨花ちゃんと沙都子に別れを告げる。

監督はというと夕飯を食べると診療所に戻らなければならぬと

言う事で早々に車で帰っていた。

「圭ちゃんは、どうするの?」

「そうだな。家に帰っても誰もいねえしな」

「じゃ、さ。今夜は泊まらない?」

魅音が俺の体にしなだれたので、

心臓の鼓動がひどく高鳴る。

おいおい、落ち着けよ。

泊まるだけなら問題無いだろう?

「一応、断っておくけどよ」

「なに、圭ちゃん」

「俺の意思で泊まるんだからな。罰ゲームとかじゃないぜ」

「あはははは、わかってるって。すぐにお風呂とお布団用意するね」

俺は魅音と腕を組んで180度反転した。

この時、俺は忘れていた。

ここが鬼の住む家だということに。

「8日目（木）：園崎本家：夜：前原圭一」

あくいいお湯だなあ

俺は、園崎本家の湯船に肩まで使って良い気分でした。

窓から月が見える。

そういえば、四日前のあの時も月が見えていたっけ。

考えてみると、面白いよな。

俺が魅音に付き合いたいと告白してから、

まだ一週間とちよいかたっていないはずなのに、

婚約して、許し合い。語り合い。

そしてここで、お風呂に浸かっている。

正直、一家の主になるっていうのが良くわかっていない。

少し、怖いと思うこともある。だが、それが何だっただ。

俺は、これからずっと魅音と一緒にだ。

個々が最強、集まれば無敵の部活メンバーの

二人が結婚するんだぜ？

俺達をはばめるものなんてあるわけがない！

「圭ちゃん、どう？温度足りてる？」

魅音の声だ。

「おお、バツチリだぜ！魅音、お前も入れよ！」

「うん、そうするね」

…え？

いや、まて今の冗談だ！

ガラガラガラ…！

「み、み、み、魅音?」

着替え室のドアが開き、

タオルを巻いた魅音が入ってくる。

「あははは?裸だと思った？」

そりやタオルをつけてくるさ」

いやいやいや、そうじゃないだろ！

そのタオルの下は、その、なんだ…！

「あ、ちゃんと水着を着ているから大丈夫だよ？」

タオルを無造作に広げると、

俺の目にスクール水着が飛び込んできた。

「これなら安心でしょ圭ちゃん？」

「い、いやいや、だからって…お、お、俺は裸なんだぞ?」

「へーそうなんだ?じゃあ、圭ちゃんのポーク・ウィンナー見せて貰おうかなあ?」

なんだこいつ!?

なんだこいつ!?

親父だ!女の顔をした親父がいるぞ!

「アハハハ、今頃気が付いたんだ圭ちゃん?

おじさんは…おじさんなんだよ!」

笑いながら、湯船に入り、俺に抱き着いてくる!

なんだこのシチュエーション!?

ハーレムお色気学園漫画のシチュエーションなのに、

全然色気もクソもないぞ!?

「ふふふ、そういうえば、圭ちゃんさ。体、洗った？」

「え？体？いや、そりゃ洗ってからお風呂に入って入るもんじゃないか？」

「あーそれは残念だね。おじさんの体で洗ってあげようとおもったのに」

なんだそれは。

体を洗うではなく、体であらってあげる？

「おじさんの体に石鹸をまぶして、スポンジのかわりに、

圭ちゃんの体でゴシゴシしてあげるっている。まあ、ロマン的な体の洗い方？」

「…それって、手で洗った方が早くないか？」

「…そういわれると、そうかもしれないけど。圭ちゃんって、こういうのロマン感じないの？」

てつきり裸エプロンって発想があるから、こういうのもイケるかとおもったんだけどさ。」

「すまん。裸エプロンってのは、裸にルーズソックスをつけるべきか、裸であっても眼鏡をはずしてはダメだとか、そういう域の話であって、体をつかってゴシゴシとか俺ちよつとわからない」

「えーと、圭ちゃん…おじさん、

今の例え話、一から十までさっぱりわからないよ」

…日本語って難しいぜ。

「でも、まあ、いいや。」

こうして圭ちゃんとお月様を見れるから」

魅音は俺の横にくと、肩に頭をのせた。

二人で、お風呂場の窓から月を見る。

「圭ちゃん…」

「なんだ魅音？」

「裸エプロンは、さ…二人っきりの時に、ね？」

み、魅音の奴ッ！

最高に素敵なシチュエーションで爆弾飛ばしやがった！

ちくしょう、このままだとのぼせちまうかもしれない…

お風呂にも、魅音にも…

## 第20話「8日目（木）D「鬼の刺青」

「8日目（木）：園崎本家：夜：前原圭一」

お風呂から上がってきて、客間に行くと、そこには布団が敷かれていた。

それはいい。だが、枕が二つ置いてある。

…これはなんだよ。

「いや、なんだよも無いよな。多分魅音の分だ。

一緒に寝るってことだろ。うん。」

1人ノリツツコミ。

自分でも、ちよつと精神の安定を欠いているのが分かる。

布団前で、特に意味なく正座する。

いや、確か魅音には、ちゃんと自分の部屋がある。

寝るとしたら、そこじゃないか？

…そうじゃないよな。

今の俺は、客人兼婚約者だ。

いや、もつと言えば夫と言い換えても良い。

そうなれば、アレだ。

客間に呼んで二人で寝るか。

自室に呼んで二人で寝るか。

の二択になるんじゃないか？

いやいや、もちろん俺だって、

園崎本家で寝ると決めた時点でこうなることは、

予想できていたさ。

なにしろ、うちの前原家でもそうだったんだから。

感性が明治時代ぐらいのこの家がやらないわけがない。

だけどさ。

俺達ぐらいの年齢で、普通、一緒に寝させるか？

間違いがあつたらどうするんだよ！

「待て待て、前原圭一。冷静になれ。」

とめどもなく、わけのわからない思考の流れに

とらわれたぞ。とにかく、魅音に…」

その時、客間のふすまが開いた。

「み、魅音…？」

そこには真っ白い着物を身に着け、

正座をして深々と頭をさげた魅音がいた。

「本日は旦那様のお情けを賜りたくまいりました」

頭をあげた魅音。

その瞳には、光が無く、どこかミステリアスな感じがある。

「魅音…お前、どうしたっていうんだよ…」

「どう、とは？」

なぜ、そんな当たり前のことを聞くのか？

と言わんばかりに、魅音は立ち上がると、俺の方に向かってきた。

今の魅音には、何故か冷たいものを感じる。

正直、怖い。

俺の体は震える。

だが、ここで下がってはいけない。

たぶん、下がったら魅音を傷つける。

俺の前に来た魅音は再び座り直し、

両手について頭を下げる。

「我が夫にお願いを申し上げます。私に情けをお与えください」

情け、ってなんだ…？

どういう意味だ。さっぱりわからないぞ。

俺が気圧され、何もいえないでいると、

魅音は、俺の顔をじつと見つめて着物を脱ぎ始めた。

「おい、何をしていんだよー！」

慌てて、俺は脱ごうとする魅音の手を握る。

魅音の胸が半分見えている。

俺をツバのみ込んだ。

「いきなりどうして…」

慌てて視線を魅音の顔に移すと、

そこには月明かりに照らされた、この世のものとは思えない美しさ

の魅音がいた。

「駄目なの？圭ちゃん？」

「え？」

俺はその声に、手を放してしまった。

すると、魅音は後ろを向き、服を腰まで一気に脱いだ。

止める暇も無かった。そしておれは絶句した。

そこには、鬼の刺青が掘られていた。

「これが、本当の私。

園崎家次期当主、園崎魅音……」

俺はその光景に声も出せないでいた。

鬼の刺青の迫力、月明かりに照らせた魅音の美しさ。

そして……悲しみに満ちた魅音からあふれる妖しい雰囲気、俺は飲まれていた。

「魅音……」

「圭ちゃん。これを……」

魅音は振り返ると、左手で両胸を隠し、

右手で、赤ヒ首を差し出した。

「これで、どうしろって……」

「もし、私を拒絶するのなら、これで刺して圭ちゃん……」

刺す？それって、魅音を殺すってことか？

「圭ちゃんに受け入れられないのなら

私はもう生きていられない」

「そんな……こと……言うなよ」

魅音の目から一筋の涙が落ちた。

声が出ない。

本気なんだ。魅音は本気で事を成そうとしているんだ。

「私の全部を圭ちゃんにさらけだしたんだよ。

だから、お願い……」

魅音はそういって、俺の胸に飛び込んできた。

何も言えなかった。魅音の両眼からポロポロと涙がこぼれ落ちていた。



その涙が衝撃で。  
俺は体が震えた。

おそらく、ここから俺が逃げたりしても、  
その赤ヒ首で魅音は死ぬだろう。

それぐらいの覚悟で魅音は、今、ここにいる。

魅音が全てをさらけ出しているのであれば

俺はどうする？ 決まっている！ 抱きしめるんだ！

「…魅音…」

俺は力強く魅音を抱きしめた。

そして…

「8日目（木）：園崎本家：夜：園崎魅音」

—— 20分前 ——

アハハハ、圭ちゃんったら、すつかりのぼせて！

最後はぐでつてやんの。すこーし、おじさんもやりすぎたかな？

でも、楽しかったな。

ずっと、このまま楽しいのが続けばいいのに。

ううん。続くはずだよ。

だってもう、圭ちゃんはさ、おじさんのものなんだもん。

へへへ、そう思うと自然に、頬がゆるんでくるなあ

いけない、いけない。

こんなんじゃ、バッチャが眼の前にいるのに、怒られちゃうよ。

しゃきつとしないと！へへへ…

「…で、今日泊まるんか？」

「え？ 圭ちゃん。うん。今日は泊まるよ。」

客室に布団用意したけど…あはははは、圭ちゃん

紳士だから、手を出してこないかも！」

「…なあ、そろそろ歳じゃけな…いつお迎えがきても

不思議じゃないんで」

「大丈夫だよバッチャ。」

バッチャなら100歳や、200歳ぐらいまで長生きするって」

園崎お魎の手が、魅音の手の上におかれる。

「バツちや…?」

「なあ魅音。わしな、年甲斐もなく夢な。もっちゃまった  
ひ孫の顔を見る夢を、な…」

「……………」

「ワシの若いころは、14. 5. 6で結婚して出産するなんて  
珍しいことでも何でもあ、なかつたんよ」

「……………」

「社会なんちゅう、ものは適切なあ私財と、それと弁護士がおりや、  
なんとかなるちゅうもんだ。」

雛見沢という場所には一つの暗黙のルールがある。

雛見沢を支配する園崎家。

その当主の園崎お魎は、最高指導者であるが、  
必ずしも、全ての命令を口に出すものではない。

―― 園崎お魎が憂慮した ――

その事実を忖度した者達が実行し、  
それを村ぐるみで隠ぺいするという不文律が存在する。  
このシステムは、末端だけでは無い。

当主代行であり、次期当主でもある園崎魅音も、  
またそのシステムに組み込まれている。

魅音の瞳から、光が消える。

園崎魅音が、当主と意識して立つときと同じ表情だ。

「失礼いたします。おばあ様」

うやうやしく頭を下げて、この場からさがる。

園崎お魎が、ひ孫の顔を見るのを望んでいる。

だとするならば、自分はそれを実行できる立場にある。  
選択の余地などは無い。

“できる”のであれば“実行”するだけだ。

自分の部屋に行き、白無垢の衣装に身を包む。

唇に紅を塗り、ナチュラルメイクを施す。

相手は若い圭一だ。

あまり刺激が強くない方が良いだろう。

赤ヒ首を懐に入れる。これは  
脅しにも泣き落としにも使えるだろう。

圭一のいる客間に向かう。

美しい月が出ている。

入る向きにも気をつけよう。

月明かりに照らされた方が、きつと効果的だ。

正座をして、ふすまをあける。

頭を下げて、哀願する。

「本日は旦那様のお情けを賜りたくまいりました」

少し時代かかりすぎた台詞だったか？

圭一が驚いたような顔を見ている。

—アハハハ、おもしろいな。

圭ちゃん、面食らってる。

こういう場合のときは、意識が自分から少し離れる。

言うなれば、もう一人の自分を見るような感覚に陥る。

まるで、舞台を近くで見る客のように、

テレビを見ている視聴者のように、

遠くから自分で自分を見守るような感覚に。

「魅音、お前、どうしたっていうんだよ…」

「どう、とは？」

—どうも何も、そんなの一つしかないじゃん。

もう、圭ちゃんバカだなあ。そんなのを言わせる気なの？

仕方がない。近づいてはつきり言っつてやるか。

魅音は圭一に近づき、再び正座をする。

「我が夫にお願いを申し上げます。私に情けをお与えください」

圭一は、気圧されているのか狼狽している。

いや、あるいはもつと根本的な原因の可能性もある。

すなわち、無知。

—もしかして、圭ちゃん。時代劇とか見てない？

お情けの意味、分からないんじゃない？仕方がないなあもう。

「おい、何をしてんだよ！」

服を脱ごうとしたら圭一に手を握られ止められた。

困惑しているのはわかるが、ここで止められると魅音としても困る。

圭一を誘惑したいというのに。

「いきなりどうして…」

それでも半裸になった魅音の体を見て、唾をのみ込むのが見える。まるつきり無駄というわけでもないようだ。

—なら、次は泣き落とし作戦に変えますか。

こういうのやったことないんだよね。

詩音なら得意そうんだけどさ。

「駄目なの？圭ちゃん？」

「え？」

圭一が困惑して手を離れた一瞬について、後ろを見せ、一気に上を脱いだ。

圭一の眼には鬼の刺青が掘られているのが見えるだろう。

「これが、本当の私。

園崎家次期当主、園崎魅音…」

園崎家の鬼の歴史が集約されたような刺青を見て、どう思う？

普通の人なら逃げるかもしれない。

でも圭一は違う。逃げない。間違いなく同情する。

そうでなければ、ここにはいない。

園崎魅音は圭一を100%信じている。

だからこそ、やれる。

そして、赤ヒ首を見せる。

「もし、私を拒絶するのなら、これで刺して圭ちゃん…」

これで決まりだ。

これで前原圭一は必ずおちる。

—我ながら、悪辣だとおもうけど、いいよね？

妻なんだからさ。

とはいえ、やりすぎということは無いだろう。

—まあ、これで堕ちたとおもうけれど、

あと、もう一押し、やっておくかな。

「圭ちゃんに受け入れられないのなら

私はもう生きていられない。」

一筋の涙を落とす。

「いや、我ながら、役者だわ。

初めてやったにしては完璧に涙を流せた。

詩音が見ていたら「お姉やるじゃない」と称賛してくれたかもしれない。

正直、自分らしくは無いとは思いつし、普段なら絶対にしないだろう。でも祖母の願いために、

何より自分自身が愛する圭一に抱きしめられるために。

やってのけられた。

愛する圭一を嘘の涙で騙すという、

ほんの少しの小さな胸の痛みと引き換えに。

そして、それは正しく報われた。

「そんな……こと……言うなよ」

圭一は、自分の行動に心をうたれていた。

「ああ、圭ちゃん。そんな悲しい顔しないでよ。

てか、こんなんで、本当大丈夫？悪い人に騙されたりしない？

見え見えじゃん。こんなの演技だって。

「…魅音…」

圭一が魅音を力強く抱きしめ、押し倒す。

「はあくやつとだよ。」

もう、圭ちゃんったら、紳士にもほどがあるよ。

それだけさ、おじさんを大好きだってことなんだろうけどさ。

現実の自分を見る、もうひとりの意識としての自分は、思考はあつても

感情はあまり無い。だから圭一を騙していても胸にわずかな痛みはあれど、良心の呵責もほとんどない。

ただ、残念だとは思っている。

この状態で、圭一と『初夜』を迎えたとしても、

それはテレビの映像を見ているのと同じで、あまり実感がわかないだろう。

―仕方がないよね。それでも。

でも初めてが圭ちゃんだったのは嬉しいことだし、ワガママはいえないよね。二回目に期待かな？

そう。これはバッチャに言われたからだけじゃない。

園崎魅音自身も望んだこと。

だから、これは誰も悪くないし、誰の責任でもない。

ただ、ちよつとだけ圭ちゃんには罪悪感を覚えさせるかもしれない。

後で、そのフォローはしてあげないと。

「…魅音、俺」

いいんだよ。圭ちゃん。さあ、抱いて。

私はもう…

……

…

…つてあれ？

なんで何もしないの？

「…俺、どうやって、やったらいいかわかんないんだ！」

「うええええええ!!」

―どういうことさ！

わからないって!!こういうの男の子なら知っているもんじやないの！

圭一の言葉に、あまりにもショックを受けすぎ、気が付かないうちに魅音の分離していた意識が、いつの間にか戻っていた。

「ちよつと、わからないって、どういうこと圭ちゃん!？」

そして素の自分に戻っていることすらも、

本人は気が付いていなかった。

「8日目（木）：園崎本家：夜：前原圭一」

「うええええええ!!」

魅音がびつくりして起き上がった。

おいおい、なんて声を出しているんだよ！

さつきまでの神秘的な雰囲気か台無しだぞ！

というか、目の色がさつきと違う。

もしかして、元の魅音に戻ったのか…？

「ちよつと、わからないって、どういふこと圭ちゃん!？」

あ、うん。戻ったみたいだなこれは。

「いや、どういふことも何もさ、俺、その…仕方わかんないだ」

「この間、30分もあれば妊娠させてやるっていったじゃん！」

「悪い！あれは勢いで言っただけで…」

「…ああ、圭ちゃん。そういうところあるよね」

つくづくすまん…！

調子に乗るのが俺の悪い癖だ！

「というか、さ…逆に魅音は知らないのか？」

「ふえ、あたし? いや…ハハハ…」

「こういう旧家なら、その、三十六手のやり方とか

伝授されているんじゃないのか？」

「いや、うちの家なんだと思っっているのさ…」

てか、圭ちゃん。三十六手って言葉は知っっているのに

知識ゼロって、そんなのあんの？」

「そりゃ、漫画で読むぐらいは知っっているけどさ。」

園崎家に伝わるやり方とかって、教わらないのか？」

「そんなん、ぼっちゃからは

『相手に身を任せて、天井の染み数えればええ』

っただけぐらいしか教えて貰ってないよ」

「…天井の染み?なんだそれ?」

「知らないよ!てか、本気でわからないの…!？」

子供がいくら欲しくても、

子供の作り方を知らなければ作りようが無いよな。

当たり前前の現実に、打ちのめされる!

そもそも、大人は、

俺達子供に、赤ちゃんの作り方をおしえてくれないじゃないか！  
本番じゃ、キャベツ畑やコウノトリでは、誤魔化せないぞ！

とはいえ、それを魅音に言うのもおかしな話だけども。

結局のところ、俺達は途方にくれるしかない。

「うん、まあ…そういうのって、どこで勉強すればいいんだろうな。」

魅音は知っているか？」

「いや、そりゃトルコ風呂とか…」

「外国までいくのかよ！無理だろ！」

「ちがう、違う、トルコ風呂って、ソー…あー！ダメダメ！圭ちゃん、  
そんなところ行っちゃだめだ！ソーランドとか、赤線とか、遠出選  
考とか、ナントカ屋敷とか絶対にダメ！」

「あのさ、魅音、お前本当に知らないのか…そういう施設とか知ってい  
るってことは…」

なんか、無茶苦茶詳しいそうなんだけど…」

「そーゆー男が喜びそうな施設だとか、伝統とか、場所は知っているけ  
ど、

知っているだけでわかんないの！

香港映画みたからって、カンフー使えるようになるわけじゃないで  
しょ!!!」

「お、おう」

喧々諤々。さっきまでの雰囲気はどこへやら。

お互いに、どうやって子供の作り方を学べばいいのか、

応酬をしよう。

が、結局の所、答えは出ない。

「ま、まあ、圭ちゃんが、本当に女の子と経験が無いってのは収穫だっ  
ただよ…」

「でも、魅音は他の所で手ほどきを受けるのは嫌なんだろう？」

「そりゃ嫌だよ！逆に考えてよ圭ちゃん。おじさんが、さ、その…

誰か他の男の人に触れられるの、耐えられる？」

「う、それは無理だ。魅音は、その…俺の嫁なんだから！」

「ククク、だよねえ、おじさんもそう思うよ。園崎魅音は、圭ちゃんの



嫁。だもんね」

そう言つて、お互いを見つめて笑い合う。

まあ、これはこれで楽しいけど、実際問題どうするんだこれ？

知恵先生は無理だ。卒倒してしまうだろう。

親父とお袋に聞く？ 恥ずかしくて無理だ。

それじゃ、どうする？ 後はお医者さんにでも聞くしかない。

お医者さん？ あ、そうだ…

お医者さんと言えば、一人、いるじゃないか！

「なら監督に教えてもらうつてのはどうかな？」

「監督って…えつと、診療所の入江先生の事？」

「医者なら、そういうの詳しいだろ？ 魅音は三四さんに教えて貰えればいいし」

俺がそう提案すると

先ほどまで、困り顔だった魅音の顔も

パアつと明るくなった。

「あ、それ、意外とグットアイデアかも！ じゃあさ、明日、教えに貰いにいこうよ！」

やっぱり魅音はミステリアスや、困った顔より、

明るい顔の時が一番可愛い…つて明日かよ！

「善は急げだよ圭ちゃん！ 朝、学校に連絡して、うちから直接診療所へ向かおう」

「お、おう。わかった。」

正しいか否かは置いておいて

とりあえず、答えが見つかったので、俺達は安堵した。

もう、これ以上はさすがに何もやる気がしない。

なら、今日はこのまま寝よう。ということで見解が一致した。

俺と魅音は早々と布団に入り抱き合う。

色々あったけど、これはこれで今日も面白い一日だったぜ。

「ねえ、圭ちゃん」

「なんだ魅音」

「キス、しようか？」

上目遣いで俺を見る魅音。

今日は、もうちよつとだけ続きそうだ…

## インターローグ「野村」

「8日目（木）：インターローグ：野村」

寂れた港町の波止場に野村はいた。

彼女が乗ってきた黒い車によりかかり、約束の相手が来るのを待っている。

この場所を指定したのは彼女自身だ。

理由は、これから来る男の縄張り、ぞくに言う“シマ”だからである。

（…まさか、彼女が賛同しないとはね）

鷹野三四が、彼女の提案に乗らなかつたのは想定外であった。

彼女の信念、行動原理を考えれば、99%の確実性が保証されていたはずである。

だが、鷹野三四は乗ってこなかった。

作戦の概要を知る彼女を消そうとも考えたが、

入江機関を守る情報工作部隊「山狗」の精鋭を常時二人以上の護衛をつけている彼女を暗殺するのは容易ではなかつた。

（まあいいわ。本当の目的は鷹野三四では無いのだから）

予想外ではあつたが、予定外では無い。

計画というものは常に幾つか別のプランを用意しているものだ。遠くから、こちらに近づいてくる車が見える。

今夜の会合相手だろう。野村の近くまで来ると、二人の男が降りてきた。

1人は、園崎組の大幹部であるミフネ組の組長ミフネ。

そして、NO2の若頭だ。

「お待ちしております。時間ピッタリでございますね」

「ああ、そりゃそうだろうさ。たつぷりと足代を頂いちゃったからな」

ミフネは油断なく野村を見ながら、

若頭からファイル一式を受け取る。

それは昨日、野村から直接渡された、とある病気の論文であつた。

「お前から借りたこのファイル…雛見沢症候群か？」

知り合いの医者に見せたら見た事の無い病気だと言っていたぞ」  
「それはそうでしょう。」

まだ世に発表がされていない病気ですから。  
ところで…その医者は足がつかないように、ちゃんと消しましたか？」

ミフネは眉の端をあげると、野村の足元に、  
雛見沢症候群というタイトルが書かれた資料ファイルを投げ捨てる。

「…で、俺に何をさせたい」  
そのファイルに記載されている内容は常人ならば信じられるものではない。

雛見沢の住民の脳内には寄生虫がおり、  
女王と呼ばれる存在が死ぬと48時間以内に狂死してしまうという。  
しかも、ただ正気を失って死ぬのでは無い。

発病後は疑心暗鬼に囚われ、無差別に殺し合いがはじまるとさえ予想されている。

これが事実なら、1000人ないし2000人規模で、  
雛見沢全土で凄惨な殺戮劇が始まることを意味していた。  
むろん、通常ならこのようなヨタ話をミフネが真に受けるわけがな

い。  
だが、それが  
「このファイルを読むだけで1億支払いますよ」  
もし信じて依頼を受けてくれればさらに払いますよ」

と言われたら話は別だ。  
金銭の多寡は信用度のパロメータである。

この場合の信用というのは、もちろん野村と言う個人に対するものでは無い。  
依頼を受けて良いかのパロメータだ。

1億という金は、危険と隣合わせで手に入れられるレベルの金である。  
それはつまり、ヤクザにとってみれば一番得意な仕事というわけ

だ。

「言わずともおわかりでしょう」

「女王感染者である。梨花ちゃ…いや、古手梨花を殺せと言うのか？」  
「ご名答」野村は目を細めた。

その目はミフネが思惑通りに動くと確信している目だ。

「これは古手梨花一人を殺すという話じゃねえ。古手梨花を殺すということは、

雛見沢村の住民を10000〜20000人を殺すのと同じ事だ。もちろん、その中には

雛見沢出身の俺の組員や俺自身も含まれる。そして、言わせてもらえれば、

それをやるのに1億や2億では足りねえな？」

「その点についてはご心配ありません。

予防薬と治療薬、合わせて200人分ここに用意しています。

それと依頼料ですが、前払いで20億払いましょう」

野村が指を鳴らすと、男が現われ車のトランクを開いた。

その中にあるアタツシケースをミフネの前に次々と置く。

ミフネが若頭に指で合図を送ると、アタツシケースの中を確認した。

薬と現金は確かにその中に入っていた。

「前払いで20億とは剛毅な話だな。

俺達が持ち逃げしするとは考えないのか？」

野村は低く笑った。

「なぜですか？その方が貴方達にも都合がよろしいのに」

ミフネのこめかみが動く。

「…決行時期は？」

「6月の下旬。遅くても7月の上旬。

その時には古手梨花にはプロの護衛が2人から4人ほどついているでしょう」

「…日にちはこちらできめさせてもらおうぜ？…ことを起すのにぴったりの日があるからな」

「ご自由にどうぞ。期日までに実行していただければ問題ありません。ただ実行日が決まりましたら、一週間前には、こちらに日にちをご連絡ください」

野村が一枚の名刺を渡した。

他県の地方新聞の社名と電話番号、知らない人物の名前。

そして空欄となった告別日が書かれている。

実行日を、新聞社の告別広告として入れる。

ということなのだろう。離れた県ならばそう簡単に繋がりを推測はできない。

しかも、この時代では新聞広告の欄に告別日の知らせは日常的にのっているものだ。

怪しまれる可能性も低いに違いない。

ミフネが顎をしゃくると、

若頭はアタツシケースを次々と詰み始めた。

「アンタは誰かも知らないし目的にも興味は無い。

そしてアンタ達も、俺達に会うことはもうねえ」

「それで結構です」

野村は一礼すると、足元に捨てられた病気の資料ファイルを拾い彼女の車に乗り込みんだ。

車はゆっくりと現場から離れる。

…これで良い。

古手梨花が狙われてくれれば作戦は継続できる。

「古手梨花の死により雛見沢で大規模な災害が発生する」

という事実が大問題となればそれでよいのだ。

現在「東京」と呼ばれる組織では、幾つもの派閥が存在している。

その主流派は、死んだ旧長老達の流れをくむ者達が集まっていた。

死んだ長老たちは、核兵器に代わる生物兵器の開発を行っていた。

その開発は中止されたものの、その研究所で大惨事が起きればどうなるか。

それは死んだ長老たちの流れをくむ主流派に責任問題に波及するのは間違いない。

主流派の主要メンバーが失脚し、その権勢を失えば、野村の【親中派】が大きく勢力を伸ばすことができるだろう。

「よろしいのですか？」

あんな者達に任せて。運転手は暗にそう語り掛けてきた。

だが、野村は微笑みを答えとした。

もちろんミフネ達を全面的に信用しているわけではない。

失敗した時の次善の策は用意してある。入江機関を守る諜報工作隊「山狗」にも既に何名か手の者を潜り込ませている。ミフネ組が失敗した場合、最後は彼らが仕留めてくれるだろう。

だがミフネ組がやってくれた方が一番良い。

成功しても、失敗しても、ヤクザの抗争という形で、あと処理が楽だ。

もつとも最終的に失敗したとしても構わない。

この計画には成功の可否はさほど重要ではなく、

実行されるかどうかの問題なのだから。

無論、成功すれば、大規模災害を引き起こした元凶として敵対する主流派を失脚させることができ万々歳ではあるが、失敗しても大規模災害を引き起こしかねない研究を主流派がしていたとして、内閣に伝わるように調整はしてある。

成功にくらべて失敗した場合の影響は少ないであろうが、政府・内閣に恐るべき実験をしていたと知られては、主流派の権勢低下はいないまいだろう。うまく行けば、これを足掛かりに何名か失脚させることができるかもしれない。

つまり、今回の作戦で一番最悪な事態はミフネ達が行動を起こさない事だが、

これも、そう気に病むことでもない。

なぜなら、ミフネには実行しなければならぬ理由があるからだ。

ミフネの組は、園崎組の対外交渉を行う組織であり、海外組織と戦えるだけの影響力と実行力をもつぐらいに大きい。また、現当主のお魎に忠実とも言われ園崎組の中でも相当な実力を持つ大幹部であるとも言われていた。

だが、内情は少し違った。

ミフネには野心があった。園崎組を乗っ取るという大きな野心が。その話自体は、野村が幾つか手に入れた情報の中のとるにたらない一つでしかなかったが、

数日前に行われた園崎魅音の結納式後の荒れ具合から、その情報の信憑性が高まった。

ミフネは、園崎組の忠臣と言われているが、園崎魅音の次期当主には懐疑的だという噂があった。

実際にお魎にも、意見をすることがあるらしい。

園崎魅音の次期当主に懐疑的な理由は原因は若すぎるから、という事だが、これはハッキリいつて理由になってはいはない。若いならば、相応の歳になるまで補佐すれば良い事である。

さらに言うのであれば「若すぎるでダメなら誰が良いのか？」という問いには答えてはいない。

園崎魅音の母親である茜を押しているのならまだわかるが、そうでもない。

若いと言うのが理由であるとするなら、魅音の双子の妹を次期当主として押しているわけもない。

つまり、代替案の無い反対なのである。

これは、裏を返せばこうなる「候補者の中に園崎組をまとめられるヤツは居ない」「力のあるやつこそが園崎組のトップになるべきだ」「それは自分だ」と。

その推測が正しいか否かを調べるため、そして野村自身が『計画に使えるか否か』を見定めるために、この資料ファイル：「雛見沢症候群」の情報が書かれたファイルを組事務所に持ち込んだ。

結果は大当たりであった。

ミフネは、古手梨花の抹殺が依頼ではないかと言ったが、あれはファイルを見て導き出した推測では無い。彼の願望だ。

ミフネにして見れば、古手梨花の死を引き金に起こるであろう100人以上の死に、

現当主の園崎お魎と、次期当主である園崎魅音が含まれることが何



よりも重要なのだ。

そして、雛見沢におきた大災害を園崎家の管理責任にすることでクーデターを起こし、園崎組を手中に収める。

あの資料を見て、そのぐらいの展望を持ったのであろう。

だから20億という金を手渡されて、

ミフネが実行にうつさないわけがない。

元々ミフネは忠臣のふりをして裏切るつもりだった。

いずれにせよ、いつかはミフネは反乱を起こしたに違いない。

野村はその、ほんの切っ掛けを与えたにすぎないのだ。

「別に構わないわ。どうせ、最後に消すんですもの」

ミフネに渡した治療薬と予防薬は偽物である。

最初からミフネを生かす気など無い。

そもそも雛見沢症候群を研究している入江機関ならともかく、

開発中の薬を数十人分も手に入れられるわけもない。

鷹野三四の協力がえられれば、手に入ったかもしれない。

だが鷹野三四が仲間にはいっていれば、ミフネなどに依頼はしていないのだ。

「派手に死んでもらおうかしらね。クスクスクス……」

一番確実なのは、古手梨花の死の後におきるである『雛見沢大災害』によって、彼らがまとめて『処分』されることだが、さすがにいつまでも雛見沢にいるほど、ミフネも間抜けでもあるまい。

ならどうするのか？

ヤクザの対立抗争によって事務所が爆破されて死ぬ。よくある話だ。

クーデターといっても無血とはいかないだろう。

散発的な戦いが起きるはずだ。

そこに、ほんの少しだけ手を加えるだけで良い。

ミフネと若頭が死ねば、この依頼を知る者はいなくなる。

真相を知る者はいなくなり、

雛見沢大災害がなぜ起きたのか永遠に誰も知ることは無くなる。

もちろん、その前に雛見沢症候群が発症して勝手にくたばってくれ

ても良い。

そうなれば手間が省けると言うものだ。

車載電話が鳴り、野村は受話器を持った。

「ええ、予定通りです。プランAは失敗しましたが、プランBで続行します。」

はい。何も問題はありません。そうです。この未曾有の大災害は、政界内で大きな再編を引き起こすでしょう。はい、そのように下らい計画につき込むよりも我々はもっと中国に資金を提供するべきなのです。それこそがよりよい未来を日本にもたらすことになるでしょう……」

### 第三章・結納編

#### 第21話「9日目（金）A「成人教育」

「9日目（金）：入江診療所：朝：前原圭一」

朝起きると、既に魅音は学校に行く用意と朝食の準備を終えていた。

「どうやら、それだけでは無いらしく、学校にも午前は病院に行くことを伝えたらしい。」

「とは言っても、知恵先生に『子供の作り方を教えに貰いにいつてきます』なんていうと卒倒すると思うから、そこは『入江先生に、圭ちゃんので相談したいことがあります』って伝えて来たよ」

魅音はそういつて、悪戯っぽく笑う。

最近どうも、俺は便利なツールとして使われているような気がしてならないが、そこには目をつぶろう。

「しかしすげえよな。次から次へと、そういう嘘…コホン。言い訳が考えつけて。」

「やっぱりそれって、園崎家の当主だからなのか？」

「えーなんでよ。心外だなあ。嘘は言っていないよ。」

「だって、ほら、入江先生に楽しい家族計画の相談するのは間違いないでしょ？」

「…監督に聞きに行くことを、そういう言い回しで表現するのは正しいかどうかはわからんが、」

「色々と準備をしてくれた魅音には、素直に感謝したいと思うぞ」

「じゃあき、圭ちゃん。頑張ったご褒美…くれるかな？エへへへ」

魅音が両手を大きく広げて、キスを催促する。

「まったく、朝から可愛い事だぜ。」

俺は魅音に軽く三度ほどキスをすると、朝食を食べて一緒に診療所へと向かった。

診療所は、お年寄りの集会所みみたいになっている場合があるが、今日はガラガラに空いていた。

これなら、もしかしたら今日講義を受けることができるかもしれない。

「前原さん。前原圭一さん。お入りください。」

受け付けで、監督：入江先生の診察を受けたいと。申し込んで、ほんの数分で呼び声がかかった。

今日はどうやら、本当に暇な日らしい。

「よかったね圭ちゃん。大体金曜日って混雑するはずなんだけど、

こんなにも誰も診療所にこないなんて、これは私達ツイているよ」

魅音も上機嫌だ。

これで入江先生に頼み込めれば完璧だ。

「これは、これは、おはようございます。」

「おや？前原さんと、魅音さん。今日はお二人ですか？」

入江先生は、いつものように屈託の無い笑顔で迎えてくれた。

この笑顔は、不安な時は安心感を与えてくれるよな。

「圭ちゃん……」

魅音にたされて、俺は頷く。

「監督、実は俺達。今日は病気の診察を受けに来たんじゃありません」

「診察では無い？それでは一体どのような用件で？」

「俺達に、セックスのやり方を教えてはくれませんか！」

笑われるかもしれない。

そう思い。できる限り真剣な表情で伝えた。

俺達の真剣さは伝わるだろうか？正直、不安だ。

しかし、監督は笑顔であつたけれど、笑い飛ばしたりはしなかった。

「どういうことでしょうか前原さん？」

詳しく、教えては頂けませんか？」

監督はそういうと、診察カルテに何か文字を書き始めた。

外国語なのか、何が書いてあるかは読めない。

「俺達、実は…その昨日、婚前交渉をしようと思つたんです。

でも、やり方がわからなくて。魅音を傷つけてしまいそうになつたんです」

「傷つける？魅音さんを？」

なぜ、魅音さんは婚前交渉をしないと傷ついてしまうのでしょうか？」

監督は魅音をちら見する。

「魅音は、俺に見せてくれたんです。背中への刺青を……だから、俺はそれに答えなければ」

いけないって、でも、その……やり方がわからなくて……せっかく、魅音が全てをさらけ出して

俺を求めてくれたのに。でも、こういうのって誰に聞いてよいかわからなくて。

だから、監督に聞こうって……今日は来ました。」

「そうでしたか。前原さん。私を頼ってくれてありがとうございます。す。」

それは間違いではありませんよ」

「か、監督……！」

正直、どう言えば良いのかわからず、しどろもどろな感じで話をしてしまった。

だけど、監督は最後まで聞いてくれた。それが嬉しかった。

いつもは、変な人だと思っていたけれど、こういう時にしっかりと対応してくれる。

これが本当の大人なんだな。

くっそ。少し涙ぐんてしまったぜ。

「それでは、次に魅音さんにお聞きします」

「はい」

「なぜ、貴方は前原さんと婚前交渉をしたと思ったのですか？」

全てをさらけだしてまで」

「それは、前原圭一くんとの間に子供をつくりたいからです」

そうだったのか!?

俺は驚いた。てつきり行為そのものが目的だと俺は思っていた。

考えてみれば、もともと子供を作るためにするものだからおかしくはないんだけどさ。

ただ、その反応は監督にもわかったらしい。

一瞬だが、俺の方に視線をうつした。

「監督、それはおかしなことでしょうか？」

「いえいえ、全然おかしくはありませんよ魅音さん」

機械的に答える魅音に監督はほがらかに答える。

…おかしい。

魅音のしゃべりかたに違和感を感じて振り向くと、そこには昨夜のように、瞳から光を失い、

まるで何かに操られたかのように感情を抑制している魅音の姿があつた。

監督も魅音の変化に気が付いたのか一瞬、厳しい顔つきになつたが、

すぐに、笑顔に戻る。

「子供を作りたいと思つた理由を聞かせてはくれませんか？」

「子供は望まれるものではありませんか？」

「もちろんです。私も、前原さんと魅音さんの子供、是非、見てみたいと思います。私以外にも

きつと見てみたいと思う人がいるんじゃないかと思ひまして。」

「……………」

魅音は無言だ。なんで答えないんだ？

まるで、答えると問題があるような。もしかして…問題が、あるのか？

「魅音のお母さんや、お父様もお孫さん顔、見たいと思つていますよね」

「……………」

「そうだ。お魍さんも、きつと…」

「おバアさまは関係ありません。私が望んだことです。」

先生は何か勘違いされているのではありませんか？」

反応を、した。

「いえいえ、とんでもありません。自分の孫の子供を見たいと思うのが、普通の家族としての心情ですから。しかし、お魍さんが望んでいないとは意外でしたね」

「そんなことはありません。おバアさまは子供を見るのを望んでいません」

「そうですね。きっと、魅音のさんの子供なら見たいと思っすよね」

「……………」

…魅音？

魅音の体は震えていた。いつか瞳には光が戻っている。

そのかわり、その目には涙があふれていた。

「ぼっちゃん…もう歳だから。だから死ぬ前に、ひ孫の顔が見たいって…」

「魅音さん…」

「私、バっちゃんの願い叶えてあげたい。死ぬ前に。だってそれが、バっちゃんの夢だから」

俺はどう答えて良いかわからなかった。

昨夜、あれだけ俺に迫っていたのは、そういう理由があったのかなのか。あまり深くは考えていなかった自分が情けないぜ。

「ゴメンね。圭ちゃん。私…」

「何を謝るんだよ。魅音…俺の方こそゴメンな。何も、その…考えてなかった。お魎のバアさんのこと…」

魅音は右手で顔を覆い隠すと、声を抑えて嗚咽した。

俺は魅音の背中をさする。

昨日の夜のことはあくまでも、俺と魅音との間におきたことだと思っていた。

そこにお魎のバアさんが絡んでいたなんて考えてもみなかった。いや、思い起こせば色々とふにおちることもある。

魅音と付き合い始めた当初から、俺と魅音が一夜を共にするようにな、園崎本家は背中を押していた。それはきっと、お魎のバアさんがひ孫を見たかったからなんだろうな。

監督が、魅音の左手にそっと触れた。

「わかりました。一緒にお勉強しましょう。」

でも、魅音さんも、前原さんも一つ、約束して下さい」

「…はい。なんでしよう」

「子供を作ると言う事は、心身に重い負担がかかります。

それは、本来、貴方がたのような未成年者には耐えきれない場合もあります。

ですので医師としては…18歳まで待つてはもらえませんでしようか？」

「でも、バッチャの若いころは14、5でも出産したって」

「出産時の死亡率…ご存知ですか？出産は大変危険がともないます。

現代でも100%安全に出産できるものではありません。ましてや

体のできあがっていない貴方がたでは、そのリスクは大きく増加します」

「……………」

「死んでしまつては元も子もありません。お魴さんは、貴方の命を捧げて、子供を見たいと言われましたか？いえ、貴方だけではありません。子供だつて無事に生まれて来るかもわかりません。その時になつて、後悔するのは魅音さん、貴方だけではありません。お魴さんもきつと後悔する事になるでしょう」

「……………」

「少しでも早く子供を産みたい。そして元気な赤ちゃんをお魴さんに見せてあげたいんですね？

それなら、母子ともに健全であることが重要だとは思いませんか？

ね？魅音さん」

「…はう」

監督の優しく、穏やかな説得で、魅音はゆつくりと頷いた。

俺はティッシュを取り出すと、魅音の涙と鼻水をぬぐい取る。

「少し、待つててください。今、鷹野さんを呼んできます。

やはり、女性には、女性が一番でしょうから」

監督はそうやって立ち上がり、奥のドアに入っていた。

魅音は、俺の肩に頭をのせて、うつろな表情をしている。

俺はそれがいたたまれなくなり、何度も、魅音の頭を愛撫した。



—…本気で、園崎…さんを説得？

—…もちろん…使命…です

—…されますわよ？…を連れて…

—…いえ…で行きます…

扉の向こうから声が漏れている。

何か話し合いと言うより、口論をしているようだった。

だが、それもしばらくすると終わり、監督と鷹野三四さんを連れて戻ってきた。

「それでは、魅音さんは鷹野さんと一緒に奥の部屋でお勉強しましょう。」

前原さんは、ここで私と性教育のお勉強です」

「よろしくお願いします」

俺は頭を下げる。

魅音も、少し元気を取り戻したみたいで、

鷹野三四さんに声をかけられると、いつも通りの感じで立ち上がった。

「じゃね。圭ちゃん。」

また後で」

「おう、また後でな魅音！」

「9日目（金）：入江診療所：昼近く：前原圭一」

「ありがとうございます！」

俺は監督に頭をさげて、待合室に戻った。

監督は思ったよりもしつかりと、婚前交渉のやり方を教えてくれた。

これで、魅音との初夜もなんとかかなりそうだ。

最後のセッションで監督からもらったコンドームを見る。

—コンドームを持つというのは、男性にとって愛する者を守るための権利であり義務なのです。

コンドームを使うという発想は、今までなかった。

そもそも避妊具って、病気を予防するためというものだと考えていた。

俺は、魅音以外の女性とそういうことをする気は無いから必要ありません。

とさえ監督に言い放った。

だけど監督の講義中に

「望まぬ妊娠をして傷つくのは魅音さんだけでは無く、それをもたらした貴方もなのですよ？」

と言われた時は色々とショックを受けた。

人間誰しも、おかしくなる時がある。

暴走したり、熱情にあてられ、一線をこえるときがあるのだ。

—そのために必要なのがコンドームなのです。

一時の感情で妊娠させてしまい、未成熟な体で妊娠させてしまった場合、どうなるか。

妊娠は母体に色々な負荷を与える。

出産による死亡率は決して低くはなく、今も出産時に死亡する例も多々ある。

未成熟な体ではその可能性は高まる。

最初に監督が言った通りだ。

—それでも圭一さんは、魅音さんに子供を産んで欲しいと思いますか？

俺はもちろん、魅音が死んでまでも子供が欲しいとは思わない。

俺のいる未来には子供だけじゃなく、魅音もいなければダメなんだ。

そう思うと、コンドームがいらないだなんて言っているのが恥ずかしくなった。

今までいろいろと勉強してきたはずなのに、俺はてんてわかっちゃいなかったんだ。

「あ、圭ちゃん！もしかして待たせちゃった？」

「魅音か。いや、俺もさっき終わったところだぜ」

魅音も別室から、待合室に戻ってきた。

三四さんに連れられていかれた時は顔色は悪かったが、今ははつらつとしていて、声の調子もよさそうだ。

「お、圭ちゃんもコンドームをもらったんだ」

「つてことは、魅音も持たされたのか？」

魅音はポケットからコンドームの箱を取り出す。

ピンク色の可愛い形をしている。

俺が監督に貰ったのは種類が違うようだ。

「そうなんだよ！おじさんコンドームいらなくて言ったんだけど

いやあく鷹野さんが教えてくれた。『女性に安全日は存在しない』

つて話が中々強烈でさあ、返すに返せなくて…」

「安全日って、なんだ？」

「圭ちゃん知らない？ほらレデイコミであるじゃん。

今日は安全日だから、妊娠しないとかってヤツ」

お袋のレデイースコミックとかは、たまにみるけど、そういうシーンは見た事無い。

まあ、考えてみれば、そんなに激しい描写のある奴は、お袋も俺の目に届くような場所にはおいていないだろうけど。

「見た事無いけど、それって実際には無いってことか？」

「そうなんだよ！おじさんもビックリ！んで、鷹野さんは安全日を信じて妊娠したカップルの泥沼の別れ話とか、凶悪事件とか楽しそうに話すんだよ！」

「ああ、なんか想像できるな、それ…」

鷹野さん、そういう話好きそうだし。

「で、最後に『魅音ちゃんも、そういう悲惨な目に合わないようにはコンドームは常に所有していた方が、良いわよ。男の人ってほら、無責任だから…クスクスクス』ってコンドーム渡されてさ。」

なんかそんな話を聞いたら、突き返せなくてさ…」

よくよく考えたら、面白い話だ。

卵子は30日に1日しかたしか生存しないわけなのだから、つまり理論上29日は安全日はずだ。

だが、鷹野三四さん曰く、実際にはそんなことは無いんだという。

排卵期であろうとなかろうと、女性はいつでも妊娠するなんて…

「人体の神秘ってやつだよな。うんうん」

「…圭ちゃんつてさ。本当にそういう学問的な知識はよく知っているよね…おじさん感心するよ」

魅音はあきれたように俺を見る。

「し、仕方ないだろ。俺は今まで、そういう実践的なのは…なかったんだからさ！」

「クククク、まあね。仕方ないよね。お互い、そういうのと無縁な生き方してきたからね」

二人して顔を見合わせて笑う。

恋愛初心者で、色々大変だけど、それでもお互いに付き合えてよかったと思う。

もし、別な相手だったら、今頃大ゲンカして別れていたかもしれない。

感謝しているぜ魅音。

「そうだ。監督が、今日は診察料はいらなから、今度の土曜に野球の助っ人に来て欲しいってってって？俺は行くけど、魅音はどうする？」

「監督には恩ができちゃったしね。」

それに圭ちゃんが行くなら、おじさんも行かない理由はないよ」

魅音が指を絡ませてきた。

指を巧みに動かして遊んでいる。

しばらく指を魅音の好きなように遊ばせていたら、

何かよからぬことを考えたの、悪い顔をして近づけてきた。

「クククク…圭ちゃん、お昼まで時間あるしさ…さっそく、試してみない？」

やぶから棒に何を言っているんだお前!?

「今からその…する気かよ…!？」

待て、待て、待て、せめて夜まで待て！」

「…圭ちゃん、圭ちゃん。私が言っているのは

コンドームを試しに着けてみようって話で、そういうのじゃないって」

ああ、なら、安心したぜ…

…ってえええ!?

「そうだ！レナや梨花ちゃんや沙都子とか呼んで、

一緒に保険体育の授業をするってのも有りだよね」

いや、本当にお前は何をいつてんだ!?

ほ、ほ、ほ、保険体育の授業!!!

「いや、だって知恵先生ってさ」

保険体育ってほとんど力入れていないから、皆、全然知識がないわけじゃん

せつかくだから、おじさん達の知識のおすそ分けをしようってことさ。うんうん」

「レナはともかく、梨花ちゃんや沙都子はまずいだろ!?

避妊具つけるところを見せるって、完全に犯罪だろそれ!」

「いや、ただの勉強会だって…」

それともナニ?もしかして圭ちゃんって、梨花ちゃんや沙都子がストライクゾーンなわけ?

二人の前だと我慢できないとか?」

どさくさ紛れに何をいつているんだ!?

そういえば昔、詩音にも言われた気がするぞ

「圭ちゃんストライクゾーン。物凄くひろくありません?」とかなんとか…

いやいや、風評被害だ!

「んなわけやねえだろ!

そもそも俺の好きなのは園崎魅音だけだ!」

「アハハハ、そうだよね。

圭ちゃんが大好きなのはおじさんだもんね!」

そういうと魅音は俺に抱き着いてきた。

「当たり前だろそんなの!まったく、変な事を言うんじゃないよ!」

「まあ、冗談はさておき…:どう?」

おじさんと二人だけで、シ・て・み・な・い?圭ちゃん?ウヒヒヒ…」

魅音は俺に抱き着いたまま、耳元でそうささやく。

おいおい、なに、エロ親父みたいな事をいつんだ？

お前、仮にも女の子だろうが!?

「だって練習するにも圭ちゃん以外とする相手いないじゃん」

「そりやそうだけどき…」

「大丈夫、おじさん、とって食いやしないって!」

…本当かよ。

魅音の顔がよく見えないが、

舌がへびみたいにチロチロ出ている気がするぞ!

時間を見る。まだ午前11を少し過ぎた所だ。

今から学校へ行っても、10分、20分ぐらいしか授業を受けられない。

ならいつそ…

ゴクリ…

唾をのみ込む。

「魅音、本気か…?」

魅音は俺の頬にキスをする。

「私はいつだって本気だよ。圭ちゃん」

振り向くと上目遣いで頬を赤らめている魅音がいた。

12時に学校につくまで、俺達が何をしていたのかは…

うん。まあ、察して欲しい。

## 第22話「9日目（金）B 「大人の矜持」

「9日目（金）：入江診療所：昼：入江京介」

前原圭一が診察室から出て行った後、直ぐに入江京介は各所に連絡をし、本日の予定をキャンセルした。本日中に、行わなければならぬい仕事が無かったのは幸いだ。

雛見沢分校の知恵先生に前原圭一と園崎魅音の事情を電話で説明したら、すぐに園崎本家へ出向くことができるだろう。

「あら、あら、本気でお魎さんの所へ行くつもりなのですか入江所長？」

鷹野三四が、入江を見て笑っている。

その笑顔の意味は分かっている。

入江京介を嘲笑っているのだ。無謀だと。

「圭一さんには性行為の講義を行いました。この最大の問題点は別にあります。

未成年者同士の結婚だけであるなら、風習として片付けられましょう。しかし、

それが健康と生命にかかわる事なら、医師として見過ごすわけには参りません」

だが、入江京介は、鷹野三四の嘲笑に毅然として答えた。

確かに、入江京介が行おうとしていることは、この雛見沢で生活している者からすれば、確かに無謀以外のなにもものでも無い。

彼は園崎お魎に対して直談判しにいくつもりなのだ。

前原圭一と、園崎魅音の婚前交渉の件について。

「魅音さんのお話で、お二人がお魎さんに強いプレッシャーを受けていることがわかりました。

これは未成年者へ妊娠を強要に等しい行動です。ともすれば児童虐待にも抵触する可能性もあるでしょう。そのような相談を受けて、動かないわけには参りません」

「村の有力者に喧嘩を売る。あまり賢いやり方とは思えませんわね」

「喧嘩ではありませんよ。考えを改めてもらえるように、お願いをし

にいくだけです」

入江はニツコリと笑う。

ひ孫を見たいと言う老婆の気持ちは分からなくはない。

その気持ちは否定するものではないが、そうはいつても前原圭一と、園崎魅音はまだ若い。

しかるべき時期まで待ってもらおう。それだけを入江は医師として伝えにいきたいのだ。

鷹野三四は処置無しと両肩をすくめる。その時、

不快な笑い声と共に診療室のドアが開き、一人の男が入ってきた。

むふふふ…

入江京介と、鷹野三四が男をみる。

そこにいたのは興宮署の大石警部であった。

入江京介は眉を一瞬だけ動かした。

この男は“オヤシロ様の使い”と言われるだけに、いつもタイムミン  
グが悪い時に訪れる。

「いやあく今日は、飲み過ぎちやつてですね。ちよくとみてもらおう  
かと思っただんですが、外で、お二人の話を聞いたら、調子、戻っちゃ  
いましたよ」

「そうですか。それでは良かったです。それでは今、私は忙しいので  
…」

「むふふふ…じゃあ、入江先生、ちやつちやつと、通報しちやいましたよ  
うか?」

空気が凍る。

入江は厳しい顔つきで大石を見た。

「なぜ、ですか?」

「なぜって、貴方も今、言っていたじゃありませんか? 園崎お魎さん  
が、孫の魅音さんと圭一さんに、ひ孫をこさえろとプレッシャーをか  
けて、セックスの強要を行っていたんでしょ?」

未成年児童に対する性行為の強要は立派な児童虐待。犯罪ですよ  
…それとも…」

大石は笑顔から一点。



獲物を狙う猛獣の如き目で入江をにらみつける。

「入江先生、アンタ、お魎のバアさんに味方する気かい？」

だが、入江は動じない。

入江京介にも矜持がある。医師としての矜持だ。

WHOでは健康の定義は、こうなっている。

健康とは、肉体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態であり、

単に疾病又は病弱であることでは無い

医師として、前原圭一と園崎魅音の健康を考えるのであれば、単に安易な妊娠をいさめるだけではすまない。二人が、妊娠を強要されることなく、正しい性知識を持って、社会的に平和で安全で問題無く過ぎさなくてはならないのだ。

そのためにも園崎お魎を説得し、納得してもらい、誰も傷つくこともなく終わるのがベストだ。

事を荒立てる気は無い。問題が大きくなれば二人の将来に禍根を残すかもしれない。

だからこそ、無茶だと思われても自ら説得に赴こうと決意したのだ。

そんな気概を持つ入江京介が、百戦錬磨の大石の眼光にもひるまないのは当然である。

「大石警部、何か勘違いをされているではありませんか？」

「…あん？」

「確かに、私は園崎魅音さんと前原圭一君に相談を受けました。しかし、彼らの話を聞く限りでは、お魎さんにひ孫を見せたくて自発的に行ったことです。さらに言えば、あの二人はまだ婚前交渉をしておらず、実害はまだでておりません」

「おい、おちよくっているのか？アンタ、セックスの仕方おしえたんだろ！共犯関係ってことで、取り調べてもいいいんだぜ？」

「正しい性教育を行うのは医師の務めです。そして18歳に満たない段階での婚前交渉はしないようにと伝えてあります」

正論だ。大石は顔をゆがめる。

虐待を受けた児童を通報する義務はある。だが、大石が本人達から

直接虐待の話聞いたわけではない。さらに医師が事実を持って虐待では無いと主張している以上、それより踏み込むわけにもいかない。

証拠が無ければ行動ができないというのは、沙都子が叔父に虐待されていたと言われた時と同じだ。

「ただ、大石さん、貴方の言い分にも一理あります」

「ほう…どの部分が、ですかね？」

「お魎さんが、前原さん達にプレッシャーをかけている部分にです」

「ふむ…」

入江京介は大石という男を良く知っている。この男は、口で言うほどに児童虐待の問題に関心があるわけではない。

もし、そうであるならば、沙都子が困っている時に、もう少し真剣に行動していたはずである。

大石が興味があることは、ただ一つ。それが、園崎家への突破口になるか否かだ。

大石警部は、毎年雛見沢の地で綿祭りの日に起きる殺人事件…通称「オヤシロ様怪死事件」の真犯人は園崎家だとらんでいる。

だが、その捜査は難航していた。園崎家には強固な防御システムが存在する。それは弁護士であったり、政治家であったり、身内の警察であったり、様々な場所に園崎家の人間が、園崎家の本家を守ろうと活動をしているのだ。

大石警部は、今年で定年を迎える。それまでに、これらの事件を解決したいと焦っている。

園崎家という巨大ダムに開けるハリの一穴にしたいのだ。この前原圭一と園崎魅音の婚前交渉を児童虐待問題にして。

「今から私はお魎さんに、あの二人へプレッシャーをかけないようにお願いしてくるつもりです」

「そんな話を、お魎のバアさんが聞くとは思えませんがね」

大石は鼻で笑う。

鷹野三四と同じように「あの頑固ババアが聞き入れるわけががない」という確信に満ちた反応だ。

だが、入江は微笑む。

「大石さん。喧嘩はルールにのっとってやるものではありませんか？ 私は沙都子ちゃんを救出する前原圭一君にそのことをよく教わりましたよ」

「…ほう、つまり聞き入れなかった場合はどうする？」

大石は、園崎家に対して妄執を抱いている。

だから信用できないし、だからこそ信用できるとも言える。

相手が園崎家であったのなら、大石は一步も引かないだろう。

「…その時は、大石さん。よろしくお願いします」

もし、お麴さん自分の説得を受け入れない場合、一番頼りになるのは大石なのだ。

それはおそらく、間違いないことだろう。

「9日目（金）：入江診療所駐車場：昼：大石蔵人」

大石蔵人は診療所を出ると、駐車場に止めていた覆面パトカーにすぐさま乗りこむ。

助手席にいた刑事の熊谷勝也は、今出て行ったばかりの大石がすぐに戻ってきたので少し驚いた。

「随分早かったつすね大石さん」

「ん〜ふふつ。熊ちゃん。少年課の課長だれだっけ？あ、あと児童相談所、児童福祉センターに取次お願いできる？」

「そりゃ、構いませんが。一体、どうしたんですか大石さん？」

大石は煙草を吸おうとして胸ポケットに手をやるが、禁煙していたのを思い出した。

最近署内でも禁煙する者が多い。署長に言わせれば、今どきの警察官は煙草を吸うと出世できないらしいが、今年定年の大石にはもう関係のない事だ。

とは言うものの大石も協調性がないわけでもない。

周囲に合わせて、ここ数日は健康のために煙草を吸うのをやめた。

「ふむ。熊ちゃん。最近、園崎家で結納あったの知っていますでしょう？」

「ええ、園崎のお嬢さんが、前原屋敷の息子さんと婚約したんですよ」

「それなんですがね…園崎のバアさんが、ひ孫見たいって、その二人に子供を作るように要求しているようなんですよ」

「はあ？だって、あの二人未成年ですよ？子作りしろって、それ児童虐待じゃないですか！」

児童虐待の定義には

・児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。

が存在する。

未成年者に性的行為を行うだけが虐待では無い。

性的行為を強要するのは立派な児童虐待にあたる。

児童とは厳密に言えば、小学生ぐらいの子供を指すが、この場合は成人していない未成年者、すなわち20歳に満たない人間を含む。

つまり、前原圭一と、園崎魅音に対して子供を作れと圧力をかけるのは児童虐待にあたるのだ。

「ただね。入江先生が言うには、まだあの二人していないらしいですよ。やり方がわからないらしくて。んふふふ…初々しいですねえ」  
「いや、だからと言って通報しないってのは無いんじゃないですか？」

熊谷刑事はそう言ったが、

この時代（昭和58年）の定義では、あくまでも『虐待を受けた児童を通報する義務はある』が『虐待を受けたと』思われる。『場合には、通報の義務はない。』

『虐待を受けたと思われる場合』に通報する義務が生じるのは平成20年に児童虐待防止等が改正された後である。

つまり、この時点では警察と同じで『確たる虐待の証拠』が無ければ、医師に通報する義務が無いのだ。

「そこなんですよ。入江先生は、お魎のバアさんを説得するって息巻いているんですよ」

「無理でしょそんなの」

熊谷は即答した。

大石と同じ意見だ。雖見沢や近隣一帯を牛耳る首魁が、そんな簡単に人の意見を聞くわけが無い。

おそらく入江先生が出向いたところで、一喝されて終わりだろう。だが、問題はその先だ。

「入江先生は、ああ見えて気骨のある方ですからねえ。きつと通報しますよ。んふふふふ：ただ、そのままってのは面白くありませんよね？」

大石達は何をしなければどうなるのか。それは火を見るよりも明らかだ。

児童相談所に通報がされ、児童福祉司が園崎家に訪れても、お茶と菓子を受け取って終わりだろう。多少、茶飲み話が出るだろうが、そんな深い話もせずに退散し、書類に「様子見」と書かれて判子を押されて終了になることは間違いない。

これは何も、園崎家があらゆる公的機関：それは警察や役所、保護施設など：に親類縁者がおり、その力を発揮するからという理由では無い。

むしろ、そのような園崎家の力を使う必要もないだろう。なぜなら、当の前原圭一と、園崎魅音に虐待されている意識が無いからだ。

「せいぜい、お魍のバアさんに『ひ孫が見たいのはわかりませんが、未成年に無理は言わないように』と、一言添えられて終わりですな。ダーハハハハ！」

「で、大石さんは、それで終わらせるつもりは無いんでしょう？」

「んふふふ、もちろん。こんな好機、めったにあるものではありませんからねえ」

園崎家の防衛システムは鉄壁で隙が無い。通常では突破口を開くのは無理だ。

しかし、児童保護を名目に園崎邸に踏み込むことができれば、多くの物証を握ることができるかもしれない。

「たしか署内に児童虐待対策チームがあったはずですよ。そっちの方にも連絡をつけておきます」

「では、熊ちゃん頼みますよ。私の方でもちよくと色々調整をしま

すから」

園崎お麴は老いた。残りの余生の短さから、未成年者の孫に婚前交渉を強要すればどういふ事態を招くのか想像もできなくなっているらしい。

(…マスコミに情報を流し『地方の田舎町に残る悪しき因習！未成年者同士をセツ〇スさせる旧家！』なんて記事を書かせて、世間を煽るのも良いかもしれませんねえ。B級イロモノ雑誌なら喜んで食いつきますよコレは)

「…大石さん。今、すつごい悪い顔をしていましたよ？」

「いやいや、人間なんて勝つためには、無限に卑しいことを考えちゃうもんですからねえ」

「ちよつと洒落にならない手段はやめてくださいよ。一応、うちら正義の味方なんですから」

「いやいや、悪い奴らに勝つてこそその正義でしょ、熊ちゃん？んふふふふ…」

ヤクザは、相手の家に乗り込むとき、少し開いたドアにつま先を入れ、それを前に押し込んで少しずつ入りこみ、最終的に体全体を家の中に押し込むのだと言う。

しかし、なにもこの方法はヤクザだけの専売特許では無い。得意とするのはヤクザだけでは無いのだ。ただ、それが正しい方法であったかどうかは結果を見るまでわからないが。

## 第23話「9日目（金）C「確定分岐点」

「9日目（金）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

俺と魅音は色々と時間を調整し12時に学校に到着した。

担任の知恵先生に病院に行ったことを報告するため、教室には行かず、まっすぐ教務員室へと向かう。

教務員室を開けると、そこには菩薩のような微笑みを称えた知恵先生がいた：

俺達二人はその姿を見た瞬間、若干引いた。

なんだあの笑顔は？本当に知恵先生か？

知恵先生は二つの椅子を俺達の前に置くと座るように勧めてきた。

「お座りなさい。お二人とも…」

俺と魅音はとまどいつつも椅子に座る。

代表して俺が口を開こうとしたが、その前に知恵先生が俺と魅音の手をとりこういった。

「良いんですよ…わかっていますから」

…どういうことだ？

俺と魅音は困惑気味に顔を見合わせる。

「お二人とも、辛い思いをしていたんですね。わかります」

え…と、何が？

「これは、私の友達の話ですが、似たような話がありました」

似たような話って、一体…？

「親からは、恋人がいらないのかと言われ、

同僚からは結婚しないのかと言われ、

同世代の友人から妊娠しないのかと言われる…

ええ、そうです。言う方は親切心かもしれませんが大きなお世話です！」

あの…先生の友人の話ですよ？

「見合いのパンフレットが親から送られてきたり、

自称『100人のカップルを成立させた』仲人おばさんが連絡よこしたり、

保険外交員から、女の幸せは結婚だとか告げられたり…  
本当に、精神をすりへらされる思いですよね!!」

その話、先生の友人の話なんですよね!?

「人がどういう生き方をしようが関係ないじゃないですか!」

ええ、そりや毎年インドにカレー修行に一緒にいつてくれる人がいたら

今すぐにだって結婚しますよ!? だけど、世の中そんなうまくいかないでしょ!

カレーよりも重要なことが人生にはあるっていうんですか!?

いや、先生の友人の話じゃないんですかコレ!?

「だからね。先生は二人に言いたい。

回りが言う事なんて気にしてはダメ。二人はまだ未成年なんですからね。

早く子供をつくらないの? なんていう人がいたら、そんな人こそ常識知らずなんです。

圭くん、そんな人たちのせいで心を痛めなくていいんですよ?」

知恵先生が生暖かい目で俺達を見つめていた。

その眼差しは確かに慈愛に満ちた物だったけれど、

一体、先生が何を言っているのかはよく分からなかった。

俺と魅音は教務員室を出ると、同時に大きく息を吐く。

「…魅音、一体、知恵先生は何を言っていたんだ?」

俺、サッパリわからなかったぜ?」

「圭ちゃん、きつとあれだよ。監督が知恵先生に診察内容を電話したんだよ。

だって『早く子供をつくらないの?』って話、今朝、監督以外としたことないし」

ああ、そういうことか。

すると…

「え、それじゃあ、知恵先生の頭の中じゃ、俺が自殺未遂したのって、バアさんに『早く子供を作れ』って脅されたからってことになって



るのか？」

「ん、まあ、そういうこと…だと思っよ。」

しかも、バツちゃんに脅されたって話は、結構信憑性ありそうだし」  
たしかに、お魘のバアさんに「早く子供をつくらんか！」なんて脅されたら精神をすり減らしそうな気がする。俺は、お魘のバアさんが、そんなに悪い人では無いとは知っているけれど、世間一般的には文字通り「鬼婆」だろうし。

「なんてこつたい。マジかよ…」

瓢箪からコマじやないけど、

ついた嘘が明後日の方向に飛んでいって感じる気がする。

やつぱり嘘なんてつくもんじやないよな。

どこに飛び火するかわかったもんじやない。

「ゴメンね。圭ちゃん…なんか、いろいろと変な感じにしちやつて」

魅音が軽く頭を下げた。

無防備なその頭を、俺は軽く撫でる。

「なんかさ魅音。お前、最近謝ってばつかだな…」

「…え？」

「俺さ、魅音の悲しい顔より、明るい顔を見る方が好きだぜ？」

ここ最近、園崎家絡みで、魅音が俺に謝ることが多い。

俺は大したことは無いと思っっているけど、魅音にとってみれば、俺にひどい目をあわせたという負い目があるんだろうな。

らしくない。とは言わない。

それも、魅音の一面だ。詩音に言わせれば「ヘタレ」ということだろうけど、俺はそんな一面を持つ魅音が好きだ。

だから、こう言おう。

「だからさ『ゴメン』じゃなくて『ありがとう』って言ってくれれば嬉しいぜ？」

そっちの方が、明るい魅音が見れるから、さ」

「圭ちゃん…」

すまなそうな顔をしていた魅音は、

少し顔を赤らめると、一呼吸おいて微笑んだ。

「うん…私のために色々ありがとうね。圭ちゃん」

微笑んだ魅音は愛らしくてカワイイ。

うん。やっぱり魅音には笑顔が一番似合う。

くっそ、ここが教務員室前じゃなかったら抱きしめてやるのに。

〔9日目（金）：雛見沢分校教室：昼：前原圭一〕

俺と魅音が教室に入ると、レナ、梨花ちゃん、沙都子と、もう一人…詩音が待ち受けていた。

「ヤッホー☆お姉元氣？婚約者と一緒に重役出勤だなんてやるー！」

「詩音!?平日のお昼時間に、なんでいるのさ！」

「そりゃ、沙都子がいるからに決まっているからじゃないですか！」

沙都子のいるところに詩音ねーねー有りってね☆」

詩音の手には大きな包みが握られている。

おそらく、その中には沙都子のためのスペシャルなカボチャ料理が入っているんだろうな。

本当に愛されているぜ沙都子。

「ところで…」

詩音は魅音に近づくと、鼻をひくつかせて腕を組む。

何やら考え事をしはじめた。

「お姉から圭ちゃんの匂いがするんですけど…何かしてました？」

「ふぎや!？」

明らかに挙動不審になる魅音。

視線が縦横無尽に動き、誰が見たってなにかやっていたとわかる動きだ！

「う、嘘でしょ!？」

「はい。嘘です!…でも、マヌケは見つかつたようですね☆」

「うぎやああああ!!!」

あ、やられた。

見事に誘導されちゃった。

さすが詩音だぜ、魅音をおちよくることに関しては世界一だ…

「で、午前中は二人で何をしたんですか？」

「してない!してない!なにもしてない!圭ちゃんも、ほらッ!なん

か言つて！」

「でもしてたんですよ？圭ちゃん☆」

「あ、うん…」

しまった!?つられて思わず返事をしちまった！

俺もひっかかっちゃうなんて!?

「そこは否定しなきゃダメだなところでしょ圭ちゃんツ!!!」

でも、魅音が慌てるさまが面白い。

これはこれで有りかもしれない。

席に座っている沙都子と梨花ちゃんとレナが、

笑いながら、早くお昼をとろうと催促する。

「皆さん。おたわむれになるのもよろしいですが、

早く食べないとお昼がおわつてしまいますわよ?。」

「みー☆食べる時間がなくなるのです」

「あはははは！ほら、魅いちちゃんも、圭くんも、早くたべよっ」

詩音に対して噛みつかんばかりに、唸り声をあげている魅音をなだめて

俺達は席についた。

今日は病院に行くということ、魅音のお弁当はいつもより少なく重箱一段だったが、

その代わりに詩音のスペシャルなカボチャ料理が眼前にひろがっていた。

カボチャのソテー

ガボチャのハンバーグ

カボチャのグラタン

カボチャのサラダ

カボチャの煮物

カボチャの和え物。

エトセトラ、エトセトラ…

「沙都子のために、いっぱいつくってきましたよー☆

さ、沙都子、食べて食べて！」

満面の笑みで詩音は料理を並べている。

名前が違うだけで中身が一緒っぽいのもあったが、総量でいえば相当なものだ。

しかも…沙都子は嫌がってはいるが…これがかかなり美味しい。俺はすかさず、カボチャの煮物に手を出す。

「おっと沙都子、食べないのなら俺が頂くぜ?」

レナも箸を進める。

「詩いちゃんの料理おいしそうだよね☆おいしそうだよね☆」

梨花ちゃんも、魅音も遠慮はしない。

いつもどおり、争奪戦が繰り広げられる…はずだったが。

沙都子が動かない。

「どうした? お前が喰わないなら俺達が全部くっちゃまうぜ?」

いつもの挑発。こうすることで、沙都子はムキになっていつもは食べ始めるのだが…

どうしたことか、沙都子は詩音のカボチャ料理を見つめて何か思いふけているようだった。

「どうしたの沙都子ちゃん。どこか体が悪いの?」

レナが声をかけると、沙都子は顔をあげて、にっこりと微笑んだ。

「いえ、あまりにも幸せで、楽しくて…もったいない気がしまして」

…沙都子。

沙都子は、去年実の兄貴が失踪し、イジメていた叔母が死ぬという体験をした。

そして、今年は北条鉄平というヤクザ者に軟禁状態にされていた。

それを俺達は何とか奪い返すことには成功したが、沙都子の心には大きな傷があるのは間違いなかった。

「本当に、皆さんと一緒にいれて…この雛見沢で生きてこれて良かったと思いますわ。」

私なんかのために、このような料理をつくってくれて…詩いねーねー…本当にありがとう」

それなのに、沙都子はこの雛見沢にいるのが幸せだと言う。

その言葉は、沙都子の仲間であり、家族であると思う俺達にとって、この上もない嬉しい言葉だった。

「沙都子：嬉しい！ねーねー嬉しい！食べてツ！いっぱいいたべて！！私、沙都子のために、いっぱい、いっぱい頑張るからっ！」

沙都子に抱き着くと、次から次へと、沙都子の口にカボチャ料理を詰め込んでいく！

沙都子の言葉が嬉しいのはわかるが、さすがに詩音はやりすぎだ！

「い、いやあああ!!だから、詩音さんには、

あまり感謝の言葉を伝えたくないんでございますのよ！がぶがぶがぶ!!」

俺達は詩音に愛される沙都子の姿に笑った。

確かに、俺も雛見沢にきて楽しい時間を過ごしている。

レナも、梨花ちゃんも、そして魅音も。

みんなが、みんな、ここでは毎日、楽しく、幸せに生きている。

「そうですわね。きつと、この雛見沢には幸せになる魔法がかけられ

…

って、話している途中で口に入れないでくだ…ガボツ!!」

何が言いたいかは分かるぞ沙都子！

この雛見沢には皆が幸せになる魔法がかけられているんだって言いたいらろう？

だからしつかりと、良く噛んで食べるんだ！

「強い想いは、運命を確定させるのです」

今のは梨花ちゃんか？

俺達は梨花ちゃんに視線をうつした。

梨花ちゃんは語る。

「この雛見沢が、沙都子にとって幸せで、皆にとって楽しい場所であるのなら…それは皆が強く望んだ結果なのですよ」

強い想いは、運命を確定させるか。

梨花ちゃんは良いことをいうよな。

「だとしたら…」

沙都子は、詩音の魔の手から逃れて、

梨花ちゃんの後ろに回り込むと両手で抱きしめた。

「私はこの雛見沢で梨花と…皆さんと一緒に、いつまでも楽しい日々

を過ごせますわよね」

「もちろんです。沙都子とボクはずっと一緒ですよ。いつまでも、いつまでも☆にぱー」

「そうですね、物語の最後は、いつだってハッピーエンドと決まっておりますわ」

さらに沙都子の後ろに詩音が回り込んで抱きしめる。

「もちろん、私も一緒ですよ沙都子☆ねーねーもずーと一緒にいますからね」

その様相はまるで、ダンゴが三つくっついているかのようだ。

さしずめ団子三兄弟、三姉妹ってところかな。

そういうと魅音が爆笑した。

「アハハハ、面白い事いうね。圭ちゃん。うん。きつと流行るよ、そのフレーズ！」

「だんご三兄弟の言葉のどこに流行する要素があるってんだよ…」

たまにわけの分からないことをいうな魅音も。

「しかし、強い想いが運命を確定するって言うんならさ…」

圭ちゃんっておじさんのこと大好き人間だから、何度生まれ変わっても、絶対に一緒になる運命だってことだよね！」

魅音のやつ…

皆の前で、よくもまあ、そんなに自信満々に言ってくれるもんだぜ。

俺の方が、なんだか恥ずかしくなってきた。

「アハハハ！だって事実じゃん。告白したの圭ちゃんだし！」

ん？待て、そうだったか？

「たしか最初に告白したのは魅音じゃないか？」

もしも、告白したらOKしてくれる？とか何とか言っただろ？」

「そ、それはIF！もしも！の話、そんなこと言うだったら、産まれてくる子供に『お父さんは雛見沢に引越してきたときからお母さんのことが好きだった』って、嘘つくからね！」

おいおい、子供に嘘をつくな。嘘を。

でも、まあ、それでもいいけどさ。

「ふえっ？いって…」

「いや、だからさ。引っ越した時から好きだったって…それでいいってこと」

「圭ちゃん…引っ越してきたときから、おじさんのこと…好きだったの？」

おい！それはお前の嘘だろ！

なに、信じてるんだ！

…あはははは！

ほら、レナが笑い出したぞ！

「そういえば、圭くん。最初の頃に、魅いちちゃんのこと『可愛い、可愛い』っていつていたけど、じゃあ、あの時から、魅いちちゃんのこと、好きだったんだ！」

え？いや、そっちの話かよ！

確かに、最初の頃そんなこといつていたが…

「あれはだなレナ…」

「まさか、圭一さん。単なるイタズラ心で、魅音さんをからかうのが楽しかった！」

…とか言うつもりではありませんわよね？」

俺が否定する直前に

沙都子がニヤリと笑って牽制してきた。

魅音が悲しそうな顔をしてこっちを見ている。

「そうなの圭ちゃん…？」

…うっ。

そういう顔で見られたら、そんなことは言えないじゃないか。

「そんなわけ…ないだろ沙都子。」

俺はあの時から、その…魅音の事が可愛くて仕方が無かったってだけさー！

よし！嘘は言っていないな！ギリギリの着地点だ！

「そっか…その時から、おじさんの事が好きだったんだ。嬉しい圭ちゃん…えへへへ…」

「ま、まあな」

満面の笑みで魅音が俺の体にしなだれる。





面白すぎだろ、お前ら…なんか、沙都子が白い目で俺達を見ているし…

「なんだか、圭一さんと魅音さんを見ると、

運命が確定しているというよりたまたま偶然一緒になった。って感じがしますわ」

…うっ。沙都子の言葉に言い返せない。

確かに、あの時、ロッカーに入るといふ罰ゲームが無ければ、もしかしたら告白していなかったのかもしれない。そう思うと、これは確かに奇跡なのかもしれないが…

いや、それは違う！確率とか、そういう話じゃない！

「沙都子それは根本的な勘違いをしているぜ！」

「何がですか？」

「例え確率がなんだろうが、今、俺達は付き合っている事実にはかわりはない！」

つまり、俺と魅音が付き合う確率はこの世界では100%と言う事なんだ！

「そうだよね…うん、そうだよ…」

圭ちゃんとおじさんは…エヘヘヘ…絶対だよね」

魅音が頬を緩ませて、ゆるキヤラみみたいな顔で俺を見ている。

そうさ！不確定な運命がどうだろうと知った事では無い！

俺のいるこの世界では、俺は魅音と確かに付き合っている！

その事実はかわらないし、変えられない！

だからこそ言える！俺は魅音と付き合う確率は100%！

沙都子よ、詭弁だとわらえばわらえ！

これが前原圭一の算術だぜ！

「…まあ、その通りでございませすわね」

…え？意外な返事だな。

てつきり、沙都子のことだから「何をいつているんですございませすの？」

ぐらいのツツコミが入るとおもったが…

「おーほほっ！圭一さん。他の世界でどのような選択があったとし

ても、私たちのいる世界こそが全てではございませんこと？違う運命をたどった世界がどうなっているかは知る由もございませんが、私たちは、今、全力でハッピーに生きておりますのよ？なら、それでよろしいではございませんか」

そうだな。確かに沙都子の言う通りだ。

例えどのような選択肢があつたとしても、俺達が生きているのは無数の選択肢の中から生み出された「今」この世界なんだ。

詩音も口を開く。

「歴史にIFは無いつて言いますが、逆にいえば前向きに生きて行くこうつてことでもありますよね？後ろばかり見て、『ああすればよかった』『こうすればよかった』なんて思うのは健全ではないと思います。私達は未来に生きていてるんですから」

レナも同意する。

「だよね！だよね！私達、皆誰もが色々な過去を経験してきていると思うけど、それも今日の幸せのためだと思えば、きつとそれは、どんな辛くても良い経験だつたつて思えるんじゃないかな？私はそう思うよ！」

魅音も頷く

「そうそう。大事な今は今だよ！圭ちゃんと付き合えない世界があるとしたら、その魅音はすつごく損をしていると思うし、そんな世界には、おじさん、行きたく無いもん！そう思えば、圭ちゃんと付き合うきつかけになったロッカーに閉じ込められた罰ゲームには感謝しかないよ」

そういえばロッカーに入る罰ゲーム。

あれつて結局、誰が考えたんだろう？

梨花ちゃんに頬をすりすりしていた沙都子が、懽然として口を開いた。

「圭一さんも、つまらないことをいつまでも考えておいでですわね？誰だつて良いではございませんか。そのおかげで魅音さんとラブラブな生活をおくれているんですから。ねー梨花？」

「そうなのです。きつと、圭一と魅音が、あまりにも進展が無いので、

神様が二人にきつかけをつくってくれたんだと思いますよ☆にぱー」  
まあ確かに。

今となつては誰が考え付いたかなんて、どうでも良い事か。

しかし、沙都子。

お前は要所要所で、何気なく良い事を言うよな。

「おーほほほほ！圭一さん、ようやくお気づきになりましたの？料理  
だけではなく、

人生にもふがない圭一さんのために、私、結構フォローしてさしあげ  
ておりますのよ！」

「サンキューな沙都子！」

いつもにーにーは、お前に助けられているぜ！」

俺は沙都子の頭をくしゃくしゃになでる。

「なでるなら、もう少しやさしくなさいませ！」と猛抗議する姿を見  
て、俺は笑う。皆も笑う。

そうだよな。沙都子だけじゃない。

レナにも、梨花ちゃんにも、詩音にも、そして、魅音にも。

俺は、助けられ、支えられ、導いてもらっている。

この部活メンバーは、本当に最高だ。

「そして魅音、本当にお前と出会えて良かったぜ。ありがとうな」

「ふえっ!? あ、アハハハ…こっちこそ…その…あり…アハハハ！もう  
圭ちゃんったらさ！」

不意打ちはダメだって！」

そして、その最高の1人が、俺の嫁なんだ。

## 第24話「9日目（金）D「風船割り」

「9日目（金）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

午後の授業が終わり、放課後になった。

お昼の食事後に、いったん学校の外に出ていた詩音も戻ってくる。昼食を食べたら興宮に戻るのかと思ったら、どうもそうでもなかったらしい。

学校に行かなくても大丈夫なのか？と思っってはみたものの本人曰く、

「お姉と違って要領がいいので☆」だとか。

まあ、詩音がいれば部活はさらに楽しくなるので、俺としては嬉しい限りだ。

もつと魅音曰く「詩音はさつきと帰れー！」ってことらしいけれど。これは照れ隠しだろう。

その証拠に、今日の部活は二人一組六人で行うタッグ戦だ。

「傾注！傾注！みんな、今日は詩音もいるから、二人一組になってゲームをするよ！先にゲーム内容を知ると有利不利がわかっちゃうから、まずクジで公平にパートナーを決めるからね！」

そういうと、魅音はクジの入ったお手製の白い箱をとりだしたが、あつというまに詩音に取り上げられてしまった。

「ちよつと詩音、なにすんのさー。」

「お姉のことから、細工して圭ちゃんと一緒のチームになろうとしてみせん？」

「なんのことか、おじさんさっぱりだよ」そういうと横を向いて口笛を吹く。

なんてわかりやすいとぼけ方をしやがる。

「公平なら別に私がクジ管理をしても良いですよね。お姉☆」

といって、詩音は手持ちのバックにクジを入れて、皆にひかせる。その結果。

園崎詩音と北条沙都子

前原圭一と竜宮レナ

園崎魅音と古手梨花

というチーム構成になった。

「ちよつとなんなのこれ！詩音、アンタ沙都子と一緒にあって

私と圭ちゃんが別々になつてゐるじゃん！インチキだ！インチキ！」

「インチキしてないでーす☆普段、自分がインチキしている人に限つて

他人も自分と同じようにインチキしていると思うものなんですよねー」

魅音の抗議はまるで無視。

ぐぬぬ顔の魅音に対して、

詩音は涼しい顔で沙都子と抱き合い、二人は邪悪な笑顔を俺達に向けてる。

「おくほほほ！それでは詩音さん、私たちの力を皆様にお見せつけてさしあげましょう！」

「ええ、沙都子！私たち北条シスターズの力を、奴らに見せつけてあげましょうね！」

北条シスターズってなんだよ。詩音、お前の名字は園崎だろう。

だが、そのツツコミを入れると恐ろしいことになりそうなので、あえて触れない。

魅音が気をとりなおして、ゲームの備品を机の上に置いていく。

黄色い工業用ヘルメット。プラスチックの防塵ゴーグル。それと紐で繋がれた二枚の木の板。

それが人数分、計六セットだ。

「それじゃ、改めて。今日のゲームだけど、これらの道具を身に付けてやってもらおうよ！」

これらは、学校に併設されている農林所から許可を貰って借りたものだから安心して」

「えらく重装備だけど、水鉄砲…じゃないよな？」

「クククク…今日使うのは、これだよ圭ちゃん！」

魅音が取り出したのは、風船と、両端がスポンジ覆われたプラスチックのパイプ。

想像するに、これは風船割りゲームか？

「お、よくわかったね圭ちゃん！さつきみんなの前に出したヘルメットとゴーグルを身に付けて、体の前後ろに木の板を配置するんだ。その上で、チヨークの粉の入った風船を指定した三か所のうち一つに装着して準備完了ってこと」

指定された配置場所は、ヘルメットの天辺、前胸の木板、背中の木板。

この三か所の内、どれか一つに風船をくっつけて、それをパイプで叩いて破裂させるというルールってわけか。

「ただ、突くのは危ないからNGだね！

まあ、流れてやってしまったら仕方がないけど、事故になるから、なるべく振って叩く事！」

「しかし、このプラスチック製の軽いパイプはどこから手に入れてきたんだ？」

「ククク…それはね。圭ちゃん。掃除機のホースの部分だよ。」

レナに頼んでゴミ山にあつたら取っておいて欲しいって頼んでいたんだ」

なるほど、軽くて丈夫だし、梨花ちゃんや沙都子でも振りやすい。

でも、逆に軽すぎて風船を割れるのか？

「風船はアメリカのパーティ用グッズのものだから問題無いよ。」

一応、梨花ちゃんでも割れるかテストしてみる？」  
パン！

試しに梨花ちゃんにパイプを振ってもらったが、風船は軽い音をして簡単に割れた。

なるほど、これなら問題はなさそうだ。

「ルールだけど、『チームの二人の風船が両方割れてしまったら失格』  
『失格したら退場』

『風船を割る方法はパイプを握った手で叩く事』

『最後に風船を一つでも持っていたチームの勝ち』…あとは『失格・退場になった相手が割った風船は無効』その場合は、割られた人は、風船を装着して再開可能…こんな所かな？」

梨花ちゃんが手をあげる。

「魅い。コケて風船を割ってしまった場合はどうなるのです？」

「あくその場合はダメかな？揉めそうだし。あくまでも復活できるのは、失格した相手に攻撃を受けた場合に限定しようか？みんな、木にひかかって、風船割れた！なんてチョンボはやらないでよね」

ふむ。ふむ。なるほど…

要点は分かったぜ。

だけど、もう一度だけルールを確認しないとな。

「魅音、聞きたいことがあるんだけど良いか？」

「なに圭ちゃん？私の出身地は雛見沢で、好きなものは前原圭一。」

スリーサイズならベッドの上で教えてあげるよ？」

おっと「スリーサイズをベッドの上で教えてあげる」なんて台詞を魅音の口から聞けるとは思わなかったぜ『勝負モード』にスイッチが入っていると、そういうアダルトな駆け引きも大丈夫ってことなのか？

とりあえず、今はスルーしておこう。

「ありがとうな。俺も大好きだぜ魅音。」

スリーサイズは今夜の楽しみとして、ルールの確認をしたいんだ」「ん〜なに？」

「まず、パイプを握った手で攻撃をしなければならない。ってことは、パイプを投げての攻撃はダメってことだよな？」

「そうそう。よく気が付いたね圭ちゃん。パイプを投げたり、飛ばしたりするのは危ないしね。」

梨花ちゃんや沙都子に対する安全性を考えると、やらない方が良いよね。もし、やった場合は、その人は失格。攻撃を受けた人の復活は可能にした方が良いね」

なるほど。だから「パイプを握った手」なのか。

あと、もう一つ…ここが重要だ。

「チーム二人の風船が両方割れてしまったら失格なんだよな？」

「そうだよ」

そういうことか…つたく、魅音。

お前はよくやるよ。

「失格したら、退場になって、もう攻撃できないわけだ」

「うん。その後に風船を割っても無効だね」

「つまり、失格者が攻撃をして割れた場合は復活できる…」

「そう。ただし自然に割れてしまった場合や、その他の理由で風船が割れた場合もダメだね。」

例えば沙都子のトラップにひっかかって風船が割れてしまった場合もダメってこと」

…なるほど。完全に理解したぜ。

俺はニヤリと笑うと、魅音も笑みを浮かべる。

「それじゃ、皆準備をして！スタート地点も簡単なクジで決めるからね！」

戦いの場合は、校舎の外、グラウンドとその周辺に定められた。

魅音が言うには、この手の戦いは校舎内のように入り組んだ場所でもこそ面白いそうだが、風船が割れてチョークの粉が舞うことを考えると…それは知恵先生や、校長先生に怒られるのを含め…後片付けが面倒という理由で外にしたらしい。

俺とレナは用具室の後ろからのスタートだ。

二人ともすでに準備は整っているが、風船のつける位置だけが決まらない。

「圭くん。どうしよう？」

レナが俺に聞いてくる。

…そうだな。

こういう場合は、風船を配置する場所の利点と弱点を考えてみるのが一番だ。

頭につけると、攻撃される範囲が大きくなり、どこからでも攻撃を受けやすくなる。

そのかわりに固定される位置が風船の根本のみなので、攻撃を受けても力を逃がしやすい。

胸につけると、背中 of 死角から守りやすくなる半面。

相手との正面での戦いに不向き。どちらかといえば守備的な配置



と言える。

背中ではどうだろう？

これなら、相手に積極的に攻撃にできることが出来る。正面から攻撃されることは無いからだ。

ただ、背中は思いつきり死角だ。背後から奇襲をくらったらひとたまりもない。

「つまりレナ。分担作業を考えるなら、攻勢に出る俺が背中に風船をつけて、守勢のレナは胸につけるべきだと思う。」

レナの方がもしかしたら身体能力は俺よりある気もするが、さすがに「レナに攻撃を任せて、俺は守る！」では、男としては少し情けないよな。

「そうすると、頭につけるって、あんまり意味ないよね？」

レナのその一言に電流が走るツ…！

しまった！魅音の奴ツ！

こんな罠をツ！

俺の異変に気が付いて、レナが声をかけてきた。

「どうしたの圭くん？」

「レナ…：一つだけ、忌憚のない意見を聞かせて欲しい…：」

「えーと、何かな？何かな？」

「…梨花ちゃんと、沙都子の頭、パイプで殴れるか？」

「そんなの無理だよ！」

そう、無理なのだ！

いくら部活は真剣勝負！といっても限度がある！

いぎ眼の前で、梨花ちゃんが「みー…：」と小さな声で鳴きながら向かってきたら、頭を叩くなんて出来るわけが無い！

するとどうなる？横から振って攻撃するしかない！

しかし、それでも、梨花ちゃんや沙都子の頭にあたる危険性がある！

そうになると、いかに二人がヘルメットをしているとはいえ、全力で振る事なんてできるわけがない！

沙都子と梨花ちゃん同士なら良い！お互いちびっこだ！

いや、タライを落すのが得意な沙都子なら、頭に風船をつけている梨花ちゃんなんて舌なめずりをする獲物だろう！

どうりで、ゲームが始まる前に「先にゲーム内容を知ると有利不利がわかっちゃうから」と言っていたわけだ。

「ど、ど、どうしよう圭くん！レナ、沙都子ちゃんと、梨花ちゃんの頭、叩けないよ！」

「あわてるなレナ！ルールを思い出せ！」

「え？ルール？」

「そうだ。ルールだ！」

『パイプを握った手で叩く』のであって、パイプそのもので攻撃しろとは言っていない！」

「…あ、本当だ！」

よくやるぜ魅音！最初からわかっていたんだ。

だから「パイプで攻撃する」ではなく「パイプを握った手で攻撃すること」というルールにしたんだ。

「だから、梨花ちゃんや沙都子に抱き着いて、

パイプを握った手で風船を押してパンと割ればいい？簡単だろ？」

「はう☆それなら大丈夫だね！大丈夫だね！」

代わりに、レナが割れた風船から飛び出したチョークの粉で真っ白になるような気もするが。そこは仕方がない！

…ん？待てよ、それだと、むしろ攻撃をレナにして、俺が守勢になった方が良いんじゃないか？

レナが梨花ちゃんや沙都子を可愛いモードで正面から抱きつき、次々倒していけば圧勝できる可能性だってある！

というわけで、俺達は方針を変えた。

レナに攻勢を任せるために、背中に風船をつけ。

俺は、レナの背中を守るために、胸の前に風船をつける。

パンパン！

空気銃の音！

ゲーム開始の合図だ！

「よし、行くぞ、レ…」  
バン！

一歩足を踏み出した瞬間、戸板が地面から立ち上がり思いっきり俺の胸元にぶちあたった！

そして風船が割れて、チヨークの粉が広がる！

…うごおご…！ゲホゲホ…

…いきなりトラップだと!?

眼の前に頭に風船をつけた沙都子がいる！

「おーほほほほ…この分校中に私のトラップは仕掛けられていますのよ！

まずは圭一さんの風船、ゲットでございますわね！」

この野郎！よくもやってくれたな！

俺は駆ける！

「え？ちよつ…圭一さん!?!」

「沙都子おお!!覚悟!!」

パンツ!!

俺は両手で左右から挟みこむように沙都子の頭にあつた風船を割る！

沙都子の全身が、チヨークの粉で真っ白だ！

「……げほげほ、ちよつ、失格した後の攻撃は無効ですよ！

嫌がらせ攻撃なんて紳士ではございませぬわ！」

「ふふふ、沙都子、何をいつているんだ。俺の攻撃は有効だぜ？」

「はあ？何をおしやられていますの？圭一さんの風船は破れました。失格ではございせんか！」

「甘い！ルールを忘れたか！『チームの二人の風船が割られた時点で失格！』つまり、一人だけ風船が割られてもパートナーの風船が残っていれば失格じゃないんだ！」

「な、な、なんですってー！」

そう、魅音の提示したルールにある違和感！

それは『チームの二人の風船が両方割れてしまったら失格』！そして『失格したら退場』！

逆に言えば、一人の風船がわれただけでは失格では無く、失格でなければ退場しなくても良いということだ！

「…そんな事って…!？」

「沙都子！利用規約も読まずにゲームで遊ぶとか、書類とかにサインしちゃだめだぜ！裏を読まないとなー！」

倒れる沙都子。

そこにレナが追いかけてきた。

「大丈夫、圭くくん！」

おう！…と、声をかけようとして気が付いた。草むらに詩音がいる！

これはきつと沙都子を餌にして、正面からくる相手を討ち取る作戦だ！

どうする！間に合わない！

俺はとっさに打ちひしがれている沙都子の両脇に手を入れて抱きかかえると、レナに見せる！

「沙都子をゲットしたから、レナ、抱っこしてもいいぞー！」

「はう☆☆☆、圭一君！沙都子ちゃん、抱っこしてもいいの!?!いいの!?!」

「ちよ…私の人権はどうなっておりますのー！」

沙都子の人権なんて難しい言葉を知っているとは驚きだぜ！

レナが可愛いモードに突入した！これでよし！

その直後、詩音がパイプで襲い掛かろうとしたが一蹴された。

パイプ攻撃は見事にかわされ、目に見えない速度のレナの攻撃で、あつというまに、詩音の風船は破裂！

「お、恐るべし、です…レナさん…」

バタツ…

広がるチヨークの粉と共に

詩音は倒れた！

さすがだぜレナ！

これは、ご褒美だ。

沙都子を思う存分堪能するが良い！

「はう☆はう☆さ、沙都子ちゃん！可愛いよぉぉ！！」  
「いやぁぁぁ！」

カワイイモードに突入したレナによって、  
思うがまま頬をスリスリされる沙都子。

敗者は強者によって蹂躪される。

悲しいが沙都子。それが敗者の辿る運命なんだ。

みー…

その時、全身に衝撃が走る！

グラウンドの中心から、こちらにテクテク歩いてくる人影！

それは頭に風船をつけた梨花ちゃんだ！

「か、か、可愛いよぉ！頭に風船をつけた梨花ちゃん可愛いよぉぉ！！」

レナの興奮もMAX！

こ、これはいけない！見るからに罠だ！！

行つてはダメだレナ！！

「で、で、でも！梨花ちゃん、可愛いんだよ☆可愛いんだよ！」

みー☆みー…！！

梨花ちゃんが大きく両手をひろげている！

これ、まさか、抱っこしてくれて合図か！？

「い、い、今行くよ！梨花ちゃん今行くよッ！！抱っこしてあげるよ！」

ああ、ダメだ！可愛いモードのレナが制御できない！

今、邪魔をすれば、俺がレナの音速攻撃でぶちのめされるだけだ！

レナが猛スピードで梨花ちゃんに向かって走っていく！

そして、抱っこしようとする直前、それは起きた！

梨花ちゃんが、信じられない速さでレナの抱きつきを交わして、一回転をしたのだ！

いや、早いと言うのは錯覚だ！

レナが抱き着く瞬間に、梨花ちゃんはテクテクと低速移動から、通常の移動速度に代わっただけなのだ！その速度の差ゆえに物凄く早く感じただけ！しかし効果は十分！

レナの視界から一瞬消えた梨花ちゃんは、回転力を生かしてレナの

背中にパイプを叩きつけた！  
パンツ！

レナの背中が割れて、チョコクの粉が飛び出す！  
…ゴホゴホ

レナが白い粉に包まれる！

「また、つまらぬものを斬ってしまったのです☆にはー…ふあつ！」  
だが、白い粉に包まれたレナに梨花ちゃんは抱かれてしまう！

チョコクまみれでも可愛いモノを逃さないとは、なんと執念！  
これが可愛いものに対するレナの情動なのか！

「り、り、梨花ちゃん☆いいよね！いいよね！」

「み、み〜!?レナに汚されるのですう〜！」

哀れ。梨花ちゃんもレナの物理的濃厚接触により、体中が真っ白になる梨花ちゃん…

勝負に勝って、戦いに負けたってところか。

「アハハハ！みんなお疲れ、お疲れ！」

しかし、梨花ちゃんも大したもんだよ！おじさん、全然出番なかった！

1人だけチョコクの粉にまみれていない魅音が颯爽と登場し、俺達は無然とする。

「…魅音、お前、梨花ちゃんにだけ特攻させておいて、陰で見守っていたのか？」

「い、いや、誤解だつて圭ちゃん！梨花ちゃんが任せてくれっていうから…」

「魅いだけ汚れていないのはズルイのです」

梨花ちゃん。

「お姉、一人だけ無傷つて、ずるくないですか？」

詩音。

「魅音さん。変なルールを作って、相応の報いを受けるべきではないと思いますの？」

沙都子。

「アハハハ！魅いちゃんも一緒に汚れよ☆」

レナ。

魅音が自分以外のメンバーから一斉に視線を向けられていることに気が付いたが、もう遅い。

逃げ出そうという瞬間に全員に取り押さえられる。

「ちよつと、タンマー！こんなのダメだって！まってー！お嫁にいけなくなっちゃうー！」

「大丈夫だ魅音！俺が婿に入る！安心して汚れろ！」

「圭ちゃん、それ、全然カッコよくないってー！！」

パン！パン！

魅音と、梨花ちゃんの風船が割られて、その場にいた全員が仲良く真っ白に！

誰が誰だかわからなくなるほど真っ白になって、俺達は笑う。

勝敗は、どうでもよかった。ただ、ひたすら楽しかった。

「全然楽しくないー！」

まあ、魅音を除いてだけど。

## 第25話「9日目（金）D「腕の中の宝石」

「9日目（金）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

俺達は体中についたチヨークの粉を落とすために、グラウンドの水洗い場に集まっていた。

全員が同時に洗えるほど大きくは無いので、女性陣を先にして俺は最後の最後で水洗い場で洗う事にする。

頭にかかったチヨークの汚れをとるために、蛇口をひねり水を頭にぶっかける。

六月とは思えない暑さも手伝って、頭にかかる水が心地良い。

「んじゃさ！罰ゲームいつてみようか！」

背後から、魅音の声が聞こえるのと同時に

詩音の慌てふためく声も聞こえてきた。

「ちよ、お姉！下着姿でなにやってんですか!?圭ちゃんがいるんですよー！」

「え？あははは、大丈夫だよ。それに詩音だって、前に圭ちゃんを誘惑しろとか言ってたじゃん」

「お姉のそれは誘惑じゃなくて、ただのズボラです！女の子であることやめないで下さいー！」

「そんなことないよ！誘惑されているって！圭ちゃん、おじさんの事好きだから！ねー圭ちゃん！」

「お、おう…」と振り返ることもできずに答えたが、

この状況で、これ以上、どう返事をしろっていうんだ？

後ろの状況が確認できないが、もの凄い視線を感じるぞ？

「ほら、圭ちゃん。おじさんに魅了されたって言ってる！」

「…あれはお姉に呆れての返事でしょ、全く」

「私も別に圭ーさんに見られても問題はありませんわよ？」

「圭ーは、沙都子のにーにーなので、恥ずかしく無いのです☆にぱー」

「ちよ…なに、恥ずかしい事をおっしゃるんですの!?!」

「裸を見られるより、にーにーと呼ばれると恥ずかしい沙都子は☆可



愛い☆可愛いなのですよー」

後半の二人の掛け合いは梨花ちゃんと沙都子か？

頼む。愉快的なガールズトークをこんな所でくりひろげないでくれ。

俺はいつまで、髪を水であらわなければならぬんだ…

「まあ、圭ちゃんのごことはおいておいてさ。今日の罰ゲームなんだけど…

せっかく粉まみれになったんだが、それを生かした罰ゲームにしないとね！

ということで、ばばーん！逆転服装やつてもらおうよー！」

逆転服装？つてなんだ。

「簡単に言ってしまうえば、普段スカートを履いている人はズボンに、女物の服を着ている人は男物の衣装を着るってことさー！」

「えっと、つまり…レナと詩いちゃんと、沙都子ちゃんは男子用学生服に着替えて、

圭くんは女性用の学生服に着替えるってこと？かな？かな？」

「うん、レナ。それで間違いないよ！

ちゃんと服は用意してあるから、ちゃっちゃと着替えようか」

お、おい待て！

それって…！

ガシッ

振り返ろうとしたら、誰かに頭を掴まれた。

「圭ちゃん…お姉や、梨花ちゃまや、沙都子みたいに、見られて良いて人ばかりじゃないんですからね？花も恥じらう乙女もいることを忘れないように」

花も恥じらう乙女はこんなにパワーを振るわれないと思うぞ！

だが、抵抗しても無駄なのは分かっている。しばらく大人しくてしていよう。

水飲み場でまつこと数分。ようやくレナから「圭くん、振り返ってもいいよ☆」と言葉をかけられていたので、振り向く。

そこには男性用の制服を着た、レナと沙都子と詩音がいた。

Yシャツに学生ズボンといういでたちは、中々どうして格好がよ

い。

「なんか、皆のそういう姿って新鮮だよな」

詩音とレナは頭を掻きながら苦笑する。

「あははは。そうですか圭ちゃん？なんだか照れますね！」

「普段はハーフパンツしか履かないから、新鮮かな☆新鮮かな☆」

ん？今、レナはハーフパンツって言ったのか？

「うん。普段着の時はスカートの下にハーフパンツ履いているんだよ。水着の時もあるけど」

…なんか少し残念だな。それ。

なんて思ったら、魅音が凄いい形相で睨んでいた。

「圭ちゃんってさ。レナのスカートの中身、気になるわけ？」

…ヤバイ。

答えを間違えたら、死ぬ。

「ああ、レナのスカートの中がそうなら、

魅音のスカートの中ってどうなるのか…って気になるだろう？」

「はあ？おじさんのスカートの中!？」

意表を突かれたのか、素っ頓狂な声をあげる魅音。

よし、なんとかかなりそうだな。

笑い声を抑えて、詩音が魅音の両肩を掴んだ。

「安心していいですよ。」

お姉はいつでも圭ちゃんのためにスカートの中は勝負下着を履いていますから」

「し、し、し、詩音ッ!?あんた何をいつているのさー!!!」

そうか、そうか、勝負下着か。

…勝負下着ってなんだ？プロレスラーが履くようなパンツのことか？

「お、おじさんは知らないなー！アーハハハハ!!!」

なんなんだ、その高笑いは。

真横では、暑いのか男装姿の沙都子が

手でパタパタと煽いでいる。

「しかし、女性用の制服でも蒸れますのに、男性用の服って本当に大変

ですわね。

こんな暑苦しい服で、よく、殿方は生活していけているものでござ  
いますわ」

沙都子がYシャツのボタンをガンガン外していく。

さすがちびっこだ。恥じらいが無い。

それを詩音は目を細めて見ている。

「こうしてみると、悟史くんに似ているんだよね」

…悟史、沙都子の兄貴か。

俺には何も答えられない。

そんな俺の肩に、魅音がゆっくりと手をのせてきた。

「魅音…」

「圭ちゃん…じゃ、さっそく罰ゲームやつちやおうか！」

…はい？

周囲を見ると、レナ、梨花ちゃん、沙都子、詩音が、えげつない笑  
みを浮かべて近づいてくる。

「ククク、圭ちゃんにあうように、サイズぴったりのセーラー服とス  
カート用意したからね…」

「そうだ、お姉、三つ編みのカツラと、伊達眼鏡もつけてあげましょ  
う」

「化粧とかすると可愛いくなるかも☆はう〜」

「マニキュアとかも付けると、よりいっそうよくなると思います  
すよー」

「さて、圭一さん、お覚悟はよろしくて？」

あれ？これって、俺個人に対する罰ゲームだっけ？

いや、お前達も罰ゲーム受ける側だったんじゃないか？

ちよつと、止め…うわああああ!!!

そんな叫びもむなしく、

俺は女達の玩具にされるのであった…

〔9日目（金）：通学路：夕：前原圭一〕

全く、あいつら…人をなんだと思っっているんだ。

通学路、俺はいつものように魅音と手をつないで下校した。

一つ違う点があるとすれば、それは俺が完璧な女装をしているという点だ。

セーラー服にスカート。三つ編みのカツラをつけて、伊達眼鏡をかけている。

オマケに指に薄いマニキュアを塗り、香水までつけているというこだわりの仕様だ。

さすがに下着まで女物では無かったが、

男の矜持を守ったかと言われるとそんなことは全くない。

完成した俺の格好を見て詩音は

「圭ちゃん、最高です！この格好で興宮を歩いたら、きつとナンパされますよ！」

と、称賛してきた。全く嬉しくないぞ。

レナもニコニコして、

「でも、圭ちゃんは毛が薄いから、綺麗に女性に見えるよ」

と褒めるので、仕方がないからヤケクソ気味に胸を張ってやった。

「ああ、そうだな。」

きつと魅音と二人で下校したら、雛見沢一の美少女カップルって言われるぜ？」

それに対して何故か沙都子は敏感に反応する。

「な、なんですって！雛見沢一の美少女カップルは、私と梨花のものですわ！」

これは絶対にして不変！究極の真理なのでございますわ!!!」

「…なんか、知っている言葉をとりあえず全部出した感じで可愛いな沙都子は」

「沙都子はいつだって、可愛いのです☆にぱー」

「むきー！圭ーさんどころか梨花までー！」

とりあえず真面目にやると心が折れそうになるので、

適当に沙都子を弄った所でできりあげて、俺は魅音の手をひっぱり学校を出た。

隣にいる魅音は無然としている俺を見て、ケラケラと笑う。

「ほら、圭ちゃん。笑顔笑顔！せっかく可愛くなっただから、笑顔で

いないと！

人もうらやむ美人女学生が台無しだよ!!」

うるせえ!」と思いつつも、口端をあげる。

二ヘラ…笑顔が引きつっているな。自分でもわかる。

「まあ、いいや。魅音が楽しけりやそれで」

「あははは!おじさんは、圭ちゃんと一緒にいるだけで楽しいよ」

魅音の笑顔が眩しい。

本当、大好きだな、魅音の笑顔。

「今日はさ…圭ちゃんが、ああ言ってくれるなんて思わなくて…嬉しかったよ…えへへへ」

「言うって、何がだ?」

「ほら…初めてあったときから、おじさんのこと好きだって。言ってくれたじゃん?」

…あれは、お前の嘘に乗ったただけなんだけどな。

魅音がそれで良いっていうなら、別に事実になされてもいいけど。

「その設定さ。おじさんも…使つて良い…かな?」

「使うって?」

「…圭ちゃんの事、初めてあったときから好きだって」

俺は足を止めて魅音を見つめる。

魅音は恥ずかしそうに視線を落とすと、俺に体を預けてきた。

「…だったら魅音。こうしないか?」

「ん?なに?」

「俺達二人、転校したその日に一目ぼれしたって……ことにさ」

何か意味があったわけじゃない。

とっさに思いついただけだった。

魅音が瞳を大きくして俺を見る。

「圭…ちゃん…」

だけど、お互いが、最初から好きだったというのであれば、

そういう話も、ありなんじゃないかと思う。

「きつとき、俺達の子供は羨ましがると思うぜ。」

転校したその日に運命の出会いをしたって話を聞いたらさ。そ

れって…」

「……………」

「…魅音？」

「…うう…ううううっ…！」

魅音？なんだ、どうした？

魅音が、泣いていた。

俺の胸に顔を埋めて、泣いていた。

「魅音、大丈夫か？そんなに嫌だったか？この話…？だったら、もう…」

「違うの、圭ちゃん…違うの…嬉しいの、嬉しくて…私ツ…私ツ!!あああッ!!」

魅音は大声で泣きだした。

理由が分からない。でも泣いていた。

俺はどうしてよいかわからず、魅音の体を抱きしめると、農道にあった大きな木の所まで連れて行く。座らせようとしたが、魅音は俺をしつかりとつかんで離さない。

「魅音…」

「圭ちゃんツ!!圭ちゃんツ!!圭ちゃんツ!!!圭ちゃんツ!!!うわあああああ!!」

俺は、魅音を支えながら一緒に巨木の根元に座る。

この状況では、俺は何もできない。

それだけはわかった。

だから、魅音を抱きしめた。強く、強く。

人目は気にしない。誰が来ようが意識はしない。

俺が今やるべきことは、魅音を抱きしめる事だ。

ただ、それだけは理解できていた。

どれくらいの時間がたったのだろう。

魅音の鳴き声が少しずつ小さくなり、収まってきた。

濡れた涙の後を手で拭う。

「大丈夫か魅音？」

「うん、圭ちゃん、ありがとう。ありがとう…」

俺は魅音の頭を撫でると、魅音は気持ちよさそうに微笑む。

「圭ちゃん。私…圭ちゃんの事が好き」

「おう。知ってるぜ魅音」

「でも、好きすぎて、好きすぎて、私さ、どうにかなりそうだったんだ。こんなにもいつぱい、圭ちゃんのことを好きなのに、それを伝えられなくて、もどかしくて、

どうやって、この気持ちを出せば良いのかわからなくて…だからさ…泣いちゃったんだ…」

そうだったのか。

良かった、てつきり、設定が気に入らなかったのかと思ったぜ。

「ううん。逆だよ圭ちゃん。嬉しくて、嬉しくて…」

頭がどうにかなりそうだった。あははは。バカみたいだね。私

…

嬉しくて、号泣するなんて、さ」

「そんなことないぜ」

「圭ちゃん、私の事を好きになつてくれて、ありがとう

この雛見沢にきてくれて、ありがとう…私と出会ってくれて、ありがとう…」

「…俺も、ありがとうな魅音」

「えへへ…そういつてくれると…うれし…い…」

…すう…すう…

…魅音？

魅音は寝ていた。泣きつかれたのだろうか。

まるで、小さな子供のような顔で魅音は俺に抱かれて眠っていた。

俺は魅音の髪をかきあげてキスをした。

ふと、視線をあげてみると、農道を挟んで向かい側にキャンパスが見える。

誰かが、俺達を見て…絵を描いている？

あれは…まさか、親父か？いつから？

俺が立ち上がろうとすると、親父は筆をもっていた右手で、そのま

ま座るように指示をした。

俺は座りなおす。

親父は筆を置くと、

毛布を持つて、俺達のところまでやってきた。

「圭一には、なぜこの雛見沢に来たか。一度話したことがあつたな？」  
確か、この雛見沢に下見にきたとき、二人の美しい少女にであつたから。

という話を聞いた事がある。それが、ここに移り住むきっかけとなつたと。

「父さんは、ここに来れば、きっと美しい物が見つかるんじゃないかと思っていた。

そして、それは、間違つてはいなかつたんだよ」

「父さん…」

魅音と俺に親父は毛布をかけてくれた。

「この世は汚くて醜くて無残なことで一杯だ。でも、その中にもかけがいの無い美しいものがある。圭一：お前の、その腕の中には、誰もが探し、求め、望んでも、生涯得られぬかもしれない宝石がある。なにがあるうとも決して離すんじゃないぞ」

俺は頷く。

ああ、そうさ。

この腕の中にあるものは、俺の人生の光なんだ。

「俺は決して、放さないぜ魅音」

魅音、俺はお前と共に歩こう。

この世界が減びたとしても、歩み続けよう。

俺があと何年生きられるかわからないが、その全てを捧げよう。

魅音、お前は俺の宝だ。俺の命のそのものだ。

お前のためなら、俺はなんだってやれる。

この命すらも惜しくは無い。

だから泣いても良いんだ。

いつまでも、寝てくれて良いんだ。

お前側にいられること、



そして微笑みだけで、俺は十分なんだ。

「え…あ…圭ちゃん？…と、お義父様？」

魅音が目を覚ました。

目の前に親父に気が付いたんだろう。瞬きをしている。まったく、王子様が唇にキスをする前に起きるなんて、不届きな王女様もいたもんだぜ。

「道端で、美しい少女が二人寝ていると思ったら、

圭一と魅音ちゃんだとわかってね。スケッチさせてもらっていたんだよ」

え…？あ、そういえば今、俺は女装していたんだ!?

おいおい、そういえば、前に女装して帰ってきたとき、親父にアトリエに連れ込まれていたけど、

つまり、そういうパターンで、俺は見られていたって事か？

自分に毛布がかけられていることに気が付いた魅音が

親父と俺に頭を下げる。

「お義父様、圭ちゃん。ありがとう」

「いや、その…あはは…帰ろうか、魅音、父さん」

俺は照れ笑いをして、魅音を支えながら立ち上がる。

親父がキャンパスを片付け、車の用意をしているその時…

魅音は俺の耳元でささやいた。

「私も、決して放さないからね圭ちゃん」

俺は、反射的に魅音の唇を奪い抱きしめていた。

魅音も抵抗をせずに、それを受け止めている。

親父がそれを見てスケッチしているようだったが、構うものか。

この輝きは決して手放さないと決めたんだから。

## 第26話「9日目（金）E「憎悪の瞬間」

「9日目（金）：園崎本家：夜：園崎魅音」

ああ、圭ちゃん！圭ちゃん！圭ちゃん！好き！大好き！私の中が圭ちゃんで満たされているよ！

この心と体の全てに圭ちゃんであらわされているよ！！なに、転校してきたときからおじさんの事が好きだって？

お互いに一目ぼれだったって？かあくもう！

圭ちゃんさ、おじさんの事、萌え死にさせる気なの！？

どれだけおじさんの事を好きにさせれば気がすむのよ？

好きすぎて泣いちゃうなんて、もう一生無いよ、こんな体験！

でも、そんなおじさんを抱きしめてくれた！受け入れてくれた！！

えへへへ、嬉しいな！おじさん、もう圭ちゃん無しじゃ生きてい

られないよ！

ああ、楽しみだ！今夜はチャンスがなかったけど、近いうちに絶対に初夜を迎えようね！

そうだ、妊娠するなら体温チェックもかかさずに！三四さんが色々おしえてくれたんだよね。

男女の産み分け方とかさ！アハハハ圭ちゃん、どっちがほしいだんろ？

男の子？女の子？それとも両方？どっちでもいいや！圭ちゃんとの子だった絶対に可愛いし！

「お、魅音ちゃん。おかえりなさい」

園崎本家の入口まで来た魅音の眼前に、一人の貫禄のある男が立っていた。

「あ、ミフネのおじさま！今日は手入れの日でしたね」

ミフネの組は園崎組でも対外活動をやっている。

そのため、外国から仕入れてきた銃器の構造に詳しい者もあり、

園崎本家の地下祭具所にある銃器の定期メンテナンスなども行っていた。

「今さつき終わった所さ」

「おじさまが直接来るといふ事は…大量のブツの予定が？」  
ミフネはにやりと笑う。

「おう、魅音ちゃんの結納祝いにソ連製のトカレフ100丁。  
お魘さんから許可をもらったから近いうちに、な」

「中国製じゃなくてソ連製?! 凄い! 奮発したんですね!」

「本家に納入するのに、中国の安物なんか入れられないからな! ガハハハ!」

ミフネはそういうと、体を震わせて笑う。

中国製は安いが、品質は悪い。そのせいでトカレフは悪い銃のようなイメージがあるが、実際は違う。ソ連製のトカレフは性能も品質も中国の劣化コピーとは比較にならないほど良いのだ。

「AKとかは仕入れるんですか?」

「仕入れたかったんだけどねえ、ちよつとゴタゴタがあつて無理だったよ。」

かわりにランチャーを何発か仕入れる予定だ」

「ひゅー! ロケットランチャーですか! また豪気ですね! それで、ブツは、いつ、本家の方に?」

「ハハハ、今どきのヤクザはランチャーぐれえねえとな! ブツは綿流しの日に持つてくる予定さ」

魅音は口の端をあげる。

おそらく綿流しの日にくる出店の連中…テキ屋に、銃器の運送を手伝わせるつもりだ。

射的屋の玩具の銃に本物がまじっていると誰も思うまい。

木を隠すなら森の中というものだ。

警察も、その日はオヤシロ様の祟りに対する警備が優先で、密輸まではない手回らないはずだ。

「おお、そうだ。魅音ちゃんにプレゼントだ」

ミフネは懐から色彩豊かなカラフルな拳銃を取り出した。

「…えっと、なんですかこれ? 玩具の拳銃ですか?」

「違う。違う。アメリカ製のれっきとした拳銃だよ。ただし、子供用ののだがな」

アメリカでは子供向けの拳銃を幾つか販売されており、その中には色彩豊かで可愛いらしい拳銃も幾つか存在していた。これらの銃は対象年齢が10歳ぐらいからのもあり、銃社会の奥深さを垣間見ることができる。

「威力は？」 魅音は、そのカラフルな拳銃を構える。

堂にいった構えは、なるほど、かつてダム戦争時代に渡米して、仲間達と銃のインストラクトを受けただけはあった。

「あたりや死ぬ。それが銃つてもんだろ？」

魅音とミフネはお互いに顔を合わせて、声も無く笑う。

銃弾など、どこにあたってても行動不能になる。銃弾を数発くらっても動けるのは、物語の主人公が重度の薬物患者だけだ。

“誰が撃つても相手の戦闘力は失う”それが子供でも、女性でも。だからこそ、アメリカでは銃は自由のシンボルとして存在し続けるのだ。

「ところで魅音ちゃん。先日親族会議で言っていたけど…将来的に園崎家の方針を変えるって、

アレ、本気なのかい？」

「ええ、ミフネのおじさま。時代も変わってきましたし、

今までと同じではいけないとバッチャも、私も思っていますから」

ミフネの問いに、魅音はニツコリと笑って答えた。

最近、親族会議において、園崎家の今後の在り方を見直す話が出ていた。

発起人は、現当主・園崎お麴である。

現在の園崎家は鹿骨市や興宮の表経済を牛耳り、裏社会を暴力団で仕切っていた。

表も裏も支配する旧家。市を牛耳る黒幕。

今の園崎家はそのように言われているが、これらの力は元々は雛見沢を守るためのものであった。

“雛見沢を守る”それは園崎家を筆頭にした御三家の使命であり、ダム闘争ではいかになくその力が発揮され反対派を結集させダム建設工事を凍結させた。

…と言われている。

だが、それによって様々な因習が生まれ、

良きにせよ、悪きにせよ積み重なっているのが現状である。

もはや戦後も40年近くたつというのに、いまだに園崎家の地下祭具殿では見せしめの拷問部屋が存在し、世継ぎの児童に刺青を入れるなどの習慣が根付いている。

たしかにそれらはかつて、意味のあることであった。

戦後間もない時期、いち早く復興をとげた雛見沢に対する憎しみや偏見、言われなき差別と闘うために“力”が必要であった。

園崎家や御三家は、その力を結集させるための“象徴”であった。

古くは鬼の末裔の仙人の一族として、新しくは雛見沢再興の旗頭として。

力の“象徴”としての“恐怖”として。

だからこそ刺青を。だからこそ結束を。だからこそ敵の排除を。

だが、現代では違う。

もはや、そんなことをせずとも良い時代へと移り変わった。

悪しき、古き因習はただちに打破するべし。

それを教えてくれたのは、

前原圭一だった。

前原圭一は、人々を説き伏せてダム闘争で虐げられていた北条家を、北条沙都子を救った。

これによって目覚めたのは誰でも無い現当主であった園崎お魎であった。

ダム闘争によりスケープゴートにされた北条一族は、闘争終了後も雛見沢で敵視されていた。

これは、すでに園崎家でもどうにもできない事態であった。

老いていたお魎は、この因習やしがらみは、すべて自分の死後に後継者である園崎魅音によって清算するほかは無いと考えていた。

だが、前原圭一の献身的努力により、改善不可能だと諦めていた

「雛見沢に蔓延していた北条家へのいわれなき差別」という悪習は打破されたのである。

その衝撃は計り知れないものであった。  
村に新しい風をもたらす新たな若者の登場。

しかも、そのような稀有な人物が園崎家次期当主である自分の孫と結婚し、婿養子に入る。

自分が生きている内に因習の改善は無理であると結論づけていた園崎お魎にとつてみれば、

それはこの上もなく心を震わせる出来事にあつたに違いない。

だからこそ、園崎お魎は、親族会議において園崎家のありようを変えていくことを決めたのだ。

老骨に鞭を打ち、最後の使命として、

新時代の若者達の為に道筋ロードマップを作る。

もちろんそれは当主就任後、園崎家と雛見沢の改革を求めてられていた魅音にとつても喜んで受け入れられるものであった。

いずれ変わらなくてはならない。

変えなくてはならない。

この因習をオヤシロ様の崇りを断ち切る。

その想いを胸に宿していた魅音にとつて、

積極的に改革に乗り出し始めたお魎を手伝うのは至極当然であり、むしろ率先して行動する気構えでいた。

いずれは、やらならなくてはならないことをするのだ。

だが、当然それに反対する者達も多くいた。

古いやり方に固執する者。

圧倒的な力による頂点からの支配を望む者。

園崎家というピラミッド支配を駆使して、勢力を拡大しようと暗躍する者達。

そのような手合いには“恐怖”による支配という“力”を弱めようとする、

今回のお魎の改革推進は眉をひそめるものであった。

ミフネは大きいため息をつく。

「だがな。魅音ちゃん…そういう考えを嫌うものは多いぞ。今、園崎家が持っている力をさらに拡大すればいずれ、この県だけではなく、

関西や中部…いや、関東にさせ勢力を伸ばすことができる」

「そうですね。でも世の中には身の丈というものがあるんです。

膨張した風船はいずれ破裂しますよ、おじさま」

一瞬、ミフネが不快そうな顔をしたが、それを魅音は改革反対派に対するものであると魅音は勘違いをした。なぜなら、ミフネは一言、二言、多いものの、いつだって園崎お魎の味方だったからだ。

「ミフネのおじさま、頼みますよ。こういう時にこそ、おじさまの力が頼りなんですから」

「ガハハハ！任せな！ま、俺個人としては方針転換には賛同できんが、お魎さんと、魅音ちゃんの為だ。頑張るさ！」

ぷっぷー！

黒い車からクラクションが鳴る。

「おっと、うちの若頭がよんでやがる。じゃあ、魅音ちゃん。また！」  
「はい、おじさま！また！」

園崎本家の前にいた黒塗りの車が何台か離れていくのを見届けると、邸内へと入った。

帰ってきたことを祖母に伝えるため、園崎お魎の部屋の前の廊下に正座をする。

「バっっちゃ、ただいま！今帰って来たよ」

「…そか」

その時、魅音は異変に気が付いた。

お魎の前に、座布団がしかれ、お盆の上には茶菓子と急須、空になった湯呑が置かれている。

つい先ほどもで、誰かがいたらしい。

「…入江がきとったで」

「監督が!？」

「あのボンクラ、ワシ相手に5時間も粘りおって…」

ひ孫の顔みるんわ、そない悪いこつちやことかいな」  
しまった！

魅音は頭を下げた。

「ゴメン！バっっちゃ！告げ口するつもりは無かったんだ！ただ…」

「わあとるわい。昨日の夜、あんだけ大声で言いあってりやあ、嫌でも聞こえるよつて」

魅音は赤面する。

たった三人しかいない日本家屋で、ふすまを全開にして言い合いをしていれば、その内容は嫌でも耳に入るだろう。

園崎お魎は目の前にあつた湯呑を持つと、少しだけ口につけた。

「入江言うんには、大石にな訴えろと脅し、かけられてるつちゆう話や…」

大石！興宮署の大石警部！

まさか、診療所にいたのか!?それを婚約者と一緒について気が付かなかったと！

何と言う不覚！当主代行としてあるまじき大失態！

魅音は後ろに散歩下がり土下座する。

「申し訳ありません！この“ケジメ”はっ…！」

「もう、ええ…」

バッチャ…?

顔をあげた魅音の目に、手招きするお魎の姿が入った。

おずおずと、お魎の前になると、手を握られる。

「ワシもな。ひ孫の顔がみたいって、少し、無理言い過ぎたかもしれん。

お前の体に負担をかけてまで望むものでもないやろしな」

「いや、バッチャ…それは…」

「それに婿はんも、なんか、精神的に追い詰められ取るとも聞いたで…

すまんこつちやこと、してしまつたわな」

…婿？圭ちゃん…！知恵先生の話が伝わっていた!?

考えてみれば当たり前だ。入江先生は知恵先生に連絡をしていたのだ。

知恵先生の圭一の自殺未遂の勘違いを、入江先生が知っていれば、説得の交渉につかつたに決まっている！

「だからな。あとは、好きにしてええ」

…ええ？



「ワシはもう口を挟まんし、無理はいわんよ」

バッチャっ…！

魅音は口を開こうとした。

だが、何も言えなかった。

お魘が納得した顔をしていたからだ。

これ以上、話をして無駄だ。

魅音はうつむくと、目に涙が溢れてきた。

…あとは好きにしろ。

それは事実上の『この件には手を引け』という意味であり、同時に『しばらくは子作りはするな』という意味がある。

魅音は奈落の底に落されたような気がした。

ついさつきまで、あれほど圭一との婚前交渉を楽しみにしていたのに。

ほんの数分前まで、どんな子供が生まれるのか楽しみにしていたのに。

でも、だからといって、祖母を責められるのか？

中止の指示は、祖母の、自分に対する情であり、圭一に対する情から来ているものであるなら、何を言えることがあるというのだ？

悲しかった。情けなかった。悔しかった。

それは園崎家の当主の命令を遂行できないということだけではない。

純粋に、祖母にひ孫の顔を見せられなかったという想いと、愛する

圭一との子を持ちたかったという想いからも来ていた。

だからといって誰を恨めばいい？

知恵先生も、入江監督も、二人の身を案じておこなった事だ。

だとすれば…

大石ツ!!!

園崎魅音の体から、血が逆流するほどの激しい怒りが巻き起こった。

目が充血し、頭に血が上っていくのを感じる。唇を激しく噛み血が流れる！

ここまで激しい憎悪の感情を生み出したことはかつてなかった。自分は詩音の言う所の帝王教育を受け、どんな事態でも冷静に対応できる人間であるはずだった。

しかし、この怒りは今までとは明らかに格が違った。

生命不変の絶対的な尊厳である「子を作る権利」を奪われたのだツ

！  
その怒りは、生物的本能の奥深くに根差したものであり、人が理性で許容できる怒りの範疇を超えていた。

身を焦がすような激しい憎悪に包まれ、魅音は呪詛を吐き散らす。

そうだ、大石だ！あの野郎が、潰したんだ！子供を産むと言う大業を、あいつは潰した！

奴の園崎家に対する妄執はどをこしている！いや正気じゃない！奴は狂ってやがる！

そうだ、あいつは園崎家を潰そうとしている！だから、私と圭ちゃんの子作りを妨害したのだ！

許せない！絶対に許せない！ようやく大好きな圭ちゃん一つになれると思っただに！

やっと、子供を作れると思っただのに！許せない！許せない！許せない！あいつだけは絶対に許せない！

定年が近いから生かしてやったのに、その返礼がこれか大石！やはりお前は殺すべきだった！

雛見沢の敵だった！そして園崎家の敵だった！殺してやる！殺してやる！殺してやる！殺してやる！ただでは殺さない！地下祭具殿に連れて行き、生きていることを後悔するような拷問をやってやる！もつともみじめに、むごたらしく、残忍に苦しめて殺してやる！待っている大石！待っている!!!

〔9日目（金）：興宮署：夜：大石蔵人〕

大石蔵人が外回りを終えて興宮署に戻ってきたのは午後10時を超えたあたりであった。

署内に入り、廊下を進むとど真ん中で腕を組んで待ち構えている高杉課長の姿が見える。

大石が逃げるか素通りするか考えていると、高杉課長の方から近づいてきた。

「これはこれは、課長。どうかしましたかあ？」

「単刀直入に言うよ大石くん。今やっていることから手を引きなさい」

「はて、どの件のことでしょうか？なにせ、多くの厄介ごとを抱えておりますからね…んふふふ…」

それは嘘では無い。大石は幾つもの事件を扱っている。

ただ、高杉課長が、どの件を言っているのは大体察しはついたが。

「はあ…園崎家の児童虐待問題の件だよ…わかるだろ？」

…さすがにバアさん打つ手が早い。

大石が児童虐待の問題を入江先生と話したのは、お昼近く。

なのに、その夜にはもう対処をしている。

「んふふふ…また、議員の人が来ちゃっているんですか？」

「園崎県議が支援者つれて現在進行形で、署長に猛抗議中だ。君を呼んで来いと息巻いているよ」

「タハハハ！それでは回り右、して今日は、帰りましようかね？」

どうせ園崎県議は皇記2500年だとか、大和男子とか、中身の無い右翼思想を喚き散らしながら怒鳴り散らしているだけだ。相手にしているだけ時間の浪費である。それならドヤ街で仲間と麻雀でもしていた方がよほど良い。

「大石くん。園崎のお婆ちゃんは、単にひ孫の顔が見たくて言っただけだろう？」

そんなものは、息子夫婦に子供が見たいとはっぱをかけるお年寄りとかわからない話だ」

「んふふふ…課長。その息子夫婦が未成年だから問題って話をしているんですよ？そりゃ、アラブの一部の国じゃ、年齢制限なかったり、ブラジルあたりじゃ14歳で出産も結婚もできるでしょうが、ここは日本なんです。やりますよ私は。通報があったら即ね」

「無いよ」

…はっ？

「園崎県議が言っていた。もう入江先生とは話がついたらしい。だから、この件で訴える者は誰もいない。つまり無駄だと言うことだ」

…やられた！

大石は一瞬、顔をゆがめた。

入江先生はあれでも中々の気骨の持ち主だ。脅しやすかし、金なんかで転ぶタイプの人間では無い。だとしたら簡単な事だ。園崎のバアが一時撤退を選択したのだ。

入江先生の説得を受けて、心の中で舌を出して、納得をするふりをしたに違いない。

お魎のバアさんが理解したと入江先生が考えたのなら、この話はこれで終わる！

なら、何ゆえに園崎お魎は納得するふりをしたのか？

おそらく、大石が行っていた工作がバレたからだ。

署内にも園崎シンパがいることは分かっている。

どこからか情報を受け取り、大石の警察内部の動きを完全に感知して先手をうったのだ。

園崎県議の抗議の速さと言い、そう考えれば辻褄があう。

「なははは！確かにそれだと、この話はここで終わりですな！平和結構！ラブ&ピースですよ！」

「…頼むよ大石くん。もうすぐ定年なんだろう？」

「わかってます！わかってますって！それでは、良いお年を〜」

…園崎お魎めッ！

ちよつとしたミスが致命傷になる前に修復するとは。

その手の柔軟な判断力ができるのは、さすがと褒めてやろうでは無いか。

だが、これで終わったと思うな。次なる矢をすぐに用意してくれる。

「大石さん！」署内で繋ぎを頼んでいた、熊谷刑事が側にやってくる。

「今夜、各関係者に某所で集まるようお願いしてきましたが…この件、ストップですよね？どうしますか？」

既に熊谷刑事も、入江が手を引いた事は知っているようだ。ならば話は早い。

「んふふふ、話だけはして協力体制は整えておきましょうか？」

さすがに、もうこんなチャンスはあるとは思えませんが、「一応ね」今後はおそらく園崎お麴は「未成年者の自由意思による妊娠」という路線を狙ってくるに違いない。日本における性同意年齢は13歳以上だ。

不法な性的行為及び搾取的な行動からは子どもを保護しなければならぬとされているが、逆に言えば不法でも搾取でもなければ可能という意味でもある。

つまり、園崎魅音が妊娠した場合も、前原圭一と園崎魅音の自由意思による婚前交渉だと前面に押し切る事もできなくはないのだ。

だが、そんなペテン、大石蔵人の目が黒いうちは許すつもりはない。そのためにも、児童相談所や、児童福祉センターとの根回しや連携は必要不可欠だ。

「わかりました。それと大石さん…」

北海道県警の自分の知り合いから、ちよつとおかしな情報を入手したんですが」

「ん？なんですか？」

「…園崎のミフネ組が、デポ船でソ連製の大量の銃器を密輸をしたつて噂です」

デポ船とは、主に北海道を中心にソ連と密輸していた漁船の総称である。

漁の取れない時期に、一部の漁民がヤクザなどに手を貸し、ソ連とひそかに密輸を行っていた。

銃器だけでなく、麻薬、それ違法にとれた魚介類などの取引も行っているという話もある。

「むふ、妙ですね…ソ連製の銃器を大量に、ですか？」

「裏は取れていないので、まだ何も言えませんが、この時期ですからね…」

ミフネ組は、園崎家においては海外組織とのコネクションの構築や

対応に従事している。

従って、ソ連から銃器を密輸すること自体は特に不思議なことではない。ただ、大量に。という部分がひっかかる。

というのも海外ではいざ知らず、銃器というのは日本においては、高価な使い捨ての道具である。

銃弾には一つ一つに特徴のある線条痕というのが存在する。つまり一回でも使われてしまうと道具の特定が出来てしまう。

そのため、ヤクザはどちらかといえば値段が安い中国製の銃器を使う。

威力も性能も低い劣化コピー品が大半だが、それでも一回こっきり使う分には十分だ。

ソ連製のような値段のはる高価な武器は、銃器マニアか、その道のプロ用に少数仕入れるのが普通であり大量に仕入れることはあまりない。

「熊ちゃん。今、園崎組はどこかと抗争してましたっけ？」

「いえ、特には…近江あたりとも、最近は冷戦状態で派手なドンパチはやっていないはずです」

…ふむ。大石は顎を撫でる。

綿祭りの近くに大量に高性能の銃器を園崎家が仕入れる。どうにもきな臭い。

普通に考えれば、大量の銃器が必要になるほどの大規模な抗争を始める準備だろう。

しかし、知っている限り、園崎組に今の所その気配はない。

だが、一体、なぜ？高性能の銃器が必要なのだ？

園崎家の奴らは何かを企んでいるのは間違いないが、その意図がわからない。

「…熊ちゃん。これ、探りを入れておいた方が良いかもしれませんよ。上にもこの情報あげちゃいましょうか？」

「わかりました。私のほうでもツテを頼って、もう少し情報を探ってみます」

熊谷刑事は、そういうと大石から離れた。

「児童虐待路線は消えそうですが銃器の密輸ですか…んふふふ。  
まだまだ天には見放されてはいないようですね」

大石は口元を歪める。

「どのような小さな事実であれ、それを精査して園崎家の一穴にしてやろではないか。」

必ず突破口は開く。なんとしても園崎家の裏をあばき出し『オヤシ口様連続怪死事件』の謎を解く。それこそが、定年を間際に迎えた大石の使命であり、刑事としての最後の仕事なのだから。

「9日目（金）：興宮詩音宅：夜間：園崎詩音」

「あはははは！何ですかお姉！面白過ぎですよ」

「ちよつと詩音、笑わないですよ…こっちは本気なんだからさあ」

今夜はだいぶ遅くなつてから、お姉から電話がかかってきた。

午前中に何をやってたのか聞いてみたら、もう本当、あきれれるやらなにやら…

聞いているうちに爆笑しちやつた！

「だって、婚前交渉のやりかたも知らずに、ヒ首抜いて相手に攻めよるって…」

「それ何の冗談って話！」

「だって、バつちちゃんからは、

『天井の染み数えている内に終わる』ってことぐらいしか聞いたことないしきー」

「はあくこれが純粹培養お嬢様の末路ですか…漫画とか洋ゲーカタログばかりみてないで、

「もうちよつと女性雑誌ぐらい読んでおいても良いと思いますよ？」

「そ、そういう詩音だって、わかってないんでしょ！」

「ククク…お姉、私を誰だと思ってるんですか、園崎詩音ですよ？」

「え？そんなに良く知ってるの…!?アチャー…：だったら詩音に聞けばよかつたかなあ」

「…えーあの、お姉、ごめん。調子こいてた」

うん。さすがに教えるとか無理。

そういう経験、無いし。

「なんだよー！圭ちゃんに抱かれろとかいつていたのに詩音もおぼこなのかよー！」

「おぼこって言うなー！そういう所が、お姉、おじさんって言うんですよー！」

「大丈夫、大丈夫、圭ちゃん。おじさんの事大好きだから。エへへへ」

…イラッ

後で締めてやろうかしら、お姉？

「まあ、とりあえず監督からやり方を教わったんなら、もう大丈夫ですね☆これで…」

「ダメになった」

「…え」

受話器の向こうで空気が淀んだ気がした。

「…大石の奴が入江先生を脅迫したって。バッチャが言っていた」  
「それってどういう…」

「大石の野郎が、入江先生を脅してバッチャを児童虐待で訴えろって言つて来たんだよッ!!」

…ヒッ!?

お姉!?

「だからバッチャは諦めた！あんなに見たがっていたのにッ！大石、あいつは本当に…許せないっ！許せない！許せない！ようやく、圭ちゃんと一ついなれると思つていたのに！ようやく、バッチャにひ孫の顔をみせらると思つたのにッ!!」

待つて！お姉！

落ち着いて！

「せっかく、生かしておいてやったのにッ！それが間違いだったんだ！あいつを生かすことに何の意味も無かった！工事現場の監督のように死ねばよかつたんだ！いや、殺すべきだったんだ！あいつは圭ちゃんと私の絆を潰そうとした！いや、そうじゃない！あいつは園崎家を滅ぼそうとしているんだ！そうだ！そうに決まっている！殺さなきゃ！殺さなきゃ！」

お願いお姉！そつちへ行つちやダメ！



それ以上いっただら、戻ってこれなくなっちゃう！

「お姉っ！圭ちゃんはっ!!」

「…え？」

「圭ちゃんはなんて言っているの？」

「…圭ちゃ…ん？」

うん。そうだよ。落ち着いてお姉。

お姉には、圭ちゃんがいるでしょ？

「…圭ちゃんには、まだ伝えないよ。」

どうしよう…こんな話…きつと圭ちゃんも悲しむはずだよ…」

「お姉…」

「…わかってる詩音…圭ちゃんに、このことを伝えなきゃいけない。でも、きつと圭ちゃんは悲しむ。悲しむはずなんだ。だって圭ちゃんも凄く楽しみにしてたから…ああ…明日、どういう顔して伝えれば良いのかわからないよ…」

受話器越しから、お姉の沈痛な声が聞こえてくる。

ああ、もう本当！大石ってアイツは余計な事ばかりする！

悟史くんの時もそうだった。あいつが余計な事さえしなければ…

お姉じゃなくても、殺したくなるよ！

「でも、圭ちゃんはお姉のこと…大好きだから、きつとわかってくれるよ」

「うん…え、えへへ…ねえ、詩音、聞いてくれるかな？」

「う、うん。なに？良いよ」

「今日ね。帰り道に、こう言われたんだ…圭ちゃんが転校したその日に、お互いに一目ぼれしたってことにしないかって…」

…えつと…一目ぼれ？

圭ちゃんがお姉に…？

「んもう、圭ちゃんつたらさ、素直じゃないんだからさ！」

転校したその日に、おじさんに一目ぼれしただなんて、もう…エヘヘヘヘ」

「…そっか。お姉よかったね」

「うん。あたしき。嬉しすぎて、その…泣いちゃったんだ。アハ、バカ

みたいでしょ？」

「全然、そんなことないよ。人間は嬉しすぎて泣けるんだから…」  
「…うん。私、圭ちゃんが好き。世界で一番好き。圭ちゃんのためなら、なんでもできる」

…お姉、よかった。これなら圭ちゃんがストッパーになつてくれる。

お姉が鬼ならずにすむ！そうだ、圭ちゃんに相談してみよう…！  
それが良い！圭ちゃんならきつと何とかしてくれる！

「ねえ、お姉、明日なんだけど…」

「明日？ああ、監督の試合のこと？行くよ」

…え？試合あったんだ。

なら、好都合だ。

「じゃ、明日、私もお昼ごろに雛見沢分校に合流するね。12時にでい  
い？」

「あ、いや、それはいいけど…アンタ、本当に出席日数は大丈夫なわけ  
？」

出席日数!?そんなこと気にしている場合じゃないでしょ！

お姉、自覚ないかもだけど、今パンパンにつまった風船状態なんだ  
よ！

「なんども言わせないで下さい☆お姉より要領いいんで！」

「あーはいはい。じゃ、明日、雛見沢分校で待ってるよ。それじゃもう  
電話切るね。お休み詩音」

「お休み☆お姉！」

電話を戻すと手が震える。

汗が止まらない。吐き気と寒気がする。

姉妹の私にはわかる。

お姉は本気だ。本気で大石を殺そうと考えている。

お姉は優しい人間だ。

0か1かの世界で0.7とか0.5とか考え実行に移せないこと  
がある。

正直、園崎家当主として不安だと思ふ時も無くも無い。

そのお姉が、あそこまで激しく憎悪にまみれるなんてほとんど無い。

少なくとも、責任感や使命感ではなく、

感情に身を任せて殺害を計画するなんてありえない。

それなのに、なぜ？

いや、それはわかっている。

愛する人との子供を作る機会を取り上げられたからだ。

双子の私には、お姉の気持ちに手が取るようにわかる。

それがどれほどみじめで、なさけなく、むごいかを。

男の大石はわからない。わかっているではない。

わかってやっていたのなら大したものだ。

自分に対して死刑宣告を行ったようなものなのだから。

今すぐに目の前にあつた子供を授かるという喜びを取り上げて

「数年待てばよい」

なんて言われて何の感情も湧き起らないなんてのは、歳をとって時間の感覚が失っていく老人だけだ。

いや、それが納得できる理由であれば、お姉だって悲しみはしても、

あそこまで狂気にかられるはずは無い。感情的に見えても冷静なのがお姉なのだから。

だが、大石は『園崎家への執着』でそれをやってしまった。

大石の悪意が、お姉の中に眠る負の感情に火をつけてしまった。

もう、火が付いた以上、どうにもならない。

このままでは、一度ついた怒りの炎は燃え上がり周囲を焼き尽くすまで終わりはしないだろう。

これを止めるには、圭ちゃんにお願いするしかない。

あれほど想っている圭ちゃんなら止められるはず！

でも、もし止められなかったら…？

その時は、うん…わかっている。覚悟を決めよう。

私は園崎詩音。

園崎家次期当主・園崎魅音の影なのだから。

## 第27話「10日目（土）A「殺意の末に」

「10日目（土）：通学路：昼：前原圭一」

俺はレナを連れて、いつものように魅音との合流場所に向かった。最近、魅音に会うのが楽しい。

魅音の顔をみるだけで幸せな気持ちになるし、手を握るだけで心が満ち足りる。

前は天使だと思っていたが今は違う。

地上に降りた女神だ。

：おっと、いかん。いかん。

今、顔をにやけてしまったぜ。

前原圭一、気を引き締めろ！

男は一步外に出れば七人の敵がいる。

気を引き締めなくてどうするか！

「はう☆圭一くん、今日もニコニコ！」

魅いちゃんに会えるの楽しみにしてるんだね！してるんだね！」

：失敗したようだぜ。

仕方がない。魅音に会えると自然に笑みが浮かぶんだからな！

これはあれだ。生理現象ってヤツだ！

合流場所にいくと魅音の姿見える。

今日はおとなしめで全体が小さい感じがする。

「おーい魅音！」

俺は大きく腕をふると、続いてレナも腕をふった。

「魅いちゃんおはよー！」

魅音は小さく手をふって答えた。

なんとも可愛らしい感じがする。

おいおい、最近少し攻めすぎだからって、今日はおしとやかにつて

？

ちくしよう。魅音の奴。男の心をくすぐるような事をしやがって

！

そうくるなら、今日は俺が攻める番だな！

魅音、待っているよ！

「圭ちゃん…」

…魅音？

そこにいた魅音は、あきらかに雰囲気が変わっていた。悲しげで、儂く、そして弱弱しい。

「魅音、その…どうした？」

俺が声をかけると、魅音はうつむき、

口を押えてくぐもった声を出した。

「…子供、つくれなくなっちゃった」

…え？

魅音の言葉に一瞬にして世界が反転した。

上下の感覚が分からなくなる。

脚に力が入らなくなり、体震える。

子供が、作れなくなった…？

どういう…ことだ…

まさか、病気？怪我？事故？

魅音、お前…

崩れ落ちそうな自分の体をなんとか支え、

視線をレナに向ける。

レナも顔面蒼白だ。

何を話しているのかわからない顔をしている。

魅音は口を押えたまま

肩を上下させている。

…一体、俺と別れてから何があったんだ？

だって昨日はあんなに元気だったじゃないか！

俺は、緊張したせいかカラカラに乾いた喉から、

絞るように声をだした。

「魅音…なにがあったんだ？」

魅音は顔をあげ、

悲哀にみちた顔で口を開いた。

「バッチャがね…子供、もういいって…」

…いいって。

え？あ、それって。

「えつと…つまり、お魘のバっちゃんが、

無理して子供作らなくて良いって言ったって事か？」

「…うん」

ぶはああああああああ!!!

俺は中腰になって両手を太ももに乗せると、全身から息を吐きだした。

レナも、真上をむいて息をはきだして、その場にへたりこんでいる。

「えつと…圭ちゃん？レナ？」

「良かった…本当に良かった…」

「え…何がさ？」

何がさ、じゃねえよ！

脅かしやがって!!!

「俺はてつきり病気やケガで魅音の身に何かが起きたのかと思って心配したんだぞ！

全く…心配しすぎて、危うくぶっ倒れるところだったぜ！」

「ええええ!?!ちよつと圭ちゃん、何の話さ?！」

「アハハハ、魅いちちゃんがすつごくつらそうな顔していたから、

レナも圭くんも、魅いちちゃんの体におきたのか、心配したんだよ！」

レナも笑う。

魅音は心外そうな顔をしているが『魅音が子供を産めない体になった』

に比べれば、バアさんが子供を今すぐに見なくてもよくなったなんて話は、大した問題じゃない。

しかし、どうして子供を作らなくてもいいって話になったんだ？

「あく監督がさ。どうやら、うちの相談を受けた後に、バっちゃんに直訴したみたいなんだよ。」

おじさんの体が、まだ子供が産む体になっていないから、もうちよつと待つて欲しいって」

「へく、で、バアさん。すんなり下がったのか。なんかちよつと意外だぜ」

「監督が、未成年の妊娠の危険性とか言ったみたいだけど、圭ちゃんの自殺未遂の話も、

どうやら伝わっていたみたいでさ…」

「え!? 圭くん、自殺未遂なんてしていたの!」

レナ。心配するな。

それは知恵先生の壮絶な勘違いだ。

しかし、そうすると子供を作らなくても判断したのは、

お魎のバアさんが、魅音の体や、俺の精神状態を心配してくれたからってことか。

「うん。まあ、そうなるよね…」

レナじゃないけど、バッチちゃん。優しいから、それと…ぐツ!

…なんだ?

今、一瞬、凄まじい形相になったぞ。

「いや、まあ…アハハ、そうことかな?」

「まあ、仕方ないぜ。監督の言う通り、俺達はまだ子供を作れる体になっっていないんだからさ。

でも、待つっていつても数年だろ? その年になつたらさ。ガンガンつくろうぜ魅音!」

「…ふえ!? が、ガンガン?」

「おう! 一年に一人ずつ…魅音とだったら30歳までに、10人ぐらいは余裕だよな!」

「じゅ、10人! け、けいちゃん。それ作りすぎだよ!」

「アハハハ、魅いちちゃん大家族だね! 大家族だね!」

照れて頭を掻いている魅音を見ながら、俺とレナは笑った。

今すぐ子供を作ることができなかつたのは残念だけどさ。

楽しみが先に延びたと思えばどうってことないぜ?

「ちえくおじさん、すっごく悩んだのに。」

圭ちゃんにかかると、小さな問題にされちゃうよ」

「一人だから悩むんだぜ? ほら、そんなに唇をとがらせてないで、いこ

うぜー！」

「アハハハ！行こう魅いちちゃん。圭一くん！遅れちゃうよ！」

俺は魅音の手を取って、歩き出す。

うん。魅音の手は温かい。

今日もきつと良い日になりそうだぜ！

「10日目（土）：玩具屋：昼：前原圭一」

土曜日の授業を終えて俺達は、詩音の到着を待ってお昼をとると、そのあと古手神社の集会場にやってきた。

それというのも、俺が綿祭り実行委員としてオークションをやらなければならなくなったため、

どんな商品が置いてあるか下見に来たかったからだ。

そして「どうも、子供が喜びそうなものがない」ということに気が付き、俺達は玩具屋へと向かった。やはり、オークションを盛り上げるともなれば、子供もはしゃぐような商品がある方が良く決まっている。

監督の試合時間にはまだ一時間以上あるため、

玩具屋でオークションに使う玩具を「徴収」することに決めた。

魅音は意気揚々と玩具屋に入ると、恐れおののく店長に向かって高らかに宣言した。

「今回の綿祭りでは、園崎家次期当主・園崎魅音の結納披露も兼ねております。したがって、バツちゃんは今回のオークションのための商品提出を〴〵大いに〴〵期待しています！」

店長は見るも無残な形で崩れ落ちる。

「そうだよね…魅音ちゃんの結納も兼ねているなら…そうだよね…好きだけもって行って…」

「ア、アハハハ…店長さんの顔色を見ながら集めようか？」

「あーダメダメ、レナ。それしちゃうと年末の親族集会で、店長、バツちゃんに死ぬほど睨まれちゃう上に、超冷遇されちゃうから…」

レナがフオローをしようとしたが、魅音がそれを止めた。

店長さんも、うなだれるだけで何も言わない。

もともと、園崎家の結束の一つに、本家が行う、ほぼ無利子・無担



保・長期返済可能という融資がある。そのため、親類縁者は、ご本家には頭があがらないので、わりと無茶な命令でも泣く泣く従う必要があると言う。

超冷遇処置というのは、すなわち、この融資特典が受けられることがなくなるので、オーナーにとっては死活問題だ。

「今回は、何と言っても、次期当主の園崎魅音の結納披露も兼ねているからね。」

そこでしよっぱい事しちゃうと、店長さん、末代まで言われちゃうからさ。がっちり取ってあげないと。これは店長さんのためでもあるんだよ」

この辺り、大人の事情はかなりエグイ。

「もちろん、ここで提供してくれれば、バッチャも喜ぶだろうし、

次期当主から覚えも目出度くなるから、店長さんにとっては全体で見ればプラスなんだ」

まあ、その次期当主は魅音なわけで

本人から「覚えが目出度い」と言われれば、店長さんも我慢もしてくるだろう。

というわけで、店長さんには悪いが、俺達はガンガン店内の大きめの玩具に徴収用のフダを貼っていく。フダをはっておけば、あとで綿流し委員の人達が持つて行くと言う仕組みだ。

俺は子供用プールや、子供用のアスレチックなど目につく大型アイテムに、ビシバシと札を貼っていくと、店の奥に麻雀卓があるのが付いた。

そうやら牌が並べられており、誰かが触っていたらしい。

「おーい、皆、ここに麻雀卓があるぜ」

俺は何気なしに声あげて振り返ると、

…おっ!?

そこに詩音の顔があった。

「詩音か、びっくりした!?!」

「圭ちゃん…少し、話、良いですか?」

深刻そうな顔をしている。

一体何があつたんだ？

俺が頷こうとしたその時、店内に誰かが入ってきた。

「んふふふふ…これはこれは、見た顔ですねえ？」

あれは、確か大石警部？

沙都子の件でお世話になつた：

詩音が鬼のような形相で、大石さんを見ている。

なんでそんな顔をしているんだ？

「大石ッ！本当、アイツ、間が悪い時にッ！」

詩音がものすごい勢いで俺から離れていく、一体なんだ？忙しいやつだぜ。

大石さんがこちらの方に向かってくる…ああ、そうか、この雀卓は大石さんのか。

そういえば、前に集会所の前で麻雀の話を親父としていたよな。

今日はその関係で来たんだろう。

「これはこれは前原圭一さん、どうも、どうも〜」

「はい。大石さん、その節はありがとうございました」

「いえいえ、んふふふ〜聞きましたよ？貴方、園崎魅音さんとご婚約されたそうで」

「いやあ〜」俺は頭をかいた。

正面から、そう言われると、ちよつと恥ずかしい。

店内から部活メンバーが次々とやってきた。

沙都子、梨花ちゃん。レナ、それと魅音と、それを支えている詩音

？

ん？どうしたんだ。魅音、調子が悪いのか？

「おや、前原さん。雀卓を見ておいですが、今日は麻雀関連の獲物でもお探しに？」

「え、あ、はい…！そういうえば、大石さんって、燕返しができるんですよね！

見せてもらってもいいですか？」

「おやあ〜？んふふふ、それ、どこで聞いたんですか？ああ…お父さんですか？あの時は、色々話をしましたからねえ〜いいですよお」

あれ？そういえば、俺、大石さんが燕返しができるって、どこで聞いたんだっけ？

親父からは、大石さんとの麻雀話は聞いてなかったはずだけど……まあ、いいか。

説明しよう！燕返しとは、山牌と、手持ちの牌を一気に入れ替える、なんか凄い技である！

……うん。説明になっていないな。

しかし、大石さん。牌を並べる速度が尋常じゃないほど速い！

なんか相当な熟練者って感じがするぞ。

麻雀はよくやっているって話は前にも聞いたけれど、さすがって感じだ。

「んふふふ〜そういえば、前原さん。魅音さんとはハッスルしてますかあ？

太陽が黄色くなるまで、がんばっちゃうのは若さの特権ですからねえ〜」

でたな。おっさんのエロトーク！

付き合っってはやりたいけど……

……がるるるるッ!!

魅音がうなり声をあげているので軽くスルーしておくか。

「いや、あの……俺、魅音とはそういうことはしていないんで……」

「おんやあ〜？本当ですか？でも、ちよくとはしているでしょ？若いんですから……」

「本当ですって、監督……入江先生に大人になるまでしないように注意されましたから」

「んふふふ〜圭一さん、真面目なんですねえ。うちのバアさんの時代なんて中学生ぐらいから子供、つくったもんですよ〜」

大石さんのバアさんの時代って、昭和より前じゃないか？

時代遅れというか、時代そのものが違うだろ、それ。

「それに圭一さんはお魎さんに、ひ孫の顔が見たいっとか、言われてません？」

「大石ッ」

!!!!!!!

びつくりした!? 誰だ今叫んだの? 魅音か?

凄まじい顔しやがって。

詩音が抑えているけど、さっきからおかしいぞお前。

「すいません。大石さん…魅音、恥ずかしがり屋なもんで…」

「いやいや、いいですよお、で、どうです?」

こう、言われてませんか? プレツシヤーをかけられているとか」

プレツシヤーって…ああ、大石さんも知恵先生の話聞いたのか。

もしかして、広まっているのか? 俺がお魍のバアさんにプレツ

シヤーかけられて自殺未遂したって話? 雛見沢って人が少ない分、噂

が広まるのも早いからな。

「いや、お魍のバっちゃんからのプレツシヤーの話…あれ、嘘って言う

か勘違いなんですよ」

「勘違い? どういうことですか」

「先日、俺、川原で倒れていた時があつて、知恵先生は心配して、それ

をお魍のバアさんから俺がプレツシヤーかけられたから自殺未遂し

たんじやないかって話になつて…で、監督…ああ、診療所の入江先生

の耳にも入り…って感じなんですよ。」

「えっと、じゃあ、プレツシヤーをかけられているってのは…そんな事

実は最初から無かった?

入江先生の…勘違い? 早とちり? っつてことですか…?」

大石さんが目を丸くしている。いや、まあ、そうなるよな。実際。

なんか、ちよつと大げさになつているみたいだし…それが全部勘違

いでした。なんて話になつたらさ。

全く知恵先生には困つたもんだぜ。

…いや、もとはといえば、俺と魅音が、川原でいちやいちやしてい

たのが原因だけど。

「そうでしたか。そうでしたか…んふふふ…」

大石さん、なんか妙に意気消沈しているな。

なんでだだろう? もしかして俺達の力になりたかったのか?

だとしたら、ちよつと悪い事をしたなよな。

「それではみなさん、お見せしますよお! ほっ!」

カチャカチャ  
カシャーン！

／＼おおおおお／

部活メンバーが一斉に感嘆の声をあげる！

おお、凄い！本当に牌をいれかえた！こんなこと、できるものなんだ。

「んふふふ、まあ、本番では使えない技ですが、芸の一つで」

「ああ、大石さん、ここにいたんですか」

外から長身の男の人が入って来たぞ。あれは…

「赤坂！赤坂なのですね！」

ん？なんだ。梨花ちゃんの知り合いか？

梨花ちゃんが、長身の男の元へ走っていく。

「それでは私も、ここで失礼します。今度お会いする時は別の技をお見せしますよ」

「あ、ありがとうございます。大石さん」

帰ろうとする大石の前に沙都子が立ちふさがった。

神妙な面持ちで頭を下げる。

「大石のおじさま…鉄平叔父さまをよろしく願いますわ」

叔父：北条鉄平。沙都子を虐待していた男。

そうだ。沙都子にとっては、北条は少しでも長く刑務所にぶち込んでもらいたい存在にちがいない。わかるぜ沙都子。その気持ち。

頼むぜ、大石さん。

少しでも長く、北条鉄平をぶちこんでくれよな。

「わかっていますよ。北条沙都子さん…んふふふふ…」

大石さんは沙都子の頭をなでると、

赤坂と呼ばれた男からビニール袋を預かり、外へと出て行った。

視線を雀卓に戻す。

沙都子とレナは雀卓の椅子に座り、燕返しの練習を始めていた。

他のメンバーはどこにいったんだ？

梨花ちゃんは、赤坂と呼んだ男と話し込んでいるけれど…

魅音と詩音は…あれ？いない。

いや、店の奥の方にいるみたいだ。何か話し込んでいるのか？  
雀卓で牌を並べている沙都子が背中越しに話しかけてきた。

「圭一さん、ご心配なら、魅音さんの御様子見てくると良いのではござい  
ませんか？」

「ん、あ…そうだな？」

パシーン。

振り向くと、沙都子の手配が全て変わっている。

まさか…一発で燕返しを決めたのか？

そういえば麻雀勝負を部活でしていたとき、

魅音相手に何か技を決めてようとしていたけれど、  
もしかして…

いや、今はそんなことはどうでもいい。

魅音と詩音が気になる。一体、二人きりで何をしているんだ？

店舗の奥に進むと、二人の話し声が聞こえてきた。

…すしかない。もう…

…で？…姉…本気？…

…まって…必…する…

…大石を…してやる…

「よう魅音、詩音。二人してコソコソ話か？」

二人して体をビクリと動かす。

おうおう、分かりやすく助かるぜその反応。

魅音が笑いながら振り返る。

「アハハハハ、圭ちゃん。どこまで聞いてたの？」

「大石さんを懲らしめるってところかな？悪だくみを考えているんだ  
なお前ら」

詩音も罰の悪そうな顔をして頭を掻いている。

「ありやいや、お姉、聞かれてしまいましたね。どうします？」

「どうって…あっ…」

魅音の返事を待たず、俺は魅音の腕を掴んで引張った。

「わりい、詩音。魅音を借りるぜ！」

魅音は、俺にひっぱられるまま店舗のトイレの中までついてきた。

抵抗しないのは俺を信じているからだろう。

何も言わずについてきてくれるのは、嬉しいぜ。でもさ…

俺は扉に鍵を閉めて、完全に密閉空間にすると、魅音と向き合った。

「アハハハ、圭ちゃん。どうしたの？我慢できなくなった？」

「大石さんを殺すんだな」

沈黙。

魅音の目から光が失われていく。

ああ、あの時と同じだ。俺に、夜迫った時と。

何度か目のあたりにしてわかった。

この目をした魅音は、自分の心とは一線を引いて行動を行う。

つまり、本気で何かを決意した時の目だ。

「聞いていたんだ。圭ちゃん」

「なあ、沙都子の時も話をしただろう。どんな理由があろうとも、人を殺すのは最低の行為だ。

それをやったら、もう日常には戻れなくなる。魅音が大石を殺す理由はわからないが、理由がなんであれ、とりかえしのつかないことになるんだ。それを…」

「あいつは。大石は、邪魔をしたんだよ圭ちゃん！あいつは、私達の婚前交渉を邪魔し！

子供を作るのを阻止した！バッチちゃんが子供を望むのを阻止した！あいつは許せない！

あいつは、私達園崎家を滅ぼそうとしているんだ！だから、殺すしかないんだ！」

魅音は瞳の光を失いながら、叫んだ。

今までと違う…今までは瞳から光を失ったらロボットのよう抑揚して行動していた。

しかし、この魅音は…怒りに、支配されている。激情している！「魅音、それは本心でいっているのかよ！人を殺すと、永遠に呪われちまうぞ！」

今の日常を捨ててまで、大石さんを殺したいのかよ！どうやって殺すんだ！相手は警官だろ！無茶言うなよ！」

「そうだよ圭ちゃん！あいつは死ぬべきなんだ！殺すべきなんだ！いや、ダム闘争のときから

あいつは雛見沢の敵だった、だから死ぬのは当然なんだよ！生かしておいたのが間違いだっただよ！この雛見沢の御三家の次期当主として、私がアイツを殺すのは当然なんだよ圭ちゃんッ!!どうやって殺す？圭ちゃん見たい？あいつを殺す道具を！ほら、これがそれだよ！」

魅音が取り出したのはカラフルな拳銃だ。

一瞬、玩具かと思つたが、違う。実弾が入っている。本物の拳銃だ！

「……こんなもの、どこで、いや、こんな小さな銃じゃ殺せないだろう？」  
「ハッ！圭ちゃん、銃弾なんてどこにあたってても、人間は動けなくなるなるもんだよ！現実はね、漫画や映画とは違うんだ。どこでもいい！当てちまえばこつちのもんだ！動けなくなった所で、あとは頭なり、心臓なりに撃ち込めば良い！それでENDさ！小さな銃の小さな弾丸でも、十分殺せるよ！そうさ……アハハハッ！殺せる！殺せるんだ！」

…魅音。

だめだ。俺の話が全く通じてない。

完全に熱情にうなされてる。駄目だ。どうしたらいい？どう説得する？

北条鉄平を殺しに行こうとした詩音には、まだ正気ともおもえる部分があった。

だが、今の魅音はどうだ？あきららかに常軌を逸している！どうすればよい？どうしたら……！

…あ。

俺は気が付いた。とんでもない勘違いをしていた。

俺に合せようとするから、そもそもダメなんだ。

俺が魅音に合わせるべきなんだ。

魅音を信じて。

それがどういう結果を生み出そうとも。

結納のときに、何があろうと魅音と共にあると覚悟はしたろう？



お魎のバアさんと、茜さんの前で約束したろう？

今が、それを示す時なんだ。

「…わかった。なら、俺が殺す。その銃を寄こせ」

「アハハッ…へ…？何を言っているの？」

「俺が、大石を殺すと言ったんだ。だから、その銃を寄こしてくれ」

「な、何を、何をいつているんだよ圭ちゃん！バカな事をいわないでよ！」

魅音が慌てている。

こんな時にも可愛い奴だな。

「ハハハ、なんだよ。逆の立場になった俺と同じことを言っているじゃないか」

「バカいわないですよ！おじさんはいいんだよ！そういう世界の人間なんだから！」

でも、圭ちゃんは違うでしょ!?!私は、園崎家と雛見沢を代表して、アイツを…」

「でも、俺はお前の夫だぜ？魅音」

「……………」

魅音の目に光が戻ってきた。

落ち着いてきたんだな。うん。なら、もう良いだろう。

なら言おう。今まで、皆に言わなかったあの話を。

「なあ、魅音。俺、沙都子を救出するときに詩音に、皆に言わなかったことがあるんだ」

「…なに？」

「俺は殺人を肯定しない。だから殺すのは間違っていると思う。でも、魅音、お前が考えて

考え抜いて、あらゆる手段を考えぬいて、悩み、苦しみの果てに、それでも、もし『殺す』という

選択しかないのであれば、俺は、お前の選択を肯定する」

「…圭ちゃん」

「世界中の誰もが、それはおかしいと考えていても、俺だけは絶対にお前を支持する。」

お前のやった行動を、俺だけは認める。それだけの苦しみと辛さを乗り越えて行った判断を、

俺は否定しない」

「……………」

「だから、最後に魅音に聞きたい。

冷静になって考えて、それでも、なお、今ある全ての日常を全て犠牲にしてまで、

大石を殺すのが正しいと思うのであれば、その銃を俺に渡して欲しい。

俺は大石さんを…いや、お前を苦しめた大石の野郎を無条件で憎み、俺は引金を引く」

俺は魅音の手に優しく触れると、

その手に握っていた銃を取る。

「圭ちゃん…本気なの？」

そう。俺は今まで誰にも『殺人の肯定』を言わなかった。言えなかった。

当たり前だ。殺人は唾棄すべき最悪な行動で、それをおこなえば、二度と日常には戻れなくなる。

罪悪感と、苦しみの末に、誰かを疑い。誰かを呪い。自分自身をも殺してしまう。

でも、それでも、なお…

魅音に『殺し』という選択肢しかないのであれば、俺はそれを肯定しよう。

そして、魅音の苦しみと絶望の呪いの半分を俺は受け入れよう。

魅音と共にする人生があるのであれば、彼女自身の手だけを汚させはしない。

汚れるべきなのだ。共にあるべき存在として。

「俺も一緒に地獄に落ちる」

だって俺は、園崎魅音の夫なのだから。

「……………」

……………

……」

魅音は沈黙したまま、

俺の胸に頭をこすりつけてきた。

いつまで、そうしていたのだろうか。

魅音の顔が不思議と安らぎに満ちているのに気が付いた

「圭ちゃんつたら…本当にさ…えへへ…」

俺は魅音を優しく抱きしめると、

頭を撫でる。

「はあ、圭ちゃんの匂いって、物凄く安心する。

なんだかさ、大石のヤツを殺すのバカらしくなっちゃったよ」

「…いいのか？」

「…うん。もういいや。大石なんかにかまっているより、

圭ちゃんところこうしている方がずっといい」

わかっているじゃねえか魅音。

そうさ、大石のアホなんてほっときやいいんだ。

どうせ来年になれば定年退職するんだろ？

そうなれば、もう誰も邪魔をしない。

そうなりや俺達の時間だ。ガンガン子作りしようぜ？

その時は、もう夜は寝れるとおもうなよ魅音？

徹夜続きでお前をぶったおれさせてやるぜ！

「なに圭ちゃん。急にエロ親父になっちゃったの？」

「たぶん、それは俺の身近に、おじさんがいるからだと思うぞ」

「誰だあ？圭ちゃんにおじさん精神叩きこんだのは？」

…誰だろうな。

悪い奴がいたもんだぜ。

俺は顔をあげて目をつぶった魅音の唇を塞ぐ。

魅音は俺に抱きしめられるまま、身を任している。

魅音の体温と、心臓の鼓動が聞こえる。

ああ、温かくてとても安らぐ。

そうさ。これ以上にやりたいことなんてあるものか。

人殺しなんてクソ喰らえ。そんなものより大事なものが間違いな

くある。

…そうか、それに気が付いてくれたんだな。

ありがたいな魅音。やっぱりお前は俺の最高の嫁だぜ。

トイレから出た俺達を詩音はニヤニヤしながら出迎えた。

「お姉、圭ちゃん成分、ちゃんと補充できた？」

「アハハハ！充電率120%って感じだよ！それと、詩音さっきした話ナシね！忘れて！」

「え？お姉。それって…」

魅音は俺の方を振り向くと、はにかんだ笑顔を見せる。

それを見た詩音が何かを察したのか高笑いを始めた。

「なーんだ。圭ちゃん成分をとっていたと思ったら、

逆にお姉が成分を吸い取られていたってことですか…アハハハ！」

おいおい、そりやどういう意味だ？

って、詩音、なんで近づいてくるんだ？

詩音は俺の前に来ると満面の笑みを浮かべる。

「…圭ちゃん。今の圭ちゃんは300点満点です！」

お姉免許皆伝を授けたいと思います！」

なんじゃそりゃ。

って、そういえば、さっき俺に何か話があるっていつていなかったか？

「もう、解決しちゃいました☆アハハハ」

わけがわからん。

本当、詩音って掴みどころの無い奴だよな。

ん？沙都子と梨花ちゃんとレナが、

こっちにやってくるぞ。なんだなんだ？

「ちよつと皆さん！そろそろグラランドに向かわないと、試合が始まっていますわよ！」

「あ、やばい！もうそんな時間か！梨花ちゃんは、もういいの？」

「はい。交渉は完璧なのです！スーパーロボSSR赤坂をゲットなのですよ☆にば——！」

「圭ちゃん、魅いちちゃん、詩いちちゃん。早く☆いこ☆いこ！」

長居しすぎた。試合に遅刻しちまう！

ん？どうした沙都子？不思議な顔をして…？

「いえ、圭一さん。そのズボンの前ポケットに入れているカラフルな銃はなんですか？」

オークション品ですか？」

あ、魅音からとった銃をポケットに入れたままだった。

後で返しておかないと…

「魅音さんならともかく、圭一さんに似合わない銃でございますわね。

早く魅音さんにお返しなさいませ」

「早くするのはです。沙都子も、圭一も、早く出ないと間に合わなくなるのですよ」

いけない！梨花ちゃんに足されて、俺も急いで玩具屋の前においてある自転車に乗り込む。

試合開始までもうすぐだ。早く向かわないと。

## 第28話「10日目（土）B「ヒーローの条件」

「10日目（土）：試合会場：昼：前原圭一」

興宮試合会場。

入江監督の率いる雛見沢ファイターズと、宿敵・興宮タイタンズとの戦いの助っ人に来た俺達をグラウンドで待ち受けていたのは…

バシィーローン!!!

気合いに満ちた表情で豪速球を投げる

亀田くんの姿だった。

脚をあげて、

大きくモーシヨンをとりに

投げる。

バシィーローン!!!

キャッチャーミットに鳴り響く音!

一球投げるごとに、周囲からどよめきが起きる。

速い：そして重い!

キャッチャーミットに入る時の音が、尋常では無い!

周囲にいたカメラマンたちが一斉にフラッシュをたく。

これが、甲子園ピッチャー：亀田だ!

沙都子が叫ぶ。

「ど、どうなっていますの：明らかに前回よりも、桁が一つあがっていますわ!」

沙都子が、そう叫ぶのも無理はない!

前回、亀田くんが興宮タイタンズの助っ人として来たときも、それは凄かったが、

今回の投球はそれを遙かに上回る!

亀田くんは、俺達に：いや、俺に気がついた。

その顔は、鬼神のよう形相だ。

「来たかK：いや、前原圭一ッ!俺は今日、貴様との決着をつけるために来た!」

俺はもはや鬼神!さあ、来い!お前に引導を渡してやる!」

周囲がざわめく！

そう、甲子園ピッチャー亀田が、夏の甲子園前にライバルを潰すと宣言したぞ！

報道陣のカメラのフラッシュが、俺と亀田くんに降り注ぐ！

「前原圭一！貴様が俺を捨てツ女にうつつを抜かしている時ツ、俺は血と汗と涙を流して野球に打ち込んできた！見せてやるよ、お前が何を捨て、俺が何を得たのかを！」

…くっ、亀田ッ！

まさか、こいつ…俺が魅音と付き合っていることを恨んでッ！

魅音の顔が若干引きつっている。

「えつとさ…圭ちゃんって、亀田くんときき合っていたわけ？」

…いや、なんかそう思われても仕方がない言い回しだが、

別に亀田くんとはそういう関係では無い。うん。

「亀田くん…いや、亀田！良いだろう。お前の得たモノって奴…この俺に見せてみる！」

／オオオオオオ／

周囲が湧く！ついに宿命の対決に決着がつくのかと騒ぎ立てる！

ああ、いいさ。亀田…お前がそのつもりなら面白い。受けて立つぜ！

この前原圭一、逃げも隠れもしねえぜ！

レナと梨花ちゃんは、亀田の気合いに困惑している。

「勝算はあるのかな？あるのかな？」

「みー…なんか一人だけ劇画世界の住人がいるのですよ！」

「任せろ！俺を誰だと思っている！前原圭一だぜ？」

俺達部活メンバーのいる

雛見沢フアイターズに敗北は無いッ！

…と、いきたかったが、

想像以上に亀田は凄まじかった！

試合開始後、亀田の投球で誰もが三球三振！

バットに触れさせても貰えない！早すぎるッ！

凄腕バッターの沙都子でさえ、触れることもできない！

さらに、沙都子は、爆竹、風船、ロケット花火、あらゆるトラップを仕掛けてみたが全て不発！

亀田は全てポーカーフエースで切り抜けている！

「凄い精神力だ。きつと今の亀田くんはプロでも通用する」

サンングラスのかけた謎の事情通が呟く。

いや、誰だよお前？

ことここに至り、非情の手段をとることにする。

梨花ちゃんと沙都子の肩に手を添える。

「勝つためだ。梨花ちゃん。沙都子。犠牲になってくれ」

「みい…」

「…仕方ないですわね」

「レナ！もし、亀田の玉を打ったら、梨花ちゃんと沙都子をお持ち帰りして良いぞー！」

「ほ、ほんとにいい!? ☆お持ち帰りだよお！」

レナ、カワイイモード発動！これで亀田の球も…

バシィーーン!!!

スリーアウトチェンジ！

「はう〜…お持ち帰りしたかったのに…」

そんな、バカな!? カワイイモードのレナも撃沈だと！

い、いや、気合いの入った亀田なら不思議ではない！

というのも、亀田はかつてフワブズの勾玉を巡る戦いの時に勃発した野球決戦のさいに暴走レナとも互角に戦えたのだ！

そして戦いは、九回裏となった。

こちらは全く点数をとれなかったが、必死に守りを固めなんとか対0に抑えていた。

雛見沢ファイターズ：つまり俺達が勝つには、この九回裏で何とかするしかない！

だが、今の亀田相手に奇跡を起こすことなどできるのか？

だが、しかし、ここで急に亀田がボールを連発した。

周囲が騒めく。

どうしたことか？ パーフェクトゲーム目前で崩れたのか？



いや、違う。

俺は直感した。アイツは俺の座席まで回すつもりだ。そして次のバッターにもフォアボールを出し、ツアアウト、一・二塁の場面で、俺の座席となった。

「前原圭一、お前のためにとっておきの場面を用意してやったぜ？

ツアアウト1・2塁。ここで打たなきや男じゃねえよな？」

亀田が邪悪な顔で俺を嘲笑う。

…どうする？

！  
どうあがいても、今の亀田の投げる球を打つことなどできはしない

九回まで続き、ようやくタイミングはつかめてきたが、球を散らされたらそれで終わりだ。

もし、俺が打てるとしたら…

それは予想される場所に、予想される速度で亀田が投げる場合のみ。

しかし、そんなことが可能なのか？

周囲が、俺と亀田のライバル対決を息をのみ見守る中、俺はバッテリーボックスについた。

「前原圭一、ここでテメエのほら吹き伝説も終わりだ」

「…なに？」

「街の有力者の女を口先三寸でだまし、実力もねえのに俺のライバルとして立ち、名声と金を手に入れる…口先の魔術師だあ？ようするに、前原圭一！お前はな…口先だけで中身のねえ空っぽの人間なんだよ！」

亀田の仕掛ける心理作戦。

だが俺は逆に心に余裕ができればはじめた。

なぜならば口先の戦いこそが前原圭一の本領発揮の場！

…亀田。俺の土俵にのつてくるとはな。

俺は口端をあげる。

口先の魔術師と言われた、

この前原圭一に口先で勝負を挑んだ時点で、お前の負けだぜ亀田？

「…タイム！」

俺はタイムを宣告すると、魅音の前にやってきた。

「なに、圭ちゃ…んっ…」

魅音の唇を奪い。抱きしめる。

ザワザワザワ…

周囲が騒めき、亀田はあっけに取られている。

…ふふ、いい気味だぜ。

俺が唇を離すと、魅音は名残惜しそうにしていたので

「続きは、また後でな」と、ほっぺにキスをした。

「前原圭…てめえ、どういうつもりだ！神聖なグラウンドで…キスするんて！正気か!？」

「ああ、亀田。正気も正気さ。だって、もう俺の勝ちが決まったようなものだからな」

「なん…だと?」

俺はバットの先をストライクゾーンの中央でくるくる回す。

「お前の得たモノを俺に見せたいんだろ?だったらさ、ここに投げてみろよ」

「ふざけるな!そんな挑発に俺が乗るとおもっているのか!？」

「逃げるのか、なら、かまわないぜ?お前は前原圭一から逃げた。

その記憶を未来永劫、引きずるんだからな!」

「俺はお前なんかには負けるわけが無いだろ!前原圭一いい!!!」

「だったら逃げずに戦えッ亀田ッ!!!」

「俺がいつ逃げたあッ!!!」

「亀田ああああ!!!」

「さんをつけるよぞ!コ助野郎ッ!!!」

亀田が大きく振りかぶって…投げた!

全力投球のワインドアップ投法!

それは墨にいるランナーを完全に無視する、最大火力の投球方法ッ

!!!

投げた!

剛速球ッ!

おそらくゲームなら雷エフェクト付きなのはほぼ確定！  
それほどの速さと重さを兼ね備えた魂の一球ツ！！

しかし!!!

カキイーーーーーッ！！！！

俺が、タイミングよく振った場所に、その球は来た!!

俺の挑発に乗せられた亀田は、狙い通り、ストライクゾーン中央に球を投げたのだ!!

「あとは、1. 2. 3だぜ? 亀田?」

どんなに早かろうが、重かろうが、投げる場所がわかり、タイミングよくバットを当てれば球は飛ぶ。そう、ホームランゾーンの遥か向こう側まで…

／ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ／

周囲で溢れんばかりの歓声が起き。

報道陣のフラッシュが光続ける!

亀田はその場で倒れ込み。

俺は、ゆつくりとベースを回った。

そして、ホームベースに足をつけると、亀田の元に向かう。

「うっ…うう…け、けい…わかってますよ。言わなくたってわかってますよ。」

どうせ、アレでしょ? お前には勝利の女神がいなかった…っていうつもりなんでしょ?

そんなの俺だって、わかっているツスよ…」

「バカ野郎ツ!!!」

ドガツ!!

俺は活を入れた!

「ひっ…!?!」

「確かに、今回の戦い。勝因は間違いなく魅音が…俺の嫁がいた事だ!

でもな、亀田! お前には…そもそも足りないものがあつたんだよ!

「俺に、足りないもの…?」

「亀田くん。君は甲子園ピッチャーだ。興宮の…みんなのヒーローだ。しかし…」

心に愛が無ければ、

スーパーヒーローじゃないのさ…

「ケイイ！俺が、俺が間違っていました…！こんな俺を…許して下さいッ！」

「亀田くん、もういい…もういいんだ！人は皆、間違う！その間違いを認めてツ強くなるんだッ！」

そして亀田くんッ、今、その間違いを認めた君は男としてさらに一回り成長したんだよ!!」

「K!!!」

「亀田くん!!!」

俺達は抱き合い。そして泣いた。

ああ、これこそが青春だ！真夏のドラマだ！

／パチパチパチパチパチパチ／

周囲の人々も拍手を始め、それが大きな輪になり、このグラウンドを包み込んだ。

ありがとう。友よ。

ありがとう。良きライバルよ。

真夏の太陽が美しい。

俺達はこうやって、野球を通じて成長し、

大人になっていくんだ…

「梨花あ、私たち、いつまでこの茶番を見なければならぬでございませぬの？」

「本人達がひたつてりきっているのです、もうしばらく見てあげるのですよ☆にぱー」

閑話休題。

試合が終わり、俺達は後片付けを行う。

沙都子曰く。監督は逆転大勝利に大喜びで、明日バーベキュー大会

を開くと約束してくれたらしい。といっても、今回は監督に雇われたわけではなく、むしろ俺達がお礼でやったことなので、前回みたいな贅沢な肉は出ないだろう。

むしろ、出してもらおうと非常に気まずい気がする。

俺がベンチ裏で道具の片づけを行っていると、魅音がやってきて体を寄せてきた。

さすがに、周囲は知らない人ばかりなので少し、気恥ずかしい。

「圭ちゃん。今日はありがとう」

「へへ、特大ホームランだったろう？これで監督へ借りも返せたった感じだよな」

「うん。それもあるけど…玩具屋さんでのことも、さ…」

ああ、魅音が興奮してきたときの話か。

「もし、今日、圭ちゃんが側にいなかったらさ。

私さ、絶対に鬼になっていたと思う。鬼になって大石を殺していた」

「…魅音」

「だから、うん…圭ちゃん。ありがとう」

俺は魅音の肩に腕を回して引き寄せる。

「そんなことないぜ？魅音は自力で正気に戻っていたんだ。そうでなければ、俺が殺すといったとき、あんなに必死に止めていない。むしろ『じゃあ、一緒に殺そう！』って言っていたはずだぜ？」

「……………」

そうさ、魅音は強い。

いつだって魅音は、俺達のリーダーとして毅然としていた。

だから、あの時も…

きつと冷静になるって信じていた。

園崎魅音は決して鬼になんかにはならないと。

……………

……………

……………

しばらくの間、沈黙が訪れた。

魅音は俺の肩に頭をのせると呟いた。

「もしあの時、そう言ったら…圭ちゃんはさ、どうしたの？」

「それは、もう言ったはずだぜ、魅音？」

俺も一緒に地獄に落ちる…と。

そうさ。今も、これからもそれは変わらない。

園崎魅音の夫で有り続ける限り。

魅音が目をつぶり、コクリと頷いた。

「圭ちゃん、ありがとう…」

そういえば魅音に返すものがあるのを思い出し

前ポケットからカラフルな拳銃を取り出した。

「これ、返すの忘れてたぜ。俺が持っている」と沙都子にバカにされそ

うだからさ」

「…持っていてくれてもよかったのに…でも、沙都子にバカにされる

んじゃ、仕方ないね」

拳銃を魅音に渡すと、片手で顔を向けさせる。

魅音が目をつぶると、俺はゆつくりを顔を近づけ…

「ケエエエエイ！ここにいたんツスカ！」

…げっ、だれだ!？」

亀田くんか!? 一体何のようだ？

俺は慌てて魅音の体を離す。

「なんか、今日は色々すまなかつたす。なんで、今度一緒にフェスタ

いきましよう！」

またチケット当たったんですよ！二人で一緒に…ぐふふふふ♡」

「ほほう。それはいいね！亀田くん…ぐふふふふ♡」

………

あ、魅音が、ジト目で俺達を見ている。

「あ、俺、これから雑誌記事のインタビュがあるんで失礼します！」

亀田くんが、魅音の視線に気が付いて早々に退散した。

はあああああああ…

おっと、なんだ？このクソでかい溜息は魅音か!？」

「あのさ、圭ちゃん。本当に男同士でジャンボパフェつつき合ってい

るわけ？

あんまり、男とか女とかもおじさん言いたくはないけどさ。それでどうなの？」

いや、どうなの？とか言われても、

それは亀田くんと、俺とのサンクチュアリのアレなわけで…

…ん？まてよ？

もしかして魅音、妬いているのか？

「え？い、いや…そんな、妬くわけないじゃん！ただ、まあ…おじさんとはジャンボパフェを一緒につついていないのに、亀田くんとだけ行っているのは、どうなのかなーって思ったわけで…」

口をとがらせて良く言うぜ…

ようするに意地妬けているんだな？

よし、そういう事なら決めた！

「今から行こうぜ！」

「はひい!?い、い、今から!?エンジェルモートへ!?そりやまあ、詩音も今日は予定があるからって、アルバイトはキャンセルしたらしいし行っても問題無いけどさ」

…そういえば詩音の奴、話ってなんだったんだ？

えらく真剣そうだったが、結局、何もしないうちに解決したみたいだし。

「わっかんない。詩音ってさ、ほら…自由奔放な所あるから…」

まあ、詩音は詩音で問題が解決したらしいし。あまり深く考えないようにしよう。

とりあえず、皆にここで解散をつけて、魅音を連れてエンジェルモートへと行ってみるか。

そう、ジャンボパフェをつつつきに！

「10日目（土）：エンジェルモート：夕：前原圭一」

エンジェルモートのテーブル席で、俺と魅音は向かい合って、ジャンボパフェを見つめている。

まだ、食べてはいないが。

…甘かった。

もちろん、味ではなく想定が！

正直、魅音と正面から向き合って可愛く可憐で巨大なパフエをつつくというのが、想像以上に恥ずかしい！

最初は二人とも、わりとノリノリだったが、ジャンボパフエが眼前に置かれ、

スプーンを入れる段階になると、急に気恥ずかしさが出てきたのだ。

「魅音さ、食べてもいいんだぜ？」

「圭ちゃんこそ…食べなよ」

お互いに視線を交差させ、顔を赤くしてもじもじしている。

だからといって、いつまでもこうして、食べないわけにもいかない。意を決してスプーンをジャンボパフエに刺そうとしたら、

魅音が先にパフエをすくい、俺の目の前に突き出してきた。

「圭ちゃん、あーん…」

顔を真っ赤にした魅音が、

気恥ずかしそうにスプーンですくったパフエを俺の前に突き出す

：

な、なんだこの破壊力は!?

ちがう！違うぞ!! 亀田くんと一緒に食べているジャンボパフエとはまるで違う！

亀田くんと食べるジャンボパフエはいわば、儀式！

メリケンのバーベキュー！焼肉パーティー！カニバル祭り！

ただひたすら、貪り！喰らい！味わう宴!!!

それなのに、今、ここにあるジャンボパフエは、その糖度に

魅音の可愛らしさがくわわり、とんでもなく高カロリーなシユガーと化している！

…パク。

俺は、魅音の突き出してきたスプーンに乗っかっているパフエを口に入れる。

あまり戸惑わなかったのは、ここ最近、お昼に魅音に食べさせてもらっているからだろう。



出されたら食べる。俺は魅音に条件付けされているのだ！  
そして口に入れたパフエは…

甘い…！甘すぎる！甘いのは当たり前だが…ただの甘さじゃない  
！

「美味しい？圭ちゃん」

魅音の笑顔がとんでもないスパイスになって全身をかけめぐりや  
がる！

胸焼けで焼死しそうだ！今、胸から炎が出て燃え死んでも不思議  
じゃないぞ！

ドキドキドキドキドキドキ…

し、心臓の鼓動が激しいッ！

いかん、このまま魅音に食べさせてもらい続けると、胸焼けか心臓  
発作で死ぬッ！

「お、俺もやってやるよ…！」

「え？お、おじさんはいって…」

問答無用！魅音、お前も胸焼けで燃え尽きてしまえ！

俺はスプーンですくったパフエを魅音の前に持って行く。

魅音は口を小さく開いて、それを口の中に入れると、顔を赤くして  
視線を落とす。

「あのさ、魅音…その、美味しいか？」

「…うん」

グハッ…！魅音めッ、なんて可愛さだ！

なんだ、食べさせても俺のダメージが大きいぞ!?

どうなっているんだ。このジャンボパフエは？

やばい！これは想像以上に危険な食べ物だッ！

「あ、あのさ…その、普通に食べないか？」

「う、うん。そうだね…アハハハ」

このままお互いに食べさせあっていたら、両方の命に係わる！

俺と魅音はそれぞれ、ジャンボパフエを両側面から食べ始めた。

つまり、当初の予定通りつつつきあって食べている！

いや、別に力説することでは無いが。

俺と魅音にとつては大事なことなのだ。

しかし、エンジャエルモートは甘いものに力をいれているだけあつて美味しい。

食べている内に落ち着いてきた。やはり甘いものは良い。心をみたしてくれる。

魅音も俺もお互いに、いつしか笑顔になつて食べていた。

ふと、見ると、魅音の口の周りにクリームが付いている。

あははは。魅音、子供かお前は。

俺は魅音のほつぺをクリームを指ですくい口に入れる。

「け、け、圭ちゃんツ!!」

「頬つぺた、クリームだらけだぜ、魅音?」

顔を真っ赤にする魅音。

まったく、どこまでも可愛いやつなんだよ。

俺が笑っていると、魅音はムスつとした顔で、身を乗り出してきた。

「け、圭ちゃんがそういうことするなら、お、おじさんにも考えがあるんだからね!」

…えつと、何をだよ?えつ!?

ペロツ!

ひあつ…お、お、おまえ、俺の頬つぺたを舐めたのか!?

「こ、これは正当防衛だからツ!圭ちゃんが先にしてきたのが悪いんだからツ!」

正当防衛って、こういう時につかう言葉か?

いや、これは過剰防衛っていうか、ただの反撃じゃないか!?

ドキドキドキドキドキドキ:

うわああ、また心臓の鼓動が激しくなってきた!み、水をツ!

「お客様。当店のサービスです。コーヒーをどうぞ」

眼の前にコーヒーがおかれた。

あれ?コーヒーなんて頼んだ覚えなんてないぞ?

いや、とりあえず助かった!甘いモノには丁度良い飲もうツ!

ゴクゴク…プハー!

俺は一気にコーヒーを飲み干すと、

ウエイトレスに礼を言うべく見上げると…

「…つて、詩音ッ!？」

「はい。詩音です☆」

詩音がいた!何故だ!?

ちよつと待て、お前今日は休みをとったんじゃないのか!?

あ、あれか?急にバイトがキャンセルになったのでヘルプで入ったとか、そういうことか?

「いえいえ、この店のオーナーの義郎おじさんが『面白いものが見れるぞ!』つて連絡してきたので速攻でシフトに入りました♥」

最悪な理由だなオイ!

魅音が顔を両手で覆い悶絶している。

「うぎやあああ!!義郎おじさんッ!!アンタなにしてんのさ!!!」

ギルティ!ギルティ!ギルティ!!!私が次期当主になったら、超冷遇処置してやる!!!

利息十一で、返済期日二日にしてやるー!!!」

落ち着け魅音、その計算だと全く利益になっていないぞ!?

「大丈夫ですお姉♥他の人をのけ者にするだなんて悪い事、私、しませんから?」

「…へ」

…まさか。

「あはははは、魅いちちゃんも、圭くんも、かわいかったよ☆はう〜」  
「二人がどこに行くのか気になったのでついてきたのですよ☆に

ばー」

「まあ、いろいろと面白い物がみれましたわね」

ぎやあああああああ!

すぐ後ろの席に、部活メンバーが!レナと梨花ちゃんと、沙都子がいる!

まさか試合会場からつけてきたのか!?

「大丈夫です!」

「前原さん、僕たちもいます!!!」

ぎやああああ!なんで、富田くん岡村くんがいるんだ!!!!

って、ふたりとも難見沢ファイターズの一員だった！

「ケエエイ！俺をおいにかけてきてくれたんですか？嬉しいですよ!!」  
うああああ!?なんで亀田くんまで!!てか、この店で取材をうけていたのかッ!!

俺と魅音は悶絶する！

両手で顔を抑えて、その場の席でゴロゴロのたうちまわる！

「さ、お姉。思う存分、圭ちゃんとイチャイチャしてください♥」  
「できるかああああ!!!」

「…いや、やろう魅音」!!

…え？魅音が目を点にして俺を見ている。

恥ずかしさも極点を超えると、それは無になる！

今、俺は、完全に恥ずかしすぎて、恥ずかしくない境地にはいつている!!

つまり、恥ずかしさのオーバーヒート！無我の頂き！

「け、圭ちゃん…？冗談だよね」

「いや、本気だぜ魅音。俺は、皆の前でいちゃつくー！」

俺はすでに覚悟完了していた。

ここまで来たら後にひけるか！男、前原圭一、ここでキメる！

俺は席を立つと、魅音のすぐ横に座りなおす。

口を「あうあう」と小さく動かす魅音の肩を掴み、俺は自分のスプーンで、ジャンボパフェをすくうと、魅音の前にさしだした。

俺は最高のイケメンフェイスで語る。

「魅音、食べて…くれるかい？」

「け、け、けいちゃん…!?!」

顔どころか全身真っ赤にした魅音の口元に、ゆっくりともっていく。

恥ずかしさでふるふる震えている魅音の口の中にスプーン先を優しく入れる。

「まって…圭ちゃ…」

パクっ…

／おとおおおおお／

魅音が食べた瞬間に、周囲から拍手が沸き起こった！  
俺は大きく右手をあげ、ガッツポーズをする！

「さすがです前原さん!!」

「みんなの前で、堂々といちやつけるだなんて！」

「ケエエエー！アンタこそ、男の中の男だ!!」

やった。俺はやりとげた。

魅音といちやつくという大業を成し遂げたのだ！

…なにか、壮絶に間違えているような気がするが。

何を間違えたのかはよくわからない。

ちなみに数分後、俺は魅音に

「圭ちゃんのバカー！バカー！バカー！ー！」

と言われてポカポカ叩かれることになるのであった…どんとはらい。

## 第29話「11日目(日) A 「交差する運命」

「11日目(日)：古手神社：昼：前原圭一」

古手神社の前で出会った魅音はタコのように頬を膨らませ俺を待ち構えていた。

怒っているのはわかるんだが、その顔は結構面白い。

「圭ちゃん嫌い。皆の前であんなことして。」

「おじさん恥ずかしくて死にそうだったよ!」

昨日、エンジェルモートでみんなの前でイチャイチャを強行したことを怒っているようだ。

普段は自分から、イチャイチャしてくるくせによく言うぜ、全く。

しかも、口から「ぷすー」という効果音までつけている。

お前は、漫画のキャラクターか何かか?」

「そんなこと言うなよ? 試合場の時は何も言わなかっただろ?」

「あ、あれはその…いきなりだったし、試合の駆け引きだったってわかっていたからさ…エンジェルモートのアレは、じよ、冗談でもさ。ああいうの良くないと、おじさんは思うんだよね」

魅音はしどろもどになつて答える。

ふむふむ。この様子だと口で言うほどには怒っていないみたいだ。

なら、少し攻めてみるか?」

「冗談だつて? それは違うぜ魅音。俺はいつだって本気だ」

「ふえ…?」

俺は魅音の両肩を掴み、顔を近づける。

「俺はあの時も、そして今も、魅音と全力とイチャイチャしたいと思っている。だから、それがわからないっていうなら、今、ここで。俺はイチャイチャする!」

「ま、ま、ま、待ってよ! ここ…みんながいるんだよ!」

「俺は一向に構わんツ!」

「わーわー! 待って! 悪かった! おじさんが悪かった! 圭ちゃん許して!」

暴れる魅音を押さえつけて、俺は額に軽くキスをした。

顔を真っ赤にして戸惑いを見せる魅音に、軽くウインクする。

「しよがないな魅音は。今回だけだぜ？」

「うゝ圭ちゃん嫌い！圭ちゃん嫌い！圭ちゃん嫌い！詩音並みに意地悪になったー！」

「残念だぜ。俺は魅音のことが大好きだったのにさ」

「うがあゝゝゝ!!!圭ちゃんそういう所ッ!!!」

本当に魅音をいじくるのは面白い。

俺はお詫びに頬にキスをすると、沙都子の冷たい声が聞こえてきた。

「全く、お二人とも今日も全力でイチヤイチャですか？早く設営をお手伝いくださいませ」

今はお昼の11時。境内には、多くの人が、焼肉パーティーの準備をしている。

昨日一緒に戦った野球部の親たちだけではなく、地元の人達まで多くいる。

昨日の逆転大勝利で気を良くした野球部の父母さんたちの中に綿流し委員会の人がおり、

どうせなら「綿流し前夜祭」ということで、盛大にパーティーを行なおう。と言うことになったらしい。

そのため、今回の焼肉パーティーは、綿流し実行委員会や雛見沢会費から捻出されることになるらしく入江監督も懐を痛めなく済んだとニコニコしている。

「しかし、前夜祭で村民主催の焼肉パーティーって。金持っているよなあ」

綿流しのお祭りだけでも結構な費用がかかるはずだと思うが、そんなに雛見沢は金がある土地だったのか？

そんなことを考えていると、梨花ちゃんがニパー☆と笑顔を向けてきた。

「圭」と魅いの結納も兼ねているので、お魘がいっぱい、いっぱい金を出してくれたのですよ☆」

今回の雛見沢綿流しは雛見沢を統括する御三家の一つ園崎家の次

期当主・園崎魅音の結納披露をも兼ねている。そのため、園崎本家から多額の出資金が出ているらしい。

「それだけじゃないんだ圭ちゃん。

バッチャんは、私達の結納を転機としてダム闘争の完全終結を宣言するつもりなんだよ」

ダム闘争の完全終結。

それはもう完全に、この時のことは水に流し、かつての反対派も賛成派も、全員が手にとって新たな未来へと進もうと言う宣言だ。

ダム闘争の推進派を両親をもっていた沙都子は、村八分とまではいっていなかったが、村人から敬遠される存在だった。しかし、沙都子を叔父の虐待から救出するため、雛見沢の人々は一丸となって団結した。

そのことにより、沙都子への対応はかなり変わっていた。

以前のように村の人達は沙都子を見捨てるようなことはしなくなっていた。

今回、ダム闘争の完全終結宣言があれば、雛見沢における沙都子の冷遇は完全に終わりを告げるだろう。

「じゃあ、もう沙都子はこれで安心して雛見沢で暮らせるんだな！」

「…うん。本当はね、私の代で決着をつけるはずだったんだけど、今回の結納は一区切りつける

良い機会だっけ話が出てきてね」

確かに、次期当主の結納発表は新たな時代を到来を告げるのに、うってつけの儀式に違いない。

今回の綿祭りには、色んな意味で雛見沢の新たな門出になるはずだ。

「魅いちちゃん！圭ちゃん！」

俺達を呼ぶ声が聞こえてきた。レナだ。

境内の階段をのぼって、こつちにやってくる。

「レナ、こつちだ！」

俺は右手を大きくふる。

レナの格好は特徴的な白い帽子と、上下一体型の白い服だ。

スカートの前中央の部分には、際どいスリットが入っている。



なるほど、今まで気にしたことなかったが、これほど際どい切り込みだと

ハーフパンツを履いていないと、確かに色々見えてしまうかもしれない。

「どうしたの圭くん？」

俺の目の前まで来たレナが、

不思議そうな顔をして見てくる。

「いや、レナが今日もハーフパンツを履いているのかな。って思ってた」

「うん。履いているよ！ほら」

…ペラ

うわっ!?!バカなにしてんだ！

レナが屈託なく、自分のスカートをめくりあげる。

確かにハーフパンツが丸見えだ！

いや、別に見えてもまったく構わないのだろうけれど。

しかし、下にハーフパンツを履いているかと言って、

自分でめくりあげるのはどうなんだ？はしたないぞレナ!?

「…圭ちゃん」

…うっ、寒気がする。

この冷気は、魅音か？

振り返る間もなく襟首をつかまれて引きずられる！

抵抗できない。なんて力だ！

お、おい、待て魅音!?!レナが啞然として見ているぞ!?

「…圭ちゃん。今日の私の格好…見えてる?」

今日の魅音の格好？

そういえば、普段着なら黄色のTシャツにズボンのはずだが、

今日はスカートつきの学生服を着ているんだな。

「そうだよ。圭ちゃんがさ。好きだと思ってスカート履いてきたんだ

よ」

俺は神社裏まで引きずられると押し倒され

その上に魅音が馬乗りになった。

冷たい顔でおれを見下し、  
両手でスカートの上端を掴む。

「お、おい…魅音?」

「スカートの下、ホットパンツやハーフパンツなんて履いていないから。沙都子のようにストッキングも履いてないし、もちろん水着を着てもいないよ。圭ちゃん…意味わかるよね?」

魅音が少しずつスカートを上にあげていく。

スカートの端がめくりあがり、ふとももが露出する。

俺はつばを飲み込む。このままだと魅音のスカートが全部めくりあがって…

「待て、魅音!」

…ガシッ

俺は、魅音の手首を押さえつけた。

魅音は不快感を表して俺を見つめている。

「なに?圭ちゃん、さ。見たくないの?」

「見たいに決まっているだろ!でも、そんな顔したお前に見せて貰っても、嬉しくもなんともないぜ!」

魅音は、顔を歪めた。

今の魅音の顔は嫉妬と怒りに満ちている。

そんなのは、俺の好きな魅音じゃない!

それは初めから自分でもわかっていたんだろう。

魅音はうなだれると、両手で顔を隠した。

「圭ちゃん、私、嫌な女だよね?こんな事しても意味が無いのがわかっているのにさ」

「魅音…」

一瞬、どう答えて良いかわからなかった。

魅音が悪いわけじゃない。もとはと言えば、俺がレナのスカートなんて凝視していたのが悪いんだ。本当に悪いのは俺なんだ。魅音は悪くないんだぜ?

「泣くなよ、俺が…その、さ。一番悪いんだから」

「違うんだよ圭ちゃん…これは、自分自身が嫌になっているだけなん

だ…だって、レナはあんなにも良い子なのにさ。嫉妬しちゃうだなんて…おじさん…本当、自分で自分が嫌になっちゃうよ…」

俺は何も言えない。

好意と嫉妬は表裏一体だ。どちらかが大きくなれば、どちらかもある。

嫉妬する必要はないぜ？

俺は魅音だけが好きなんだかさ。

それをどうやって魅音に理解できるように

上手く伝えれば良いのかわからない。

「詩音は嫉妬の鬼になるなって言っていたけどさ…そんなの無理！

だって圭ちゃんって…かつこいいんだもん！」

…はい？

「圭ちゃんって、包容力があって、皆に優しくくて

口も上手くで、誰からも好かれて…いつだって勇氣と元氣をくれる

！助けてくれる！」

こんなの…誰かにとられないって思わない方がおかしい！」

いや、いやいやいやい…

魅音、お前、何を言っているんだ？

…ハッ！

ここで俺は気が付いた。

恋人偏向フェルターだ！かつて俺は魅音を天使のようだと言った

アレだ。

ちなみに今は魅音のことを女神だと思っている。

悪化しているが、

俺のことはどうでもいい。

俺は上半身を起き上がらせると、魅音の両腕をつかんだ。

「あのな、魅音…」

「なに、圭ちゃん？」

「そう思っているの。多分、世界でお前だけだぜ？」

「へ…？」

魅音がキョトンとした顔で俺を見ている。

わかっていないだろ？分かっていないよな？

魅音。俺が現実を教えてやるぜ！

「前に夜中にさ。しおらしい魅音と攻める魅音、どっちが好きか？つて話をしたとき、

俺は熱弁してどちらも最高だ！と伝えた事があるのを覚えているか？」

「…うん」

「どう思った？」

「…正直、無いな。って思った」

そう、つまりそういうことだ！

「あれは俺の偽らざる本心だ魅音！

しかし、お前が信じなかった！信じようとしなかった！違うか!？」

「え、あ、うん…」

「つまり、それと同じ事なんだ。お前が思う前原圭一論は…お前だけのもの！

つまり、俺達はお互いにオンリーワンの存在なんだよ！」

ガガーン！

魅音が衝撃を受けて目から鱗が落ちた!…かのように見える。

実際はよくわからないが、目が泳いでいるので効果はあつたはずだ。

「つまりだ。周囲の奴らはお前が思うほど、俺の事なんざこれっぽちも評価していないんだぜ？

だってさ、俺自身がそんな評価を聞いてもハア？だしな」

「…そう…なんだ？」

「だからさ、奪われるとか、奪われないとか、そんなこと気にする必要なんてないんだ。

だって俺の事をさ、そういう風に思っているのは魅音だけなんだからな」

「…圭ちゃん」

俺の上半身を馬乗りになった魅音が抱き着く。

絵面にすると、相当おかしな場面だなコレ。

「…おじさん、レナに悪い事しちやった」

「だったら謝っておけ。まあ、そんなにひどい事してないから笑って許してくれるだろうぜ」

俺は魅音を抱きあげて立ち上がった。

背中が若干痛い。魅音が笑っている。

笑顔の魅音は輝いているよな。

本当に女神のようだぜ。

「へへへ…でも嬉しい。

じゃさ、世界で圭ちゃんだけは、おじさんをそういう風に思っれてるんだ」

「当たり前前だろ？何度言わせる気だよ。園崎魅音は俺の最高の嫁だぜ？」

実際には嫁ではなく、俺が婿に入るんだろうが、そういうのは気にしない。

その場の勢いってヤツだ。

俺は魅音のおでこにキスをすると、バーベキューの設営場所まで戻った。

すでに鉄板と食材の配置は終わっており、皆が肉を焼き始めている。

沙都子とレナも、肉を焼いてご満悦のようだ。

俺は沙都子の頭を後ろから撫でる。

「なんだ沙都子。いつもは俺達を追跡しているのに、こんな時はお肉優先か？」

「圭一さん達の逢引きに興味があるのは梨花とレナさんだけですわ。

私は一ミリも興味がございませぬのことよ？」

そういえば、沙都子は俺と魅音がつき合いはじめた時から反応が淡泊だったよな。

「だいたい、私、何度圭一さんと魅音さんのイチヤイチャを見てきたとお思いですか？」

お二人のイチラブなんて、私にとってみれば、六月のひぐらしの鳴き声と同じですよ」

言われてみればその通りかもな。

告白して10日間も、俺と魅音はずっとイチャイチャしっぱなしだ。

見飽きたとしても不思議じゃない。

するとレナの場合はどうなんだ？

「アハハハ。レナの大好きな魅いちちゃんと圭一くんが仲がいいんだもん☆

レナはずっと見ていたいかなあ☆はう☆！」

レナの場合は推しと推しのカップリングを見ているようなものか。

つまり、リアルやおい本の世界…

「圭ちゃん、それだとおじさんが男みたいじゃない…」

「そうだよな。魅音はすっごく女の子らしいのにな！」

「ふあっ!? け、圭ちゃん、不意打ちはダメだって！」

何が駄目なのかはわからないが、魅音をからかうのは面白いな。

くせになりそうだけ。詩音が魅音をからかうのもよくわかるってもんだ。

「はい。魅いちちゃん！お肉だよ！」

レナがニコニコしながら紙皿にのせたお肉と野菜を魅音に差し出すと、

魅音は申し訳なさそうに受け取り謝った。

「…そのさレナ、御免ね。さっきの私さ…嫌な感じだったよね」

「ううん。いいんだよ魅いちちゃん☆だって圭一くん好きだからやっちゃったことなんだよね？」

「だったら仕方ないよ」

レナの言葉に目を潤ませて、魅音が抱き着く。

「レナ、本当にアンタは良い子だよ！」

おじさん、レナが悪い男に騙されなにか心配で仕方がないよ！」

「アハハハ、魅いちちゃんも大げさだよ！悪い男なんて、レナがパンチして撃退しちゃうから！」

…うむ。レナは結構したたかだから大丈夫だと思うぞ？

そういえば梨花ちゃんはどこにいるんだろう？ 周りを見てもいな

いようだが。

沙都子が口の中に肉を頬張りながら、箸で梨花ちゃんのいる方向を指し示す。

「梨花でしたら、先ほど富竹のおじさまと、三四さんと一緒に高台の方にいきましたわよ?」

高台ってというと、雛見沢を一望できるあそこか。

確かに景観が良い場所だけど、バーベキューも始まっているのに、何をしに行ったんだ?

「バーベキューが始まったって伝えに行ってくる。魅音はここで待っててくれ」

「いってらっしゃい!圭ちゃんの為に、肉焼いておくからね!」

おう、ありがとうな魅音!

俺は高台まで走る。

…つっていたのね…ええ…

…なのですか?...本当…

…何があつても…守つ…

僕たちは…絶…みせる

近くまでいくと話し声が聞こえてきた。

これは富竹さんと、三四さんの声?

なんだ?守るって一体…

俺は隠れて聞くべきかどうか悩んでいるうちに

高台までできてしまう。

「誰?...みー☆圭一でしたか」

そこには、富竹ジロウさん、鷹野三四さん、

そして鷹野三四さんに抱きしめられている梨花ちゃんがいる。

一体ここで何の話をしていたんだ?

梨花ちゃんは顔だけ俺の方に向ける。

「圭一、何かようですか?」

「あ、ああ...バーベキューの用意ができたから、梨花ちゃんも、さ…」

梨花ちゃんは、まじめな顔をする

聞いた事も無いような大人びいた声で語った。

「圭…貴方にも、いえ皆にも後で話をするわ。ただ今は何も聞かずに戻って、私にも整理する時間が必要なのだから」

俺は無言でうなずくと、元来た道へと戻る。

今のは一体なんだったんだ？守るって一体…？

得体のしれない感覚が全身を巡る。

自分の知らない所で、何か大きな動きがあるのだろうか。

自分の運命を勝手に他人が決めているような薄気味悪さを感じる。

頭の中がクエスチョンで満たされた俺が次に目にしたのは、

沙都子を抱っこしようとして抵抗されている入江監督の姿だった

「ダメですよ沙都子ちゃん！火傷していたらどうしますか？」

「肉を手の平に落しただけですよー！圭一さんたすけてー！誘拐犯ですわー！」

さっきまでの緊張感が台無しだ。

物凄く下らない気もするが、一応助けてやるか。

「あの、監督…そろそろ、止めないと本当に捕まりますよ？」

「そうですか…？仕方ありませんね。それでは塗り薬を…」

「塗り薬があるのなら、最初からお出しくださいますえ！」

「それではお持ち帰りできないではありませんか？」

「監督は欲望の権化でございますの!？」

権化なんて難しい言葉、良く知っているな沙都子。

そういえば、沙都子ならさっき梨花ちゃんの話、わかるかもしれない。いい。

「なあ、沙都子。梨花ちゃんって鷹野さんと仲が良いのか？」

「鷹野さんって、鷹野三四さんのことですか？別に悪くは無いとは思いますが、仲というのなら私の方が良いかもしれませんわね。鷹野さんの車のお人形、私が名前をつけているんですわよ？」

なるほど、じゃあ次だ。

「梨花ちゃんが、鷹野さんに守るって言われていたけれど、何か知っているか？」

「ああ、それならきつと、私たちの生活のことではございせんか？」



「生活…？」

「私たち、監督が研究している栄養剤のお手伝いをして謝礼を貰っているのをごいいますわ」

「そうなんですか監督？」

「…ええ、特に沙都子ちゃんには重要な部分をお手伝いさせてもらっておりますので、お礼をさせて頂いています」

そんなことを梨花ちゃんと沙都子はしていたのか。

沙都子は腕を見せると注射痕を俺に見せてくれた。

監督の研究の為に、試薬品を注射しているらしい。

基本的に一日三回打っていたらしいが、今は二回に減ったそうだ。

確かに少女二人で生活していくのには金がかかる。

梨花ちゃんは公由村長が後見人を務めているが、沙都子には虐待して捕まった叔父しかない。

園崎家か公由家のどちらかが後継人になるという話があったようだけど、まごついているという話を前に魅音から聞いた事がある。

だとするなら、生活費を稼ぐのは重要なのは当たり前だ。

そうすと梨花ちゃんは「生活を守ってあげる」と言われていたのか…

富竹さんと、鷹野さんに？なんだろう、何か違和感を感じる気がする。

「おや、おや…皆さん、おそろいで…んふふふ…！」

特徴的な笑い声と共に、恰幅の良い男が近づいてくる。大石さんだ。

後ろには、梨花ちゃんが赤坂と呼んでいた人とは別の男性がついてきている。

大石さんの部下か誰かなのだろうか。

魅音が前に出てきて挨拶をする。

「これは、大石のおじさま。バーベキューを食べにいらしたんですか？」

「一応、私も綿流しの実行委員の1人ですからねえ。んふふふ…」  
確か大石さんは綿流しの警備担当だったかな？

魅音は大丈夫か？冷静か？

先日、殺したいほど憎んでいたようなので気が気じゃないぜ。

でも、まあ、今見た感じだと落ち着いているようだから問題はなさそうだけど…

「バーベキューは良いですが、あまり食べ過ぎると血がドロドロになって

脳溢血になって昇天するそうなので気を付けて下さいね☆おじさま」

いや…言葉の節々に悪意が感じられるな。

やっぱり魅音の中じゃ憎しみマシマシなようだ。

「ん、ふふふ。大丈夫ですよ。これでも鍛えておりますので、ところで魅音さん…」

「なんですか？」

「…最近、園崎家で大きな荷物が他県から大量に入ってきているようですね」

大石の目の色が変わった。

周囲の空気が嫌な感じに変わる。

「あ、よくご存じですね！」

綿流しで私と圭ちゃん、結納披露を行うので、他県にいる親類縁者からも

そのための道具や、祝いの品が結構おくられてきているんですよ」「ハハハハ、さすが園崎家ですなあ。その中には表に出せないようなものもあるんでしょう？」

「もちろん！結納式のために、いつもは表に出せない伝家の宝刀や、高級染物。」

表に出せない逸品も色々と用意してありますよ」

「こりゃ、今年の綿流し、楽しみですねえ！んふふふ…」

二人とも口では笑っているが、目は笑ってはいない。

これは…駆け引きをしているのか？

だが、なんでだ？

この会話にどんな意味があるっていうんだ？

「それじゃ、みなさん。他の委員の人にあいさつにいかなければいけませんので。」

失礼します。んふふふ……」

大石が離れていくと、俺は魅音に近づいた。

「どうしたの圭ちゃん?」

どうしたのって、お前……

だが口に出す前に気が付いた。

声をかけてどうする?何か秘密があるのか?大石さんとトラブルになっっているのか?

って問いただすのか?それとも、夫の俺に隠し事は無しだろ!って叫ぶつもりか?

どちらも違うような気がするし、間違っている気もする。

俺は魅音を信じている。その魅音が何か俺に隠し事をしていると思うのなら……こう聞いた方が良いだろう。

「魅音、お前が何を秘密にしているのかはわからないが、

教えてくれないのは全て俺のためなんだよな?」

「……………」

風が吹く。

魅音は俺の顔を見て何も言わない。

おそらく言葉を選んでいる。

魅音が口を開くまで俺は待つ。

いつまで見ていたのだろうか。

魅音の髪が風でたなびくを見ていたら、ふいに魅音が口をひらいた。

「圭ちゃん。圭ちゃんが私と結婚をすれば、おそらく不快になったり、気分がわるくなるような話を聞くこともあると思う。だけど、それですら全てじゃない。園崎家当主が知るべきことと、そうでない者が知るべき情報があるんだ」

それは理解できる。全ての情報が全てオープンなら良いとは限りない。

無用な情報を知ることによって混乱し、よりひどい結末になる場合もある

かもしれない。

前に誰かに教えてもらったはずだ。

世の中には、伝えなければならぬことと伝えなくて良いことがある。と。

「わかつたぜ魅音。俺はお前を信じる。お前がしゃべらなかつたということは、俺が知る必要が無かつたことで理解する。それでいいか？」

「…うん。ありがとう圭ちゃん。そう考えてくれると、私も嬉しい」

「でも、もしも、だぜ？一人でかかえきれないときは絶対に言うんだぞ？俺は役に立たないかもしれないけれど、それで楽になるってんなら幾らでもきいてやるから、さ」

「ありがとう圭ちゃん。それだけで、おじさん…100人の味方を得た思いだよ」

魅音が爽やかに微笑む。

そうだ。きつと大人になった魅音は、園崎当主として大変な人生を送るのは間違いない。

俺は、魅音の人生を守る大黒柱として、立派に魅音を支えられるのだろうか？

…否！

何を言っている前原圭一！支えられるのか？…じゃねえ！

弱気になるな！支えるんだ！それが夫つてもんだろ！

「そうだ。これ、圭ちゃんの分のお肉」

「お、サンキュー魅音」

魅音から山盛りに肉が盛られた紙の皿を受け取る。

俺が魅音を支える覚悟と決意を新たにして肉を頬張っていると、梨花ちゃんが近づいてきた。

「魅い、圭一。喜一郎が結納披露をするにあたりスピーチをお願いしたいそうなのです」

喜一郎って、雛見沢の村長さん？スピーチって何の話だ？

魅音が俺の手を引いて走り出した。

「行こう、圭ちゃん」

いや、いや、待て！スピーチをしろってことか！？  
何も考えていないぞ俺は！？

俺は残りの肉を飲み込み走る。

俺の困惑をよそに俺と魅音は神社の広場に到着した。

大勢の村人達が眼の前に集まっており、全員が俺達を見ている。

公由村長が魅音と俺の名前を呼ぶと、正面に立たされる。

やばい。緊張してきた。

魅音が一步前に出て頭を下げる。

「この度は、私、園崎魅音と前原圭一の結納のお披露目を、綿流しの祭りにて行うことを許可して下さいありがとうございます。当主園崎お麴に代わり…」

魅音は手慣れたもので、綿流しに結納を許してくれた実行委員の人達への謝辞を述べた。

感心してみると、スピーチを終えた魅音に背中を叩かれる。

「はい、次は圭ちゃんの番だよ」

…おれ!?!いや、何を言えばいいんだよ！

一步前に出されると、俺は覚悟して口を開く。

「その…みなさん。俺と魅音の結納に集まって下さってありがとうございます。ございます。」

俺はこの雛見沢が好きです。まだ未熟ですが、魅音と一緒に、これからも精一杯盛り上げていきたいと思えます」

頭を下げると、拍手が沸き起こる。

自分でも情けないほど無難な言い回しだが。

これでなんとかなったのか？

「圭ちゃん。素朴で良いスピーチだったけど、今日は結納披露の場じゃないよ？クククク…結納に集まって下さって何さ？」

魅音が意地悪そうな顔してそういうと、俺は赤面した。

ちえ…魅音の奴！

俺がそうやってむすつとした瞬間。

…チユ

唐突に魅音が俺の頬に口づけをしてきた。

「お、おい魅音!？」

「なに? ほつぺにチュぐらいアメリカじゃ、日常茶飯事でしょ?」

「ここは日本だぞ! しかも衆人觀衆の前で!」

「クククク…だつてさ。赤面している圭ちゃん、可愛かったからさ仕方ないじゃん」

「そういうとイタズラっぽく笑みを向けてくる。」

「それを見ていた周囲から笑い声が起こき、はやし立てられる。」

「くつそ。魅音め! エンジェルモートでの仕返しのもりかよ…!」

「防御力は低いくせに、自分から攻めるときは本当に強いな!」

「でも、恥ずかしいが…」

「正直嫌では無い…うん。」

「俺のスピーチが終わると、境内の奥から、氷でキンキンに冷えた缶や瓶の酒類が現われた。」

「それらはすべて、園崎本家からの差し入れらしい。大人達は次々と泡の出る麦茶を飲み始める。」

「見渡すと、その大人たちの中に俺の親父が紛れているのに気が付いた。」

「俺に手を振っているの、振り返すと親父は周囲の大人達に話しながら俺を指さしている。」

「どうやら、ここでも園崎家婿養子の父親としての力を存分に発揮して、甘い汁を吸っているようだ。」

「魅音。三国志とかで外の親戚で国が亡ぶとかってあるけど、親父見ているとなんだかわかる気がしてくるぜ」

「あ、あははは。まあ、園崎家の名を利用したいっていう人は、いるからね」

「やはり結婚したら、まつさきに親父を斬るべきか…?」

「い、いや。お義父様は芸術家だから、そこまでしなくても良いと思うけど…」

「ち、親父。命拾いしたな。」

「魅音に感謝しろよ!」

「バーベキューも、一通り肉が喰い終わり、鉄板に焼かれているもの」

は、

イカの脚だ、キノコだの酒のつまみになるようなものが多くなってきた。

時間を見ると、まだ午後1時ちよい過ぎだ。

周囲を見れば、飲めや歌えやの状態だ。

真昼間から宴会やっているとは、大人達もいい気なもんだぜ。

これ以上ここにいても、絡まれるだけなのでずらかるとしようか。

「魅音、これからどうするんだ？特に用が無いなら、一緒に穀倉の本屋に行こうぜ？」

「うくん。行きたいのはやまやまなだけさ。園崎家の代表としては…」

「お姉、その必要はありませんよ」

声の方を振り向くと、詩音がコップを片手に立っていた。

「詩音。アンタきてたの!？」

「そりや来てますよ。私、マネージャーですから。ところでお姉。公由のおじいちゃんとも話したんですけど、もう帰ってもいいですよ。後片付けは私達でやりますので」

俺と魅音は顔をわせる。どうやら詩音と公由の村長さんが気を利かせてくれたらしい。

魅音は何かいおうとしたが、レナと梨花ちゃんと沙都子が現われて後押しをしてくれる。

「いいよ、いいよ。魅いちゃんは。圭ちゃんと一緒にどこかへ遊びに行くといいよ」

「たまには皆がいなくていいよ、いちやついてみるのですよ☆にぱ〜」  
「食事も、片付けもしないのでしたら、さっさとどっかへ行ってくださいませ。二人ともお邪魔ですわ」

「そういえばお姉と、圭ちゃんって一度もデートをしたことがなかったんじゃないですか？今日は時間もありませんから、二人で穀倉まで行って来たらどうですか？」

圭一&魅音「で、デート!？」

何を言っているんだお前は!？」

俺と魅音はもうデートをするとか、そういう以上の関係だろ。  
今更、デートだなんて…

詩音は手を口元にあてると内緒話をするように俺達に囁く。  
「圭ちゃん。私と買物付き合ってくれる約束しましたけど、その  
権利をお姉にあげます。」

これは約束なんで必ず実行して下さいね」  
ぎゅ…

俺はいつの間にか…いや、魅音かもしれない…

気がついたら魅音と手をつないでいた。

俺と魅音はお互いに顔を見合わせる。

口には出さなかったが、何を言いたいのかはわかった。

…行こうか？

そのまま二人は無言でうなづいく。

「それじゃ、圭ちゃんとお姉。行ってらっしゃい！」

詩音に背中を押され、俺達は初めてのデートへと向かった。



### 第30話「11日目（日）B「デート」」

「11日目（日）：穀倉：昼：前原圭一」

魅音と手をつないで穀倉の駅から出る。

詩音に背中を押されてデートを開始したは良いが何も考えていない。

文字通りノープランだ。

より正しく言えば、考えていないというよりも、

何も思い浮かばないっていう方が正しい。

一体、何をしたら良いんだ。俺は？

魅音を見ると、少し俯いて顔を赤くしている。

おいおい、ついさつき公衆の面前で俺の頬にキスしただろう？

今更手をつないで歩くことを恥ずかしがってどうするんだよ。

…とは言え、そう思う俺も顔を赤くしているのは自覚しているけどさ。

立ち止まっても仕方が無いので、

当初の予定通りに本屋に向かうとしようか。

「とりあえずさ、本屋に行つていいか？」

「うん、いいよ…」

魅音が小さく返事をする。そのさまは、まるで小動物のようだ。

くそ、可愛い声をしやがって。そんなお前も、大好きだぜ。

何かデートらしいことはできないかと、周囲を見ながら歩いていると映画館が見えた。

デートと言えば映画だ。間違いない。でも、少し短絡的か？

魅音に「なあ魅音。映画でも観るか？」と聞くと頷いたのでポスターをチェックする。

面白そうなアクション映画があったが、上映までまだ時間があるのでやはり先に本屋に向かう方が良さそうだな。

受付でチケットを二枚購入すると喉が渴いているのに気が付いた。

緊張しているせいか、喉がカラカラだ。

「ちよつと俺、ジュース買ってくる」

「あ、なら、おじさんも…」

映画館の外にある自販機に小銭を入れて缶ジュースを取り出すと一口飲む。

美味しい。やはり喉が渴いたときの缶ジュースは最高だぜ。

もう一口飲むもうとしたら、財布が見つからないのか魅音が自分のポケットをいじくりまわしている。まったく、仕方ないな。

「ほら、飲めよ魅音」

「ふえ…その、いいの?」

良いに決まっているだろ?

魅音は、俺から缶ジュースを受け取ると一口飲んで、上目遣いで俺を見る。

「圭ちゃん、間接キスしちやったね」

な、な、な、な、何をいつているんだ!?

そもそも、俺達は間接どころか直接キス。

いや、お前の場合には吸引キスまでしているだろ!

心の中で激しくツツコミを入れるが、

一気にながった心拍数は止まらない。

俺は言葉も出せず、

魅音の手を軽く握ると正面を向いた。

「そ、そうだな。じゃ、行こうぜ魅音」

「うん…」

俺は照れ隠しに笑い、魅音の手を引いて再び歩き始める。

次に目についたのは、ゲームセンターだ。

興宮では玩具屋の小スペースに筐体がおいてあるだけだが、

穀倉にあるのは大人数で遊べる本格的なゲームセンターがある。

アーケードゲームが楽しめるとあらば寄らなければ。

俺も魅音もその手のゲームが好きだ。

ゲームセンターに入ると、筐体からあふれ出す色とりどりの光彩と音響が俺達を包み込む。

…これだ。これ。

テンションがあがるぜ!

近くに設置されていた新作ゲームの筐体に座る俺と魅音。  
早速対戦してみたがやはり魅音は強い。

初めて触ったゲームのはずなのに、魅音は巧みにコントローラを捌き

最初の一戦はなすすべもなく俺は負けてしまった。

「よっしーおじさんの勝ちだねー!」

魅音は笑顔でガッツポーズをする。

…こんちくしょうめ。やるじゃないか!

俺も気合を入れてやり直したがいかんせん、

魅音に負け越しが続く。

強いな魅音は!

でも、こんなに電子ゲームつよかったか?

俺の方が少し上だとおもっていたけどな。

何度か魅音と対戦した後、

俺は一息入れるために席を離れて魅音の後ろに立った。

その後、ノラの挑戦者が次々と魅音に襲い掛かってくる。

いかにもゲームセンターの常連客といった出で立ちの奴らが来た  
が、

魅音はそのことごとくを華麗に撃退していく。

対戦ゲームで連戦連勝。

後ろで見ている俺もその強さに感心する。

「おいおい魅音。初プレイって本当かよ?」

ハイスコア出しまくりじゃねえか。とんでもない実力だな!?!」

「ちつちつちく圭ちゃん。おじさんを甘くみちやあいけないよ?」

こういうのはセンス、動態視力!そして日頃の鍛錬のたまものなの  
さー!」

どんどん勝利を重ねて、調子もさらにあげていく。

先ほどまで小動物のように大人しかったのに、すっかりいつもの魅  
音に戻っている。

ゲームセンターによって正解だったぜ。

ただ、少し勝ち過ぎたようだ。

魅音に連敗した相手が、立ち上がってこちらに向かってくる。

「てめえ、ふざけてんのかコラあ!？」

学ランを着込みリーゼント仕様のこてこての不良学生だ。

こんな古代の化石みたいなやつがまだいるとは、さすがゲーセン。かつて不良のたまり場と言われていた場所だぜ。

俺は魅音の盾になるべく、とっさに不良の道を塞ぐ。

負けた腹いせにリアルファイトで勝負ってか、良いぜ？

デートの最中に彼女を守るだなんて最高のロマンシチュエーションじゃねえか!

「魅音。早く逃げろ。ここは俺が…」

ゴキツ!

物凄い音が響いた。

椅子に座っていた魅音が猛烈な速さで立ち上がると、

リーゼント野郎の脛に蹴りを入れたのだ。

「圭ちゃんとのデートを邪魔するなッ!

ハラワタぶちまけられてえかッ!!!」

凄まじい啖呵で震える。

…俺が。

リーゼント野郎も足を引きずりながら、

情けない声をだしてゲームセンターから逃げ出していった。

魅音は「ふん」と鼻息を膨らませた後、

うつとりとした顔で俺の方を振り向いた。

「ありがとう圭ちゃん…」

おじさんをさ、守ってくれたんだね。えへへへ…」

いや、どちらかと言えば俺が守られた気がするんだが。

ここは流れる的に胸を張った方が良いのか?

「あ、ああ…まあな! 婚約者だしな俺!」

「えへへ…かつこいいよ圭ちゃん」

そう言うと、魅音は俺の腕にしがみつく。

まあ、いい。未来の夫の役得と違っていよう。うん。

そのまま魅音と腕を組んで

ゲームセンターから本屋へと向かった。

本屋に到着したのは良いが、残念ながら俺が探していた本は見つからない。

「どうやら配送が遅れているらしい。残念。」

映画の開始まで、まだ余裕があるので本屋で適当に時間を潰すとしてよう。

大手の本屋のために、色々な雑誌が置いてあるので見ごたえはある。

コンバットやガンの雑誌なんかは魅音が好きそうだな。

歴史には興味があるかはわからないけれど、世界の戦場の歴史とかはどうだろうか。

それとも、ここは意表をつけてサバイバル特集の本とかはどうだ。

でも、これはどちらかといえば魅音より沙都子の方が好きそうだな。

店内を歩いていると魅音が本棚の一角を見つめた。

よく見ると洋ゲーのカタログコーナーみたいだ。

一冊取り出すと広げて二人で覗き込む。カタログだけあつて色々な種類の洋物ゲームの紹介がされている。

「こうやって見ると色々なゲームがあるんだな……」

「テーブルトークRPGに、シミュレーション、カードゲームにすぐろく。ファンタジーに、戦争もの、色々あるね。ほら、これなんて私の家にもあるよ」

洋ゲーカタログを見て魅音が饒舌になる。

俺でも名前だけ知っているものや、聞いた事も無いようなゲームまである。

遊び方が今一理解できないゲームも幾つかある。本当にマニア向けのカタログだな。

「そういえば、こういうテーブルRPGとかシミュレーションって、部活じゃやらないよな」

「時間かかるからね、まあ30分で終わるやつもあるけど。梨花ちゃんや沙都子のことを考えると、あんまり長いものよりもテンポの良い

ゲームの方が良いでしょ？」

確かに、ちびつこたちは集中できる時間が短い方が良いのかもしれない。

「このデプロマシーってゲームなら、うちの部活だと面白く遊べるかもしれないけれど」

「デプロマシーって、外交とか交渉とかっていう意味だろ？ どういう内容のゲームなんだ？」

「国の指導者になって、軍隊を動かして戦わせるんだよ。肝はタイトルの通り、国同士の交渉だね。いかに協力する国を増やし、勝つためにどのタイミングで裏切るかが重要なんだ。沙都子辺りなら、トラップ満載の外交を駆使して、ゲームの流れを無茶苦茶にしてくれるだろうね」

裏切り前提のゲームシステムなのか。

そりゃ、確かに沙都子なら滅茶苦茶な罠とか仕掛けてきそうだな。

『おーほほほーちゃんと同盟した時の条文をみないから、そうなるのですわー！』

なんて言って、終盤に色々とひっくり返しそうだ。

「面白いんだけどさ。ただ一つ問題があつて…」

「ん、なんだ？」

「人間不信になつちやうんだよね。コレで遊ぶと」  
なるほど。

「なら勝つために常に裏切り協力、裏技、買収何でもありな俺達なら問題無いな」

「だね」 魅音はニヤリと笑う。

ゲームとリアルをわけて考えられない普通の人間が遊べば、

確かに友情破壊ゲームになりそうな感じだが、俺達部活メンバーは違う。

友情は友情として、部活の時は全力で相手を出し抜くために戦うのがモットーだ。

だから、幾らでもイカサマ、騙し、詐術を繰り広げられてもゲーム終了後に友情が壊れることは無い。

うん。

ゲーム中でどんな裏切りや卑怯な手をつかっても、仲間でいられるって俺達の部活は最高だよな。

「圭ちゃん。そろそろ映画館にいかない？」

「おっと、もう、そんな時間か」

店内の時計を見ると、映画の上映時間まであと少しだ。

俺は洋ゲーカタログを購入すると魅音に渡した。

「え？いいの圭ちゃん」

突然のプレゼントに戸惑う魅音に、

俺は最高の笑顔を見せて背中を叩く。

「早く行こうぜ」

「ありがとう圭ちゃん。えへへ…」

魅音は受け取ったカタログを大事そうに抱えて歩く。

そこまで喜ぶほどのものでも無いとは思うが、魅音が笑顔だと俺も嬉しくなっちゃう。

映画館の中に入ると、指定された席へと座る。

チケットを買えばどこの席でも座れる映画館もあるが、この映画館は全席指定らしい。

先に進んでいく魅音に、こっち。こっち。と手招きされて座席に座った。

映画の内容はマッチョな男が銃を片手に、拉致された娘を救うと言うよくある大作アクション映画だ。

この手の娯楽作品は、頭ら空っぽでも見れるのが良い。

予告編が始まると、俺の手に魅音の手が重なった。

魅音に視線をうつすと、魅音も俺を見ていた。

「俺が魅音を見る時、魅音もまた俺を見ているのだ…」

「圭ちゃん、圭ちゃん…ホラー映画じゃないんだからさ」  
顔を見合わせて俺達は笑う。

映画が始まり正面を向く俺の肩に、魅音が頭をのせてきた。

映画の中でマッチョな主人公が丸太を持って、現われるが、正直魅音の方が気になる。

劇中で、何度もちらちらと横目で俺は魅音を見ていた。暗闇の中で映画の光に彩られる魅音の顔が綺麗だ。

俺は映画を見るよりも、魅音を見ている方が、多分長かった。

そのせいで、映画の中身がちつとも頭に入らず、エンドクレジットまでいってしまふ。

しまった。初デートの映画なのに、内容を何にも覚えていないぞ。

「圭ちゃん出よう?」

魅音にたされて映画館を出る。

感想を聞かれたらどうする?

「映画、面白かったねえくいや、さすがハリウッドだよ。

こう迫力が違うっていうかさー!」

「おう」

…まづい。

適当にあわせるか。

「父親が娘を助ける。いやー感動の大作だったねえ」

「だな」

「あの巨大な銃を一人で抱えて撃つんだからすごいよ」

「うんうん」

「最後の敵に、かかってこいよ!は、かつこよかったね」

「本当だぜ。あれは燃えたよな!」

「最後は、宇宙ロケットが爆発してスカットしたって感じ!」

「おおー確かに。あれはザ・ハリウッドって感じだったぜ」

「…圭ちゃん。映画にそんなシーンないよ」

「…え?」

うおっマズった!?

見ていないのがバレてる!

…プッあはははは!!

「えっと、魅音…?」

「圭ちゃんって、ずっとおじさん見てたでしょ?わからないと思った?」

俺は気恥ずかしさで真っ赤になって上を向いた。



くっそ。何もかもバレているのかよ。

「んもう、仕方ないな。本当におじさんの事好きなんだから…」

ほら、顔をこっちに向けて。デート中に女の子から顔を背けるのは

ルール違反だよ圭ちゃん」

そういうと魅音は俺の頬にキスをした。

キスされた頬を手の平で触ると、悪戯っぽく魅音は笑う。

「実を言うとおじさんも、さ。圭ちゃんに見られているの意識して、映画の中身、あまり頭の中に入ってこなかったんだよね」

「え、そうだったのか、その…すまん魅音」

「謝らなくて良いよ。初めて一緒に見る映画にしては、うん。悪くなかった」

魅音は俺の腕を組むと上機嫌に「喫茶店に行こうか？」と誘ってきた。

もちろん、拒否する理由なんて無い。

拒否する理由なんてのは無いんだが…

俺は、足を止めてまっすぐ魅音の顔を見ていた。

「どうしたの圭ちゃん？」

「喫茶店行きたくない？」

「いや、喫茶店は行きたいんだけどさ、

その…聞いても良いか？」

「なに、圭ちゃん？」

不思議そうに俺を見返す魅音の愛くるしい顔を見ながら、

俺は胸の鼓動を抑えきれずに、魅音に聞いた。

「いや、さ…魅音が自分で自分を『女の子』って言ったからさ

珍しいと思ってる…」

いや、何でそう言ったのか、わかっている。

わかっているながら、俺はその理由を聞きたかった。

魅音の顔が真っ赤に染まっていく。

何気なく発した自分の言葉の意味を理解して。

そして、俺が聞きたかった言葉を口にした。

「…け、圭ちゃんの前だからに決まっているじゃん！」

もう、おじさんが素直に自分を【女の子】なんて言えるのは圭ちゃんの前だけなんだからね？」

わかっているくせに。

と、非難するような顔で俺を見る。

ごめんな魅音。

前に女の子Verのお前でも構わないって言ったのに意地が悪いよな。

でもさ、俺、お前の口から聞いたかったんだ。

「こういうのは、おじさんもらしくないとは思っているけどでもさ、圭ちゃんと一緒にると、わかっちゃうんだよね。」

自分が…ああ女の子だって…あはははは、ま、おかしいよね？」さらに言葉を続けた魅音だが、これはちよつといただけでない。

らしくないってどういう事だよ。

おかしいことなんて全然ないぜ？

「そんなことねえよ。魅音はさ、どこからみたって女の子だと俺は思うぜ」

「ふえ…う？」

普段の俺ならあまり言わないことを口走る。

いつもなら多分「だよな。お前って男の子みたいだしさ」って言うっていたかもしれない。もしかしたら、デートという、いつとは違うハレの舞台だからこそ、本心を伝えられるのかもしれない。

そうだ。だったら、

いつもは言えない正直な気持ちを魅音に伝えよう。

「普段は恥ずかしいから、こんなことは言えないけどさ…」

魅音は確かに度胸もあって皆も引つ張るリーダーだけどそれだけじゃないって一緒に居るとよくわかるぜ。

本当は、すっげえ可愛い女の子なんだって…

人形を渡すときだつてさ、随分と意識しちまったし俺…」

「け、け、圭ちゃん…」

“魅音は可愛い女の子”はレナの受け入りだが、

大目にみてくれ魅音。

「というか語彙力が無いので、これ以上の上手い言い方見つからない。」

ちくしょう、失敗した。

本屋で女性を口説くハウツー本でも買ってみるんだっただぜ。

「だからさ、らしくないってことは無いぜ？」

前にも話しただろ？ 魅音も一人の女の子だっただぜ。」

「……………」

「いや、正直に言うと、今じゃ…その…あれだ…」

魅音は最高に魅力的で素敵な女の子だと俺は思っているからさ…

全然、女の子でもおかしくないぜ！ あはははは！」

さすがにちよつと本心を言い過ぎた。

正直恥ずかしくて顔も赤くなってきたぞ。

照れ笑いで誤魔化さないと倒れそうだ！

それでも普段から思っている「天使」だとか「女神」とかって表現はドン引きされると困るので使わなかったのでセーフだろう。多分。

「…圭ちゃん」

魅音には俺の気持ちは伝わったみたいだ。

俺の話を聞き終えた後、顔を真っ赤にして視線をそらすと、思いつきり頭をかきはじめる。

「…いや、もう、あははは…圭ちゃんって…」

デートだからってさ、おじさん、本当に困るっての。

そんなこといわれたら、その…」

そして、俺の胸に飛び込む。

「魅音…？」と、

俺が声をかけると、ぼそぼそと小さい声が聞こえてきた。

「そう言う圭ちゃんだっただぜ…かっこいい男の子じゃん…」

頭が良くて勉強も色々教えてくれるし、話も盛り上げるのが上手くて、

男とか女とかそういうの関係なくさ、同じような話題をノリよく楽しめるし、

「ここぞつてときには、どんな困難にも立ち向かっていくし…」  
魅音は凄いい勢いで顔をあげると、  
俺の目と鼻の先で言い放つ。

「その…笑わないでね圭ちゃん？」

圭ちゃんつてさ…その…

おじさんの理想の男の子なんだよ」

顔を赤く染めて、目を潤ませる魅音。

それは魅音の精一杯の勇気。愛の告白。

理想の男の子なんて言葉は、魅音にとっては、

もしかしたら「愛している」以上に恥ずかしい台詞かもしれない。  
だからなのかもしれない。

この言葉を聞いて、俺の心の中は魅音への想いで溢れかえっていた。  
た。

これを一言で表現するなら、これしかない。

魅音好きだ。

小学生か？いや、表現なんてシンプルの方が良い。

単純だからこそ真理がある。これ以上の表現なんてあるものか。

俺は、魅音の体を優しく抱きしめて、木陰まで誘導し、

周囲に人がいないことを確認すると、ゆっくりと顔を近づけた。

魅音の鼻と俺の鼻があたり、

少し、こそばゆい。

「魅音、好きだ。愛してる」

「私も…好き。愛してる…圭ちゃん」

魅音の返事を聞き終わると同時に、俺は魅音と唇を重ねた。

それはほんのわずかな、触れるか触れないかぐらいかの優しいキス。  
ス。

風に吹かれた広葉樹のこすれ合う青葉のようなささやかな口づけ。  
時間にしても1秒にも満たなかったかもしれない。

そんな軽いフレンチ・キス。

人通りのある場所で隠れて行ったので、軽めにしたつもりだけれども、

「どうしたのか、心臓の鼓動が止まらない。視線を移すと、

魅音も胸の高鳴りが止まらない顔をして俺を見ている。

「あ、あははは…なんだか、初めてのキスみたいな気分だぜ」

「…う、うん。そうだね。あははは。なんというかさ、

二度目のファーストキスって感じだよね」

二度目のファーストキスカ、面白い表現だぜ。

でも、確かにそんな感じがする。

たぶん、これって、

俺達の関係がまた進んだって事じゃないのか？

…って、待てよ。

もう、一晩一緒に寝て、婚約まで済ませいるってのに

まだ進むべき段階があるってのか？

だとしたら、恋愛ってのは奥が深いぜ。

「…圭ちゃん。そろそろ喫茶店にいこうか？」

魅音はニツコリと微笑むと、俺の手を取る。

おっと、そうだ。ここで考え込んでも仕方ない。

まだデートの途中なんだ。楽しまないと。

「11日目（日）：喫茶店：夕：前原圭一」

魅音に手を引かれ、映画館近くの喫茶店に入ると空いているテーブル席に座った。

店内に貼られているポスターを見ると、アイスコーヒーとスペシャルプリンが一緒になった、

スペシャルプリンセットというのが今お薦めらしい。

「あ、すいませんウイエターさん。スペシャルプリンセットを…」

「あ、スペシャルプリンセットは一つでいいです。あと飲み物一つで」

ウイエターに呼ぶと、魅音が勝手に注文をする。

魅音はアイスコーヒーが嫌いだったっけ？と思ったが、魅音の笑顔で気が付いた。

まさか、こいつジャンボパフェの復讐を果たす気では？

ウイエターの手によって置かれるスペシャルプリンとアイスコー

ヒー。

魅音は俺のすぐ横に座り直し、スプーンでプリンをすくう。

「よせ、魅音！」

「はい、圭ちゃん。あゝん」

…パク

ああ、なんとということだ！

エンジェルモートで既に実証されてはいたが、

つき合ってから、ここ10日間以上、魅音の手でお昼を食べさせてもらっていた俺は、

魅音に差し出されたものは拒否できない体となってしまうていたのだ！

どんなに恥ずかしくても、もう抵抗はできない！！

前回の時点で既にわかっていたことだが、

あえて、ここで、もう一度言おう！

俺はパブロフの犬どころじゃなく、

魅音の犬に成り下がってしまったのだ！

「美味しい、圭ちゃん？」

「あ、ああ…その美味しいぜ魅音」

「じゃ、もっと食べさせてあげるね。圭ちゃん」

「あ、ありがとう魅音」

幸せそうな顔で俺にプリンを差し出す魅音に、

俺は顔を赤くして返事をする。

悔しいが。魅音にこうやって食べさせてもらう事に幸せを感じてしまう自分がいる。

これが、完落ちというものなのか！オレの男としての尊厳は!?

男・前原圭一、一生の不覚ツ!!

「その、魅音…俺も、食べさせてやるよ」

「ふえ…あ、うん…」

俺もスプーンでプリンをすくうと、魅音の口まで持って行く。

…パク。

顔を赤くした魅音の小さな口で、小さくプリンを食べる姿に胸が締

め付けられる。

胸が苦しい。魅音が可愛すぎて。つらい…!

「圭ちゃん。今日はさ、本当にありがとう。楽しかった」

さらに追撃で、魅音が微笑む。

くそ、俺を萌え死にさせるつもりか!

「そ、そうか。よかったぜ、初めてデートしたんで勝手にわからなかったけどさ」

「初めて? 前に詩音とデートしていたんじゃないか?」

その話題を今ふるのかよ!?

これって、どう答えるのが正解なんだ?

「あ、ごめん。あれはその…無かった事にしたんだよね! 悪い圭ちゃん!」

「いや、その…あれはさ、詩音とは違うんだ…」

「違うって、何が…?」

ええい。ままよ!

「あの時、詩音って魅音が変装しているのだとばかり思っていたからさ…俺、ずっとその…」

魅音とデートしているつもりだったんだ」

「ふえ…おじさん?!? そ、そうだったの…あ、あははは…そっか! ならしやうがないよね! うんしやうがない!」

正確に言えば、途中で詩音と魅音は別人だと気が付いたんだが、あまりにも遅すぎた。

今、思い出しても…いや、もう思い出したくないな。止めよう。

「うん。圭ちゃん。もうその思い出は無かったことにしよう!」

今日が初デート、それでいいよね?」

「おう、そうだな。そうしようぜ!」

魅音がご機嫌だ。どうやらかわせたらしい。

くっそ、心臓に悪いぜ。

「お飲み物です」

…ぶはっ!?

ウェイターが持ってきたジュースを見て、思わず嘔きそうになる。

ストローの形がハート型で二つの吸い口がある。つまり、これは俺と魅音で、一緒に飲めと!?

ウイエターを呼び戻そうとしたが、もういない!

魅音と視線を合わせる。

さすがの魅音も体を震わせる。

「け、圭ちゃん…さすがに、コレ、おじさん、無理!」

「お、俺もだ。ハードルが高すぎる!」

一体なぜ、こんなことに…?

いや、理由を問う必要も無い!俺達は誰がどうみたって恋人同士なのだ!

恋人用のイチヤイチャ・ストローを持つてきても不思議じゃない!俺と魅音は無言で、それぞれの飲み物を飲み干すとレジへと向かった。

さすがにこれ以上は耐え切れない。俺達の恋愛キャパシティを超えている。

会計をすませてさっさと出ようとした時、

レジで思いがけない言葉を貰う。

「既にお連れの方より、お客様の会計は頂いておりますよ!」

どういう意味だ?

俺も魅音もまだ支払っていないぞ?

「サングラスにおひげをかけた黒いスーツの方です。スペシャルプリンセットが大変お気に召して頂いたらしく、とても甘かったと言われておりました!」

葛西さんだ!いたのか、この店にツ!?

魅音が顔面をお両手で抑えてその場にしゃがみこむ。

わかる!わかるぞ魅音!というか、なんで葛西さんがこの店にいたんだ!?

不覚だった。興宮ならともかく、まさか穀倉で出くわすなんて。

どんな奇跡だよ!そして、甘かったって、それプリンの話じゃないだろ!絶対!

「11日目(日):電車:夕:前原圭」



葛西さんに見られていたという精神的ダメージはかなり深く、さすがに、もう完全に俺も魅音も気力を使い果たして、その後すぐに穀倉駅に足を向けた。

穀倉駅から電車に乗り込むと、俺と魅音は隣り合わせに座席につく。

魅音は初めてのデートで疲れたのだろうか、電車が出発すると、すぐに頭を上下に動かして眠り始め、俺の肩の寄り掛かって軽く寝いびきをたてはじめた。

魅音の寝顔を見ながら、俺もそつと首を魅音の方に傾ける。

：魅音の温かさと重さを感じる。

今、俺の体には魅音の重さがのしかかっている。

しかし、これは単に魅音の体重がかかっているっただけじゃない。

この重さには、魅音の全てが乗っているんだ。

今まで積み重ねていた人生が、心が、想いが、そして命そのものが、今、無防備に俺の体に預けられている。

そう考えると、その重みに身が引き締まる。

俺は魅音の全てを、この後もずっと支えていかなければいけない。その責任の重さたるや計り知れない。

怖くないと言ったら嘘になる。

だけど、俺に命そのものを預けてくれる魅音に答えなければ、そりや嘘つてもんだろ？

なにしろ俺は、魅音の理想の男の子なんだぜ？

(…いや、まさか俺が、理想の男子ってのは出来過ぎだけどさ) 映画を見終わった後の告白を思い出し、俺は思わずニヤケてしまう。

周囲に居た人たちはさぞ気持ち悪いだろうが、こればかりは仕方がない。

だって、あの魅音がだぜ？

俺を理想の人だって言ってくれたんだ。

これが、ニヤケずにすむかよ！

もう一度、魅音の寝顔を覗き込む。

…可愛い顔しやがって。

いつまでもみていたいぜ。

そうさ。俺は理想の男の子なんだ。

理想の…

…

…

…

あれ？だつたら…

じゃあ、俺が理想の男の子じゃなくなったら、どうなる。

その瞬間、俺の全身の毛穴が一斉に開き。

体中から冷たい汗が噴き出した。

…あ、バカ。止めろよ。

せつかく良い気分だったのに。なんで、そんな事を思うんだよ！

デートなんだから、最後まで気持ちよくさせてくれよツ！！

頭から汗が流れる。ひどく冷たい。

そして、体が強張って動かない。なぜだ？

そうだ。

魅音は俺が“理想の音の子”だから好きでいてくれているんだろ？

なら“そうじゃなくなったのなら”決まっているだろ？

…決まってる？

ああ、そうさ。決まってる。

そもそも、俺が頼りになるって、それは結果論で、

沙都子を救ったのだって無我夢中で進んだからだ。

大言壮語を吐いたけど、おれってそんなに凄いヤツか？

皆は、魅音は、俺を過大評価しているだけじゃないか？

途中で何度も挫けかけた。心が折れかけた。

俺は、皆が思うほど、そんなすげえヤツじゃない。

そんな俺が、園崎家みたいな名家に婿入りして…

果たしてやっていけるのか？

ボロを出すんじゃないか？

それに魅音が気が付いたら、俺は、どうなる…？

そんな俺に興味なんて失うに決まってる！

…嫌だッ！そんなのはッ！

魅音に…嫌われたくないッ！！

息が荒くなる、目がかすむ。

なんだ一体。どうしちゃったんだ？

いや、待て、落ち着け、落ち着けて。

俺は両こぶしを膝の上に置いて、息をゆっくり吸い。吐く。

そうさ。俺は魅音を信じている。

魅音だって俺を信じているだろ？

…

…

あれ？違う？魅音は“理想の男子”だから俺を信じているんじゃないのか？

俺が魅音を信じていても…魅音は、俺を…信じていない？

— 圭ちゃんには失望したよ —

…これは、なんだ？

いつの頃の話だ？

ああ、そうだ。玩具屋で大規模な部活をした時に魅音が放った言葉だ。

俺が人生ゲームに手間取り、あまりにもふがないもんだから魅音があきれて言ったんだ吐き捨てるように。

あの言葉はキツかった。

俺も一瞬狼狽してしまった。だが、あの後、俺は口八丁でからくも危機を乗り越えた。

でも、また、その言葉を魅音から投げかけられたら？

こんなにも愛している状況で、心が崩れそうな状況で、俺はそれに耐えきれぬのか？

魅音は優しいだけじゃない。厳しい面もある。

俺がそれに見合わなければきつと…

いや、いや、冷静になれ、前原圭一クールになれ！

なら、簡単な事だろ？理想の男の子を演じればいいだけじゃねえか

！

そうすれば、魅音はずっと俺を好きでいてくれるはずだろ？

…え？ずつと？

それって一生、演技しなきゃならないって事か？

冷たい汗が止まらない。全身が嘘のように寒い。

眼の前がぐらつく。思考がまとまりが無く、変なことを次々と考える。

あれ？いったい、なんで、俺、こんなこと考えているんだ？

さつきまで、幸せの絶頂だったはずだろ？

それなのに、こんな不安で…寂しくて…絶望的な気持ちになってるんだ？

俺は手を首筋にあてる。気分が悪い。

魅音の顔を見る。

こんなにもリラックスして俺に寄り掛かってくれるのに…

これほどまでに俺に全てをゆだねて幸せそうに寝ているのに…

お前は、俺を裏切るのか？

俺はこんなにも魅音を信じているのに？

嘘だよな？裏切らないよな？

なあ、魅音…お前は…

俺はゆっくりと、首筋に爪を…

「あら、圭一さん。偶然ですわね。

穀倉まで行かれてるのは知っておりましたが、帰りの電車でお会いするなんて」

…その声は、沙都子？

俺はハツとして、声の方を振り向く。

視線の先には、大風呂敷を背負い、両手に大きな買い物袋を持った沙都子が立っていた。

「おーほほほー！穀倉のデパートで特売大セールを行っていたので、思わず買ってきてしまいましたの！なんと送料無料の出血サービスで

「ごさいましてよ！なので、お味噌とお米も買いましたの、到着が待ち遠しいですわ！ところで、梨花を見かけませんでしたか？同じ電車にのっているはずですけども」

「あ、いや…梨花ちゃんは見えていないぜ」

眼の前で、屈託もなく笑っている沙都子に、

なぜか俺はバツが悪なって視線をそらす。

「あら、あら、魅音さんったら、圭一さんによりかかって寝ておられますの？」

「幸せそうですわね…よほど圭一さんのことを信じておられるのですわね」

「ああ、魅音は〃今の俺〃を、信じているからな」

やばい。今、俺、棘がある言い方しちゃまった。

見ろよ。沙都子が驚いた顔しているじゃないか。

ほら、いつものような感じで話しかけろよ。

いつものような感じって…あれ？どんな感じだっけ？

「圭一さん、どうかなさいまして？深刻そうなお顔をしておりますけれど、

楽しいラブラブデートではごさいませんでしたの？」

「あ、うん…いや、そうなんだけどさ、

急にその、悩んじまって…俺が、魅音の期待に答えられなくて受け入れてもらえないなんてこともあったら、嫌だな。とか…」

沙都子がクスクスと笑う。

「あら、ならば魅音さんに今のお気持ちを正直に、お話しすればよろしいではごさいませんか。

この間も、圭一さんもおっしゃられてましたでしょ？

部活メンバーは家族も同然。隠し事は無しって。

ましてや、魅音さんとは本当に家族になるんですもの。

胸の内をさらけ出すのも大事なことでごさいますわよ？」

沙都子があっけらかんと言うのを聞いて、

俺は目から鱗が落ちたような気分になった。

そうだ。その通りだぜ。

悩んでいたって仕方がない。

俺自身が、皆や魅音が思うような男でないと考えたら、それを素直に魅音に伝えるのも有りだよな。

魅音は面倒見が良い、それは確かだ。

俺が正直に話さえすればきつと支えてくれるはずだ。

その結果、前よりも愛されなくなったとしても…

嘘をつき続けて、捨てられるよりは遥かにマシじゃないか？

「それに受け入れられるも何も、魅音さんは圭一さんの過去をお知りになっても一緒にいたいと言われましたでしょ？そんな魅音さんですもの。きつとどんな悩みであろうと、正面から受け止めて下さいますわ」

そうだ。そうだよな…

なんで、それを忘れちゃったんだ？

魅音は俺の無様な過去を受け入れてくれただろう？

一緒に居てくれるって言ったよな？

こんな大事な事を忘れていたなんて…

俺はよほど近視眼的になっていたんだな。

「その通りだよぜ。本当に良い事言うな沙都子。

冗談じゃなく、俺ってお前にフオローされっばなしだぜ」

本当、一人で悩むとろくなことを考えつかないぜ。

どんどん深みにハマって陰になっちゃまう。

一人で悩まず皆で相談する。

基本中の基本だろ？自分で言いだしたんだろ？

忘れるなよ前原圭一！

「お〜ほほほ〜！これがいわゆるギブ&テイクというものでございましてよ！

圭一さんは、私を鉄平のおじさまから助けて下さいましたんですもの、

私が圭一さんを助けるのは当然でございましょう？」

それはギブ&テイクというより、

【情けは人のためならず】…情けは巡り巡って自分に戻ってくるから

人に優しくしよう……が近いと思うぞ。まあ、どっちでも良いけど。  
しかし……なんか、心が軽くなったぜ。

サンキューな、沙都子。

「みー…沙都子、ここにいたのですか！探したのですよ」

別の車両から梨花ちゃんが現われた。やっぱり大風呂敷を背負つて、

両手に袋をもっている。相当買い込んだんだな二人とも。

「ふぁ〜おはよう圭ちゃん…って、あれ？」

梨花ちゃんに沙都子？なんで電車にのってんの？

もしかして、うちの後をつけてきた？」

のんびりたりんと魅音も起きてきた。

やれやれ、俺の気持ちも知らないで、のんびりしたもんだぜ。

ま、俺の場合は単なる一人相撲なんだけどさ。

興宮に駅につくと、俺達四人は一緒に降りる。

梨花ちゃんと沙都子の荷物が多そうだったので、魅音と一緒に家まで持って帰ろうか？と提案したが、二人して「駅に自転車があるから大丈夫」と断られた。

とても、自転車の籠に収まる量とも思えないが、

二人とも荷台に無理やり買った物を載せてふらふらしながら帰っていく。

元気なもんだぜ。

転ぶなよ。

「11日目（日）：園崎本家：夜：前原圭一」

魅音を家の前まで到着した時は、既に夜の帳がおりていた。

俺達は、お互いに手の平を合わせて指を絡ませる。

「名残惜しいけど、今日はこれでお別れだな魅音」

「だね、圭ちゃん。今日は本当にありがとう。楽しかった」

魅音の少し寂しそうな笑顔が心苦しい。

ふと、先ほど電車内で悩んだことを話そうかと思ったが、今は止めておこう。

せつかくの初デートなんだ。そこで悩みなんて言って、せつかくの

気分の水を差すのも悪いだろう。

大丈夫。

いつでも魅音とは相談できるさ。

心に余裕ができたせいか、さきほどよりも周囲が良く見えるぜ。

魅音のポケットのふくらみに気が付く。中に空き缶を入れているようだ。

「それ、捨ててこようか？」

「え？あははは、これさ、圭ちゃんとの…関節キスの記念にとっておこかなーって、アハハハハ！」

おいおい、なんだそれ。

それじゃ、初めて俺達がキスした学校のロッカーも、

いつか持って帰る気じゃないだろうな？

「あーそれもいいかもね…クククク…」

「本気かよ…？」

その返事の代わりに、魅音は俺の頬にキスをすると走り出す。

そして門の入口で足を止めると振り返ると大声で叫んだ。

「圭ちゃん。バッチャがね。もう身内だから、好きな時に泊りに来ても良いって。」

だからさ、いつでもきていいんだよ！」

「おうーじゃ、暇なときに立ち寄るよ！」

魅音が手を振り、俺もそれに答えて手をふる。

ようやく、初めてのデートが終わった。今一実感がわかないが、楽しかったのは間違いない。

でも、これで本当に良かったんだろうが。

少し、自信が無い。

「11日目（日）：前原屋敷：夜：前原圭一」

「もう、本当〜〜〜に、ずう〜〜〜と、

圭ちゃんとのラブラブデートの話を聞かされるんですよ！

こっちは、たまったもんじゃありませんよ！聞いてます！ずう〜とです！」

「あ、あははは…それは、その…大変だったな詩音」



「笑い事じゃないです圭ちゃん！もう本当にうんざりですよ！」

夜もふけてからかかかってきた詩音の電話は、

受けた最初から魅音のノロケ話を長々と聞かされたという愚痴だった。

正直、俺は俺でそんな詩音の愚痴電話をさっさと切りたい気分だったが、

さすがに原因が俺にもあるわけなので、そういうわけにもいかず、聞く羽目に陥っている。

「圭ちゃんと間接キスした話から始まり…」

ああ、缶ジュースを飲んだことか。

「圭ちゃんに助けられた話が続き…」

あれはどちらかと言えば、俺が助けられた気がするが。

「何も言わなくても本を取ってくれるのは、心が通じるとかの話を言われ…」

洋ゲーのカタログをとってやったことか。

「映画館で見つめ合ったとか。そんな話ばかりなんですよ！」

あ、喫茶店の話は端折ったな。

「だから、ちよつと頭にきて、私いってやったんですよ！」

『お姉、私の次にデートできてよかったですね♥』って」

ちよつと待て、

お前なに地雷を踏んでいるんだ!?

「そしたら『圭ちゃんは、おじさんとデートしているつもりだったんだから無効！詩音のバーカ！バーカ！』て！もう、本当、論してやりましょうかお姉って感じですよ!!」

「あ、あははは」

電話の向こうでぷりぷりと怒る詩音の声を聴いて、俺は笑うしかない。

しかし、話を聞いていると、どうやら魅音は初めてのデートを存分に楽しんだようだ。

いつもよりも口数が少なかったら、心配していたがそうでもなくて良かった。

「あのさ、なんか葛西さんに奢ってもらったんだけど、後で礼をいっておいてもらえるかな？」

「あはははは！聞きましたよ。葛西がアクション映画を見に行った帰りによった喫茶店で、プリンつつつきあっていたんですよね？その話、お姉から聞いてなかったんですけど、どうしてなんでしょうね？あはははは！」

それはたぶん、葛西さんに見られたことを恥ずかしがっていたからだろうな。

あの時、レジの前でうずくまっていたから。

「ねえ、圭ちゃん。私の方からも、お礼を言わせてもらって良いですか？」

「ん？何の礼だ？」

「：昨日のお姉を鬼から戻してくれたお礼です」

玩具屋での話か。あれは確かに危なかった。

魅音は大石を殺そうと手持ちの銃を取りだしていた。

落ち着かせることが出来たのは奇跡に近いかもしれない。

「奇跡じゃありませんよ圭ちゃん。圭ちゃんのおかげでお姉は鬼にならずにすんだんです。」

姉妹の私にはわかります。お姉はあの時、大石を殺そうと覚悟を決めていた」

「：買い被りすぎだぜ詩音。魅音は自力で正気を取り戻したんだ。俺はちよつと手助けしたに過ぎないだけさ」

あの時、魅音が正気に戻ったのは俺が大石を殺すと言ったからだが、

それは魅音自身理性の部分が残っていたからに他ならない。

俺はそもそも、あの時、本気で魅音と地獄に行く決意をしていた。

結果的に悲劇が回避されたにすぎない。

「それでも、やっぱり：圭ちゃんのおかげです。だから、その：今更なんですけど」

「なんだ詩音？改まって」

「お姉の愛って：重くて辛くないですか？」

本当に今更だな！

それは婚約が決まって結納披露まで行おうっていうファイアンセに向かって言う台詞か？

「あのなあ。そりゃ一周どころか十週ぐらい遅れの気遣いじゃねえか」

「うん、あははは：そうなんですけれど、こんなにお姉が負担になるとは思ってもみなかったです。それに園崎家の婿養子になれば、一般の人とは違う気苦労とかもあると思うんです。でも圭ちゃんって、そういうの気にしないし、嫉妬とかも全然ないし、お姉と一緒に居てくれるから、その：凄くなって：」

魅音は恋人偏向フェルターがあるからわかるけど、詩音までそんなことを言い出すのかよ。

ちようど良いか。せつかくだから少し言わせてもらおう。

「あのな。今から言う事、魅音に伝えてくれても良いんだけどさ：」

「はい。つまりお姉に絶対に伝えろってことですよ？録音しておきます」

詩音、お前、

忖度の意味を一度調べろ。

「：俺の方こそ重いと思うぜ。魅音への愛。」

俺は魅音のためならどんな事だってしてやりたい。この命だつて：捧げてもいいと思ってる。大広間で魅音の母親に問われた時さ、俺思ったんだ。魅音のために生きることこそが、俺の全てだつて」

「……………」

「それにさ、嫉妬とかしてないけど、それってたまたまなんだぜ？

周囲にさ、ライバルになるような奴もいないしさ」

俺が嫉妬深くないというのは、そういう状況だからだと自分でも思う。

甲子園のスターである亀田くんは俺のソウルブラザーで歳も上、しかも住む場所も違う。

富田くんや岡村くんは小学生で年下だし、唯一の同年代の北条悟史とはあったことも無い。

つまり、この雛見沢では嫉妬対象が存在しないのだ。

「だから、魅音が大学へ行つて、かつこいい男子と友達になったら、俺どうなるかわからないと思うぜ？前原圭一って野郎はさ、思い込みが激しくて、独りよがりで、自分勝手な人間だからさ」

「……………」

「婚約の話だつて、結局魅音を俺が独占できるから喜んでるって話だし、俺自身はそんなに大した人間じゃない。魅音とかは俺がヒーローとか、理想の人間みたいに思ってくれているけれど、俺って自分のバカさ加減と向き合えなかつた弱い人間なんだぜ？しかも、感情的に怒鳴り散らすことだつてあるしさ。自分の弱さを魅音に見せたら嫌われてしまうかも……って怯える程度の人間なんだよ俺は」

言いたいことは全部言つた。

こんなことを伝えたら魅音に幻滅されるかもしれないと思う反面、幻滅させるなら早い方が良いかな。と思う自分もいる。

いつまでも、仮面をつけてつき合っているわけにもいかない。いつか装飾なんて剥がれるものなんだ。

「……そんなの許しませんから」

詩音の声が震えているのが分かる。

「……わかつてるぜ詩音。魅音に弱い所を見せるな。つて言いたいんだろ？」

「それもあります、それ以上に……お姉が圭ちゃんの弱い面を見て、引くようなことあったら、私、許しませんから」

想定外の返事で俺は戸惑う。

弱い面を見せて引くようなら、許さないってどういう意味だ？

「だつてそうじゃないですか！お姉は、圭ちゃんに鬼の面を助けてもらったのに、圭ちゃんの弱い所を見て嫌になるとか、引いたりしたら、私、幻滅しますよ……いや、姉妹の縁を切ります！間違いないく！」

「お、おい。落ち着けよー」

勢いよく話す詩音に俺は戸惑う。

「でも、圭ちゃんも、圭ちゃんです！何でヒーローじゃないなんて言う

んですか？

圭ちゃんが、何をしたか思い出して下さい。私は…お姉が鬼になったら、身代わりになろうとおもっていたんです。だって、姉妹だから！血を分けた家族だから！」

「……………」

「圭ちゃんは、お姉と一緒に地獄へ行くと言ってくれたんですよね？なら、お姉だけじゃない、私も圭ちゃん自身も、そして、どうでもいいですが大石の野郎も、四人の運命を圭ちゃんは救ったんですよ！悲しい事を言わないで下さい、お姉にとつても、叔父から救出された沙都子にとつても、圭ちゃんはヒーローなんです！だから、そんな弱気なことを言わないで胸をはって下さい！」

受話器から聞こえてくる詩音の声は泣いているようにも聞こえた。心臓が締め付けられる。まただ。また俺は自分のことしか考えていなかった。

詩音がどんな気持ちで聞いていたのか理解していなかった。

「すまない。詩音…」

自分の本性をさらけだすつもりで語ったんじゃない、実は傷つくのが嫌だから、卑屈になつて楽になりたかっただけなんだ。

無様な人間であれば、後で何を言われても楽になるから。

そもそも魅音を幻滅させるなら早い方が良いつてなんだよ？

俺の全てを受けれてくれた魅音に今更何をいつているんだ。

そうさ。魅音は俺を見捨てたりなんかしないじゃないか。

あんなにも俺を優しく抱きしめてくれただろ？

「知っているかはわからないけれどさ…」

俺、こつちに引越す前に、ひどいことをしてしていたんだ」

「…お姉から聞きました」

そうか。姉妹だもんな。

「でも、それを魅音はさ。優しく受け止めてくれたんだ。そんな人間、多分、世界中のどこにだっていないと思うぜ？それなのにさ…俺、なにビビッてたんだらうな？」

「……………」

「…なんか変な事、色々いつてゴメンな詩音。俺には色々欠点があるけど、それを受け入れてくれるのは魅音だけで…俺は魅音のことが世界一好きだつてことなんだ。もちろん、俺も普通の人間だからさ、嫉妬とかするし失敗も多くやるかもしれない…そう伝えたかっただけなんだ」

受話器の向こうで、ため息が聞こえる。

「ごめんなさい圭ちゃん。私もエキサイトしちゃいました。そんなに卑下しないでください…つてことを伝えたかっただけなんです。だって、お姉と一緒に地獄まで行つてくれるなんて人…圭ちゃんぐらいいんですよ？そんな人が、凄く無いわけがないんですから」

「…ありがとうな詩音」

そう言つてくれると、とても嬉しいぜ。

そうだと、俺は魅音と共にならどこにでもいつてやる。

それが俺の覚悟なんだからな。

「じゃあ、圭ちゃん。これで仲直り☆つてことで良いですか？」

「おう、いいぜ！」

二人して笑う。

時計を見ると、もう12時近くになっている。そろそろ寝ないとヤバイ。

「じゃあ、もう遅いから切るぞ？」

「あ、あの…圭ちゃん。最後に一つだけ良いですか？」

「なんだ？」

「なんで、そんなにお姉を深く想えるんですか？」

出会つて、その…一か月もたつていないですよ？」

なぜ、出会つて数週間しかたつていないのに、そんなに深く想えるのかだつて？

それはたぶん、その理由の中に…もしかしたら、ありえたかもしれない無残な未来の記憶があるからだろうな。

その記憶の中で、俺は大事な仲間だと思つているのにも関わらず、魅音を殺した。

あれほど、俺のために尽くしてくれた魅音をバッドで殴り殺したんだ。

それだけじゃない、幾つもの記憶の中で、ありえない記憶の中で何度も魅音の死を目撃した。

自分が、他人が、事故で、不運で、信じられない事象で、魅音が死ぬ姿を何度も何度も……

そのせいで『仲間を救いたい』という想いが、俺の中で大きく膨らんでいる。

それが魅音に対する深い想いと関係しているのは間違いない。

もちろん、それだけではないはずだ。俺は純粹に魅音が好きなんだ。

だから、その問いにはこう答えようと思う。

「それはきつと、人の出会いに時間は関係無いからだと思うぜ」

「……え？」

「俺はさ、前のところでは何年も過ごしていたけれど友人らしい友人はいなかった。

でも、ここでは引越してきて、すぐに素晴らしい仲間に出会えたんだ」

「……………」

「だからさ、きつと……人によっては、たった一瞬の出会いが生涯の宝になる場合だってあると……」

俺は思うんだ。」

少しキザかな？ 詩音に突っ込まれるかもしれない。

そう思ったが、詩音は意外にも食いついてきた。

「圭ちゃん……それ、わかります。そうですね……ほんの一瞬、ほんの一時の出会いでも、

それが一生の宝として心に残るってあると思います」

「詩音？」

「あははは、あたしってバカだなあ、そんなの聞かなくてわかっていたはずなのにさ」

もしかして、それは北条悟史との出会いの話なのだろうか？

俺は詩音と北条悟史の関係を断片的にしか知らないし、聞く勇氣もない。

おそらく詩音の心の奥深くてやわらかい所にあつて、それを触つて良いのは、北条悟史か詩音自身なんだと思うから。

「圭ちゃん。私ね…お姉と圭ちゃんが、宝をもつたままらずと一緒に居て欲しいって思つています。もちろん、それって私のワガママだとわかつているんです。でも二人にはずっといつまでも、いつまでも幸せでいて欲しい。だって、ほら。物語の最後ってハッピーエンドだって沙都子も言つてたじゃないですか？」

「…詩音」

「ゴメン、圭ちゃん。最後ののに、変な事いっちゃったかもですね。ああ、ダメだな今日の私

圭ちゃんを怒つたり、ちよつとブルーだったかな？後で録音編集しておかないと」

詩音の笑い声の中に、悲しみが含まれているのが分かった。

どんな形かはわからないけれど、きつと俺には想像もつかない経験をしてきたに違いない。

それが、魅音と俺に対する叱咤激励に繋がっているのだろう。

俺は受話器を強く握り締める。

「詩音、俺は必ず魅音を幸せにする。約束だ。必ずだぜ」

「うん、信じてる。だって圭ちゃんはお姉免許皆伝なんですから」  
最後の聞こえた詩音の言葉には深い情愛に満ちていた。



## インターローグ 「古手梨花」

「11日目（日）：雀荘：夜：大石蔵人」

雀荘の一室には幾たびの勝負を経て完全にグロッキーとなり、椅子に倒れ込んでいる熊谷刑事と、鑑識のじいさまの姿があった。

「まさか、あそこで倍満だなんて…」

「もう、鼻血もでんわい…」

大石が、東京から来た赤坂の歓迎パーティと称して行われた大麻雀大会は、

当初セミプロを連れてきた情報屋に一杯くわせようと催されたものであった。

しかし、赤坂は強すぎた。

ものの一時間でセミプロを倒され、情報屋は遁走した。

あまりにも早く終わってしまったために、残った時間は、

大石達4人で戦う事にしたが、やはり赤坂の強さに手も足も出ない状態だった。

点差と言うにもばからしいほどに赤坂がトップで終了。

赤坂が奥さんに電話連絡をするというので一時休息となった。

大石は、赤坂を電話のある休息所まで案内すると、

自動販売機で缶コーヒーを購入して長椅子に座る。

大石の順位は一応、2位であるが、1位の赤坂とは、圧倒的に離されている。

やけ酒ならぬ、やけコーヒーも飲みたくなるというものだ。

「ああ、うん…大石さんのおかげで、梨花ちゃんとの約束も守れそうだし…」

奥さんと電話している赤坂の声が聞こえる。

約束か…

先日、玩具屋で出会った北条沙都子を思い出す。

「大石のおじさま…叔父さまをよろしくお願いしますわ」

あの言葉の意味を知る者は、あの場では大石だけだった。

北条沙都子を虐待した罪で緊急逮捕された北条鉄平であったが、

北条沙都子を女性警官が調べた結果、虐待された形跡は一切発見できなかった。

また、北条沙都子自身も、叔父に虐待された事実を否定した。

つまり、前原圭一が雛見沢の人々を動かして行った陳情は全くの勇み足であったのだ。

そして、人生をやり直そうとしていた無実の人間を：北条鉄平を：警察に逮捕させたのである。

正義の暴走とはよく言ったものだ。

もつとも、だからといって北条沙都子が、前原圭一を非難することできないだろうことはよくわかる。雛見沢の人々が自分を助けるために活動したというのに、それを非難したとなれば今度こそ雛見沢では生きてはいけない。

それは北条沙都子にとって自殺行為だ。

北条沙都子は、叔父を犠牲にして生きていかねばならなかったのだ。

といつても、北条鉄平とて全く清廉潔白というわけでもない。

確かに北条沙都子を虐待してはいなかったであろうが、様々な犯罪に手を染めてきた。

そもそも北条家の周囲を警察が張っていたのも、園崎組の上納金問題で殺されたと思われる間宮リナ一件の重要参考人としてである。

さらにいえば、他の事件への関与が疑われていたため長く拘留されていたのだ。

大石も先日、

別件で北条鉄平の取り調べにおもむいた。

取調室にいた北条鉄平は腕を組み、観念していた。

大石はいつものように不敵な笑い声を出すと椅子に座る。

「んふんふふ…まあ、身から出た錆びつてところですかね。

貴方だって、外で抗議運動があったことぐらい、わかっていたでしょう？」

「…年貢の納め時がきたつちゆうことや。今更言い訳なんかするかい」

大石は懐から、沙都子から預かった手紙を取り出す。

「北条沙都子さんから貴方にです」

「…沙都子から？」

鉄平はその手紙を読むと、涙をにじませる。

大石は感嘆した。

人間は変われば変わるものだ。北条鉄平はこんな人間では無かった。

強い者に媚び、弱い者を食い物にし、他人を騙して苦しめるような人間の屑だったはずだ。

それが今やどうだ？自分の人生を悔い、手紙を見て涙を流そうとしている。

一体、彼の身に何があつたのだろうか？

おそらく人生を変えるほどの何かを北条沙都子との生活で得たに違いない。

「沙都子さんから手紙の中身を見ても良いと言われましたので、拝見させて頂きました。

全ての罪を認めて、綺麗になって戻ってきて欲しい…：そうしたら、また一緒にやりなおしましょう…：鉄平さん、貴方にも待っている人がいるんですね」

「大石のダンナ…：おれは…：ずっとこんなヤクザな生き方しか…：してこなかったんです。

…：そんな俺があ、やり直す事なんて出来るんですかいの…」

沙都子の手紙を見て涙を流し、震える北条鉄平の肩に大石は手を置いた。

「できます。できますとも！人間はいつだってやり直すことができます！  
んです！

北条鉄平さん、だから知っている事を全て話しましょう。そして綺麗な体になって沙都子さんの元へと帰るんですよ」

北条鉄平は沙都子の手紙で簡単に落ちた。

鉄平の知る裏社会や犯罪組織の情報は様々な事件の捜査陣に喜びをもって向かい入れられた。

北条鉄平の証言によって、幾つかの組織的犯罪に大きな進展が見られたのである。

日本には司法取引は無い。

しかし“お目こぼし”という独自の温情措置がある。

北条鉄平に多数の嫌疑がかけられていたが、

起訴は取り下げられた。

実際問題、北条鉄平が直接かかわった事件の大半が時効、

もしくは被害届の無い物ばかりであった。

そのため、起訴するかどうかの段階で、その大半が「起訴の必要は無い」と判断されたのである。

だが、この決定に、北条鉄平の協力的態度が考慮されていた可能性は否定できない。

もちろん、仮に考慮されていたとしても警察が“おめこぼし”をしたなどと公的に言うわけもないのだが。

近いうちに、北条鉄平は釈放される。

おそらくは綿流しの祭りの前後あたりに違いない。

…ですが、

私も前原圭一さんを笑うわけにはいきませんねえ。

先日の園崎家児童虐待問題を思い出す。

裏もとらずに突っ走り、危うく物笑いの種になるところだった。

表向き、この児童虐待問題は園崎お魎の圧力により阻止されていたことになってはいたが、

前原圭一から直接話を聞いた限りでは、実際は雛見沢分校の知恵先生と、診療所の入江先生の勘違いだったというのだから笑い話にもならない。

…まあ、人間、勘違いはするもの…ん？勘違い？

その時、ふと、大石の中に妙な違和感が現われた。

先日熊谷刑事からもらった、園崎組傘下のミフネ組の大量銃器購入話。

大石達はこれを「園崎家が外部の組織との抗争の準備」だと考えていた。

…だが、もしかして、これが“勘違い”だとしたら？

そう。実は外に向けるものではなく、内部に向けるものだとしたら？

それはつまり：

クーデター

大石の額から冷たい汗が一筋流れる。

…いや、まさか反乱をミフネ組が画策していると？

そんな大量の銃器を用意していたら、お魎のバアさんに勘づかれな  
いわけがないはずですよ。

しかし、その考え自体“勘違い”だとしたら？

大石は、コーヒを一口飲む。

もう少し糖分多めのものを買えばよかったかもしれない。

思考に使うエネルギーが欲しい。

休憩室のテーブルの上に置かれている小皿の上に山盛りのキャン  
デーが置いてある。

それを一つとって、口に入れる。甘い。

…ミフネ組は対外交渉を行う組です。

つまり武器の確保なども任されているに違いありません。

だとしたら、銃器を持ち込んだとしても不思議がられることはない  
でしょうね。

そう。銃器を隠すのではなく、むしろ「堂々と許可を受けて」持ち  
込んだとしたら？

元々、海外から銃器を集める担当者が、銃器を持って来たとして怪  
しまれるはずがない。

大量に武器を持ち込み、その場で蹶起をすればよいのだ。

織田信長が、明智光秀に討たれた最大の理由は、

軍団を明智光秀に渡し、反乱当日に運用させていたからにほかなら  
ない。

しかし、もう一方でミフネ組はお魎の忠臣であることは良く知られ  
ている。

だとしたら反乱では無く、お魎に命じられて内部粛清の活動を行う

可能性も残されている。

：思考を進めるための情報が足りませんね。

手持ちのピースが少なすぎる。これ以上の推測は無理だ。

ミフネ組の園崎本家に対する反乱か？

それとも、お魍の命令による反逆者の始末なのか？

大量の銃器を持ち込むということは、少なくとも相応の大事には違いないのだ。

その時、休憩室に熊谷刑事がやってきた。赤坂にやりこまれて、憮然としている。

おそらくこれ以上の勝負は続けたなく無いので陳情しにきたのだろう。

それなら好都合だ、彼に情報収集を頼むとしよう。

「大石さんここにいたんツスか。麻雀ですが今日はこのへんで止めに…」

「…熊ちゃん。ちよつと頼まれてくれませんか？」

「なんですか、大石さん？」

「ミフネ組の動向を洗って欲しいですよ。特にここ最近、園崎組の内部でどういうことになっているのか。その辺を重点的に…」

現段階では情報が少なすぎて判断することができない。

もしかしたら、ただの思い過ごしの可能性もある。

しかし、もし、これが勘違いで無いとすれば、大量の銃器を使った、大惨事が起きる可能性が出てくる。それは凄惨なる悲劇を生み出すだろう。

それだけは何としても阻止しなければならぬのだ。

「11日目（日）：古手神社：夜：古手梨花」

おかしい。

この世界はどうなっているのかわからない。

イレギュラーなことが多すぎる。

圭一と魅いがつき合っているということだけでも十分おかしいのに、

鷹野三四と富竹ジロウが私を全力で守ることを約束するだなんて。

古手梨花は月明かりに照らされた窓辺で、グラスを片手に夜空を見上げていた。

グラスの中身は、ブドウジュースをオレンジジュースで割ったものが入っている。

もう羽入はいない。

ならば、彼女の気兼ねをする必要はないのだが、どうにも共にいた時の感覚が抜けきれない。

100年も共にあったのだ。当然といえば当然であった。

今でも、ひよっこり羽入が現われて、彼女をたしなめに来る気がする。

だが、頭では理解している。それはありえない、と。

羽入はもういない、現れることは無い。

グラスの中の液体を一口飲む。

「…止めましょう。対策を考えないと」

今考えなければいけないのは羽入のことではない。

これから起きるであろう惨劇への対処だ。

前回は鷹野三四が敵だった。

それは明確に覚えている。

しかし、この世界では違う。

あの日：バーベキュー大会が行われた日。

古手梨花は富竹ジロウと接触した。

それは前回と同じく、鷹野三四の危険性を訴えるものであったが、

その後の展開が違った。

富竹ジロウは古手梨花の「鷹野三四が自分を殺すかもしれない」という警告を聞くと、鷹野三四を連れてきたのだ。

この時点で、古手梨花の頭がパニックになった。

なぜ、彼女を富竹ジロウは連れてきた？

だが、次の瞬間、さらに古手梨花の頭を混乱させた。

鷹野三四が、古手梨花を抱きしめたのだ。

「梨花ちゃんは、オヤシロ様の生まれ変わりだけあって全てを理解しているのね。」

ごめんなさい。そういう計画があったのは事実。でも、安心して私が貴方を守るから」

富竹ジロウも強く頷く。

「大丈夫だよ梨花ちゃん。僕らは全力で君を守る」  
意味が分からない。

富竹ジロウだけではなく、なぜ敵であるはずの鷹野三四までも自分を守ろうというのか？

だから思わず聞いてしまった。

「なぜ？私の知っている鷹野三四は目的のためならどんな事があつても突き進む人だったはずよ？」

その言葉に、鷹野三四は哀しそうな顔で答えた。

「貴方には、わからないことなのよ梨花ちゃん」

答えを教えるはくれなかった。いや、答えなどはどうでも良い。

この問いでわかったことは、それは、この世界では鷹野三四は敵ではないという事実。

そしてもう一つ、

おそらく自分を殺す計画というのは鷹野三四の意思とは別な所で動いている。

「そういう計画があつたのは事実」という言葉から考えるに、

鷹野三四が敵ではなくなったとしても、脅威は存在していると考えて間違いは無い。

「富竹と鷹野が協力してくれるということとは、

この世界では『山狗』は私の護衛をしてくれているということ…」

前回、最強の敵であつた相手が味方になるというのは心強い。

だが、相手が全くわからないのでは、安心できない。

富竹ジロウや鷹野三四が保有している、

諜報工作部隊の「山狗」として無敵というわけでは無いのだ。

「もうしばらく考えてみて、結論が出ないようであれば、

やはり、今回も部活のメンバーに相談しましょう」

運命をいともたやすく変える

前原圭一。



高度な戦略眼を持つ

園崎魅音。

高い洞察力と鋭い勘を持つ

竜宮レナ。

きつと、彼らは今回もこの破滅から私を救い出してくれるはずだ。

梨花は思う。

また、前のように生きたい。

生きて、みんなと一緒に大人になりたい。

なぜ自分が過去に戻されたのかはわからないが、

もう、世界の再生リトライはうんざりだ。

永遠に子供時代を過ごしたいなんて言葉は、

永遠に捕らわれた事が無い者だけが言える戯言だ。

私は、大人になりたい。

大人になって、広い世界を見て回りたい。

そのためにも…

「梨花あく、まだ寝ないのでございますのおく？」

沙都子が起きてきた。

梨花は少なくなっていたグラスの中の液体を一気に飲み干す。

「眠れなかったので、月を見ていたのですよ☆にぱ〜」

寝ぼけまなこで、沙都子が梨花に抱き着いた。

「梨花が何を心配しているのかわかりませんがあ…ふあく気にしなくても良いのですわよお…」

最後は必ずハッピーエンドになるのですから…」

「そうなのです。沙都子は良い事を言うのですよ」

梨花は沙都子の頭を撫でる。

古手梨花が、何度も繰り返す世界で心が壊れなかったのは沙都子のおかげだ。

沙都子の豊かな感情、新鮮な反応、そして共にいる喜びがあったればこそ、

何とか心を繋ぎ止めることができた。

…必ず、私は沙都子と共に大人になる。

大人になったら、一緒に様々な体験をしましょう。

雛見沢から出て、色々な場所を巡るの。

沙都子、貴方となら世界の果てにだってきつと行けるわ。

沙都子の寝いびきが聞こえる。

抱き着いたまま再び眠ってしまったようだ。

「沙都子：ボク達は大人になってもずっと一緒ですよ」

古手梨花は目をつぶり、

腕の中で安らかに眠る親友に呟いた。

## 第四章・婚前編

### 第31話「12日目（月）A「ご褒美の誘惑」

「12日目（月）：古手神社：放課後：前原圭一」

授業が終わり放課後になった。

6日後の日曜日に行われる綿流し祭りの奉納演舞の練習をするため、今日から梨花ちゃんが直帰するらしい。そのため、しばらく部活は中止になることに決まった。

魅音も、今日はこれから古手神社の集会所に委員として向かうと話していた。

「圭ちゃん、圭ちゃん。週初めの今日の集会には来てもらって良いかな？顔見世ってことでさ」

「いいけどさ…逆に今日だけで良いのか？」

「圭ちゃんはオークションの司会をやることになるから、夜の方の集会には参加してもらおうことになるかな？今日のは、とりあえず確認作業だけだから本当は来てもらわなくても大丈夫なだけけれど、ほら、一応圭ちゃんは、おじさんのお婿さんだから、顔を見せに来て欲しいんだよ」

綿祭り準備委員になったとは言っても、俺は当日に叩き売りオークションの司会をするだけだ。

とは言え、やはりそういう集会には出る必要があるらしい。

だからといって俺が集会に行って何かをするわけでもない。

その他の一切は、すでに決まっており、今日はあくまでもその段取りの確認だけらしい。

毎年、祭りを行っているために手順はほぼ皆わかっている、だから特に込み入った話にもならないとか。とはいえ、それほど重要では無いのは俺だけで魅音は違う。実行委員の中心的人物だ。

「それと今年は結納披露も行うからね。ちよつと、おじさんも色々忙しいんだよね」

「そうか。結納披露自体は祭りに組み込まれているけど、本来は祭り

とは無関係なんだよな……」

「そうなんだよ。結納披露を行うのは、あくまでも園崎家だからさ。もちろん当日は多少手伝ってはもらえるけど、そんなにあてにしたら悪いしね」

あと6日後に、村内の人達……いや、綿流しの祭りに集まった人たちの前で、結納披露を行うのか。

なんか実感がわかないな。そういえば、結納披露のさいの衣装とかはどうなっているんだ？

「うちの本家と、圭ちゃんのご両親との間で話が進んでいるよ。」

たぶん、明日か明後日ごろに、一度試着をしに興宮までいくことになると思う」

「やっぱり、その……特別な衣装ってことになるのか？」

「クククク、圭ちゃん、それは見てのお楽しみみてヤツだよ」

魅音、お前、なんて不気味な笑い方をしやがるんだ。

とはいえ、良家が大々的に行う結納披露なら、そんなおかしな服は着せないだろう。

俺と魅音、それと梨花ちゃんと沙都子と一緒にになって古手神社へと向かう。

古手神社は梨花ちゃんの家があり、今は沙都子も同居しているため行く方向が同じだ。

ちなみに集会所も古手神社の敷地内にある。

集会所につくと、すでに委員の人達がほとんど集まっていた。

俺は魅音に案内されて上座の方に誘導される。

席順は左から、

俺：前原圭一、園崎魅音、公由村長、そして空席の座布団が一つ、そして書記の人。

「魅音、座布団が一つ開いているけど、誰かくるのか？」

「ああ、あれは梨花ちゃんの席だよ。でも、今日は奉納演舞の練習ではないんだけどね。ただ古手家の当主だから席は用意されているんだよ」

まあ、梨花ちゃんの席か。

今頃、奉納演舞の練習を頑張っているんだろうな。

しかし、上座と言うのは居心地が悪い。

慣れていないというのもあるが、正直、場違い感が凄い。

「…圭ちゃん。おじさんと結婚したらこういう席に出ることが多くなるんだから、

今のうちに慣れておかないとね」

魅音が耳元でささやく。

少しくすぐつたいな。

「それではみなさん。会合をはじめましょうか」

公由村長の声で、本日の集会が始まった。

綿流し祭りまでの日取り、業者の確認、出店の縄張り、納入品の中身と数量、その他いろいろと話が出てくるが、正直俺にはさっぱりだ。強いて言えば、オークションを行う時に、司会として俺が行うという話が出た時、立ち上がって挨拶をしたことぐらいしか覚えていない。集会そのものは本当に確認だけで終わったので、小一時間で終わった。

本来なら、この後、部会ごとにわかれて話し合いも行われるらしい。

ちなみに部会は、総務部、設営部、模擬店部、奉納演舞部、そして俺が所属するイベント部などで構成されている。

ただ、今日はこれで開きで、それらの会合は明日以降の夜の集会で行われる予定だ。

もつとも最初の方で言った通り、既に取り決めはほぼ終わっている。

あまり俺が出て、何か話すと言う事も無いだろう。

随分早く終わってしまったが、これからどうしようか？

そう思っていると、魅音が麦茶の入ったプラスチックの大きな容器を持ってきた。

「圭ちゃん、圭ちゃん。これを梨花ちゃんの元へもっていってくれる？少しなら飲んでもいいよ」

「おう、いいぜ」

魅音から麦茶の容器を受け取ると、梨花ちゃんが練習している所を聞き向かう。

古手神社には神社だけではなく、梨花ちゃんの実家である本宅が存在する。

亡くなった両親を思い出すために、そこには住まず、いつもはそこから離れた小屋に沙都子と二人で住んでいるらしいが、今日は本宅で奉納演舞の練習をしているらしい。

集会所から本宅までは近くなので迷うことは無い。

練習に集中しているのか、入り口から声をかけても誰もでないので家の中に入る。

魅音に教えてもらった通り、中に入って奥に進むと何かを振り回す音が聞こえてきた。

戸は開いているので、のぞき見すると数人の大人達と沙都子に囲まれて、梨花ちゃんが演武練習をしていた。

俺に気が付いた沙都子が近寄ってくる。

「あら、圭一さん。差し入れてございますの?」

「麦茶を魅音に頼まれてもってきた。梨花ちゃん大変そうだな」

梨花ちゃんの手には、餅つき用の杵が握られている。

演舞を見ていると、すこし杵の重さに振り回されている感じだ。

「本番用の道具も、かなり重さなので梨花はあれで練習しているんですの。」

でも、去年もがんばりましたもの。今年もきつと、がんばりぬきますわ」

梨花ちゃんを応援している沙都子は偉いな。

俺は沙都子の頭を撫でる。

「おほめ頂けるのは嬉しいのですけれど、偉いのは私では無く梨花ですわ。」

…あ、そうだ。ちよつと圭一さんにお問い合わせがあるんですの」

「なんだ沙都子?」

「隣の用具室から変な音が聞こえてきますの。見てきては下さいません?」

なんだ。ネズミでもいるのか？

仕方ないな。沙都子のために退治してやるか。

俺は麦茶の容器を沙都子に渡し隣の用具室に入る。

少し薄暗く電灯のスイッチを入れようとしてみたが押ししても電源が入らない。

昼間なので見えなくは無いが、少し困ったな。

その時だった。俺は誰かに手を引っ張られて、壁に押された。

な、なんだ！誰だ!?

「圭ちゃん、圭ちゃん。なんでおじさんがここにいる事を知ってたわけ?」

…って魅音？

魅音が俺の胸に頭をすりつけている。

「いや、沙都子から物音がすると聞いてさ…」

「あちゃー、失敗した。圭ちゃんを引きずり込もうと準備していた音、漏れてたのか」

いや、何をしているんだお前は…

「そりゃ、圭ちゃん成分が足りなくなってきたから補充しようと思っ  
ていたんだよ。」

それにさ、この間の途中で終わっていたでしょ?」

「途中ってなんのだよ?」

「こ、れ…」

そういうと、俺から少し離れた魅音はスカート両端を掴む。

って、お前、何をしているんだ!?

「クククク…圭ちゃんもいつてたじゃん。笑顔でスカートめくる姿を  
みたいてさ」

魅音が、凄まじく邪悪な笑顔を俺に向ける。

いやいや、確かに見たいと言った!

笑顔の方が良いとも、言ったかもしれない!

でも、俺の見たい笑顔とは違うぞ!?

「圭ちゃん。この間はさ、ごめん…だからさ、

これってある意味おじさんのお詫びでもあるんだよ」

魅音はスカートを少しずつ上げていく。

ゴクリ…

唾を飲み込む。

「み、魅音…」

俺はスカートが上がっていく姿に目が離せない。

徐々に上がりつづけ、膝までスカートの端があがった。

「ねえ、圭ちゃん。この間も言ったけれど…」

おじさん、スカートの下にハーフパンツは履いていないし、

沙都子のようにストッキングも履いていない。もちろん水着も履

いていないよ」

ドキドキドキキキ…

俺の心拍が猛烈にあがる。

脚に力が入らず、崩れるように倒れて尻餅をつく。

魅音は俺を見下して、口を歪める。

「そうやってさ、下から見上げた方がよく見えるかもね…圭ちゃんにはその方が良いでしょ？」

…待て魅音！と言いたいが出ない。

スカートはさらに上がっていく。

膝の上10cm…20cm…

そして股と太ももと付け根の三角地帯まであがった。

その時になって、ようやく声が出せた。

「待て、魅音…！本当、それ以上は…！」

しかし、その声は魅音の心には届いていない。

「良いんだよ圭ちゃん。圭ちゃんには、おじさんの全部を見てもらいたいから…」

一気に魅音がスカートをあげた！

バカやめろ！！だが視線は釘付けのままだ！

くそっ、俺のスケベ！

そして、魅音ありがとうッ！！

お前は最高の嫁だ！！！！

…つてあれ





「魅音、その手に握<sup>り</sup>ているスカート<sup>の</sup>端を…放せ」

「ヴおおおええええ?!?!」

激しく動揺してゆる魅音。

その叫び声<sup>が</sup>心地よい。

「け、け、圭ちゃん?!? な、な、何をいつているのさ…!!!」

「何を動揺しているんだ? 手を離しても、いまと現状はかわらないだろ。」

強いて言えば、布が一枚あるかないか程度の話だぜ…?」

「そんなわけあるかあああああ!!! そんなことしたら!!! あ、あのっ!!」

スカートの中に圭ちゃんの頭が入っちゃうじゃん!!!」

「そう、それこそが男のロマンの中のロマン!」

!!!」

『女子のスカートに頭を入れる』だ! そう、これは思春期の男子にとつて…」

「そんなウンチクいらなからッ!!! 語らなくていいからッ!!」

だ、第一ツ暑いでしょ!! 頭からかぶつたらッ! 大変だよ!」

「我慢する。問題無い」

「む、蒸れちゃうじゃん! ムシムシになるよ圭ちゃん!」

「魅音に蒸しられるのなら本望だ」

「それに、に、に、匂いとか、あるからさ!!!」

「むしろ、それはご褒美だッ!!!」

「いやあああああヘンタイだあッ!!」

圭ちゃんの口から、そんな話聞きたくないッ

「変態じゃない…そう、これはロマンだ!!」

!!!!!!!」

ゲームなら、光彩エフェクト付き大爆発背景が表示されるであろう必殺の場面ッ!

見たか、魅音ッ! これが、これこそが男なのだ!!!

魅音が半泣きで叫ぶ。

「圭ちゃんが壊れた! ヘンタイになっちゃった

!!!!!!!」

誰か助けてええええええええええええ!!!」

!!!!!!!」

ふふふ、愚か者め。

思春期男子を怒らせるからだ……！純情をもてあそんだ罪、とくと思  
い知れ！

ガラガラガラ……

圭一&魅音「「あつ……」」

用具室の扉が開かれ、そこには笑顔を引きつらせた梨花ちゃんの姿  
が……

「……アンタ達、私が必死に奉納演舞の練習をしているときに、なに大声  
でイチャついてるわけ？」

今年の綿流しの生贄になりたいの？それとも、鬼隠しにあいたい？  
いいわ、好きな方を選びなさいちょうど二人いるしね。オヤシロ様も  
大喜びだわ……」

聞いたことも無いような低い声で語る梨花ちゃん……

これは、明らかに、完全に、キレている……！

梨花ちゃんの後ろにいる沙都子も頭を抱えている。

「……こういうことは圭一さんと魅音さんには、あまり言いたくはござ  
いませんけれど

もしかして、お二人は、おバカさんなのではございません？」

俺達は顔が引きつる。

騒ぎを聞きつけた大人達も次々と集まってくる。

この事態をどう收拾つけるべきが、俺は頭を全力で回転させた。  
そして魅音と顔を見合わせる。

うん、無理だ。謝ろう

「12日目（月）：前原屋敷：夕方：前原圭一」

俺達は用具室で正座をさせれ、一時間近くも梨花ちゃんに説教を受  
けるハメに陥った。

幼年組に説教される年長組の二人。シユールにもほどがある。

回りの大人達も困惑し、最終的に見かねた公由村長さんが仲介によ  
り何とか脱出できた。

だが梨花ちゃんの怒りは想像を絶し、練習用にもってきた布団を原  
型がとどめないほど杵で叩きつけたらしい。

「あの冷静沈着な梨花をガチギレさせるだなんて、ある意味大したも

のだと思いますけれど…今日はもう、お二人ともおかえりなさいませ。一晚寝れば、さすがに梨花も落ち着くでしょうし」

そう沙都子に諭されて、俺と魅音は手をつないでトボトボと家路についた。

明日までには雛見沢中で噂になっているだろうな「境内で逢引きをして梨花ちゃんに激怒された二人」として。

「はあく梨花ちゃん、怒らせちゃったね」

「明日一緒に謝ろうぜ。梨花ちゃんなら許してくれるはずだしさ」

「ごめんね圭ちゃん。こんなことになって」

「いや、俺もさ、大人げなかったし…」

どっちが悪いかなんて話はでない。

どうかんがえても、二人とも悪いからだ。

そう思える俺達二人は素晴らしい夫婦なのでは無いだろうか。

…という風にまとめれば、少しは良い話風に終われるか？

「あ、あははは…そうだね。」

ところで圭ちゃん、今日は家に行っても良い？今日はバツちゃがね、夜遅く帰ってくるんだ。

夕飯だけでも圭ちゃんと一緒に食べたいな。って思ってたさ」

「おう、もちろんいいぜ！親父もお袋も反対はしないだろうしさ。」

ってことは、泊まれないのか」

「うん。でも、その分サービスするよ圭ちゃん」

俺の腕に、自分の腕を絡ませてきた魅音をエスコートして帰宅する。

家に帰るとお袋が夕飯を作っていた。

魅音も夕食を共にしても良いかと聞いてみると、お袋は喜んでOKサインを出してくれた。

魅音は手伝おうとしたが「二人で、お部屋でくつろいでいてね」と、やんわりと拒否されたので、二階の俺の部屋へと一緒に行くことにする。

ちなみに親父はアトリエで仕事に没頭しているようだ。

よかったぜ、また親父に余計な事を言われると困るからな。

部屋に入ると魅音は無造作に床に座り、俺は本棚に向かった。たしか魅音から借りた本があったはずだ。ついでだから返しておこう。

俺は中腰で本棚を探し、お目当ての本を見つけると振り返った。

「魅音…」

魅音が足を組んで俺を見ている。

わざわざ、スカートの丈を膝ぐらいまで短くして。

「どうしたの圭ちゃん…」

目を細めて、落ち着いた低い声で俺の名前を呼ぶ。

その声に、背中にゾクゾクつとしたものが走る。

「いやさ、お前に借りた本だけど、返そうと思って」

「いいよ、圭ちゃん。まだ持っていていいよ…」

魅音は、見せつけるように

ゆっくりと足を組み替える。

…ま、待てよ。

落ち着けて、俺。

頭をふって、魅音の脚に釘付けになりそうなのを何とか耐える。

そうだ。こんな誘惑に引つかかるかよ。

「はははは、魅音。種がバレた手品なんて面白くないぜ？」

「手品…？」

「ああ、もう既に、そのスカートの中にあるのがブルマだってバレているんだ。

俺がたじろくと思ったのかよ！甘いぜ魅音！」

そうだ。既に俺は、そのスカートの中が赤ブルマだと知っている！

だから、そんなにチラチラとさせても、少ししか気にならないぜ！

ちよつとだけな！

「その、赤いブルマって、これの事？」

「…え？」

魅音の右手人差し指がくるくる回しているのは…まさか…

ポイツ

魅音が投げ捨てた赤いブルマが俺の目の前に落ちた。

赤いブルマを凝視する。あれはさつき魅音が履いていた赤いブルマにちがいない。

至近距離で俺は見たんだ。間違えようが無い。

「圭ちゃん、それはただの“布”だよ?」

その声に振り返る。

魅音は片足をあげて、ゆっくりと靴下を脱ぎはじめた。

スカートから現れる太もものラインに目を離せない。

そして悔しいことに、絶妙な角度でスカートの中身が見えない。

魅音は楽しそうに眼を細める。

「圭ちゃんはさ、おじさんの“中身”に興味があると思っていたんだけど、もしかして違ったのかな?」

脱いだ靴下をさらにブルマの上に放り投げた時、俺は気が付いた。

今の魅音は「勝負モード」に入っている。

もともと、魅音は勝負ごとに強いが、少しスロースターターな所がある。

だから、突発的なことに弱かったり、防御力が紙の時だつてある。

だが、完全に調子に乗ったときは桁外れに強い。

何しろ戦略、戦術、戦闘、全てを兼ね備えた最強の指揮官になるのだ。

おそらく瞬間最大風速はトーゴー提督やネルソン提督をも超えるだろう。

そんな「勝負モード」に入り絶好調」になった魅音が、全力で『誘惑』をしてきたらどうなるか?

そんなの決まっている。

抵抗できるわけがない。

「こっちに来て…約束だから、サービスしてあげるよ圭ちゃん…」

魅音が、もう片方の脚をあげて靴下を脱ぐ。

これもやはり絶妙な角度で足をあげているので、ふとももは露出し  
ているが、

スカートの中身は見えない。

俺は操られるように、四つん這いで魅音の足元までくる。

顔をあげると、魅音は脱いだ靴下を親指と人差し指でつまみ、下唇を舐めた。

「圭ちゃんが欲しいのは“これ”じゃないよね？」

魅音はもう片方の靴下も投げた。俺は目で、それを追う。

美しい放物線をかいて、先ほど反対側の靴下を落した赤ブルマの上におちた。

「圭ちゃん…」

名前を呼ばれて振り向くと。

魅音がベッドの上で両膝が立って体育座りをしていた。

両脚はきちんと閉じられていたけれど、

スカートは太ももまでまくりあげられ、生足を露出されている。

「好きにして良いよ」

…え？好きにして良いよって、

どういう意味だよ。

俺の心臓の鼓動が高まり、呼吸も激しくなってくる。

言葉通り解釈すれば、このまま足を広げて良いってことか？

いや、でも、そんなことは…

「圭ちゃんが、今思っている事。やってもいいんだよ…」

「え…あ…本気なのか…魅音…」

「本当はね、圭ちゃんを困らせる気なんて無かったんだ。でも、圭ちゃんがあんまり可愛かったから、ついつい、おじさんイタズラしちやっただよ。御免ね。これは、その罪滅ぼしだからさ…」

…嘘だ。

さつきのは間違いなく俺をからかうつもりだった。

そして舌なめずりしている今の顔を見ればわかる。

謝罪の気持ちなんて微塵も感じられない。

でも、嘘だとしても、これを拒否できるのか？

抵抗なんて、できるわけがない。

もし抗うことが可能だとすれば、それは俺が魅音を愛しておらず全力で拒絶する気概に満ちている時だけだろう。だが、そんなことは未来永劫来やしない。つまり、俺にあらがうすべなんて無い。

俺は体を半分起こして、震えながら手を伸ばす。そうさ、仕方が無いんだ。

そもそも、魅音が良いつて言ったんだぜ？

その好意に甘んじてても良いじゃないか。

いや、だったら…

本当に俺が望んでいることをするべきじゃないか…？

俺は伸ばした手を脚ではなく、肩に置いた。

「本当に、良いんだな魅音？」

魅音が頷くと俺は立ち上がり、魅音を押し倒す。

「圭ちゃん…」

魅音は少し驚いた顔をしていたが、すぐに口元を歪めた。

動揺をほとんどしていない、立ち直りが早すぎる。

だとするならば…

これも、お前の想定内なのか魅音？

ああ、わかったぜ。

なら全力でやつても良いんだよな？

俺は魅音の唇を塞ぐ。

そして唇を何度も味わうように動かし、舌で少し魅音の歯を舐めた。

魅音は、最初軽く抵抗していたが、すぐに口を開き、舌を絡ませせてくる。

初めてキスの時に舌を入れたが強烈だ。

脳天に響くほど甘美な味がする。

いつの間にか、俺と魅音は舌を絡ませ合い、吸い付くようにキスをしていた。

何度も、何度も口づけをしているうちに、頭がぼうつとしてきた。

タン、タン、タン…

魅音が背中を三回たたいている？

止めて欲しいのか？俺は何か理性を総動員して唇を外す。

俺の舌と魅音の舌の間に透明な小さい糸が引いている。

「け…圭ちゃんツ…圭ちゃんツ…！おじさん、飛びそうだからツ、お願い



い強く抱きしめて」

飛びそう…という意味は分からないが、俺は頷くと魅音を抱きしめながら、キスを続行する。

さらに激しく、さらに濃厚に…その時、魅音が大きく体を2・3度痙攣させた。

俺は驚いてキスを止める。

「大丈夫か魅音?」

「ん、大丈夫。なんかふわふわする。あはは、おじさん…飛んじやつたみたい」

魅音はうつろな目で俺を見返す。

上気した顔がとても官能的だ。魅音の激しい息さえも甘く感じる。

ああ、もう駄目だ。

自分でもわかつている。もう馬鹿になっている。止められない。

これが監督の言っていた若さゆえの暴走ってヤツなのか。

「魅音、すまん…俺、もう止められない…」

「いいよ、圭ちゃん…」

魅音はスカートのポケットから、何かを取り出した。

あれは、ピンク色のコンドームだ。

魅音は意味ありげに笑うとコンドームを口に加えた。

「やつぱり、監督に相談しておいてよかったね」

「…ああ、監督には感謝しないと」

「…それじゃ、さ。始めようか圭ちゃん…私達の初夜…」

俺は魅音は見つめ合い。

手を握り、そして…

……………

「圭——魅音ちゃん、夕飯できたわよ——!!!」  
早く降りてきて、食べにいらっしやーい」

……………

お袋の、声が聞こえてきた。

俺達はしばらく無言で見つめ合うと、  
いつしか笑い始めた。

「あはははははははははははははははは!!」  
なぜだかわからないが笑った。

笑って笑ってわらった。

一通り笑い終わると、俺は魅音の体から離れて、  
仰向けになって倒れた。

「圭——魅音ちゃん、聞こえるー!?お夕飯できたわよー!!!」  
「聞こえるよ母さん。今行くー!」

先ほどまでの熱はすっかりと冷めてしまった。

あれほど燃え上がっていた情熱が一瞬にして無くなるなんて。  
なるほど、これが冷水をぶつかっけるってやつか。

魅音が上から俺の顔をのぞいてくる。

「はあく。もうちよつとだったんだけどね。おじさんもガツカリだよ」

「嘘つけ、お前のことだから、お袋が声をかけてくるのも計算づくだろう?」

「そんなことないよー。いくら、おじさんでも、お義母さんがどのタイミングで夕食を作り終わるかなんてわかるわけないじゃん」

そりやそうか。

幾ら何でも、そんなに都合よく人間が動いてくれるわけが無い。

うつ伏せになった魅音が、

俺のほっぺたをつつく。

「でも、さ。あと十分、お義母さんの声かけが遅かったら…だよな。

ククク…圭ちゃんも本気になるってわかっただけでも収穫かな?」

「…どうでもいいけど魅音。お前、脱いだブルマと靴下片付けておけよ?」

「うぎゃあああ!圭ちゃん見ちゃだめっだったツ!脱ぎたてブルマを見るだなんて、

変態だよ変態!!!」

見るなって、お前が脱いで飛ばしたんだろう…

本当にONとOFFの切り替えが分かりやすい奴だぜ。

ベッドから降りてブルマと靴下をバッグの中に入れていている魅音を見る。

最初につき合った頃は、好きの一言も中々言えないぐらいに内気だったのに、

今では全力に誘惑するぐらい…それはノツているとき限定だけど…情熱的になってきている。

俺の為に頑張ってくれているんだと思うと、それがたまらなく愛おしい。

「圭ちゃん、それじゃ下におりようか…ふにゃ!」

片付けが終わって、振り返ろうとする魅音の背中から俺は抱き着いた。

魅音は、顔を真っ赤にしている。

「け、圭ちゃん。ダメだって!お、お、お義母さん、そろそろ怒るよ?」

さつきまであれほど俺を右往左往させていた魅音が抱き着かれただけで狼狽するなんて。

本当に『勝負モード』じゃない時の魅音は防御力が弱いよな。

「ありがたいな魅音。俺のために、頑張ってくれているんだよな」

「あ、うん…」

魅音が視線を落として小さく頷く。

だめだ。ちくしよう。可愛すぎる。

自分を抑えるので精いっぱいだ。

夕飯時でなければ、このままさつきの続きをしたいぐらいだぜ。

だけど、さすがに三回も呼んでこなければ、俺の部屋にお袋が来かねない。

そんな時オイタをしていたら非常に気まずい。

やはり、今日は諦めるしかないよな。

我ながら未練たらたらだぜ。

俺は魅音の頭にキスをする。

「じゃさ、降りようぜ」

「うん。行こう、圭ちゃん」

俺は立ち上がると、魅音に手をのばす。  
頬を赤らめながらその手を握る魅音。  
それでは、愛しき我が妻を階下までエスコートするのでしょうか。

### 第32話「13日目（火）A「決別への覚悟」

「13日目（火）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

翌朝、学校についた俺達は開口一番に梨花ちゃんに謝りにいく。

梨花ちゃんは、昨日のような低い声ではなく、いつもの口調に戻ってはいた。

「オヤシロ様は縁結びの神様なのですよ。だから圭一と魅いが仲良しなのはとても喜んでいられるのです。だから、深く反省しているのであれば、大目に見てくれるはずなのです。ただ、次も境内で同じ事をしやがりましたのなら、きつと綿流しの祭りの時にぞうもつをバラまく事になるので、気をつけるのですよ☆にぱー」

ただ所々で、怒りの断片が見えるのは恐らく俺の勘違いじゃないだろう。

魅音も分かっているのか、顔を引きつらせていた。

おかげで今日の授業は梨花ちゃんにびくびくしながら受ける羽目になってしまう。

梨花ちゃんの眩しい笑顔が、今日はずっと怖い。

戦々恐々とは、まさにこのことだ。

レナも終始困った笑顔をしながら俺達を慰めてくれた。

「だ、大丈夫だよ。梨花ちゃんも、ああいつてくれていたし…」

魅いちちゃんも、圭一くんも、気にし過ぎかな？気にし過ぎかな？」

だが、そういうわりにはおどおどしている。

正直だなレナ。

最も沙都子に言わせれば、

「これにこりたら梨花を怒らせない事ですわ。というか何も言わずに笑顔で刺すタイプの梨花を激怒させるだなんて、お二人とも相当レアな行動されてましてよ」

という事になる。

冷静に考えてみれば、神聖な境内のしかも亡くなったご両親の邸宅で、神様への奉納演舞の練習中につき隣でイチャイチャしていたら、それはキレられても当たり前だ。

魅音が真顔で俺に語り掛ける。

「やはり圭ちゃん成分の不足はおつかないものなんだよ。禁断症状が出る前後の見境がなくなつて、場所を考えずに無理にでも摂取しようとう頭がバカになつちやうんだ。今度は慎重にやらないとだね」

うん、魅音。

お前、もしかして全く反省していないだろ？

お昼時、俺と魅音による過剰なまでの梨花ちゃんに対するオカズ接待などをくりひろげた。

少しでも心象をよくしたいという100%打算に満ちた接待だ。

もちろん、梨花ちゃんには見透かされているので、やたらと横柄な態度で「おかすが欲しいので、早く取ります圭一」と言われるのも仕方が無い。

くそ、梨花ちゃんめく

「反抗的な目を圭一はしているのです。これはよろしくないのでですよ☆にぱー」

「へへへく梨花ちゃんお許しをく」

手もみをしながら頭を下げる。

…俺は一体何をやっているんだろうか？

そんな最中に魅音が席を立った。

「あ、ごめん。圭ちゃん。ちよつとトイレにいつてくるね」

なんだなんだ。女子はトイレなんかいかないんだぞ？

ははん。さては接待攻勢から逃げる気だな？ずるいぞ魅音！

…という俺の言葉に

レナはコロコロと笑う。

「あははは。女の子だつてトイレに行くよ。

それとも、魅いちちゃんは圭一くんアイドルなのかな？かな？」

ちえ、その返しはあまり上手くないぜレナ？

魅音はアイドルなんかじゃねえ。

俺の最高の嫁だ！

〔12日目（月）：雛見沢分校：お昼：北条沙都子〕

北条沙都子は、外のトイレに向かった園崎魅音と会うべく昼食を抜

け出し水場へと向かった。外のトイレは田舎用のボタン便所だけが設置されており手を洗う場所がない。

なので、必然的にトイレに行った後は、手を洗うために水場へと向かわなければならぬ。

案の定、沙都子が水場にいくと魅音が手を洗っていた。

都合の良い事に、周囲には人がいない。

話しかけるにはうってつけの環境だ。

魅音が、近づいて来た沙都子に気が付いて振り返る。

「あれ？沙都子、どうしたの？」

「いえ、魅音さんに圭一さんのことで告げ口をしようと思ひまして。

先日、穀倉帰り電車の中で、圭一さんからお話をお聞きしましたの」

：電車の中で？

圭ちゃんから？

首をかしげる魅音に沙都子は笑顔で語りかける。

「圭一さんは、自分が本当に魅音さんのお力になれるか悩んでいらしたみたいですよ。」

もしかしたら力不足で、魅音さんに嫌われることもあるかもしれない。そんな感じでしたわね」

「え？圭ちゃんそんなこと言っていたの？なんかあった？

随分、らしくないことを言っているけど…」

「…そういうところでしてよ。魅音さん」

沙都子に言い返されると思わなかったのか、

魅音がきよとんとしている。

(なるほど、詩音さんの言われる通りですよね)

前に沙都子は詩音から聞いた事がある。

沙都子を助けるために、圭一は園崎家の当主である園崎お魎に直談判しに訪れた。

そのさい、園崎お魎は激怒したが内心では、圭一に惚れ込んだらしい。

ただ、その時、お魎が怒っていないと気が付いたのは、

魅音の母親・茜。竜宮レナ、そして古手梨花の三人だけで、

魅音と詩音。そして圭一は、そのことに全く気が付かなかった。

とはいえ、詩音は何年も実家から離れていたし、

圭一は全くの赤の他人なので気が付かなくても不思議では無い。

だが、魅音は違う。

魅音はもう何年もお魘の身の回りを世話をして、あらゆる場所で当主代行として園崎お魘の意思を告げる役割をおっていたはずである。

それなのにも関わらず、お魘が本気で怒っているのか、内心では喜んでいたのか気が付かないとはあまりにも心の機微に疎いと言わざるをえない。

この一連の流れを詩音から聞いたとき、沙都子はある程度得心したものだ。

人の機微に疎いというのは魅音本来の性格によるものか、あるいは後天的な「帝王教育」によるものかはわからないが、“鈍感力が高い”と言うのは決して悪い事ばかりではない。

組織のトップにいるということは、それだけ大きくストレスがかかるとは、そうでなくても元々、優しい性格の魅音はストレスがたまりやすい傾向にある。

なら、当主として君臨するような立場なれば、人の悪意に鈍感なことは精神的な安定に大いに役にたつだろう。

それに人の感情に左右されずに正しいと思った事を実行できるということでもある。

例えば、大人たちの考えや感情を無視し、大人の世界と子供の世界は別であると、学校において、北条悟史や沙都子がイジメに合わないように尽力できたのも、もしかしたら、そのためかもしれない。

ただ、もちろん悪い面もある。

“それゆえに”問題解決の糸口が見えない状況で、感情をぶつけられると右往左往してしまう傾向が出てしまうのだ。

何しろ、何年も連れ添ってきた実の祖母の心胆すら理解しきれないのだ。

他人の心情などは推し量るのは難しいだろう。



(そう考えると、魅音さんが圭一さんに惚れた理由というものもなんとなくわかりますわね)

感情を…というか、心の声を…顔に出す前原圭一は、魅音が双子の姉妹の詩音以外で唯一心情を手取るように把握できる相手なのだろう。本当に、平素は他人の心など理解しづらい魅音にであるならば、心の動きが手に取るようにわかる圭一は、一緒にいて嬉しくて仕方がないに違いない。

(詩音さんが『毎回お姉に好きだと言うように』とアドバイスしたのもうなづけますわね…)

ま、実際のところはわかりませんが…ともあれ『わかりやすい』方がよろしいでしょう)

「圭一さんは私を叔父様から助けて下さるために大活躍をされたそうですが、基本的には一般ピーポーでございますのよ？それが、この雛見沢や興宮に影響力を持つ古くからの名家に婿入りするというのは、相当なプレッシャーではありませんか？」

「……………」

「今までは魅音さんの手前、何事もないかのように強がっておられたようですが…圭一さんとして、まだまだ学生…その事実を結納式を一週間前に控え、気弱になることもあれば、重責に押しつぶされるような気持ちになっても不思議ではございませんでしょう。無論、そんなことは魅音さんも重々ご存知のはずだとは思いますが…」

「……………」

魅音の口から小さなため息が漏れたのを聞き洩らさなかった。

魅音は頭が良い。分析力に長け、計算高く、素晴らしい戦略能力を持つ。

だから決断が早い。そのせいで、しばし直ぐに割り切ってしまうのだ。

今回の話にしてもそうだ。

魅音の頭の中では「前原圭一が上流階級として生き抜く術を備えていないのなら、きちんと帝王教育を施せば良い」としか考えていない。

(それは多分に答えたとしては正しいと思いますが、当の本人たる原圭一が婿入りするという状況に対して、どれほどの重圧がかかるかを察してはいないとするのは…とまれよろしいでしょう。私がきちんとお話して差し上げますわ)

沙都子は笑顔のまま話を続ける。

「まるでつき合った頃の魅音さんを思い出しましたわ。あの頃の魅音さんも不安で右往左往なさっておいてでしたわよね」

「……………」

「何ができるか、何をしてはいけないのか、闇夜の中を手探りで探す…きつと、電車の中の圭一さんも、そんなお気持ちでは無かったのではございませんか？」

「…私は、圭ちゃんを嫌いなんてならないよ」

ポーカーフェイスでそう答える魅音に沙都子は思わず吹き出しそうになった。

笑顔で語りかけていて間違いなく正解だった。これなら多少笑いが含んでいても誤魔化せる。

真面目な顔で話していたら、こらえきれなかったに違いない。

(魅音さん。ポーカーフェイスなんてものを会話の途中でやるものはございませぬのよ?)

それでは、自分の感情を表に出さないようにしようと思死なのがバレバレですわ)

「ええ、その通りですわ！魅音さんが圭一さんを嫌うわけがございませぬもの！ですから私も圭一さんにお話ししましたの『圭一さんの無様な過去を聞いても魅音さんは受け入れてくれた』って、そうしましたら…」

「…そうしたら？」

「圭一さん、力強く『おう！そうだよな』と答えられましたわ。あの感じだと自分から魅音さんに打ち明けるにちがいありませんわね。あんな返事は、よほど魅音さんの事を心の底から信じておいででないとできませんから」

「……………」

顔を赤くして魅音は視線をそらすと、沙都子の笑顔の質が少し変わった。

それは“してやったり”という笑顔。

もつとも、視線をそらした魅音には、

その笑顔が見えてはいなかったが。

「本当に羨ましいですわね。夫婦の間では秘密の量と愛情は比例する…という話はございますが、自分の心の弱さや悩みを打ち明けるのはとても勇気のあることでございましてよ？」

それでも、圭一さんは魅音さんを信じて話そうとしていらつしやるなんて…これって、もう圭一さんが自分の中にある全てをさらけ出しでも良いと…本当に魅音さんを信用しているという意味ではございませんか？」

「……………」

「あまり言いたくありませんが、梨花にも見習ってほしいですわね。私が大事だというのはわかりますが、相手に辛い思いをさせるから、だから黙っておく…そういうのが一番つらかったりするんでございますよ？でも圭一さんは魅音さんを全面的に信用して自分の内情を包み欠かさずに話そうとするなんて、なんて素敵なんでございましてよ！きつとこれは、魅音さんが自分自身を丸ごと受け入れてくれるという意識の表れ…もう、圭一さんの心が、完全に正妻である魅音さんの“モノ”になったと言っても、よろしくてはございません？」

「圭ちゃん……」

魅音は顔を赤く染めて胸の前で祈るように両手を重ね合わせた。

熱っぽい表情をしたためるその姿は、まぎれもなく恋する乙女そのものだ。

（完全に仕上がりましたわね…さらに深い愛に堕ちる一歩手前…）

これなら今夜おきる詩音さんとのイベントも存分に楽しめて頂けますでしょう）

普段の魅音ならば絶対にしないであろう表情を見ると、

沙都子は笑みを浮かべながら魅音の脇に立ち、肘で突つつき始めた。

「ぎ、沙都子…なに!?」

「今のお話は、圭一さんが相談するまで秘密ということですのでよろしいのでしょう?」

せつかく圭一さん自らが胸襟を開いて、魅音さんに告げようと言うのですもの

こちらからアプローチするのは無粋というものでございますわよね?」

魅音が一瞬考え込んだが、自分を納得させるように頷くと、

沙都子の頭をもみくちやに撫でる。

「あ、あははは、そうだね。

ありがとうね沙都子。おじさん達のために色々考えてくれて」

「おくほほほ! イチャラブはともかく、レナさんや梨花と同じく

私も、魅音さんと圭一さんには仲良く過ごして欲しいと思っておりますのよ!

これぐらいのフォローは当然ですよ」

もみくちやにされている沙都子の笑みには、善意以外の何かが含まれているようであった。

だが、魅音の心は完全に圭一の方に向いており、沙都子の変化には気が付くことは無かった。

「12日目(月)：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

お昼を過ぎて放課後となった。

よくわからないがトイレから帰ってきてから、やたらと魅音は上機嫌だ。

なんでそんなに上機嫌なのかを聞いてはみるみるが、意味ありげに笑うだけで教えてはくれない。それどころか「細かい事はいいじゃん?」と言って、俺の後ろから抱き着き、顔と体をこすりつけてマーキングしてくる。

お前は犬か!と、つつこみをいれようと思ったが、その前に耳たぶを軽く噛まれて、おもわず「うわっ! なにすんだッ!」と叫んでしまった。

不覚だぜ。

それを見て、魅音がケラケラと笑う。

「いや、美味しそうな餃子があると思ったら圭ちゃんの耳だったよ。ごめん、ごめん」

なんだその意味不明な返しは、誤魔化しにもなってねえよ。

わけがわからんぞ、このテンションは。

いつもは「はうく」と言つて俺達のイチヤイチャを楽しそうに見ているレナも、

このハイテンションぶりに、顔を引きつらせて半笑いしている。

「あの…魅いちちゃん。なんか良いことあったの？」

ずいぶん、機嫌が良いみたいだけど」

「何か？別にないよ。」

まあ、強いて言えば、今日は忙して直帰するから、

今の内に圭ちゃん成分を十分取るのを忘れないようにしなきゃ…ってのはあるよね」

なんだ今日は直帰するのか。

それじゃ、夜は…？

「ごめん圭ちゃん。夜はさ興宮の詩音の家に行く予定なんだ。

だからさ、今日は学校が終わると本当に会えないんだよ」

なるほど、それならいつもより圭ちゃん成分つてヤツを大目に摂取されても仕方がないよな。

しかし、残念だぜ。

それじゃ今日は家に帰って漫画でも読んでいるか。

「そうだ圭ちゃん。暇だったら、久しぶりにレナとゴミ山でも行ったら？」

「ん？良いのか魅音、レナと二人つきりになっても」

「というか、圭ちゃん一人になったら、そっちの方が怖いよ。

今度はおじさん、助けてあげられないんだからね？」

俺を一人にしちやいけないうって設定、まだ生きていたのか…

レナは嬉しそうに軽く手を叩く。

「じゃあ、今日は一緒に可愛いものを探そうね！圭くん！」

「そうだな。よし！前回は途中で終わったし、今日はがつつり探して

やるか！」

前回は部活でゴミ山に行ったが、俺のせいでほとんど何も見つからずに終わってしまった。

今回は、ぼっちり探してやるぜ。

俺とレナが二人で盛り上がっていると沙都子が急にとんでもないことを言い始めた。

「それでしたら、私は魅音さんのお家にトラップでも仕掛けてまいりましょうか」

藪から棒に何を言っているんだお前は？

「いえ、今日は梨花が奉納演舞当日の衣装の調整のために、綿流し実行委員の人と興宮まで行かれるのですが、私は買い物とお夕飯の用意についていけませんの。なので、余った時間を有意義に使うために魅音さんのお宅を武装化しよう」と

「ちよつと待て。暇なのはわかったが、なぜそこで魅音の家をトラップの要塞にするんだ？

発想の流れがよくわからんぞ」

「おくほほほ！魅音さんのお宅は、家業が家業でしてよ？トミーガンと青龍刀を持った、トレンチコート姿の中国マフィアがいつ襲ってきてもおかしくはないでございませすわー！」

トミーガンと青龍刀って、なんか色んなものがごつちやごちやになっっているな。

ほら、魅音も困った顔しているじゃないか。

「いや、沙都子…別にうちの庭をトラップまみれもしてもいいんだけどさ。

バッチャをケガさせないように注意だけはしてくれるかな？」

あ、トラップまみれにすること自体は良いのか。

ちよつと意外だったぜ。

「お魎のお婆さまにケガをさせる？それは少しハードルの高いトラップをお望みですね。

わかりましたわ、全力でトラップを設置させて頂きましてよ」

微妙に話が噛み合っていないと思うのは気のせいか？

とりあえず放課後の予定は決まった。

魅音と沙都子は、園崎本家に向かい。梨花ちゃんは興宮へ、レナと俺は、このままゴミ山へ直行することになった。

沙都子は一旦梨花ちゃんと一緒に神社へと戻り、そこへ興宮に行く梨花ちゃんの用意をしてから園崎本家に向かうらしい。

「バツちゃんには、私の方から沙都子が遊びに来ることを伝えておくから安心して来ると良いよ。庭に不法侵入者用のトラップをしかけるって話も通しておく、私がいなかったら自由にやって。ただ庭には大昔の防空壕やトンネルとか、そういうのもあるから、そういった所には近づいたらダメだよ。危ないからね」

「ありがとうございますわ。」

魅音さんのご厚意に報いるために最強無敵のトラップを仕掛けさせてご覧にいきますわよ」

魅音と沙都子が笑う。

少し前までは、お魎のバアさんがいる家に、沙都子が単身で向かう事はありませんなかつた気がするよな。

「……って、おい。」

何を年寄りじみた事を考えているんだ俺は？

「あはははは。それじゃ、圭一君、私達も行くこうか？」

レナが屈託の無い笑顔で語り掛けてくる。

そういえば二人きりでゴミ山へ行くのも久しぶりだな。

よし、今日は張り切っていくぞ！

「13日目（火）：ゴミ山：夕方：前原圭一」

夕焼けの赤い空が広がる。

今日は二時間？三時間？ひたすら、ゴミ山でレナと可愛い物を探していた。

6月とは思えない暑さに汗が止まらない。

「圭一くん、これ飲んで」

「ありがとうございます」

レナの差し出してくれた冷えたお茶が美味い。

レナのお茶は特別な味がするんだよな。

「あははは、特別なことはしてないよ」

レナは満面の笑みを浮かべる。

俺もつられて笑う。

久しぶりだな、この感覚。

ここ最近、ずっと魅音と一緒にだったから忘れていた。

そうだな。せつかく二人きりになったのなら

あの時のことを謝っておこう。

「あのさ、レナ…」

「なに、圭くん？」

「その、前にフワラズの勾玉の話が出た時にさ。レナが『俺のことを好きだ』って言った話、

俺は全力で否定しただろ？その…少し、言い過ぎたかなって思ってた。ゴメンな…」

レナは一瞬きよんとした表情をしていたが、少し間をおいてクスクスと笑い出した。

「ああ、魅いちちゃんと圭くんが付き合いだした頃の話だよね！

全然大丈夫だよ。魅いちちゃんも鬼になってすつごく怖かったし、ああして大正解だっと思うよ」

「そ、そうか。いや、よかったぜ！あはははは」

「でも、何でも今ごろそんな話だしてきたのかな？」

そんなにあの時、レナ、圭くんに怒っていたかな？」

「いや、怒っていたというより、辛そうというか…」

ちよつと悲しいって言うっていたからさ…あははははは…」

「…そっか。レナ、つらそうな顔していたんだね」

「…はは…えつと、レナ？」

「……………」

レナが、俺を見ている。

哀しそうな目で。

なんでそんな目で俺を見るんだ？

もしかして、レナ、お前、もしかして俺の事を…



「レ……」

俺が声をかけようとしたら、

レナはくるりと一回転して走り出すとゴミ山の頂上にのぼった。

「私ね、圭一くんが好き」

……え？

「魅いちちゃんも好き。梨花ちゃんも、沙都子ちゃんも、みんな大好き！

いつまでも、いつまでも、ずっと一緒に一緒に、皆で楽しく笑い合っ  
ていきたいんだ」

……

「だからね。レナが本当の意味で圭一くんを好きだって言う事は……も  
う無いんだよ」

夕焼けに染まり微笑むレナの顔に、俺は胸が締め付けられる。

そうだ。当たり前だ。

俺は魅音を選んだ。その時点で、俺はレナに「好き」だと言っても  
らう資格を失った。

それはわかっていたはずなのに。

心が、苦しい。

俺は思わず、自分の服を掴んだ。

胸が張り裂けそうだった。

正面からレナに否定されて、

これほどまでに自分の心がかき乱されるなんて思わなかった。

もしかしたら、俺はまだ、心のどこかでレナから「好き」だと、

恋愛対象として見られていたいという気持ちがあったんじゃない  
だろうか？

そうでなければ、ここまで辛いと感じるはずがない。

だとしたら、俺は未練たらたらのとんだ大馬鹿野郎って話になる。

だが、この胸から沸き起こる切なさ、それを笑い飛ばすには、少  
し、痛すぎる。

「圭一くん、大丈夫？……ご、ごめんね。レナ、少し強く言い過ぎたかも  
しれないね」

レナがゴミ山を下りて近づいてくる。

…待て、レナ、近づかないでくれ。

こんな表情を…いや、実際自分が今どんな表情をしているのかはよく分からない。

でも、ろくでもない表情をしているのはわかる…見せたくない。

俺は全身の力を使って口角をあげる。

いや、見せたくないんじゃない、レナに見せるわけにはいかないんだ

レナがどういう想いで、その言葉を言ったのかはわからない。

だけど、俺はその言葉を受け取る責任がある。

ここが男として踏ん張り時だぜ、前原圭一？

レナに、カツコいい所を見せてやれよ、な？

「いや、なんでもねえぜ。たださ…告白してもいないのに振られた気分だったから、

ちよつと混乱しちゃったのさ」

「…え!? あ、その…ゴメンね。ゴメンね。そういうつもりじゃ…」

「わかってるって！俺が告白して振られたなんて話、魅音が聞いたら大変だもんな！」

「う、うん…」

俺はレナの頭を撫でる。

「でもさ、レナ、一つだけ間違えていることがあるぜ？」

「えっと、なんだろう？なんだろう？」

「俺達、仲間で家族だろう？だったらそういう意味での本当の好きってのはあるんじゃないか？」

別に好きってことは恋愛だけの限定フレーズじゃないだろ？」

レナの顔が、

ぱあつと明るくなった。

「そうだよね、アハハハ！うん、そうだよ！」

「だろ？だから、俺も言うぜ？俺は竜宮レナが好きだ！」

仲間として家族として！梨花ちゃんも、沙都子も！みんな大好きだ  
！」

「うんうん！レナもみーんな大好き！アハハハハ！」

：俺が、意図的に家族と仲間には、魅音の事を入れなかったのは、多分レナは気が付いているはずだ。でも、レナはそのことに対して何も言わなかった。

「そうだ。さつき沙都子ちゃんがやってきて、

お魎さんから貰ったおはぎをおすそ分けしてくれたんだよ。圭ちゃん、一緒に食べよう☆」

「沙都子が？今は居ないのか？」

「夕飯の買い物に行くからって、すぐに帰っちゃったんだ。一緒に食べたかったんだけど…」

「うーん。そいつは残念だぜ。お、美味しそうなおはぎじゃねえか！」

「お魎さんはおはぎが得意なんだよ！食べよう！食べよう！」

俺達はおはぎを食べながら二人で笑い合った。

仲間として家族として楽しみながら。

うん、これで良いんだ。

これで今まで通り、俺達は仲間として家族としてやっていける。

これこそハッピーエンドってやつだろ？

一抹の寂しさがあるけれど、それはきつと時間が解決してくれるはずだ。

そうだよな、レナ？

「13日目（火）：ゴミ山：夕方：北条沙都子」

沙都子は双眼鏡に捕らえた前原圭一と竜宮レナの表情を読んでいた。

読唇術を会得しているわけでは無いが、唇の動きと雰囲気から大体内容を察する事はできる。

空いた左手で、余りもののおはぎを手に取り、口に入れる。

侵入者撃退用のトラップを設置したお礼として、お魎から贈られたおはぎだが量が多かった。

ゴミ山にくる途中のお店で空箱を貰い、一つは自分と梨花用。もう一つは圭一とレナ用に二等分にしたが、中途半端に1個残ってしまったのでそれを口に入れた。

持って行くと梨花と喧嘩になりかねないし、捨てるには勿体ない。

余ったおはぎを半分個にするという発想は、いつも口に入れてから気がつく。

(…やれやれ、皆さん本当に要領が悪いことですね)

口の中の甘味を堪能しながら、沙都子は15分前を思い出す。

15分前、沙都子は前原圭一と離れていた竜宮レナと出会った。

もちろん、レナが一人になるタイミングを見計らってた。

おすそ分けのおはぎを渡したところで、

沙都子は少し哀しそうな表情でレナに語りかける。

「私、圭一さんを…ほんのちよつとでございますのよ?」

に―ではなく、男の人として良いなあ…って思っておりましたの」

「沙都子…ちゃん?」

「でもね。私、その想いを忘れることにしたんですの。だって、私、皆といつまでも幸せに…梨花と一緒に笑って生活していきたいんですもの。なら、この想いは…持っていてはいけないものですから…」

沙都子の言葉に、レナは何かを感じたようだった。

ほんの少しだけ下を向くと唇を噛む。そして、沙都子を抱きしめた。

「沙都子ちゃんは偉いね。立派だね…でも、その想いは忘れても、圭一くんを好きだった思い出までは忘れないで。それはきつと、沙都子ちゃんを素敵な大人の女性にしてくれるはずだから…」

「ありがとうございますレナさん…レナさんは、お優しいんですね…」

沙都子は笑みを浮かべた。

その理由をレナは理解することは無いだろう。

幾らレナが聴くても、想像できないことを考えられるはずはない。

(年下の私がそう言えば、レナさんも決心がつくでしょう)

これでレナさんの淡い恋心に嫉妬した魅音さんによる悲劇は回避されたはずですね)

沙都子はやれやれと言った感じで最後のおはぎの一切れを口にほうばる。

(…本当、困ったものですね)

困ったというのはレナだけでは無い。部活のリーダーの魅音に対してもだ。

いつもは精神的に安定しているはずの魅音だが、何故かこの圭一と婚約する流れだと不安定になり悲劇を引き起こすキーマンになりやすい。

首を搔いていないので、おそらく病状がでたわけではないのだらう。

園崎魅音が発病したなどということは、見た事も聞いたことも無い。

だとしたら、あの精神的な不安定さは圭一とつき合う事で現れたものなのか。

それとも恋路を大石に邪魔にされたことによるものなのか、沙都子には判別がつかなかった。

恋愛事に関しては、ある程度沙都子は把握してはいるが、

恋をすることや、愛し合うことによる心理的変化を完全には理解しているとは言い難い。

圭一や入江監督は好きではあるが、それは恋愛感情とは程遠い。

ましてや「子作りを邪魔されたことによる原始的本能から沸き起こる激怒」というレベルの感情など、沙都子の想像できる範疇を超えている。

(ま、考えても仕方ありませんわね…とりあえず、圭一さんとの関係で弄れば魅音さんに精神的に揺さぶりがかけられるというのが分かったのは収穫ではございますが)

最もその知識が生かされるときは、今回の思惑が失敗した時なのでから発揮する機会など訪れてもらっても困るのだが。

おはぎを食べ終わり、指についた餡子を舐めとる。

お麴のおはぎは美味しい。いつ食べても。何度食べても。

沙都子は双眼鏡を外すと体を大きく伸ばす。

今日はもう彼女がやるべきことは何も無い。あとは帰って梨花と自分の夜食を作るだけだ。

沙都子は部活のメンバーが全員が大好きだ。

どこまでもまっすぐに進み、困難に立ち向かい、自分達の幸せのため

めに戦う。

その信念の強さゆえに、悲劇を引き起こす事もあるし、不幸を引き起こすこともある。

でも、

それらを含め、全てが愛おしい

沙都子はずっと一緒にいたいと思うし、共にありたいと思う。

いつまでも、いつまでも、ずっと一緒に。

「でもね。梨花…強い信念にも限度というものがございましてよ?」

沙都子は目を赤く光らせ、

目の前にいない親友に呟いた。

「13日目（火）：前原屋敷：夜：前原圭一」

夜中に魅音から電話がかかってきた。

今日は放課後から、ほとんど会えていなかったので声が聞こえるのは嬉しい。

「圭ちゃん、圭ちゃん！ハア！もう、圭ちゃんの声が聞こえるだけで、おじさん幸せだよ」

「あははは、大げさな奴だな」

「なにより、じゃあさ、圭ちゃんはおじさんの声聞いても幸せじゃないってわけ?」

「魅音、俺がお前の声を聴いて幸せじゃない時があると思うのか?」

「えへへへ、だよね！圭ちゃんは、おじさんの事大好きだもんね」  
全く、当たり前な事を聞くなよな。

おっと、そんなことを言うと詩音に怒られるかもしれないな。

「圭ちゃん、餌、あげないと釣った魚は死にますからね?」とか何とか言われて。

「おう、大好きだぜ魅音！へへへへ…」

「エへへへ、おじさんも大好きだよ圭ちゃん」

初心、忘れるべからず。だ。

「そうだ。今夜は詩音の家に行ったんだろ?どうだった」

「え?あ、ああ……………うん。まあ……………」

別に気になるような話はないよ。つまらない世間話をしただけ」

そうなのか？それにしても間が長かったな。

またてつきり詩音と一緒に悪だくみをしていると思っただぜ。

「それより圭ちゃん、今日はレナとの宝探しどうだった？」

「ああ、そこそこ良い物が探せたぜ。そうだ。沙都子から、お魍のバッチャから貰ったおはぎおすそ分けしてもらったんだ。美味かったぜ。俺からも礼を言っていたって伝えてくれないか？」

「沙都子、あのあとゴミ山にいったんだ。うん、バツちゃんに伝えておく」

「そう言えば、お前んちの庭にトラップを仕掛けていたっていうけど、大丈夫なのか？」

「ククク…圭ちゃん、圭ちゃん、沙都子、えげつないトラップを山ほど設定していったよ」

話によると、沙都子はノリノリで庭中のあらゆる場所に襲撃を予想してのトラップを配置したらしい。その配置構成と内容は、魅音から見ても舌をまくほどだったとか。

ちなみに、どういうトラップがあるのかというと、ひっかかってからのお楽しみらしい。

「そんなトラップまみれで危なく無いか？」

「平気、平気。沙都子、トラップのある場所にはご丁寧に蛍光塗料で描いた罫罫マークの看板を立てていたから。それこそ事前知識の無い襲撃者でもない限りハマることなんて無いって」

なるほど、蛍光塗料の看板があるなら夜間でも安心だ。

それほど念入りをトラップをしかけたのなら、部活再開したときに園崎本家でサイバイバルゲームminトラップゲームとかやつても不思議じゃないな。

「でも、魅音。今日はさ、ありがとうな」

「ん？何が？」

「えっと、レナと一緒に出掛けるのを許可してくれただろ？」

魅音が嫉妬するから許してくれないと思っただぜ」

「あはははは、そんなことか！前にも話してたじゃん。圭ちゃんとおじさんはお互いにオンラインワンだつて！だから気にしてないよ。

まあ、後はあれよ、正妻の余裕って奴？あははは！」  
なるほど、正妻の余裕か。

どんな形であれ俺に愛されていることに自信を持つてくれるのは嬉しい限りだ。

そうだ。それなら、今日の事を話しても、問題はなさそうだな。

「今日はさ、レナに告白もしていないのに、ふられちゃったんだ」  
「ん？どういうこと？」

俺は今日の出来事をかいつまんで話した。

俺がフワラズの勾玉の話をした時に、レナの「好き」発言を否定したのを謝り、そしてその後にも、もしかしたらレナが俺が好きなんじゃなかったのかと勘繰った後に、それを聞く前に否定されてしまったことを。

「…レナはさ、圭ちゃんの事、本当に好きだったと思う？」

「…それはわからない。でも、そうだったとしても…もう、そんな気持ちには無いんだと思う」

「…圭ちゃんは、レナの事、好き…だったの？」

魅音の問いに心が痛む。

俺は無意識に、自分の胸倉をつかんでいた。

「そういうことは今までも思ってもみなかったけどさ。」

『本当の意味で好きだと言うことは無い』って言われて凄くつらかった…」

「……………」

「あの、魅音…俺ってさ、最低だよな？お前がいるのに、こんな…苦しくて切ないなんて…」

ああ、ダメだ。駄目だ。

詩音にも言われたらどう？自己嫌悪に陥るな！

そんなこと言われても、魅音が困るだけじゃないか！

「…圭ちゃん。そんなことを言われたら当然だよ」

…魅音？

「だって、それって裏を返せば『二度とお前を好きだとは言わない』お前なんて好きじゃない』って言われているのと同じことだよね？もち



ろんレナもそこまで深く考えて言ったわけじゃないんだけど、言われた側は傷ついても、全然、不思議じゃないよ」

「そうか。そういう考え方もあるのか。」

たしかに『本当の意味で好きだということとは無い』と言われたら、頭では無くて、心がそう解釈していても不思議じゃない。

つまり、逆だったんだ。

心の痛みを頭で解釈したから、レナの事が好きだったなんて頓珍漢な発想をしたんだ。

そう考えればスッキリする。

「そうか…そうだよな。アハハハ。よかった、自分がレナに未練たらたらの糞野郎じゃないかって思って、自己嫌悪するところだったぜ」

「…未練、あつたの?」

「あるわけないだろう? だから困惑していたんだぜ。」

だってさ、俺が好きなのは魅音だけなんだから」

「あはははは。そうだよな。全くレナにも困ったもんだよ。言い方をもう少し考えてもらわないとき。圭ちゃんも、こう見えて繊細なんだし」

「なんだ。繊細代表のお前が言うのかよ。」

まあ、否定はしないぜ? 今回は結構シヨックをうけたからな」

「…でもさ、これで完全にレナへの想いは断ち切れたんじゃない」

受話器から聞こえる魅音の言葉に、俺は頷いた。

実際にレナに対する想いが俺の中にあつたのかどうかはわからない。

無いとも、有ったとも自信をもつては言えない。

でも、一つだけ理解している。

もう、レナとはそういう関係になることは無いだろう。

「仲間として家族として、俺はレナのが好きだ。もちろん沙都子も、梨花ちゃんも…」

「…うん。それで良いと思う」

魅音の優しく暖かい声が聞こえる。

俺は少し涙ぐむ。

ああ、くそ！園崎魅音！

お前は、本当に良い女だぜ。

「なあ、魅音：お前って本当に実在するんだよな？」

「ちよつ：何をいきなり言っているの圭ちゃん？」

「いや、あんまりさ。魅音が良い女房すぎるから、一瞬、俺の脳内の彼女かと思っちまったぜ」

「あのね、圭ちゃん：おじさんに半日合わなかったからって、重症じゃない？魅音成分足りてくない？」

それは足りていないかもしれない。

「じゃさ、明日は二人で学校抜け出そうか？」

また圭ちゃんのカウンセリングだって言えば知恵先生もNOとは言わないはずだから」

おいおい、

俺を一人にしない設定も、自殺未遂設定も、両方まだ生きているのかよ。

どつちかは、とつくに無くなっていったと思っていたぞ。

「俺としては嬉しいけど、お前、勉強は大丈夫なのかよ？」

「圭ちゃん、圭ちゃん。この世に、夫と戯れること以上に大切なことなんて、

子供と遊ぶことぐらいしかないよ！それに：」

「それに：」

「勉強時間が足りなくなったら、圭ちゃんと二人でみっちり個人授業しちゃうから平気、平気：」

クククク：」

…いっておくが、

そうなたらイチャラブは無しで、本気で勉強会にするからな？

「：圭ちゃんってさ、たまに愛情が無い時があるんだよね」

「愛情があるから、みっちり勉強しようって話をするんだと思うぞ？」

「ぶーぶー！つまんない！つまんなーい！」

全く本当に仕方がない奴だぜ。

でも、ありがたいな魅音。

お前のおかげで、俺はこれからも頑張っていけそうだ。

### 第33話「14日目（水）A「本心への問い」

「14日目（水）：雛見沢村：昼：前原圭一」

俺は学校とレナの家に住むの連絡を行うと、

魅音と待ち合わせている廃線で使われなくなった旧停留場に自転車で向かった。

両親が仕事で不在だったのは幸運だった。説得の手間がはぶける。もつとも「魅音とデートをしに行く」と言っても止められなかったかもしれない。

なにしろ、リビングにあった仕事関連の書類には「園崎」の文字が躍っていたからだ。

親父あたりは「魅音ちゃんの歡心を買うために行つてきなさい」ぐらい言いかねない。

：いや、さすがにそれはゲスの勘ぐりすぎか。

さすがに親父でも、そこまで息子を喰いものにしていないだろう。うん。そこまでじゃないと思う。一応、実の親父なんだし。

しかし、今日は快晴だ。風も気持ちよい。

大自然の中でイチャつきとは、魅音もやるな。

これから十数分後に起こるだろう魅音とのイチャイチャを想像して頬が緩む。

いかん、いかん、俺もレナの可愛いモードのようなゆるキャラになつてしまう。

だけどニヤニヤが止まらない。

他の人がみたら、気持ち悪いだろうな。うん。

そんな俺の御機嫌も、数分後にどん底になるとは思わなかった。

旧停留所につく直前、突然大雨に見舞われた。

今日は晴れ、ときどき曇りだったが、山の天気は変わりやすい。

山間の雛見沢なら当然だ。

「ちくしょう。最悪だぜ」

旧停留所につく頃には体中が濡れていた。

旧停留所には簡単な屋根と壁と、そして長椅子が設置されてある。

雨漏りはしてないのは助かった。これでもう濡れることはない。しかし、片手運転は危ないので持って来た折り畳みの傘をささなかつたため、

土砂降りによりかなり濡れてしまった。

ハンカチ程度だと、吸いきれないがとりあえず拭いておこう。

：魅音の奴大丈夫か？

ギギギギギ!!!

そう思っていた時、旧停留所に魅音が自転車ごと突っ込んできた。

「おわっ!？」

「ゴメン、ゴメン!!圭ちゃん、大丈夫?」

魅音は濡れた髪を振り乱しで俺に謝る。

ひどいありさまだ。頭の前から足元までも全身ずぶ濡れだ。

「お前こそ大丈夫かよ魅音?」

俺は手に持ったハンカチで、魅音の頭を拭く。

とてもじゃないが、俺が一度つかったハンカチ程度では吸収できないほど濡れている。

魅音もポケットからハンカチを取り出すが、

そのハンカチも濡れているので絞るところから始めている。

しかし：

学校に行くと言って出かけてきたのか

魅音の格好はスカートの学生服だ。

魅音はハンカチで顔を拭くと、

びしょびしょになったスカートの端を絞りはじめた。

：ゴクリ。

俺は唾を飲み込む。

水も滴る良い女とは言うが、

濡れた魅音は、いつもとは違う感じに魅惑的に見える。

魅音が長し目で俺を見る。

俺の心臓の鼓動が一つあがった。

「どうしたの圭ちゃん?」

そんなにジロジロみられると、おじさん恥ずかしいよ…?」

魅音は、そう言うのと両腕で胸元を隠す…というより、胸の下で腕を組んだので隠すというより、胸を持ちあげている感じになっている。

ずぶ濡れのせいで、服もスカートも透けており、制服に張り付いたブラジャーもくつきりと見える。

さらに胸を押し上げて強調しているものだから、

胸の輪郭丸わかりだ。

俺は思わず視線を落とす。

「っ、ごめん。魅音」

「…嘘。圭ちゃん見ても良いよ」

魅音を見返すと、腕を組んで胸を支えたまま体を俺の方に向けて立っていた。

俺の心臓の音がさらに高鳴る。

「圭ちゃん。今日はさ、スカートの中、

インナー履いていないから…あまり見られると恥ずかしいかも」

…えっ!?

俺は視線をスカートに移す。

下着のラインがくつきりと見える。

ヤバイ!

俺は片手で口と鼻を押させる。

これ以上見ると、鼻血がでそうだ。

「圭ちゃんってば。」

見ないで言ったのに…そんなにおじさんの体、気になるんだ?」

微笑した魅音が俺の方に近づいてくる。

俺は引く。

魅音が一步前に進むと、俺は一步下がる。

しかし、旧停留所はそんなに広くない。

俺は旧停留所に設置されていた長椅子に足をひっかけて、座ってしまふ。

そして、その上に魅音が乗りかかってくる。

長椅子に座る俺と、その上に向かい合って乗りかかる魅音。

俺の腰の上に、魅音の腰がある事実は俺の心音を一オクターブあげ

るには十分すぎる。

「圭ちゃんさ、こういうの…好きでしょ?」

…え?

「お風呂上りとか、濡れた姿とか…」

そういう時に圭ちゃんの熱い視線…ずっと感じていたんだよ?」

…うっぐ、やるな魅音。

正確には少し違うが。打ち明けるべきかどうか。

魅音が顔を上気させて俺を見ている。

これは単に自転車で全力疾走してきたからだけではないだろう。

くそっ!濡れ+上気は…攻撃力が高すぎるぞ!

「そのさ…上気した女性って、俺だけかもしれないけど。凄い魅力的に見えるよな」

俺が観念してそう口走ると、魅音は耳元で呟いた。

「…その言葉、よく覚えておくからね圭ちゃん」

魅音は俺の両肩の上に乗っすぐ手を伸ばすと、そのまま頭に回して俺を抱きしめた。

俺は魅音の胸の中に顔をうずめる。

…魅音。

トックン、トックン、トックン…

魅音の心臓の音が心地よくて安心する。

少し、鼓動が早い気がする。きっと魅音も恥ずかしいんだろう。

「録音、聞いたよ…」

録音、なんのことだ?

ああ、そうか前回詩音に電話した時に、俺が伝えても良いって言ったアレか。

「圭ちゃんさ、

自分のことを随分否定したけれど…なんで?」

ドックン…

俺の心音が一段上がった。

…そうだ。俺はあの時、魅音に嫌われてもいいや。と思っって自分の本心を語ったんだ。

魅音や詩音の思うような人間では無いってさ。あの時は詩音に怒られたっけ。

そんなこと言わないで下さい。貴方はヒーローなんだって。今思えば、なんであること言ってしまったのか。

自分のバカさ加減に腹が立つ。

詩音にも止められたし、本当は話したくないんだけど。

でも、あの時の気持ちを伝えなければダメだろうな。

「そのさ、俺、お魍のバアさんや、魅音や詩音が思うような、その…立派な人間じゃないって…言いたかったんだ」

「…なんで?」

なんで? ってそりゃ…

「だってさ、俺は普通の人間なんだぜ? その、腹が立てば怒鳴るし、ケンカもするだろうし」

…前にも言ったけどさ…引越前前は、ひどいことをしちまったし…」

「それは知っているよ圭ちゃん。」

私が聞きたいのは、なんでそういうことを言ったかって話なんだ」

…あ、ダメだ。

これはダメなヤツだ。

魅音、お前…俺の心に触りに来ている…

「圭ちゃんが誰におもんばかっているのかはわからないけど、

おじさんは圭ちゃんの本心が知りたいんだよ」

…ダメだ。ダメだ。やばい駄目だ。

魅音、お前、何を言っているんだよ!

そんなの話したら、俺。

「いや、だって詩音がさ…」

「圭ちゃん、忘れないで。圭ちゃんのパートナーは詩音じゃない。私なんだよ?」

…待て、本当にダメだ。

クソツ! クソツ! 止めてくれツ! 魅音ツ! 頼むツ!

トツクン…トツクン…トツクン…



ああ、ダメだ。魅音の心音に心が安らいで、何もかもさらけたい気分になってる！

こんな話をしてどうする？夫になるんだろ？一家の大黒柱になるんだろ？

そんな俺が、弱音なんて…

「魅音、俺、俺…」

「良いんだよ圭ちゃん。受け止めてあげるから、ね？」

…あ。もう、ダメだ。

そんな優しく声をかけられたら俺、俺…

俺は目から涙が溢れ出てくるのが分かった。

涙がぼとりと落ちて頬を伝わる。

もう無理だ。こうなったら止められない。止まらない。

心の堤防が、決壊、した。

「俺、おれ…魅音にぎらわれたくないッ…！」

魅音の体に手を伸ばし強く抱きしめた。

強く、強く。そして泣いた。泣いた。

「皆が言うほど、俺すげえヤツじゃないッ…色々バカな事をするし、失敗だつてするッ

魅音の期待を裏切つて…白い眼を見られて、嫌われたり、逃げられたりしたら…耐えられないッ…！俺、魅音に嫌われたくないッ！魅音とずっと一緒にいたい！だからッ…！」

ああ、情けないぜ。これが、雛見沢御三家次期当主の婿だなんて。

ちっぽけで、つまらない。独りよがりな…そんな小さい人間だ。

そんな俺の頭を魅音が撫でる。

「そっか、だから…自分で期待値を下げるような事をいって予防線を張っていたんだ。

バカだなあ、おじさんがそんなことで、圭ちゃんを嫌いになるわけないじゃん…」

「でも、俺…詩音にも言われて…魅音の前ではかっこよくなるうって…」

「圭ちゃん…圭ちゃんが詩音のことを尊重してくれるのは私も嬉し

い。私と詩音は同じものだから。だけどね、やっぱり別なんだ。私と詩音とでは考え方が少し違うんだよ。だから、よく聞いてね。私の前なら、圭ちゃんの弱さをさらけ出しても良いんだよ。私は、圭ちゃんの全てを受け止めてあげるからさ」

「俺……」

「ねえ、圭ちゃん。私さ、つき合った最初の頃、怖くてたまらなかったんだよ」

……え？

「圭ちゃんにさ、嫌われるんじゃないかと思っただけでもビクビクしていた。何をやったら良いのか、どうしたら良いのかわからなくて……だからさ、その気持ちよくわかるよ」

俺が……魅音を嫌うわけじゃないか。

「その言葉、今の状況そっくり、そのままではまると思わないかな？

私だって、圭ちゃんの弱さや情けない部分を見て、嫌うわけが無いんだよ」

「魅音……」

「詩音の言った事は忘れてくれていいよ。」

あの子、自分の理想を圭ちゃんに押し付けているだけだからさ」

「……本当に、さらけ出して……良いのかよ？」

「私さ、思うんだ。恋人同士だけならカッコイイ所だけを見せれば良いと思うんだけど、夫婦になったらそれだけじゃすまないんだって。イチャイチャするだけじゃない、ケンカすることだってあるかもしれないし、対立だってあるかもしれない。でもね、自分の本当の弱い部分を見せてそれを支えていく、それが本当の夫婦なんじゃないかって……」

「……………」

「ま、半分はバツちゃんの受け売りだけどね。あははは！」

俺は顔をあげる。

視線の先には魅音は屈託の無い笑顔があった。

「情けない話を聞いて……ドン引きしても、俺……知らないからな……」

「ドン引きかあ……まあ、圭ちゃんが、スカートを頭からかぶるのは男の

ロマンだ！なんて言った時は、さすがにどうしようかと思っただけだし：あれで逆に、圭ちゃんはおじさんがいないとダメだって確信したからね！大丈夫、意外と何を言っても平気なもんだって！あはははは！」

ああ、なんて奴なんだお前は。

俺の一番柔らかい心の部分をしっかりとつかんで包み込んでくれるなんて。

これが俺の妻、園崎魅音なんだ。俺の最高の嫁なんだ。

「でも、嬉しいよ。」

圭ちゃんの心、こんなにしっかりと触れさせてくれるだなんて：

本当に、夫婦になった。って気持ちになった」

俺は急に恥ずかしくなつて視線を外す。

「なんかさ、恥ずかしいぜ…」

「そっか。ふふふ…じゃ、お相子だね？」

「え？お相子って？」

「圭ちゃんさ、気が付いて無かったかもしれないけど、何度もおじさんの心を触っていたんだよ？」

知らなかった。

俺ってそんなに無意識に魅音の心を触っていたのか。

：…そうだよ？だから、今日のはおかえし。

魅音はにっこりと笑い、俺の心にそう語り掛けてきた。

そして停留所の外に頭を向ける。

「雨、上がったみたいだね」

俺も顔をあげて外を見る。

空は晴れあがっていたが、しかし山の方ではまだ黒い雲が見える。

あれは雨雲で動きが流動的だ。

雨がもう一度ふるかどうかはわからない。

「圭ちゃん、傘もってる？」

おじさん忘れてきちゃってさ」

「…ああ、持っているぜ」

持って来たのは折り畳みの傘で小さい。

俺は立ち上がり、傘を開くが、やはり大きさに難がある。これで二人をカバーするのは難しそうだが。

「ククク…じゃあ、密着しないとだね！」

魅音は笑いながら俺の腕に抱き着く。

これって雨除けを理由にして甘えているだけだよな。

でも、うん。悪くないぜ、そういうの。

「初めての相合傘だね。

これぞロマン中のロマンってヤツじゃない？…ふえっ

俺は静かに微笑むと、

俺の腕に抱き着いている魅音の頭を優しく撫でた。

確かに魅音の言う通りだ。

心の通じ合った夫婦が一緒に傘をさして歩く。

これは間違いなくロマンだぜ。

「魅音、これからどこに行く？」

「どこでもいいよ。圭ちゃんと一緒にだったら、どこまでもついていくよ」

ああ、そうだよな。

俺達はどこまでも一緒に連れ添っていこうぜ。

それが夫婦ってもんだからな。

「14日目（水）：興宮詩音宅：夜：園崎詩音」

「お、お姉…その日中デートはどうだった？」

圭ちゃんのことだから、メロメロだったんじゃない？あははは！

私は震える手で受話器を取ると、

その向こうにいるお姉に媚びるように話しかけた。

「うん。圭ちゃんは、私の事、大好き、だからね」

お姉は言葉の節々を切り、低い声で返事をする。

…怖い。お姉が怖い。

「本当に、余計な事をしてくれたよ…」

おかげで圭ちゃんの考えを改めるのが大変だった」

「ち、違うのお姉、私は…！」

「…詩音、誰が話して良いって言った？」

…ヒッ

体が震える。お姉はまだ怒っている。

私と、圭ちゃんの電話の事を。

昨夜、家に遊びにきたお姉に録音を聞かせたら信じられないほど怒り狂った。

圭ちゃんが心の弱さを暴露した時に、私がそれを改めさせようとしたことを何よりも憎んでいた。

「圭ちゃんはヒーローなんです！だから、そんな弱気なことを言わないで胸をはって下さい！」

と言う私の声を聞いたときには17万もする機械を破壊する寸前までいった。

あの時の事を思い出すだけで、寒気がして胃が痛くなる。

——なんで、なんで…圭ちゃんが私に開きかけた心を閉じさせたのッ——

お姉はそう言って絶叫した。両目から涙を溢れさせて。

あんなお姉は、今まで一度も見えた事無かった。

お姉が、あれほどまでに激しい憎しみと怒りと…そして悲しみを、私にぶつけたのは生れて始めてかもしれない。

その凄まじい剣幕に、私は恐怖した。

恐怖して、その場で両手をついて謝った。

だけど、何度も何度も謝っても許してはもらえず、最後は雛見沢の本家まで行って土下座までした。それでもまだ、完全には許してはくれない。まだ怒っている。

「アンタが私と圭ちゃんの仲をとりもつてくれていたのは本当に嬉しいよ。それで随分助けられたと思う…でもね。圭ちゃんをアンタ好みに変えることまで許した覚えはないよ？」

地獄の底から響くような低い声。

冷たい汗が止まらない。額に、頬に、背中に…汗が流れ落ちる。

「もしかして…今までも、圭ちゃんに余計な事を吹き込んでいた？」  
ギクッ…!?

嘘をつく？無理！速攻でバレるにきまつている!?

視線が泳ぐ、目の前にお姉がいなかった事だけが幸いだ。  
おそらくこの顔を見ていたら詰められたに違いない。

「…どうしたの?」

「あ、あははは!結構頻繁に圭ちゃんにアドバイスをしていたから、  
その中に、少しはそういうのもあった、かも…」  
自分でも情けないほど語尾が小さくなる。

ふう…

お姉のため息が聞こえる。

「…ま、いいか。取り持ってくれるのは良いけど注意してよね」

「わ、わかっているって!お姉の最大の理解者は私なんですからね!」

「そう…信じているからね、詩音」

ダメだ。まだ言葉が冷たい。

どうしよう、どうすればよい?

答えの見えない問いに、頭がおかしくなりそう…!

「それでね。詩音、相談があるんだ」

「え?相談って…?」

「圭ちゃんにね。付きまとう虫がいたら教えて欲しいんだよね」

…えっと、それって浮気の調査をしろってこと?

「そこまですなくても良いよ。暇じゃないでしょ?」

ただ、目についたら教えて欲しいってこと。義郎おじさんとか親戚  
筋にも伝えてあるから」

ああ、そういうことか。

私の考えすぎか。

「あはははは。うん、わかったお姉!

でも、圭ちゃん、お姉にメロメロだから気にしなくてもいいんじゃないの?」

「…詩音、アンタ、

私が園崎家次期当主だとわかって、今の発言をしたの?」

…え?え?私、何か失言したの?

お姉の怒りに触れるようなことした!?

やだ、なに、お姉怖いよ!

「いい、詩音。よく覚えておいて、私の婿になるってことは園崎家当主の婿ってなるってことなんだ。つまり、それにちよつかいを出すってことは、園崎家に対する挑戦でもあるんだよ」

…え、あ…園崎家への挑戦？

「それを知って…いや、知らなくてもいい。それで圭ちゃんに手を出すってことは、園崎家に対する宣戦布告にとらえるべきなんだ。だって、そうでしょ？次期当主の婿を寝取られたなんて話があったら面目丸つぶれ、一族の沽券にかかわる事なんだ。これはね詩音…戦争なんだ！」

…お姉、それは本当に当主としての使命感からなの？

独占欲が暴走しているんじゃないの？

そんなことをして圭ちゃんを困っても意味が無いことなんだよ？

「でも、圭ちゃんは、お姉のことが…」

「圭ちゃん自身は関係無い。バカな相手が美人局やる可能性だってある。園崎家当主の婿には実権は無くても地位がある。それを目当てに近づく奴もいる。油断はできないんだよ」

…どうしよう？どうしたらよい？

確かに理屈は間違っていない気がする。

だとしたら、やっぱり、お姉の当主としての使命感からなの？

ああ、ダメだ。頭が真っ白で何も考えつかない！

「…理解できた詩音？」

「うん！もちろん。お姉の言うとおりにする！悪い虫は叩かないとね！」

…ゴメン、圭ちゃん。もう私の頭じゃ判別つかない。

でも、良いよね？お姉は圭ちゃんのことを愛しているから、

仮に独占欲だとしても、これぐらい束縛したって。

「そう、よかった…まあレナも圭ちゃんから離れたようだしね。当分は安心だね」

…え？レナちゃんが、圭ちゃんから離れた。

それってどういう意味？

「レナはさ、賢い子だよ。自分から身を引いたんだ。直接電話をして

聞いた話だと沙都子も、もう圭ちゃんには関わらないみたい。あとは梨花ちゃんだけけど、あの子も頭が良いからね。うっかりと圭ちゃんに手は出すということはないと思う」

「そ、そうか。あははは。お姉、圭ちゃん完全獲得おめでとです☆」  
私はつとに明るく振る舞う。

小学生の沙都子や梨花ちゃんにまで警戒しているのは、少し常軌を逸しているとは思うけれど、何事も無く終わるのであればそれでよい。

「ありがとう詩音、嬉しいよ。詩音が教えてくれたんだもんね…」  
圭ちゃんを繋ぎ止めるには、嫉妬の鬼になる事じゃなく、略奪鬼になることだって」

違う！違う！違う！

確かに、言った！でも、あれはお姉があまりにも、

内にこもっているから発破をかけただけで、化け物みたいになるために言ったわけじゃない！

ああ、でも…

ここでそれを否定したら、きっと私は…

「そうだ。あと一人、厄介な相手が残っているんだけど…それを片付けないとだね」

「厄介な相手…？そんな人がいるの？」

お姉に厄介と言われるなんて、相当な相手だ。

しかし、そんな人物が圭ちゃんの周りにいたのだろうか？

個人的にはレナが一番厄介だとは思うけれど、

先ほどの話だと既に競争レースが降りたみたいだし。

「ねえ、詩音に聞きたいんだけど…そういう手合いがいたら、どうしたら良いと思う？」

え？私に聞くの？なんか、らしくない。

そんなこと、聞かなくてもわかってているはずなのに。

「そりやお姉。まず話し合いだよね。お姉は婚約者なんだから理はこちらにあるんだろうし」

「それでダメな場合は？」



「仲介者を立てて第三者の話し合いを行う…かな？」

「そういう話を通じない相手はどうする？」

「そこまでいったら、もう行儀するしかないですよ。徹底的に戦う。これですよ！」

こんな話は別に聞かなくてもわかることだ。

でも、お姉はなぜこんなことを私に？

「そうだね。詩音はやっぱ私と考え方が同じだよ。嫌な、感じが、する。」

「お姉…その厄介な人って、誰？」

もし、手が必要なら、私、協力するよ？」

私は恐る恐る聞いてみる。

何か、お姉からおぞましいものを感じる。

その正体が何か、私は見極めなければならぬ。

「…その厄介者はね。私と同じものを好きになり、

私と同じものを愛して、私と同じ価値観を共有しているんだ」

…え？待って？

それって？え？え？

「でも、協力してくれるなら助かるよ。」

本気でやったら私も無事ですまないだろうしね？」

園崎魅音と園崎詩音は同じもの。

同じ物を好きになり、同じ物を愛し、同じ物を共有する。

…だとしたら、

お姉にとつて最大の敵は…あ、ああ…！

—— 詩音はやっぱ私と考え方が同じだよ ——

「いいよね？悟史くんは…あげたんだからさ？」

…あああ…ああ…アアアツツ!!!

全部、全部理解したツ!!何であんなにお姉が怒ったのかもツ！

なんで、私を許してくれないのかもツ!!!

そうだよ。なんで気が付かなかったの…！

お姉が怒り狂ったのは、ただ圭ちゃんにアドバイスをしたからじゃない。

自分と同じ容姿をし、同じ精神を有し、同じ魂を持つ私だから！  
逆に考えればわかったはずなのにッ！

悟史くんにお姉が手を下して今までと違う考え方に変えたのなら

…

私だって逆上した！当然だ！

自分と同じ姿見をした存在が、

愛する者を望まぬ姿に変えたのだからッ！

それがどれだけ許しがたく屈辱的な事か…

私なら即座に「お姉、敵対する気ッ！」

と叫んで、殴りかかっていたかもしれないッ！

そう、

許せるはずが無いッ！

ましてや、大石がちよつかいを出して、まだ何日もなっていない…

誰もよりも圭ちゃんとの絆が壊れることに過敏になっている時期

に！

私はなんということをしてしまったの！

少しでも考えればわかったはずなのに！！

100%の善意でやったこと？

ええ、そうでしょうとも、お姉の心を考えずに！

園崎詩音：あなたはバカなの！？

昔からそうだった、自分の事しか考えていない！

そう、これは相手の心を考えずに行った独善ッ！その結果がこれだ

！

そして、お姉は今、感情的になどなっていない。

極めて冷静に私を見ている。

私が敵対するかどうかを。

自分と前原圭一の絆を奪う存在なのかを！

「…ねえ詩音」

受話器からお姉の声が…

信じられないほど優しい声が聞こえてくる。

私はその声を聞いて即座に理解した。

これは、私に対する『最終通告』なのだ。  
「昔からさ、私、何でも分けあっていたよね？」

何かあれば、私は詩音と半分こしていたよね？  
詩音があまりにも可哀想だったから。

なんで私だけ優遇されるのかわからなかったから。

園崎魅音と園崎詩音は同じ存在なのに。

でもさ、圭ちゃんだけは…私に出来ないかな？

それ以外なら、全部…あげても良いよ詩音？

私の名も、園崎家当主の座も、なにもかも全部…」

いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！

！

いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい

！

いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい！いらぬい

！

そんなのいらぬい！！そんなのいらぬい！！！！

「私にはッ！悟史くんがいるからッ！！！！」

絶叫した。肺の中の全ての空気を絞り出して叫んだ。

激しく呼吸をする。息が乱れる。興奮してめまいがする。

「くくく…あははははは…アハハハハハハハハハハ！！！！」

受話器の向こうで、笑っている。

自分の知らない、何かがそこにいる。

そこにいるのはお姉じゃないの？

私の知っているお姉じゃないの？

そこにいるソレこそがお姉なの？

怖い、怖い、怖い。

恐怖で胃が引きつる。

冷や汗が止まらない。

でも、わかつている。それを生み出したのは

誰でも無い私なのだ。

笑い声が、止んだ。

「…詩音、私達、姉妹でよかったと本当に思うよ」

「…え、あ、うん…アハ、お姉、何をいつているんですか？当然じゃないですか！」

乾いた笑いで、お姉に追従する。

そんなことがあるわけもないに受話器の先から視線を感じる。

そんなことが、ありえるわけが無いのに。

「だから、さ…詩音…」

裏切ったら、嫌だよ？」

プツン…

ツ…ツ…ツ…

電話が、切れた。

私は受話器を置くと、まっすぐ洗面所に向かい  
胃の中のものが全てなくなるまで吐き出した。

第34話「15日目（木）A」記念写真」

「15日目（木）：前原屋敷：昼：前原圭一」

目が覚めた俺は、大きく体を伸ばした後にベッドから降りた。そう言えば、今日は親父とお袋は朝早くから出かけているんだっけ。

朝食の用意をしないと。

一階に降りようと階段までいったとき、

包丁で何かを刻む音が聞こえてきた。

タンタンタンタン：

あれ？お袋、まだ出かけていなかったのか？

台所を覗いてみると、そこには：

「あ、圭ちゃんおはよう！」

魅音がいた。

お袋がないことを知って、

俺のために、わざわざ朝早くから来てくれたのか。

嬉しいぜ魅音。

そのまま台所に入ると、まっすぐ魅音のところに向かって歩き、

後ろから優しく抱きしめた。

我ながら実に迷いが無いもんだ。

「おはよう魅音」

「わ、わ、わ…圭ちゃん、危ないって！」

戸惑っている魅音に、

構わず俺は頬ずりをする。

「ありがとな。朝は大変なのにさ、俺の為に来てくれてさ」

「あ、アハハ！いい、嫌だな圭ちゃん！どうってことないって！」

ほら、おじさんの家、お手伝いさんとかきいているし！アハハハハ！」

そんなわけがないだろう。

お手伝いさんが来ると言っても、朝はそれなりの準備をしなければならぬはずだ。

感謝しているぜ。

頭にキスをすると、すつと離れる。

後ろからでもわかるぐらい、魅音が赤くなっていた。

おっと、頭から蒸気が出ているみたいだ。

久しぶりに見る光景だな。

「け、圭ちゃん。お皿用意して、それとご飯もって！」

「おう、わかった」

朝は魅音特製のハムエッグだ。

ハムと目玉焼きのすばらしハーモニーが生み出す逸品。

香ばしくて実に美味しい。

「美味しい圭ちゃん？」

「うまいぜ！魅音も早く食べるよー」

朝食にがつつく俺の姿を見て魅音が微笑んでいる。

本当に嬉しそうだ。それを見ている俺まで嬉しくなっちゃうぜ。

「違うよ。圭ちゃんが嬉しそうに食べるから、おじさんは嬉しくなっちゃうんだ」

「じゃあさ、二人で一緒に嬉しくなっているってことだよな？」

「あははは、そだね！」

二人は同時に笑った。

本当に魅音と一緒に取る食事は楽しい。

結婚したら、いつもこんな感じで食事ができるんだろうか。

うん、きつとそうにちがいない。

根拠は無いが俺は確信しているぜ。

「今日のお弁当なんだけど、量が少なくてゴメンね圭ちゃん」

食事が終わると、魅音はピンク色の可愛いお弁当箱を二つさしだしてきた。

俺と魅音の分、ということだろう。学校ではどうせ皆でつつきあつて食べるんだから、

どちらが俺の分かは、あまり関係は無い。

「いや、全然かまわないぜ。重箱三段は確かに凄かったけどさ、作るのは大変だろ？」

弁当はこれぐらいで丁度よいと思うぞ。それに弁当箱もおそろい

だしさ」

「圭ちゃん…うん。ありがとう」

魅音の頭を撫で、弁当箱を二つカバンに入れると玄関に向かう。魅音に先に靴を履いて欲しいと頼まれたので、

玄関で靴を履いていると、魅音はおもむろに俺の方を向き、両手を前にそえておじきをした。

「それでは旦那様。いつてらっしやいませ」

うおっ!?なんだこれは!

もしかして、夫婦プレイか? いや、実際俺達は夫婦だけどき!

俺は一瞬戸惑ったが、魅音がそうくるのであれば、

乗らざるをえまい。なぜならば前原圭一は、園崎魅音の夫なのだ!

「う、うむ!今日は遅くなるかもしれないが…えーと、まっすぐ家に帰る」

下手くそか、俺?

それを聞くと、魅音は美しい所作で正座を行い、

三つ指をつけて頭を下げる。

「旦那様のお帰りを、お待ちしております」

魅音のその姿を見て全身がゾクゾクする。

昭和の男達は、自分の奥さんから、このように送られて行ったのか!?

羨ましいぞ、昭和の男子!

いや、俺も昭和の男子なだけどき!

ぴんぽーん。

チャイムが鳴った。レナが来たようだ。

ドアをあけると、レナの元気な声が飛び込んできた。

「圭くん、おはよー!あ、魅いちちゃんもいたんだ!魅いちちゃんもおはよー!」

「ああ、実は俺と魅音は同棲しているんだ。今日も朝食つくってくれたんだぜ?」

「ちよ!?圭ちゃん、何をいつているのさ!」

「あははは!そうなんだ。いいなー!いいなー!魅いちちゃんのお料

理、はう☆美味しいんだよ」

「うむ！今朝も、おれは堪能させてもらったぜ！実に美味であった！」

「ちよと！レナまで乗らないの！そこで夫婦漫才しないッ！」

「あははは！夫婦なのは、魅いちちゃんと、圭くんだよお☆」

「そうだけ魅音、設定忘れるなよな！あはははは！」

「うぎやー！お前達、覚えてろー!!!」

そう言つて、ふくれ顔した魅音だが、

俺がほつぺたに軽くキスをすると途端に機嫌をなおす。

うむ、ちよろいぜ魅音。

「そうだ。もう梨花ちゃんと沙都子には連絡してあるんだけど、

圭ちゃん、レナ、今日は結納披露のための試着と、結納披露時に配

るアルバムを製作するから

興宮の写真館まで一緒に来て欲しいんだ」

三人で学校へ向かう道すがら魅音は話をきりだした。

結納披露ということは俺の出席は当然だろうけれど、レナの予定は

大丈夫なのか？

「うん。2、3日前から、

開けて欲しいって魅いちちゃんからお願いされていたからレナは平

気だよ☆」

そりやそうか。

あらかじめ連絡があつて当然だ。

いきなり、今日言われて、今日来て欲しでは幾ら何でも無茶ぶりす

ぎるもんな。

しかし、結納披露で配るアルバムってなんだ？聞いた事もないぞ。

「おじさんと圭ちゃんが着飾った写真と、

子供の頃の写真を合わせて簡単なアルバム冊子を作るんだって」

「ちよつと待て…じゃあ、うちの両親が朝早く出かけたのも…」

「クククク…圭ちゃんの子供の頃の写真、おじさん、楽しみだよ」

くっそ、親父とお袋！なんでいっつも俺の事なのに、俺に黙って動

いているんだよ！

サプライズのつもりか？胃に穴が開きそうだぜ…



そんな俺の気苦労も知らず、レナは楽しそうに手を叩いている。

「楽しみだね！楽しみだね！きつと魅いちちゃん。お姫様のようになるんだね☆」

そんなレナの言葉に、

魅音は少し照れながら頭を搔く。

「ま、まあ、お姫様といっても純和風テイストのお姫になっちゃうけどね」

そうなのか。結納披露ってウエディングドレスとまではいかないけど、

てつきり、そういったドレス系統の服を着るのだとばかり思っていた。

「あく、雛見沢では古手神社で挙式をするのが基本だからね。

そうなるかと神前式で文金高島田の和装になるし、結納もそれに準じた形になっちゃうんだ」

「そういえば、魅いちちゃん。興宮にゲストハウスができたけど

そこでは挙式はしないの？」

俺はまだ行った事が無いが、興宮には園崎資本が入ったヨーロッパ風の大規模な貸切タイプのゲストハウスが作られたらしい。そこでは、教会風の結婚式も可能だと言うが。どうなんだろう。

レナの言葉に、

魅音は少し困った顔をしている。

「バッチちゃんが、伝統にこだわっているんだよね。仮にも雛見沢御三家の一つ、

園崎家の次期当主が古手神社で挙式をあげないでどうする！って感じで」

しかし、そうなると挙式後の披露宴はどうするんだ？

たしか、古手神社の中にある集会所でやることになると思うけど、魅音の結婚式ともなれば、結構な人数が来るはずだぞ。

「披露宴に関しては、古手神社で挙式した後には、

うちの方でやるから、そこは考慮しない感じかな？」

そうだった。魅音の家は大きいし、親族会議を行うための大広間も

設置されている。

なにも、普通の人のようにわざわざ集会所でやる必要は無い。だとすると、後は魅音の心持一つだよな。

そもそも魅音はどっちの式をあげたいんだ？

「じゃあさ、魅音。」

「お前自身は、和風か洋風、どっちの結婚式をあげたいんだ？」

「…大事なのはそこだろうか？」

「何気ない俺の一言に、魅音は大きく目を見開くと視線を落として小さく呟いた。」

「その、さ…圭ちゃんと…」

「結婚式挙げられるんならどっちでもいいよ」

「くっそ、なんだ魅音。可愛すぎかよ。」

「レナが見ていなければ今頃キスの嵐だぜ？」

「ほら、レナが興奮して、」

「可愛いモードに突入して俺達を見ているじゃないか。」

「み、み、魅いちちゃん可愛いよ！可愛いよ!!」

「きつと今日の試着でも、とつても可愛い魅いちちゃん、見れるんだろなあ☆はうく！」

「その言葉に魅音は照れまくっている。」

「どうやら、今日もレナが大満足の一日になりそうだぜ。」

「15日目（木）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

「学校が終わり、俺達は魅音の指示を受けて校内で迎えを待つことになった。」

「魅音の話によれば、詩音も来る予定だそうだが興宮に家があるため直接写真館に向かうらしい。」

「最初は部活メンバーだけ一緒に向かうのかと思ったら、どうやらクラスの皆も一緒に行くという話を聞いて少し驚いた。」

「病気などで出席できない数人を除いて、クラスの生徒達全員も一緒に写真に参加するそうだ。」

「教室で待機中していると、富田君と岡村君が何故か男泣きをしていて俺に語り掛けてきた。」

「圭一さん、本当に結婚するんですね！」

「頑張つて下さい！応援しています！」

俺はどう返事して良いかわからず「ありがとうな二人とも」と笑顔で答えて頭を撫でてやった。きつとこの二人も、素敵な伴侶にいつか巡り合えると思うぜ。

授業が終わり30分ぐらい過ぎたころ、一台のバスが学校に到着した。

既の中に何人か乗っている。どうやら魅音の親族の人達のようなようだ。梨花ちゃんが指さす方向を見ると、バスの中にはお魍のバアさんと公由の村長さんも乗っているのが見えた。

名前は良くわからないが綿流し実行委員会で見かけた顔も何人かいる。

公由の村長さんの後ろに座っているお年寄りには確か書記をやっていた人だ。

どうやら難見沢の重鎮も乗っているってことか。

バスの中から、俺の親父とお袋が出て校門の前にいる知恵先生と海江田校長先生と何か話をしている。

まさか、知恵先生はクラスの引率があるからわかるが、校長先生も来るのか？

どうやら来るみたいだ。

何度か頷いた校長先生はバスに乗り込んだ。

村中総出でのお祝い写真を撮る気なんだな。大ごとだぜ。

さすが魅音、御三家の次期当主様の結納つてところか。

自分のことながら、よくもまあ園崎家なんて大変な家に婿入りすることを決めたものだと関心する。

そんな感じで、まるで他人事のように窓から外を見ていた俺の肩を魅音が軽く叩く。

どうやら、俺達の番がきたようだ。

魅音がクラスの皆をまとめて誘導をはじめ。

「さ、圭ちゃん！みんな！バスに乗ろう！」

クラスの皆や部活メンバーの皆と一緒に教室から出ると、玄関口に

いた知恵先生と合流してバスに乗り込む。

俺と魅音は今日の主役と言う事でバスの前の席に乘せられた。

俺のすぐ横に魅音が座り、微笑みかけてくる。

真後ろに俺の親父とお袋が座っていないければ、いちやつきたい所だぜ。

もつとも興宮まではそう時間はかからない。

バスの中で会話らしい会話も無く、

魅音と手を握って微笑みあっているだけで、バスは目的地についた。

「15日目（木）：前原屋敷：夕方：前原圭一」

写真館前に到着したバスから降りると、

一組のカップルが目にとまった。

あれは、富竹さんと鷹野さんだ。

なんでこんなところにいるんだろうか。

幾ら俺達部活メンバーと仲が良いと言っても、

さすがに魅音が二人に知らせたとは思えない。

「富竹さん、鷹野さん！どうしたんですか？」

「あれ？圭一くんじゃないか。今日は団体行動かい？」

「こんにちは圭一くん。ジロウさんの撮った写真を、ここで現像してもらっているのよ。」

皆もいるみたいだし、出来た写真をみてみる？」

ただの偶然なのか。

でも、なんてタイミングで出会ったんだろう。

…そうだ。

せっかく、二人ともいるんだから、撮影会に来てもらおう。

俺が頼み込むと、富竹さんは困った顔をしていたが、鷹野さんは俄然乗り気だ。

「鬼の一族の結納衣装をまじかでみられるなんて、そうあるものじゃないわよジロウさん。」

お言葉に甘えましょう…うふふふ…」

なんとというか、鷹野さんは嫌いじゃないけれど、

この微妙に嫌な感じの言い回しはなんとかしてほしいぜ。  
バスの方から魅音が手をふってやってきた。  
俺を探しにきたんだな。

「あ、富竹のおじさま・鷹野さん、こんにちはわ！」

圭ちゃん、こつちこつち来て！」

魅音に手を引かれて写真館の中に入ると、俺達が当日着用する衣装が置いてある場所まで連れてこられた。

…うん。

なんか、衣装について専門家の人に小難しい事を色々言われたが、よくわからない。

俺の第一イメージは、お内裏様とお雛様だ。

五人囃子はいないようだが、そこは沙都子と梨花ちゃんとレナが補ってくれるだろう。

沙都子の五人囃子か。めちゃくちや似合わなそうだな。

「…圭一さん、今、ろくでもないことを考えておりませんでした？」  
すぐ横にいた沙都子が目を座らせて俺をにらみつけてきた。

なんだ沙都子、お前サイキックか？

というわけで用意された結納衣装に着替えるため、さっそく試着室に入る。

手慣れた手つきでスタッフに服を脱がされ、お内裏様の服を身に着けた。

思ったほどは重くは無いが、

軽いわけでは全くない。というか動きにくい。

試着室から出ると、お雛様になった魅音も出てきた。

俺の衣装よりも遥かに重そうだが、機敏に動いている感じがする。

しかし、お雛様になった魅音は、こう…

「どうしたの圭ちゃん？そんなにじつと見て…」

「いや、綺麗だな…て思ってたさ」

「あははは…もう、おじさん照れちゃうな！」

照れ隠しに笑う魅音の頭を、魅音の母親の茜さんが軽く叩く。

よく見ると、黒い服をきた魅音の家族がそろっている。魅音の父親

と学生服を着た詩音もいた。

親父とお袋も俺と魅音の服を見て色々話をしている。

両親から「似合っているわよ」と言われると、なんだか照れくさい。村の人達やクラスの皆からも囁し立てられる。

「それでは、二両家の皆さま、撮影を行います」

カメラマンに促されて、撮影場所に移動する。

一段目の中央左が俺、右が魅音。

左が俺の親族、親父とお袋。

右が魅音の親族、親父さんと茜さんと詩音。

二段目に沙都子などのクラスメイトの幼年組が並び、

三段目中央に、お魍の婆さん。

その右に公由村長さんと、あと園崎家の親族や村の重鎮連中。

その左に梨花ちゃん。そして知恵先生と校長先生、クラスの年長組のレナといった顔がならぶ。

たかだか結納式の写真に、こんな大きな写真撮影が必要なのか。

とは思ったものの、魅音に「圭ちゃん、結婚式になれば園崎家の親類縁者が総出で集まるから、もつと凄い事になるよ」と耳打ちされたら納得するしかなかった。

富竹さんと鷹野さんも入って欲しいと頼んだものの、

着ている服がラフすぎるといふ理由で、二人には断られた。

たしかに富竹さんのYシャツとズボンといういで立ちは。ラフにもほどがある。

「そうだ。なら富竹さん、

この後、俺達の仲間達だけで写真とりたいんで、その時一緒にどうですか？」

俺は富竹さんに断れると、とっさにそう答えた。

もちろん予定外の行動だけれども、やり取りを聞いていた部活メンバーの皆も嬉しそうに賛同してくれた。

なんだかんだいっても、皆は富竹さんが大好きなのだ。

富竹さんも苦笑いをして、それなら大丈夫だとOKしてくれた。

「それでは写真をとりますー」

カメラのフラッシュが三度あり、  
最後にもう一度フラッシュがたかれた。

撮影は無事に終了。

特に問題無く早々に終わった。

外が暗くなり始めたので、校長先生と知恵先生はクラスメイトの幼年組を引き連れて早々にバスで雛見沢まで帰っていった。

帰り際、知恵先生は目に涙を浮かべて「二人とも、これから色々あると思いますが頑張るのですよ」と固く手を握り締めてくれた。

まだ結婚式は先の話なだけだな。とは言え、その心遣いを無駄にするわけにもいけないので「ありがとうございます。俺達頑張ります」と力強く答えた。

親父たちはというと魅音の家族と話し込んでいる。

きつと大人同士の会話ってやつを存分に行っているんだろう。

聞き耳を立てていると、結納の段取り以外にも、

仕事関連の話もどうもチラホラ混じっているようだ。

まあ、親父がどんな悪だくみをしているのかは興味が無いが、

あまり魅音の家に迷惑をかけてないで欲しいぜ。

周囲の人達が散開すると、今度は俺達だけ…詩音を含めた部活のメンバーと富竹さんと鷹野さん…で写真を撮るために集まる。

富竹さんが自動シャッターで撮影しようとしていたら、写真館のスタッフが好意でシャッターを押してくれる事になった。

「それでは、皆さん。はい、チーズ」

カシャ…!

俺、魅音、レナ、梨花ちゃん、沙都子、詩音、

そして富竹さんと鷹野さん。

俺達だけの結納披露写真だ。

これは宝になるに違いない。

撮影が終わると、衣装を脱ぐためにすぐに試着室に向かう。

スタッフの人に手伝ってもらい、この動きにくいお内裏様衣装を外すが、脱ぐ時大変だ。

昔の人は、よくもこんな服で生活できたもんだよな。

日々の業務が大変じゃないか、これ？

試着室から出ると、部活のメンバーは休憩室にあるテーブルに集まっていた。

そこには、富竹さんが撮った写真が並べられている。

「圭ちゃんーこつち、こつちー！」

魅音が元気に手を振っている。

「というか、俺よりもめんどくさそうな衣装なのに、なんでそんなに早く脱いでこれるんだ？」

そんな疑問をよそに、魅音は俺の腕に抱き着き、

手に持っている一枚の写真を突き付けてきた。

それは、園崎本家でプロポーズをした時の写真だった。

月を背景に、俺と魅音が口づけをしている姿が写っている。

…綺麗だ。

恥ずかしさよりも、美しさの方に見とれてしまった。

魅音も気に入ったようで「富竹さんから貰ったんだよ！」と喜んでいる。

あの時は“なんてタイミングで写真をとるんだこの人は！”と憤慨したけれど、この写真の出来栄えを見ると撮ってもらって本当に良かったと思う。

写真を見てプロポーズした時の思い出がまざまざと脳裏によみがえる。

きつと魅音も同じ気持ちだったんだろう。

写真と俺の顔を交互に見ると、とても嬉しそうな表情をする。

俺は魅音に微笑みを返すと、富竹さんに頭を下げた。

「富竹さん、良い写真を撮ってくれて、本当にありがとうございます」  
「あははは。気に入ってくれたようで嬉しいよ。他にも写真があるんだ。もし、欲しい写真があったら、テーブルの上に置いたメモ帳に書いてくれれば焼き増しするよ。代金は気にしないで。これは僕からの結納祝いさ」

テーブルの周りにいる皆は、並べられた写真の見て騒いでいる。

沙都子や梨花ちゃん、それとレナや詩音に言われて、富竹さんはメ



毛帳に焼き増しする写真と枚数を書いていた。

魅音も、俺から離れて写真を見入っている。

「な、なんですのこれはー！こんな写真ハレンチですわ！」

「沙都子が監督に抱きしめられているのです☆嫌がっている姿が可愛いのです」

「あははは、こっちの写真はもつと面白いよ梨花ちゃん！」

「あ、おじさん、この写真好きだなーレナはどう思う？」

メンバーの華やかな声が響く。

俺も脇からテーブルを覗いてみる。

現像されているのは、どうやらわりと最近の写真ばかりのようだ。

その中に、先日行ったバーベキュー大会の写真を見つけた。

梨花ちゃんが、写っている。

：：：そういえば、あの話はどうなったんだらう？

心の整理がいたら、話すとか言っていたけど。

バーベキューが開かれた時、

梨花ちゃんは、富竹さんと鷹野さんの三人で話していた。

困惑する俺に梨花ちゃんは「整理が付いたら話をする」と言ってくれたが、

今だに話をしてくれていない。

：：：聞いてみるか。

「梨花ちゃん、ちよつと良いか？」

「みー☆なんですか圭一？」

俺は梨花ちゃんの手を引き、物陰に連れ込んだ。

梨花ちゃんが不思議そうな顔をして俺を見ている。

もしかして、聞くのも野暮なのかな？

とは思ったが、ここまで連れてきて何も無いというも変な話だ。

俺は意を決して話しかける。

「先日、バーベキュー大会で俺に『整理したら話す』って言っていたらろ？

結局、あれってなんだったんだ？」

「……………」

梨花ちゃんは押し黙ったまま答えようとしなない。

話したくないのだろうか。それならそれで構わないんだけど。

「もし、話したくないのなら話さなくてもいいけれどさ……」

「圭一、その……ボクは……」

一瞬、俺を見て口を開こうとしたが、また押し黙ってしまった。

「梨花ちゃん……？」

「……………」

梨花ちゃんは目を泳がせている。

まだ、考えがまとまっていけないのだろうか？

俺がもう一度声をかけようとした、その時、

背後から呼びかけられた。

「……圭ちゃん。何をしているの？」

……魅音？

逆光で顔がよく見えない。

魅音が体を揺らして、

ゆつくりと歩いてくる。

「梨花ちゃん……圭ちゃんと何を話していたの……？」

「……えっと、魅い」

梨花ちゃんがしどろもどろに答える。

魅音の声がやたらと低い。

どうしたんだ。怒っているのか。

いや、違うな。面倒見の良い魅音のことだ。

きつと梨花ちゃんを心配してそんな声質になったんだろう。

「どうしたの、梨花ちゃん……黙っていたら何もわからないよ。」

圭ちゃんと、なんで二人つきりになったの？」

「み、魅い……？」

梨花ちゃんの顔がこわばっている。

おい、おい、梨花ちゃんが怖がっているじゃないか。

心配だからって、そんな声を出すなよ。

少し度がすぎるぜ魅音。

「梨花ちゃん……ねえ、梨花ちゃん？答えてよ……」

私に言えないことなの…? ねえ…?」

魅音がゆつくりと、梨花ちゃんに手を伸ばす。

梨花ちゃんが戸惑って一步下がる。

俺も一瞬、考える。

どうする? どうした方がいい?

魅音をたしなめるべきか?

>>わああああああああ!!<<

その時だ、猛ダツシユで沙都子がやってきた。

「圭一さん! 私から梨花を奪う気ですの!」

はあ? 突然、何を言っているんだお前は!?

沙都子は梨花ちゃんをしつかりと抱きしめると唸り声をあげる。

何があつたのかと、レナと詩音がやって来る。

部活メンバーが集まったのを確認すると、おもむろに沙都子は声を上げた。

「レナさん! 聞いて下さいまし! 圭一さんが、私から梨花を奪おうと言っているのでございますわ!」

「え? 圭一君が梨花ちゃんを…? ど、どうということなんだろう? どういうことなんだろう?」

おいおい、

こんな突拍子も無い話を信じるな。

「あのな、俺がなんでお前から梨花ちゃんをとらなきやならないんだよ。」

俺には魅音がいるんだぜ? な、魅音?」

「え? あ、うん…: そうだね。アハハハ!」

魅音はぎこちなく笑っている。

というか、なんだそのわざとらしい笑い方は?

それでも沙都子は謎の警戒心を俺に向けてくる。

一体何なんだお前は? おかしな奴だな。

「それでは何で梨花を物陰まで引きずり込みましたの?」

「それは…梨花ちゃんが、その…相談があるとかなんとか…でさ…」  
今度は俺が口ごもる。そう言われると答えにくいな。

魅音も、なんか俺を怪しげな目で見ているし。

おいおい、勘弁してくれ。

俺が梨花ちゃんを口説くわけないだろう？

沙都子は俺と話すのは無駄だと思ったのだろう、

梨花ちゃんの方に振り返った。

「では、梨花はどうなんですの？」

「ボクと一緒にいたいのは沙都子だけなのです。圭一には1mmだって興味も無いのですよ☆にぱー」

こぼれるほどの素敵な笑顔で、梨花ちゃんは俺を全否定する。

…うむ。真正面から笑顔で拒絶されると、結構シヨックがあるな。

これが、クラスメイトの男子を次々と撃破した、難攻不落の梨花ちゃんの姿か。

なるほど、心が折られるわけだぜ。

梨花ちゃんの言葉を聞いてようやく安心したのか、沙都子が梨花ちゃんから離れた。

それを見ていた詩音が後ろでケタケタ笑っている。

「圭ちゃんはストライクゾーン広そうですからね。そりゃ沙都子にだって警戒されますよ」

…勝手に人のストライクゾーンを広げるんじゃないぞ！

梨花ちゃんも沙都子は可愛いとは思いますが、変な意味でそう思っているわけじゃないぞ！

「いっておくが詩音。確かに俺は小さな子…沙都子とか好きだが、それは妹キャラだからだ。男つてのは皆すべからず妹キャラがすきなんだよ！」

「えっ！梨花ではなく私が標的でしたの！いやー！ケダモノ!!!」

なんでそうなるんだよ！

思わず、チョップをくらわしてやろうと思った。華麗によけられた。

さらに追撃をするも、素早い動きで俺にふれさせない。

ムキになって俺が追いかけるが、沙都子が笑いながら逃げる。

その足の速さたるや、お前はトンビかネコか、それともタヌキか！

周囲の皆もゲラガラ笑いながらそれを見ている。くそ、悔しいっただらありやしない！

沙都子は思う存分俺をひっぱり回すと、

魅音の周囲を三週ほど回って目の前に立った。

沙都子はゆっくりと魅音に視線を向ける。

その視線が妙にイヤラシイのは何なんだ？

困惑してる魅音に沙都子は口端をあげた。

「聞いた通りですわ魅音さん。これで梨花に嫉妬する理由が…なくなりましたわよね？」

「え？うん、まあ…」

おいおい魅音、なんで、しどろもどろに答えているんだよ。

まさか、本気で嫉妬していたわけじゃないだろ？困った奴だぜ沙都子は。

俺は、ようやく沙都子に追いつくと後ろから頭を乱暴に撫でた。

「あのなあ、魅音が梨花ちゃんに嫉妬するわけないだろ？」

同世代のレナならともかく、お前らチビツ子なんて範疇の外の外だぜ。

梨花ちゃんが心配だから、ああいう声をだしていたんだ。なあ、魅音？」

「え、うん、アハハハ！梨花ちゃんがなんか深刻な顔していたからさ！」

レナが心配そうな顔をしている。

魅音の言葉を聞いて、初めて、梨花ちゃんの様子に気が付いたんだろう。

梨花ちゃんの元に向かうと、しゃがんで視線を合わせる。

「梨花ちゃん、どうしたのかな？何か、心配事があるのかな？」  
「…みー」

梨花ちゃんはレナの視線から目を背けた。

一体なんなんだろう？言いたく無ければそれも良い。

だけど、そういうわけでもないらしい。

言いたいけれど、言えない。そんな感じだ。

「圭一、魅い、レナ、沙都子、詩い…ごめんなのです。まだ、上手く説明できないのです。」

一晩、ううん。二晩だけ待って欲しいのです」

俺もレナと横でしゃがむと、梨花ちゃんの頭を軽く撫でる。

「…いいぜ、幾らでも待つ。言いたくなったら言ってくれ」

「圭一は、ボクを助けてくれますか?」

当たり前じゃないか。仲間を助けない奴がどこの世界にいる?」

魅音と詩音も前に出た。

「梨花ちゃん。問題がある時は皆で話会った方が解決できる。」

内にため込むのは良くないよ」

「梨花ちゃん。話すと楽になりますよ!手伝えるかどうかはわかりませんが、

とりあえず話してみてください」

レナもニツコリと笑って梨花ちゃんの手を取る。

「レナも皆も、梨花ちゃんの仲間だよ」

そして最後に、梨花ちゃんの後ろから沙都子が抱きつく。

「心配ありませんわ。私達ならあらゆる困難を乗り越えて、必ず幸せな結末にたどりつけましてよ」

梨花ちゃんは、少し涙ぐんでいるようだった。

俺が優しく頭を撫でると、何度も頭も下げて「ありがとう」と呟く。

梨花ちゃんの身に何が起きているのかはわからない。

だけでも、どんな状況であっても俺達は救ってみせる。

「約束だぜ。梨花ちゃん」

決意を新たにしたら、そんな俺達を見て、

富竹さんと鷹野さんは遠くから優しく微笑んでいた。

第35話「15日目（木） B 「園崎家逗留」

「15日目（木）：園崎本家：夜：前原圭一」

夕方になり、バスに乗って俺達は帰って来た。

バスは雛見沢を回り、一軒ずつ乗客を降ろしていく、俺はバスの中で懨然としていた。

結納披露用の冊子制作のために、親父たちがもってきた俺の子供の頃のアルバムで部活メンバーは大いに盛り上がった。

大いに盛り上がったと言うのはつまり、俺がとても恥ずかしい思いをしたということだ。

まったくあいつらときたら：沙都子と梨花ちゃんなんて現在進行形でちびっ子のくせに、子供の頃の俺にちゃちゃをいれるしさ。

隣の席に座っていた魅音は

ニヤニヤしながら俺の腕を取る。

「いやあく、圭ちゃんの小さい頃の写真、可愛かったね。」

レナじゃなくても、お持ち帰りしたくなっちゃったよ」

「ちえ、なんだよ。お前の子供の頃なんて、わんぱくじゃないか」

「そりゃ、おじさんが圭ちゃんの子供の時は、ダム闘争の真っ最中だったからね」

子供の時分ってなんだよ。わけがわかんねえよ。

俺がへそを曲げていると、魅音は優しい笑顔を近づけてくる。

「ごめん、圭ちゃん。ちょっと…からかい過ぎたね」

…ちゅっ

そのまま俺の頬にキスをする

「しょ、しょーがねえーな。許してやるよ」

そしてこれだけで、もう魅音を許してやろうという気になる。

なんだよ、俺もちよろいじゃないか。魅音を笑えないぜ。

バスが園崎本家の前で止まり、

魅音が颯爽とバスを降りる。

「圭ちゃん、それじゃ食事とお風呂の用意をして待っているから」

俺は軽く手を振って見送る。

今夜は、俺の親父とお袋と、そして魅音の家族：お魎バアさんや茜さん達と…が、何やら色々話をするところがあるということなので帰れないらしい。

残された俺達二人の夕飯はどうするのかという話になるが、魅音が「圭ちゃんのお夕飯はおじさんが用意するよ。だから今晚はウチに泊って」と提案してきた。

無論、俺は拒否する理由もないし、両親もすっかり懐柔されているので、むしろ喜んだぐらいだ。

自宅前に降ろされた俺は、明日の学校の授業で使う教材と着替えを用意する。

前回泊った時も来客用の寝巻用の浴衣が用意されていたので、パジャマは必要ないだろう。

逸る心を抑えて家を出ると、まっすぐ園崎本家へ向かう。

入り口のチャイムを鳴らすと1秒もかからず魅音が扉を開けてきた。

まさか、お前、ずっと入り口で待っていたわけじゃないだろうな？

「アハハハ、そんなわけないじゃん。さ、あがってあがって」

魅音の誘導に従って玄関口に来ると、魅音が玄関に上がりくるり振り向いて、正座をした。

「おかえりなさいませ。旦那様。

お食事になさいますか？それとも、お風呂にいたしますか？」

うおおお!!!

ここでも夫婦プレイをするのか、魅音!!!

その台詞は、夫ならば妻に言われたいロマン台詞一位じゃないか！

いや、一位というのは、今かつてに決めた事なんだが！

俺は姿勢を正して答える。

「ただいま魅音。

それじゃ、食事にしようか」

「はい。ただ今、ご用意いたします」

三つ指をついて、深々と頭を下げると、立ち上がる魅音。

俺は、その手首を掴む。



「ん？どうしたの圭ちゃん？やっぱりお風呂にする？」

「いや、その、食事とはいったんだけどさ。本当に欲しいのはさ…」

…魅音なんだ。

口には出せず俺は照れた。

『お前が、欲しい』とはちよつと言わずらい。

俺の顔を見た魅音は、即座に何が言いたいのかわかったのか、ニヤリと笑って両手を大きく広げた。

「クククク…そういえば、おじさん、選択肢に

わ・た・し…を入れ忘れていたねえ。はい、圭ちゃん！」

クソ、魅音め。攻めるモードに入っていやがるな。

悔しいが。欲しいのは確かだ。

俺は素直に魅音を抱きしめてキスをする。

魅音成分が欲しかったので少し長めのディープキス。

唇を外すと、魅音が上目遣いで俺を見た。

「本当、圭ちゃんはやい。

おじさんのこと、大好きだよね」

…んな事、当たり前じゃねえか。

俺は返事の代わりに、

もう一度魅音の唇にキスをする。

家上がった俺は、いつものように客間へと入る。

すでにベッドが置かれており、枕が二つ置いてある。

これだけで、魅音のやる気は十分伝わるってもんだ。

ベッドの脇には籠が置いて有り、中に甚兵衛羽織…甚平が置いてある。

前に来た時は浴衣だったよな。と思いつつ来てみると驚いた事に、これがピツタリのサイズだ。

魅音、いつのまに俺の服のサイズを知ったんだ？

そういえば前に「夫婦にプライベートなど無い！」と言い切っていたのを思い出した。

大方、朝早く来た時にでも俺の服を漁ったんだろう。

「圭ちゃん、着替え終わった？ご飯の用意できたよ」

襖をあけて、魅音が入ってくる。

その姿を見て俺は驚いた。

エプロンをつけているようだが、中は素肌？

まさか裸エプロンなのか!?

魅音はニヤリと笑う。

「どう、圭ちゃん、男のロマンでしょ？嬉しい？」

…いや、よく見るとなんか違うぞ。

確かに一見すると裸にエプロンなのだけど、これは。

「魅音、ちよつと後ろを向いてくれないか？」

「うしろ？…いいよ」

くるりと、後ろを向く魅音を見て確信した。

魅音の奴、前と後ろにエプロンをつけてやがる！

これではワンピースを着ているのとかわからないじゃないか!!!  
ちがうのだ！

裸エプロンっていうのは、裸の体の前面にのみエプロンをつけることに意義があるんだよ！

前にエプロン、後ろが裸、そこに生れるフェチズムにこそ価値が生まれるんだ！

ああ…だが、勇気をもって素裸にエプロンをつけて来てくれた魅音に、それを言えるだろうか？

いや、無理だ！少なくとも俺には言えない！

むしろ、解釈が間違っていたとしても裸エプロンをやってくれた事を、

涙で堪えて称えるべきなのだ！

「…あ、ありがとうな魅音」

「あ、いや…そんな泣くほど嬉しかったわけ？」

なんだか、魅音がドン引きしている。

まさか、この涙が悔し涙だとは思えない。

「ところで…俺来ている甚平、サイズぴったりだよな」

「クククク…圭ちゃんのこと、おじさんが知らないことは無いよ」

「…ちゃんと、返せよ俺の服」

「へっ…!?あ、アハハハ、Yシャツだけは返しておくよ!」  
だけって何だ。ちゃんと全部返せ。

というか、そんなに俺の服を持って行っていたのかよ。

「そういえばさ魅音。前に夫婦間にプライバシーって無い!とか言っていたよな?」

「あく言ったような言わないような。まあ、勝手に服を持っていたのは謝るよ」

「いや、そうじゃなくて…そろそろ魅音の部屋を見せてもらえないかと思っただけ」

「お、お、おじさんの部屋あ!?!」

おいおい、なんでそこで顔を真っ赤にしているんだ。

もう俺達は随分と恥ずかしい事をしあっている仲だろ?

てか、部屋を見せるより、裸エプロンの方がよっぽど恥ずかしくないか?」

「お、おじさんの部屋なんて、何も無いよ!」

圭ちゃん、気になるようなものなんて無いって!」

気になるといえば、前に玩具屋で魅音にプレゼントした人形だよな。

何度もこの家に来ているが、そういえば見た事無い。

だとするなら、やっぱり部屋にあるんじゃないか?

「なあ、前に玩具屋であげた人形んだけど、あれってやっぱり部屋に…」

「うあああ!け、圭ちゃん!ご飯たべよ!冷えるよ、ご飯冷えるとマズくなるから!」

それ以上、なにか言われるのが嫌なのか、

食事が用意されてい居間まで無言で俺の背中を押していく。

全く、人の部屋にはガンガン入るくせに、

自分の部屋は見せる見せないで大げさに騒ぐ奴だな。

居間に入ると二人分の食事が用意されていた。

テーブルに置かれているのは、焼き魚とすりおろし大根、みそ汁とご飯。

お惣菜が二品。一汁三菜の基本的に忠実な和食だ。

「おお、美味そうだな」

「あははは。ご飯はいっぱい炊いてあるから、好きなだけ食べて」  
テーブルを挟んで向かい合わせで席につくと、

俺は遠慮なく食事を頂く。

魅音の作る食事は実に美味しい。

何度でも言うからな。実に美味しい！

「そういえば、魅音と結婚すると和食がやっぱり中心になるのか？」

「ん〜バッチャもいるしね。もちろん洋食も作れるから安心して」

そうか。お魎のバアさんもいるんだよな。

そうなれば、この家で三人ぐらしすることになるのか。

そうすると、バアさんに気を使わなきゃいけないよな。

文字通り大きな家に婿養子に入るんだから仕方がないけどさ。

毎日あのバアさんの顔をうかがいながら生活するってのは、

こりや大変だぜ。

これが婿養子の悲哀ってやつか。

…いや、まだ先の話だけだよ。

「どうしたの圭ちゃん？」

「いや、俺が婿養子にはいつたらさ、ここに住むことになるのかな。つて」

「アハハハハ…うん。そうだね」

魅音は顔は赤くしているが、今、そんなに恥ずかしい事を言ったっけ？

う〜ん。わからないぜ。

どうも、無自覚で恥ずかしい事を言う癖があるみたいだからな。俺は。

しかし、この家は本当に大きいよな。

うちも“前園屋敷”といわれるぐらい大きいけれど、高さならともかく敷地面積では比較になんてならないぜ。

まあ、園崎家は名家なんだから大きくて当たり前なんだろうけどさ。

そこまで考えてふと、頭にあることが思い浮かんだ。

今まで誰も指摘しなかったし、俺も気にしたこと無かったが。

魅音って、そう言えば許嫁とかっていなかったのか？

「なあ魅音。お前ってさ、子供の頃に結婚を約束した婚約者とかっていなかったのか？」

「はあ？何それ？許嫁ってヤツ？アハハハハ、いるわけないじゃん

もし、いたとしたら、圭ちゃんと結納が決まった時、相当に揉めたよそれ」

そりやそうだ。

もし、婚約相手がいたとしたら、かなり面倒な事になっていたに違いない。

「なに、圭ちゃん。もしかして、おじさんに男の人がいたらって…そう思ってたわけ？」

魅音がニヤニヤしながら俺を見る。

そう言われると、俺もなんだか体裁が悪い。

「いや、その…そういうわけじゃないんだけどさ」

恥ずかしくなって視線を落とす俺の頬に、

魅音は軽くキスをした。

「大丈夫、おじさんはさ。圭ちゃん一筋だよ」

ちくしよう。嬉しい事を言ってくれるじゃねえか。

俺だって、魅音、お前一筋だぜ。

「でも、圭ちゃんは本当に幸運だと思うよ。

1歳年上の女房は金のわらじを履いてでも探せっていうけど、

それを、おじさんが叶えてあげるんだから。感謝してほしいよね」

それは自分で言う台詞じゃないだろう。

まあ、否定はしないけれどさ。

「そうだな。俺には過ぎた女房だぜ。ありがとうな俺と結婚してくれて」

「ククク…圭ちゃんがそう言ってくれる限りさ、おじさんはずっと尽くしてあげるよ」

テーブル越しに俺と魅音はキスをする。

距離があるために、深いキスというわけにはいかなかったが十分だ。

ちなみに、そのキス味は醤油の味がした。

食事も終わり、俺はテレビを見ている。

魅音はお風呂を沸き具合を見てくると言っ出て行いった。

テレビではお笑い番組をやっているけれど、頭に入ってこない。

魅音が、お風呂に入っってくるかどうか。それだけで頭がいっぱいだ。

「圭ちゃん、お風呂湧いたよ」

魅音の声が聞こえてきた。

心臓の音が高鳴る。おいおい、期待しすぎるなよ？

現実はそのなにに美味しい話なんて、そうはないんだからな。

そうは言っても、期待している自分の心は無視できないんだけどさ。

「15日目（木）：園崎本家お風呂場：夜：前原圭一」

かぼーん。

お風呂にはいると、まずこの音が鳴る。

この音は何なのかはよくわからない。

長々と考察はできるが、今はどうでもいい。

大切なのは、俺がお風呂場に入った時に魅音が

「おじさんも入るから、待っててね圭ちゃん」

と言ってきた事だ。

お風呂場においてある椅子に座っ、魅音を待つ。

湯ぶねから温かい湯気が出ているので、寒くは無い。

が、心拍数が異常に高まる。

ドクドクドクドク：

おちつけ俺：

どうせ前回みたいにな着をつけているに決まっっているだろ。

だから、なにも問題無い。

心頭を滅却すれば火もまた涼し：

そう、気持ちを落ち着ければ良いんだ。

そして、落ち着いた俺は気が付いた…真っ裸だ。  
おおい!!! 魅音が入ってくるのに裸じゃないか!!  
なぜだ!?なぜ入る前に気が付かない!  
水着はなくとも、

腰にタオルを巻きつけると色々できるだろ!

「圭ちゃん、入るよー」

ま、待って魅音ツ!!!

腰にタオルを巻かないとツ!

ガラガラガラ…

慌てて腰回りにタオルを置き、

入って来た魅音を凝視した。

お風呂場に入って来た魅音は前回同様タオルを巻いている。

いや、少し違う。前回は軽く取れそうな感じだったが、今回はしっかりとタオルを巻いているのだ。

「魅音、その…タオルの下は…?」

聞いてから、随分下世話なことを聞いた事に気が付いたが、もう遅い。

しかし、魅音は気を悪くした様子もなく、カラカラ笑って答えた。

「下は裸だから、しっかりタオル巻いてきたよ。」

今日はちゃんと体を洗おうと思ってさ」

お、オイ!?!裸って…

顔が引きつっているのが自分でもわかる。

だが、魅音は気にもしていない風に、俺に近づくとスポンジを手に取った。

「圭ちゃん。体はもう洗った?」

「え、いや…まだ…」

「じゃさ、おじさん洗ってあげるね」

そう言う座ったままの俺の背中をスポンジで洗い始める。

俺は立つこともできず、言われるままに体を洗われる。

というか自分でどうしたら良いのかわからない。

つまり、膠着状態だ。

どうするべきか迷っていると、スポンジを目の前に出された。

「圭ちゃん、前は自分で洗ってよね。おじさん、さすがにそこまでやれないからさ」

そう言って、魅音は少し恥じらいを見せる。

前はポークウインナー見せろとか何とか言っていたくせに、やっぱり恥ずかしいのか。

もつとも、俺自身、前なんて洗われたら、恥ずかしくて死んじゃうけどさ。

背中を魅音に洗われ、前を自分で洗う。

なんだか不思議な感覚だ。

背中を洗い終わったのか、魅音が「圭ちゃんいくよ」と

湯ぶねのお湯で俺の体を流し始める。

一回、二回、三回…

流し終わったかと、思ったら、丸くて暖かいものが俺の背中に…って、胸を押し付けているのか魅音!?

「お、おい…魅…」

「はあく圭ちゃんの背中ってさ、大きいよね…」

声をかけようとしたら、魅音が俺の背中に全身を乗つけてきた。

一体何なんだこれ？誘惑しているわけじゃないのか？

もしかして、甘えているだけか？

「……………」

「こうしているときさ…なんだか幸せな気分だよ」

どうしたもんか。

やはり、ここは胸を貸すぐらいの度量は必要だろうな、うん。

いや、正確には背中だろうけど。

しばらく、そのまま背中を魅音に貸すことにしたのは良かったが、

魅音は俺の背中がすっかり気に入ったのか離れようとしなない。

こまった。

それは想定外だ。しばらく放っておけば離れると思ったのに。

…仕方ない。こつちから仕掛けるか。

「み、魅音…」



「なに、圭ちゃん？」

「俺も背中、流してやろうか…？」

「え…？」

魅音の体がぴくりと動いた。

そんなに驚くような事か？背中を流すぐらい大丈夫だろう？

さすがに前を洗わせろ。なんていったら、正気を疑われるかもしれないだろうけどさ。

「……………」

魅音はよほど恥ずかしいのか返事をしない。

もう一度、声をかけるべきか考えていると、俺の耳元まで顔を近づけて魅音が囁いた。

「…うん。圭ちゃんなら、いいよ」

ドクン…

俺の心音が大きく鳴る。

落ち着け俺。

女の子の裸にスポンジをかけるだなんて、そんな経験あるもんじゃない。

だから、多少、緊張するのも当たり前、ある意味、これは誤差の範囲内だ。

「じゃあさ、場所、変わろうぜ！」

気恥ずかしさを悟られないように、元気よく、場所を交代する。

何も問題ないさ。ただ背中をスポンジで洗うだけだ。

…そう思ったのが、甘かった。

椅子に座った魅音はゆつくりとタオルを脱いで、上半身をさらけ出した。

そして、俺の目に飛び込んできた。

鬼の、刺青が。

——圭ちゃんなら、いいよ——

その言葉の重みを俺は全く知らずに受け流したことを後悔した。

そして、魅音の背中に鬼の刺青があるのを忘れて背中を流そうと言った俺のバカさ加減を呪った。

おそらく、俺が気軽にいったソレは、

魅音にとつて、相当重要な意味をもっていたのではないだろうか？  
だが、ここで俺が謝ったりすれば、逆に魅音は傷つくに違いない。  
いいよ。と言ってくれたのだから、俺はスポンジで魅音の背中を洗  
うべきなんだ。

「…いいのか、魅音？」

「うん、圭ちゃん。お願い…」

それでも、聞いてしまう俺は相当な根性なしだよな。

俺はゆつくりと丁寧に魅音の背中をスポンジで洗う。

この背中の中の鬼の刺青に触れることにどれだけの意味が込められて  
いるのかはわからない。

ただ粗略に扱うわけにはいかないということは俺でもわかった。

だから、丁寧に、丁寧に、スポンジでこすってみたんだが…

「あはははは…」

「なんだ？くすぐったかったか？」

「ううん。圭ちゃんがさ、すつごく優しく洗ってくれるから、さ…あは  
はは…」

なんだろう。魅音の考えていることがよくわからない。

ただ、喜んでいるのは確かかなようだ。

背中をスポンジで洗い終わると、先ほどと同じように湯ぶねのお湯  
で魅音の体を洗い流す。

魅音は再びタオルで上半身を隠すと、俺の方を振り返った。

「じゃさ、湯船につかろうか？」

「おう」

俺が最初に湯ぶねに入り、次に魅音が入ってくる。

形としては、俺が魅音を背中から抱きかかえるような感じだ。

魅音は全体重を俺にかけてくる。

お湯のおかげでそれほど重さは感じないが、そこそこ大変だ。

魅音は鼻歌をしている。

かなりごきげんな様子だな。

「ありがとう、圭ちゃん。」

やっぱりさ、おじさんの背中を預けられるのは、圭ちゃんだけだよ」男にとって背中を預けると言うのは重い意味を持つ。

と、俺は思っている。

闘う男にとって背中が弱点。

それを守らせると言うのは相手に命を預けるのと同じ意味を持つ。

：マンガの受け売りだけど。

だとしたら鬼の刺青を背負う魅音の場合は、どうなんだろうか？

その刺青はファッションでも、流行で入れたものでは無く、

伝統と格式によつて彫られたものだ。

おそらくそれは、男が背中を任せる同等以上の意味があるんじゃないだろうか。

魅音の気持ち全部がわかるわけではないけれど、おそらくそれは間違っていないはずだ。

俺は右手で魅音の頭を撫でる。

「当たり前だろ、俺はお前の夫だぜ？」

そして格好をつけて返す。

今回は歯を光らせるエフェクトは無しだ。

それでも、効果は十分なようだった。

魅音はうっとりとした顔で俺を見ると、顔を俺の首元に向けてしなだれる。

俺は右手で、魅音の頭を、左手で、魅音の左肩を支える。

魅音との素晴らしい抱擁の時だ。

「今日も月が綺麗な夜だよな。ずっとこのまま見ていたいぜ…」

「うん。そうだね。圭ちゃんと見る月なら、ずっと…」

残念ながら、お風呂場の窓から見える月は少し雲に隠れていてよくは見えない。

だが、俺の中では月は光輝いている。それは、おそらく魅音も一緒だろう。

しばらくそのままの体勢でいたけれど、

少し長くつかりすぎたのか、頭がぼおっとしてきた。

このまま続けたいのに残念だぜ、

体の方がタイムアウトのようだ。  
だが、この後もまだまだ時間はあるさ。  
それを楽しみにしようとするか。

「魅音、俺はあがるぜ」

「うん、わかった。先にあがって、後から行くから」

魅音から離れて湯ぶねからあがる。

二人同時にあがるというのは、まだ俺達にとってはハードルが高い。

だから、どちらかが先に上がると言うのは正しい選択だ。

脱衣所で体を拭いて甚平をきると、お風呂場にいる魅音に声をかける。

「それじゃ、客間でまってるぜ」

「…うん。待ってて」

声が少し、うわずっているようだけど、大丈夫か？

まさかのぼせているんじゃないだろうな。

あまり遅くなるようなら、一度戻ってきた方がよさそうだ。

「15日目（木）：園崎本家客間：夜：前原圭一」

客間にあるベッド一つに、枕二つ。

それを見て、俺は落ち着かない。

本格的なお泊まりといっても二回目なのだから、もう少しは余裕が

あると思ったが、意外に心理的余裕が無い。

そわそわしてしまい、特に意味もなく右往左往してしまう。

いやいや、落ち着け。

ここはしっかりと腰を落ち着けて待つ。

それが重要じゃないか。うん。

「失礼します…」

「襖があいた。魅音だ！

俺はとっさに振り返る。来たんだ！

「圭ちゃん…」

魅音は上気した顔で、熱く息を吐いている。

髪をおろして少し浴衣を着崩している。

おいおい、最初からフルスロツトルなのかよ！

魅音、お前やる気満々だな!?

魅音は、俺の目の前までやってくると、

そのまま俺の胸の中に倒れ込む。

「み、魅音…?」

「圭ちゃん…私…」

これは、一気にいくパターンだ…!

魅音が、濡れた目と唇で俺を見上げる。

体から熱い湯気が出て、顔も上気している。

一目見て、わかった。

これで攻められたら抵抗できない!

親父、お袋…俺、今日、さなぎから蝶になりますツ!

…ガクツ

え?ガクって?なに?

「圭ちゃん、私、のぼせちゃったあ〜」

え?えええええ!?

「お、おい、大丈夫か魅音?」

「ゴメン、圭ちゃん…大丈夫じゃない…」

おい、おい。その格好は俺を誘惑していたんじゃなく、

単にお風呂でのぼせていただけなのかよ!

とにかく、魅音を布団に横に寝かせると、

俺は台所へ向かい濡れたタオルを用意して魅音の頭に乗せて、

部屋にあった団扇を仰いで、風を起こす。

扇風機があれば一番良かったんだけど、見つからない。

どこか別の場所にあるのか、それとも魅音の家には無いのかはわからない。

「ありがとう、圭ちゃん〜」

「一体何だって、ノボせるまでお風呂に入っていたんだ」

「う〜圭ちゃんが上気した姿が好きだからさ、おじさん頑張りすぎちゃって…」

おいおい、なんだ。

「健気可愛いかよ魅音。」

文字通り、熱にうなされた魅音は体を乱雑に動かす。

そのせいが浴衣が乱れて、胸元がはだけ、ふとももが露出している。

：と、書けば少しはセクシーに聞こえなくも無いが、どっちかといえど沙都子が腹をだして寝ているのと変わりが無い。きちんと魅音の着崩れを直してベッドに入れる。

「ごめんね圭ちゃん…せっかく泊りに来てくれたのに…」

「ははは、いいよ。こうして魅音と一緒にいられるのが一番なんだから？」

俺はそういつて魅音の頭を撫でる。

魅音は少し恥ずかしそうに顔をあげると、両手を布団から出して、手を伸ばしてきた。

：ははん。これは抱きしめて欲しいってことだな？

仕方がない奴だぜ。

俺は上から覆いかぶさるように抱きしめた。

魅音の体は春の陽気のように温かく、お風呂上がりの良い匂いがする。

声をかけようとしたら、軽い寝いびきが聞こえてきた。

寝ているのか？

全く仕方がない奴だ。

起きないように、しばらくこのままでいるとするか。

抱きしめているこっちまで眠くなってくるが頑張ろう。

夜の帳は、まだ閉じたばかりだ。

「15日目（木）：園崎本家客間：深夜：前原圭一」  
なんてこつたい。

こんなことは考えてもいなかった。

魅音が、俺を一向に放そうとしない。

凄い力で抱きしめ続けている。

最初は、しばらくすれば離すと思っていたが、

一時間たち、二時間たち、三時間たったあたりから、さすがに危機感を感じ始めた。

時計を見ると、午前2時！

さすがに俺も眠い！そしてトイレに行きたい！

このまま寝て良いものなら寝たいんだが、

俺の体重を魅音の上に乗せたまま寝たらどうなるんだ？

よくわからんが、きつと大変な事になる。

横向きになれば何とかかなりそうだが、

しつかり魅音が掴んで離さないのもそれもできない。

いや、それよりも何よりもトイレに行きたい！

このままだと漏れる！

なので、頑張つて離れないといけない。

まず両手を魅音の体から外す…起こさないように…

「ん…んん…」

よし、問題無い。

次に、俺の抱きしめている魅音の手を外すために、体を動かす。

…ダメだ。しつかり固定されていてやがる。

やはり、俺の手を回し、直接指を一本ずつ外していく必要があるな。

右手を後ろに回して、魅音の指を一本一本外していく…

固い。そして中々外れない。

しかし、俺もトイレに行きたいがために奮闘する。

人差し指、中指、薬指、小指…よし、外れる。

「んん…」

ガバツ！

ぐああ、せつかく外したのに、また掴まれた！

外そうとすると掴んでくるのか…？

クソ、もう一度チャレンジしないと…

このままだと、明日は睡眠不足で死ぬぞ？

人差し指、中指、薬指、小指…よし、外れた！

もう片方の手も…！できた！これで離れる！

「ん…んん…」

ガサガサ…

ようやく解放されたぜ。

でも、なんだ、魅音の手が動いているぞ？

何かを探しているのか？もしかして、俺を？

「圭ちゃん…どこ？圭ちゃん…」

おいおい、なんだよ。無意識に俺を探しているのか？  
思わず俺は魅音を抱きしめてしまう。

「ここにいて魅音？」

「えへへ…圭ちゃん…」

魅音は幸せそうな顔をして、また寝いびきをたてた。

おいおいおい…

どうするんだこれ？

もしかして、俺がいなくなると、自動で追尾してくるのか？

このままだと、さすがにヤバイ！

妻の実家で、おもらしなんて御免だぞ！

考える…考えるんだ！

まず、トイレの場所だ、廊下に出てまっすぐ行ったつ所を…

つて、遠すぎる！そんな長時間魅音から離れたら、多分魅音が泣く

ぞ!?

だとすれば、方法は一つ…!

襖をあけて、中庭に飛び出しそこで立ションをして戻る！

これなら、魅音が泣く前にすぐに戻れる！

汚れた手足は、のぼせた魅音熱を冷ますためにもってきた

濡れたタオルをつかって拭けばいい。

これなら、

魅音が俺がいないことに気がつき泣いたとしても、

最小限の時間で戻ってこれるはずだ！

非常の時には、非常の手段を、だぜ！

完璧だよツ、この作戦！

俺はゆっくりとゆっくりと魅音の指を外すと、

猛ダツシユで襖をあけて、中庭に飛び込んだ！

…カチ

地面に降りるとカチツつと音がしたが気にせず、



思いつきり放出する！

ふう、一安心だぜ！

…ん？ところでカチって、何の音だ？

よく見ると、中庭に看板が見える。

蛍光塗料が塗られた髑髏マーク：

あ、まさかこれって沙都子が仕掛けたトラップ：!?

髑髏の目が光る！

いや、光ったんじゃないツ！

地面から何かが飛び出してきた！

花火!?これはロケット花火だ!!!

シユババババババ!!!

シユババババ!!!

うわああああ!!!

あらゆる方向から俺めがけて向かって、次々とロケット花火が飛ん

でくる！

やめろおおおお!!!

「ん〜圭ちゃん…圭ちゃん…どこにいるの…

って、圭ちゃんツ!?どうしたの!!!」

魅音が目を覚まして、

廊下にぶつ倒れていた俺を抱きかかえた。

沙都子のトラップで一斉にロケット花火を受けて真っ黒になった

俺をみて困惑している。

だが安心しろ、魅音。

おそらく俺が一番困惑している。ああ、だめだ眠さと疲れとロケツ

ト花火衝撃で、意識が遠のく。

薄れゆく意識の中、俺は明日、必ずや沙都子に復讐をしようと誓っ

た。

ちなみに、トイレは問題無く解決した。

そこだけは助かった。

第36話「16日目（金）A「忌まわしき想い」

「16日目（金）：雛見沢分校：朝：前原圭一」

「こらああああ!!!沙都子おお!!!」

俺は学校に到着するやいやなや、両手の中指の関節で沙都子のコメカミをグリグリと押し回す！

「いやあああ、なんですのおツー！」

ふむふむ、沙都子の悲鳴が心地よい。

「なんですの。じゃねえ！自分の心に聞いてみろ！」

「ふえええん！圭一さんがいじめるんですのお！」

沙都子がわざとらしく泣きはじめると、レナがひよっこりと現われる。

その顔は恍惚となっている。いかん、これは、可愛いモードの顔だ！

「か、可愛いよお！泣いている沙都子ちゃん、可愛いよお！」

「悪い圭一くんは退治してあげるからね！あげるからね！」

ドガツ！

レナの目に見えない攻撃が俺の顔面にくりだされる！

なんか、懐かしいぞ、このパターン！

沙都子の頭を梨花ちゃんが撫でる。

「圭一にイジメられてかわいそ☆かわいそなので☆」

梨花ちゃんの手で元気を取り戻した沙都子は…というか、最初から別に本気で泣いちゃいなかったんだらうけど…俺にくつてかかっってきた。

「本当ですわ！一体、なんですの!？」

朝から急に！私がおかしまして!？」

おうおう、よく言うぜ！

園崎本家の中庭にあんだけトラップをしかけやがって！

ロケット花火の雨あられを全身に受けて、

こっちはひどい目にあつたんだぞ！

「沙都子が中庭にしかけたトラップに夜ハマって昨日は散々だったん

だぜ！

お前のことだから、どうせ俺が泊る場所を想定して仕掛けたんだろ  
！」

「…は？何をいつているんでございますの？」

トラップの配置場所には、ちゃんと蛍光塗料のついた看板を設置し  
ておいておきましたわよ？

ちゃんと警告看板を見なかった圭一さんがお悪いのではなくて？」

…ぐ、正論を言ってきやがった。

「まあ、トラップマスターの私を評価して下さいるのは嬉しいですが、  
ど、さすがに買いかぶりすぎですわね。つまり、圭一さんはこうおっ  
しやりたいのでしょ？」

圭一さんが来る日を想定して、どこの部屋から飛び出すかの計算  
し、ちょうど良く着地する地点に起動装置を設置し、大量のロケット  
花火が圭一さんのいる場所に一点集中ピンポイントで攻撃するようにトラップを  
設置したと。いくらなんでも、さすがにこんなの無理でございますわ  
よ？」

ぐぬぬぬ。確かに、言葉にすると無理な感じがする。

しかし、俺の直感が囁いている！

沙都子、お前は俺にトラップをしかけて罠にはめたのだと！

「圭一さん、直感などというものが信用できるのでございましたら

この世に誤認逮捕なんてものは存在しないですわ」

ぐはっ…！！

またしても沙都子に正論を言われた。

こいつ、理論武装してやがる…！！

しかし、そこが逆に怪しい！

沙都子、やはりお前は有罪ギルティだ！

「問答無用！沙都子、この俺のスーパーデコピンをくらえ！」

「いやあああ！レナさん、圭一さんがいじめるのですのおく」

沙都子に飛び掛かろうとした俺に、

レナの防御不可能の一撃が繰り出される！

ドガッ！

「うぎやああああ!!」

…バタツ

「沙都子ちゃんをいじめちゃダメなんだよ！ダメなんだよ！はう☆」

絶対無敵のレナ防御壁：

これを打ち倒すのは、俺には無理だ。無念：

「ふあああああ、みんなおはよう」

ノンビリした声で魅音が教室に入ってきた。

昨日は俺がぶつ倒れてから寝ずに看病したせいで寝不足らしい。

たいした怪我じゃないんだから、寝ればよかったのにも思うが：

そういうえば俺の顔を見ていたら、眠れなくなっただかいってたな。

意味が分からん。というか、イタズラされていないだろうな、俺？

魅音は、可愛いモードのレナに抱きしめられている沙都子の前までくると無造作に頭を撫でまくる。

「んも、沙都子お：あんな危ないトラップはダメだって。花火系は、もう無いよね？ふあ〜」

「設置した時にお話ししたと思いますが、花火トラップはあれだけですわ。なのに、その唯一のトラップを引き当てるだなんて、圭一さんも、とんだ幸運の持ち主でございますわね」

くっそ、しらじらし。

沙都子のヤツ、俺を見ながらニヤニヤしてやがる。

レナから離れたら、目にもものみせてやるからな！

そんなこんなで授業が始まったのだが困ったことが起きた。

魅音が、机につつぷしてヨダレを出しながら寝始めたのだ。

体を揺らしても中々起きない。

魅音は綿流し実行委員として精力的に活動している。

なのに昨夜は俺がトラップにかかり、その看病でほとんど寝ていない。

だから、疲れと寝不足で寝てしまうのは仕方はない。

知恵先生もそれは理解しているので、最初は見逃していたものの、

さすがに寝言で「圭ちゃん♡」と口走りはじめたら、魅音の頭を教科書で叩きはじめた。

「もう、魅音さん。」

そんなだらしない顔で、圭一くんに嫌われますよ」

「ふあゝ、大丈夫ですお先生」

圭ちゃんは私のこと大好きですから」

知恵先生が一瞬顔を歪ませたのに、魅音は気が付いたのだろうか？  
これ以上、知恵先生を刺激するとマズそうなので、俺は定期的に声をかけることにした。

だが、魅音は眠いんだろう、あいまいな返事をして、ししおどしのように頭を

コックリコックリと上下に動かしている。

大丈夫かこいつ？

そのうち首が取れるんじゃないか。心配だぜ…

「16日目（金）：雛見沢分校：昼：前原圭一」

なんとか頑張ってお昼休みの時間までこぎつけたが、やはり魅音は目をつぶって体を揺らし、意識があるのか無いのかわからないような状態だ。

こんな状況では食事のままならないだろう。

仕方が無いので、俺が食べさせるしかない。妻を支える夫の義務つてヤツだ。

俺は弁当のおかずを箸つまんで魅音の前に差し出す。

「おい魅音、食べられるか？」

「あゝい」

パクリ。

魅音はおかずを口の中に入れて、もぐもぐと噛んで飲み込む。

そのまま、ご飯、おかず、ご飯、おかずと交互に差し出す。

出す。

パクリ。

出す。

パクリ。

出す。  
パクリ。

俺が箸で摘まんで目の前に差し出してきたものを、魅音は無条件で口に入れる。

なかなか面白いぜ。なるほど、魅音が俺にあくんをしてくるわけだ。結構楽しい。

その俺達のやりとりを見ていたレナが嬉しそうに笑う。

「なんだか、いつもと逆だね。逆だね」

「魅い、可愛いのです☆にぱー」

「まったく魅音さんも、お子様でございますわね」

梨花ちゃんも、沙都子もはやし立てる。

まあ、こういうのもたまには良いのかもしれないな。

さて、食事も終わり、残りの昼休みは屋上近くの階段の踊り場で休むことにした。

この場所で、眠そうにしている魅音を俺の膝枕で寝かせるためだ。さすがに、ただ眠いつてだけで保健室を使うわけにはいかない…という判断をしたからなんだが、魅音を軽く独占したかった…という理由もなくは無いです。

脚は辛くなるけれど、魅音の寝顔を独り占めにできるチャンスを逃す手は無いつてもんだ。

ちなみに教室で寝させないのは、俺がイチャイチャしている所を激しく嫉妬した目で見てくる富田ちゃんと岡村くんから逃げるためだ。

まったく、あの二人には困ったものだけ。

何度でも梨花ちゃんと沙都子に告白チャレンジすればいいのに。

それが男って奴じゃないか？

まあ、こんな話をするに「それは圭一さんが成功したからです！」とか何とか猛抗議を受けるから言わないけどさ。

しかし、この場所は良い。

屋上というか最上階に行く人はまずいないだろうし、

時間までここにいれば、誰の迷惑もかからないだろう。

六月で暑い暑い暑い、窓をあけて風通しをすれば問題は無い。

幸い、レナから花見に使うための虹色のビニールシートを借りられたので、

それを下に敷き、俺の膝枕の上に魅音の頭を乗せて眠らせることができた。

「時間になったら起こすから、ギリギリまでここで寝てろ」

「ありがとう圭ちゃん…ふあ〜」

まだ眠かったのか、踊り場の準備を終えると、

あつという間に魅音は眠り始めた。

スヤスヤと軽い寝いびきをたてている。

どんな夢を見ているのか、たびたび俺の名前をつぶやく。

…可愛い顔して寝ているよな。

俺は魅音の頭を撫でる。

寝ているも撫でられてるのがわかるのか、

魅音は気持ちよさそうな顔をしていた。

しばらくその顔を眺めていたら、

誰かが階段を上ってくる音がした。

誰だ一体？こんなところの階段を使うだなんて、

学校に爆弾を設置して、屋上に起爆タイマーでも置いていない限り、

こんなところに来るはずがないと思うが。

姿が見えた、レナか？

梨花ちゃんと沙都子もいるな。

「あは☆魅いちちゃん、すつごく幸せそうな顔してる。

圭ちゃんに膝枕されて安心してているんだね」

恥ずかしい事をいうな。

俺の顔が爆発するだろうが。

「どうした？何か用かレナ？」

「はう〜☆可愛い魅いちちゃんと圭くんを見たかったんだよ！見たかったんだよ！」

…まあ、レナの場合はそうか。

じゃあ、後の二人なんだ？

梨花ちゃんと沙都子が中腰で魅音の顔を覗いている。

「イタズラしないだろう？」と、思ったその時、沙都子が俺を向いて微笑んだ。

「圭一さん、きつとこれから先も色々おありだとは思いますが、

魅音さんを信じてあげてくださいませ」

あまり沙都子らしくないことを言うので面食らった。

まるで梨花ちゃんのような台詞を言う。

梨花ちゃんも口を開く。

「圭一、魅いは絶対にイタズラで、おはぎに針とか入れることは無いのです。」

だから、沙都子の言う通り、何があっても魅いを信じてあげて欲しいのです」

：…そんなの当たり前じゃないか。

二人ともおかしなことを言うんだな。

俺は、梨花ちゃんと沙都子の頭を撫でる。

「わかったぜ。俺は魅音を信じる」

だが、なぜか

沙都子は慥然としている。

「私が言ってもすぐに信じないのに、

梨花が言うとおつさり信じるのでございますわね」

沙都子には悪いが、

それは日頃の行いのせいだろうな。

「むきー…なんですってー！私がいなければ、

今頃大惨事がおきて圭一さんなんてミートソースでしたのよ!!!」

沙都子が連続パンチしてきたので、俺はそれを両手で軽く受け止める。

甘いぜ沙都子。そんなパンチじゃ、世界は狙えないぞ！

しばらく沙都子とじやれていたら、

レナが俺の上着を引っ張りはじめた。

「そろそろお昼休みが終わる時間だよ。魅いちちゃん、おこそ？」

：…ああ、もうそんな時間か。



俺がレナの方を向いている隙に、魅音にイタズラしようとして両手をあげて指を動かしていた都子の額にデコピンを行うと、魅音の肩を軽く揺らして声をかけた。

「魅音、そろそろ時間だぞ」

「ふあゝ、そんな時間？」

大きく背伸びをする魅音にレナが声をかける。

「魅いちちゃん、よく眠れた？」

「んゝ、枕が硬かったかな。今度レナに頼もうかな？」

…ちえ、魅音の奴。

「嘘、圭ちゃんの膝枕が世界一だよ」

そう言って笑顔で振り向くと、俺の頬にキスをして素早く階段を下りにいく。

レナも笑いながらその後を追っていき、俺は、梨花ちゃんと沙都子と共に取り残された。

「魅いにやられっぱなしなのです」

「ま、魅音さん相手では仕方ございませんわね」

梨花ちゃんと、

沙都子に肘で突っつかれる。

ふん、俺だつてな。皆が見てない所では、魅音をちゃんとやりこめているんだぜ？

…まあ、そんなこと言うと、負け犬の遠吠えみたいだから言わないけどさ。

「16日目（金）：雛見沢分校：放課後：前原圭一」

学校が終わり、放課後になった。

今日はこれから綿流し実行委員の部会があるので向かわないといけない。

魅音が俺の袖口をひっぱり、今日の部会は早上がりで終わるから、綿流し実行委員の仕事が終わったら家に寄っても構わないかと聞いてきた。

「今日はさ、全然勉強できなかったから、圭ちゃんの部屋で個人レッスン…どつどつ」

魅音の顔を見ればわかる。

口端をあげて、目じりを下げて、いやらしい顔をしている。

あきらかに勉強をしたい顔をしていない。

だが、勉強を教えて欲しいっていうのなら、

俺に断る理由は無い。

「それは構わないぜ？」

だけど、しっかり勉強はするんだぞ魅音」

その言葉を聞いて、魅音は口をとがらせる。

俺の部屋でイチャイチャしたい口実を探しているだけだろ。

全く、欲望に忠実で呆れちまうぜ。

「じゃさ、圭ちゃんはおじさんとイチャイチャしたくないわけ？」

したいです。

結局、俺も自分の中の欲望に負けてしまう。

ああ、情けないぜ前原圭一。相手が妻とは言え誘惑に屈するなんて

！

いやしかし、伴侶が求めてきたらそれを受け止めると言うのも相方のつとめなのではないだろうか？そう、俺は間違っていない！これが間違いだと言うのなら、世界の方が間違っているのだ！

魅音は俺が屈したのを確信すると

邪悪な笑みを浮かべる。

「クククク：じゃ、圭ちゃん。一緒に集会所に向かおうか？」

今日の部会はずぐに終わるから、まっすぐ圭ちゃん家へ行こう」

俺の手を取り、颯爽と走り出す魅音。

まったく、ここまで俺を挑発するなんて良い度胸だぜ。

たしかに、俺は自分の部屋で魅音とイチャイチャしたい誘惑に屈した。

しかし、魅音、甘く見るなよ？

イチャイチャはしたくても、きちんと勉強はみてやるからな!!

「16日目（金）：前原屋敷：夕方：前原圭一」

夕方5時ごろになり、早々に綿流し委員の部会を終えた俺は先に自宅へと戻り、魅音の到着を待っていた。

魅音は模擬店部会でいざこざが起きて少し遅れているようだった。玄関口で時計を見る。

時間は俺が帰ってきてから30分ほど経過していた。ぴんぽーん。

チャイムが鳴るとドアの覗き穴に目をあてる。

外にいるのは魅音だ。俺の家に来てきたんだ。

俺は鍵を開けると、勢いよくドアをあける。

その瞬間に、抱き着いてくる魅音。

「圭ちゃんー！」

…ドサ。

俺はしっかりと魅音の体を抱きしめたが、

重さで少し後ずさりをする。愛が、重い！

というか、今、確認もせずに飛び出しただろう？

開けたのが俺の両親だったら、どうするつもりだったんだ？

「へーきへーき。」

海外ではさ、挨拶に抱き着くなんて普通なんだよ圭ちゃん」

ここは日本だぞ？

突然アメリカナイズするな！

抱き着いてきたものは仕方がない。

一回頬にキスをすると、家の中に招き入れた。

魅音は、台所から顔を出てきたお袋に、夕飯を食べるかどうかの質問にYESと答えて、二階にある俺の部屋までついて来た。

「イヒヒヒ…じゃさ、圭ちゃん…」

おじさんと良い事しようか…？」

そう言っつて、おっさんのように笑う魅音の前に、

俺は無表情で参考書を開いて顔面に押し付ける。

さあ、勉強の時間だぜ魅音！

「ぶー…ぶー…圭ちゃん、愛情たりないよ！

おじさん、つままない！つままないーい！」

「…つたく、お前さ。ここに何しに来たんだよ？」

「もちろん、圭ちゃんとイチャイチャするためにきまつてるじゃん♥」

お前、全くぶれないな？

というか、二人つきりだからって、  
なんだその語尾のハートマークは？

最初からフルスロットルかよ。

俺も魅音とイチャイチャしたいが、そんなことをすれば  
全く勉強が進まない。ここは心を鬼にしなくては！

「いいから、参考書と教科書を開け！」

「ちえー、圭ちゃんのイジワル」

全くなんだってんだ。

お前のために個人レッスンしてやるんだぞ？

俺はそんな魅音の誘惑に負けず、勉強を教えるが、

魅音はというと、案の定、俺の腕にしがみついて体重を乗せて笑み  
を受けべているだけだ。

幸せだが重いぞ。というか、人の話を聞いているのかお前？

「ちやんと見ているのかよ？」

「えへへへ、もちろんだよ。圭ちゃんの事、ずっと見ているよ」

俺じゃねえ！教科書を見ろ！

と、叫びたいが、畜生。魅音が可愛すぎて視線を逸らすので精一杯  
だ。

これが惚れた弱みって奴なのかよ！

「圭ー、飲み物を持って来たぞ。あけてくれないか」

親父の声がドアから聞こえてくる。

気を利かせて飲み物を持ってきてくれたのか。

親父の声を聞いた魅音は、そそくさと俺から離れるとドアを開け、  
親父から、ジュースの入ったコップが乗せられるお盆を受け取っ

た。

「ありがとうございます。お義父様」

「勉強ははかどっているかな、魅音ちゃん？」

「はい、圭ちゃんはとっても優しく教えてくれるんです。

きつと、お義父様に似たんですね」

歯の浮くようなおべっかは止めてくれ。

親父は満足しているが、聞いている俺は恥ずかしい。  
テーブルの上にお盆を乗せて、俺の前にコップを乗せる。  
そして、なぜか魅音は悪い顔をして、ストローを二本を突き出して  
くる。

「クククク…圭ちゃんさ、喫茶店の続き…してみない？」

お前の言わんとすることが理解できないぞ。

俺のコップにストローを二つ入れて、俺の目の前に置くと、

魅音は顔を俺のすぐ目の前まで近づける。

「圭ちゃん…一緒に飲も？」

俺は一瞬顔が引きつる。

だが、よく見ると魅音も悪い笑顔をしながらも

顔を真っ赤になっているじゃないか。

俺とイチャつくために、勇気を総動員しているんだな？

くっそ。いじらしいかよ。

そう思うと、魅音が愛しくなり

つい目の前のストローを無視して魅音に軽くキスしてしまう。

…ちゅ

「け、け、圭ちゃん!？」

突然のキスに慌てる魅音に笑顔を返すと、

俺は自分の方を向いているストローを加えた。

「…一緒に飲もうぜ魅音」

「う、うん…」

さつきまでの勢いはどこへやら、

魅音は薄眼で俺をみながらストローを加える。

俺達は無言でジュースを飲む、

ジュースは少しずつなくなっていくが、勿体なく感じる。

魅音もそうおもったのだろうか、ジュースの減る量が徐々に少なくな  
り、

コップに三分の一残った時点で、減らなくなった。

俺と魅音は見つめ合い、指を絡ませ合う。

「…もういいのか魅音？」

「…うん。一気に飲むのも、勿体ないし」

二人ともストローから口を離す。

俺達の唇が濡れているのは、今ジュースを飲んだばかりだからというわけでも無いだろう。

俺達は無言のまま、そのまま唇を重ねる。

不思議だ。示し合わせたわけでも無いのに、自然に俺達はキスをした。

これがツーカーの仲って奴なのか？

いや、多分、意味は違うんだろうけれど、心が通じ合ったのは間違いない。

唇を離すと、俺と魅音の間に小さい透明な糸ができた。

少し、これはエッチな感じがする。

「…勉強の続きさ、しようぜっ」

俺がそういうと、魅音は小さく頷く。

そして、俺の体に体重を乗せてしなだれる。

俺の説明を聞いているのか、聞いていないのか、じつと俺の方を見ている。

俺も説明に区切りをつけて魅音を見返すと、

「コホン」とわざとらしく咳をした。

「理解できたのかよ？」

「うん…だから、ご褒美頂戴。圭ちゃん…」

…いや、絶対に理解していないだろうお前。

だが、悲しいかな。

魅音のせつなそうな顔を見たら、もう脊髓反射でキスをしてしまう。

「えへへへ…圭ちゃん、大好き」

「…へ、言ってるよ。俺の方が大好きなんだからな」

スカして言ったが、軽く自己嫌悪に陥る。

どう考えても魅音が勉強できないのは俺のせいだ。

前原圭一って野郎が、魅音を甘やかすのがいけないんだ。

このままではいけない。一度ガツンと言わないと。

「魅音…」

「なに、圭ちゃん？」

「いや…その…名前を…言いたかっただけ…」

「えへへ…圭ちゃん、特に意味もなくおじさんの名前を呼びたかったわけ？」

もう、完全におじさんの虜じゃんか…えへへ…」

うん。無理だ。

屈託の無い笑みを見れば、魅音は俺にどやされるなんて全く思っていない。

そんな魅音を一喝することなんてとても出来ない。

正直に言おう、俺は魅音が好きすぎる。

好きすぎて、何も言えなくなってしまうている。

こんなんでは駄目だとはわかっていているけどさ。

ハア…ため息ばかり出る。

「どうしたの圭ちゃん？ため息つくつと、幸せが一つ消えていくよ？」

全く、誰のせいのため息ついていうと思っているんだ。

まあ、魅音の勉強が進まない理由の九割は俺の責任なんだけどさ。

「魅音を心配しているんだよ。ちゃんと勉強しないと大学へ行けなくなるぜ？」

「あははは、そんなこと圭ちゃん心配しているんだ。

大丈夫、大丈夫、大学なんてのはさ、人脈と金と権力さえあれば、どうかなるってもんだよ」

なんだこいつ、突然世界の裏常識を語り始めたぞ。

「園崎家には、そりやあつちこつちに親族がいるし、コネクションもあるし、金もある。

まあ、ぶつちやけ多少勉強ができなくても、私立大学へ入学って手もあるからね。

もちろん、圭ちゃんも二つ返事で入学できるように手配も回すよ。なんととっても、おじさんのお婿さんだからね」

おい、おい、おい…止めてくれ。

一般人は、そりや大変な努力をして大学受験をしているんだぞ。

そういう上流階級的な行動は、よくないと思うぞ。

第一、ちゃんと勉強ができてなきや、私立大に入っても苦勞するだけだろ？

大学なんて入るのが目的じゃないんだからさ。

「そりや、東大とかそういう一流所は、ちゃんと勉強しなきやかもだけどさ。」

圭ちゃん、そういうの狙っているわけ？」

「東大？東大か…」

進学校や受験勉強から脱落した今となつては、東大なんて考えてもみなかった。

実際、俺は興味の無い事に関してはそれほど学ぼうとする気が無い所がある。

だからこそ、褒められる喜びの無い勉強は苦痛でしかなかった。

ただ、魅音があまりにも勉強に興味が無いのであれば、

当主としての魅音をサポートするべく、例えば経済・経営学を専攻して知識を高めるとか。

そういう方向性に行くのもありのかもしれない。

「…ダメだからね」

うわっ!?

いつの間にか、魅音が俺を覗き込んでいた。

「圭ちゃんは、おじさんと同じ大学に行くんだから。これは決定事項。そうでなくても、おじさんが先に大学に行くと一年はあえなくなるんだよ？」

四年も離れ離れになったら、圭ちゃん成分不足でおじさん飢え死にしちゃうよ」

餓死って、俺は食い物か何かだったのか？

「いやさ、俺ってほら…今まで将来の目的とか無かったからさ…」

魅音の力になれば、それでいいかなって」

その言葉を聞くと、魅音は妙に優し気な表情になった。

「…圭ちゃん。嬉しいよ。」

私の為にさ、将来設計を考えてくれるんだ？」



大げさな奴だな。

そんな深刻な話はしていないだろう？

「俺はただ、魅音の力になりたいだけさ」

「なら、一緒にいて。それが一番の力になるから」

魅音は微笑んではいるが、その言葉から断固とした意志を感じる。

これ以上、俺が何を言っても他の大学へ行くことは許してはくれないだろう。

なら、それでも構わないか。

魅音が望むことをするのは俺の喜びだからさ。

ああ、くそ！こういう所が、魅音を甘やかすっていうのに。

どうもおれは魅音本位で考えてしまう。

いや、とは言え、魅音の両親の前で、俺の人生は魅音に捧げると決めたんだ。

そう、これは自分自身の誓いによるものだ。

だから問題は無い！はずだ。うん。

「わかった。ずっと一緒にいてやるぜ。」

感謝しろよ？俺の青春、全部魅音にやるんだからさ」

「もちろんだよ圭ちゃん！」

おじさんの青春も全部、圭ちゃんに捧げるから、ね！」

魅音は、はしゃいでいる。

やれやれ、仕方がないフィアンセだぜ。

まあ俺のとり越し苦労かもしれないから、あまり本気で心配する必要も無いか。

レナ曰く「魅いちちゃんは、裏で大変な努力をしても、それを表に出さず苦労していないようにふるまうのが凄いだよ」ということだしな。

勉強なんてしなくても平気。ぐらいの勢いで言っではいるが、これは単に俺に甘えているだけで、裏ではしつかりとやっているに違いない。

魅音はチャランポランに見えても、そういう所はしつかりとしているからな。

しかし、大学か。

大学へ行くと、今よりも色んな人間がいるんだろう。

もちろん、色々な男とか当然…

ドクンツ…

あ、ヤバイ。クソツ…これは、ダメな奴だ。ダメなヤツが来た…

胸の鼓動が激しくなって止まらない。俺は自分の胸元を掴む。

冷や汗が止まらない。

「圭ちゃん…？どうしたの？」

すまん。少し静かにしてくれないか魅音…？

これは、ダメな奴なんだ。ああ、そうだ、これは…アレだ…

嫉妬

って奴なんだ。それが沸き起こっているんだ。

「全くどうしようもないぜ…」

「え？何が、どうしたの？」

「俺、今、存在もしない相手に嫉妬している…」

魅音が絶句している。そりやそうだろう。

存在しない相手に嫉妬だなんてバカげている。

でもさ、こういうっちゃなんだけど、これ、結構つらいもんなんだぜ？

「魅音が、もし大学に入ってきたら、俺なんかよりずっと良い男に捕られたらしたら…」

って思ったらさ」

「け、圭ちゃん…」

狼狽している魅音に、俺は努めて明るくこたえた。

冗談で済ませようとしたから、と言いたいがそうじゃない。

そうしなきゃ心が持ちそうに無いからだ。

魅音が、俺よりも良い男に話しかけられたりしたらと、想像するだけで心が苦しい。

クソツ！クソツ！俺って、こんなに嫉妬深かったのか？

「雛見沢には嫉妬の対象になる奴がいなかったからさ、こんな感情になることはなかったんだけどさ。ほら、俺と同年代って、沙都子の兄

貴の悟史だっけ？あいつぐらいだろ？でも今はいないし…」  
「う、うん…そうだね…」

一瞬、魅音が視線をそらした。  
それを見た俺は気が付いてしまった。

気が付かなくて良いのに…いつもなら気が付くはずが無いのに！  
俺は鈍感系主人公じゃなかったのかよ？こんな時に限って鋭くなるなよ！

魅音は、

悟史に、

好意を持っていたのか…！

最悪のタイミングで気が付くなんて…!?

「お前、悟史の事が好きだったのかよ…」

自分でも信じられないほど、憎悪に満ちた言葉が口から出た。

魅音の顔が強張っている。凶星か。そうなのか。

「ち、ちがうの圭ちゃん、聞いて…」

五月蠅い。

「悟史くんのごときは、その、ほんの少し…ほんの少しだけだったんだ  
！」

もう何も言うな。

「悟史くんが好きなのは詩音なんだよツ！でも、詩音が好きってことは、私もその…でも、違うから！今は圭ちゃんだけが好きなんだから  
！だから、だから！」

黙れツ!!!黙れツ!!!黙れツ!!!

ああ、クソ、クソ、クソツ!!頭の中が燃え上がるほど怒りで熱い！  
胸が引き締められるほど苦しいツ!!全身から汗が止まらないツ!!  
思わず魅音を怒鳴りそうになる。それを必死に堪えている。

駄目だ。魅音は怖がりなんだ。ここで怒鳴ってしまったら、  
全部ぶち壊しになってしまう！

俺は一回でも感情的に怒鳴ると取り留めもなく、怒鳴り続けちゃう  
んだ!!

そんなの、怖がりの魅音に絶対に見せたら駄目なヤツだろツ!!!

だから、落ち着け俺ッ！落ち着いてくれッ!!!

ああ、そういえば昔、雑誌か何かの投稿欄で見たことあるな、ヒロインは一度でも主人公以外の奴を好きになったら、そいつは幾ら体が清くたって、もう清纯じやないって話を、ああそうさ、俺だって今まで「そんなバカな！」って笑いとばしたさ。

でも、いざ、自分の番になったとき、

魅音の心を奪った奴に：悟史に、信じられないほどの嫉妬心が沸き起こってくる！

魅音は、俺の前に、アイツを悟史の奴を好きだったんだッ！

ちくしょう！魅音に許嫁がいなかったって言われて俺も油断していた！

それと過去に好きな男がいたなんて話は別の問題じゃないか!!

クソがつ!!そんなにいい奴だったのか？だったんだろうな！詩音も虜にした！

なら、双子の魅音だって好きになって当然だ！むしろ、なぜ、今までその可能性に及ばなかった！

バカなのか俺は？初めから、その可能性に気が付いていれば、ここまで嫉妬心が湧きおこらなかつたらうに！

「圭ちゃん、ごめん…圭ちゃん、ごめん…圭ちゃん、ごめん…」

魅音が両手で顔を覆い、泣いている。

それを見て、俺も涙が出てきた。

情けない。怒鳴りこそしなかったが、俺は魅音を泣かせてしまった。

ちくしょう、俺は、もう本当になんなんだ？こんなに小さい人間だったのかよ…？

嫉妬と自己嫌悪で、俺、どうにかなりそうだよ。

—圭一さん、きつとこれから先も色々おありだとは思いますが、魅音さんを信じてあげてくださいませ—

—圭一、何があっても魅いを信じてあげて欲しいのです—

その時、ふと沙都子と梨花ちゃんの言葉を思い出した。

ああ、そうか、あの二人はこうなることがわかっていたから、助言

してくれたんだ。

俺があまりにも人間的に未熟なのを見抜いていたんだ。

梨花ちゃんや沙都子に俺は及びもしないことを痛感するぜ。

そうだよ。確かに過去は悟史が好きだったこともあるかもしれない。  
いい。

でも、魅音は、今は俺のことが好きだ。俺を愛してくれている。だから、嫉妬しなくていいんだ。

そうだろ俺？

わかったのなら、落ち着いてくれよ。ほら、魅音が泣いているだろ？

「…魅音、俺を抱きしめてくれないか？」

「…うん、うん」

魅音は半泣きになって、俺を横から抱きしめた。

魅音に体を任せて、俺は目をつぶる。大丈夫だ、ほら、今この暖かさは俺だけのものだ。

俺も、魅音の体に手を回して抱きしめた。

魅音の体が少しビクツと動いたが、抵抗はしなかった。

「ごめん魅音、過去に何があったかなんて問題じゃないよな。

俺は今の魅音が好きなんだから…嫉妬なんてする必要無かったんだ」

「…本当に？本当に信じてくれる？圭ちゃんだけを愛しているって、信じてくれる？」

「当たり前だろ、魅音を信じなくてどうするんだよ」

俺はそういって、魅音の額にキスをする。

魅音の目からぼろぼろ流れ落ちた涙を、おれは指ですくって落とす。

そうさ、魅音は悟史のものなんかじゃない。俺だけのものだ。  
ざまあみろ。誰にも魅音を渡さないからな。

俺は魅音の婚約者だ。絶対に、誰にも、渡しなんてするもんか。

第37話「16日目（金） B 「共白髪の誓い」

「16日目（金）：前原屋敷：夜：前原圭一」

魅音が帰宅した部屋の中で、おれは全身を投げ出して寝転んでいた。

嫉妬心を露わにさせた後は、もう勉強にならなかった。

お袋に呼ばれて俺と魅音は夕食を共にしたが、親父もお袋も魅音の暗い顔に気が付いたのだろう。

魅音が食事を終えて帰宅した後に「大丈夫なのか」と聞いてきた。

「ああ、ちよつと魅音と喧嘩して。大丈夫、仲直りしたから」

俺はそう答えたが、おそらく俺の顔も暗かったに違いない。

俺は醜い嫉妬の面を見せてしまった。

もしかしたら魅音は家に帰って泣いているのかもしれない。

そう思うと、自己嫌悪で自分をどうにかしたくて仕方がない。

でもそれはたぶん意味の無い事で：誰も、魅音も、望んでいない。

そんな時だ、詩音から電話がかかってきたのは。

「圭一、園崎の妹さんからお電話よ」

お袋から受話器を貰い声をかける。

「よお、詩音。どうした？」

「アハハハ、こんばんわ圭ちゃん。特に意味はないんですけれどね。

定期連絡ってヤツですよ。今日もお姉とイチャイチャできましたか？」

ハア：その言葉にどでかい溜息で答えた。

詩音は先ほどの魅音とのやり取りを知って、そうだったのだろうか？

わからないが隠しても意味が無い。

正直に打ち明けよう。

「さつきさ、俺、嫉妬で魅音にあたっちまったんだ…」

「嫉妬って…お姉が浮気したっていうんですか？」

「悟史のこと、魅音、好きだったんだろう？」

詩音は答えなかった。

受話器の向こうでタメ息が聞こえる。

「お姉と私は…似た者同士ですから…」

それは何よりも雄弁な答えだった。

俺は天井を見上げる。そこには何も無い。電灯ぐらいしか。

「情けないよな。人間はさ、生きていれば色んな過去を持つにきまつてるんだ。」

たまたま少し好きになった奴に嫉妬するなんてさ。自分の懐の小ささに泣けて来るぜ」

また、詩音に愚痴ってしまった。

これは、また説教コースだな。

そう思っていたら、意外な答えが返って来る。

「…仕方がないと思います。」

お姉が悟史くんを気に入っていたのは確かですし」  
らしくない。

いつもなら「そんな事言わないで下さい」とか、叱咤するはずなのに。

「詩音が怒らないなんて珍しいな。てつきり、そんなこというな！自信を持って！」

って発破をかけられると思ったのにさ」

「あ、あははは…その、お姉に怒られちゃいまして…」

魅音に？

「その、私、今まで圭ちゃんには、お姉のためにしっかりして欲しくて…強く言っていたと思うんですけど、その話をお姉が知って…その、物凄く怒られちゃいまして…お姉は、圭ちゃんにもつと心を打ち明けて欲しいって、そう思っていたみたいで…」

ああ、その話、確かに魅音ともしたことがあったな。

旧停留所で、雨の日に。

そうか、それか。

詩音の様子がおかしかったのは。

そういえば昨日の興宮の写真館でも、

詩音と魅音はろくに会話をしていなかったような気がする。

だとするなら…

「もしかして、魅音とは仲直りできていないのか？」

「……………」

受話器の向こうで、またタメ息が聞こえてきた。

「どうやら凶星らしい。」

「大丈夫だ、気にすんなよ。魅音もさ、詩音には感謝していると思うしさ」

「でも、私…余計な事を…」

「大丈夫、大丈夫。だつてさ、そんな状況でも詩音は、魅音と俺のために電話してくれたんだろう？ 魅音だつてさ、そんなお前の活動をきつと見ていてくれるはずだぜ？」

詩音も、魅音とは違うと感じる事も多いが、

やっぱり姉妹だけあって似ているところがある。相手を思いやる所だ。

例え喧嘩したとしても、こうやって姉である魅音をフォローしようとしている。

これが姉妹愛と言っても良いのかわからないけれど、これだけ尽くしている相手を魅音が見放すわけがない。ただ、ほんの少しだけ怒っているだけだろうさ。

「…圭ちゃんと話していると、お姉が好きになった理由が、ちよつとだけわかりますよ」

「お、そうか？ 俺ってそんなにイケメンか？」

「あははは、顔はまあ、普通だと思いますけどね」

おいおい、そういう落とし方は無いだろう？

まあ、いいや。詩音がとりあえず元気になったみたいで。

とりあえず<sup>2</sup>、<sup>3</sup>適当に話をしてから、俺は受話器を置いた。

最後に詩音には、俺から魅音にフォローしてやると言ったが、慌てて断られた。

全く、人の親切を無下にしやがって。

ジリリン、ジリリン…

二階あがろうとしたとき、電話がなった。



俺は再び受話器を取る。

「はい、前原です」

「あ、圭ちゃん？」

魅音か。お袋が顔を出してきたので、かかってきたのは魅音だと告げる。

「圭ちゃん、電話繋がらなかったけど、随分長電話していたみたいだね」

「ああ、詩音から電話があったんだ」

「…へえー詩音から」

相手が詩音だと分かった途端に、ずいぶん棒読みで答えたな。

カンペか何かを見ながらしゃべっているのか？

「今日も、魅音、お前の事を心配していたようだぜ。そろそろ許してやれよ」

「…私と喧嘩をしたって話をしたんだ。圭ちゃんに。詩音が」

言い方に随分棘があるぞ。そんなに大喧嘩したのか？

詩音はしなくても良いとは言ったが、これはちよつとフォローしなきゃダメなヤツだろ。

「あのさ、魅音。そろそろ詩音を許してやれよ、喧嘩していてもさ、お前や俺を気遣って連絡してくれたんだぜ？姉妹想いの良い妹だと思うぞ」

「……………」

「喧嘩の中身は良く知らないけどさ。あんまり長引くのは、その…良くないと思うぜ？」

魅音から返事が無い。

なんか、想像以上に仲がこじれているのか。

これはちよつと良くないな。レナや梨花ちゃんと話しておく必要があるかもしれない。

「…圭ちゃんってさ、優しいよね。詩音も、そう言ってなかった？」

「ん？ああ、魅音が惚れた理由がわかるってさ！」

ようやく返事がきたので、俺は明るく返した。

これで少しは突破口が開かれるか？と、期待してはみたが…

「…へー…私が惚れた理由がわかるんだ。それって多分、自分も同じだって事なんだろうね」

だが、魅音の反応は冷淡だ。

さすがにちよつと俺もイラとしてきた。

「おい、おい、お前、何を言ってるんだよ？ いい加減に…」

「…悟史くんをあげたのにさ」

最後の言葉は、余計だ。

俺は悟史の名前を聞いた瞬間的に頭に血が上る。

「ああ、悟史って奴はいい男なんだろうな。

詩音どころか魅音にまで気に入られているんだからな」

俺の口から、また憎悪に溢れた言葉が出た。

これほど棘まみれも言葉が出るとは自分でも想定していなかった。

よほど、俺は悟史に嫉妬していたらしい。

クソつたれ。

受話器の向こうで魅音が絶句している。

そしてしどろもどろに話を始めた。

「ご、ごめん…そういう意味で言ったんじゃないんだ！

わ、私…その…圭ちゃん、聞いて…！」

必死に何かを弁明する魅音。言えば言うほど俺のイライラは増すばかりだ。

かといって、何も話さなければ、話さないでイライラは止まらないだろう。

つまりだ、魅音は俺のイライラスイッチを押してしまったわけだ。

ちくしよう、魅音の奴！余計な事を言いやがって、

せつかく落ち着いたつてのにツ!!!

そう思う自分の心の狭さにも腹が立つ。

さつき終わった話だつていうのに！どうして俺はこうもダメなんだ。

一通り、魅音の弁明…弁明と言つていい良いのかはわからないが…を聞くと、

俺はぶつきらばうに受話器に向かって言い放つ。

「なあ、もういいだろ。詩音を許してやれよ。この話をすると悟史の話もでるんだろ？」

俺さ、沙都子の兄貴だから悟史のことを嫌いたくないんだけどさ。これ以上、この話を続けると

俺、きつと無条件で悟史の事、嫌いになっちゃうぜ？」

「ごめん…圭ちゃん。本当にゴメン…もう、言わない…もう言わないから…」

魅音の悲痛な謝罪に心が痛くなる。

だからこそ、ここで終わらせないと。これで丸く収めるんだ。

「わかった。じゃさ、魅音は、もう詩音を許す。」

そして俺も悟史の話で嫉妬をしない。これでいいよな魅音？」

「…うん…うん。圭ちゃんがそれでいいなら、そうする…詩音とも仲直りする」

良かった。良かった。

想像とは違ったが、これで万事解決ってヤツだ。

俺は大きく息を吐き出す。

胸に罪悪感が残っている。嫉妬で感情的に声を荒げてしまった。

今度は俺が謝る番だ。

「ありがとうな。それと、ごめんな魅音…俺も、感情的になっちゃまった。」

魅音が好きなのは俺だけだって、わかっているのにさ」

「そんな…あやまらなくて良いよ！圭ちゃんは何も悪くない…」

無神経だった…私が悪いんだからさ…」

そういえば、詩音の話で聞きそびれちゃったけれど

魅音は何で電話をかけてきたんだ？

「あ、明日の朝、圭ちゃんの家に行っていていいか…聞きたかったんだよ。その…圭ちゃん成分が、ちよつと足りないから…」

朝、俺の家に来るのに許可を貰いに電話をかけてきた？

…そうか。魅音はさつき俺が嫉妬した時に、

嫌われていないかと恐れていたのか。

いつのもの魅音なら「朝来るよ」と決定的に言うか、許可もとらず

に勝手に来る。

それなのにわざわざ俺に許可を貰おうだなんてさ。

そんなに怖がらせちゃったんだな。

ごめんな魅音。

わかった。詩音を許してくれたし、

罪滅ぼしも兼ねて、こっちから出向くぜ。

「ならさ、俺が今から、魅音の家に泊りに行っていいか？」

「え？今から…!?あ、あははは！もちろんだよ！圭ちゃんならいつでも大歓迎だよ！」

魅音の声に明るさが戻る。

「考えてみればさ、俺も今日は魅音成分が十分取れて無かった気がするんだ。

だからさ、今夜一晚…いいよな？」

「あたりまえだよ！圭ちゃんはおじさんのお婿さんなんだよ？すぐに来る？」

ああ、時間を合わせた方が良いよね…！」

俺は魅音と合流時間を決めると電話を切った。

お袋には、今夜泊まる事と朝ごはんは園崎家の方でとることを伝えておこう。

さて、行く前に明日の学校の準備をしておくとするか。

「16日目（金）：園崎本家：夜：前原圭一」

予定時刻に園崎本家の正面門の前になると、魅音が立って待っていた。

俺の姿を見ると手を振って走り出し、俺が返事をするやいなや思いつきりジャンプして抱き着いてくる。

「あゝ圭ちゃん！圭ちゃん！圭ちゃん！圭ちゃん！」

スーハースーハー！圭ちゃんの匂いだ!!!ああゝ」

おい、待て…重いぞ。

俺は魅音を抱きかかえて、そのまま正面門近くまで移動して、ゆっくり降ろす。

「ゴメン、ゴメン、圭ちゃん。重かった？」

でもさ、これが愛の重さって、ヤツなんだよ」

何を言っているんだお前は。

しかし、お前、随分テンション高いな？

てつきり、もう少し落ち込んだ感じだと思っていたけれど、

全然そんな事無かったみたいだ。

「じゃあさ、入って。バッチャは寝ているから、音をたてないように……  
ついてきて！」

まるで泥棒をするように、静かに正面門を抜けて園崎本家の中に入る。

抜き足、差し足、忍び足……

「バッチャが寝ていて客間に布団を引けないから、おじさんの部屋にご招待するね。」

……その、いいよね、圭ちゃん？」

そう言って、魅音は、はにかんだ笑顔で俺を見る。

おいおい、もちろんOKに決まっているだろ？

この間は、あんなに恥ずかしがって、部屋見せてくれなかったのに大奮発だな。

「……それはその……圭ちゃん、だからさ」

そういつて恥ずかしそうに視線を落とす。

ちくしよう、ここが外じゃなければ抱きしめてやるのに。

そうだ。抱き着くのはまだ早い。

落ち着け。

ここで妙な事をする、沙都子のトラップが発動するかもしれない。

周囲を見る限り髑髏マークの看板は無いが、わかったものか。

俺は必死に自分の中にある衝動を押しえつけて、進んだ。

向かう先は魅音の部屋だ。

しかも、俺が魅音の部屋だと勘違いしていた本を置いてある部屋じゃない。

本当の意味での魅音の部屋だ。

なんだかワクワクしてきたぞ。

一体どんな部屋なんだ。楽しみだぜ。

「16日目（金）：園崎本家魅音自室：夜：前原圭一」

魅音の部屋はこざっぱりとして綺麗だった。

確かに女の子っぽい部屋という感じはしなくもないが、あまりにもさっぱりしすぎて生活感が感じられない。

女子の部屋に入った感動よりも、

むしろ、違和感の方が強すぎて謎の警戒感が沸き起こる。

「あのさ、ここ…本当に魅音の部屋なのか？」

「そ、そうだよ…真正正銘、おじさんの部屋だよ…」

魅音の目が泳いでいる。なんなんだ。

俺は周囲を見る。前に玩具屋で魅音に渡した人形があるかと思っ  
たが無いみたいだな。

少し残念だぜ。

「前に渡したあの人形は、この部屋には無いんだな」

「へ…？あ、あるよ！もちろん、あるに決まっているじゃん！

だって圭ちゃんから貰った人形なんだよ！ないわけないよ！」

そう言うが早い、クローゼットの中から人形を取り出し俺の目の  
前に突きつけた。

その素早さに、俺は若干とまどう。

「なんだ、いつもはしまつてあるのか？」

「違う！違う！いつもは鏡台の脇に飾って…あつ…」

そこまで言つて魅音もバツの悪そうな顔をした。

そこでもうやく俺も気が付いた。

もしかして、この部屋がやたらこざっぱりしているのは…

「魅音、そのクローゼットの中って…」

「圭ちゃんダメー！！見ない！！見たら、おじさん舌を噛むからー！！」

やっぱりそうか。俺が来るつていうんで、部屋の中のものを取りあ  
えず全部クローゼットの中に隠したんだな。

可愛い奴め。

でも、俺が見たかったのは、

そのまんまの魅音の部屋なんだけどな。

「うゝゝゝ」

魅音は視線を落として、謎の唸り声をあげている。

俺は魅音の首に手を伸ばし、片手で頭を抱えるようにして抱き寄せた。

「残念だぜ。魅音の攻略度、まだ100%じゃなかったみたいだな」

「そ、そんなこと無いよ。圭ちゃんは100%超えているよ。」

でも、その…恥ずかしさが、まだ…」

徐々に小さくなる魅音の声。

ぼそぼそ呟くぐらいまで音が落ちたのを見計らって、

俺は顔を向けさると唇を奪う。

…んっ

おれは開いている方の手を魅音の肩に回し、体ごと俺の方に向けさせる。

少し強引だったかもしれない。でも、魅音は抵抗せずにされるがままになっている。

俺は舌を少し、魅音の口の中に入れる。

ビクっ体が揺れる。密着したのでどっちの体が揺れたのかわからない。

二人同時だったかもしれない。

俺はそのまま魅音の体を敷かれていた布団の上に押し倒す。

さらに深くキスをしようとしたら、肩をタップされた。

ん？なんだ。

「ご、ごめん圭ちゃん…今日さ、用意してない」

魅音が顔を真っ赤にしてそう呟く。

用意？用意ってなんだ？

一瞬何を言っているのかわからなかったが、コンドームのことだと気が付いた。

俺は思わず笑ってしまう。

「ぶ、ははははははー」

「えっ…えっ…なに、圭ちゃん…っ…えっ？」

別にそんなことをしたくてやっているわけじゃないんだけど、

どうも最近そういうふうな感じで進むので、魅音を勘違いさせてしまったみたいだ。

いや、原因は俺にもあるんだけさ。

これ以上やると俺の自室でやっていたように止まらなくなるかもしれない。

今日はこの辺で止めにしておくか。

俺は魅音の額に軽くキスをすると上半身を起こすと、魅音の体を引っ張り座りなおさせる。

「今日はイチヤイチャしにきたんで、子作りの予習をしにきたわけじゃないぜ?」

目を丸くして真っ赤にしている魅音。

なんだか、脂汗をかいているようにも見えるが、錯覚か?

「あはははは、そうだよね! そうそう、わきまえないとダメだね。うんうん」

うむ。わかってもらえたようで何よりだ。

それでは、魅音の部屋を調べてみるか。

「ちよつと、圭ちゃん?! 何をやる気?」

「物色。いやあ、女の子の部屋に入るなんて経験、そうはないからさ。興味津々だぜ!」

「け、け、圭ちゃん?! 面白いものなんて何も無いって! いや、本当! だって、おじさんの部屋なんだよ?」

とりあえず、俺は立ち上がると、魅音の部屋を見て回る。

魅音は慌てふためているが、見る限り綺麗さっぱり片付けられている。

大した念の入れようだが、せつかくきたのに何も無いのは面白くは無いやな。

「なあ、魅音。写真アルバムとかは無いのか?」

「え? ああ、あるよ。ちよつと待ってて」

そう言うのと、またもやクローゼットの中を開く。

おいおい、もしかしてその中を探した方が色々早いんじゃないのか?



気になる。後で覗いてみようか。

「ちよつと、今覗こうと思ったでしょ!?だ、ダメだからね!

下着とか入っているんだから!」

何をいつているんだお前は。

なんでクローゼットの中に下着が入っているんだ?

普通は下着ってタンスとかに入れるもんじゃないのか?

いや:そう思っているのは俺だけで、

女子の部屋っていうのは、クローゼットに入れるものなのか?

比較対象がわからないから、なんとも返事がしづらい。

今度、詩音に聞いてみるか。

「詩音に聞いてもダメだよ。あの子はかなり特別だからね。

少なくとも一般女子と比べるっつーのは、どうかと思うよ。本当」

なんなんだお前は、さつきから人の思考を先読みして。

サイキツクかよ。

「ククク、フィアンセを舐めて貰っちゃー困るよ圭ちゃん?

沙都子じゃないけど、圭ちゃんの思考なんて手に取るようにわかる

んだからね」

わかった。わかった。俺の負けだぜ。

魅音はクローゼットからアルバムを取り出すと、俺の横に座り、パ

ラパラとめくり始めた。

大体は、興宮の写真館で見せて貰ったのと同じだが、

こっちの方はよりプライベートに重点が置かれた写真が多い。

人に見せるようなものではないので、当然なんだろうけれど。

写真は雛見沢ダム建設阻止の時代のものが若干多いようだ。

魅音が、梨花ちゃんや沙都子と同じ10〜12歳ぐらいの頃の写真

か?

「こうやって見ると、知らない人も結構いるな」

「まあ、遠い親戚もいるけど、雛見沢の人がメインだから、あっている

人も多いはずだよ。この頃は皆が殺気だっていたからね。今だと、別

人のように好々爺になっっているからわからない人とかもいるかも」

よく見ると写真的切り抜きとかも入っている。

機動隊への攻撃とか何とか、結構物騒な内容のもチラホラあるな。

「こういつちやなんだけどさ、本当にこの頃は悪かったからね  
本当に極悪って感じ。あははははは」

写っている写真の中にも何だか、反対運動というよりも、  
革命ゲリラ部隊のような感じのものもある。相当な事をしていた  
んだろう。

ただ、そうなると気になる事がある。

「なあ、魅音。その極悪って話の中身は、婚約者の俺が知らなくても良い話なのか？」

言いたくないのなら別に構わないけれどさ。伴侶だからこそ、知っておいた方が良いって話なら、今の内に教えてくれよな」

「…え」と

明らかに魅音は困惑している。どこまで、話して良いか決めあぐねているようだ。

もし、話しくいいのなら、こちらからネタを渡して反応を見るのも良いかもしれないな。

「そういえば前に誰かから聞いたんだけどさ…」

…確かレナだったような気がする。

「園崎家は暗殺部隊を作って、米国で訓練をして、政庁への自爆攻撃を試みたとか何とか」

「へ？…圭ちゃん、その話を知っていたの？いや、まあ、参っちゃうな…あははははは」

魅音は苦笑いをして頭を搔く。

「あれはプロパガンダ…宣伝工作って奴だよ。こんなに危険な存在なんだよって圧力をかけるために、それっぽいことをやっただけ。確かに何人かと海外へ行って銃のインストラクターから撃ち方とかならったけれど、ほとんど海外旅行みたいなもんだったんだ」

なんだ。そんなものだったのか。

じゃあ、アレはどうなんだ？

「オヤシロ様連続怪死事件の犯人。あれって、園崎家の仕業なのか？」

「圭ちゃん!? その話、知っていたの! 誰から聞いたの!？」

魅音は驚いている。そりやそうだ。この事は皆はシークレット、秘密にしていた。

多分、引越してきたばかりの俺に、悪い印象を与えないためだろう。

ん? すると、俺は誰にこの話を聞いたんだ? よく覚えていない。でも知っている。

確か富竹さん? いや違うな、園崎家が犯人と言っていたのは確か:

「:大石さん、だったかな」

「あの野郎か:圭ちゃんに余計な事をツ! 本当、アイツは生かしておくんじゃなかったツ!!」

大石の名前を聞いた途端、魅音から殺意の波動がほとぼしった。

前回の児童虐待問題で俺との子作りを阻止された一件以来、大石に対する憎しみが尋常では無くなっている。一時は落ち着いたかと思っていたけれど、やっぱり根には持っていたようだ。

俺は、再び魅音の頭を引き寄せて、頭にキスをする。

「どうどう。落ち着けよ魅音。あんな奴ほつとけって、

どうせ俺達が何もしなくても、さっさとくたばるさ」

「:ふう、ふう:うん:そうだね。あんな奴、すぐに死ぬよね:」

しばらく落ち着くまで魅音の頭を撫で続ける。

幸せそうな顔で撫でられる魅音。

本当にちよろくて助かる。

ま、人の事はいえないけどさ。

魅音が落ち着きを取り戻してきた矢先だった。

信じられないという顔を俺に向けて、凝視してきた。

:一体なんだ? どうした?

「じゃ:じゃあさ、圭ちゃんは私が:私達園崎家が”オヤシロ様”かもしれないのに、求婚を受けてくれたってことなの!」

あ、ごめん魅音。

今の今まで、全然そんなこと考えていなかった。

でも、それをストレートに言うと、多分、というかかなり白々しい。

だったら、少しキザだけど、前にも言った台詞を、ここでも言うでしょう。

「魅音、俺は前にも言ったはずだぜ。地獄の果てまで一緒だって」

「……………」

…ん？どうした？

「…圭ちゃんツ!!」

ガバツ

…うおっ!?

思いつきり抱き着かれて押し倒された!!

嬉しいのはわかるが、落ち着け。魅音!!!

「圭ちゃんツ!!圭ちゃんツ!!あははははッ!!」

やっぱり圭ちゃんは、私と結ばれるためにここに来たんだよ!

絶対そう!圭ちゃんと私は一緒になる運命だったんだ!あははははは!」

わかった。わかったから落ち着け…

苦しいって…

「これさ、絶対誰にも言ったらダメだよ?

圭ちゃんが、おじさんのお婿さんだから聞かせてあげるんだからね?」

「お、おう」

「園崎家当主に代々伝わるやり方があって”園崎家に都合の良い事象があったら黒幕のふりをする”んだよ」

つまり、こういうことか。

この雛見沢で何かしら、園崎家にとって都合の良いことがおきれば、それが誰がやったにせよ。

園崎家の当主は、さも自分が命じたかのように振る舞う。

それによつて、園崎家の名声と権威は高まり、人々は恐れ敬うようになるという寸法か。

「なるほど、じゃあ、俺も…その、知ったかぶりをした方が良いのか?」「いやいや、圭ちゃんは実際に何も知らないんだから、そんなことをしなくてもいいよ。聞かれても”知らない”って、答えてくれればそれ

でいいんだよ。そういうのはさ、全部、おじさんがやるから。“俺は魅音の夫だが何も知らない。知っているのは当主である妻だけ”って言うのも、十分効果として有りなんだよ」

そういうものなのか？

「ククク…そもそも圭ちゃん、思った事は顔に出るからね。

そんな人に、こういう役は任せられないよ」

確かに、思った事が表情に出てしまう俺では、そんな腹芸なんてむりだろうな。

いや、まてよ。それじゃあ、園崎家がオヤシロ様連続怪死事件の犯人つてのは…？

「そんなのは大石のバカ野郎の妄想だよ。

まあ、もちろん、都合が良い時に振る舞う園崎家も悪いとは思うけれどさ、あいつは異常だよ

圭ちゃんも、できるならあいつと関わり合いになるのは避けた方が  
良いよ」

「あくじやあ、オヤシロ様を狂信的に信奉する奴らの活動とかは…」  
「なにそれ？確かにお年寄りの信仰心は深いし、梨花ちゃんは好かれ  
ているけど、狂信的つてのは無いと思うよ？誰が言ったのそんな話？  
これも大石の奴？」

いや、これは確かレナ…いや、鷹野三四さんだったかな？

たしか、どつちかから聞いた話だと思っただけれど、自信がないな。

「あははは、それだったら鷹野さんだよ！あの人、色々面白い説となえるからね。

オヤシロ様UFO説とか、面白かったなー」

なるほどな。園崎家は関係無かったのか。

安心したような、がっかりしたような複雑な気分だ。なんだろうこれ。  
れ。

中に蛇が入っていると思ったら、実は何も入って無かった的感觉  
か？

微妙に例えが、みつからない。

「圭ちゃん、これも誰にも言わないでね。

実はさ、バつちゃんは“オヤシロ様”を探しているんだよ」

「え？バアさんが？なぜ？」

「うーん、これも圭ちゃんには教えておいた方が良いよね。」

雛見沢って結束力が固いのは身を以って体験したよね…？」

雛見沢はダム闘争に見られるように非常に結束力が固い。

それは沙都子を救出した時に発揮した団結力を見れば十分にわかる。

ただ、魅音が言うには“それゆえ”雛見沢独自の風習というか命令系統があるらしい。

つまり、御三家の支配体制だ。

現在は御三家の中でも特に園崎家が力を持っている。

事実上の雛見沢のトップであり、その当主のお魍の命令は絶対だという。

ただ、普通は命令という形をとることはない。当主のお魍が憂慮すれば、それを感じとった“誰か”が独自で実行に移す。そして、村全体でそれが表に沙汰にならないように隠そうとするのが通例らしい。「…ということはだよ、圭ちゃん。雛見沢の誰かが、バつちゃんのことをくみ取って“オヤシロ様”をやっていたとしたら、それを保護する義務と責任が園崎家にはあるんだ。もちろん、逆の場合もある。園崎家や雛見沢全体の利益を考えずに行動をしている場合は“止める”という必要もあるしね」

なるほど、しかし、そう考えると“オヤシロ様”は園崎家はもとより雛見沢の住民でも無い気がするな。

「そこなんだよね。雛見沢の住民がやれば、必ずバつちゃんの耳に届くはずなんだ。でも、それが無い。とういうことは、それ以外の“ナニカ”かもしれない。本当に神様ならいいけど、もしそれが地元住民以外の誰かであった場合は大変なんだよ。雛見沢で勝手にやられて、それを見過ごしたとあれば御三家…園崎家の面目が丸つぶれだからね。しかるべき対応をしなきゃならない」

なんか本当に任侠映画とか、あつちの方向に話だな。

普通の世界とはかけ離れすぎた話で、とても現実とは思えないぜ。

魅音がニヤニヤしながら俺を見ている。

「圭ちゃん的には、むしろ、そういうダークな設定な家の方が、男心をくすぐられたりしたりしないわけ？」

何をいつているんだこいつは。

「あのなあ。男の最高のロマンってのは惚れた女と添い遂げることだろ。」

家なんて関係ねえよ。魅音のいる所が、俺のいる所だけ？」

…あ、しまった。これは言い過ぎたか。

魅音の顔が真っ赤になつて湯気が出ている。

しかも、なんだから体が妙に震えている。

「圭ちゃん…圭ちゃん…」

魅音の目から涙が溢れ出てきた。

この展開は、嬉しすぎて魅音が号泣するパターンだな。

大きく手を広げて、迎える準備をするか。

さすがは二回目だけ、俺もなれたもんだ。

「こいよ、魅音」

歯も光るエフェク付きの笑顔で俺は迎える。

これが、大人の余裕つて、やつか？ふっ…

「けいちやあああああああん!!!」

ぐえッ!!!

魅音ッ!!!オチツケっ!!!そんなに激しく抱き着くなッ!!!

ぐああああああ!!!

「16日目（金）：園崎本家：深夜：前原圭一」

魅音は30分以上も俺に抱き着いて泣いていた。

思いつきり抱き着かれたので、俺はへとへとだ。

幸いな事に魅音の部屋の中なので、今回は倒れようが疲れて寝ようが問題無い。

泣きつかれた魅音に腕枕をしている。

魅音の頭の重さで腕が痛い。痺れてきているが我慢だ。

映画とかドラマとかで、よく見るけど、これって凄く大変だぞ。よく皆はやっているよな。

「圭ちゃん…本当に、お婿さんになってくれて、ありがとう」

「ん、なんだ魅音？」

魅音の顔を見ると微笑んではいたが、

その瞳には哀しみをたたえていた。

「私は、御三家の一つ、園崎家の次期当主として…そして、この村の、雛見沢の代表として生きていけなければならぬんだよ。産まれてから、死ぬまで…そう教えられてきた。それが正しいことなのだ」と………

「例え、一時は外の世界に出ようとも、結婚をして子供を作るために、また戻らなければならぬ。これは私に課せられた運命…私にとつて、この村が全てなんだ。でも、圭ちゃんに出会えた。本当に心から、自分を受け止めてくれる人と出会えた。圭ちゃんと共に雛見沢で生きられるだけで…もう、それだけで十分、私の人生は満ち足りると思えるから…だから……」

「…魅音」

魅音の境遇は過酷だ。

貴人にはそれに見合うだけの責務があるという話をどこかの本で読んだことがある。

確かに、魅音は将来はこの辺一帯を牛耳る権力者になるだろう。

それは同時に、永遠にこの地に生きることが余儀なくされることを意味している。

魅音には自由が無い。

人生を自分自身で掴みとるという当然の権利が存在しない。

この雛見沢で生き。この雛見沢で死ぬ。

園崎家次期当主に定められた魅音の宿命だ。

それを思うと、俺は自然に涙が出てきた。

魅音は、そつと俺の頬に手を差し伸べて、涙を親指でふく。

「私のために泣いてくれるの…圭ちゃん？」

俺は、頬に差し伸べられた魅音の手に、

自由になっっている方の手を重ね合わせた。

「さつきもいったら？家なんて関係無いぜ。



俺は、園崎家に婿養子に入るために結婚するんじやねえ。

お前の、園崎魅音の夫になるために結婚するんだ。

魅音が園崎家の掟だかルールに縛られるのが嫌なら

俺はそれを消し去ってやる。運命なんてクソ喰らえだ。

お前が望むのなら、お前を苦しめる世界のルールを

全てを潰してやるぜ魅音」

俺が口に出したのは本心だ。

相手がどれだけ強大かは関係無い。

魅音を苦しめるのなら、

園崎家も、雛見沢も、俺は滅ぼす覚悟だつてある。

俺は、魅音のためなら世界を敵に回したつてかまわない。

「ありがとう圭ちゃん…本当に、ありがとう。」

それだけで、その言葉だけで…もう十分に満たされるよ…」

たけど、涙を湛えて笑顔で答える魅音を見ればわかる。

それを魅音は決して望んではいない。

園崎家を、雛見沢を魅音はとても大切にしている。

そして、そのために自分の心を抑制し、おし殺して生きて行こうと

考えている。

そんな魅音に対して俺ができることは、

胸の奥に深くしまい込んである想いを受け止めてやることだけだ。

「魅音はさ、いつも周りの事ばかり考えているよな。」

仲間のこと、家族のこと、そして雛見沢のこと…」

「圭ちゃん…?」

「もう我慢しなくていいぜ。お前の本音もワガママも全部全部…受け

止めてやるよ…これから一生さ…だから、何もかも俺に吐き出しちま

え」

それを聞いて魅音は俺の胸の中に顔を埋めた。

どんな表情をしているのかは外からはわからない。

でも俺は、魅音が今どんな顔をしているのかわかっていた。

「圭ちゃん…圭ちゃん…」

魅音は小さく、何度も俺の名前を言い続けた。

そんな魅音の頭を撫でて、やさしく抱きしめて頷く。

「…うん」

俺の名前を言うたびに、魅音は一つ、また一つ。

心の中にある抑圧されていたものを出しているに違いない。

だから、俺は黙ってそれを聞き続け何度も頷いた。

何度も、何度も、魅音が俺の名前を言い続けるたびに。

魅音、お前は全てを背負って生きて行こうっていうんだよな。

大した奴だ。本当に尊敬する。俺には真似はできないぜ。

だから、

俺は魅音の望む全てを肯定しよう。

俺達が生きる世界が狭く、辛く、息苦しくても、

少しでも、魅音が安らかに生きて行けるように。

魅音が幸せに生きて行けるように。

そのためなら、俺は何だってしてやる。

それが、例え俺自身を失うことになっても。

魅音、お前は俺にとってかけがいの無い宝石だ。

俺の名前を呼ぶのが途切れてしばらくした後、

魅音が顔をあげた。

少し泣いたせいかな、

目が赤くなっている。

「圭ちゃん、ありがとう…私の全てを受け止めてくれて…」

「当たり前だろ。俺はお前の夫だぜ」

魅音の頭と額にキスをすると、

二人とも自然に笑みがこぼれた。

「あははは。今日は圭ちゃんに会えて本当に良かったよ…今夜はきてくれてありがとう。」

「こんなにいっぱい甘えさせてくれて…すっごい、感謝だよ」

「気にするなよ。俺が甘えたかっただけなんだからさ」

そういって、俺は腕枕した方の腕をなんとか曲げて、魅音の頭を撫でる。

魅音は満足そうに俺の頬に顔をすりつけてくる。なんだかくす

ぐったいぜ。

「圭ちゃん…」

私もさ、頑張るよ…」

ん？頑張るって何をだ。

魅音が微笑みながら顔を近づけ額と額をくつつける。

「…前にさ、沙都子に教えてもらったんだ。

圭ちゃんが、婿養子に入ることと悩んでいるって」

沙都子、電車での事を魅音に話したのか。

おしやべり娘め。

だけど、まあ、俺も口止めしていなかったしな。

「本当はさ、沙都子に教わることなく、

自分で圭ちゃんの気持ちを探しなきゃダメだったんだ。

でも、私さ…圭ちゃんの優しさと愛情に甘えて、それを怠っていた気がするんだ。

詩音にもさ、最初に言われたってのに

『一方的に圭ちゃんに与えられる愛に浸るだけで

何の努力もしないで、心をつなぎ留められますか？』って」

そういえば、そんな事を俺達がつき合った当初に詩音は言っていたな。

今更そんな話を聞くことになるとは思わなかったぜ。

何気に詩音も良い事を言うんだよな。

「だからさ、おじさん頑張るよ。

圭ちゃんが今日、私の心を理解して優しく受け止めてくれたように…

圭ちゃんが辛くて、苦しくて、悲しい時、それを包み込めるようになれるように」

ちくしよう。

魅音の優しい語りを聞いて涙が出そうだ。

ありがたいな魅音。

でも、言っておくけどな。

魅音だって、いつも俺の事をちゃんと抱きしめてくれているんだぜ

？

お前がそういう決意を示すなら、俺だって宣言しなきゃダメだよな。

「じゃあ、俺も…もつともつと大人になつてさ、

魅音に見合う男になるように頑張らないとだな。

少なくとも…変な嫉妬をして魅音を困らせないように努力する」

「うん。じゃあお互いに手を取り合つてさ、大人になろうね圭ちゃん」

「おう、一緒に頑張ろうぜ」

そういつて、俺と魅音は、

額を見合わせてクスクスと笑った。

俺達はまだまだ子供で、

世の中の事も、お互いの事も、てんでわかつちやいない。

でも、きつと魅音と一緒になら、ゆっくりでも大人になつていけるはずさ。

…まだまだ子供、まだ子供か。

天井を見る。電気の光が眩しい。

俺は先ほど見たアルバム写真を思い出した。

「さっきの写真を見て思ったんだけどさ。魅音の昔の思い出の中に俺がいないんだよな」

「…え？」

当然と言えば当然だ。

俺がこの雛見沢に来て一か月もたつていない。

魅音はその倍以上もここに住んでいる。

だから俺の知らない魅音が写真にいても、それは不思議じゃない。だけど、俺の知らない魅音がそこにいる事実が、少し、悲しい。

「だったらさ、圭ちゃん。これからはおじさんと二人で歴史を作つていこうよ」

「…魅音」

魅音の優しい笑顔が俺を包み込む。

「おじさんも写真館で同じ事を思っていたんだよ。

圭ちゃんの過去の写真に、なんでおじさんがいないんだろう、つて

…」

考えてみれば当然だ。俺の過去の思い出の中にも魅音がいない。だとすれば、俺だけ悲しむだなんて、不公平な話だ。

ああ、そうだよな。

過去は変えられないけど、未来は一緒に進んでいけるもんな。

「そうだよな。俺達、これから50年は一緒にいるんだから幾らでも思い出を作れるもんな」

「あははは、そうだね。共白髪ってやつだね！」

「共白髪って、なんだそれ？」

「圭ちゃん、知らないの？【共に白髪が生えるまで、一緒にいよう】っていう口説き文句」

共に白髪が生えるまで、か。

俺達が白髪になるだなんて全然想像がつかないな。

でも、そういう日がいつかやってくるんだろう。

「だからさ、これからいっぱい楽しんで、思い出の写真を撮ろうよ」

「あははは。だったら富竹さんをお願いしないとだな」

俺は魅音と笑いあう。

「魅音、愛してるぜ」

「うん。圭ちゃん…私も…」

心の底から愛してるよ。圭ちゃん」  
そうさ。

これから俺は一生魅音と一緒に過ごすんだ。

そこには幸せな日々しかないはずだよな。

過酷な将来なんてお呼びじゃないぜ。

俺達の未来は光輝いているんだからな！

### 第38話「17日目（土）A「終末の日」

「17日目（土）：古手神社：お昼：前原圭一」

俺は、明日行われる綿流しの祭りの準備を手伝うため、古手神社に来ていた。

なんといつても、今回の綿流しの祭りでは俺と魅音の結納披露も一緒に行われる。

魅音に頼まれたわけではないけれど、

当事者としては何もしないというわけにもいかないだろう。

だから学校が終わると、まっすぐに祭り会場となる古手神社へと向かい、大人たちに混じって祭りの設営準備の手伝いをしていた。

—ああ、園崎の婿さん。こつちを頼むよ。

—婿さん、婿さん、これもお願いね。

—おお、婿くん。手伝ってくれないか？

雛見沢における俺の通り名は「前原屋敷の息子さん」から「園崎の婿さん」に代わったようだ。

「婿さん」なんて通称は、なんともこそばゆいっただらありやしない。

テントの設営中、綿流し実行委員の中心メンバーと歩く魅音が通りがかった。

今日も、スカート付の学生服をひるがえして可愛らしい。

働いている俺に気が付き、駆け寄ってくる。

「あ、圭ちゃん。来てくれたんだ！」

「当たり前だろう？明日は俺と魅音の結納披露の日だぜ？」

「あははは、だね！」

魅音は俺の頬にさりげなくキスをすると片目をつぶる。

「じゃ、また後でね圭ちゃん」

皆のしている前で、なんて奴だ。

俺の顔は真っ赤かだ。

周囲の大人たちも、はやし立てる。

—はははは、婿さんは、魅音ちゃんに頭あがらないわな。

—頑張れよ婿さん！はははは！

俺は照れ笑いをしながら、頭を掻く。

全く魅音の奴め。

そういえば、一緒に設置作業をしていた人から聞いた話によると、俺と魅音の婚約は、俺の猛烈なラブコールによって成されたものだと伝わっているらしい。

なぜ、そんな話になったのかといえば、魅音の奴が、

周囲に「圭ちゃんが一目ぼれして熱烈に迫って来た」と吹聴しているせいだ。

具体的には

「圭ちゃんは転校してきたときに、私に一目惚れして熱烈にラブコールしてきたんだよ。」

私も最初に出会った時から良いな…って思ってたからさ。それでお付き合いがはじまったんだ」

とか、そんな感じらしい。

テントの設置中にお茶を持ってきてくれた、おしゃべり好きのオバちゃんが聞いてもいないのに話してくれた。本当の話なのかと問われたら、俺は照れながら肯定するしかない。

沙都子を叔父から救出した一件で、俺が園崎のバアさんに気に入られているのはすでに知られていた。だから魅音と婚約したさいにも「仲間を救うために奮闘し、雛見沢を一つにまとめた立派な少年が、園崎家の婿養子に入る。それは素晴らしいことだ」と、雛見沢の人達が祝福してくれているムードが最初からあった。

聞いたところによると、気の早い村人達の中には、俺と魅音が婚約をする前から産まれてくる子供の名前を考えていたらしい。男子の場合と、女子の場合で白熱した議論があったとか、無かったとか。

俺達のいないところでよくやるぜ。

雛見沢の人達は暇なんだろうか？

ところが、この話も魅音の吹聴のおかげで「前原屋敷の息子さんは、仲間の北条沙都子を救おうとした魅音ちゃんのために、体を張ってお勉強さんに立ち向かっていた」という風にすりかわっていつているようだった。

つまり、仲間を助けようとした俺が凄いのでは無く、

仲間を救おうとした魅音が立派であり、俺は惚れた魅音を手助けするために全力を尽くした。

…みたいな解釈だ。

そのせいで同じ祝福ムードでも、毛色が最初とはやや異なった感じになってしまった。

とはいうものの、別に悪い事じゃない。祝福ムードには変わりはないし。

年配者の話を聞くと

「前原のボウズの頑張りは、惚れた女の為だったとは可愛いじゃないか」

と、好意的に受け止められているみたいだから、別に構わないさ。

俺としては最初から梨花ちゃんの言う所の『前原圭一雛見沢最強伝説』なるものには興味はなかったし、無駄に持ち上げられるのも御免こうむりたいので、俺自身が凄かった。なんて話はどうでもよかった。

…ただ、

非常に恥ずかしい！

確かに、お互いに一目惚れしたという設定は守ってはくれているよ  
うだが

明らかに俺の時の表現が過剰で、周囲に誤解を与えているのはどう  
なんだ。

これだと、まるで俺が一方的に求愛したような感じだ。

これも次期当主の面子とか、そういうことなのか？

実は婚約者の前原圭一を惚れさせて、裏で操っていた次期当主・園  
崎魅音は凄いのだ！とか？

いや、幾ら何でもそれは無いだろうが、魅音の評判が高いに越した  
ことは無いだろう。何しろ、次期当主なんだから。

だとしたら、魅音の体面を考えてこのままにしておいた方が良いの  
かもしれない。

正直、こういう世間体の話ってのは、よくわからないぜ。



このまま放置しても、別に困るわけでも無いんだけどさ。

「うんうん。奥さんのために頑張れる婿さんはいい男だあ」

「あ、あはは。そうですか？」

…おばちゃん達には冷やかされるけれど。

うむ。やはり魅音には一言伝えておくべきだな。

「おやおや前原さんではありませんか」

「あ、監督…：こんにちは」

声を呼ばれて振り向くと入江監督が立っていた。

「そういえば、監督も綿流し実行委員の1人だ。」

たしか、お医者さんだけに総務部で医療とか、救護とか、そっち方面が担当だった気がする。

たぶん、明日の綿流しの祭りの救護スペースを確認しに来たんだろう。

「はい、こんにちは。その後、魅音さんとはどうですか？問題ありませんか？」

「ええ、まあ…：はい…」

「どうかされましたか？何でもご相談ください。」

私でできる範囲内であれば、お力になりますよ？」

この間の子作りの相談以来、監督は親身になって俺達を助けてくれる。

恋愛に関していえば、その方面に詳しい人達がいないので本当に助かる存在だ。

「そうだ相談といえば、昨日の腕枕の件を聞いてみよう。」

昨日は一晩中、腕枕をしていたせいで、今日は午前中腕が痺れて動かなかった。

大人はどうやって腕枕をしているんだろうか。

「はははは、前原さん。☒骨神経麻痺をわずらったのですか。」

それはハネムーン症候群と言って、恋愛初心者にありがちなミスです。

腕枕をするさいには、直接腕に頭を置くと痺れてしまうので、枕と頭の隙間…：首の真後ろの空間に腕を回すと良いですよ」

「な、なるほど……！それなら確かに腕が痺れなくてすみますね。さすがです」

そうか。そういうことだったのか。

そういえば、魅音が初めて俺の部屋に泊った時も腕枕をしたけれど、それほど痺れや痛みが出て無かった。あの時はきつと無意識に隙間に腕をいれていたに違いはない。

じゃあ、昨夜はといえば……俺は、しっかりと魅音の頭を包みこみたかったので、直接腕で頭を囲んでしまった。まさか、愛情深いゆえの失敗だったとは！

「いえいえ、この程度のご相談ならお安い御用です。他には何かありませんか？」

監督はニコニコと笑って俺の次の言葉を待っていてくれた。

……監督には、魅音とのことで随分と世話になったよな。

変な人だけど、いつも、まじめで親身に話を聞いてくれる。

今もそうだ。

他人が聞いたらバカげていたり、つまらないと思うような質問だつてキチンと答えてくれる。

「……俺、自分が子供過ぎて嫌になっちゃいます」

だから、監督にはついつい心許して、

本音をポロリとこぼしてしまう。

「本当につまらないことで嫉妬して、魅音に嫌な思いをさせたり、

感情的になって傷つけたり……自分自身のガキっぽさが本当、憎いです」

「……………」

「監督のように大人になれたら……きつと魅音を悲しませることがないんだろうな。って」

俺は大人になりたい。

魅音に見合うような、懐が大きくて感情的にならず、いつでも心を受け止められるような。

そんな大人に成長したい。

監督はそんな俺を見るとニツコリと笑った。

「大丈夫ですよ前原さん。そんなに急いで大人にならなくても。ほら、彼女を見れば、貴方が間違っている道を進んでいないことがよくわかりますよ」

「彼女…？」

監督が手の平を向けた先に、魅音がいた。

魅音の手には二つの紙コップが握られている。

もしかして、俺のために持ってきてくれたのか？

「はい。圭ちゃん、麦茶。喉、乾いたでしょ？」

「あ、ああ…ありがとう魅音」

紙コップを受け取り、中にある液体を一気に飲み干す。

さきほどまで汗をかいて働いていたので、冷たい麦茶は格別な味だ。

魅音も麦茶を飲み干すと、

空の紙コップを持った手を後ろに回して俺を覗き込んだ。

「ダメだよ圭ちゃん。抜け駆けは」

「…え？何がだよ」

「自分だけ、大人になろうとしたでしょ？」

ダメだって、おじさんと一緒に歩こうって約束したんだからさ」

監督との話を聞いていたのかよ。

自分でも赤面して耳まで熱くなっているのがはつきりと分かる。

ちくしょう。恥ずかしいぜ。

監督は、そんな俺と魅音のやりとりを見て微笑む。

「前原さん。大人になれば確かに心がかき乱される事は少なくなるかもしれませんが、でも、あなた方の年だからこそ愛する人と共に笑い、苦しみ、悲しみ、そして成長する喜びを味わえるのです」

「監督…」

「残念ですが、大人になるとそういう機会はなかなか巡ってこないものです。」

大変だとは思いますが『結果』だけではなく、魅音さんと共に歩む『過程』を楽しむことを心掛けてみてはいかがでしょうか？」

俺は監督に頷き、魅音を見る。

魅音は微笑み、そして、俺も微笑みを返す。  
そうだ。俺一人じゃないんだ。

魅音が側にいてくれる。見守っていてくれる。  
焦らず、魅音と一緒に大人になれば良いんだ。

そうすれば、きっと俺が望むような、魅音に相応しい大人になれるはずだ。

「ありがとうございます。」

監督って本当に、その…大人なんですね」

「ええ、私はいつでも立派な沙都子ちゃんのご主人様になれるように、日々努力しておりますから」

…おいおい。

俺は笑顔が引きつる。

全くよかつたぜ。

最後に「尊敬しています」って一言をつけなくて。

しかし、親父と言いつ、イリーと言いつ、どうして素直に尊敬させてくれないんだ。

沙都子が専属メイドになってくれないのは、この辺りに原因があるんじゃないか？

監督は、委員の仕事があるからと言って離れると、

それを確認した魅音が口を開く。

「圭ちゃん。梨花ちゃんがさ、今日の祭りの準備が終わった後に話したいことがあるって」

「それって…この間の写真館での話か？」

魅音は頷く。

二日前、写真館で梨花ちゃんは俺達に何かを伝えたそうだけど、遂にしていた。

その時は、まだ気持ちが固まっていなかったようだけれども、遂に決心したらしい。

どんな話が出るのかはわからない。

しかし富竹さんや鷹野さんが言った「守る」という言葉とは無縁では無いだろう。

一体、何から梨花ちゃんを守らなければならないのか。想像もできない。でも俺は、いや俺達はやらなければならない。なぜなら俺達は仲間だ。仲間を危機から守るのは当然のことなんだ。

「もし、レナや詩音を見かけたら、夕方に梨花ちゃんの家に来て欲しいって伝えておいて」

「わかった。伝えておくぜ」

「それじゃ…まだ仕事があるから行くね」

離れようとした魅音の手を咄嗟に掴む。

まだ俺の用事は終わってはいないぜ魅音？

これだけは伝えておかないといけないよな。

「どうしたの圭ちゃん？」

「…お前、俺との馴れ初めを歪曲して広めてないか？」

「な、なんのことだかさっぱりだよ圭ちゃん」

口をとがらせて、明後日の方向を見る魅音。

なんとという分かりやすい態度をとるんだ。

俺は魅音の両肩を掴んで正面を向かせる。

「罰をうけてもらうぞ魅音！」

「け、圭ちゃん!?!なにをす…んっ」

俺は魅音の唇を奪う。

優しく、たっぷりと時間をかけて唇を重ねるキス。

次第に魅音の体から力が抜け、俺の肩に手を回そうとしたとき、俺は唇を離した。

「…え？え!?なんで！」

中途半端で止めちゃうの!」

「罰だつて言つたらろ?もやもやした気分のまま、委員の仕事をしてくと良いさ」

俺は悪い笑顔をすると、

魅音は頬を膨らませて俺に抗議する。

「うゝ、こんなのことする圭ちゃん嫌い!イジワル嫌だ!」

こういう反応をされると弱い。

怒っている魅音の頭を撫でて、すぐに謝る。

「ごめん。悪かった魅音」

「圭……んっ……」

そして俺は再び唇を塞ぐ。

遠くから魅音を呼ぶ声があるが聞こえないふりをして続行だ。

魅音を呼びにきただろうマダムが、俺達の姿を見て

「あら〜若いわねえ〜」と言って立ち去っていく。

それからしばらく、

俺は魅音と唇を交わし合った。

魅音も十二分、堪能しただろう。

俺はゆっくりと唇を外す。

「…ほら、魅音、呼んでるぜ?」

「…圭ちゃん」

「なんだ?」

「おじさんさ、イジワルされるよりも、イチヤイチャする方が好きなんだよ…」

俺だつてそうさ。

顔を赤くしている魅音の頭を優しく何度も撫であげる。

「わかったごめん。もうしない。」

だからさ、魅音も、あんまり変な誇張や歪曲をするなよな?」

「…わかった。もうしないよ圭ちゃん」

俺は魅音の頬にキスをして送り出す。

名残惜しそうに離れていく魅音に軽く手を振って見送ったもの、すこし、足元がふらついていて危なっかしくて気が気じゃない。

少しキスをやりすぎたか?

おそらく魅音が行った先では、今頃呼び出しに来たマダムが、俺達のキスの場面を言いふらしているに違いないよな。

相当囁し立てられるだろうけど、こればかりは仕方がない。

頑張れ魅音。応援しているぞ。

「いやあく圭ちゃん。本当、ごちそうさまですね」  
うわっ、急に後ろから声が!

誰だ!?詩音か?

「はい。園崎姉妹の気の利く方です☆圭ちゃん、はい麦茶どうぞ!」

「ああ、ありがとうな」

本当は魅音からも貰っているんだけどな。暑いから良いか。

俺は詩音からコップを貰うと、一気に喉に流し込む。二杯目だけでも実に美味しい。

「今日は圭ちゃんに直接お礼が言いたくて会いに来たんです。

お姉に口添えしてくれたんですね」

口沿いつて、姉妹喧嘩のことか。

電話口でも相当こじれているのが分かったので、少し焦ったな。

俺が悟史の件で嫉妬ギレしていなかったら、おそらく面倒なことになっただろう。

まあ、嫉妬でブチぎれて怒らないのと交換に、詩音を許すように要求するなんて考えてみればひどい話だ。

こんな交渉で問題解決したなんて、あまり褒められた事ではないんだろうけどさ。

「さつき、お姉とあって…物凄く謝られました。

圭ちゃんに、とても怒られたってシヨボリとした感じで」

「そうなのか…?」

さつきの態度を見る限り、しょんぼりしている様子には見えなかったけどな。

むしろ人前で頬にキスをしたり、テンションは高めだった気がする。

いや、そういえば俺がキレた時も、その後は、やたらハイテンションで対応したし、

あれは一種の防御反応ってヤツなのかも。

だとすると、やっぱりイジワルしたのは良くなかったのかもしれない。

次に会ったら、少しは甘えさせてやらないと。

「やっぱり、圭ちゃんって…ヒーローですよ。」

お姉を任せられるのは圭ちゃんしかいません。確信しました」

「おいおい、詩音止めてくれ…また、そんなことというのはさ」

「いくえ！絶対にヒーローです！私は、そう決めたんですから、覚悟してください」

「ん、そんな風にいうのならさ…」

俺は、資材置き場に無造作に置かれていた

黒いバツタの仮面を取って、頭にかぶる。

「ダークヒーロー・前原圭一と呼んでくれよな」

そして、テレビで見た特撮ヒーローの変身ポーズをうろ覚えで行う。

うん、これは決まったに違いない。エフェクトもバツチリだ！

「あははは、なんですかそれ？ダークとかブラックとか、そういうの好きなんですか？もしかして、中二厨真つ最中だとか？あは、そういえば、そういうお年頃ですもんね、圭ちゃんは！」

年代的にはそう言われても仕方ないけどさ、そういうわけじゃないだぜ？

男はいつだってダークとか、ブラックとか好きなんだぞ！

「あれ？圭くんじゃないか。準備のお手伝いをしていたのかい？」

ん？今度は誰が声をかけてきたんだ？

振り返ると富竹さんと、その後ろに鷹野さんもいるぞ。

設営の準備をカメラで撮りにきたのか。

鷹野さんは何が面白いのか設営の準備を見てクスクス笑っている。

「今年も綿流しの日が来たわね。」

さて、今年は誰が被害者になるのかしら？」

被害者？ああ、綿流しの日に起きると言うオヤシロ様連続怪死事件

とかいうアレか。

鷹野さんは本当にそういう話が好きだよな。

「本当にオヤシロ様が犯人なら今年はまだ出ないと思いますよ」

「ふうくん。前原くんは、どうしてそう思うのかしら？」

「そりゃ、今年の綿流しでは俺達の結納披露と共に“ダム闘争終結宣言”が出るからですよ。そうなれば、もうノーサイド。対立は無くなるんでしょ？だったらもう犠牲が出るわけ無いじゃないですか」



だが、何がおかしいのか、俺の話を聞いて鷹野さんはクスクスと笑い出した。

なんだ。俺、何か笑われるようなことを言ったのか？

「前原くん、それってつまり…」

園崎家がオヤシロ様の正体って言いたいわけなのね？」

…あ、そういうことか。

鬪争終結宣言が出てオヤシロ様の崇りが無くなるのなら、

それは園崎家の意思が働いていたって事になる。おいおい、俺は間抜けかよ。

鷹野さんが面白そうに俺を見ている。

「…それとも、前原くんは、お婿さんに入って園崎家の秘密を幾らか知ってしまった。

そういうことなのかしら？ふふふふ」

これはやばいぞ。鷹野さんのペースにハマったら、何を言わされるかわかったもんじやない。

そうだ、詩音に会話のボールをなげよう。

「は、はははは。嫌だな鷹野さん。

お魎のバアさんが、そんなことをするわけないですよ。なあ、詩音？」

「わかりませんよ圭ちゃん。あのバアさんなら平気で1人や2人、鬼隠しにしているでも不思議じゃないですから」

おいおい、何を言っているんだお前は!?

ボールの投げ渡し大失敗だぞコレ。

もしかして詩音は、お魎のバアさんが「オヤシロ様じゃない」ってことを知らないのか？

いや、まさか、本当に…実の妹にも教えていない園崎家のトップシークレットなのか、この話は？魅音と俺しか知らない事なのか？

なるほど魅音の言った通りだ。俺は当主には向かないな。すぐに知っていることをバラしちまう。

…うふふふ。

鷹野さんは笑っている。

だが、その笑いが収まると、真面目な顔つきになって俺を見た。今度は一体なんだよ？

「…前原くん。お願いがあるの。梨花ちゃんを守って欲しいの」  
梨花を守る…？それって先日のバーベキュー大会での話の事か？

富竹さんも前にでてくる。

「梨花ちゃんから話は聞いたかい？」

「いえ、それは…これから聞く予定です」

富竹さんと鷹野さんは顔を見合わせて頷いている。

やはり、なにか梨花ちゃんはトラブルを抱え込んでいるんだ。

状況が理解できていない詩音が困惑した表情だ。

「圭ちゃん。一体どういうことですか？」

梨花ちゃんに何か…問題でもおきたんですか？」

「それについて、夕方に皆が集まって話し合いをする予定なんだ。

詩音も来てくれないか？」

詩音は少し考えて傾く。

「わかりました。今から用事があるので一旦興宮に戻りますけれど、夜にはこつちへ向かいます」

「ああ、わかった。魅音たちにはそう伝えておく

あと、富竹さんと鷹野さんも一緒に…」

何か問題があるとするなら、それを知っている

富竹さんと鷹野さんの二人に来てもらうのが一番だ。

だが、二人は頭を振って拒否をする。

一体なんでだ？

富竹さんが口を開いた。

「詳しい事は言えないけれど、僕たちは僕たちで

裏から梨花ちゃんを守るつもりだ…ただ、僕たちは表に出れない。

だから、表立って梨花ちゃんを守る仕事は君達にお願いしたいんだ」

言っている意味が良くわからない。

ただ、二人の目を見れば、これ以上の問答は多分無意味なんだろうということは分かった。

「わかりました。俺達は梨花を正面から守ります。

裏から支援、よろしく願います。」

俺は、二人に頭を下げた。

これから何が起るかはわからない。

しかし、この二人は間違いなく味方だと思う。

理由はわからないが、二人の真剣な態度に俺はそう直感した。

「17日目（土）：古手神社：夕方：前原圭一」

今日の準備が終わり、俺はまっすぐ梨花ちゃんの住んでいる小屋へ向かった。

梨花ちゃんは、古手神社内にある二階建てのプレハブ小屋みたいな建物の二階部分に住んでいる。

元々は青少年会議所だとか、青年団の建物だったらしいが、梨花ちゃんの御両親が亡くなった後に、本宅より移り住んだらしい。そして、今では身内がいなくなった沙都子もここに住んでいる。

「梨花ちゃん、沙都子、いるか？」

「圭一ですか？どうぞ上がってくださいなのです」

ドアを三回ノックして声をかけると梨花ちゃんの声が聞こえてきた。

鍵はかかっている。ドアを開ける。

部屋の中には梨花ちゃん、沙都子、レナ、魅音、そして大人の男の人が中にいた。

あの男の人は確か、玩具屋で梨花ちゃんに『赤坂』と呼ばれていた人に違いない。

「圭ちゃん〜♥」

語尾にハートマークをつけて、魅音が俺の方に向かってくる。

衝突を察した俺は倒れないように腰を少し落として、両手を広げた。

さあ、来い魅音！

ドスッ

思いつきり加速をつけた魅音が抱き着いてきた。

かなりの衝撃と重さがのしかかる。くっそ、相変わらず魅音の愛は

結構重い。

ふと、見るとレナと赤坂さんは微笑んでいるが、梨花ちゃんと沙都子はジト目で俺達を見ている。境内での一件以来、どうも梨花ちゃんも沙都子と同じく反イチャイチャ派に回ってしまったようだ。悲しいぜ！

「…魅音、座ろうか？」

「うん。圭ちゃん、こっちに来て」

俺の手をつかんで部屋の奥に進む。

魅音はレナの隣に座ると、空いている隣の場所を叩く。

「圭ちゃんはここだよ。」

「これ、決定事項だから」

「やれやれ。決定事項ときたもんだ。」

俺の人生、これからこんな感じで進みそうだぜ。

魅音の隣に座ると、どちらともなく指を絡ませた。

魅音とむきに合い、お互いに微笑む。うん、悪くない。

「そうだ圭ちゃん、詩音にはあつた？」

「ああ、さつきあつた。」

興宮に用事があるんで、それが終わってからこっちに合流すると  
言っていたぜ」

時計を見ると、午後5時だ。

何時ごろに戻ってくるかはわからないが、何か用事を片付けてから  
戻ってくるのであれば、

一時間以上かかるだろう。恐らく早くても午後7時か、8時ごろに  
なるに違いない。

梨花ちゃんが一同を見回す。

「さすがにそれまで待ってはもらえないわ。」

「詩いには結論だけ聞いて貰いましょう」  
全員が頷く。

そして、梨花ちゃんの口から驚くべき事実が告げられた。

『古手梨花は命を狙われている』

梨花ちゃんの話ではこうだ。

雛見沢に風土病があることがわかり、

「東京」と呼ばれる組織により、その研究のために入江診療所が作られた。

そして梨花ちゃんは雛見沢症候群の治療の研究に協力していたという。

監督：入江所長によれば、梨花ちゃんは、その風土病の女王であり、病気の発現を抑えているらしく、梨花ちゃんが死んでしまった場合、その風土病にかかっている雛見沢の住民が48時間以内に全員病気を発症させて死ぬと言う。

そのため、梨花ちゃんは大事に扱われていたが、どうやら『古手梨花を殺す事で得をする』という一派が、その組織内に生れ、梨花ちゃんの命が狙われているというのがわかった。

「梨花ちゃんを殺す事で得をするってどういうことだ？」

俺は聞いてみたが、梨花ちゃんは頭を左右に振る。

梨花ちゃん自身も、この辺りの事情はよくわからないらしい。

ただ一応の推測として、この雛見沢症候群の研究を推進してきた派閥が失脚することで、成りあがることができるだろう別の派閥の仕業だろうとは考えられる。

ただ、黒幕自体は分からなくても、

梨花ちゃんを殺害する実行犯は目星がついていた。

それが鷹野三四さんが率いる特殊部隊『山狗』だった。

本来山狗と呼ばれる人たちは梨花ちゃんを守っていたらしいが、どうやら梨花ちゃんの推測では鷹野さんの命令により、彼らが敵に回り殺害を決行すると考えたらしい。

ただ問題があった。

それは…

「…鷹野に直接話を聞いた限り『そういう計画があったのは確か。でも全力で守る』と言われたのです」

つまり鷹野三四自身は、梨花ちゃん暗殺という計画があったの認めつつ、それに加担しない、むしろ梨花ちゃんを守る立場だと主張したのだ。梨花ちゃんは、それがどういことがずっと考えていたが、

結局のところ答えが出ずに今日に至ったと言う。

梨花ちゃんはその場にいた全員の顔を見て、頭を下げた。

「お願いです。これは全部本当の事なのです。」

信じて下さい。そしてボクを助けて欲しいのです」

…うん。

梨花ちゃん以外の全員が唸る。

梨花ちゃん自身がこれほど悩んだのだから嘘はついていないとは思う。

だけど、たつたこれっぽちの情報で、何を、どう話し合えばいいんだ？

とりあえず、何か言ってみよう。

この話で重要な点を考えてみよう。それはまず、鷹野さんは本当に味方なのか？という点だ。

「えーとさ、鷹野さんは梨花ちゃんの味方で間違いないのかな？」

「みー…」

梨花ちゃんの声が小さい。

梨花ちゃん自身は、自信が無いようだった。

レナがおずおずと声をあげる。

「鷹野さんって変わっている人だけれども、そんなに悪い人じゃないと思う…かな？かな？」

それはどちらかといえば感情論だ。理屈になっていない。

しかし、人の機敏にさといレナがそういうなら、そうかもしれない。

ただ、勘を前提にした議論はあまり意味が無い。

レナは人の嘘を見破るのが得意だ。だから鷹野さん本人を目の前にしてレナが断言してくれたのであれば、安心できるんだけれどな。残念ながらこの状況ではレナの言葉には何の説得力も無い。

そうだ。

先ほどの富竹さんと鷹野さんを会話を皆に放してみよう。

「俺さ、さつき富竹さんと鷹野さんに、この会合に出て欲しいって言ったんだ」

皆が俺を一齐に見る。

「だけど、それは出来ないって。ただ鷹野さん達からは”裏から守るから、梨花ちゃんを表から守って欲しい”って言われたんだ。その時の二人からは真剣なものを感じた。だから信じて良いと思う」  
だが沙都子は思いつきり不信感を表した。

「圭一さん、これから殺す相手に”お前を殺す”なんて言う暗殺者がおりまして？」

悔しいが、確かに沙都子の言う通りだ。

そんなバカな奴はいないだろう。

…うん。

再び全員が唸る。

困った。梨花ちゃんを救いたいのが、どう考えれば良いのかわからない。

おいおい、前原圭一、お前は頭が良いんだろ？何か思い浮かべてみる！

その時だ。

魅音が手をあげた。

「ちよつと良いかな？まず論点を先に話し合わない？

目的が無いのに、話し合いだけを行っても意味が無いと思うんだよね」

この話の論点って、なんだ？

梨花ちゃんを救う。それが目的で論点じゃないのか？

「まず、全部を一度に考えようとするからこんがらがるんだよ。

とりあえず、全部区切って考えようか？

要は探偵ゲームと同じ、

誰が、どこで、何を。だよ。

1. この話が本当なのか。

2. 鷹野さんは味方なのか。

3. 相手の人数や武器はどれぐらいなのか。

4. 相手の襲撃場所の特定。

5. どうすれば梨花ちゃんを守れるのか。

これらを順に考えてみよう。

まず1.の本当かどうかだけど、これはいいよね？

本当だつてことでさ」

全員が頷く。

この話が本当でなければ、まず議論が進まない。

すると、次に鷹野さんが本当に味方かどうかという問題だ。

「おじさんが考えるに鷹野さんはまず味方で間違いないと思う。

理由は二つ。

まず一つは『計画がある』と証言したこと。

これはおそらく、鷹野さんにオフアアがあつて、それを断つたから、  
こういう言い回しになったんだと思う。

理由は分からないけれど、おそらく鷹野と計画者の間で利害が対立  
したんだろうね。

で、もう一つは今、圭ちゃんが言った”梨花ちゃんを守つてと言つ  
て合流しなかった”事だね」

最後のはどういう意味だ。

合流しなかった事が信用できるつてことか。

「もし、本当に梨花ちゃんを殺す気なら、その行動は二つしかないんだ  
よ。

それはとぼげるか、あるいは仲間のふりをするか。もし、後者だと  
したら圭ちゃんに誘われた時にこの場に来なきやだめなんだ。不審  
がられるし、何より梨花ちゃんの情報を手に入れることができるから  
ね。つまり、暗殺者側にとってみれば来ない事にメリットは無いん  
だ」

なるほど確かにそうだ。

この場で何が話されているのか知るのには、殺し屋達にとっては有意  
義なはずだ。

その結論を聞いて、レナは手を叩いて喜ぶ。

「それじゃあ、鷹野さんと山狗さん達は、私達の仲間なんだね！

それなら梨花ちゃんも助かるよね！助かるよね！」

だが、魅音は渋い顔をしている。

どうも事態はレナが思うほど短絡的では無いらしい。



「梨花ちゃんさ。その…山狗っていう警備の人達って何人ぐらいいるかわかる?」

「み…正確な数はわからないのですが、多分、20〜30人だと思います」

20から30人とは結構な数だ。

攻める側は守る側の三倍の兵力が必要だっけ聞いた事がある。

なら、20人もいれば、相手は60人必要だっけことだ。

幾ら何でも、そんな大人数を動員できるわけがない。

だとすれば負けることは無いはずだぜ?

だが、そんな俺の考えを見透かしたのか、魅音は頭をふる。

「圭ちゃん。残念だけど、この20〜30人って数はそのまま使えないんだ」

「どういうことだ魅音?」

「いい? 仮に山狗という人達が30人だとするよ。

まずローテーションを考えなくちゃいけない。昼に15、夜に15つてぐらいに。

次に誰を守るかってのを考える必要がある。護衛対象は梨花ちゃんだけじゃないはずだよ、

例えば監督や医師達、あるいは研究室や診療所そのものが護衛対象かもしれない。

そうすると梨花ちゃん守るための人数は多くても2〜4人つてことになる」

そうだ。全員をそのまま護衛に使えるわけが無いじゃないか。

護衛の仕事は梨花ちゃんを守るだけじゃないんだ。

梨花ちゃんは手を叩いて魅音を称賛する。

「凄いです! 確かに鷹野たちは2〜4人ぐらいボクに護衛をつけてくれているのです」

人員配置やローテーションなど、この辺りを考えられるのは、さすが当主代行だけあるな。

大したもんだぜ。

「相手がいつ襲撃してくるかわかっていたら、そりゃ警備の人達だっ

て全員スタンバツてくれているだろうけど、そういうわけにはいかない。いつ、どこで仕掛けてくるか、それを自由に決められるのが襲撃者の最大の利点だしね。逆に言えば、私達は、護衛の人が来るまで守るってのが目的になるはずだよ」

なるほど。今になつて富竹さんや鷹野さんが「梨花ちゃんを守つて」と言っていた意味が分かってきた。つまり、鷹野さん達が救援にくるまで、俺達は梨花ちゃんを守らなきゃならないってことだ。

だが沙都子が、当然ともいえる質問をここでぶつけてくる。

「しかし、そうは言いますが、相手的人数が分からなければ対処のしようがありませんわ」

しかし、魅音は事も無げに言う。

「…いや、沙都子。ある程度は予想がつくよ」

あまりにも簡単に答えたので、魅音を除く皆が驚いた。

魅音はニヤリと笑う。

「相手も、鷹野さんが協力しないと分かった段階で、護衛が何人つけられているかおおよそはわかっているはずだよ。そうすると、攻めの三倍法則、つまり、敵を攻めるには3倍の兵力が必要だつて考えるのが普通だよね」

「すると、最大4人なら、12人で攻めてくるつてわけか…」

だが、魅音は頭を左右にふる。

「その山狗つていう人達が特殊部隊というのなら、二人分の力量があると考えると良いと思う。つまり8人分。それに三倍をかければ24人。おそらく30人は最低用意すると思う。ただ…」

ただ、なんだ？

「おじさんが、その暗殺部隊を用意するなら40人は用意するね。」

それだけいけば、最初の一撃で確実に梨花ちゃんを仕留められるはずだから」

40人、大人数だ。

だけど、そんな数を事前に用意しては、すぐにバレるはずだ。

なにしろここは雛見沢だ。そんな不審者が集まればわからないはずがない。

「幾ら何でも無理だぜ魅音。そんな30人も40人も一斉に来てバレないなんて…」

そこまで言っただけ俺は気が付いた。ある。

30人も40人も見知らぬ人間が集まっても不審がられない時が！

俺が魅音を見ると、魅音はゆっくり頷いた。

「そう、圭ちゃんが思った通りだよ」

綿流しの祭りの日。

この日は雛見沢だけではなく、興宮や近隣の都市からも多くの人々が来訪する。

もしかしたら県外からも来ることだってあるだろう。

祭りの規模は年々大きくなり、今年は最大規模になると、今日一緒に設置作業していた大人達からも聞いた。つまり、30人や40人の見知らぬ人間がいても、誰も気に留めないのだ。

沙都子は青ざめた顔で叫んだ。

「それでは…梨花が狙われるのは、奉納演舞の時に間違いありませんわ！」

多くの衆人観衆の前で行われる奉納演舞。

その中にいる誰かが、何らかの飛び道具を使い狙撃してきたら、梨花ちゃんに逃れる術はない。

1人、2人ならともかく、30人からの攻撃を防ぐことなんて無理だ。

俺も叫んだ。

「梨花ちゃん、奉納演舞を取りやめることはできないのか！当日病気になるとかで！」

「みー…それは無理なのです」

梨花ちゃんは視線を落とす。古手神社の巫女として“オヤシロ様の生まれ変わり”として、奉納演舞を止める事できないのだろう。

またレナも、奉納演舞を止めることに対して疑問を呈した。

「仮に、梨花ちゃんが奉納演舞を止めたとして…その人たちは諦めるのかな？」

そうだ。それもある。

もう既に集まってしまった以上、あとは数で攻めれば良い。  
俺達の援軍がくるまでに、梨花ちゃんを殺せばそれで相手は大勝利だ。

それでは今から大会を中止するというのはどうだろうか？

いや、それも無理だ。なにしろ祭りは明日なんだ。

当日、大会中止を知らずに多くの人が集まってくるはず。

相手は、その中に紛れ込めば良いだけなんだ。

俺は手を挙げる。

「だったら、今の内に梨花ちゃんをどこかに隠すっていうのはどうだ？」

だが、即座に沙都子に否定された。

「相手は警備のプロに守られた梨花を殺そうと言うほどの相手ですよ？」

雛見沢にスパイだって潜り込ませているに違いありませんわ。隠し通せるとは思えませせんわね。

おそらく居場所を特定されて攻められるはずですよ」

反論できない。

確かに、今だって監視されている可能性もある。

ならば、もう一つの案を言う。

「だったら、梨花ちゃんを入江診療所に匿ってもらってのはどうだ？ 鷹野さんは味方だってわかったんだから、施設内にいる全ての山狗部隊の人達に守られていれば安心だろ？」

これは良い案だと思つたものの、

返ってきたのは、沙都子のため息だった。

「圭一さん。何を馬鹿な事をおっしゃっているんですの？」

その入江診療所を作った“組織”の派閥の一つが梨花の命を狙っているのですのよ？

当然、診療所には、その派閥のスパイやら仲間やらがいると思うのが普通ではございません？

それが山狗か、医師か、看護婦かはわかりませんが、そんな中に梨

花を連れて行くななんて相手の思うツボでしてよ」

正論だ。とことん正論だ。

沙都子、お前、いつからそんなに理路整然と話すようになったんだ。もしかして、お前、俺より頭が良くないか？なんか悔しいぞ…

「圭一さん。何を考えているか顔に出てましてよ…」

ジト目で俺を見る沙都子。

クソ、魅音と指を絡ませていなかったら、頭をくしゃくしゃに撫でに行くのに。

とにかく、何か対策をするには時間が足りなすぎる。

梨花ちゃんが、涙目で頭を下げる。

「ごめんなさいです…ボクがもつと早く皆に打ち明けていれば…」

その姿を見ると俺も心が痛む。

梨花ちゃんは雛見沢のマスコットとして皆から愛されてはいるが、だからといって他人におんぶに抱っこで生きているわけじゃない。

梨花ちゃんは責任感の強い人間だ。

他人に甘えるのも良しとはせず、仲間の、俺達の手を煩わせないためにギリギリまで自分で何とかしようと思っていたに違いない。

でも力及ばずに、俺達が巻き込まれるのを覚悟で頼らざるをえなかった。

梨花ちゃんにとって申し訳なさでいっぱいなんだろう。

だけどな梨花ちゃん。

仲間ってのは、頼って良いもんなんだぜ？

「気にすんなって、まだ時間があるんだ。それにしてもさ、短時間で、ここまで敵の戦略や目的が特定できるとは俺も思わなかったぜ。さすが魅音だよな！」

「へへへ…圭ちゃん、惚れ直した？」

バカいえ！俺はずっとお前に惚れっぱなしだぜ！

「…あの、赤坂さんはどう思われますか？」

ここでレナが、腕を組んで終始無言を貫いていた赤坂さんに声をかけた。

赤坂さんは、目を開いて梨花ちゃんを見据える。

「…梨花ちゃん。警察に連絡しよう。」

大石さんに保護して貰うんだ」

警察！

赤坂さん以外の全員がその言葉に面食らった。

そうだ。俺達は一番肝心な方法があることを忘れていた。

警察の保護だ。

俺にその発想が出てこなかった最大の理由は、おそらく魅音が大石さんを嫌っているからだろう。

実際、今も魅音は「大石の奴から保護を受けるだなんて」と憎しみを込めて呟いている。

だが背に腹は代えられない。

大石への憎しみなんて、梨花ちゃんの命に比べれば軽いものだ。

だけど、警察に、大石さんにはなんて言って話せばよいのだろう。

赤坂さんは俺達を見回す。

「まず、大石さんには悪いが、この話はオヤシロ様の祟りと関係があるようにふるまうのが一番だろう。大石さんはオヤシロ様関連の事件に執着している。梨花ちゃんの命が狙われているという事実もオヤシロ様と結びつけられるのであれば、躊躇はしない。具体的には明日の綿流しの祭りの日に、梨花ちゃんが何者かに『殺す』と脅かされたと言う事にしよう。それで動いてくれるはずだ。警察には僕から電話をかける。それでよいね？」

梨花ちゃんは頷く。

赤坂さんは、部屋の電話機に手を伸ばした。

「17日目（土）：古手神社：夜：前原圭一」

警察とやり取りしていた赤坂さんは受話器を置いた。

どうやら、大石さんは、警護の警官をともなつて一時間か二時間後ぐらいには来てくれるらしい。

とりあえず、一旦休息しようということになったが、時計を見るともう午後8時を過ぎていることに気が付いた。結構、根詰めて話し合いをしてしまったようだ。

大石さんが来るまで時間があるので魅音が食事をしようとする

てきた。

ちようどお腹も減って来たし、良いアイデアだと思う。

「あとどれくらいかかるかわからないから、皆、今の内に食事をとっておこうよ」

「詩音はまだ来てないけど、いいのか？」

「さすがにこの時間なら詩音も夕飯食べてから来るでしょう」

たしかにもうこんな時間だ。

来るとしたら、何か食べてから訪れるだろう。

特に異論が無かったので、食事の用意を始める。

梨花ちゃんが鍋を出し、皆が食材を持ち寄った。

魅音とレナ、そして俺は、家族には「明日、奉納演舞をする梨花ちゃんのための激励会鍋パーティーを行う」と伝えてから来た。ただ、これは方便だけではなく、実際問題として今日の話し合いがどれくらい時間がかかるのかわからなかったので、食べ物だけはとりあえず用意して、おりをみて食べようということを決めていた。

ただ鍋の材料だけは最初から持ち込んでいたものの、どんな鍋にするかまでは決めていなかった。なので沙都子が「闇鍋にしませんこと？」とか、とんでもないことを言い出してきたのは参った。

だけど、これは梨花ちゃんに笑顔で却下された。

沙都子は抵抗しようとしたが

「闇鍋にするならカボチャをいっぱい入れるのですよ☆にぱー」

と言われて無条件降伏した。

梨花ちゃん恐るべし。

結局、味噌をベースとした無難な鍋に決まった。

味付けは魅音がしてくれたおかげか物凄く俺の口に合う。

そういえば魅音の料理の腕が最近さらに上がったような気がする。

俺が婿入りするまでに、魅音の料理の虜にされてしまうんじゃないかなだろうか。

「パートナーの胃袋を掴むのは、恋愛術の初歩だからね。

おじさん、その辺に抜かりはないよ…クククク…」

そう言っつて魅音は、よく煮えたお鍋の具を箸で摘まみ俺の前に持っ

てくる。

…パクリ。

うん。美味しい。

魅音に食べさせてもらおうと美味さは倍増だ！

そんな俺の様相を、

沙都子は半分諦めたような顔で呟く。

「もう、お二人ともイチヤイチャに、一切の躊躇も

恥じらいも感じなくなりましたのでございますわね」

その通り！

赤の他人が周囲にいるならともかく、部活メンバーの前では、食べさせてもらう事に気恥ずかしさも無い。赤坂さん一人なら、気合いでカバーできる。

第一、魅音も気にしていない。

ならば、全力で食べさせて貰うというのが正しい夫婦の営みってもんだぜ！

「まあ、沙都子もイチヤイチャできる彼氏を早く見つける事だな。

そうすれば、この良さがわかるってもんだ」

俺が勝ち誇ったかのように言うと、沙都子は高笑いをする。

「お〜ほほほ！圭一さんの次元の低いイチヤイチャには、私はつき合いませんことよ！」

「なに〜？」

俺と魅音のイチヤイチャが次元が低いだと…？

！  
どういう意味だ。事と次第によってはカボチャパーティーを開くぞ

そんな俺の憤懣な顔をよそに、

沙都子は梨花に抱き着く。

「私と梨花の共同空間のように、生活そのものがイチヤイチャなのが真のイチヤイチャなのでございますよ？つまり圭一さんと魅音さんのようにイチヤイチャのためのイチヤイチャなどいう低次元なことは、私達してないのでございますわ」

なんだ、その深いんだが浅いんだかよくわからない哲学のような何



かは。

魅音とレナも面食らっているじゃないか。

梨花ちゃんが満面の笑みで沙都子の頭を撫でている。

「つまりボクと沙都子は仲良し生活真つ最中なのですよ☆にぱー」  
「なるほど」

…わかりやすい。

沙都子に足りないのは、こういう部分だな。

「どうして、いつも梨花が言うのと納得するんですのー！」

こら沙都子。食事中に両手をぶんぶん振り回すな。

これも日頃の行いと話し方のせいだぞ。

沙都子を落ち着かるため頭を撫ではじめた梨花ちゃんが

人差し指を立てる。

「ちなみに、イチヤイチャといえは赤坂なのですよ。

赤坂の奥さん好きは、とても有名なのです。

もう結婚してから五年以上もイチヤイチャしているのですよ」

梨花ちゃんに話を振られて赤坂さんは苦笑した。

確かに赤坂さんは優しそうな顔をしている。

見た目通り奥さんを大事にする良い人なんだろう。

しかし、そう言われると、

魅音とイチヤイチャ道を突き進む俺も、がぜん興味がわいてくる。

「へえ、赤坂さんはそんなに奥さんとイチヤイチャしているんですか。  
だったら、勝負しましょうー！どっちがよりイチヤイチャしているか  
！」

魅音と最高のイチヤイチャをしているという謎の自信に満ち溢れている俺は、赤坂さんに勝負を申し入れる。どんなイチヤイチャをしているのかかわからないが、俺達にはかなうまい！

だが、俺の猛然とした勝負の誘いに、

赤坂さんは優しい微笑みで返した。

「前原くん…だっけ？イチヤイチャというのは勝負をするためにあるんじゃないと思うよ。」

イチヤイチャは愛する人との想いの深さを確かめるために行う。

そういうものじゃないかな？」  
「ガーン！」

俺はショックを受けた。  
確かに、イチチャイチャで勝負しようとする考えこそがおこがましい。

全ての愛はオンリーワンであり、ナンバーワン。  
人と比べるようなものでも、自尊心を満たすためのものでもないのだ。

それをよどみなく語れるとは、この赤坂という人は間違いなくイチチャイチャの達人……！

キング・オブ・イチチャイチャだ！

「…赤坂さん、俺、間違っていました…貴方こそ、キング・オブ・イチチャイチャです！」

「あ、いや…ははは。困ったな」

魅音も興味が湧いたのか身を乗り出してくる。

「結婚して、五年以上もイチチャイチャって、凄いですね赤坂のおじさま。こういうのって、新婚三年目ぐらいまでピークだって聞きましたけど、何かコツとかあるんですか？」

「コツって言うほどのものは無いかな…」

ただ、妻に対する感謝の念は忘れないようにする…というのは、心がけているつもりだよ」

なんだこのイケメン!?

人間性が高すぎて嫉妬の対象にすらならないぞ。

こういうのを高潔な人物って言うのか。

なるほど、梨花ちゃんが頼りにするわけだけぞ。

この人は間違いなく信用できる。

魅音が俺に振り返る。

「圭ちゃん。おじさんたちも、

ずっとイチチャイチャできるように頑張ろうね！」

ああ、もちろんだぜ！

俺達はその後、赤坂さんと奥さんについての話題で盛り上がった。

食事を終えて鍋を片付ける頃にはだいぶ時間が過ぎていた。時計を見ると午後10時を回っている。

そろそろ大石さんが来る時間だ。

「17日目（土）：古手神社：夜：前原圭一」

食事の洗い物が終わる前に、

警備の警察官4名を引きつけて大石さんがやってきた。

警備の人間を連れて来てくれたのは正直嬉しい。

綿流しの日に起きる事件に関しては大石さんは間違いなく信用できる。

陰で守ってくれる山狗の人達が4人として、合計で8人がこの周辺を守ってくれることになるんだ。心強いぜ。

4名の警官は、梨花ちゃんから合い鍵と、トイレの使用許可を貰うと一階の防災倉庫へと移動した。

大石さんは下に降りる直前の4名の警官に何かしら指示をすると、梨花ちゃんが用意した座布団の上にどっかりと座る。

「んふふふふ…赤坂さん。遅れてすいません。

明日の祭りの警備についてドタバタしておりますね。

さて…それで、古手梨花さんが脅迫を受けていると相談を受けられたとか」

「ええ、そうです。梨花ちゃんが、何者かに明日『殺す』と脅かされた」と

大石さんは、梨花ちゃんの方に振り返ると目の前に座る。

「古手梨花さん。脅迫を受けたのは本当ですか？」

「みー…本当なのです。確かに、受けたのですよ大石」

「…ふむ、脅迫を受ける心当たりはありますか？」

大石さんと赤坂さん以外の全員が俺の顔を見る。

大石さんが来る前に、先ほどの話を誰が伝えるか決めていた。

本当なら、整然とまとめられる魅音が一番の適任だけど、

大石さんに関しては含むところがある。というか、ぶつちやけ嫌っている。

魅音に限って公私混同をするとは思えないが、本気で殺意を抱いた

ことを考えると、やはり部活メンバーの中で魅音の次に年長者の俺が説明するしかないだろう。

俺は手を挙げて前が出る。

「あの…大石さん、実は先ほど、俺達が話し合って…狙われる理由を考えたんですけれど…」

「前原さん？…ふむ…良いでしょう、聞かせて下さい」

俺は先ほどまで皆と話していた内容を大石さんに伝えた。

梨花ちゃんが、雛見沢にある風土病の女王であり、

彼女が死んでしまうと48時間以内に雛見沢の住民が死んでしまうこと。

その研究は入江診療所で行われ、入江所長や鷹野さんが担当をしていると言う事。

恐らく相手は、その梨花ちゃんが死ぬことで得をする者達であろうということ。

入江先生と鷹野さんにより梨花ちゃんには、常時2〜4人のスペシャリストの警備がついており、もし襲ってくるのであれば30人前後では無いかということ。

これらの話は、かなり突拍子のないことばかりであり、証拠がなくほぼ想像でしかない。

ただ、梨花ちゃんの風土病の女王という一番信じ難い部分に関しては、入江先生の証言が得られるはずなので、そこは安心できる。

その部分が信じて貰えるのなら、後の部分に関しても対応を考えて貰えるはずだ。

大石さんは全ての話を聞き終わると、腕を組んで目をつぶった。

「むむむ…古手梨花さんが死ぬと、雛見沢の住民の皆さんが死ぬ病気ですか」

その声は半信半疑、いやどちからといえば、疑惑成分の方がやや多めか。信じてよいか測りかねているようだ。

梨花ちゃんは、大石さんにすぎる。

「大石、その病気は本当に存在するのです。嘘だと思うのなら入江に直接聞いて欲しいのです」

大石さんはチラつと梨花ちゃんを見ると、赤坂さんに声をかけた。

「赤坂さんは、この話を聞いて、どう思いましたか？」

「あまり表に出せませんが…私の今いる部署でも入江診療所に不透明な金が流れている事実は掴んでいます…事の真偽は後で確認するとして、とりあえずは梨花ちゃんの身辺警護を優先させるべきかと」

その返答を聞くと、大石さんはしばらく考え込み「ちよつと失礼します。しばらくかかると思いますが、戻ってくるまで皆さん、ここでお待ちください」と言い残り外へと出て行った。

俺は魅音の耳元でささやく。

「…大石さん、信じると思うか？」

「どうだろう、見た感じ五分五分かな。まあ、おじさんは大石なんて信じてないからね。駄目なら梨花ちゃんはウチで保護するよ」

魅音の家か。確かに園崎本家は大きい。梨花ちゃん一人ぐらいは余裕で保護できるだろう。

だが、魅音は俺に意味ありげな笑みを見せる。

「ククク…それだけじゃないんだ。〃もしも〃のためのセーフティ・ハウスもあるんだよ。地下祭具殿って言うんだけどさ…ちよいつとオツなセカンドハウスってところかな？圭ちゃんもお婿さんになるんだし、良い機会だから一緒に行こう」

セーフティ・ハウスってなんだ？

核戦争用のシェルターでも設置しているのか？

園崎家って本当、色々な秘密があるんだな。

こりや結婚したら、大変なことになりそうだぜ。

「17日目（土）：古手神社：夜：大石蔵人」

大石は二階の部屋から降りて、一階に入り口付近に止めてある覆面パトカーへと向かった。

大石が考え込んでいたのは、古手梨花の話したことが事実かどうかでは無い。

それは本人の言う通り、入江診療所に直接聞きに行けば良い事なのだ。

では、何を考え込んでいたのかと、話そのものに対する違和感であ

る。

古手梨花と前原圭一の話聞いて、何かがひっかかるのを感じた。だが、それが何なのかわからない。

しかし、考え込んでいても仕方がない。

無線機で、熊谷刑事を呼び出すと入江診療所への聞き込みと、警官をもう2名、古手梨花の警護につけるように伝えた。

「今から入江診療所にですか？」

「ええ、明日の祭りの準備のために、今夜は診療所にいるとおっしゃってましたからね」

こつちに来る前に出会った入江所長の顔を思い出す。

確か、あの時に救護スペースに設置するための医療用品の確認を行うため、一旦入江診療所に戻ると言っていた。なら、今の時間は自宅には戻らずに、入江診療所にいるはずである。

「わかりました。あ、そうだ大石さん、ミフネ関連で二つほど情報が入ってきました。」

後にしますか？」

「いえ、今聞きます。なんですか？」

「二つは、ミフネ組長は園崎魅音の結納に関して、周囲にも相当怒りをぶちまけていたそうです。」

なんでも『あんな若造を婿養子にするとは許せん』とか、そういう感じらしいですね。

元々ミフネは園崎魅音の襲名にも強く反対していましたが、その園崎魅音が婚約者を得た今回の結納は、ミフネの気分を相当害したものだと思われれます」

「ほう…もう一つは？」

「ミフネ組のお抱えの医師が、水死体で発見されました…死因は特定できていませんが、何らかの事件に巻き込まれたかと思われれます」

(…医師が殺された?…あつ)

その瞬間、大石の頭の中のパズルピースが組みあがった。

それは必ずしも正しい形では無かったが、少なくとも大石には統合性があると感じられたのだ。

「ねえ、熊ちゃん。その医師、ミフネ組とトラブルになっていなかったとか、ある？」

「一部情報によると、最近ミフネ組の組長と何度か話している姿が目撃されています。ただ、トラブルがあったということまではわかっていません」

：殺された医師と組長が何度か話を行っている。

大石の額から冷たい汗が流れ落ちる。

まさか、知ってはいけないことを知ったために殺されたのではないだろうか。

だとしたら、知ってはいけない事とは何か。そう、それを大石は知っている。

もし、この想像が正しければ。

おそらく、いや、間違いなく古手梨花の言う通り未曾有の重大事件が雛見沢で起きるだろう。

「熊ちゃん、すぐにパトカーをもう一台、いや二台用意して。あとこっちに送る警官を2人じゃなく4人に変えて。それと非番の連中に全員連絡を入れて、万が一に備えて直ぐにこれるように。あと県警の機動隊にも……」

「いや、ちよつと大石さん。一体どうしたんです？明日の綿流しの祭りの警備計画の調整で、そんな人数を割く余裕なんて……」

「ミフネの目的がわかったかもしれない。もし、想像が正しければ雛見沢に血の雨が降る可能性があります。熊ちゃん……急いで！」

血の雨が降るかもしれない。

大石の言葉を聞いた熊谷刑事はすぐに「了解」と言い放ち無線を切った。

大石は一階で警備をする警官4人に、万が一に備えて、緊急時には発砲するように厳命すると、古手梨花がいる二階へと戻る。

大石は確信する。

全ての答えは古手梨花、そして園崎魅音と前原圭一のいる部屋の先にあることを。

「17日目（土）：古手神社：夜：前原圭一」

大石さんが下に降りていったあと、俺と魅音は途中だった皿洗いを再開した。

正直、台所は小さく一人で動くのがやつのスペースなのだが、俺達は体を縮め…というよりも、体を押し付け合い…皿洗いをしていった。

夫婦の共同作業。というわりにはあまりにもちっぽけな作業ではあるけれども、魅音と一緒に何かをやるというのは楽しい。

「手伝うのは結婚して最初だけっていう男の人も多いらしいけど、圭ちゃんはどうかかな?」

俺の方を笑顔で振り向く魅音。

可愛いので、ついキスをしたくなってしまう。

俺は心の中で句を詠む。

〈仕方がないさ。夫だもの。みつを〉

後ろを振り向いて、レナや梨花ちゃん達が、

こつちを見ていないことを確認すると魅音の腰に手を伸ばす。

「それはさ、ご褒美しだいじゃないか?」

「ちよつと、ダメだよ圭ちゃん…!それやったら…」

「大丈夫、誰も見てないぜ?」

俺は魅音の唇を奪う。

抵抗したのは最初の内だけで、すぐに魅音は目をとろんとさせて身を任せた。

とはいえ、長時間キスをするわけにもいかない。

おれは満足気に唇を離す。

幾ら見てないからと言って、そんな長くキスをしていれば気取られるだろう。

短い時間だが、とりあえずこれで十分だ。

そう思った矢先だった。魅音が俺の手首を掴み、睨みつけるような瞳で俺を見る。

ひどく、息が荒い。

「圭ちゃん…ダメって言ったのに…」

もうダメだよ。おじさんに…火つけちゃったんだからね」



お、おい魅音。

お前、一体何をやる気だよ？

魅音は、後ろを振り返って梨花ちゃんを呼ぶ。

「梨花ちゃん、御免。おじさんと圭ちゃん、今日の設営準備で汗かいちゃってベタつくから、本宅のシャワー使っても良いかな？」

「みー：それは構わないのです。ただ大石が帰ってくるので、できるだけ早く戻ってきて欲しいですよ」

「わかってる。ありがとう梨花ちゃん」そういつて魅音は俺の手を掴んで強引に部屋から連れ出す。

魅音はどこに向かっているんだ？

言った通り梨花ちゃんの本宅、お風呂場に向かっているのか？

途中で車の窓に顔を突っ込んでいる大石さんの姿を見て、そのまま本宅の方へと進んだ。

本宅の中に入ると、魅音は躊躇なく進んでいく、おそらく何度も来ているんだろう。

そして、風呂場の中に入るとドアを閉めて、俺を壁に押し付けた。

「お、おい、魅音」

魅音の目が尋常じゃないほどギラついている。

息も激しく激しく興奮しているのが見て取れる。

一体どうなっているんだ？

キスだけで、ここまで発奮するなんて異常だぞ？

「圭ちゃんさ、今日はどうしたの？」

ずっと、おじさんを誘惑してさ…」

何の話をしているんだ？

俺が誘惑しただって？

「境内であつたときにさ…アレなに…？」

珠玉のような汗を流して、あふれるような笑顔で私を見たでしょ？  
太陽の光に照らされた圭ちゃんが、あんまりかっこよくて…

おじさんショックで心臓が止まりそうだったんだよ…？」

はあ？何言ってるんだ？単に設置作業して汗流していただけだろう。

それに、婚約者のお前の顔を見れば笑顔にもなるつてもんだらう

が。

「部屋に入ったら、入ったらで、すぐ隣でさ…

すっごい良い匂いさせてるし…おじさん、圭ちゃんの匂いにクラクラして

自分を抑えるのでいっぱいいっぱいだったんだからね…？」

あく、汗けっこうかいたからな。汗臭くなるだろうぜ。

…って、魅音。お前否定していたけどさ、やっぱり匂いフェチじゃないか？

「そして、さっきのはなに？食器洗っている最中におじさんに体を寄せて、キスするなんて…

圭ちゃん、絶対に誘ってたでしょ？」

…誘っているつもりはなかったが。うん。

その、悪かったとは思っている。

「…そんなつもりは無かった。って顔しているけれど、もうダメだよ。

さっきも言ったけど、おじさん火がついちちゃったんだからね」

魅音の顔が近づいてくる。これはダメだ。濃厚接触するつもりだな。

したいといえば、俺もしたいが、魅音主体でイチャイチャしたら止まらなくなる。

大石さんが部屋に戻る前に、すまさなければいけないんだ。

なら、答えは一つしかない。

初めて恋人として魅音を自宅に連れ込んだ時と同じように…

大火は、爆薬で吹き飛ばすしかない！

俺は魅音の肩を掴むと、

体を入れ替えて、逆に魅音を壁に押し付けた。

「け、圭ちゃん…!？」

先ほどまで猛獣モードだった魅音が、壁に押さえつけられてまるで肉食獣を目の前にしたウサギのような顔になっている。だが、鈍感な俺にもわかる。

その魅音の瞳の中には、怯えと共に期待感がにじんでいる。俺が何をしてくるか、期待感で頭がパンパンなんだな？

ああ、大丈夫だぜ。滅茶苦茶にしてやるよ。  
詩音の言葉を思い出す。

―たまには肉食獣になってお姉を襲ってみてください。きっと美味しいですよ―

そう。それが今だ。

いくぜ、魅音、耐えられるか？

俺は舌なめずりをした。

…十分後。

魅音は俺の体に、かろうじてしがみついていた。

激しく呼吸を行い、頭をもたげている。

体を震わせ、足がおぼつかない様子だ。

俺の猛烈なデーブキスによって三度にわたり“トんだ” 魅音は、

今や自分の体を保つだけで精一杯の状況となっていた。

自分でも少し驚く。

ここまで、俺は魅音をキスで蹂躪することができるとは思わなかった。

人間、やればできるもんなんだな。

「…まだ、するか魅音？」

俺の言葉に、魅音は恍惚した瞳で答えた。

その中にはハートマークが浮かんでいる。

「…圭ちゃん。もう、おじさん…完全に圭ちゃんに調教されちゃったよ。」

圭ちゃん無しじゃ、生きていけない体にされちゃった…」

おいおい、人を調教師みたいに言うな。

全く大げさなヤツだぜ。

額にキスをし、何か言おうとしたその時、

扉を叩く音と沙都子の声が聞こえてきた。

「魅音さん、圭一さん、大石のおじさまがお戻りになりましたわよ

梨花にはイチヤイチャは黙っておきますから、早くおすみになって

くださいませ」

俺達は慌ててその場で服を脱ぎ、急いで水のシャワーを浴びて着替

えた。

シャワーから着替えに移行するまでの所要時間はわずか三分。我ながら素早い。

体の流すので精一杯で一緒にシャワーを浴びた魅音の裸をじっくり見れなかったのは残念だ。

そういえば、あれだけ魅音と激しくやりあっているのに、俺は今までに魅音の全裸を見たといえるほど見てないな。

今度お願いしてみるか？

今の魅音だったら、多分、恥ずかしがっても了承してくれそうだ。

「見てないで早く着替えてよ、圭ちゃん」

「え？ああ…わりい」

魅音は持つて来たカバンから、着替え用の俺の服を取り出す。

おいおい、また俺の部屋から勝手に服を物色してきたのかよ。

助かったが、どうも釈然としない。

だが、とりあえず礼を言う到着替える。

魅音も持つて来た服に着替えた。

黄色いTシャツにズボン。

最近俺に気兼ねして制服しか着てこなかったので、

その私服を見るのは久しぶりだ。

それと…これはなんだろう？

銃を入れるホルスターがついたサスペンダー？ハーネス？のようなものを上半身につけている。

そしてカバンの中から、大石さんを殺害しようとしたときに使おうとしたカラフルな拳銃を取り出すと、そのホルスターの中にしまった。

「二応、護身用。何かあるかわからないからね。

見た目はただの玩具の拳銃だから大石も気が付かないでしょ」

現役警察官の前で銃を装備して出て行くのか。

凄い度胸だなお前は。

痺れを切らしたのか沙都子が扉を開いて中に入って来た。

「お二人とも、用意ができました？そろそろ行きますわよ」

俺は魅音の手を取り、沙都子と一緒に二階の部屋まで急いで戻る。中に入ると大石さんが赤坂の横に座って、おそらく梨花ちゃんが出たであろうお茶を飲んでいた。

「これはこれは…んふふふ…着衣が乱れています、

お二人でハッスルしてきたんですかあ？」

慌てて上着を整えようとする俺。

それを見た魅音が俺の尻を叩く。

あ、今のは大石さんのハツタリか。

畜生、乗せられたぜ。

大石さんが笑っている。

待たされたので、からかわれたんだ。

沙都子は梨花ちゃんの横に座ると、

俺と魅音も、先ほどとおなじくレナの横に座り、指を絡ませた。

全員がそろったのを確認した大石さんはゆっくりと口を開いた。

「まず、皆さんに伝えたいことがあります。犯人の正体と目的がほぼわかりました。古手梨花さん、それに園崎魅音さんと前原圭一さん、お三方を我々警察で保護いたします。すでに保護のためにパトカーが二台こちらにむかっておりますので、到着しだい移動して頂きます」

犯人の正体と目的がわかっただって、この短時間に。

さすがは警察だ。大したもんだぜ。しかし、なんだって俺と魅音まで保護の対象になるんだ。

「ヤツらが狙っているのは梨花ちゃんなんですよね？なんで俺達まで…」

「それはですね。前原さん。犯人たちの本当の目的は…あなた方二人だからなんですよ」

…え!?

大石さんを除く全員に衝撃が走った。

一体どういう事なんだ。俺達は梨花ちゃんを守るために集まったはずだ。

なのに、本当に襲われるのは、俺と、魅音だった…？

「今からお話することは、警察の公式見解ではありません。私の一人の：いわば妄想と考えて下さい。何の信ぴょう性も無い、証拠もない。本当にただの妄想です：よろしいですか？」

俺達は全員頷く。

一体どういふことなのか知りたい。

何を大石さんは話すと言うのか。

「まず、そのまえに園崎魅音さんにお聞きしたいことがあります。貴方には黙秘する権利があります。ただ、絶対に違ふという場合は、必ず否定して下さい。お願いします」

大石さんはそう言うと言おうと真剣な表情で魅音を見る。

魅音は微動だにしない。一体何を聞こうというのだろうか。

「：何日前、ミフネ組が大規模な銃の取引を北海道で行いましたが、ご存知ですか？主に拳銃を中心として、ロケットランチャーまで仕入れたと言う話があります」

「……………」

魅音は答えず、大石さんを見据えている。

違ふのなら全力で否定して欲しいと大石さんは言っていた。

だとすると、沈黙は肯定になるのか。

「それでは次の質問です。その大量の銃器は、もしかして：明日の綿流しの祭りに運ばれる予定ではないのですか？」

「……………」

やはり魅音は答えない。

そうすると、この話も事実。ということなのか。

少なくとも知らないのなら、知らないと言定するはずだ。

しかし、ミフネという奴はどこかで聞いた事が：

あ：そうだ、思い出した。

——へへへ、こりやえらい若いボンが、婿養子にきたもんですな——

園崎家の結納の時に、いやらしい笑顔で近づいてきた男だ。

たしか魅音に、アイツの名前がミフネだと教えてもらったんだ。

大石さんは大きく息を吐き出すと姿勢を整える。

「…数日前、園崎組系のミフネ組が北海道で大規模な銃器の取引があることを掴みました。

我々は、それを園崎組が何らかの抗争を起すための準備だととらえていました」

それって、いわゆるヤクザ同士の争いというヤツか。

それが俺達に何の関係があるんだ？

「ところがですね前原さん、無いんですよ。抗争をしていたなんて事実は」

やばい。

また俺、顔に出しちゃったのか。

「では大量の銃器は何のために用意されたんでしょうね。

外では無ければ内に使うため…そう考えるのが、普通ではありませんよね？」

「それではミフネのおじさまが反乱を起こすために準備をしていたと？

刑事さんだけあつて想像力が逞しいですね」

魅音が嘲笑気味にそう言ったが。

大石さんは真顔で返した。

「それでは園崎魅音さんにお聞きしますが、

彼が貴方の次期当主に対して反対しているのはご存知ですよね」

「私の年齢が、まだ若いからって理由ですよね。

それは時間が解決してくれる問題だと思えますけれど？」

「本当にそうおもっていらっしやるんで？」

……………

魅音は返事を返さない。

「園崎魅音さん、貴方と前原圭一さんが婚約した後に、ミフネさんの誹謗中傷が激しくなっていることは、既にご存知ではありませんか？単純に貴方の年齢が若いからって理由だけでは説明が付きませんよね？貴方も、お魎さんも、ミフネさんを信じておられるそうですが、あなた方の信用に足る人物でしょうか。ヤクザなんて職業は、どんな方法でも他人を蹴落として、自分がてっぺんに立ちたいって人間がなる

ようなモノですよ」

「……………」

「ちよつと待つてください」俺は思わず声を出した。

さつきから大石さんは何を言っているんだ。その言い方だとまるで俺と魅音が婚約したのが原因のようじゃないか。だいたい、婚約したからって、そんなに大げさになるようなことなのかよ。

「俺と魅音が婚約したからって、ミフネって人が反乱起こす理由になるんですか」

「…前原さん。貴方にとっては結婚は愛する人と生涯を共にするためのイベントなのでしょう。それは一般的には正しい認識です。しかし、園崎家ぐらいの大きい家にとってはそうでは無いんですよ」

大石さんは俺が何もわかっていない、という風に頭を左右に振る。

「これぐらいの大きな家になると結婚とは政治、謀略、権力争いの道具です。例え当主の夫という、なんの権限も無い立場でさえ、本来であれば生き死をかけて奪い合うものなんですよ…もつとも、ミフネの目的はそこにあるとは思えませんかね」

「そんなの…相手のことを何にも考えていない結婚なんておかしいですよー！」

俺は無性に腹正しくなってきた。

結婚というのは、好きな相手を幸せにするために行うためのものだろう。

相手の人生を支えるためにやるものじゃないのかよ。

それを政治だか権力だか知らないけど、自分の欲望のための使うなんて、そんなのは絶対におかしい。間違っている。

「圭ちゃん…」魅音が顔を真っ赤にして俺の手を強く握りしめる。

少し俺も熱くなり過ちまったようだ。クソ。でも腹が立って仕方ない。

結婚を道具としか考えないなんて。

相手に尽くす覚悟も持ち合わせていない奴が結婚なんてするんじゃないよ。

大石さんは苦笑しつつ、話を続ける。



「まあ、前原さんの言う事もごもつともです。とりあえずこの話はおいておきましょう。」

次に問題となるのが…先ほどの連絡で、ミフネ組が抱えていた医師が…おそらくミフネ組によって…殺害されたという事件が飛び込んできました」

レナが首をかしげている。

「あの…お医者さんが亡くなられたのが、なにか関係あるんですか？」  
確かにいたましい事件だと思っただけ、

それがこの件とどう結びつくのだろう。

「竜宮さん。医者ってのはね、

存在するだけで大金を得ることができるとですよ。特に犯罪行為ではね」

大石さんによれば、

医師が一人でもいれば、一般にはできない違法行為も合法的に行うことができるらしい。

小さい所では、医師の診断があれば特定の医療系施設に、例えばヤクザの企業舎弟が運営する施設に患者を誘導することができる。

また、薬の処方箋を出せば、病院にいかずとも様々な薬を手に入れることができる。

薬の横流しは、儲けが大きいとはいえないが、ほとんど捕まることが無くリスクが少ない。

犯罪や法律的観点から見れば、嘘の診断書を医師に書かせれば、保険料の申請や、物損事故の裁判の時に有利に働かせることもできる。

また、純粹に医師がいれば保険をまともに入っていないヤクザ連中でも格安で治療を受けることができるだろう。

医師一人いれば、年間数千単位で荒稼ぎすることも可能なのだと言おう。

「だから、普通はね。医師がやらかした場合でも、殺しはしません。死ぬまで働かせるだけです。」

ですが、奴らはその不文律を破ってまで…儲けを捨ててまで医師を殺しました」

つまり、年に数千万のもうけをふいにしても良いぐらいの何かしらのメリットが、デメリットがそこに存在したということだ。

それは一体何なのか。

「私がおね、思うには、その医師は知ってはいけないことを知ってしまったからだと思います：例えばそう、世間的には知られてはおらず、周囲に甚大なる被害を及ぼし、それが世間に広まってしまおうと、ミフネにとって不都合になる病気を知ってしまったから：とか」

世間的には知られてはいない、周囲に甚大なる被害を及ぼす病気。

それって雛見沢症候群のことかよ！

「私が皆さんから聞いて思ったのはですね。状況があまりにもミフネにとっては都合がよすぎるといふ点だったんですよ。木を隠すなら森の中といえますでしょう？古手梨花さんが死に、その後、雛見沢の住民が死ぬのであるならば、当主であるお魎さんと園崎魅音さんも含まれるはずですよ」

そして、古手梨花の暗殺に必要な人員は祭りの日に乗じて集めることができる。

いや、もつといえは園崎関係であれば、知らない人が多少多くても気にはされないだろう。

なんといいつても、当日は園崎家次期当主園崎魅音の結納披露も行われるのだ。

そのための大規模な催しも用意されている。

「そして先ほどの皆さんの話にあった『当日に暗殺者達が一般客に紛れ込む可能性』と、

私が園崎魅音さんにお聞きした『綿流しの祭りの日にミフネ組が大規模な銃器を運ぶ計画』

…これを照らし合わせると、一つの答えが出てくるんですよ」

つまり、当日に雛見沢に来た暗殺者達がミフネ組が持って来た銃器を持って梨花ちゃんを襲う。

そういうことなのか。

「北海道から密輸されてきた銃器が、いつ、どこに送られるのかはわかりませんでしたか：」

もし、ミフネ達が本当に反乱を起こすのであれば、そのタイミングで雛見沢に送るのは間違いありません…この答えて、ほぼ間違っていないとは思いませんか、園崎魅音さん？」

魅音は、その問いには直接答えず

苦渋に満ちた顔で呟いた。

「…まさかミフネのおじさまが反乱を起こすなんて」

魅音の気持ちはなんとく察しがつく。

信じた相手に裏切られ、しかも、直接俺や魅音だけではなく、梨花ちゃんも巻き添えになった形で行われる。心理的には相当きついでろう。

「元々入江診療所の設立には園崎家の強い後押しがあつたとも聞きます。ミフネがそれに何らかの形で診療所に関与し…もしかしたら、あなた方の言う“組織”が、ミフネに接触してきて、雛見沢症候群の情報を得たのかもしれない。それによって、今回の反乱を企てた。そう思えば筋は通ります。ただね…それだけじゃない。とも私は思うんですよね」

大石さんが含みのある言い方をして魅音を見つめた。

魅音は厳しい視線を向ける。“それだけでは無い”とはどういう意味だ。

「ねえ、園崎魅音さん…ミフネさんが“オヤシロ様”じゃないんですか？」

その場が静まりかえる。

理解するのに、何秒が必要だった。

ミフネがオヤシロ様じゃないかってどういう意味だ。

つまり、ミフネこそ、この雛見沢で起きた連続怪死事件の首謀者だと、そう言いたいのか。

なぜだ。どういう理屈でそういう考えに至るんだよ。

「私はね。古手梨花さんが脅されという皆さんの話を聞いて妙な違和感を感じていたんですよ。

だって、そうでしょう？今までの、雛見沢でおきた事件は、全てオヤシロ様に歯向かった者達への罰だと考えられてきました。だが、今

年に限ってはそうじゃない、オヤシロ様の化身である古手梨花が脅かされた。これって、なぜだと思えますか？」

なぜって、それは、つまり：梨花ちゃんが脅されたというのは、俺達がついた嘘だからだ。

しかし、それを大石さんに言うわけにはいかない。

そんなことをしたら信用を失い、梨花ちゃんを守ってはもらえなくなるだろう。

「これはね。代替わりの宣言だと思っんですよね」

代替わり？

一体何の代替わりだ。

「ミフネさんはね。おそらくオヤシロ様として次々と刑を執行してきてんでしよう。

造反者やその一族に対するね。そして思ったんじゃないでしょうか。オヤシロ様の“力”を見て、人々が、オヤシロ様信仰を取り戻し、祭りは年々派手になっていく、そしてそれに伴い園崎家の名声も高まる。そんな自分こそ、本当のオヤシロ様であると。

だから、こそ、この五年目の節目に、古手梨花さんを殺害し、自分がオヤシロ様の正統なる後継者であると宣言したかった。こう考えれば辻褄があうんですよね」

俺は、いや、正確に言えば大石さんを除く全員が絶句した。

俺達のついた嘘が、俺たち自身に返って来たのだ。そして困ったことに、それは、それなりに説得力がある。

自分達のついた嘘が自分達に返ってくる。前にギックリ腰で倒れた時と同じだ。あの時、ひどく魅音は辛い目にあい怒りで身を焦がした。それが再び自分達におとずれたのだ。

大石が鋭い視線で魅音を見つめる。

言いたいことは分かっている。そして実際、その通りの事を大石は口に出した。

「園崎家は、ミフネさんを使ってオヤシロ様の“力”を示していたんでしよう。違いますか？」

「違う！」俺は反射的に立ち上がって、大石さんに叫んだ。

「なぜ、そう言い切れるんですか前原さん。貴方は婿養子がきまり、何か重大な話を聞いたとでも？」

「それは…」

答えられない。なぜなら、園崎家がオヤシロ様では無く、お魘のバアさんがオヤシロ様を探していることは秘密なのだ。

おそらく詩音の態度を見る限り、実の妹にさえ魅音は話してはいない。本当に秘密の中の秘密なんだ。それを俺が話すわけにはいかない。魅音の口から了解を取るまでは、絶対に話してはいけないことだ。

視線を落とす俺に、

大石は諭すように語りかける。

「前原圭一さん。貴方のお気持ちにはよくわかります。貴方は園崎魅音さんを愛している。だから、魅音さんは、そんな人間ではないし、貴方が入る家だって、そんな人たちとは思いたくないでしょう。でもね、覚えておいてください。園崎家は“そういう連中”なんですよ。貴方にも、もしかしたら一度はお話したかもしれませんが。園崎魅音が将来手に入れるのは、園崎組というヤクザ組織だけでは無い、この辺一帯を牛耳る権力そのものなんです。そのためなら、“あらゆること”をやってみせるんです」

くっそ！くっそ！くっそ！

魅音じゃないけどハラワタが煮えくり返る。

この大石って奴は、心の底から園崎家が憎いんだな。

こういう奴だと知っていれば、俺も魅音を説得などせず、

預かった銃を持ってさっさと撃ち殺しにいったらどう。

感謝しろよ大石ッ!!

お前が生きていられるのは俺のおかげなんだからな！

…クイツ

誰かが俺のズボンをひっぱる。魅音か。

魅音は大石を方をみながら、つぶやく。

「…圭ちゃん座って」

俺も急速に冷静になってくる。

ちくしょう。こうやってすぐ感情的になるのが俺の悪い癖だぜ。わかつてはいるが、怒りは収まらない。憤懣やるせないってこういうことを言うんだな。

また一つ賢くなったぜ。

魅音は真正面から大石を見つめる。

「面白い話をありがとうございます。大石のおじさま。

それで今後はどうなされるおつもりですか」

「んふふふ…ご安心ください。最初に言った通り、あなた方は警察が全力でお守りします。もう、そろそろパトカーも到着するでしょう。それに乗って頂き、しかるべき所まで移動して貰います」

時計を見ると、丁度午後12時、いや午前0時になったところだった。

大石が立ち上がると思ったその時だった。

…パツシュ…パツシュ

外で、何かを打ち上がる音が聞こえ、小さな爆発音と光がとどろいた。

打ち上げ花火だ。こんな時間に一体誰が花火で遊んでいるんだ。

その時、沙都子が絶叫した。

「侵入者用のトラップが作動しましたわ！大石のおじさま、皆、伏せて！」

…シュ！シュ！シュ！

俺達が伏せるのと、窓ガラスが割れるのがほぼ同時だった。

空気を切り裂く音と共に、次々と室内の物が砕かれていく。

煙とガラス、そして砕かれた何かの破片が襲い掛かる。

だが、射線が高かったのか、誰もケガはしていないようだ。

一連射が終わった所で魅音が片膝について窓から外を見る。

沙都子の仕掛けたトラップ花火によって外は昼間のように視界が良好だ。

「あいつら…ミフネのおじさまの兵隊だ」

ミフネのおじさま。つまり、大石の言う事は正しかったのか。

俺も少しだけ顔を出して見る、外には黒い服をきた男達が何人も暗

がりから近づいてきている。

1人や2人じゃない。10人、いや20人以上はいる。

「ミフネの組員って、本当なのか魅音」

「知っている顔が何人もいるよ！今日もお昼頃に話した人もいる！

…まずった、今日ここで鍋パーティーをやることを話したんだ」

魅音が痛恨の顔をしているが仕方がない。

結果だけを見ればとんだ大失態だが、お昼の時点でミフネの組員達が敵だなんて分かりっこない。

問題は、これからどうするかだ。

だが、このような状況を想定していたんだろう。梨花ちゃんの動きは素早かった。

押入れを開き、中にあつた隠し通路を作動させて俺達を誘導する。

「ここから外へ出られる！急いでッ！」

一階から銃声が聞こえる。

下で護衛してくれている山狗や警官の人達が、応戦してくれているんだ。

だがあの人数では、抑えきれぬわけがない。

見捨てるのは心苦しいけど、今は脱出に専念するしかない。

「いそごう圭ちゃん」

魅音に足されて、俺も頷く。

今、重要なのは梨花ちゃん、そして魅音やレナや沙都子連れてこの窮地から逃げる事。

考えるのは、その後だ。

### 第39話「18日目（日）A「オヤシロ様」

「18日目（日）：古手神社：未明：ミフネ」

ミフネは黒塗りの車の中で葉巻を吸っていた。

葉巻とは勝利の印に他ならない。戦いの勝利を祝い、それを味わうためのものだ。

そう言っていたのは誰であったか。

かつては葉巻は共産圏の革命家達に愛好されていたという。

そのせいで自由経済諸国の中では葉巻が禁止されているところもあるらしい。

勿体ない話だとミフネは思う。

くだらぬ理由でこの美味さが味わえぬとは、もつと懐を大きくしないと人生は楽しめないものだ。

窓ガラスを叩く音がする。若頭だ。

ゆっくりと窓ガラスを下げると、若頭が頭を下げた。

「パトカーが二台接近していましたのでタイヤを狙撃して足止めをしました。」

しばらくは合流できないでしょう」

「…標的は？」

「取り逃がしました」

いつものミフネなら、こんな報告をした相手には、

葉巻の灰がたっぷり入ったクリスタル製の灰皿を脳天に喰らわせてやっただろう。

だが、そのようなそぶりは見せない。

いや、今日に限っていえば、誰が報告しに来たとしてもそんな態度はとらないはずだ。

なぜならば、

今日、ここに引き連れてきた40人の組員は、ただのヤクザ者やチンピラでは無い。

ミフネはこの一大蹶起に本物の極道ばかりを集めたのだ。

今回は失敗が許されない。



そのためミフネ組で経験も実績もある者達だけを招集した。

多少の失敗や誤差があつたとしても、自力で取り返すことができる判断力と行動力を持ち合わせている連中だ。

焦る必要など微塵も無い。

ミフネは気分を害した様子もなく鷹揚に答えた。

「梨花ちやまを警護しているという護衛はどうした？」

「はい。情報通り4名おりましたが無力化しました。全員警官のようです」

古手梨花にはプロの護衛が4名ついていると野村という女から聞いてはいたが、それが警官だと言う話は聞いてはいなかった。騙したのか。

（まあ、良い：どうせ警察とは戦う予定だった。今更、気にする必要も無い）

「で、奴らはどこに向かった？」

「逃げた方向を見るに、どうやら園崎本家に向かったようです」

それを聞いた瞬間、ミフネは爆笑した。

なんと自分は天運に見舞われているのかと喜ぶ。

これが山などに逃げられたのなら、捜索は困難になっただろう。

しかし、よりによって園崎本家に逃げ込むとは。

園崎本家は確かに要塞のような場所だ。多数の監視カメラに、防衛装置がある。

地下には祭具殿と呼ばれるセーフティ・ハウスもあり、銃器も多数用意されている。

一旦閉じこめれば、難攻不落とも言えるだろう。

だが、それは攻める側が何も知らない場合の話だ。

ミフネはあの屋敷を熟知している。どう攻略するか最初からわかっているのだ。

その上、あの屋敷には明日の結納披露の為に園崎お魎も滞在しているのが分かっている。

一、ミフネの本来の目標である古手梨花・園崎お魎・園崎魅音・前原圭

その四人が一か所に集まってくると言うのだ。これが笑わずにいられようか。

「この機会を生かせ、標的だけは必ず全員を殺せ。邪魔しなければ残りの奴らは放っておけ時間の無駄だ。ランチャーも持っていけ、園崎家の門は固いからな。周囲を気にせず遠慮なく撃ちこめ」  
「はっ！お任せくださいオヤジ」

若頭は一礼すると、車から離れて黒服達に指示を行う。

（天下を取るには、天・地・人が必要だつて話だが、今の俺には全部がそろつていやがるぜ）

天、幸運。

地、場所。

人、人員。

まるでミフネに味方をするように全てが都合よく動いている。

ミフネは笑みを浮かべた。

そもそも、最初の計画では明日の綿流しの祭りの時に組員を順次招集し、

頃合いを見て、当日に運搬された武器で蹶起する予定だった。

標的は野村に頼まれていた古手梨花の抹殺ばかりでは無い。

それならば40人もいらぬ。手練れを10人集めれば良いだけだ。

襲撃人数は、園崎魅音が想定した最大40名という数と符合しているものの、

ミフネは、園崎魅音とは考え方が異なっていた。

護衛のプロが4名いようと、自分達もまた犯罪のプロである。

従つて4名の護衛は、あくまで4名としかカウントしていない。

だが、ミフネの本当の目的は、その先にあった。

古手梨花を殺害後に、その足で園崎家の現当主・お魎と次期当主園崎魅音、その婚約者前原圭一の抹殺を行う。そのために40名もの兵隊を動員したのである。

結納披露が始まった直前に一斉に武装隆起。

周囲にいた警官や、園崎家の護衛を始末する。

当日は結納披露だけあって、園崎家の重鎮も集まるだろう。彼らもミフネを支持しない場合は殺害する予定でいた。

どうせ古手梨花が死ねば、48時間後には狂乱が起きて死体の山となるのだ。

誰を殺して騒ぎになったとて、2000人が亡くなる未曾有の大混乱が起きれば、些事のようなものだ。すくなくとも、しばらくは警察が自分達に目を向けることはありえない。

その間に園崎家をのっとり、財政界に影響力を及ぼす力を持てば良い。

そして、この大量殺人を、雛見沢で起きるであろう大狂乱にかけて、うやむやにする。

そのための根回しの準備もすでに整っている。

だが、いざ決行の前日となる今日、標的となる三人：古手梨花、園崎魅音、前原圭一が一か所に集まるという情報が、祭りの設置準備のために送りこんでいた部下から届いた。

部下が園崎魅音から直接聞いた話では、今夜は古手梨花を激励するための鍋パーティーを開くのだと言う。

それを聞いたミフネは、瞬時に全ての予定を前倒しにすることを決めた。

ヤクザのケンカはスピードが命だ。相手が用意するまで待たない。その場にあるものでいきなり喉を切り裂き、腹をえぐる。

それはある意味において大雑把であるかもしれないが、

一流のヤクザとは自分の勘と行動力を最大限に信じて行動するものだ。

計画を厳守して当日まで待ち、標的四人を逃したとあったのならば目もあてられない。それこそ間抜けだろう。

必要とするのは、四人の首なのだ。そのために必要ならば行動にうつすのみである。

明日来る予定だった組員達に招集をかけて、テキ屋連中に運搬させる予定だった銃器を直接運ばせて雛見沢に来るように呼び掛けた。

もし銃を積載した車が警察に呼び止められ、中をあらためられた場

合は始末予定であったが運よくそれは起きなかった。

そして彼らが到着し全ての準備が整ったのが午後10時過ぎだった。

ちようと、魅音と圭一がシャワーを浴びて二階に戻る時とほぼ同じである。

先に来ていた組員により、すでに大石と警察が来ているのがわかっていった。

情報が漏れていたのかはわからないが、高度に警戒していることだけは明らかである。

そこで標的の誰かが一階に降りてきた時に、襲撃する計画となった。

40人の黒服には全員、消音装置をつけた拳銃を握らせている。

標的と警官達に一斉射撃をすれば一瞬で全てが終わるに違いない。

ただ、ここで少し問題が起きた。標的が話し込んでいるのか、なかなか部屋から出てこない。

六月とはいえ、夜外に居続けるのは大変だ。彼らは兵士では無く極道なのだ。

そこで0時になった時点で、すなわち綿流しの日に一斉に攻撃をしかけることを決めた。

そして0時を回り襲撃を開始したが、文字通り思わぬ罠が待ち受けていた。

それは沙都子の用意した侵入を知らせるためのトラップだった。

打ち上げ花火が上がり、光が侵入者たちを照らした。よもやトラップが仕掛けられているとは思わなかった彼らは、慌てて一斉に二階の窓に銃弾を撃ち込んだ。

慌てた状態であっても標的にいる場所に銃撃を行なえたのは大したものだったが、

全員が二階に撃ちこんだため、一階にいた4名の警官に気が付かれず応戦を招いた。

これより40人の黒服達は、足止めをくらってしまう。

さらに沙都子のトラップにより…それはほんのイタズラ程度の些

細なものであったが：彼らの脚を鈍くするのに十分な効果を与えた。そのため、建物の裏からまんまと標的全員に逃げられてしまったのである。

だが、ミフネには余裕がある。

逃亡先が園崎本家だとわかったからだ。

（…俺にはツキがある。奴らは園崎本家に向かうとはな。まるで天が俺達を助けるかのようだ）

事前情報では園崎本家には、お魎一人しかいないことがわかってい

る。仮に逃げた奴らが全員集まったとしても10人もいないだろう。

殺しに手慣れた極道40人に襲われたら、ひとたまりもあるまい。

（前原圭一、キサマさえいなければ…）

ミフネは憎々しげに、自分をこのような凶行においた一人の若者の名前を思い浮かべた。

前原圭一という若造が、北条沙都子奪回運動を雛見沢で起こさなければ、このような事態を起すこともなかったのだ。

北条沙都子奪還運動…この一件でお魎はすっかり前原圭一を気に入り、園崎魅音が前原家に泊まりに行ったのを良い事に婿養子にしようとしてた。

それがミフネにとっては、ケチのつけ始めだった。

ミフネら周囲が反対しても

「お前ら。うちの跡取りの魅音がキズモンにされて、

それを黙って見とれ、ちゆうんか？あのボンにケジメえつけさせて責任を取ってもらう。なんか間違った事をワシは言つとるか!？」

園崎お魎は、責任論で強引に決定させた。

後は知つての通り、園崎魅音と前原圭一の婚約が決まり宴会まで行われた。

ミフネは眉をひそめる。見た所、前原圭一はただのガキにしか見えない。一体何がそこまでお魎の心をひきつけたのかがわからない。

だから対面したお魎に思わず「麒麟も老いれば駄馬となる。子供の頃の天才児も大人になったら普通の人っていいまずぜお魎さん」と愚

痴ってしまった。

今でも忘れられない。不快になった顔のお魘から、  
「で、ミフネ。お前はボンと同じ年の頃に何をやっていた？」  
と言われた時の屈辱は。

長年園崎家・園崎組に尽くしてきた自分に対して

園崎お魘は最大限の恥辱を味合わせたのだ。

（あの時の屈辱は忘れん。俺が死ぬ思いまでして、どれだけ園崎家に  
尽くしてきたか…それをあのババアは…足蹴にしやがった）

「ははは、お魘さんは痛いところをつきますなあ」

あの時、ミフネは笑いながら返事をおこないながらも、焼けつくよ  
うな激しい憎悪に身を焦がしていた。

今思い出しても怒りで我を忘れそうになるぐらいだ。

あの後、外に涼みに行った時に前原圭一と園崎魅音の姿を見つけ、  
思わず銃を抜きそうになった。

“ お魘に気に入られやがって ”

それはミフネ自身も気が付かないまま膨れ上がった激しい嫉妬心  
だった。

二人の姿を見てはじめてミフネ自身も気が付いたのだ。

（長年、園崎家に仕え、血反吐を吐いて働き、文字通り死ぬ思いをして  
幹部に上り詰めた自分に対してこの圭一というガキはどうだ？）

確かに、人を集めたのは大したものだ。気に入られましょう。  
だからといって、最高権力者の婿養子に入る？それだけで？

跡取り娘一人籠絡しただけで、その祖母に気に入られただけで、  
自分が築き上げたキャリアを遥かに超える地位に上り詰める。

この時の胸からあふれ出した怒りは自分自身を否定されたことも  
積み重なり、ミフネの目が眩むほどであった。

前原圭一の頭を撃たなかったのは、魅音の友人達が来たからという  
理由だけだ。

さもなければ撃ち殺していただろう。

…ポリポリポリ

ミフネは首を掻く。

この時から、妙に首が痒くて仕方がない。

そして、それほどの強い憎悪と、嫉妬心に支配されていたミフネに“反乱”というトリガーを引かせたのは、お魎が「次世代の若者達のために園崎家の改革」を打ち出したしたことであった。

(平和路線?・緩やかな体制の構築?・バカな話だ)

首を搔きながらミフネは思う。裏の実働部隊がどれだけの血を流して園崎家、園崎組のために働いて来たのか、大邸宅でふんぞり返っている本家の奴らは何もわかってはいない、と。

バアさんだけではない、次期当主の園崎魅音もそうだ。

何も知らん若造が、したり顔で“古き因習を捨てる”などとよくぞ言えたものだ。

古き因習を捨てるということは、すなわち都合の悪い部分を切り取るということだ。

それはミフネを含むヤクザものを斬り捨てるということだろう。

恐怖による力。それに裏付けられた支配体制。

これこそが園崎家を、園崎組を頂点へと押し上げ、黒幕としての上げたのだ。

力の裏付けの無い権威になんの意味があるろう?

成長の止まったヤクザは衰退するだけだ。

ならば、その衰退の原因を排除すれば良い。

老いてまともな判断のできなくなった園崎お魎。

理想論で現実の見えていない園崎魅音。

そして、元凶たる前原圭一。

この三人をミフネは是が非でも殺さぬばならない。

すでに同じ志を持つ重鎮や幹部連中とは渡りをつけてある。

そして園崎本家には、園崎家の跡目を継ぐために必要な伝説の秘宝

『振鈴』が眠っている。

当主のお魎と、次期当主の園崎魅音を殺害し、『振鈴』を手に入れさえすれば園崎家を、園崎組をミフネが継ぐこともできるはずだ。

もちろん、これに従わない者達もいるだろう。

その場合は、決めている。拒否する奴は力づくでねじ伏せれば良

い。それが極道だ。

「一人殺せば殺人だが、1000人殺せば英雄だ。じゃあ、2000人殺す俺はどうだ？え？」

かつて鬼の末裔と言われた仙人の住む、この雛見沢。

そしてそれを支配していた御三家。

奴らを滅ぼし、そしてオヤシロ様の化身たる古手梨花を殺す。

それは神殺しであるのと同時に、新たな神の誕生ではないか。

そう、園崎組を継いだ自分はただの支配者になるのでは無い。新世界を生み出す存在へと生まれ変わるのだ。

「そうさ。綿流しの日に神を殺し、俺が次の神となるのさ」

今日は新たな神が生まれる…生誕祭だ…ククク、ハハハハ！」

ミフネは笑う。

この日を境に、全てが変わるのだと確信に満ちて。

「18日目（日）：雛見沢道路：未明：前原圭一」

二階の部屋から脱出した俺達は、魅音の「私の家に籠ろう」という言葉に同意して、園崎本家へと向かっていた。後ろから黒服達の声が聞こえる。何人かはすぐ後ろまで迫っていた。

「梨花ちゃん、大丈夫か！」

「余裕なのですよ圭一」

俺が叫ぶと、梨花ちゃんは笑顔で答える。だが辛そうだ。

梨花ちゃんは沙都子と共に走っているが、体が小さい分、やはり少し遅れている。

梨花ちゃんを抱えて走ろうか。

俺がそう思った時だが。前方から二台の黒塗りの車が現われて、中から黒服が次々と降りてきた。

…やばい！

こちらに銃口を向ける黒服達。

しかし、その直後、一人は吹き飛ばされて、もう一人は地面に屈した。

赤坂さんだ。

先頭にいた赤坂さんが、走った勢いそのままに黒服達に突っ込み、



次々となぎ倒していく。

また大石も、赤坂さんほどではないにしても黒服達とやりあっている。

今の内に梨花ちゃんと、沙都子を連れていかないと、そう思つて振り返った先に、躓いて倒れ込む梨花ちゃんの姿が目に見え、飛び込んできた。

慌てて沙都子が梨花ちゃんの所に戻っていく。

「梨花あッー」

だが、梨花ちゃんのすぐ後ろには三人の黒服達が迫っている。

俺もダッシュで向かうが、間に合わない。黒服達が銃口を梨花ちゃんの方に向けようとした。

その時、後ろにいた黒服二人がもんどりうって倒れた。

なんだ、何がおきた？それを確認する暇は無い。

目の前で梨花ちゃんの上に沙都子が覆いかぶさった。

…無茶だ沙都子！死ぬだけだ！

俺は叫ぶ。

「うおおおおお!!こつちだッー！バカヤロー!!」

最後に残った黒服に体当たりをするつもりで俺は全力で駆ける。

黒服が、銃口の先を梨花ちゃんか、俺に向けるか一瞬迷ったその時、大きな影が真横からぶつかり、黒服が倒された。

「おんどりゃあ、ワシの沙都子になにするんねんッー」

倒れた黒服に蹴りを入れる大きな影。

まさか、あれは…北条鉄平なのか？なぜ、捕まっただけじゃ。

俺が目を見つめてみると、北条鉄平が俺の襟首をつかんで顔をよせた。

「おう、前原のお、ワシから沙都子奪ったんなら最後まで守りきらんか！この、どアホおッ!!」

俺はつき飛ばされて尻餅をつく。

顔をあげると、北条鉄平は後ろから襲ってきた黒服と格闘をしていた。

「おじさまッー」

梨花ちゃんを抱き起し、肩を貸して歩いている沙都子が北条鉄平に手を差し出している。

それを見て、俺は気が付いた。

もしかしたら、俺は北条鉄平という男を勘違いしていたのでは無いだろうか。

本当は、沙都子を虐待などしておらず、ただ感情を出すのが不器用なだけの男だったのではないだろうか。

北条鉄平は黒服の1人を倒すと、俺の方を見てニヤリと笑った。

「はよ沙都子を連れていかんかい。どうせワシは流れの嫌われものよ。夜の散歩にしゃれ込んで、喧騒に巻き込まれておっ死ぬなんざ、ま、おかしくもねえさ」

街ならともかく、この何も無い雛見沢で夜の散歩なんて考えられない。自動販売機も無い道だ。

まさか、北条鉄平は沙都子の顔を見たくて、梨花ちゃんの家に向かっていた最中だったのか。

だから、こんな所で出くわしたのか。

「圭ちゃんツ！梨花ちゃん！沙都子ツ！」

魅音が異常を察してやってきた。

俺は魅音と共に梨花ちゃんと沙都子を抱きかかえると、北条鉄平に頭をさげた。

「ありがとうございます！」

北条鉄平は軽く右手をあげると、暗闇から次々と現れて来る黒服達に向かっていた。

「ははは！毎夜、毎夜、つまらん死に様の夢ばかり見ちよったがよ、本当の最後はこれだったのは、わるかあねえ、わるかあねえぞ！」

俺と魅音はそれぞれ、梨花ちゃんと沙都子を抱きかかえて、走った。

後方で北条鉄平と黒服達の喧騒の音が聞こえてくる。沙都子が北条鉄平の名を叫ぶ。

だが、俺達は鉄平のためにも、彼女たちを守らなければならない。そうする義務と責任があるんだ。

正面の黒服達を倒した赤坂さんと大石が合流した。

園崎本家の正面門まで、あと少しの所まで迫っていた。

「18日目（日）：雛見沢道路：未明：園崎詩音」

葛西の車が軽快な音を立てて夜道を進んでいる。

それに私は惘然として乗っている。遅れるも遅れ、大遅刻だ。

時刻を見ると、午前0時を過ぎている。

17日の夜どころか、18日に突入だ。

これと言うのも、葛西の車が雛見沢に入った直後にエンジントラブルに見舞われて車が止まってしまったからだ。周囲には森しか無く、近くには公衆電話が無い。

車載電話なんて洒落た物があるわけでもなく、保険屋に連絡できたのが一時間後。

さらに修理業者が来たのは、その二時間後で、業者が工場まで回収して修理が終わったのは、ついさっきだ。

ああ、泣ける。

梨花ちやまを守る、大事な集まりだっというのに。

これなら時間がかかっても、エンジンが止まった直後に歩いて向かっていけばよかった。

それなら、少なくとも日を跨ぐなんてことは無かっただろうに。

今日は友人に乗り物を貸す約束をしたので足が無くて困っていた。

だから結納披露につかう品を届けるために、興宮の実家から園崎本家に向かう葛西の車に乗せてもらえてラッキーだと思ったけど、裏目にでちゃった。

「もう少しで、園崎本家につきます詩音さん」

「ありがとう葛西。すつごく早かったわね」

葛西には悪いけど、嫌みの一つでも言いたくなるわよ。そりやね。

ん？今、一瞬パトカーが見えたけれど、あれはなんなんだろう。

「：葛西、今、パトカーが二台わき道に止まっていなかった」

「おそらくネズミ捕りでしょう。田舎道で速度違反を取り締まる。よくあることです」

こんな夜道に、パトカーが二台止まって、警察官が立っているなんて何事かと思っただけ、そういうことね。確かに雛見沢のような田舎

道だと、速度制限無視して車を飛ばす人も多い。

本当に危険だと思っけれど、道路に誰もいないから解放的になるんだろうな。

「けど、こんな夜中まで働くなんて警察の人本当ご苦労様です。」

「まっすぐ、園崎本家に向かいますますがよろしいですね？」

葛西が聞いてきたが、手のひらをヒラヒラさせてOKサインをだす。

どうせ、今頃梨花ちやまの家に行ったところ、既に解散しているにきまつている。

それなら、園崎本家に向かって直接お姉に今日の集会の話を聞いた方が良い。

よくよく考えると、話を聞くだけなら別に行く必要もないのだけれども、さすがに私にも意地というものがある。約束したのなら、何が何でも行ってやろうじゃない。

車の速度がゆっくりと下がる。

園崎本家に近づいてきたんだろう。

よく見ると、大勢の黒い車がライトをつけっぱなしにして門の前に止まっている。

明日の結納披露の準備のため来た人員かしら。

4台、5台。随分多いわね。というか駐車場に止めなさいよ。

正面門の前に無造作に置いて。邪魔ったらありやしないわ。

黒服の1人がこちらに何かを向けた。

なんだろう？懐中電灯にしては小さいようだけれども…

「詩音さん、ちよつと揺れますからシートベルトの着用を確認してください」

「…えっ…なに？」

シートベルトを確認するのとはほぼ同時に、

葛西が急ブレーキをかけて、車を回転させた。

その直後に、ガラスに幾つものひびが入る。

これって、まさか…銃で撃たれたわけ!?

「えっ!なに、なにッ!いったいなんなのッ!」

「おそろくミフネ組のクーデターです。知った顔が何人もいました。

ミフネの直属の兵隊に間違いありません」

クーデター!? 一体どういう事よ!

なんで、ミフネのおじさまが反乱起こしているの! あいつ、バアさんの忠臣じゃなかったの!

…落ち着け。

今は誰が反乱起こしたとかはどうでもいい。

今考えるのはそれじゃない。

あいつらが外にいるってことは、お姉とバアさんが中で籠城していることは間違いない。

すると地下祭具殿に逃げ込んでいるはずだ。

すぐに合流して、支援しないと。

「葛西、地下祭具殿の隠し通路の出口ってわかる?」

「はい。場所は知っています。すぐに向かいますよ」

一体何がどうなっているのかはわからないけど、一つだけわかることがある。

それはお姉の危機だったこと!

お姉、必ず助けて見せる。

せっかく圭ちゃんも仲良くなれたんだもん。

ここで死んだら、絶対にダメなんだからね。

「18日目 (日) : 園崎本家 : 未明 : 前原圭一」

正面門を通り、園崎本家の敷地内に入った。

皆、走って来たので息が荒い。だが、まだ休む時じゃない。

正面門の外に、次々と車がやってくる音が聞こえる。

ミフネ組の奴らだ。

すぐに場所を移動しなければ。

魅音は、正面門の施錠を確認すると俺達の方を振り向く。

「これから地下祭具殿に行つて欲しいけど、場所、分かる人いる?」

沙都子が手をあげる。

「もしかして、あの鋼鉄製の扉のある場所の事ですか?」

それでしたら、私、敷地内にトラップを仕掛ける時に見ましたわ」

「うん、そこで間違いないよ沙都子。じゃあ、皆を誘導してくれるかな？ 祭具殿の扉の鍵は、トラップ仕掛ける時に教えた鍵置き場の所にある。ほら、触っちゃダメだって言った鍵があつたでしょ？ あれだから」

「お任せ下さいませ。魅音さん」

「頼んだよ沙都子。あと、バっちゃんを連れ出すから、圭ちゃんは私と一緒に来て」

沙都子が役にたつとはな。

園崎本家にトラップを仕掛けるなんて、なにをやっているんだと思っただけ、

何でも任せてみるもんだぜ。

俺は魅音に軽く叩かれ、一緒にお魍のバアさんの部屋へと向かった。

既に異常事態であることを察していたのだろう。

部屋についたとき、

お魍のバアさんは、すでに支度を整えてベッドから身を起していた。

「…何がおきた」

お魍のバアさんの鋭い視線が俺達を貫く。

魅音はみじろきもせず簡潔に伝える。

「バっちゃん、襲撃だよ。」

敵は20人前後。全員消音付き拳銃を装備。

首謀者は…ミフネのおじさま」

「ミフネやと」

お魍のバアさんが目を細める。

俺は魅音に肩を叩かれて、バアさんの元へ移動する。

「圭ちゃん、バっちゃんを担いで。私が誘導する」

俺は、おう。と一言答えるとお魍のバアさんを背負い、

先導する魅音の背中を追って走った。

正面門から、怒声と何かが激突する音が聞こえる。

だが、さすがは日本家屋の正面門だ。かなりの音が響くが、まだ壊

れる様子がない。

とはいえ、このままでは破壊されるのも時間の問題だろう。

「魅いちちゃん！圭くん！こっちだよ！」

邸宅から少し離れた場所にレナが立って手を振っている。

その脇には巨大な鋼鉄製の扉が開いている。

おそらくそこが、地下祭具殿と呼んでいたシエルターなんだろう。

俺と魅音とレナはその中に入り、鋼鉄製のドアを閉める。

分厚く頑丈な扉だ。これなら相当もちこたえるに違いない。

「行く圭ちゃん」

魅音に足されて俺は地下祭具殿の中に降りていく。

途中で岩がむき出しになっている牢屋やら、なにかの得体のしれない拷問道具を見たが、それに関心を向けるのは後にしよう。

今は、バアさんを安全な所まで移動させるのが優先だ。

おそらく、この地下祭具殿で一番奥というか重要な場所に到着した

のだろう。

周囲が綺麗に整備され、機械仕掛けのモニターが多数ならんでい

る。

見た感じ、

モニター室か警備室のようだ。

そこには、梨花ちゃんと赤坂さん、大石がいた。

大石は、俺が背負っているお魘のバアさんを見ると破顔する。

「これはこれは、お魘さんではありませんか。ご無沙汰しております

ねえ。

こんなところで、お目にかかるとは、思いもありませんでしたよ。

んんふふふふ」

「ふん、大石か…こげな所であうとはな…」

俺はオーラが見えるわけでは無いけれど、

2人とも目に見えない何かで火花を散らしているのだけはよくわ

かった。

だが、それにつき合っている暇はちよつとない。

俺は魅音と一緒にゆつくりとお魘のバアさんを下ろす。

すると、お魘バアさんを支えている魅音がこともなげに言い放つ

た。

「流れて連れて来たけど、安心してバッチャん。

大石のヤツは、肉の盾として優秀だろうからさ」

魅音の言動に、そことなく悪意が感じられる。

とはいえ、俺も大石に良い感情を抱いていないので、そこは無視する。

なんとなく不穏な空気になったときだった。

姿が見えなかった沙都子が、慌てたように奥の部屋から飛び出してきた。

「奥の部屋に誰かいますわ」

魅音が胸のホルスターからカラフルな銃を取り出し、奥へと走る。

俺と赤坂さんも、その後ろからついていく。

むき出しの岩石の部屋の奥から何か擦りきれるような音が聞こえてくる。

しかし、見た感じ何も無いようだが、魅音は構わず奥に進む。

すると岩陰に井戸があるのを発見した。

巧妙にカモフラージュされている。そして音は、そこから出ていたようだった。

「誰、いるのなら返事をしなさい」

魅音が銃を構える。

すると、白い手が井戸から出てきた。

まさか、幽霊…!?

「お姉え、私！私だつて！」

その声は、詩音か！

俺と魅音は井戸の方に向かい、中にいた詩音を引っ張りあげる。

さらにその下からは、葛西さんも出てきた。

「詩音…!?!なんでアンタここにいるのよ！」

「あはははは。大幅に遅刻しましたが、私、約束を守る女なんですよ？」

「ばっか…!?!こんな危険な所までくるなんてさ！」

魅音は詩音に抱き着き、詩音は照れくさそうに笑っている。



こういうときは、素直に姉妹の絆が羨ましい。

詩音と葛西さんを連れて、モニター室に戻ると、詩音は部活メンバ―に囲まれてもみくちやにされ、葛西さんはお魍のバアさんと大石に一礼した。

お魍バアさんは尊大な態度で葛西さんに話しかける。

「葛西、状況はわかってるんやろな？」

「はい、ミフネがクーデターを起こしたようですね。残念ながら隠し通路はどこもつかえません。既にミフネの手の者が張っています。詩音さんと私は奴らを倒して、ここに入り込むことができましたが出ることはできないでしょう」

室内が静まりかえる。

隠し通路が使えない以上、もう逃げ場は無いと言う事だ。

その後、葛西さんは、部屋の奥から次々と武器を持ちだしてみんなの前に広げた。

映画で見た事あるような機関銃、突撃銃、拳銃、そしてマツチヨな主人公がもっていた大砲のような銃。あと散弾銃に刀に、薙刀に：メリケンサック？とにかく、あるもの全部置いたと言う感じだ。

それを見ていた大石がなぜか喜んでいる。

「これは、これは、アメリカだったら持っているだけで射殺OKな武器ばかりじゃないですか、

ソードオフ・ショットガンにM4、それになんですか？ミニガンで  
すか？

どこから、こんなもの持って来たんですか」

「大石のダンナ。ここは緊急避難ということで一つ、見逃しちやくれ  
ませんか」

そういつて、葛西さんはミニガンと呼ばれた巨大な銃を入り口側に  
設置し、やたら銃身が短い散弾銃を手を取った。

赤坂さんと大石の目の前に、葛西さんは機関銃を置いたが、拳銃以  
外には慣れていないとやんわり拒絶された。代わりに詩音と魅音の  
二人がその機関銃を手取る。

だが、二人とも怪訝な顔をして弄繰り回している。

「お姉！このアサルトライフル動かない」

「え、嘘でしょ！?!こっちのM16も動かないよ。なんで、だつてミフネが整備したつて…」

「…あつ」

その場にいた俺達は声をあげた。

そうだ。反乱を起こすつもりなら、まともに銃器の整備なんてして  
いるわけがない。

逆につかえなくしているはずだ。葛西さんも設置したミニガンを  
調べていたが頭を左右にふる。

「駄目ですね。こちらのミニガンもつかえません。銃器類は諦めた方  
が良さそうです」

そう言つて葛西さんは手に持っていた散弾銃を投げ捨て、懐から拳  
銃を取り出す。

なんてことだ。

俺達は逃げ道も武器も取り上げられた状態だ。

こんな状況で、生き残ることができるのか。

絶望感が沸き起こってくる。

そんな時に、赤坂さんの声が聞こえてきた。

「大石さん、モニターを見て下さい」

皆が振り向く。

複数あるモニター画面の一つに、正面門が表示され、  
そこには黒服達と共に貫禄のある男がうつし出されていた。

「ミフネか…」

お魎のバアさんが、小さく呟いた。

その目は遠くを見ているようだった。

信頼していた部下に裏切られた気持ちは、俺にはわからない。

ただ、魅音も相当辛そうな顔をしている。

きつと親兄弟に裏切られたような気持ちなんだろう。

そんな心中に大石が土足で踏み込んでくる。

「んふふふふ…どうですか、手足に裏切られた気分は…」

お魎さん、いや”オヤシロ様”」

お魎のバアさんの視線が大石にむけられる。

大石とお魎のバアさんの視線が交差する。

「どうしてこうなったのか、わかっているんでしょう？」

アンタが、命じたからですよ。園崎家のために“やれ”と…」

お魎のバアさんは視線をモニターに戻し呟いた。

「…見つからんわけや。“オヤシロ様”に“オヤシロ様を探せ”と命じていたんやからの」

「認めるんですね。自分がオヤシロ様だつてことを…！」

大石はお魎のバアさんにつめようとしたその時、魅音が、大石の前を遮って叫んだ。

「違う！バツちゃんはおヤシロ様じゃない、だつてバツちゃんはオヤシロ様を探していたんだから！」

…はははははははははは！

大石の不快な笑い声が室内に響く。

この笑いは、おそらく大石が見つけたからだ。

こいつが求める、本当の真相とやらを。

「そうですよ。そういうことになっていますよ。園崎魅音さん。園崎お魎は誰にも命じない。ただ憂慮するだけ。それを察した誰かが忖度して、実行に移す。それがミフネだった！そうでしょう！だがね、見て下さいよ。あの自尊心を肥大させた奴の姿を！」

大石の指先がモニターに映っているミフネに向けられる。

「今なら全部わかります。ヤツはアンタの気持ちを忖度し、次々とオヤシロ様の“力”として、園崎家の敵を手にかけてきた！」

最初はただの忠誠心だったのかもしれない！しかし、次第に自分には本当に力があると勘違いしはじめた。その結果、アイツは自分こそオヤシロ様の力を行使に値する存在だとうぬぼれ、ついに、主たるアンタを殺そうとした！いや、それだけじゃない！綿流しの日に古手梨花を殺し、雛見沢住民1000人を皆殺しにしようとしてまで考えたんですよ！

己が本当のオヤシロ様になるために！次の神として君臨するため！アンタはオヤシロ様じゃなかったのかもしれない、しかし、まち

がいなくオヤシロ様を作ったのはアンタなんですよ！」

大石は一気にまくしたてた。

しゃべりすぎたのか肩で息をしている。

語ったのは推論だけでは無い。

おそらく長年ため込んでいたものを一緒に吐き出したのだろう。

お魎のバアさんは、微動だにせず。

ただ、ぼつぷりと呟いた。

「…製造者責任は、あるわな」

大石はまだ何か言いたそうだったが、俺はそれを止めた。

正直、そんな言い合いをしている時じゃない。

「大石さん、それより警察署には連絡しなくてもいいんですか。」

この状態なら、警察に頼っても良いですよね」

「おお、そうですね。電話つて、ここにあるんですか？」

魅音がモニター画面の下を指さす。

大石は受話器を取ると、大急ぎでボタンを押す。

「あ、もしも…あ、その声、熊ちゃん？え？入江診療所から戻って来たばかり？」

それは良い。全員招集してすぐに園崎本家に向かってください！  
ええ、ミフネです！

あいつが兵隊引き連れて園崎本家に襲撃を仕掛けてきたんですよ！  
！とにかく…！」

ドオオオオオオ!!!

轟音が鳴り響き、地下祭具殿そのものが揺れた。

天井から石や機械の部品が落ちて来る。

何が起こったんだ!?

正面門を映していたモニター画面は砂嵐となり、

別のモニター画面では、もうもうと煙を上げる正面門がうつしだされていた。

爆弾を使ったのか。

最近のヤクザはそんなものまで使うのかよ！

大石は慌てて受話器を持ったが配線が切れている。

これで万事休すか！

そう思った矢先、魅音は冷静な声が聞こえてきた。

「大石のおじさま、その横のボタンを押して、

受話器の必要のないハンドレス会話が出来るようになる」

「ははは、そいつは良いですね。」

ハイテクですよ、この機械は」

ドオオオオオオオオオオ!!!

大石がハンドレスのボタンを押したときに二度目の大爆発音が響いた。

モニターカメラの何台かが、この爆発で機能を停止している。生き残ったモニターを見て、レナが叫んだ。

「地下入口の扉が破壊されているよ！」

モニター画面には破壊された鋼鉄の扉を押しつけ、黒服達が次々に地下室に入ってくる姿が映しだされている。

奴らが、くる。

赤坂さんと、大石、それに葛西さんが、瞬時に前線ポジションを取る。

俺と魅音はそのすぐ後ろに隠れ、奥の方に、梨花ちゃんと沙都子、それを守るレナと詩音が配置についた。

ただ、お魘のバアさんは悠然と立ち、先ほど葛西さんが並べた武器の中から、薙刀を掴んで構えた。

「バっちゃんー！危ない、隠れてー！」

魅音の声が聞こえないかのように、堂々と立ってミフネ達を待ち受けている。

さすがは、幾年を重ねて、園崎家当主を務めていた傑物だ。

こんな事態になっても、一向に物怖じしないなんて。

足音が聞こえて、黒服達が見えてきた。

赤坂さん、大石、葛西さんが、それぞれ拳銃を構える。

魅音もカラフルな拳銃を抜いている。ただ、顔色は少し青い。

俺は魅音の手の甲にそつと触れた。

「大丈夫、俺がいるぜ。魅音」

「うん、ありがとう。圭ちゃん」

魅音が微笑み。俺も笑みを返す。

だが、そんな俺と魅音のひと時を邪魔する下品な声が聞こえてきた。

「はははは。お魴さん、それに魅音ちゃんと詩音ちゃん。」

全員に合えるとは嬉しいねえ。梨花ちやまもそこにいるのかい？」

ミフネだ。俺達の正面に堂々と立ってこちらを見ている。

後ろには引き連れてきた兵隊が並び、こちらに銃口を向けている。

助ける気が微塵も無いことが、その姿勢だけで明確にわかる。

俺達を一人残らず殺す気だ。

お魴のバアさんがしつかりと地面に足をつけて。

薙刀を振るう。

「ミフネ、おめえが何で裏切ったのかはよおけ知らん。聞く気も無い。

ただ“ケジメ”えはつけてもらおうでな」

「寝たきりの婆が無理すんな。特攻したいなら好きにしろな。

先に殺してやるぜ、なあ？」

お魴のバアさんの挑発に乗らない。それはそうだろう。

向こうは圧倒的に有利なのだ。ここで挑発にのる意味なんてない。

ただ、これ以上どうすれよい。

持久戦になれば、いつか警官隊が来るかもしれない。

ただ、それまでに生き残れる保証はない。あまりにも数が違い過ぎる。

なんとか、少しでも時間を引き延ばさないと。

そう思っていた矢先、別な所から火種が飛び込んでくる。

詩音がミフネに向かって怒鳴り始めたのだ。

「ミフネッ！お前が”オヤシロ様”かッ！

悟史くんを鬼隠しにしたのはお前なんだなッ!!!」

「駄目だよ詩いちちゃん！落ち着いてッ！」

必死にレナが詩音を抑えている。

悟史。悟史って、去年鬼隠しにあった北条悟史のことだよな。

沙都子の兄貴の…そういえば、魅音も言っていた。詩音が爪を剥い

だら、本来は許されるはずだった。しかし、そうはならずに鬼隠しにあつたと。

ミフネは最初きよとんとした顔をしていたが、小さく笑いはじめ、それが次第に大きく鳴り、最後はこの地下祭具殿全体に響き渡るほどの大爆笑へとかわっていった。

「ああ、そうさ！俺こそが、オヤシロ様だ！」

古手梨花を殺し、園崎お魴を殺し、そして御三家を滅ぼし、

この雛見沢住民全てを殺しつくす！そうさ俺は神になるんだよ！」

この勝ち誇った顔、笑い声、イラつく。

生理的嫌悪ってやつか。ミフネの何もかもが腹ただしい。

その笑いに対抗するかのように、大石も何故か笑い始める。

「いやはや、確かに笑えますねえ。まさか今まで探し続けてきたオヤシロ様が、こんなチンケな三下ヤクザだなんて。んくふふふ」

「おいおい、てめえ、大石か？なんだなんだ。今日は盆と正月がいつべんにきたかのようだな。」

御三家を滅ぼすだけじゃなく、てめえのような糞野郎まで殺せるつてのはツキすぎて、テメエの天運が怖いぐらいだぜ」

ミフネが右手を挙げると、黒服達が一斉に射撃ポーズをとる。

俺達も覚悟を決めるが、妙に緩い感じで大石さんが語り掛ける。

「いやあくいいんですか？そんなことしちやって…？」

「あん？大石、てめえ、何が言いたい？」

「ハンズフリーって機能が、大変便利でしょ。ほら、受話器をもってなくても会話の内容、

全て警察署に届いていたりするんですよ」

あ、なるほど。そういうことか。

大石さんはモニターに設置されていた電話をハンズフリーモードのままにしていたんだ。

つまり、いましゃべっていたことは全て警察署に筒ぬけつてことか。

それって、ようするに、ミフネが自分で「オヤシロ様」と自供した内容も、

「警察署にいる人達が聞いていたってことになる。

ミフネの顔色がみるみる赤くなってきた。

「要塞を落すなら、まず電源を先に切るべきでしたねえミフネさん。

まあヤクザ者には軍隊みたいな発想はないでしょうけれど」

「うるせえぞ大石！」

ミフネは右手を懐に入れると拳銃を取り出し、モニター画面に撃ちこんで警備装置を破壊した。

だが、これは意味が無い事だ。既に警察署には声が届いている。

俺達を殺したとしても、ミフネが逮捕されるのは、時間の問題だ。

だがミフネは、そんな俺達の想像を見越しているのか嘲笑をはじめた。

「甘いぜお前ら。俺達は警察とやり合う気で来てるんだよ。

梨花ちゃんやまを殺せば、この雛見沢住民は全員発狂して殺し合いを始める。

そんな状態で警察がまともに機能するとおもっているのか？ええ？」

発狂して殺し合う？そんな話は初めて聞いたぞ！

梨花ちゃんからは、48時間以内に全員死ぬとしか聞いていない！

大石さんも動揺している。

確かにそんな事態になったら、ミフネの逮捕どころじゃない。

1000人、2000人の人間が殺し合いを始める大事件になるのなら、

ここで俺達が殺されたなんて話は小さな事件として忘れ去られるに違いない。

いや、そもそも、こんな洞窟のような場所で殺されたのなら、死体だって発見されるか怪しい。

詩音たちが昇って来た井戸の中に死体を放り込んで岩で隠せば永遠に見つからないんじゃないか？

だが、そんな俺の動揺をよそに

梨花ちゃんの、ひどく冷徹な声が響いた。

「…そう上手くいくかしら。



神無き地で災い成せるとでも？」

その大人びて透き通るような声に俺達は一瞬魅了された。

それは神秘的にも聞こえるオヤシロ様の巫女の声。

いや、オヤシロ様の化身たる梨花ちゃんから発せられた宣言。

だが、それをミフネの醜い笑い声が打ち消した。

「安心しな。神はここにいます」

巫女の声は、

神を称せし者には届かない。

ミフネは再び右手を挙げる。

来る…！

俺達は覚悟を決めた。

その時…

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

地下祭具殿全体まで響くほどの

大音量が聞こえてきた。

!!!!!!!

「18日目（日）：園崎本家：未明：小此木鉄郎」

…こちら雲雀13より、鳳1へ……………

……………古手家1階にいた警官4名を救出…

……………いずれも重症なれど生命に別状無し……………

……………ズツ…

……………

…こちら鶯2……………

……………路上で倒れているターゲットの叔父を回収…

……………緊急搬送します……………

……………

…梟3より鳳1…ビンゴ…

…確保した隠しトンネルは地下…繋がっ……………

……………ターゲット全員の生存を確認……………

「こちら鳳1了解。制圧部隊はどうなっている？」

……………こちら制圧部隊。順調です…

…園崎邸にいる敵は浮足立っています。直ぐに制圧できると思わ

れます……

……

「よし、いいぞ。気を抜くなよ。終わったら全員で乾杯だ。

気の良いお姫さんが全員にボーナスを支給してくれると約束してくれた。

全員最後まできばっていけ！」

無線機の向こう側で歓声があがる。

戦闘指揮車で報告を聞いた小此木はニヤリと笑った。完璧だ。

当初『古手梨花』の護衛についていた『山狗』部隊の人数は8名であつた。

園崎魅音は最大4名の護衛と推定していたが、鷹野三四の命令で『古手梨花の護衛』は厳戒態勢にシフトされており大幅に人数が増やされていたのである。

彼らは当日、古手梨花の警護に当たっていたものの、午後10時ごろに、30名以上による襲撃者の存在を確認し、すぐに小此木に連絡を寄こして新たな命令を求めてきた。

いくら山狗が有能であろうとも、さすがに守り難い土地で、その数相手に正面から攻められては突破を余儀なくされるだろう。

連絡を受けた小此木も一瞬、考え込んだ。

任務が遂行できるのであれば死ぬとも命じられるが、確実に失敗が想定されるケースで任務を強行し、無駄に死人を出すわけにはいかない。

そこで、小此木は現地にいる古手梨花護衛チームの山狗隊員に対して護衛ではなく、

逃亡支援に切り替え、側面から古手梨花達の脱出を手助けるように命令を下した。

古手梨花が逃亡中につまづいた時に、近づいてきた黒服三名のうち、

二名を撃ち倒したのは彼らである。

さらに、襲撃して来た“何者か”を殲滅するため、彼の上司である鷹野三四に連絡し、全部隊員を招集した。山狗たちにとって幸いだっ

たのが、その“何者か”は、二時間近くも古手梨花の居住を攻めなかつた事である。

万が一に備えて即応準備を常日頃からしてきたこともあり、一時間後には山狗達は万全な準備を整えて出発することができた。そして現地には逃亡支援チームにより、古手梨花が園崎本家方面に逃げたと言う連絡を受け、一斉に動き出す。

園崎本家を攻めていた黒服達の動向を見守り、

黒服達の3分の1が地下祭具殿へ突入したのを見計らい、一斉に攻撃を開始した。

最初に目くらましの音響閃光爆弾スタン・グレネードで目と耳を喪失させ、

そして照明弾を打ち上げ、四方八方から無力化弾の洗礼を浴びさせたのである。

人は他人を攻めている時に、攻められるのが一番弱い。

相手を攻めている時は背中がガラ空きだからだ。

視力と聴力を失い、さらに後方から無力化弾を喰った彼ら黒服達  
の、

心理的ダメージは桁外れであつただろう。

なにしろ無力化弾などといっても、そう生やさしいものでは無い。

近距離で当たれば肋骨は軽く折れるし、頭部に当たれば死に至る事もある。

有効射程内で、内臓にぶち当たればしばらく身動きはできないし、手足にあたれば当分は使い物にならなくなるぐらいには強力だ。

海外で開発された最新鋭の無力化弾仕様の武器は、決して安くはなかつたが、鷹野三四のポケットマネーで部隊員全員に支給するだけの装備を整えることができた。

さらに部隊員にはそれとは別に強力な電撃を与えるデイズー銃も装備させてある。

無力化弾でも気合いを入れて立ち上がるような猛者も、強力な電撃を与えるデイズー銃と一緒に喰らえば、しばらくは動けないだろう。

上官の鷹野三四は、何故かはわからないが、徹底的に相手を殺さない方針を求めてきた。

これは相当な難易度を求められていたが「必要な場合」は殺害も許可されていたのは幸運だった。

命令に縛られて被害がでるのだけは避けたかったからだ。

戦闘指揮車に連絡が入る。鷹野三四だ。

「現状はどうなっているの？梨花ちゃんは無事？」

「現在の所、問題はありません。裏の隠し通路を制圧して地下に送り込んだ隊員の報告では、まだ全員生きとるようです」

「そう。よかった。最初に言った通り、なるべく今日は殺さないように。こんな馬鹿な話で祖父の論文を汚すわけにはいかないわ。ただし、良いわね？必要とあれば遠慮なく撃ち殺しなさい。梨花ちゃんの守りこそ最優先事項、あらゆる命令を無視して構わないわ。事後処理は全部ジロウさんがやってくれるから、銃も爆弾も好きなだけ使いなさい」

「了解です。古手梨花護衛に全力を尽くします」

「入江所長にも連絡は回してあります。すぐに私もそっちに向かうから、救護体制の方もお願いね。負傷者が出たら、敵味方問わず全員助けるからそのつもりで用意して」

通信を切った小此木は舌舐めずりをする。

(…わかつていさ。完璧に成功させてやる。俺はこういう瞬間こそ求めているんだからな)

そう、小此木は飢えていた。

本来自分の能力はもっと攻勢にこそ使われるべきだと考えていた。

だが、自分の慎重かつ大胆な性格が評価され、このような「山狗」の隊長に配属されてしまった。この諜報工作部隊「山狗」は基本的に戦闘を行う部隊では無い。だからこそ、飽いていた。

自分は戦闘中心の「番犬」にこそ向いている。そう思っていたのだ。いつか訪れるであろう戦闘命令を心待ちにしていた。

そして、ようやくその時が訪れたのだ。今こそ自分の本領を発揮できる。

こういう戦いこそ自分は輝く存在だと疑わない。

小此木は銃を手に取り戦闘指揮車をおりる。ここで大上段に構え

ているのは自分の性には合わない。現場で直接を指揮をとる。これこそ現場指揮官の醍醐味というものだ。

「18日目（日）：園崎本家：未明：前原圭一」

この地下にまで響き渡る大音量は一体なんだったのか。何が起きているのかは俺には分らない。

しかし、明らかに何かが起きているのだけはわかった。

ミフネ達が狼狽している。

地上で何かがあったのは間違いない。

本当でも、嘘でもいい。

俺は、あえてブラフのつもりで叫んだ。

「警察が来たんだ。そうですよね大石さん！」

「ああ、そうですね。ここに来る前に連絡をしておきましたからね。そろそろ到着してもおかしくないですよねえ。ん〜ふふふふ」

大石も俺の話に乗ってきた。

それを聞いたミフネ達はわかりやすいほど動揺している。

大成功だ。

よくやったぜ、俺！

「な、何をしている、お前達！ さっさとあいつらを殺せ！」

よほど動揺していたのか、あまりにもずさんな命令してきた。

バラバラとまとまりもなく黒服達が拳銃を片手にこちらに向かってくる。

それに立ちはだかるのが、赤坂さんだ。

相手の懐に入り込み、次々と拳でなぎ倒していく。

すげえ、人間業じゃない。

「このような狭い所では銃器は不利だ。

拳でかかってこい」

ハツタリだ。どこであろうと銃の方が強いに決まっている。

だが、釣られた何人か銃では無く刃物に切り替えた。

しかし、白兵戦に切り替えたからといっても、赤坂さんの敵では無い。

完全に浮足立っている所に、葛西さんと大石も飛び込む。

さらに、お魎のバアさんもナギナタを振りながら黒服に襲い掛かる。

人数で優っているはずの黒服達が、次々と倒され、それを見ていたミフネが逃げ出した。

ボスが逃げれば部下達だってやる気がなくなる。

黒服達も我先へと、ミフネを追うように逃げ始めた。

「ミフネが逃げたー！」

魅音がそう叫ぶと、ミフネをおいかけて赤坂さん、大石、葛西さんが走っていく。

お魎のバアさんも続こうとしたが足が続かない。

もともと、寝たきりのようなバアさんだ。

ここまで奮闘したのだから相当なものだぜ。

詩音がバアさんに肩を貸し、

俺は魅音とレナと一緒にミフネを追って地上に出た。

外の世界は入る前とは一変していた。

謎の光輝く球体が上に幾つも輝き、それが真昼間のように園崎邸を照らしている。

地面には黒服達が倒れ、あっちこっちで銃声のような音と爆発音が響く。

警官の姿は見えない。一体誰が黒服達を攻撃をしているんだろうか。

だが、そんなことを考えている余裕はない。

俺達に気が付いた黒服達が次々とやってくる。

赤坂さんや葛西さんが立ち向かおうとすると、沙都子がひよっこり出てきて指を鳴らす。

パッチンッ！

—ウワアアアア!!!

—何ダア!?

—ナンデコンナ所ニ!?

黒服達が足を滑らしたり、何かに足を引っかけてコケたりと、次々と倒れていく。

これは…沙都子が暇つぶしに園崎家の庭に仕掛けたトラップが発動しているのか!?

凄いぜ、沙都子!

地味だが効果は抜群だ!

仲間が罠で倒れて動揺する黒服達に赤坂さんや、大石、葛西さん達大人グループが襲いかかり、地面に倒れている黒服の頭を、俺や魅音やレナの部活メンバーが蹴り飛ばして気絶させていく。

俺は沙都子をねぎらうために頭を撫でる。

「よくやったな沙都子!」

「そんなことより圭一さん、ミフネが逃げますわ」

園崎邸の母屋の方に走っていくミフネの姿が見える。

赤坂さん達と追おうとした時、一人の男が何人もの黒服を引き連れて俺達の前を遮った。

配下の黒服達は赤坂さんと葛西さんに立ち向かい、

右手に刀、左手に銃を持つリーダーらしき男は大石に襲い掛かる。

「大石よおッ、おめえ、そういえば死んだ現場監督とお友達だったよな?」

あの世で寂しがっているぜッ!俺の手で仲良くあの世に送ってやるよ!」

「なんだと…若頭、てめえ、おやつさんの死の真相を知ってるのか!」

大石に若頭と言われた男は、刀を振り回し、大石の体制が崩れた所で蹴り飛ばす。

そして左手にもっていた拳銃で大石を狙ったその時。左肩から弾けるように吹き飛んだ。

俺は後ろを見る。魅音だ。

魅音がカラフルな拳銃で、若頭の左肩を撃ち抜いたんだ。

かなりの距離があるのに正確に肩を狙うなんて、さすが米国までインストラクトを受けにいっただけはあるぜ。

倒れ込む若頭の上に大石がのしかかる。

「てめえか!てめえが、工事現場のおやつさんを殺すように、作業員達に吹き込んだのか!」

「勘弁してくれよ大石…おらあ、オヤジの命令に従っただけなんだよ」  
大石は凄まじい形相で、銃口を若頭の額に押し付けた。  
何があつたかわからないが、相当な執念を感じる。

「そんな小者はどうでもええ、早くミフネを探さんか…!!!」  
えらく大声を出しているが、誰だ。お魍のバアさんか。

視線を地下祭具殿の入り口に向けると、詩音と梨花ちゃんに支えられたお魍のバアさんと、沙都子の姿が見えた。

「バツちゃー！」

それを確認した魅音が、

お魍のバアさんの元へと走っていく。

沙都子は俺を方を向くと、

目を見開き、何かを指さして必死に叫び始めた。

「圭ーさんー！」

沙都子が指し示す方向に視線を動かす。

大石にのしかかられている若頭が、こちらに…いや違う。お魍のバアさんと魅音の方に銃口を向けている！

大石は、お魍のバアさんの大声に気取られて若頭を見ていない！

魅音はお魍のバアさんの元へ向かうため背中を向けている！

葛西さんと赤坂さんは他の黒服達と戦っている！

助けられるのは、俺だけだ！

俺は咄嗟に両手を広げて、お魍のバアさんと魅音の前に飛び出す！

「圭ーくんッー！」

俺の横にいたレナも若頭の銃口に気が付いたが、もう間に合わない！

「死ねッ！園崎お魍！」

パン、パン、パン…

俺の全身に鋭い痛みと熱さが突き刺さる…

木材に穴を空けるキリか何かで体を貫かれた感じた。

おかしなことに全ての動きがスローモーションに見える。

視線の先では、大石が若頭の頭に向けて銃を発砲し、真っ赤なザク口が飛び散るように、紅い欠片が広がっていった。



全身から力が抜けて、感覚を失っていくのがわかる。  
この感じは、ああ、そうだ。あれだ。ギックリ腰になったのと同じだ。

地面に体がぶつかつたが、痛みは無い。何も感じない。  
視線は動く、魅音とレナが何が叫んでいる。

だけど全く聞こえない。胸から何か込み上げてくる…  
なんだ、これはなんだろう。

ゴボツ!!!

何かが口から次から次へと溢れていく、ああ、わからない。  
わからないけど、これ、俺が死ぬって事で間違いないよな？

「…ちゃんーッ…!!!」

誰かが近づいて来る…すぐ横にいたレナ？

違うな服が黄色い…魅音か？

「…!!!アアアアア!!!」

魅音、なんだ。泣いているのか？お前は大丈夫なのか。  
そうか。それならよかつた。だったら、それで十分さ。

急速に意識が遠のく…

どうやら、もう終わりの時がきたみたいだ。

でも、よかつた。

俺は間に合つたんだ。

そうさ。俺は、お前を守れたんだから…

よかつたんだよ、これで。

俺は何度も、お前を殺したんだもんな。

「ダメッ…い…んじゃ…!!!イヤアアアアアアアア!!!」

だからさ、悲しむことはないんだ。そういうことなんだよ。  
報いはいつかくるんだ。それが今だった…ってことだけさ。

でも、本当によかつたぜ魅音…

今度はさ、お前を救えて…

ああ、そうか、俺はやりとげたんだな…

お前のために俺の全部を捧げられた。

この程度じゃさ…それでも罪滅ぼしにならないだろうけれど…

お前に捧げられた人生は最高だったぜ……魅音……

「18日目（日）：園崎本家：未明：男」

小此木造園と書かれたパッチのついた作業着の男は、黒服達が落としたであろう消音付き拳銃を拾い、ゆっくりと古手梨花に近づいていく。

眼の前で、鷹野三四がアレンジした軍服のようなものを着て走っていった、どうやら向かう先は地面に倒れ込んでいる少年のようだ。

書類で読んだことがある。名前は確か前原圭一と聞いたか。

「お願い、鷹野さんッ！圭ちゃんを助けてえええッ!!!」

「分かっています。これより止血作業をします。」

このままだと自分の血でおぼれ死ぬわ。園崎さん、竜宮さん手伝って」

前原圭一と思われる少年は、口から赤い泡を出して、体を痙攣させている。

男の経験上、あぁなつてしまった場合は、十中八九助からない。

少年の体を二人の少女が押さえつけ、鷹野三四が顎をあげて気道を確保する。そして、ボールペンを砕いて男子の体に突き刺した。あれは、逆流している血を外に出しているのだろう。おそらく血が肺に溜まり溺れ死なないようにしているのだ。

そうした応急処置している間に、邸外から入江機関の医師スタッフ達が救命タンカを持って現われ少年の元へと向かう。

（そういうえば、鷹野三四は救護の用意を命じていたな）

外に視線をうつすと、爆薬によって崩壊した正面門と塀の外側に、救急車が見える。

どうやら入江診療所特製の救急車を全台持って来たようだ。

この救急車は“生物化学兵器開発のために、被験者がどのような状態であっても対応できる”ようになっていて。そのため、首都圏にも数台あるかないかの最新・最高レベルの医療機器を搭載している。もちろん、それらを扱うエキスパートの人員も含めてだ。

入江機関の本来の役割を考えれば当然とも言える装備ではあるが、それまで投入するとは鷹野三四の本気度がうかがえる。

これほど迅速に最高の処置を受けられるのであれば、もしかしたらあの少年は助かるかもしれない。

(…まあ、正直どうでもいい)

男にとって大切なのは、古手梨花の抹殺である。

彼は野村が山狗に送り込んでいたスパイであり、最後の切り札であった。

そう、彼は古手梨花の殺害に失敗した場合の保険だったのだ。

古手梨花殺害を実行した場合、成功してもしなくても、男は山狗から逃げねばならない。従って、これは本当の最後の手段である。だが、残念ながらその最後がきてしまったようだ。

パトカーのサイレン音が複数近づいて来た。

今ごろ警官隊が来たようだ。いつだって騎兵隊は遅れてやってくる。

だが、警官達が園崎邸に雪崩れ込んで来る状況は好ましくは無い。

早く古手梨花を抹殺せねば。

男は、前原圭一を涙を流しながら見守る古手梨花の後頭部に、銃口を合わせた。

梨花のすぐ隣にいた長身の男が気が付いた。あれは古手梨花が私的に雇った赤坂という護衛だ。

だが、もう遅い。あとは引金を絞るだけだ。

「なるほど、お前がスパイだったってわけだ」  
肩を掴まれた。振り返る。

小此木隊長がいる。何故だ!?

「最後の最後で、油断したところに一発。

悪くない方法だ。相手が俺じゃなければ成功しただろうぜ」

口元を歪める小此木に、回転回し蹴りを行う。だが、

スウエーバックで上半身を後ろにそらされ、外された。

男は即座に体勢を立て直し、再び銃口を古手梨花に向ける。

小此木など、どうでもいい。古手梨花を殺せば、それで任務は完了だ。

だが、振り返った先には…赤坂の顔があった。

「…間に合ったッ！梨花ちゃんは、私が守るッ！」  
…ぐベッ!!!

男の腹に鉛のボールがぶつかったかのような猛烈な衝撃がやってくる。

赤坂のその一撃は古手梨花を守るために、ひたすら鍛え上げられ、練られ、研ぎ澄まされたものの結晶である。ただの拳では無い。

言うなれば…

徹甲弾！

それを喰らった男の内臓は悲鳴をあげ、

その機能の大半を一時的に喪失させ、消化器官を逆流させた。

だが、胃の消化物をまき散らす幸運には恵まれなかった。

次に、男の顔は真上に弾き飛ばされたからだ。

赤坂による正拳突きと肘鉄の連続技をくらった男は、コンマ何秒か意識を失った。

手に持った銃を落とし、両膝から崩れ落ちる。

意識がかりうじて戻り目にしたものは、古手梨花を抱きかかえて現場から立ち去る赤坂の後ろ姿だった。そして、何分か前まで自分の上官だった男と、同僚であった山狗の隊員達に囲まれているのに気が付く。

「金を貰って裏切る奴はクソだ。そして、そのクソの処理をするのが上手いのが俺達だ。」

そこんところは、さっきまで隊員だったお前もよく知っているよな？」

頭の上から麻袋を被せられると、小此木のデザイナー銃をくらい男は意識は失った。

「さて、帰ったら情報をたっぷり吐いてもらうとするか…安心しろ、姫様の要望だ、今日は殺さないで置いてやる。もつともその後は、どうなるかはわからんがな」

男は山狗達によっていずこかに連れ去らわれた。

その後、彼がどうなったのか知る者はいない。

「18日目（日）：園崎本家：未明：ミフネ」

なぜだ。なぜこんなことになったんだ。

わからない。俺は、圧倒的有利な立場にいたんじゃないやなかったのか？

ミフネは1人、雛見沢の野山を走っていた。

周囲にはミフネを守る兵隊はいない。はぐれたのか、それとも置き去りにしたのか。

その判断すら、今のミフネにはできていない。

ただ恐怖と狼狽だけが心を支配していた。

ボリボリボリ：

ミフネは首を掻く、痒くて痒くてたまらない。

虫にでも刺されたのか、先ほどから痒みが止まらないのだ。

森の開けた場所で、ミフネは息を整えるために足を止めた。

ザワザワザワ：

木々が揺れ、風の音がする。

ミフネは周囲を見る。誰かに見張られている感じがする。

誰だ。誰かが自分をみている。

「おい、誰かいるのか!？」

ミフネの声に答える者はいない。

ただ、木々の揺れる音だけが木霊する。

だが、ミフネは分かっている。そう。ここには誰かがいる。

誰かが自分を狙っている。

ミフネは疲れた足を引きずり、歩くのを再開した。

そうだ。自分は誰かに狙われている。だから歩き続けなければな

らない。

そういえば、最初から野村とか言う女はおかしかった。

あんなにも自分の都合の良い計画を手渡すなんて、もしかしたら

この一連の流れは園崎本家連中の陰謀だったのではないだろうか？

わざと俺を蹴起させて始末し、ミフネ組の“シノギ”を奪う。

あり得る話だ。マフィアとの対外貿易は年々大きくなってきている。た。

その額は巨大だ。それを本家の奴らは盗もうと考えたのだ。間違いない。

自分はまんまと奴らに騙されたのだ。そうだ自分は被害者なのだ。  
ボリボリボリ…

ミフネは被害者意識をつのらせ、さらに首を掻く。  
掻いて、掻いて、掻いて…いつのまにか首が血まみれになっていた。  
ヒタヒタ…ピタ

その時だ。ミフネは自分の足音に、もう一つの足音が重なっている  
のに気が付いた。

一歩進むごとに、足音が一歩ついてくる。ミフネは後ろを見る。誰  
もない。

ヒタヒタ…ピタ

だが、足音はついてきている。

間違いなく、

確実に、

誰かが、

何かが、

そこにいる。

「おい、誰だ！若頭か、それとも大石のやろうか！答えろッ！」

誰も、何も聞こえない。

木々の騒めく音だけが聞こえてくる。

バン、バン、バン…

ミフネは周囲の木々に銃弾を発砲した。

しかし、誰も姿を現さない。反応もしない。

「なんだってんだちくしょう！」

なんだってんだちくしょううううう！！！！

ヒタヒタ…ピタ

ヒタヒタ…ピタ

ヒタヒタ…ピタ

ヒタヒタ…ピタ

ミフネは走る。走って、走って、走った。

だが、足音は消えない。足音は追ってくる。

いつしか、巨木のある開けた空間に出てきた。

そこには小さな社が置いてある。  
その巨木は雛見沢の神樹であり、  
その社には、古代の神である田村媛命が祀られていたが、  
ミフネには知る由もなかった。  
ボリボリボリボリボリボリ……  
ミフネの首を搔く速度は早まり、  
それはついに傷つけてはいけないう血管の位置にまで届こうとして  
いた。

そして、自分の後背に“何か”がいることに気が付いた。  
すぐ後ろに誰かがいる。それは自分を見ている。全身が震えて動  
かない。

一体何がどうしたのだというのか。  
いるわけがない。そんなものは存在しない。

ただの気のせいだ。もう、何度も振り返っている。

何もいないことが分かっている。

だが、なぜかわからないが、わかるのだ。

すぐ自分の後ろに何かがいることを。

ミフネは息を荒くする。ミフネは極道だ。誰もよりも強い精神力  
を持ち。

あらゆる者達を屈服させる男の中の男だ。それが極道なのだ。

恐怖に負けることは極道にとって死を意味する。

どのような状況であっても死を覚悟したものにこそ、男の道が開か  
れるのだ。

だからこそミフネは己の恐怖を押し殺し、振り返った。

「誰もいるわけがねえんだよー」

……

……

……

樹木が風にゆれ、草花のこすれる音が聞こえてくる。

その場所にはもう、誰も存在してはいない。

ただ、

それは、確かにそこにいたという痕跡だけが残されていた。



第40話「32日目（日）A「帰結」

「?????  
???  
???  
前原圭一」  
ここは、どこだ？

周囲で幾つもの光がきらめいている。

星々、いや、違う。この輝きは水晶の欠片のような何かだ。それが無数に散らばり、世界全体に広がっている。

“前原圭一：”

声が聞こえる。誰だ。

でも、俺はこの声をよく知っている。でも、思い出せない。

ああ、そうだ。前にもレナに言われたんだよな。

彼女は、ずっと一緒に居たって：誰だ。誰だっけ：

“ 貴方は園崎魅音を守るために、その身を捧げました ”

そうだ。思い出した。

俺は、魅音を守るために飛び出して：

ああ、フラッシュバックのように次から次へと記憶を思い出す。

そうだ。あの時、俺は両手を広げて前にでて、ヤクザの銃撃から魅音を守ろうとしたんだ。

全身を弾丸で貫かれ、倒れ、そして意識を失った。

：ということは、ここはあの世ってヤツかよ。

“ ここはあの世ではありません ”

あの世じゃないのか？

それじゃ、ここはどこなんだ？

夢の世界か何かなのか？

そもそも、お前は一体：誰なんだ？

“ 私はオヤシロ様と言われた者の残滓 ”

オヤシロ様。雛見沢の神様。

なぜ神様が俺の前に現れたんだ。

まさか、俺を生き返らせてくれるのか？

“ 残念ながら、そのような力は私にはありません ”

：そうだよな。

死ぬ間際に神様が現われて助けてくれる。  
そんな都合の良い話があるわけない。

一欠けらの水晶体が眼の前にやってきた。

そこには、俺の手を握り涙を溢れさせている魅音の姿が映し出されていた。

ちくしよう、それでも：俺は：

生きたい。生きて、魅音に一目会いたい。

撃たれた直後は、これで良いと思った。

これで俺の罪の清算が、ほんの少しでも出来ると考えていた。  
でも、違った。本当はそうじゃない。

俺は魅音が好きなんだ。

愛しているんだ。

罪の清算とかじゃない。

愛しているからこそ、俺は身を挺したんだ。

もう一度、チャンスが欲しい。

魅音と共に生きるチャンスを：

“私には人を生き返らせる力はありません。しかし、ほんの少しの奇跡なら行う事ができます…”

…え？

“ただし、全ての帰結は貴方自身の選んだ選択により収束されま

す。  
それによって貴方は死より辛い決断を迫られるかもしれません。

それでもよろしいですか？”

構わない！構わない！

またもう一度、魅音と一目会えるのなら！

また部活のメンバーと一緒に笑え合えるのなら、それでもかまわない！

どんな辛い決断だって、きつと乗り越えて見せる！

“それでこそ、ボクの大好きな圭一です。きつと、君ならどんな苦

難でも乗り越えられるはずですよ”

…その言い方、そうだ。思い出した。

俺と魅音の婚約披露宴が園崎家で行われた時、梨花ちゃんが言っていたじゃないか。

——甘いので、これなら…でも大丈夫なのですよ☆にば——  
そうだよ。どうして忘れていたんだろう。

彼女は俺達の部活の仲間じゃないか。

命をかけて、俺達と共に戦ったじゃないか。

それなのに俺は…

「羽…」

光が眼の前を覆い…

全てを包みんだ…

そして…

……………

……………

……………

…ピツ、ピツ、ピツ

…先生！バイタルが正常に戻りました！

…

ここは、どこだ？白い天井が見える。知らない天井だ。

周囲がビニールで覆われている。なんだ全身がチューブで繋がっている？

幾つもの機械が見える。白い服の人達が動いている。

ん？誰だ。俺の右手を握っているのは…

白い服、白いキャップ、白いマスクに、プラスチックのアイパット。

全身真っ白だけど、わかる。魅音だ。

「…チャン…圭ちゃん…」

魅音、そんなに声を出さなくても聞こえるぜ。

お前はいつも大げさだな。

俺は軽く握りかえす。体に思うように力が入らない。

首を動かすのもやっつだ。

何人か同じように全身真っ白な服装の人達がやってくる。

「お医者さんか、看護師さんか：

だけど、もう目を開いていくことができない。

意識が急激に落ちていく。

「さてよ、やつと：のおかげで戻ってこれたのに：

「30日目（金）：穀倉総合病院：昼間：前原圭一」

再び意識が戻った時、おれはまた天井を見上げていた。

周囲をみると、ビニールシートはなくなっていたが、部屋を埋めるほどの花束と、プレゼントらしき品物が積み上げられていた。

部屋の奥の方に親父とお袋がいて、何やらお医者さんと話をしていくようだ。

ベッドの脇に視線を落とすと、俺の手を握って俯いている魅音と、その肩に手を回しているレナがいる。そのすぐ横にいる沙都子も下を向いているようだ。

ただ一人、梨花ちゃんだけが俺を見ていた。

俺と視線が合わさったので、笑顔をしようと口端をあげようとしたが上手く行かない。

顔の筋肉が固いな。口もうまく動かないぞ。

「圭一が、圭一が目を覚ましたのですよー！」

梨花ちゃんがそう言いと、その場にいた全員が一斉に俺を見た。

何だか視線が集中するというのは、恥ずかしい。

俺は小さく「おはよう」と呟くと、手を握っていた魅音が。

「おはよう、おはよう、圭ちゃん…！圭ちゃんツ!!おはよう!!」

と涙をポロポロ流しながら返してきた。

両親と話していた医師が看護師と一緒に俺の元にやってきた。

魅音が離れ、入れ替わりに医師が俺のすぐ横に來ると瞳孔を見たり、脈拍をはかったりしはじめ。看護師に促されたのだろうか、俺の両親と魅音以外の人達は部屋から出て行った。

一通り見た感じ、特に問題は無いとわかったのだろう。

医師が色々と質問をしてきた。

自分の名前、年齢、生年月日、今日は何日か：

今日は何日かわからなかったため、答えられなかったが、それ以外

は多分上手く答えられたはずだ。

医師は俺の目を見て、

現在の俺がおかれている状況を説明した。

俺はあの日に、銃弾を胸に三発も受けて二週間近くも昏睡状態が続いたらしい。

バイタル。つまり生命反応が落ちついたのは二日前。

それまではICU：集中治療室と呼ばれる場所に置かれていたと説明された。

俺が最初に目を開けたのはそこらしい。

弾丸を喰らったのだから、俺の体の状態は相当よくなかったらしいが、

奇跡的にも、その三発の銃弾は俺の心臓と、傷つけてはいけない血管を外れていたという。

ただ、与えられた奇跡はそこまでだった。

その内二発の弾丸が俺に深刻なダメージを与えた。

一発は、気道にあたり、俺を自分の血の海に溺れさせた。

肺まで満たされた血液は、この俺を死なせるには十分な量だったが、迅速な応急手当てにより事なきを得たという。

後で魅音に聞いた話だと、幸いな事に翌日に行われる予定だった綿流しの祭りの準備のために、たまたま深夜まで神社の境内で医療品の用意をしていた鷹野三四さんと医療スタッフの人達が、園崎邸の爆発音を聞きつけて駆けつけてくれたらしい。

さらに同じく深夜まで境内で祭りの作業を行っていた小此木造園の人達も救援にかけてくれたために、あれほどの大惨事にも関わらず死者はでなかったという。

：大石さんが射殺した若頭を除いて。

鷹野さんの迅速な応急処置によって、俺は自分の血で死ぬことは免れたものの、

それでメデタシとはならなかった。

最後の一発が、俺の脊髄にかすり、運動機能に重大な支障を与えるに至ったと言う。

色々言われたが、簡単にいえば下半身不随。つまり腰から下が動かない。

どうりで下半身に何の感覚もないわけだ。

動かすどころか、触れられた事さえもわからない。

レントゲン上では深刻な物理的欠損は無いとは断言してもらえたものの、治療は難しいらしく、下手をすれば生涯、車椅子生活を余儀なくされるかもしれないと言われた。

「…そうですか」

俺はお医者さんの一連の説明を聞いて、それほど動揺はしなかった。

一度ぎっくり腰で全身に力を入れることができなかつた体験があつたせいだ。

それとも、まだ起きたばかりで、現実感が乏しいのか。

いや、違う。知っていたからだ。

“死より辛い決断を迫られる”と…

これが多分”それ”なのだ。

説明が終わり医師が外に出ていくと、俺は涙を受けべていた両親に抱きしめられた。途中で親父に促されて魅音も輪に加わり、しばらく俺達四人は無言で抱き合っていた。

その後、俺の介護を自発的に申し出た魅音を残して両親が病室から出て行き、入れ替わりにレナと沙都子が入って来た。

梨花ちゃんだけがいない。どうしたんだ。

「沙都子、梨花ちゃんは何？」

「…圭一さんに合わせる顔が無いと、病室の外におりますわ」

合わせる顔が無いって、ああ…そうか。

梨花ちゃん、俺がこういう体になったのは、自分が事件に引き込まだせいだと思っっているのか。

全く、しょうがないな。

「沙都子、俺は気にしちやいないって、梨花ちゃんに伝えてきてくれよ」

「私も、そう伝えましたわ。圭一さんなら気にしないって…でも、梨花

はどうしてもと…」

沙都子は頭を左右にふる。仕方がない。自分の責任だと思ってしまうえば、確かに顔を合わせづらいだろう。いずれ落ち着いたら合えるだろうから、黙ってそのままにしておこう。

ベッドのすぐ横のイスに座った魅音が、

俺の手をとり、またポロポロと泣き出した。

「でも、本当によかった…圭ちゃん、もうこのまま目を覚まさないと思ったから、私…私…」

本当に、困ったフィアンセだぜ。

俺は泣き顔より、笑顔の方が好きだって言っただろう。

俺は魅音に両手でつかまれた手を魅音の頭に乗せると、ゆつくりと髪を撫でた。

「俺は大丈夫だぜ、魅音…」

「圭ちゃん、圭ちゃん…」

さらに魅音の目から涙が溢れだしてくる。撫でたのは少し失敗だったか。

そしてレナはそんな魅音を見て、泣きだしていた。

「よかったね。魅いちゃん…本当に、良かったね…」

バカ、何を言ってるんだよ。

頭を撫でるぐらい、普通じゃないか。泣くようなことか？

ああ、沙都子も俺の名前を言って泣き出しちまったよ。

まったく、泣いてないのは俺だけか？

…ポロ

あ、ダメだ。俺も目から涙があふれてきやがった。

ちくしよう、止まらない。涙が止まらない。

これはもらい泣きなのか？それとも嬉し泣きなのか？

どっちだよ。わからねえよ。

俺達はその場でしばらく泣いていた。

泣いて、泣いて。涙が落ち着いたのは、それから二十分後の事だった。

先に涙が止まった俺は、

まだ両肩を震わせている魅音の涙の痕を、そつと親指で拭く。

「なあ魅音、そろそろ、お前の笑顔を見せてくれないか？」

魅音成分不足で、俺、そろそろ餓死しちやいそうだからさ」

魅音はハツとした表情を俺に見せると、満面の笑みを浮かべた。

うん。良い笑顔だ。やっぱり魅音には笑顔が良く似合う。

「そうだ。圭ちゃん、お腹すいていない？」

お腹？そういえば少し空いているな。

時間を見れば午後12時半だ。お昼時だな。

「圭ちゃんは意識が無くて寝たきりだったんで、点滴と口から管を入れての食事だったんだけど、

昼食直前に目がさめたからさ、用意が出来てないみたいなんだ。

看護婦さんから許可をもらって何か買ってくるよ」

「なるほど…病院食はまずいからな。助かるぜ」

「二週間ぶりに食べる食事がいきなり固形物なんて体に悪いだろうから

いい感じのものを持ってくるよ。沙都子も来て、皆の分の昼食もついでに買ってこよう」

「わかりましたわ。それではレナさん、圭一さんをよろしくお願いしますわ」

レナが「うん、任せて」と言うと、魅音は元気いっぱい沙都子を連れて病室から出て行った。

俺は魅音の後姿を目を細くして見る。

よかった願いはかなえられた。

魅音に一目会いたいという願いが。

後はもう、俺が“決断”をするだけだ。

レナの方に視線を向けると、

レナが無表情で俺の顔を見ていた。

さつきまでの感情の起伏が嘘のように、

黙ってじつと俺の顔をみている。



一体どうしたんだ？

さつき感情が高ぶりすぎたから落ち着かせているだけか？

レナも色々あるんだろうし、

あまり気にしないでおこう。

そういえばレナと二人つきりになるなんて久しぶりだな。

最近はレナと二人つきりになる機会がめつきり減ったので、何だか新鮮だぜ。

俺が口端をあげると、

レナは、意味ありげに笑った。

「ねえ、圭一くん。魅いちちゃんはね。圭一くんが運ばれてから、毎日、朝早くから来て夜遅くまで…圭一くんの病室に来て手を握っていたんだよ」

そういえば、最初に目を覚ました時も、白い服をきた魅音に手を握られていた。

もしかして、この二週間、ずっと俺と一緒にいてくれたのか。

「魅いちちゃんはね。ずっと自分を責め続けていたんだよ。自分のせいで圭一くんが撃たれたんだって、自分を守るために圭一くんが、こんなことになったんだって…今は元気だけど、一時期本当に

死んじゃうんじゃないかってぐらい、やつれ細って…本当に見えていられなかった…」

「…何を言ってるんだよ。魅音のせいじゃないだろ。誰だって同じ事をしていたさ。」

たまたまだぜ、たまたま…」

「ううん。それは違うよ圭一くん…誰だって出来るものじゃないと思う。圭一くんだからできたんだよ。圭一くんだから、魅いちちゃんを助けるために、体を、命を捧げられたんだよ」

買いかぶりすぎだぜレナ。

ただ、魅音を助けることができた。

それだけは確かに良くやったと思う。

これだけは自画自賛したいところだぜ。

「でもね。圭一くんの正しさのために、魅いちちゃんは、いっぱい悲しん

だよ。

悲しんで、悲しんで、泣いて、泣き疲れて…それでもずっと圭ちゃんの側を離れなかった。

だからね、圭くん。もう魅いちちゃんを悲しませないで欲しいんだ」

…どういう意味だよ。

まさか、お前”知っている”のか？

「…圭くんは、また”正しい”ことをしようとしている。そうじゃないかな？かな？」

…ああ、そうか、やっぱり”知っている”んだな。

俺が何を考えているのか、俺が何を決断しようとしているのか。

さつき、無表情で俺を見ていたのはそのためか。

レナは勘がするどいから、やはり察するんだろうな。

本当、レナにはかなわないぜ。

「…レナ、俺は魅音の事が好きだ。だから、魅音が幸せになることだったらどんなことだってやってやる。どんなことだって」

そうだ。例え何があろうとも俺は”決断”しなければならない。

それは神様に言われたからじゃない。俺自身が、魅音の幸せのために決断するんだ。

魅音のよりよい未来の為に。

「圭くん、それはとても立派なことだと思う。

でもね。その立派なこと…なんで魅いちちゃんの心が入っていないんだろう？」

…え？

「この間ね。テレビゲーム遊んでみたんだ。その中で、あるキャラクターが面白いことを言っていたんだよ。『恋とは、心が変になると書いて恋になる』って、あはははは。面白いよね！面白いよね！」

「心が変になるのが『恋』って言うのなら『愛』って何だろうね？レナは思うんだそれって、心を受け入れるって書いて『愛』になるんじゃないかって。相手の心を受け入れているからこそ愛になるじゃない

かな」

「…レナ」

レナは立ち上がると、

病室の中でスカートをはくがえして回転を始めた。

「これはね、レナの我儘なんだ。圭ちゃんも、魅いちちゃん二人ともずっと幸せでいて欲しい。いつまでも、私の大好きな二人でいてほしい。いつまでも、いつまでも、皆が、楽しく、幸せで、笑って過ごせたら…それはとってもいいなって思う」

なんだよレナ、お前も詩音と同じ事をいうのかよ。

全く、グループってのは、本当に同じような人間があつまるものなんだな。

「だからね。圭ちゃん…魅いちちゃんを、悲しませないで欲しいな」

回転を止めたレナは、悲しそうな顔で俺を見つめていた。

俺はその視線を受け止めて、小さく笑った。

「…レナ、お前本当に良いことをいうぜ。きっと将来素敵な女性になるだろうな」

「あははは！…そうだよ、圭一くんが後で『なんで選ばなかったのか』って、後悔するぐらい、

レナは素敵な女性になるんだよ☆なるんだよ☆」

「それは無い！なぜなら、魅音は俺の最高の嫁だからだ！」

「あははは！…そうだね！…そうだね！」

俺達二人が笑い合っている最中にドアが開く。

魅音と沙都子は二人とも両手にパンパンになったビニール袋を持ってきている。

おいおい、お前ら何を買ってきたんだよ。

「なに、二人して…おじさんがいないあいだに談笑してたわけ？」

「おう、魅音がいかに俺の素晴らしい嫁かをレナに力説していたのさ」「本当に、魅いちちゃんと、圭一くんって仲が良いんだよね。レナ、憧れちゃうな！」

魅音はまんざらでもない顔を見ると、部屋の中に置かれていた簡易テーブルを設置して、その上に次々と食べ物を置きだした。

その中に、一際大きいドンブリが置かれた。なんだ、まさかラーメンでも買って来たのか？

「ぶぶ〜残念圭ちゃん。これは近くの小料理屋の女将さんに頼んで用意してもらった特製のおかゆ。圭ちゃんがいつか目が覚めた時のために、頼んでおいたんだよ」

いやいや、頼んでもらったって。お前…

魅音は小皿を取り出すと、ドンブリからおかゆをとりわけ、俺の所まで持って来た。

小皿のおかゆをレンゲですくって俺の口元持って来た。

「はい、圭ちゃん、あ〜ん」

…パクリ。

うん。やっぱり魅音に食べさせて貰うのが一番美味しい。

俺が元気に食べる姿を見て、魅音も嬉しそうだ。

レナと沙都子も買って来たお弁当を広げて食べ始めた。

教室で皆でお弁当をつつきあっていた時を思い出すな。

なんか、つい最近のことなのに、随分昔のように感じられる。

食事の最中に、俺が意識を失っていた間に何が起きたのかを聞いてみた。

園崎家を襲撃したミフネ達の事件はその日の朝には雛見沢中で大騒ぎとなり、

綿流しの祭りは延期されることになったという。

翌日には「暴力団の一大内部抗争。雛見沢の住民の皆殺しを画策」と全国紙に乗り大変な反響があったらしい。

現役のヤクザが40人も兵隊を引き連れて邸宅を襲撃をしたのだから、

話題にならない方がおかしい。

ただ、不思議なこととその騒動の話では、雛見沢症候群については触れられてはならず、

ミフネがどうやって雛見沢住民全員の抹殺をはかったのかはボカされていたという。

そのせいで、鷹野三四さんのスクラップ帳並に様々な俗説が百鬼陵

乱飛び代わっているらしい。

魅音が週刊誌を見せてくれたが、中々面白い。

例えば、

爆弾を使って山に穴をあけて、火山性の有毒ガスを広げようとしたとか。

鬼ヶ淵沼からあふれ出した謎の寄生虫を井戸の中にばら撒くだとか。

自衛隊から奪った細菌兵器をヘリコプターを使い空中散布するとか。

果ては鬼ヶ淵沼に墜落した宇宙人の体から発見されたウイルスを広める予定だったとか。

よくもまあ、こんな説を考えられるというぐらい、色々な話が書かれていた。

人間の想像力を掻き立てるような内容は、さすが週刊誌だ。

というか、「監修・鷹野三四」の文字が入っていても不思議じゃないぞ、これ。

「梨花ちゃんが未成年者だというのもあるんだろうけれど、

女の子一人狙えば、村人全員の命がかかわるといのが知れたら大変なことになるから

どこからか、圧力がかかったんじゃないかな」

とは、魅音の言葉。

園崎家が、その件に関与していないのか聞いたが、そこは曖昧な返事で煙にまかれた。

ちなみに、この事件は週刊雑誌などでも大々的にとり扱われたらしいが、その中に

『婚約者を命がけで守った勇敢なる少年K』とやらの記事が掲載されたらしい。

美談として、かなりの反響があったらしく、いつの間にか俺の実名と入院先まで

勝手に公表され、多くの義援金と贈り物が届いたとか。

俺の部屋にあるこの謎の贈り物と花束の山はどうやら、そのためら

しい。

こういうのつて贈る側だと気にしなかつたけど、実際に送られると嬉しいやらが恥ずかしいやらで判断に困るな。千羽鶴なんてどうするんだこれ。花輪なんて持って帰れないぞ。

ちなみに、この病院の最上階の政治家が入院するような立派な大部屋の個室が俺にあてがわれたのも、たんなる園崎パワーが働いたという理由だけでは無く、マスコミや野次馬の対策という側面があるらしい。一般病室や個室では、マスコミが群がってきて、大変なことになるという判断からなんだろう。

魅音は病室の贈り物の山を見て誇らしげに語る。

「婚約者を身を呈して守ったんだから、そりや圭ちゃんの評判は鰻上りだよ。」

おじさんの夫として不動の地位を手に入れたと言っても過言じゃないね。

もう、反対する人なんて一人だつて出てきやしないよ」

その言い方だとミフネ以外にもやっぱり反対する人がいたみたいだな。

そりやそうだ。大石さん流に言わせれば魅音の旦那という立場は「本来は血を流してでも手に入れたい地位」らしいからな。

良くも悪くも、おいそれと渡したく無い人だつているんだろう。

「俺はさ、そんなものはどうだつていいんだ。魅音さえ幸せでいてくれるなら、さ……」

「圭ちゃん……」

魅音は目をうるませて、俺の手を握る。

そうだ。婚約者の地位なんてどうでもいいんだ。

魅音が、幸せに暮らしてくれればそれで……

「圭一さん、申し訳ございませんわ……」

私がもう少し、しっかりと誘導してあげられればこんな事には……」

沙都子か、今の声は。

ふとももにおいていた両手でスカートを握りしめ、涙目になってい

た。

「おいおい、俺の人生をフォローしてくれているとは確かに言っていたけれど、

そこまで俺の人生に責任を持たなくても良いんだぜ？お前は俺の人生の師匠か何かか？」

手招きして、沙都子を近くに呼ぶと、頭を撫でる。

「沙都子には悪いが、俺の人生よりも北条鉄平がどうなったのか気がかりだ。」

「なあ北条鉄平なんだけど…」

「鉄平のおじさま？ああ、先日手紙が届きましたけど、なんでも今回の騒動で「若者たちを命をかけて救った英雄」扱いで、ちょっとした有名人名人になっているようですわ。」

テレビや週刊雑誌の記者の取材にひっぱりタコで大変らしいですわね。そのせいか入院先の看護婦さんともいい感じになっているとか…まったく、見てられませんでしたので手紙をゴミ箱に捨ててしまいましたわ」

「そうか、北条鉄平は無事だったのか。」

「でも、沙都子…」

「俺はお前のおじさんの人生を、もしかしたら狂わせたのかもしれない。」

「それについては、どう釈明したら良いのか思いつかない。」

「圭一さん何も気にする必要はありませんわ」

「…え？」

「俺の考えを読んだのだろう。」

「沙都子は満面の笑みを見せた。」

「圭一さんは、北条鉄平から私を救い出してくださいましたわ。北条鉄平は悪い奴で、自分の老後が心配で私を軟禁してありましたのよ？そこから、みなさんのお力で私は救われました。紆余曲折ありましたが、今となっては、おじさまも改心して、周囲からちよつとした英雄扱いを受けておりますし、これでよろしいではありませんか？」

「…沙都子」

「私は、いつだって梨花と皆さんと一緒に、幸せに暮らす未来だけを考えておりますの。だから圭一さんも、変な正義感や義務感に囚われずに、同じように考えて下されば…とても嬉しいですわ。だって、それこそが皆が幸せになる一番の方法ではございません？」

その言いようは、お前はレナと同じく「知っている」のか？

いや、違うな。たまたま偶然、同じような答えになったただけだ。

レナぐらいさとくなければ、普通ならわかるわけがない。

食事を終えて、そのまま俺達は談笑した。

夕方になり、そろそろ面会時間が過ぎようとしている。

魅音は名残惜しそうに俺の手を握る。

「…明日も、一番で来るからね。圭ちゃん。明日はさ、お弁当持つてくるよ」

「ああ、わかったぜ。魅音、明日、待つてる。それとき、お願いがあるんだ…」

「なに、圭ちゃん？」

「…キス、してくれないか？」

本当なら、俺の方からしてやりたいんだけどさ、ほら、動けないから」

魅音は返事の代わりにニツコリと微笑み浮かべると、顔を近づけ唇を交わした。

唇がふれ合うだけの優しいキス。

なんだろう。物凄く恥ずかしい。

まるで…そう、はじめて手をつないで帰った時にしたキスのような。

そんな気恥ずかしさを感じる。

「ありがとうな、魅音…」

俺はお礼を言った後にとまどった。

唇を離れた笑顔の魅音の瞳から涙がこぼれていたから。

「…ごめん、ごめん圭ちゃん。これ以上ここにると、私、我慢できそうにない。圭ちゃんが生きていたって…本当にわかって…嬉しくて、嬉しくて…どうにかかなりそうだから…行くね」



魅音は溢れる涙を拭かずに部屋から出ていた。  
俺の胸の中に強烈な痛みが貫く。

—どうして、その正しさの中に魅いちちゃんの心が無いの？—  
レナの言葉が、頭では無く心に響く。

魅音は、本当に俺の事を心の底から愛している。

苦しくて。せつない。どうしてこんなことになったんだ。

撃たれなければ、守らなければよかったと？

それとも現世に戻って来たのが間違っていたと？

いや、それでもわかつていたはずだ。

“死より辛い決断を迫られる”

これを理解した上で戻って来たんだろう？

胸を押さえていると、ドアの近くに人影がいるのに気が付いた。

あれは…梨花ちゃんか？まさかお昼ごろからずっと、そこに立っていたのか？

「…梨花ちゃん、そこにいるか？」

梨花ちゃんが、ドアの向こうから部屋に入って来た。視線を下に落として、体をもじもじさせている。俺は手招きをして、ベッドの横の椅子に座るように誘導する。

ちよこんと、椅子にすわる梨花ちゃんの姿が愛らしい。

「圭…ごめんなさい。ごめんなさい…」

梨花ちゃんの目から涙が流れた。

本当に今日は皆、良く泣く日だよな。原因は自分にあるから何とも  
いえないけどさ。

俺は梨花ちゃんの頭を撫でる。沙都子の頭をそうしたように、優しく、何度も。

「謝るのはごっちゃだぜ梨花ちゃん。大石さんも言ってただろう？」

あいつらが本当に狙っていたのは俺と魅音で、梨花ちゃんとはぼつちりを受けただけだった

だからさ、気にしなくていいんだぜ？俺も全然、気にしてないから  
さ！—

梨花ちゃんは、まだ何か言いたそうだったけれど、

俺は人差し指で、梨花ちゃんの口を止めた。

「…俺さ、寝ている間、羽入にあったんだ」

「圭一は、羽入を覚えているのですか…？」

俺は頷く。

「夢の中で言われたんだ。このまま死ぬか、それとも生きて”死より辛い決断を迫られる”か。」

そしてさ、俺は後者を選んだんだ」

「……………」

梨花ちゃんは何も言わない。

俺がいった言葉の意味を考えているようだった。

俺は天井を見上げた。

「梨花ちゃん…羽入には、もう…合えないんだろ？」

「…はい。羽入は、もう…いないのです」

そうか。やっぱりそうだったのか。

きつと、あれは本当に最後で、できる全ての奇跡を俺にくれたんだな。

沈黙が病室を支配した。

その時間はおそらく短いものだったに違いない。

でも、俺達にとっては、とても長く感じられた。

その沈黙を破り、梨花ちゃんは語り掛ける。

「圭一…圭一が何を決断しようと、ボクはその選択を尊重します。」

でも、教えてくれますか？その選択は、皆が幸せで笑顔になるようなものですか？」

「おう、もちろんだぜ。この前原圭一が選ぶ選択なんだぜ？皆が幸せになるに決まってるだろ！」

俺はそういつて、また、梨花ちゃんの頭を優しく撫でた。

でも、梨花ちゃんは気が付いていた。俺の言葉の意味に。

そして、泣きそうな顔で俺を見ている。

「…圭一、なんで”笑顔”の部分には触れてくれないのですか？」

俺は答えることができなかった。

静かに、梨花ちゃんの頭を撫でることしかできなかった。

看護師さんが病室に入ってきた。俺の状態を見に来たんだろう。梨花ちゃんに気が付くと、その手を取り病室から連れ出そうとする。

梨花ちゃんは看護師に少し抵抗した後、俺に懇願した。

「圭一、ボクは嫌なのです。皆が幸せで笑顔で無いと嫌なのです。だからお願いです…圭一…!」

俺はただ、梨花ちゃんが病室を出て行くまで、手を振り続けた。

「31日目（土）：穀倉総合病院：昼間：前原圭一」

朝の面会時間開始時刻になってきたのは、魅音だけじゃなかった。

海江田校長先生と知恵先生に引率されてきた、雛見沢分校のクラスメイト達も来てくれた。

富田くんと岡村くんが、俺を見て少し興奮気味だったのには笑ってしまった。

「前原さんッ！恋人を命をかけて守ったなんて本当に男の中の男です！」

「僕たちも恋人ができたら、命をかけて守りたいと思います！」

ありがたいな二人とも！

二人が将来、どんな女性と付き合うのか楽しみだぜ。

願わくば、それが梨花ちゃんと沙都子であってほしいが、

さすがに、それは無理ってもんか。

知恵先生は、俺の顔を見て涙ぐんでいた。

「前原くんが元気になってくれて、本当に嬉しいです。」

無理をしないで下さいね。学校で待っていますよ」

知恵先生は俺が魅音を守った事よりも、俺の体の方を心配してくれていたようだ。

英雄扱いされるのは少し気恥ずかしいので、これはこれで嬉しい。

海江田校長先生は俺の肩に手を乗せると「よくぞ、戻ってきてくれた」と力強く言ってくれた。

クラスメイトがベッドの周囲に群がる中で、逆にレナ、沙都子、梨花ちゃんは、俺と距離をとっていた。皆が帰る段階になり、俺はレナを手招きすると、レナは少し寂しそうな顔でこう言った。

「レナ達はそのまま帰るね。圭一くんは、今日一日魅いちちゃんと二人つきりしていると良いと思う。」

そうした方が、圭一くんのためになるはずだよ…そしてね、本当に大事なことはなんなのか、

圭一くんには、よく考えて欲しいな」

…レナ。

「…ごめんね。レナ、いつも圭一くんに厳しい事ばかり言っちゃうよね。」

でも、レナ達は何があっても、圭一くんが大好きだつてことは忘れないで欲しいな」

そんなの決まっているじゃないか。

俺達は最高の仲間だろう？

魅音以外のクラスメイト達が帰った後は、入れ替わりで刑事さん達が入って来た。

興宮署の熊谷刑事と名乗る人だった。前に境内で大石さんと一緒に居た所をみたことがある。

大石さんは別の用事で忙しいらしくこれなかったらしい。

残念だぜ。

大石さんに愚痴の一つでも言つてやりたかったのに。

そう魅音に目線で訴えると、

一緒に意地の悪い笑顔をした。

ところで警察の人にあつたら聞きたいことがあつた。

魅音の屋敷を襲ったミフネは結局どうなったんだ？

「ミフネの野郎はどうなったんですか？逮捕されたんですか？」

「…今の所、まだ見つかっていません。でもご安心ください。既に全国に指名手配されています。また、園崎グループの方々にもご協力して頂いておりますので、近いうちに捕まることでしょう」

園崎グループ？ああ、まあ警察がヤクザと協力しているとは言えないから、そういう言い方になっているのか。しかし、園崎グループだなんて、まるで大財閥のお嬢様みたいだな。

いや、実際にお嬢様か。妹の詩音も聖ルチアに入っていたし。

ただ、どちらかといえばお嬢様と言えば沙都子の方がイメージが強いな。特に話し方とか。

「なに、圭ちゃん？おじさんの顔に何かついてる？」

「いや、園崎家の方では何か行方はずかめていないのかな？って思ってます」

「全然だよ。一体どこに姿をくらましたんだろうね…あのタヌキ親父。」

見つけたら、生皮履いてタヌキ汁にして食ってやるのにさ」

なんだ、その日本の怖い昔話集みたいな例えは。

警察の人達全く笑っていないぞ。

熊谷刑事は事件当日の話を聞きにきたようだけど20〜30分程度の簡単な事情聴取で終了した。

拍子抜けするほど早かった。俺の体調を考慮してくれたのかもしれないけれど、

考えてみればもう事件から二週間過ぎているわけで、今更俺の証言なんて、

そんなに重要なわけでもないだろう。

ただ、事件当日の状況の確認をしに来た。そんな感じだった。

熊谷刑事が立ち去ろうとしたその時、

俺はふと、気になる事を思い出した。

「あ、そうだ。最後にもう一ついいですか」

「なんですか、前原さん」

「俺達を救ってくれた人たちって、誰だったんですか？」

俺達が園崎家の地下祭具殿で立てこもっていたあの時、誰かが俺達を助けてくれた。

おそらく一人二人じゃない、かなりの大勢で銃器をもって戦ってくれたはずなんだ。

最初は大石さんが呼んだ警官隊だと思ったけれど、魅音に聞いたらそれは違ったようだ。

なら山狗と呼ばれた梨花ちゃんの護衛の人達かと思ったけれど、魅音曰く鷹野さんからは「私達が来た時は何もかも終わっていたわ」と

言われたらしい。

彼らは何者だったのだろうか。

熊谷刑事も、また俺の問いには答えてはくれなかった。

ただ「我々警察が踏み込んだ時、そこにいたのは救助にきていた入江診療所のスタッフと、小此木造園の方々だけでした」とだけ語り、部屋を立ち去っていった。

俺は魅音の顔を見る。もしかしたら園崎家の方で何か知っているのかと思っただけけれど、魅音が頭を左右に振った時点で諦めた。

園崎家の次期当主が知らないのであれば、恐らく誰も知らないだろう。

一体誰が俺達を助けてくれたんだろうか。まさか診療所の看護師と、造園所の人達が戦ってくれたわけじゃないだろうか。

「二つだけ言えることがある。あの時、鷹野さんは…圭ちゃんが瀕死の重傷をおって混乱している私を慰め、圭ちゃんの命を救うため全力を尽くしてくれた。誰が助けてくれたかはわからないけれど、名も無いヒーロー達と…鷹野さん、入江診療所と小此木造園の人達には感謝をしないとだね」

俺は無言で頷く。

誰だかわからないが、自分の身を危険にさらしてまで戦い、しかしそれを誇らずに去っていくなんて。最高にカッコいいヒーローじゃないか…

俺はなれるだろうか？

ヒーローに。

お昼時になってようやく面会して来た皆から解放された俺は、病院食を食べる。

病院食は不味いとは言うが、体力が回復できていないときは、それなりに美味く感じられるものなんだな。不味い食事の代名詞と言われる病院食が驚くほど普通に食えた。

だが本命は魅音のお弁当だ。

病院食の後に食べるのだから、そんなに量は作ってきてはいなかったが、美味さという点では病院食とは比較にならない。

俺は魅音の弁当を一口食べさせてもらった時、余りにの美味さに涙がでそうになった。

「魅音：お前の弁当ってさ。本当に美味しいよな…」

「あははは、圭ちゃん、大げさだなあ：でも、そんなに喜んでくれると、作り甲斐があるよ」

そういつて、魅音はお弁当の中に入っていた具材の中の一つを口に入れてよく咀嚼すると、

俺に口移しを行う。

病院食以外の固形物をまだ胃の中に入れるのは難しい。でも魅音の料理は食べたい。

そして、できるなら魅音とキスをしたい。という三つの難題をクリアした完璧な方法だ。

もつとも、看護師さんのいる前では出来ない方法だけれども。

俺が茶目っ気を出して、口移し中に少し舌を出したら魅音に困り顔で怒られた。

「駄目だよ圭ちゃん。

それは元気になってから。おじさん：我慢できなくなっちゃうでしよっ。」

「はははは、御免」

「元気になったらさ、またみんなで一緒に遊ぼうね圭ちゃん。

どこかに旅行にいきたいな。部活メンバーでき、東京あたりでも進出してみようか」

俺は何も言えなかった。

食事が終わった後に、魅音は俺の体の態勢を少し変えて、脚をマツサージする。

床ずれや、筋力の低下をふせぐべく、こういうことを定期的に行う必要があるらしい。

俺が意識が無い時から、魅音は看護師さんに教わり、見舞いに来ている間も行ってきてくれたのだという。

「看護師さん達も忙しいからね。

それに圭ちゃんが退院したら、おじさんが面倒みなきやいけないか

ら、その予行練習つてところかな？まあ、介護自体はバツちゃんの世話でなれているしね。気にしないで」

そう言うと、屈託もなく笑う魅音。

その顔を見ると、俺の中の罪悪感がとぐろを巻いていて全身を駆け巡る。

本来、魅音はこんなことをする立場の人間じゃない。

園崎家の当主として、もっと大きく自由に羽ばたける存在なんだ。それなのに、俺のためにそれらを犠牲にしている。

魅音への罪悪感と、自分への情けなさで涙があふれる。

「どうしたの圭ちゃん…？痛かった？」

「いや…魅音、ありがとうな。俺なんかのために」

「あはははは。なに？感謝の涙つてわけ？」

圭ちゃんの意識が無い間、おじさんがどれだけ尽くしたか知ったら、

圭ちゃんの涙を貯めるプールが必要になるよ！」

…ごめんな魅音。

俺は、お前のお荷物だ。

魅音がすつと俺の手の甲に、手を乗せて来る。

「大丈夫だよ圭ちゃん…」

ずつと、面倒見てあげるから、ね？」

魅音の優しい声で、さらに心が苦しくなる。

自分のふがいなさで、死にたくなる。

一生守つてやるどころか、お前の世話になるしかないだなんて。

「ハロ〜、圭ちゃん元気？」

今日も圭ちゃんを独占してご満悦かな、お姉？」

「ケエエエエエエー！俺は信じていましたよ！」

アンタが不死身の男だつて！」

俺のケアが終わった時を見計らったかのように、詩音が亀田くんをつれてお見舞いに訪れた。

何でも、詩音がエンジェルモートでお見舞い用のケーキを買っている時に、亀田くんに遭遇したらしい。話を聞いた亀田くんにせがま



れ、仕方なく連れて来たそうだ。

詩音は、ベッドの横に置いてある椅子の一つに座ると俺にウインクする。

「ね？圭ちゃん、言った通りだったでしょ？お姉は尽くしてくれるって！

お姉は、むしろのこういう時の方が輝くんですよ。バアさんにできえ尽くすぐらいですからね」

言った通りって、アレか、エンジェルモートでブチ切れさせた時に言っていた、

四肢を斬り落として箱詰めにして送っても魅音が面倒見てくれるって話のことか？

状況は確かに似ているかもしれないけどな。やっぱり、そっちの方が怖いだろう。

「ちよつと詩音ー、それって褒めてるつもりー？」

「もちろんですよお姉。お魘のバアさんの介護とか…

想像しただけでカンベンです☆」

「ちえー、なんだよそれー」

「次期ご当主様がんば☆苦労は買ってでもしろってネー！」

魅音と詩音がいつものようなやり取りをしている間に、亀田くんは紙の皿を4出して、エンジェルモートから買って来たケーキを人数分にふりわけた。

「本当はジャンボパフェをもってきたかったんすけどね…

やっぱり病み上がりだとお腹にキツイですからね」

紙の皿に乗っているのは、イチゴの乗った可愛いショートケーキだ。

さすがだな亀田くん。実によくわかっている。100点をあげてやろう！

「食べようぜ魅音」

「うん、わかった」

魅音はおもむろに俺のショートケーキの上に乗っているイチゴを掴む。

「あれえ？なんでお姉、圭ちゃんの子チゴに手を伸ばしているんですか？」

「おいしん坊はダメですよ、お・ね・え☆」

「…!?!」

「魅音と俺の顔が固まり歪む。」

「ついさっきまで口移して食事をしていたので、その延長線でやってしまった。」

「だが詩音は俺達をからかうようなことはせず、」

「亀田くんの頭を両手でつかみ90度に無理やり曲げると、自分も俺達から顔を背けた。」

「はい、見てないうちにどうぞ☆」

「サンキュー、詩音！」

「亀田くんは突然首を曲げられた事に抗議をしたが、俺達はその間にイチゴの処理をした。」

「甘くておいしい。さすがは、エンジェルモートのケーキに選ばれるだけはあるぜ。」

「いててて、なんなんスか…!」

「まあ、気にするな亀田くん、詩音というのはこういう奴なんだ」

「こーゆーヤツってなんですか圭ちゃん？」

「変な風評を流そうとしたら、行儀しますよ?」

「行儀しますよ。ってなんだよその言葉。」

「行儀よくするの間違いだろう? いや、行儀よくさせるの間違いか?」

「言葉の意味はよくわからんが、なんか怖いぜ。」

「まあ、なんにしても固いイチゴが処理できれば、」

「あとは問題無い。」

「魅音がショートケーキにスプーンを入れ、」

「俺の口の前に持ってこようとしたその時だった。」

「病室の入り口から首からカメラをぶら下げた男が入って来た。」

「知り合いでも無ければ、医療スタッフでも無い。」

「一体誰だこいつ?」

「これはこれは、前原圭一さんと、亀田くんだね。」

いやいや、甲子園の宿命のライバルが二人一緒にいる所が見れるなんて！

あ、写真、いいかな？」

俺達が返事をする前に、

勝手に写真を撮り始める。

なんだ、カメラマンか？

違う、ジャーナリストか。

「あ、私はね。写真週刊誌の記者をやっている者なんだけど。

前原圭一くん、君、世間で話題の人だって知っているかな？

凄いやね。恋人をかばって負傷したんだって？」

「ええ、まあ……」

「でも、これってさ……都合よすぎないかな？」

両手を広げて銃弾を正面から受けるなんて、そういう映画みたいなこと簡単には

できるとは思えないなあ。なんか作画的なものを感じるんだよね。

あははははは、気分を悪くしたらゴメンね。

実は、足がすくんで動けなかったとか、そういうことってないかな？」

ずかずかと上がりこんで、何だこいつ。

ぶしつけにもほどがあるぞ。

その場にいる全員が、眉をひそめている

「それとも……圭一くんはさ、婚約者がヤクザの組長の娘だって知っていて婚約したんだよね？」

だとすると、やっぱりこういう抗争つてのも、あるってわかっていたって感じかな？

いや、わかるよ。君ぐらいのは子は、学校にテロリストが入って、それを撃退する！なんて

妄想、よくするからね！あははははは、そういうのって、スリリングだよな？」

さすがに俺もイラっときた。

こうやって人の感情を上下させる取材方法かもしれないが、それに

俺がつきあわなきやならないって法は無いよな？

「あんたさ…さつきからへらへら笑ってばかりだけど…」

俺のように銃弾を三発も受けたこと、あるんですか？」

「あははは、いや、それは無いかな…？」

「そうですよね。無いと思いますよ…あれは、そう…」

地獄のような熱さが胸から沸き起こって全身が燃えあがるような感じ…

そういうのを知っていれば、そんな口の利き方はできないはずですからね…」

記者は、俺の答えに動揺している。

一つ、怖がらせてやるか。

「じゃ、あんたは水でいいや」

「え？水…？…どういうことかな…？」

「苦しみ方ですよ。俺は燃え上がるような熱さで死ぬほど苦しんだ。だったら、あんたは水で苦しむと良い。知っていますか？雛見沢にね一種、恐ろしい力があるんですよ。あんたは今、そこに土足で上がり込んでいる事にまだ気がついていないようですからね。予言してあげますよ。あんたは、水で苦しむことになる」

…クククククク。

亀田くんも、詩音も魅音も笑っている。

「記者さんよお、Kの大喜言はあたるぜ？何しろ、俺からホームランを打ったんだからなあ」

「早く逃げた方が良いですよ…」

圭ちゃんを撃つた人は死にましたし、もう一人は鬼隠しに合いましたからね」

亀田くんと詩音の言葉にたじろく記者に、

ドスの利いた声で魅音が叫んだ。

「さつきと出ていかねえか…このドサンピンツ!!」

記者が部屋の入口まで退いたところで、外にいた看護師たちに取り押された。

「取材は禁止だっていったでしょ！外に連れていけ！」

記者は報道の自由がなんだとか抵抗していたが、ガタイの大きい看護師に無理やり連れて行かされた。

亀田くんは両腕を組んでため息をつく。

「困ったもんっスよ、あの手の低俗な記者は。パパラッチっていうんですか？」

論理もモラルも無い奴らっす。ジャーナリストにもピンキリがありますが、ありやキリの方ですわ。まあ、ジャーナリストの連中にも良い奴らはいますから、あんまり偏見もたんで下さいK」

さすが甲子園ピッチャーとしてマスコミに追いかけている亀田くんだ。

マスコミについては良く知っているらしい。

「そーいや野球業界でも、今回の事は大事件として報道されていますね」

「野球業界？なんでだよ」

「忘れたんスか？さっきもあの記者がいつていたでしょ、俺とKの宿命のライバルって設定」

ああ、思い出した。野球対決していたときに、

成り行きから俺と亀田くんは共に甲子園を目指すライバル的なアレになっていたんだっけ？

マスコミも大勢来ている前で戦っていたしな。

今年の甲子園の注目ののかなんとか。あつたような気がする。

亀田くんはショートケーキをがつつく。

「まあ、その辺は俺がなんとかフォローしておきますよ。

どの道、Kは野球の世界に来る気なんてなかったんでしょ？」

今回の事件で野球を引退したってことにすれば、丸く収まりますし説得力もありますから」

おお、ありがとう亀田くん。

さすがだぜ、ジャンボパフェをつつつきあつた義兄弟以上の仲だけはあるぜ！

「…つまんない」

今の声は、魅音か？

脇を見ると、魅音がほつぺたを膨らませて、そっぽを向いている。どうやら、俺と亀田くんが仲良く語り合っている姿を見て、意地妬けたようだ。

なんで、俺と亀田くんが話をすると、いっつも妬くんだよ。恋愛とは関係無い、男同士の友情ってヤツだろ？ 全く仕方がない奴だぜ。

「ありがとうな魅音。ああいう啖呵をきれるなんて、やっぱりすごいぜ」

「…あははは、そうかな？」

「そうだ。ケーキ食べさせてくれるか？ やっぱり魅音に食べさせて貰うのが一番だからさ」

「んもう、しようがないな圭ちゃん。おじさんがいないと何もできないんだから。あははは」

少し頼ったただけもう機嫌が直った。

ちよろい。ちよろすぎるぞ魅音。

俺は、魅音が差し出したケーキを食べる。

うん。美味しい。

魅音もニコニコしている。

そのやり取りを見ていた詩音が感慨深そうに見ている。

俺達はケーキを食べ終わり、世間話をしばらくする。

日が沈みはじめ、

そろそろ面会も終了の時間が近づいてきたので、

詩音と亀田くんが立ち上がった。

詩音は病室の入り口前に行くと俺の方を振り返る。

「圭ちゃん、お姉を必ず幸せにするって約束、覚えていますよね」

「おう、もちろんだぜ！」

「それ…必ず、圭ちゃん自身の手でやってくださいね」

その瞬間、時がとまったような気がした。

詩音、お前もか。

お前も“知っている”のかよ。

俺は即座に答えられなかった。

そんな俺に失望したかのように、詩音はプイッと顔を背けると、そのまま外へと出て行った。

後味が悪い。

亀田くんは、俺のベッドの横にくとポケットからボールを取り出して俺に渡した。

ボールには「愛」と書かれている。

「K、あの日、あんたに教えてもらった事、忘れちゃいけませんよ。

人は皆、間違う。その間違いを認めて強くなる…良い言葉だけ。

ただ、間違わないのが一番だと思わないツスか？」

「亀田くん…」

「心に愛が無ければスーパーヒーローじゃない…そうでしょK？」

エンジェルモートで待ってるツスよ。

またジャンポパフェをつつつきあいましよう」

亀田くんはそういつて病室から出て行った。

俺は「愛」と書かれたボールを見ていた。

亀田くん、君は俺にこう言いたかったのか。

“間違う前に、間違いに気がつけ”って…

「じゃあ、おじさんも帰るね。また明日」

「…魅音」

立ち上がった魅音に、俺は声をかけた。

しかし、どう切り出して良いかわからない。

もう覚悟は決まっているはずなのに。

「なに、圭ちゃん…？」

「明日…来るんだよな」

「もちろんだよ。今、また明日って言ったよね？あれ？聞こえなかった？」

「ごめん、ちよつと声が小さかったかも」

いや、そうじゃないんだ。

そうじゃないんだよ。

だけど、それ以上口に出すことができない。

「…じゃあ、明日な」

「うん。明日ね、圭ちゃん」

魅音が病室から出て行くと、

俺は病室の入り口をいつまでもみていた。

もう、十分だろう。

もう、十分愛してもらった。

俺は一生分の愛情を魅音から貰った。

だから、覚悟を決めよう。

明日、全てに決着をつけるんだ。

魅音の幸せのために。

〔32日目（日）：穀倉総合病院：昼間：前原圭一〕

この日、穀倉は快晴だった。昼飯を終えた俺は車椅子に乗り、魅音に押されて病院の中庭にいた。照りかえる太陽。もう7月だ。暑い。

「…でさあ、レナったら」

車椅子を押している魅音が、

俺が意識を失っている間の部活メンバーの話を機嫌よく話をして  
いる。

あの襲撃事件が起きてから、今日で丁度二週間。

全ての決着をつけるのにふさわしい区切りだ。

「魅音、俺はお前のことが大好きだ」

「あははは。急にどうしたの圭ちゃん？おじさんも大好きだよ」

「だから、俺は、魅音が幸せになるためなら、どんなことだってする」

「――」

車椅子が止まった。

魅音も俺が何かを伝えようとしているのだけは分かったんだろう。

よし、言おう。俺の“決断”を。

これで、全てが終わるんだ。

「魅音、婚約を解…」

「バっちゃんね、話をしたんだよ」

俺の言葉を、魅音が遮った。

「圭ちゃんが、下半身不随になっちゃって大変だけど、これを見捨てる  
なんてありえないからね。」



自分を守ってくれた婚約者が、動けなくなったから捨てるだなんて、仁義にもとる行為だよ。

だからさ、圭ちゃんの面倒は一生ウチで見る。これが園崎本家の正式な回答だよ」

お前、俺が何を言いたかったのか”知って”いたのか？

いや、違うな。昨日の時点で皆が”知って”いたんだな。

レナだけじゃない、沙都子も、梨花ちゃんも、

詩音も、おそらく亀田くんも…

そして魅音も。

俺だけが”知らない”と思っていただけなんだ。

間抜けな話だぜ。

そもそも、考えていることが表情に出るような男が

隠し事なんて出来るわけが無いんだ。

「圭ちゃん…」

車椅子のストッパーをかけた魅音が、俺の正面に立つ。

その目は、慈愛と優しさに満ちていた。

「昨日も言ったよね。

ずっと、面倒見てあげるから…って

だからさ、いいんだよ」

なんで…なんで、

そんなことを言うんだよ！

魅音もツ！皆もツ！

そんなこと言われたって…もう、どうにもならないじゃないか！

俺はもう、こんなになっちまったんだぞ！

もう、魅音を守る事も、庇う事もできない！

子供だって、作れないかもしれないツ！

一生、お前の荷物になるだけなんだぞ？

一生、お前を縛り付けるだけなんだぞ？

一生、お前に寄生していくだけなんだぞ？

目が覚めた瞬間から、それは分かっていた！

だから、覚悟したのに！お前と別れることをツ！

それなのに…ちくしょう!!

なんで、そんなことを言うんだよツ!!!

「圭ちゃん、私も同じなんだよ」

…同じ？

「私も、圭ちゃんの幸せのためなら、何でもできる。

どんなことだって、やってあげられる。もし私の命が必要なら捧げる。

もし、私の持っている全てが必要なら全部差し出しても良い。

名声、富、家名、そんなもの、圭ちゃんのためなら惜しくはない。

…だから、よく聞いてね圭ちゃん。

圭ちゃんが、本当に考えて、考え抜いて、それでも私と別れることが

最善で、それで圭ちゃんが幸せになるんだったら、それでいいよ。

私も喜んで別れる。だって、それが圭ちゃんの幸せなんだもん。

だからさ、正直な気持ちを聞かせて欲しいんだ。

…私と別れることが、圭ちゃんにとつての幸せなの？」

そんなの聞くんじゃねえ!

俺の幸せはお前と一緒に生きることには決まっているだろう!

そんなわかりきったことを聞くなよ!

そんなこと聞かれたら、俺…決心が鈍っちゃうだろうツ!

諦めたのに!全部、お前のためだから身を引こうと決心したのにツ  
!!

お前の人生を縛るだけの俺なんかよりも、もつともつと優れた奴を  
婿養子にすれば、お前の人生は飛躍できるだろうツ!!!

こんな体になった俺の面倒を見るだけの人生を過ごす気かよツ!!!

なんで、そんな優しい事をいうんだよ…!止めろよツ!止めてくれ

魅音ツ!!

涙が溢れてきた。止まらない。

ポロポロ大粒の涙が次から次へと湧き出て来る。

鼓動が止まらず、嗚咽する。

わかっているさ!

ここで颯爽と身を引いて、あとくされなく消える。

自分の幸せなんて求めず、愛する人の幸せだけを考える。

それが最高にかっこいい大人ってヤツだろ？

それがヒーローってヤツだろツ!!!!!!

でも、俺は、大人になれないツ!!!!!!

魅音と一緒にになりたいツ!!! 魅音と共に歩みたいツ!!

ちくしょうツ!! なんて、おれはこんな子供なんだよツ!

なんで、大人になれないんだよツ!!!!

：私の前なら、圭ちゃんの弱さをさらけ出しても良いんだよ。

私は、圭ちゃんの全てを受け止めてあげるからさ

やめろツ!!

なんで、あの時の魅音の言葉を今頃思い出すんだツ!!

残りの人生は魅音に愛して貰った記憶だけで生きて行こうと思っ

たのにツ!!

そんなこと言われたら、俺、お前に甘えちまうだろツ!

魅音：お前は、本当に：バカ野郎だツ!!!!

「本当に：良いのかよツ：お前の残りの50年を俺は奪っちまうんだ

ぞツ：

そんな人生で、お前は本当に満足なのかよツ」

「ちがうよ圭ちゃん、

その50年をくれたのは、圭ちゃんなんだよ」

魅音は俺の手を握りしめた。

その目に涙を溢れさせて。

俺はその顔を見てさらに嗚咽した。

泣きじゃぐった俺を魅音は抱きしめてくれた。

その魅音もたまらず泣きはじめ：

俺達は泣いた。人目をはばかりに泣いた。

俺も両手で魅音の体を抱きしめた時、

とても大切な事を忘れていることに気が付いた。

そうだ羽入は、“決断”の前にこう言っていたじゃないか。

——全ての帰結は貴方自身の選んだ選択により収束されます——

そうさ、皆が俺に伝えてきたことは、  
ずっと前に、俺が皆に言ってきたことじゃないのか。

そして皆が俺の言葉を受け止めて、

俺に新たな道を示してくれたのであれば、

俺が今、本当に行うべき“決断”は、自分の考えに固執して出す事  
では無く、

皆が俺に教えてくれた大切な想いを受け止めて行うものじゃない  
のか？

だとするなら、俺は…

俺は顔をあげた。

正面に、俺が決断を下すために、

合うべき最後の人達がいた。

魅音の頭にキスをすると軽く頭を撫でる。

「ありがとうな魅音。」

だけど、結論を言う前に話しておきたい人達がいるんだ」

魅音が後ろを振り返る。

その視線の先に、俺の親父とお袋が立っていた。

魅音は涙を拭くと親父たちに一礼し、車椅子から離れる。

親父とお袋は車椅子の前までくると、

まっすぐに俺を見据えた。

「父さんはな。お前が、良家に婿入りすると知って、少し浮かれすぎ  
ていたのかもしれない。」

母さんともよく話し合ったんだ。今回だけじゃない、上の世界に生  
きていくのであれば、多かれ少なかれきつと同じようなこともあるだ  
ろう。だからな圭一、お前が望むのなら、婚約の話は無かった事にし  
ても良いと思っている。その時は、また一から…家族でやり直そう」  
親父、お袋。何だかんだ俺は言ってきたけれど、やっぱり、最後は  
俺の事を想っていてくれていたんだ。ここで婚約を解消したら、間違  
いなく親父やお袋の仕事に与える影響は大きいだろう。

多くの事業が駄目になり、これからの活動は苦しいものとなるのは  
間違いない。

園崎家婿養子の家族として得られた、  
誰もが羨む社会的信用・信頼・地位：  
でも、それらを全て捨てても、  
俺のために一からやりなおそうと言ってくれている。  
その優しさが嬉しくて、せつなくて：  
だからこそ、俺は決断ができた。  
俺が望むべき本当の未来を。  
俺が進むべき正しい道を。

「ありがとう父さん。でも、俺、行くよ」  
「…良いのか？」

腕の中にある宝石を離すなど教えてくれたのは、  
父さんだから。

「大人になったな圭一」

そう言うと、親父とお袋は俺を抱きしめた。  
それは温かくて、とても心地よく：  
この温もりこそが、俺が求めた答えの

“ 帰結 ” だと確信できた。

親父とお袋は魅音に頭を下げて立ち去ると、  
魅音は再び俺の正面に立つ。

「良いよ、圭ちゃん。覚悟はできている。何でも言っ  
て俺は両手で服を整え、上半身だけでも姿勢を正すと、  
魅音にはつきりと聞こえるように告げた。

「園崎魅音さん。俺と、結婚して下さい」

「……………」

……………

……………

……………

大きく見開いた魅音の目から、再び大粒の涙が零れ落ちた。  
まるで宝石のように美しいその涙の雫が、

ポロポロと幾つか地面に落ちた時、

魅音は微笑み、両手を前に重ねて深々と頭を下げた。

「はい。ふつつかものですが…

よろしく願います」

照りつける太陽と、爽やかな風が吹く中、

俺は、魅音に二度目のプロポーズを行った。

「32日目（日）：興宮警察署：夕方：大石蔵人」

ミフネ組の雛見沢襲撃事件が起きて以来、興宮警察署の組織犯罪対策課・暴対課は連日連夜大忙しであった。上層部が壊滅したミフネ組傘下の組織への一斉捜索が行われたのである。

色々な事件の様々な真相が表に出てきたおかげで、それを調べあげられるのも、まとめるのも一苦労というありさまであった。

そんな大わらわになっている署内で、まるで我関せずといった風体で大石は自分の席で週刊誌を眺めていた。

週刊誌の記事には大きくデカデカと

――ミフネ組雛見沢襲撃事件の真相く神になろうとした男の末路く

とタイトルが書かれている。

ミフネ組雛見沢襲撃事件は、綿流しの祭りの日に発生したため、秘匿捜査扱いになっていたはずであった。しかし、蓋をあけてみれば、犯行のあったその日の夕方にはマスコミに漏れ、翌日には大々的に報道された。さらには過去の雛見沢連続怪死事件との関連性が取りざたされ、一大センセーショナルとなって日本中を騒がせたのである。

ミフネが一連の怪死事件に関与した結果、自分を神と同一視し、本物の神となるべき大量殺人を引き起こそうとした。

…というこの事実は、オカルト的要素があることから、マスコミの良い玩具としてテレビニュースや週刊誌などで連日連夜、面白おかしく取り上げられていた。

（さてはて、どんな意図が動いているんでしょうねえ。んくふくふく）  
これら情報の漏洩は、誰かが意図的にリークしたものに間違いなかった。

なぜなら、これだけ大規模に情報が洩れているのにも関わらず、雛見沢症候群に関しては一切の情報が出回ってはいなかったのである。

もちろん、雛見沢症候群に関しては重大な箝口令が敷かれてはい

た。特に、この事件の中心にいた大石に対しては、わざわざ県警の偉い人が訪れ「雛見沢症候群が世間的に漏れた場合、雛見沢に対する差別や偏見を増長させる恐れがある」と口止めにくたほどである。

ただ、雛見沢症候群に関しては、大石にはそれほど思い入れがあるわけでもなく、今となつては、その病氣自体の存在が隠されても、十分にミフネの犯行動機が立証であるため、素直に従う事にした。

その態度へのご褒美かどうかはわからないが、若頭の脳天を至近距離で吹き飛ばすということをしたのにもかかわらず「拳銃の適正使用」ということで問題にされることは無かった。

大石としては退職金が減額されず、一安心といったところではある。

（しかし、上の連中が、よく私の推理をそのまま受け入れましたねえ）

雛見沢連続怪死事件に関しては、警察の公式見解として「個々に解決したもの」としてきた。しかし、今回のミフネ組雛見沢襲撃事件に直接関与した大石の推理を受け「各事件は個々に解決したものであるが、その裏でミフネが暗躍していた可能性は非常に高い」と、新たな公式見解を打ち出してきたのである。

事件当時、現場にいた現役警官の大石の証言は捜査にあたり大いに重要視された。

だが、だからといって大石の推理をそのままが受け入れるかどうかというのは別の話である。

そもそも、個人の推理などは通常は、様々な人間の手で修正が行われ、より正しく訂正されるものである。個人の推理が100%適用されるなど、本来あるはずがない。

そのあるはずが無いことが起きた場合は、もう二つしかない。雲の上ほどに偉い人が決定を下した推理か。

もしくは、その推理が偉い連中にとって都合がよかつたかだ。

大石は自分の推理に自信を持っている。だが、それがストレートに

受け入れられると話はちがってくる。

おそらく、自分の推理は誰かにとつて都合が良かったのだ。

警察の上層部か、あるいはもつと上の方で。

そもそも、今回の事件は謎が多すぎる。

ミフネがどのようなにして連続怪死事件を引き起こしたのか、それらは全くわかってはいない。

どうやら、これら連続怪死事件はこのミフネと若頭のトップの二人だけで行っていたらしく、逮捕された幹部を含む40名の構成員は誰一人として、連続怪死事件についての詳細を知っている者はいなかった。

唯一、大石が若頭に直接問いただし：大石自身がミフネの関与を確信している工事現場監督殺害事件に関してすらも：実際に工事現場の監督を若頭が殺すように現場従業員達に因果を含めたのか、それすら裏はとれてはいないのだ。

わかっているのは、現在服役している工事現場監督殺害犯達は、そんな話を若頭や、ミフネ組から持ち掛けられたことは無いという事実だけである。

大石が問い詰めた時、若頭は確かに「オヤジの命令に従っただけ」と自供した。これは間違いなく自分が犯人であると認めた証言だろう。だが、誰も若頭と接点が無いというのだ。

そうになると、現在行方不明になっている殺害実行犯のリーダー格の男のみが若頭と接触していたという可能性が考えられる。だが、もし、そうであるとするならば「既にリーダー格の男は口封じのために始末されている。だからこそ、いまだに見つからない」という推測も成り立つ。

連続怪死事件で一番情報があるはずの工事現場監督殺人事件でさえ、このありさまである。

他の怪死事件に関してなど、何もわかっていないに等しい。

しかし、大石はこうも思う。

もしかして、自分の勘違いであったのかも、と。

裏の世界に通じていれば、工事現場の監督と自分の仲が良かったこ



とぐらいは知っていただろう。

それを単に若頭が煽りとして使っていただけかもしれない。

それに「オヤジの命令に従っただけ」というのも、反乱行動に従っていたという意味で、工事現場監督事件とは全く無関係の発言だったのかもしれない。

だが、そうだとしても、大石はもとより現場にいた多くの者達、また電話回線がつながって状態で聞いていた興宮警察署の職員の誰もが、ミフネ自身が自らを“オヤシロ様”であると明言したのを聞いている。

とするのならば、やはりミフネはオヤシロ様であり、園崎家のために若頭に命じて連続怪死事件を引き起こしていた…と考える方が、筋は通っている。

（うーむ…ですが、どうも、もやもやとしたものがあるんですねえ）

そもそも、今回の事件は、例年のオヤシロ様連続怪死事件と比べると“大雑把”すぎるのも、大石には気に入らないところだった。

事件に巻き込まれていた時は、自分が想像していた通り、園崎家：正確には園崎家を裏切ろうとしていたミフネが犯人であり、自分が推理していたことがある程度正しかったことで満足してしまい、思考をそれより先に進めることを止めてしまった。

しかし、こうやって冷静に考えてみると、例年のオヤシロ様怪死事件は全くも証拠も残さずに鮮やかに痕跡を消していたのに対し、ハデにドンパチやらかした今回の園崎本家への襲撃は本当に同一人物・同一組織が行ったとは思えないほど乱雑だ。

たしかに1000人、2000人規模の大狂乱を引き起こす大規模な計画なのだから、例年のオヤシロ様の祟りとは違い、あまり隠密的な行動や繊細さにはこだわらなかつた。という考えもできるだろう。

だが事件には犯人の“色”というものが残る。

それが今回大きく違うのはなぜか。

そもそもヤクザ犯罪の“特色”というのは“威圧”…つまり、自分達が恐ろしい存在だと周囲に思わせることであつて、連続怪死事件の

ように“証拠も残さずに犯行を行う”とは別モノなのだ。正反対と言つても良い。少なくともヤクザのやり口では無い。

(…うゝむ。事件が終わった直後は、これでおやつさんの墓に報告できる！と思つたものですが…なかなかうまい具合にはいかないものですねえ…)

そんな考え事をしている大石に、熊谷刑事が近づいてきた。

「大石さん、どうやら上の方で話がついたみたいツスよ」

それを聞くと、大石は写真週刊誌を手取る。

「ありやりや、県警の大高くんが、こんなに張り切つてマスコミに対応してたのに残念ですねえ。」

ま、なんでもハデにしたがりますからね。彼は…んゝふふふふ」

大石が広げた写真週刊誌のとあるページには、犬猿の中である県警の大高が、

見開きの写真入りで力強く“この機会にヤクザを一掃する！”と息巻いていた。

だが、この大高の激しい鼻息も、

警察上層部と園崎家による話し合いによつて収まることになるに違いない。

園崎家は県内の財界・政界ともつながりが深い。

もし、まともに捜査をしていけば、その被害は大きくなりすぎ地方自治すらも揺るがしかねない。

妥協点が話し合われたのも当然だろう。

おそらく園崎組や園崎家についてはこれ以上警察はタッチしない。

その代わりに、園崎組が絶縁したミフネ組に関する全ての情報を提供すること。

こんなところだろう。

事実、警察で保護されていた園崎お麴は、信じられない速さで解放されていた。

これも警察上層部の働きかけたあつたのは間違いなく、熊谷刑事あたりは悔しがっていた。

ただ昭和58年にはまだ暴力団組長の使用者責任を問えるだけの

法律が整ってはいない。

お魴を雛見沢連続怪死事件の使用者責任で捕まえることは困難であった。

また実際問題として、今回の騒動では、園崎家当主の園崎お魴は被害者の立場ではある。

弁護士から再三再四に渡って「被害者なのに長期拘留をするのか」と文句を言われれば、解放せざるをえない。

だからといって園崎家・園崎組も、ミフネ組に全ての責任を負わせてしつぽ切りの大成功・万々歳というわけにはいかない。

代わりに、ミフネ組が行ってきた全ての犯罪活動についての情報提供を行うということは、同時に、ミフネ組がやっていた“シノギ”が丸ごと全滅することも意味していた。

予想される犯罪行為だけでも、銃器密売、違法薬物の輸入販売、密入国の斡旋、人身売買、パスポートの偽造など枚挙にいとまがない。膨大な数の犯罪は、裏を返せばそれだけの金銭的収入があったということでもあり、

それら全てが明るみになれば、園崎組は財政面で大打撃を受けるのは間違いなかった。

熊谷刑事が二本の缶コーヒーのうち、

一本を大石の前に置くと、もう一本の蓋を開けて口をつけた。

「そういうえば、昨日、前原圭一さんに事情聴取をしに行きましたよ」

「ん〜どうしてたか、彼？元気でしたか？」

「ええ、比較的落ちついてきてはいるようです。そうだ。あと…地下施設に立てこもった時、誰に助けて貰ったか知りたがっていましたね。お茶を濁した言い方で誤魔化しましたが、実際、我々もわかっていませんしね」

「助けてくれた…人達ですか」

大石は額にシワを寄せる。

それは大石自身も気になっている所ではあった。あの時、何者かがミフネ達を襲撃した。

だからこそ、大きな隙が生まれ自分達は奇跡的な逆転ができたの

だ。

だが、大石が自分達を助けてくれたヒーローを探す事はできなかった。

雛見沢症候群の隠蔽と同じく、上からストップがかけられたのだ。自分達を助けてくれたと思われるヒーロー達が使用したと思われる証拠物件も、残らず特命を受けたと言う本庁の連中に持ち去られた。

鑑識の爺様の検査結果も根こそぎ奪われたようだが、爺様の見立てによると「西側諸国の最新の無力化兵器が使われた」ということらしい。

これはどういうことなのか。

(……ここから何か、導けそうな気もしますね)

大石は考える。

意図して流された今回の雛見沢襲撃事件。

まるで情報が出てこない連続怪死事件の全容。

連続怪死事件と、襲撃事件の手口の特色の違い。

隠ぺいされる雛見沢症候群と、ヒーロー達の存在。

これらは別個に考えるべきでは無く、一つの流れの中に存在しているとしたらどうだろうか？

もしかしたら、個々では無く全体を見る事で何か正解のようなものが見えるのではないだろうか？

恐らく手持ちの情報と知見だけでは、真相を完全には暴くことはできないだろう。

だが、しかし、それでも自分は退職するまでは警官なのだ。

”当事者が完全に不在な以上、考えても仕方がない”と思考を放棄して、事件の全体像を推測するのを止めることは、やはりできない。若頭の死と、ミフネの失踪により、全ての謎が闇に包まれてしまったとしてもだ。

例え答えにたどり着けなくとも、

長年刑事を務めてきた自分なら真実の一端には近づけるはずだ。

大石はしばらく思案していると、おもむろに口を開いた。

「ねえ、熊ちゃん。実は先日知り合いから：南ちゃんの話ってしたことあつたっけ？」

「えっと、大石さんがお世話した人ですよ？南井巴さんでしたっけ？確か、垣内署で捜査一課の課長代理を務めている」

「そうそう、その子からね：昨日、妙な話を聞いたんですよ」

ミフネ組の調査に多忙を極めていた大石の元に、妹の結婚問題のいざこざで大変な事態に陥っていると南井巴から相談の電話があつたのが一週間前であつた。

ミフネ組の調査が落ち着いたのを見計らい、昨日ようやく時間を作り私的にエンジェルモートで会う事ができた。南井は妹が親子ほど年が離れている男性：しかも、よりにもよって南井の勤務先である垣内署の署長と結婚を前提に付き合っていることに対しての不満を420ほどぶちまけつつ、エンジェルモートのメニュー表に記載されている素敵なデザートを端から端まで頼んでやけ食いを行った。

その南井との雑談中に、ふと南井が「そういえばミフネ組雛見沢襲撃事件で、内調が動いていた形跡があるようです」という話をしてきたのである。

南井曰く「証拠がなく推測にすぎませんが」ということでそれ以上の詳しい話はしなかったが、どうやら事件当夜、南井が所属する隣県で内調関係者と思われる人物がおかしな動きをしていたというのだ。南井巴がデタラメな話を言う人間で無いことは大石も承知してはいたものの、当の本人から「まあ、気にしないで下さい。まさかですよ」と言われて目の前で大盛のパフェを六杯もたいらげられたので、その場ではそれ以上の追及はしなかったのだが：

もしかして、この話は今回のミフネ組雛見沢襲撃事件：もつといえど連続怪死事件の真相の“鍵”になるのではないだろうか？

だとしたら、あの時、なぜ南井がおかしな動きをしていた奴らを内調関係者だとあたりをつけたのか、もう少し詳しく聞くべきであつた。

今更ながら大石は少し後悔した。

「内調って、内閣情報調査室のことですか？政府直属の諜報機関の？」

スパイ組織の？まさか…」

大石からこの話を聞いて熊谷は半笑いでそう語ったが、完全に笑い飛ばすことはできなかった。

大石が真面目な顔で考えてこんでいたからだ。

「ねえ、熊ちゃん。今から突拍子も無い推理しちゃうけど…暇つぶしに聞いてみる？」

「ええ、大石さん。どうぞ…」

「もしかしたら、これ…高度な諜報戦が行われたかもしれませぬよ」

古手梨花の話聞き、今までの情報を総合すると“東京”と呼ばれる組織で派閥争いが行われ、一方の派閥と手を組んだミフネが、雛見沢症候群を発症させようとしたと考えられている。

それによつて御三家が滅び、ミフネが園崎家と園崎家を乗っ取ると言う計画だ。

だが、あの夜のミフネの行動は単なる園崎家の乗っ取りだけではなく、

その先を見据えての行動だったと考えてみたらどうだろうか？

「それって、どういう意味ですか大石さん？」

「…熊ちゃん、ミフネの襲撃事件以来、私はね『今回の事件は、園崎お魎の憂慮に忖度したミフネが、オヤシロ様として力を行使して連続怪死事件を続けた結果、自尊心が肥大し、己が神となるために、オヤシロ様の化身の古手梨花を殺害し、雛見沢症候群を発症させ、雛見沢住民の虐殺を引き起こそうとした』と、主張してきました」

「ええ、誰が外部にリークしたんだが知りませんが、今ではもう、世間一般の常識のようになっていきますよね」

「でもね…もし、この私の主張がですよ。嘘…いや全部逆だったとしたら…どうですか？」

「全部、逆…？」

熊谷は人差し指を口を当てて考え込む。

「それってつまり…最初からミフネは、雛見沢住民の虐殺が目的で、元より園崎お魎には忠誠心が無く、いつか反逆するつもりで…連続怪死事件も、事件そのものを引き起こすことが重要で…つてことですか？

…それって…」

そこまで言って熊谷は口をおさえた。

気が付いたのだ。大石が何を言いたいのかを。

「…大石さん。まさか…ミフネの本当の目的は…!」

「そう、雛見沢症候群。これ自体がミフネの本当の狙いだったのではないでしようか?」

「しかし、一体なぜです!? 園崎家に乗っ取るために雛見沢症候群を利用したのならわかります。しかし、最初の連続怪死事件の時から雛見沢症候群を使い殺人を行っていたというのは、わかりません! ミフネに何のメリットが!」

「…ミフネの組は対外組織との交渉でしたね。その中には共産圏の軍部もあつたはずです」

「まさか…! ミフネは雛見沢症候群を…ソ連に売ろうとしていた!」

大石は、ゆっくりと頷く。

ミフネは武器密輸を行い東側・共産圏と呼ばれる国々と付き合いがあつた。

ミフネが入江診療所に接触し、雛見沢症候群と呼ばれる病気を知ったことで、生物兵器としてソ連に売り渡そうと考えていた可能性は考えられる。

そしてどれだけの威力があるか試すために、事件を起こした。

すなわち兵器としての運用データの収集。それが、連続怪死事件の目的ではなかったのか?

仮に自分達がやつたとバレたとしてもミフネ組は、園崎お魎の忠臣として知られていた。

『園崎お魎が憂慮した。だから俺達が実行にうつした』

雛見沢の暗黙のルールでは、これで問題は無い。

なぜ、今まで黙っていたかについても『汚れ仕事は自分達でやります。本家の手を煩わせる必要はありません』と言えば、怒られはするが、それ以上にはなりはしないだろう。

綿流しの祭りの日にわざと事件を起こしたのも、自分達の忠誠心をアピールするための材料と考えれば、おかしくはない。

つまり

『忠誠心があったからオヤシロ様連続怪死事件を起こした』

のではなく

『連続怪死事件のカモフラージュのためにオヤシロ様を利用した』  
のだろう。

四度の実験で雛見沢症候群の毒性を見極めたミフネは、

この病原体にさらに付加価値をつけて、より高く売りつけるため  
に、

デモンストレーションを行うことを計画した。

すなわち雛見沢一帯の死滅。

一夜にして2000人が死に絶えることで、世界は震撼し、雛見沢  
症候群に注目が集まるだろう。

そして病原体には天井知らずの値段がつけられるに違いない。

そして折よく、東京と呼ばれる組織の派閥争いが勃発した。

それをミフネは利用して雛見沢症候群を村中に発症させる計画と、  
園崎家乗っ取りを実行にうつした。

それが連続怪死事件と、

今回のミフネ組織雛見沢襲撃事件の真相では無いか？

そう、ミフネは最初から忠臣でもなんでもない欲望の権化であり、  
園崎家を裏切り、神となるつもりだったのだ。

しかも、ただ園崎家を乗っ取るだけでは無く、価値を高めた病原体  
をソ連に売り渡すことで多額の資金を得て、それを元手に地域一帯の  
権力を手中に収めることも画策していたのではないか？

ミフネにとつては“東京”と呼ばれる組織の派閥争いはまさに好  
機襲来であり、

一石二鳥、いや三鳥の計画だったというわけだ。

もちろん、これは古手梨花が死に、雛見沢症候群が広まることを良  
しとする東京と呼ばれる組織の派閥達とも利害が一致する。いや、あ  
るいは、ミフネの計画をしっかりといたからこそ、彼らは手を組んだ可能  
性も高い。

そう考えればミフネも、なかなかどうして大した人物であったのか



もしれない。

この計画が成功したのであれば、ミフネは中部地方や関西・近畿の  
一帯に強大な影響力を持つに至っていた可能性が高い。

だが、ミフネにとつて誤算だったのは、それを日本政府がいち早く  
察知したことだろう。

あるいは対立する派閥が、日本政府に密告したのかもしれない。

日本の風土病が海外で生物兵器に使われると知られたのなら、日本  
の国際評価は地に落ちる。それを恐れた政府は、それを阻止すべく内  
調に命じた。

そして事件当日、内調により特殊部隊が投入された…

「…まさか、そんな映画みたいなことが」

「その“まさか”ですよ熊ちゃん。おかしいじゃないですか、病気の  
存在をここまで徹底して隠すだなんて、何かなければこんな風に情報  
統制すると思います?」

「確かに、雛見沢症候群に関しては上層部は鬼気迫る感じで口止めを  
していましたね」

大石の推論は笑い飛ばすにはあまりにも事実関係が整い過ぎてい  
た。

そもそも、相手を殺さずに制圧するなど並大抵の技量で、できるも  
のでは無い。

諜報組織の特殊部隊なら納得できるし、表に出すわけにはいかない  
のも理解できる。

また、雛見沢症候群に関しても“兵器”として転用される可能性を  
考えれば、それを警察や政府が表に出したく無かった。というのも納  
得できるのだ。

そして、この考えを突き進んでいると、なぜミフネ組織雛見沢襲撃事  
件が早々にマスコミに漏れたのかも、おおよその推測がつく。つまり  
雛見沢症候群を隠すための欺瞞工作だ。

日本の病気が生物兵器と売られるという恐ろしい事実が海外に発  
信されるのは良くないが、それが『いくつも存在するトンチキな流言  
飛語の一つ』『多く出回る陰謀論の一つ』であればどうだろうか?

誰も信じるものはいなくなる。

実際、今回の襲撃事件がマスコミに流れたさいには、事件の核心部分となる『雛見沢住民の殺戮方法』がわからないため、マスコミは様々な俗説を提示した。

- ・ 鬼ヶ淵沼からあふれ出した謎の寄生虫を井戸の中にばら撒く。
- ・ 自衛隊から奪った細菌兵器をヘリコプターを使い空中散布する。
- ・ 鬼ヶ淵沼に墜落した宇宙人の体から発見されたウイルスを広める。

そうしたデタラメかつ、うさんくさい説の中に

「実は雛見沢には奇病が存在し、それを用いて雛見沢住民の抹殺を謀ったのだ。そして上手くいったのなら生物兵器としてソ連に売る計画であった」

なんて話があったとしても『よくあるゴシップネタ』としか思われないだろう。

週刊誌やワイドショーが面白おかしくこの事件で騒げば騒ぐほど、真実がわからなくなり、雛見沢症候群の存在を隠したい人たちにとっては都合がよくなるわけだ。

おそらく、大石や熊谷の知らない所で世界の運命をかけた戦いが行われていたのだろう。その渦中にたまたま大石達があり、標的では無いゆえに見逃されたと考えるのが妥当な線ではないだろうか？

いわば、大石達が助けられたのはあくまで偶然の産物に過ぎないというわけだ。

「…いや、大石さん。その可能性、十分ありえますよ!」

「…熊ちゃんもそう思いますか?」

「ええ、それなら、この事件の歪な謎、統合性が取れない部分も幾つか説明がきます…クソツ…こんな映画みたいな事件の中心に俺達がいただなんて…なんか、こう…震えますね…!」

少しばかり興奮している熊谷に大石は苦笑する。

熊谷は優秀な刑事だがドラマティックな話に目の無い所がある。

実際に映画のような国際謀略の渦中に自分が存在していたかもしれないという話に、ちよつとした高揚感を感じているのだろう。

「まあ、先ほども言った通り、暇つぶしに考えた何の根拠もない推論ですので…あまり言いふらさないでくださいね。熊ちゃん…んくふふふふ」

「ええ、わかっています大石さん…いや、しかし…ううん…」

考え込んでいる熊谷を横目で見ながら、大石は缶コーヒーの蓋をあけて口をつけた。

(…ま、話せる部分はこれぐらいでしょう)

大石は熊谷に自分の考えを全て話してはいなかった。

“ 雛見沢症候群を生物兵器としてソ連に売り渡す ” という推理をした後、実はもう一段深い考察を大石はしていたのだ。

それは“ 雛見沢症候群が旧日本軍や日本政府が作り出した生物兵器では無いか ” という疑惑である。

根拠は幾つかあった。そのうちの一つは“ 東京 ” なる組織の存在である。

赤坂は、この組織を政治家の裏金作りやマネーロンダリングに關与したぐらいしか考えてはいなかったが、大石はそれ以上の疑惑を向けていた。その理由は、全く表に出てこない事である。

警察上層部は、雛見沢症候群や、大石達を助けたヒーロー達を暗に認めつつ、言わないようにと箝口令を指導した。しかし“ 東京 ” なる組織に關しては、全く存在しないかのように扱ったのだ。

また“ 東京 ” に關して言えば、入江診療所とは、まるで無関係のよう装っていたのも不可解であった。

これが最大の疑惑の要因である。

なぜならば、単純に風土病の撲滅だけをうたうのであれば、それに関与していることを隠す必要は全くない。むしろ、自身の組織の健全さをアピールするために、逆に喧伝するはずである。

それをしないということは、すなわち表に出せないようなことをしているからに違いない。

それと“ 雛見沢症候群 ” という病氣自体の存在が怪しい。

入江診療所に話を聞きに行った熊谷の話では、戦前にその存在を疑われ、近年その病原体が確認されたらしいが、それほど前からあるの

であれば古老はもとより、雛見沢御三家も知っているはずだ。だが、実際には古くからこの地に住み続けている大石の母親も知らなかったし、御三家も研究に協力をしていた古手家以外の人間は誰も知らなかった。

雛見沢を実質的に支配している名家ですら知らなかったのだ。

園崎お魴も、次期当主・園崎魅音すらも。

普通では考えられないことだ。

だがこれらを「政府の開発した生物兵器」あるいは「旧日本軍の開発した生物兵器」として考えると、ある程度の統合性がとれてくる。

例えばこういうことだ。

旧日本軍は大戦中、生物兵器を開発していたのは良く知られている。

そのほとんどは終戦後に破棄されたか、アメリカに接取されたらしいが、旧日本軍が一部の生物兵器を密かに隠し、それを後年、日本政府が開発した。

そのような物は本来即座に処分する必要があるが、その生物兵器は今まで見た事が無いようなものであり、日本政府は有用性を認め、その生物兵器のさらなる開発と改良、そしてその治療や予防のための研究を密かに行うことにした。

そして実施場所として雛見沢が選ばれ、その生物兵器の名称を“雛見沢症候群”と名付けた。

そうして作られた研究所が“入江診療所”である。

では、入江診療所に多額の金銭を提供した“東京”なる組織はなんなのか？

この流れから考えるに、日本政府の秘密の組織なのではあるまいか？

これは何もサスペンスドラマの見過ぎぎでは無い。

実際、党派を超えて様々な政治団体や組織が存在する。

その中には、政府に近いものもいくつかある。

有名な所では“日本会議”などがそれだ。

日本の首相や、与党の幹事長が所属するこの“日本会議”など、よ

く考えれば日本を裏で支配している結社ともいえる。裏の日本政府と言つても良い。

おそらく“東京”と呼ばれる組織も、その系統なのだろう。

しかも、あまり表に出せない暗部よりの。だから警察上層部も“存在しないもの（アンタツチャブル）”にしているのだ。

彼ら“東京”が生物兵器“雛見沢症候群”の開発を主導し、入江診療所を開設させた。

だが、彼らだけでは開発はできない。

当然それらを行うには現地の協力者がいる。

生物兵器の“治療法”と“予防法”に関しては古手家：古手梨花が率先して協力をした。

表向き治療薬の開発と言えば、協力も得やすい。事実、古手梨花は両親が居なくなった後も、協力を継続している。彼女は女王感染者という話だが、これは生物兵器のキャリア（感染者）一号という意味とも考えられる。

では、もう一つ“生物兵器の運用”や“効果の実証実験”に関しては、この協力者を得るのは相当に難しい。それは地元有力者でありながら、己の利益のためなら地元が傷付けられても構わないという相反する条件が必要となるからだ。

その条件に符合したのがミフネだった。

元々、雛見沢一帯の有力者の園崎家関係者でありながら、

園崎本家を裏切るつもりだったミフネにとっては渡りに船だったに違いない。

ミフネは園崎本家に黙って入江研究所と通じて“雛見沢症候群”という病気の検証実験の協力を行っていた。それがすなわち、オヤシ口様の祟りである。

ただ、ミフネ達は協力をしていただろうが、かならずしも主体であるとは思えない。ミフネは裏の社会に顔が聞き、汚れ仕事はするといえ、表に出ないように実験をおこなうような繊細な作業ができるとは思えないからだ。

だとするなら、あくまでミフネ達は事後処理が主体であり、検証実

験はおそらく入江研究所のスタッフがやっていたに違いない。

もちろん、ミフネはただ協力して日銭を稼いでいただけでは無いだろう。

兵器として使えるかどうか、雛見沢症候群のデータを入江診療所とは別に手に入れていたに違いない。高額でソ連に売りさばくために。そして最終的には園崎本家を滅ぼして園崎組を乗っ取り、雛見沢症候群を村中で発症させて兵器としての価値を高め、病原体をソ連に売り渡し、地位と権力、富と名声を得ようと企てていた。

これは言うなれば、いつかは“東京”なる組織を裏切り、出し抜くつもりであったという意味でもあるが、ミフネのようなヤツならそう考えたとしても不思議では無い。

そして、今回そのチャンスがやってきた。

東京と呼ばれる組織の派閥内抗争だ。

一方の派閥から雛見沢症候群を発症させることで、おそらく入江研究所を支援していた別の派閥に打撃を与えるように依頼されたのだろう。十分な見返りを用意されて。

だが、ミフネはただその指示に従うだけに留まるつもりは無かった。

これを機会に己の野望を満たそうとしたのだ。

そして後は先ほど熊谷に話した通り、反対派閥に密告されたか、あるいは日本政府に察知されたか、特殊部隊が派遣されて到着した…

…咄嗟に思いついたわりに、

なかなか辻褄が合う推理ではあった。

生物兵器など一から作るには莫大なりソース…資源と金と途方もない時間が必要だ。

しかし“元々あった兵器を改良する”なら話は別である。

それほどの手間と金も時間もかからない。

もちろんそれはあくまで比較の話であって、それでも、かなりのモノと時間が必要だろう。

東京なる組織から流れた多額の資金は、風土病の撲滅のためではなく、兵器開発のために使われたのでは無いだろうか？

それならば秘密にするのもわかる。

そんなものに関与していたとは口が裂けても言えないだろう。

そもそも、雛見沢症候群の“極度に興奮し死に至る”という病状も、第二次世界大戦という時代背景を考えると、実は別の面も見えてくる。

つまり、元々は戦時中に開発されていたヒロポンや覚せい剤などと同じく、

最初は兵士達の戦意高揚薬として作られたのではないだろうか？

だが、威力が強力すぎて兵器に転用された。

こういう流れも推測できる。

また、粗雑なミフネ組が、証拠も残さずにオヤシロ様の祟りを演出できたのも、もともと『祟りを行っていたのが別の専門のスタッフであった』というのなら、納得できる。

そしてオヤシロ様の祟りにミフネ組が関わることで、もし犯行がバレたとしても『全て、園崎家のためにミフネ組がやったこと』『園崎お魘が憂慮したのをミフネ組が忖度して行っただけ』という『雛見沢独自の村社会ルールにのっとって行っただけ』と誤魔化すことができる。

こう考えれば入江研究所とミフネ組が手を結び、オヤシロ様の祟りを実行にうつしていたと十分説明できるし、連続怪死事件の手際、“特色”が、ミフネ達極道モノと違う理由にもなる。

(しかし、まあ、こんな話、熊ちゃんには言えませぬねえ。んふふふ…) 熊谷に言えない理由は三つほどあった。

まず一つ目は、状況証拠があつたとしても、物的証拠がない点だ。政府の組織が運営していたのであれば、今回の騒動が広まった時点で、入江診療所にあつたであろう証拠物件は塵も残さず消されているだろう。

第二の理由がこれが真実であつた場合、熊谷の身に危険が及ぶからだ。

この事実はまだ一介の警察官が抱えてどうこうなる次元の話では無い。

政府が裏で進めていた恐るべき陰謀という規模の話なのだ。

おそらく、この話が正しかった場合、

それを知る熊谷は日本政府に密かに消されてしまいうに違いない。

そして最後の第三番目の理由：

これが最も言えない理由ではあるのだが：

すなわち“今のご時勢に全然あつていない”

ようするに、現在の世界情勢を考えると日本政府が生物兵器を開発していたという話には信憑性がまるでないのだ。

確かに、かつては日本はBC兵器（生物・化学兵器）を作つてはい

た。しかし、それは当時の大国の間ではBC兵器を保有するのが常識であつたということであり、別に日本だけではなくアメリカも、ソ連と

いった国々も研究や開発を行つていたので。

だが、今や核兵器の時代である。1975年に国連総会で『生物兵器禁止条約（BWC）』が発効され

た。それ以降、生物兵器の開発や生産・貯蔵は国際的に禁止され、BC兵器の影響力は戦前とは比べ物にならないほど低下している。

それにも関わらず、その“BC兵器の悪名”は相当なものだ。

病気や毒ガスを使って相手を苦しめて殺害せしめる兵器に良いイメージがあるわけは無い。

禁止条約に批准している日本が、その悪名高いBC兵器を開発したと知れたら国際社会から大きな非難を受けるだろうし、そもそも、国内で民間人相手に生物兵器の実証実験なんてやらかしたら内閣の解散どころの話では無い。総理大臣のクビですら飛ぶだろう。

そして困ったことにBC兵器というのは戦場での使用以上に、周囲の国々に保有をアピールし“圧力”として用いないと最大限の効果が得られないのだ。

中東や共産国の一部の独裁国家、ならずもの国家と呼ばれる外交イメージの悪い連中が“俺達は毒ガスをもっているぞ”と周囲を威圧するには有用ではあるが、

戦後、平和外交を行い戦争から無縁という『清廉潔白なイメージ』の



路線を進めてきた日本にとって“国際条約を無視して生物兵器や毒ガスを新たに開発を行い配備する”というダーティなイメージは、マイナスになりこそすれ、プラスには全くならないだろう。

つまり、メリットよりもデメリットの方が遥かに大きすぎて、生物兵器を開発する意義が見当たらないのだ。

現在でもBC兵器は“貧者の核兵器”と言われている。

しかし、それは“金を持っていない国でも開発できる大量殺りく兵器”というだけの話であり、

日本は高度成長期を迎え、これからますます発展していくというこの時期において、政府が秘密裏に開発を行うとするならば、それは、より高度で、かつ、効果的な兵器の開発を行うはずに決まっている。

“原子力船むつの事故によって凍結されていた原子力潜水艦開発を密かに行っている”

“原子力発電所は日本が自力で水素爆弾や原子力爆弾を作るためのものであった”

“種子島で行われているロケット開発は弾道ミサイルを視野に行っていた”

生物兵器なんぞを秘密裏に開発しているよりも、この手の与太話の方が、よほど現実的で信憑性があるというものだ。

大石とて定年退職する直前の身ではあるが、

“生物兵器がいまだに国際イニシアチブを取れるほど威力がある”

などといった、世界大戦中に生きた老人たちが考えるようなバカげた妄想を信じるほどモウロクはしていない。

戦後40年もたつのだ。

今はもう、戦後では無い。

(最も辻褄が合いそうな推理が、最も信憑性が無いなんてのは…皮肉な話ですなぁ…ま、オヤシロ様連続怪死事件そのものが、そもそも、個々で見れば解決しているのに、全体で見れば一つの事件に見える。という不思議な事件ですから…意外と真相は“実は全部関係無い事件で、たまたまその日に起きただけ”なんて、しよーもないオチだっ

たりするのかもしれませんが…んふふふふ…)

大石がコーヒー缶から口を離すと熊谷はポツリとこぼした。

「そういえば…ミフネの所在もまだわかっていませんね」

「…ん？ミフネ、ですか」

「前原圭一さんも気にしていましたよ。ミフネは、まだ捕まっていないのかつて…」

「んん…どこへ行っちゃたんでしようね、彼は…」

大石は腕を組む。ミフネは雛見沢襲撃事件以来姿を消していた。

県警の大規模な山狩りでも、市内のローラー作戦でも発見することはできなかったのである。

ミフネは全国に指名手配され、さらに極東の裏組織やマフィアとのつながりも深い事から海外逃亡の可能性も視野に入れICPOを通じて国際指名手配までされる予定であった。

「病室には園崎魅音さんもいらしていましたが園崎家の方でも情報は掴んでは無いようでした」

「それはよかった。おそらく園崎家経由で情報が出た時は、彼、死んじやっているでしょうからねえ」

園崎家は、表向き警察に協力するという名目で、裏社会に対してミフネに対する絶縁状と、賞金付き指名手配書をバラまいていた。

ミフネを生きて捕縛した者には、一千万という大金が支払われるらしい。そのため、一獲千金をねらうヤクザやチンピラどもが、動いている話も聞こえてきている。

もつとも、実際に園崎家が見つけた場合、生かして警察に引き渡されるかは疑わしい。

婚約者に瀕死の重傷を負わせたミフネに対し、当主代行の園崎魅音は怒り狂っており“祭具殿にある全ての拷問器具を使って、生き延びたことを後悔させてやる”と公言してはばからないからだ。

大石としては、地下祭具殿の中にあつた銃器類だけでなく、拷問器具もなんらかの理由をつけて警察の方で回収したかたところであるが“アンティーク”と抗弁されては、さすがに手も足もでなかつた。

また、ミフネ組やその傘下の組織に対する一斉捜査により、押収した膨大な事件やシノギの調査に忙しく、特に事件には直接関係無い拷問器具の数々を調べる暇も時間もなかったのも事実である。

(まあ、諜報戦説が正しいとすればミフネは、日本政府や、アメリカ、ソ連に拉致されたか、殺された可能性もありますねえ。だとしたら見つからないのも当然…身の丈のわきまえぬ悪党には相応しい最後かもしれないが…おやつさんの墓標には胸をはって伝えるわけにはいきませんね…)

「あ、そうだ大石さん。ミフネといえば、聞きましたか？ 雛見沢でのオヤシロ様の話…」

「ん？ いえ、聞いてませんが…んふふふ…オヤシロ様が、あんなチンケなヤクザだつてわかつて雛見沢のみなさん、ガツカリしたんじゃありませんか？」

「いえ、所が…なんか、妙なことになってるんですよ。」

本物のオヤシロ様が、名前を語った偽物を消したって話になってるみたいなんです」

「んん？ 熊ちゃん、どういうことですか、それ…？」

「今回の被害者の数ですよ…」

熊谷は、今回の被害をあげた。

今回の綿流しの日に行われた襲撃事件では多数の負傷者が出たものの入江診療所のスタッフの迅速な対応のため、重軽症者だけでほぼ犠牲者は出ていなかった。

ただ二人を除いて。

それは大石が射殺した若頭と…

「行方不明になったミフネ…ですか」

毎年綿流しの日に起きた連続怪死事件。

警察には知られてはいなかったが、雛見沢の住民誰もが知る“共通点”が存在していたという。

それは、オヤシロ様の祟りが起きる時、

一人は死に、一人は鬼隠し…行方不明になる。

というものである。

「ほう…そんな話があったんですか？初耳ですね…」

「ええ、そして事件の被害者の情報を見て下さい大石さん」

一年目は工事現場の監督が死に、殺害グループの首謀者の男が行方不明になった。

二年目はダム反対派の男が死に、その妻が行方不明になった。

三年目はダム中立派の神主が死に、その妻が行方不明になっていた。

四年目は反対派の親類の女が死に、その保護者の男子が行方不明となっていた。

そして、五年目の今年は…若頭が死に、ミフネが行方不明となっていた。

「なるほど、なるほど…神様の名を騙り力を振るっていた不届き者が、最後は本物の神様によって消されたって事ですか…寓話ですなあくんふふふふ…」

大石は、そう笑うとコーヒーの缶の中身を一気に胃の中に流し込んだ。

大石は確信した。おそらく二度と、ミフネが見つかる事はないであろうことを…

「32日目（日）：港町埠頭：夜：野村」

寂れた港町の埠頭を走る一台の黒塗りの車。

その後部座席に座っていた野村はゆっくりと、車載電話の受話器をおろした。

ミフネ達の襲撃は失敗に終わった。だが想定範囲内だ。

予定通り、ヤクザ同士の抗争という形で落着きそうである。

このさい、現場の刑事による面白い推理も使う事にした。

現地の神事を利用して自ら神になろうとした暴力団組長がおこした一大犯罪。

この事実が広まることにより全体像がボカされ、真相にたどり着くことは困難になるだろう。

とはいえ、このまま日本に居座り続けるのも危険なのは間違いないかった。

監査の手が、すぐ近くまで迫っているという情報入手していたからだ。

入江診療所・入江機関に侵入させていたスパイたちは、この情報を送った後、全員消息を絶った。

おそらく全滅したに違いない。だとすれば、もう監査の手はすぐそこまで伸びているはずだ。

今回の目論見はあまりうまく行かなかった。

監査の対応が早すぎて、主派閥に大きなダメージを与えることができなかった。

各所に手回しが既にされており、せつかくの機会だというのに親中派が思うように動けなかったのである。

全く効果が無かったわけでは無いが、あまりにも費用対効果が悪すぎた。

野村自身のキャリアにも良い影響を与えないだろう。

後部座席に無造作に置かれているパスポートを取る。

そこには偽名と、次の任地が書かれていた。

しばらくは日中友好の国交回復外交要員の1人として、中国へと赴くことになる。

2. 3年ほど、中国に滞在し、ほとぼりが冷めたころ戻ってくれば良い。

これからも国家を揺るがす様々な謀略が生み出されるだろう。

そのためにも野村はこれからも働き続ける必要がある。

こんなところで、躓いているわけにはいかないのだ。

「…検問です」

運転手が声をかけてきた。

見れば前方に自衛隊のトラックが止まっており、何人も自衛隊が銃をもったまま立っている。

自衛隊員が市内で銃を持ったまま立っているとは、あまり考えられない光景だ。

一体何が起きたのだろうか。

1人の自衛隊員が、車に近づき窓ガラスを叩いた。

運転手が窓ガラスをあけると、その自衛隊員は後部座席を覗き込んできた。

「…野村さんですね？」

その顔は、

富竹ジロウ！

野村は急旋回を命じると、黒塗りの車は、その場で急速スピンを引き真後ろに向かって走りだす。

野村は己の迂闊さに舌打ちした。既に自分の行動は補足されていたのだ。

富竹ジロウがこれほど優秀な人物であるとは野村は想定していなかった。

ただ事実はやや異なる。鷹野三四があまりにも早く裏切ったために、

その分だけ富竹ジロウは調査を長期的かつ深淵的に行なえたのである。

だが、富竹ジロウの調査がどんな形であれ野村が窮地に陥っているのは違いなかった。

さきほど通り過ぎたはずの道は、既に自衛隊の大型車両によって塞がれており、戻る事も進むこともできなくなっていた。

「如何いたしますか？」

運転手の男が、そう言って後ろを振り向いたとき、

野村はその額に黒い棒状の物を突きつけた。

「プランCよ」

赤い花が咲き、車のフロントガラスが真っ赤に染まった。

野村の乗った車は蛇行を繰り返して、車両止めを乗りあげ、埠頭から海へとダイブする。

「…しまった！」

富竹ジロウと、自衛隊員達は、車が飛び込んだ海をライトで照らした。

飛び込もうとした隊員もいたが、富竹ジロウはそれを制した。夜の海はあまりにも危険すぎる。

しばらく、何かが浮かんでこないか海面を照らし続けたが、  
ついに何かを発見することはできなかつた。

後日、警察が車の落下事故の調査を行い、車の引き揚げ作業を行つた所、

車内から見つかったのは運転手の遺体のみであつたという。

## エピソード「ハッピーエンド」

「46日目（日）：綿流し祭：夕方：前原圭一」

俺は、魅音に車椅子を押されて部活メンバー…レナ、梨花ちゃん、沙都子、詩音と共に綿流しの祭に参加していた。

一か月前に起こった大事件<ミフネ組雛見沢襲撃事件>により、今年の綿流しの祭りは中止となってもおかしくは無かった。実際、事件直後は村人達があつまり中止をするべきだという声もあがったらしい。

だが、警察の保護から戻ってきた、お魎のバアさんは公由村長さんからその話を聞くと

「ミフネのドグサレにコケにされて祭りが中止にされた言うんは園崎家末代までの恥辱ぞ?!それともなにか、園崎家にケチつけたいんちゆう奴らがおるんか!開催に反対している奴らを全員ワシの前に連れてきい!」と、凄まじい剣幕で怒ったそうさ。

さらに、その時偶然にもお魎のバアさんの帰宅祝いで訪れていた梨花ちゃんも「お魎の言う通りなのです。偽物のオヤシロ様に祭りを中止にされたとあってはオヤシロ様と古手神社のコケンに関わるのですよ」と同調したのだから、公由の村長さんもそれ以上は何も言えなくなつたとか。

当然、この話が村中に広まると、以後、祭りの延期を反対する者達が出てこなかったという。

祭りが一か月も遅れて行われても教義上問題無いのか。とも思つたけれど、綿流し祭は元々必要な時に行う不定期な祭りだったらしく、時期がずれても特に問題はないと梨花ちゃんは語っていた。

魅音によれば、むしろ、祭りを再開するための人員スケジュールの調整の方が大変だったようだ。

ちなみに直接梨花ちゃんに聞いたところ、祭りの再開を支持した本当の理由は

「コケンよりも、皆と祭りを楽しみたかったので☆にぱー」ということらしい。



本当に食えないぜ梨花ちゃんは。

車椅子を押している魅音が、俺の顔をのぞきこんできた。

「圭ちゃん、体の調子の方は大丈夫？」

「ああ、問題無いぜ。これなら今日の結納披露もばっちりだ」

「少しは歩けるようになったからって、無理はダメだからね圭ちゃん。

体調が悪いとおもったら、すぐにおじさんに知らせるんだよ？」

「おう、わかってるぜ」

魅音は顔を近づけて俺と軽く口づけを交わす。

二度目のプロポーズ行つた翌日、俺は自分の脚に、ほんの少しだけでも感覚が戻っていることに気が付いた。それはとても小さなものではあつたけれど、医師と看護師さんが診察し、運動と知覚の感覚を取り戻していたのが確認された。

これも羽入が俺に与えてくれた奇跡なのかはわからない。

だけれども、再び、魅音と歩けるのなら俺はなんだってやってやる。

最近の医学によれば、ゆつくりやるよりも、過負荷をかけた方が治りが早いそうで、毎日、厳しいリハビリが行われた。かなりつらい思いをしたが、それを魅音が支えてくれた。

どんな時でも、笑顔で俺を励ましてくれていた。

ただ、とても嬉しかったが半面、さすがに毎日朝早くから来ている魅音の出席日数は大丈夫なのかと心配になつてきた。

もっとも、それを伝えたら、あつけらかんと笑われたけれど。

「大丈夫。大丈夫。留年したつて問題無いよ。むしろ、そっちの方が都合が良いかもね。」

圭ちゃんと一緒にいられるし。それに、最後は圭ちゃんが責任とつてくれるんでしょ？」

その返事を聞いて、俺は「だな」と笑つて答えた。

当然だぜ。俺は魅音の夫だからな。

リハビリは順調に進み、綿流しの祭りの2日前に退院した。

退院したといつても、それで元気バリバリ完全回復して動けるようになったわけじゃない。

自宅療養とリハビリ、そして定期的な検診を受ける必要がある。

確かに二週間前よりは、動けるようにはなつたけれども、まだ完全には歩ける状態じゃない。10分前後歩くだけで精一杯だ。

本当に回復するまで、もうしばらくかかるだろう。

それが一か月後か、二か月後かはわからない。

もちろん完全に元の体に戻れない可能性だってある。

だけれども、下半身が全く動けず、人生を諦めていた頃に比べれば遥かに希望にあふれている状況だ。

だから今日も無理に歩かずに大事をとって車椅子に座っている。

この後の結納披露も車椅子で行う予定だ。

結納披露に関しても、実行するかどうか問題視されたようだが俺が強硬に開催を主張し決行することが決まった。

数日前、結納披露の是非について園崎家で親族会議が行われるというので病院から許可をもらい出席した。この時は、まだ院内でリハビリ中であつたけれど、結納披露が行われるか否かを話し合うと言う事で、俺は黙つてはいらなかったからだ。

俺は当日、車椅子にのり魅音に押されて出席した。

園崎の親族の間では、結納披露を行うかどうかは議論が分かれていた。

だが、当事者の俺が是非行いたいと頭を下げると、皆は困惑の表情を隠せてはいなかった。

反対していた人たちは、大抵の場合、俺の健康状態を気にしていたが、当の本人である俺はやる気が満々だったのだからなおさらだ。

その反対派の1人がどうしてそこまで結納披露をしたいのか聞いてきたので、

俺は力強く言い放った。

「園崎魅音の夫となる人物は、園崎魅音を幸せにしたいと思う人間がなるべきなんです！」

ミフネのように、自分の欲でなるようなものじゃない！だから、俺は結納披露で伝えたいんです。

魅音の夫はこの俺、前原圭一であり、魅音の幸せを邪魔する奴はこの俺が叩き潰すって！」

最後は少し、感情的になっていたかもしれないが、ほとんどの人に好意的に見られていたのは間違いなかった。最終的には、お魎のバアさんの「婿殿が望むならええやろ」の一言で決定した。

親族会議の終了後に魅音の母親の茜さんに耳打ちされたが、それによると、お魎のバアさんは今回の事件で、俺に大きな借りがあるため無条件で要求に答えるようにと、前もって親族のトップ連中には伝えていたらしい。

本当、お魎のバアさんにはいつも助けられるよな。

これなら会議の直前、バアさんに頭を下げられた時に、

「気にしないで下さい、俺達は家族じゃないですか。命をかけて守るのは当然ですよ。それより、魅音と俺の子供を抱くまで長生きして下さい」

なんて軽口を言わなきゃよかった。

ちなみに、魅音に後で聞いた話だと、ミフネの反乱時に重傷を負いながらも、こうして気骨を見せて演説する俺に対して、感動した一部の親族が将来的には議員に立候補させるべきではないかと語っていたとか。

迷惑な話だぜ。

「圭ちゃん、あずかり知らない所で人気があるからね。もしかしたらいけるかもよ？うちは市議会議員や県議員はいるけど、国会議員はいないからね：園崎家初の国会議員やってみる？」

魅音がクククク：と笑いながら俺に伝え来た。

国会議員・園崎圭一か。柄じゃ無い気もするな。

でも：

「魅音が望むなら、それでもいいぜ」

「あははははー！圭ちゃんってさ、おじさんに人生捧げ過ぎじゃない？」  
よく言うぜ。

人生50年全てを俺のために捧げようとした人間の台詞かよ。

俺は祭りではしやぎまわる部活の皆を見る。

こうしてみんなとまた一緒に遊べるのが嬉しい。

ようやく、全て戻って来た。そんな感じがする。

二週間前の出来事を思い出す。

魅音に二度目のプロポーズしたその日の午後、部活のメンバー：レナ、梨花ちゃん、沙都子、そして詩音：は、一緒に病室へとやってきた。

すでに全員がある種の覚悟を決めていたのだろう。厳しい顔つきをしていた。

ベットに横になっていた俺は、魅音と手を繋ぎ、つとめて、いつもような感じでふるまう。

「皆も、もうわかっていると思う。だから、おためごかしは無しだ。

俺は自分の体がこういう風になっているとわかった時から、

魅音の将来にとって負担になると思い、婚約を破棄しようと思っていた。

だけど、魅音はこんな俺でも構わないと言ったんだ。だから俺は決めた」

俺と魅音は見つめ合って微笑む。

この時点ですでに皆は分かっただろう。

「俺は魅音に二度目のプロポーズをした！以上！」

その瞬間に部活メンバー全員が歓声を上げた。

この部屋が大部屋の個室で助かった。さもなければ看護師さんに怒られていたはずだ。

詩音は涙目となり、片手で口を押させて「よかったね。お姉」と呟き、

梨花ちゃんと沙都子はベッドの両脇に分かれて、交互に俺の頭を撫で始めた。

「圭」は、きつと最高の選択をすると信じていたのですよ☆にぱー」

「お〜ほほほー圭ーさんなら、無様な選択はしないと、私、信じておりましたのよー」

だが、恐らくこの中で、一番喜んだのはレナだっただろう。

俺が二度目のプロポーズをしたといった瞬間、両手で顔を覆い。次に魅音に抱き着いて号泣した。

「魅いちちゃん…よかったねッ！本当に…よかったねッ！」

魅音は抱き着いてきたレナの頭に手を置き、困ったような顔をして俺の方を見る。

俺はそれに微笑で答えると、落ち着いてきたレナに礼を伝えた。

「レナ、ありがとうな。お前の言う通りだった。俺はこんな体になつて、もう魅音の役にたたない。支えてはやれないと思つてき。魅音と別れようと思つたんだ。それが魅音のためになる正しい選択だつて…だけどき、そこに魅音の心が…魅音がどう思うかまで、俺、考へていてなかつたんだ。バカだよな…本当に情けないぜ」

「圭一くんは、情けなくなつてないよ」

レナは魅音を抱きしめながら、顔だけを俺の方に向けた。

「圭一くんは、魅いちちゃんのために、一生懸命考へてその結論にいたんだもの。だから、全然、情けなくないよ。でも、体が動かなくても、役にたたないとか、支えてあげられないなんてこと全然無いんだよ？だつて、働きにいくことだけが…尽くす方法じゃないだから」

「レナ…」

「一生懸命、働いている奥さんを後方で支えることだつて立派な旦那様の役目だと思う。魅いちちゃんは特に…きつと普通の人では体験しないような辛いこと、悲しい事、私達が想像できない色んなことを、いっぱいいっぱい体験すると思う。その時、圭一くんが側にいるだけで、きつと魅いちちゃんは心の安らぎになると思う。助けになると思う。それはとつても大切で…支えてくれる人がいるからからこそ…きつと…ぐしゅ…ごめんね…圭一くん…レナが泣くところじゃないの…ごめんね…」

そう言つて、レナは再び大粒の涙をこぼして魅音の胸の中に顔を埋めた。

そのレナの頭を優しく魅音がなでる。

「レナは優しい子だね…ありがとうね。私達のために泣いてくれて」「ううん。お礼を言いたいのはレナの方。嬉しいの…圭ちゃんと魅いちちゃんが一緒にいてくれて…一緒にいることを選んでくれて…嬉しいの…」

そういつて涙の海に沈むレナの姿を見て、

魅音も最終的にもらい泣きをしていた。

レナは感覚が鋭い。だからこそ、魅音がどれだけ辛い思いをしていたのかも知っていただろうし、

俺がどれほどの想いで離縁を決断をしていたのかもわかっていただろう。

だからこそ、レナは…いや、これ以上は止めておこう。

レナは俺と魅音の再縁を喜んだ。それでいいじゃないか。

「どうしたの圭ちゃん？ニヤニヤして」

俺の顔を魅音が不思議そうな顔で見ている。

どうやら二度目のプロポーズの時を思い出して笑みを浮かべていたようだ。

「いや、俺ってさ…本当に最高の仲間と、妻に恵まれたよな。って思ってたさ」

「そうだね…私達、本当に良い縁に結ばれたと思うよ。」

これもきつとオヤシロ様のおかげだね。オヤシロ様は、縁結びの神様だから」

…羽入。

俺はもう二度と会えない仲間の名前を心の中で呟いた。

沙都子と梨花ちゃんが近づいて来る。

「そろそろやりますわよ！圭一さん、魅音さん！」

「今年も、がんばるのですよー！」

魅音も十分やる気モードに入っている。

車椅子の手持ちバーにをしっかりと握って宣戦する！

「おっしーそれじゃあ、

綿流し六凶爆闘、いってみようか！」

魅音が物凄い速さで俺の車椅子を押していく。

おいおい、ラリーカーじゃないんだぞ！勘弁してくれ！

すでにレナと詩音がたこ焼き屋の前でスタンバっていた。

熱々のたこ焼きが並べられている。最初の勝負はたこ焼きか。

「それじゃ、いくよー！」

圭ちゃんはこんな状態だから、1個食べれば3個食べたのと同じ扱

いで良いよね？

それじゃー、はじめ!!」

俺と魅音以外のメンバーは一斉にたこ焼きを食べ始める。皆は早い、早い、あつという間に丸々1個をたいらげる。

魅音はというと、たこ焼きの一つを爪楊枝でつきさし、口で息を吹きかけて冷やすと俺の前にもってくる。パクリと、俺が半分食べると、残りの半分を口に入れて良く噛んで飲み込む。

俺達二人の周りだけ、時間がゆっくりと流れているようだった。

「じゃ、一個食べたから、おじさんと圭ちゃんは3個分ね」

…と、思ったら魅音がとんでもない事を言い出した。

沙都子が抗議の声をあげる。

「な!?!圭さんはともかく、魅音さんまで3つ扱いですよ!?!」

「当たり前でしょ沙都子?おじさんは、圭ちゃんに食べさせているんだよ?」

それともなに、圭ちゃんほつといて、私だけ食いつけて?それは、ちよつと心が無いよね?」

ぐぬぬ顔の沙都子の背中を、詩音が軽く叩く。

「ま、お姉と圭ちゃんは一心同体ですから、大目にみましょう。ね?沙都子」

「し、しかたありませんわね!あつという間に追いついて見せますわ!」

そういつて急いで食べる皆をしり目に、俺と魅音はノンビリとたこ焼きを食べる。

うむ。やはり、たこ焼きというのは、こう味わって食べるに限るな。うん。

ずるいですわ!という沙都子の声が聞こえたようだが無視をしよう。

たこ焼きが終わると、今度はかき氷勝負となった。

しかし、かき氷屋の周囲は少し人が多い。

魅音はかき氷を買ってくるため、

露天の脇に車椅子を置いて、動かないようにロックした。

「圭ちゃん、ちよつとかき氷買ってくるから、ここで待ってて。」

もし何かあったら、防犯ブザーならして。すぐに戻ってくるから」

「ああ、わかった」

部活メンバーと達と一緒にかき氷屋に向かう魅音。

その後ろ姿を、俺は目を細めてみていたら：

…んふふふ。

特徴的な笑い声が聞こえてきた。大石さんか。

暗がりから、大石さんが現われて俺の車椅子のすぐ横に立った。

「こんにちは、前原さん。お元気ですか？」

足の方は回復したと聞いておりますが、今日は車椅子なんです  
ねえ」

「おかげ様で…リハビリは順調です」

「そうですか。そうですか…それはよかったです。いや、白々しく聞  
こえるかもしれませんが…

前原さんが無事で本当によかったと思っっているんですよ。私」

俺はちらつと一目大石さんを見ると、

また視線を魅音の背中に向けた。

「それで、俺に何か御用ですか？」

「いえ、一度、お礼が言いたくてです…んふふふ」

「お礼？俺が大石さんにお礼をするようなことはあっても、

大石さんからお礼をされるような事って何かありましたっけ？」

「前原さんは、園崎魅音さんが私を殺すのを止めてくれたんでしょ？」

……………

……

なぜ、大石さんがそれを知っているんだ？

大石さんを殺そうと計画していたのを知っていたのは、俺と魅音と  
詩音ぐらいだ。

しかし、詩音が裏切るわけがない。たまたま玩具屋の主人が聞いて  
いたとか。

それとも、別の誰かが聞いていたのか。

「いえね。園崎魅音さん本人から聞いたんですよ。」



あの、カラフルな拳銃を回収するさいにね…その銃で私を撃つつもりだったって…

そして、それを止めたのが、貴方だってことをね」

そうか。魅音本人か。

なるほど、それならわかるぜ。

なぜ、そんなことを魅音が言ったのかも。

大石さんを殺したかったんだよな。本当は。

婚前交渉を邪魔されて、お前は怒り狂っていたもんな。

そして、今度は大石さんが若頭から目をそらしたせいで俺が撃たれて…意識を失った。

本当は、その銃で大石さんの頭を撃ち抜きたかったんだろう？

怒りに任せてさ。でも、それをしなかった。

殺してしまえば、元の日常に戻れないという俺の言葉を信じて。

魅音、やっぱりお前はすげえヤツだよ。

俺なら多分、我慢できずに大石さんを撃っていたはずだぜ。

でも、少し我慢できなかったんだよな？だから言ってしまったんだろう？

わかるぜ魅音、お前がどんな気持ちでそれを大石さんに伝えて、拳銃を渡したのか。

きつと、悲しみと、どうしようもない無力さと、大石さんへの怒りがごちやまぜになって、

それでも、きつと元の日常に戻れると言う希望を胸に、大石さんを殺すと言う選択を避けて…

だから、嫌味だけでも言いたかったんだろう？

「…魅音を、逮捕するんですか？」

…だくははははは！

大石さんは笑っていた。

「ぜくんぶ、ミフネって奴が悪いんですよ前原さん！

わはははははは！」

…ハ？

「どういう意味ですか大石さん？」

「いやね。今、警察では、園崎家でやっていた悪い事は全部、ミフネがやったってことにするのがブームなんですよ。まあ、全てのチップを賭けての大勝負にミフネ達は負けたわけですから、ツケは払わないといけませんよね。んふふふふ」

「……………」

「実際、園崎さんから回収した銃器にはミフネの指紋がありましたしねえ。私が弁護士なら『未成年者に銃を渡したミフネが悪い』『玩具の銃だと思っていた』って、知らん顔決め込みます。見た目は玩具みたいな銃ですしねえ…んふふふ。そういう事ですので、園崎魅音さんを立件するうま味は無いんですよ、こつちとしては。そもそも、うちらもミフネ組の捜査に忙しくて、そんんな些末なことまで処理している暇はありませんからねえ」

それってつまり、

見逃してくれるってことなのか？

かき氷屋にいた魅音が俺の方を振り向き指をさした。

いや、俺じゃないな、あれは大石さんの方を指さしているのか。

「貴方のこわい奥さんに見つかってしまったようですね。」

それでは、私、集会所に戻らせてもらいますよ。一応、警備主任なものですので…

それでは結婚式には呼んで下さい。んふふふ」

頭を掻いて退散しようとする大石さんに向かって、俺は叫ぶ。

「大石さん。魅音はアンタの事嫌っていますけど、

俺、やってくれたことに…感謝していますから」

大石さんは手を振ると闇の中に姿を消した。

入れ替わりに、魅音が目の前に立ち止まる。

「圭ちゃん大丈夫！大石の奴に何か言われなかった!?」

「…結婚式に呼んでくれってさ」

「かあく呼ぶわけ無いでしょ！ふざけやがって！

詩音！レナ！屋台の人に声かけて塩撒いてもらって！

沙都子はトラップ！梨花ちゃんは札を張って！」

大石さんは、妖怪か何かなのか？

なんか部活メンバーもそれっぽく動きはじめて、四方に散らばったぞ。

そして俺と魅音の二人だけが取り残された。

車椅子のすぐ横で鼻息荒くしている魅音の手をとる。

「ん？なに、圭ちゃん…？」

「…魅音、大石を殺さない約束を守ってくれたんだな。偉いぜ。俺なら多分…撃っちまった」

「…ああ、大石の奴、そんな話までしてたんだ…ま、歳だしね。ほっておいてもくたばるし、

手を汚す気にならなかったってだけだよ」

そういつて魅音は顔を赤くして、照れ隠し鼻をかく。

「でも、やっぱり魅音は偉いと思うぜ。ありがとうな、魅音。

俺がここにいられるのも、お前のおかげだ」

「…ううん。私の方こそ…圭ちゃん、帰ってきてくれてありがとう。ずっととき…私、願っていたんだ。また…一緒に圭ちゃんと愛し合える日ができるって…」

そうだ。

俺も魅音も、あの日に、襲撃事件のあった前の世界に戻ってくることができたんだ。

この足がもう少し回復すれば、また、あの楽しい日々を取り戻すことができる。

俺と魅音はお互いに見つめ合う。

いや、そうじゃない。今はもうお互いに何があろうとも一緒にいようと覚悟を決めた。

これからの日々は、きっとそれ以上の幸せな日常になるはずだ。

俺達がそう確信した時…

…きやああああ!!!

悲鳴が聞こえてきた。

誰だ!? 沙都子か!

視線の先に…入江監督がいた。

沙都子の後ろから抱きついている!

ああ、ついにイリーやっちまったのか。

さすがの俺も、見逃すことはできないぜ…

俺は、魅音から借りていた防犯ブザーを太ももの上に乗せる。

さらばイリー…!!

「ちよつと、前原さん！誤解です！誤解ですつてツ！

沙都子ちゃんが、少し冗談にならないトラップをしかけていたので止めていただけですよ！」

トラップ？

よく見ると沙都子の前には、

鉛筆の先端のように尖った形をした丸太がくくりつけられた台車が…

ちよつと待て、殺意が高すぎないかこれ？

「大石のおじさまなら、これぐらい平気ですわよ

スパイク・アタッカーのトラップぐらい直撃したところで、何の問題もありませんわ」

いやいや、たしかに『ひぐらしのなく頃に』はギャグテイストがあるけれど、

これは洒落にならないぞ。これで生きていたら世界観の崩壊待ったなしだ！

そもそも、これで無事なら、

銃で撃たれてあれだけ悩んだ俺がバカみたいじゃないか！

「圭一さん、世界観の崩壊というのは、たかが金属タライが落ちてきたぐらいで負傷してしまう程度の防御力しか持ち合わせていない聖ルチーア学園の女生徒達の事を言うのですわ」

藪から棒に何を言いだすんだお前は。

「いや、待て…沙都子、お前、聖ルチーア学園にトラップを仕掛けたのか？ケガさせたのか？」

「まだ、やっておりませんわ…とりあえず今のところは。

将来的にはわかりませんけれど」

わからないとか言うんじゃないやねえ！

というかケガをするとか妄想で言うな！

びびるだろうが！

そして、詩音。

なぜお前はニヤニヤしながら近づいてくるんだ？

「なら沙都子。いつそ聖ルチーア学園を爆破しちやった方が後腐れなくて良いと思わない？

あんな場所、無くたつて誰も困らないでしょうからね！」

「おくほほほーさすか詩いねーねー！良いセンスしておりますわ！

聖ルチーア学園なんて腐れ外道な学校、消滅して当然ですわよね！」

沙都子と詩音が二人して大笑いしている。

お前ら二人、聖ルチーア学園に、一体どんな恨みをもっているんだよ。

とりあえず疑いが晴れて安心したのか、監督はゆつくりと立ち上がった。

「これで分かって頂けましたでしょうか？私はメイド道を究める者として、力づくで沙都子ちゃんをどうこうしようなどとは、思った事ありませんよ」

目に力を入れて、格好よく語る監督。

だが、そこにすかさず梨花ちゃんのツツコミがはいる。

「でも、入江はボクと沙都子を薬でへろへろにしてメイドにしようとしたのです☆にぱー」

顔を引きつらせて笑う監督に、

周囲の痛い視線がふりそそぐ。

さすがにちよつと可愛そうだ。

仕方がないので、そろそろ助けに入るとするか。

お礼もしたいしき。

「俺、監督には感謝しています。今回、魅音に教わりました。自分がまだまだ弱くて未熟だって…

だから監督の言った通り、魅音と一緒に『結果』じゃなく『過程』を楽しもうと思います」

俺が頭を下げると、魅音もつられて頭を下げた。

そんな俺達を見て監督は微笑んだ。

「前原さん。自分の弱さを理解するのは大変すばらしい事です。

大人になっても、自分の弱さに目を向けられない人は多くいます。

自分の弱さを知った貴方は、決して未熟はありませんよ」

「監督…」

「私は結婚をしておりますので、夫婦の営みに関するアドバイスはできません。ですが、前原さんが、その強さをもって園崎魅音さんと共にある限り、きつと道は開けるでしょう」

俺は頭をあげると魅音を見返した。魅音と視線を合わせて一緒に頷く。

そうさ、俺達ならどんな困難だってきつと乗り越えられる。

だって共に手を取り合った夫婦なんだから。

「ありがとうございます監督。」

いつも、監督の言葉には助けられています」

「いえいえ、私も沙都子ちゃんのご主人様として、同じように修行中です。」

共に頑張りましょう」

そういつて監督が沙都子の肩に手を回すと、沙都子の目がキラリと光る。

「前にも申しました通り、けっして監督は嫌いではございませんのよ？」

でも少し、今日はオイタが過ぎたようでございますわね」

沙都子の手が俺の太ももの上に置かれていた防犯ブザーに触る。

防犯ベルが大音量で鳴り響き、祭りの会場にいた警備の警官がす飛んできた。

ああ哀れ：監督は泣き真似をする沙都子の言葉を信じた警官達によつて

集会所まで連行されていったのである。合掌。

「ま、集会場には村長の公由おじいちゃんも、大石もいるし問題無いでしよ。」

じゃ、圭ちゃん。あーん」

魅音が買って来たかき氷を食べさせてくれる。もちろん俺は、そのまま口に入れる。冷たい。頭がキーンとする。

それを見てニヒヒと笑いながら、魅音も一口食べて両目をつぶる。おっと、魅音もキーンときたようだな。

レナや梨花ちゃん、沙都子もかき氷食べ始める。

夏はやっぱりかき氷だぜ。

レナが良いアイデアを思い付いたらしく手を叩く。

「そうだ。たこ焼きを入れて、その熱でかき氷を解かせば、早食い競争で勝てるかな？勝てるかな？」

面白いアイデアだけだなレナ。

それって、たこ焼きもくわなきやいけなくなるぞ？

単純に二倍の労力の気がするけどな。

「俺なら、そうだな…」

金魚すくいの水槽に視線を移したが、

魅音にたしなめられた。

「圭ちゃん、圭ちゃん…まだ回復してないんだかさ、あんまり変な事考えちゃダメだって」

くそ。何でもお見通しかよ。

そんな感じで騒いでいる俺達の前に、

今度は富竹さんと鷹野さんが現われた。

二人とも相変わらず仲が良さそうだ。

「あらあら、みんな、おそろいのようなね」

「やあ、こんにちは…その、元気しているかい？」

この時期に富竹さんがいるだなんて珍しい。

たしか、いつもは6月の綿流しの祭りが終わった後に帰るのが普通だって聞いたけれど。

「こんにちは鷹野さん、富竹さん…富竹さんは珍しいですね。

まだ雛見沢にいるだなんて」

「ふふ…そうね。今の時期までいるなんて普通じゃないわねジロウさん…っ」

「いや…ちよつと、こつちで色々やるこゝろができちやつてね  
こんな時期までいるはずじゃなかつただけ…あははは…」  
富竹さんはそう言うと、左右に視線を動かしている。  
なんだろう。

鷹野さんは上機嫌だが、富竹さんは緊張しているのだろうか、  
少し動きがぎこちない。  
…というか挙動不審だ。

魅音も富竹さんに挨拶をして鷹野さんに頭を下げる。  
入院中に魅音から何度も聞いている。鷹野さんは、俺の命の恩人  
だ。

口から血を吐いて体を痙攣させていた俺と、  
それを見て泣きながら絶叫していた魅音を助けてくれた。  
裏から支援してくれているとは言つてくれていたけれど、  
ここまでやってくれるとは思つてもみなかった。

俺と魅音は、これから一生、鷹野さんには頭があがらないだろう。  
俺もできる限り深々と鷹野さんに頭を下げる。

「鷹野さん。本当に助けてくれて、ありがとうございました！」

俺、本当、この気持ちをどうやって表して良いかわからないです！」  
「ふふふ、良いのよ。医療従事者なら誰でも行う事なの。そしてね…  
私はこの雛見沢にきて、自分が本当は何者なのかを知ったわ。  
だからね。気にしなくて良いのよ」

鷹野さんは、晴れやかな笑顔でそう答えてくれた。

しかし、どうしたんだろう。まるで憑き物がとれたかのような感じ  
だ。

隣にいる富竹さんも顔を赤くしている。

たしかに、いつものミステリアスな鷹野さんとは少し違う。

なんだろう。いつもとくらべて、ずっと…

「…圭ちゃん」

魅音に声をかけられて、ハツとする。

どうやら、少し長めに鷹野さんを見つめてしまっていたようだ。  
魅音の目が据わっている。



「圭ちゃん。今日の鷹野さんは確かにいつもより可愛いけど」

富竹さんの彼女なんだから、そんなに見つめていたらダメだよ」

「あ、その…すいません富竹さん…」

「え？いや、圭くんも魅音ちゃんも困ったな…あははは…」

魅音の言葉に、富竹さんが顔を真っ赤にして頭を掻いている。

確かに、鷹野さんはいつもより可愛い感じだけれど、

富竹さんの反応は先ほどから少しおかしい。

いや、それとも惚れた相手の前だと俺もこういう感じになっているのか？

自分の事は意外と自分ではわからないからな。

レナと詩音がやってきて、俺たち間に割り込んできた。

「そうだ。これから富竹さんと鷹野さんも一緒に部活をしませんか？」

「負けたら罰ゲームありの勝負ですよ。お二人ともやりましょう！」

富竹さんは渋っていたけれど、鷹野さんは迷わず了承した。

しかし、勝負と言っても何の勝負をするんだ？

梨花ちゃんが手を叩いて誘導する。

「大丈夫、圭一でもちゃんと参加できる種目を用意したのです」

俺でも参加できる？

魅音に車椅子を押しされて向かった先には、射的屋があった。

三発球を発射し、景品にあてて落したらGETという奴だ。

なるほど、これなら俺でも参加できる。

まず最初にプレイしたのは詩音が、店主から銃を借りて大きなぬいぐるみを狙う。

だが、ぬいぐるみはビクともしない。諦めた詩音は、すぐに小物に切り替えて落す。

「いや、ちよつと無理みたいですね。大きいぬいぐるみは」

沙都子と、鷹野さんも試してみたが、やはり大きいぬいぐるみはビクともしない。

沙都子は二発まで粘っていたが、鷹野さんは一発目でもう諦めた。この辺は性格がでるな。

つぎに富竹さんが銃を構える。

なかなか構えが本格的だ。

「連射で勢いよくやれば、おちるかもしれないね。試してみよう」  
富竹さんが、物凄い速さで弾を詰めて連射した。

全弾命中。動くか？と思われたが、落ちるところまではいかなかった。

さすが大きなぬいぐるみだ。一筋縄ではいかないぜ。

次は俺の番になった。

店主は「園崎の婿さんかい。だったらサービスだ」

といって、一回り大きく、威力のありそうな銃を俺に手渡した。

これなら、大きなぬいぐるみも落とせそうだ。

ただ、少し重い。照準が定まらない。

その時だ。

後方から魅音が銃を構えた俺の両手を支えた。

「圭ちゃん、手伝うよ。」

あ、皆、これ、共同撃墜つてことで私の番にカウントしてくれて良  
いからね」

魅音の力を借りて、大きなぬいぐるみに放つ。

だが、一発はあらぬほうこうに飛んで、もう一発は熊の頭にあつて  
揺らすだけだった。

仕方が無いので最後の一発で、お菓子の入った小さな箱を落した。

せつかくの店主のサービスだったけれど、生かせなかったな。残念  
だぜ。

「ごめんな魅音。大きなぬいぐるみ、プレゼントしたかったんだけど  
さ」

「…いいんだよ圭ちゃん。圭ちゃんがここにいる。」

それだけで、おじさんは十分満足なんだ」

そういつて、魅音は目をつぶつてそのまま後ろから俺を軽く抱きし  
めた。

この夫好きめ。俺だつてお前がいるだけで十分幸せだぜ。

そんな俺達だけの空間に浸っている時にも勝負は続けられた。

結局レナも大きなぬいぐるみを狙ったが失敗し、小物を落して終わり。梨花ちゃんは全部外してしまう。

このまま富竹さんと梨花ちゃんの最下位決定戦か。

と思われたが、梨花ちゃんの泣き真似演技がさく裂して、店主からお菓子をゲットした。

こうして、富竹さんの最下位が決まったわけだけが、なんだから、部活メンバーの様子がおかしい。

魅音がニヤニヤしながら富竹さんの顔を覗き込む。

「さあ富竹のおじさま。最下位の罰ゲームですけれど、もう何をやるかわかっていますよね？」

詩音も、反対側から富竹さんの顔を覗き込んだ。

「これって罰ゲームという罰ゲームじゃないですよね？」

本当、温情措置ですよ！だって最初から決められたことをやるだけなんですから

実際は、罰ゲームをやらないうってぐらいの意味ですからね。これ！

富竹さんの顔が引きつっている。一体何を言っているだ二人とも。

富竹さんと何か企んでいたのか？

まあ、この様子を見る限り富竹さんが、

皆に引きずられているって感じだけど。

レナと梨花ちゃんが顔を合わせて笑っている。

「それはね、圭くん。とっても良い事なんだよ！」

「この日のために、サプライズを用意したのでよ☆にぱー」

サプライズって、それ本人の前で言う事か？

でも、沙都子は笑いながら、俺の肩を軽くぺしぺし叩く。

「お〜ほほほ〜何も圭一さんに対するだけのサプライズではございませんのよ！」

俺に対するだけのサプライズじゃないって、どういう意味だ？

それにそんなに肩を叩くな。ちよつと痛いぞ。

鷹野さんも俺と同じく、何をやるのか知らされていなかったんだろう。

困っている富竹さんを見て、楽しそうに笑っている。

「あらあらジロウさん、

みんなと一緒に何か計画していたの？

何をするのか、楽しみだわ」

「いや…あ、あはははは…！」

<<<こちら綿流し実行委員会です。結納披露と奉納演舞の関係者の…>>>

富竹さんが、照れ笑いしている最中に、アナウンスが流れた。

そろそろ奉納演舞と、結納披露の用意をする時間だ。

俺達は舞台裏に移動する。

舞台裏の簡易着替え室の前まで行くと、作業を行っている小此木造園のスタッフの姿が見えた。そう言えばあの人たちも事件当夜に俺達を助けてくれたんだよな。

色々あって、いまだにキチンとお礼をいえていない。

折角の機会だから、挨拶ぐらいはした方が良いだらう。

俺は魅音にお願いして、造園スタッフに「社長」と呼ばれていたワシ鼻の人の元へと運んでもらう。

「あの、すみません…小此木造園の社長さん、ですか？」

「なんば用ですかい…？あぁ、圭一さん、前原圭一さんじゃないですか！いやぁ、お体の方は大丈夫ですかい？」

鋭い目つきのワシ鼻の社長さんは俺を見て破顔した。

俺の名前を知っている？とは思ったけれど、確か新聞や雑誌で俺の名前は実名報道されていたんだっけ。なら知っているのは当然か。

しかし、社長さんは俺と会えて随分嬉しそうだ。

きつと、この人は助けた俺がどうなったのか、ずっと気にしているにくれたんだらうな。

「おかげさまで、無事…とまで行きませんが、順調に回復しています。これも造園所の皆さんのおかげです」

俺が頭を下げると、魅音も頭を下げる。

ワシ鼻の社長さんは照れ臭そうに笑うと「いやいや、わしらは入江診療所のお医者さんの指示にしたがっていただけですから」と謙遜し

た。

そういえば、造園所の人達にあつたら聞こうとおもっていたことがあつた。それは俺たちを救ってくれたヒーローを見ていないかということだ。

だが、その事を聞いてもワシ鼻の社長さんは、頭を左右に振るだけだった。

予想はしていたけれど残念だぜ。もし、わかるようなら、お礼を言いたかったのに、それと…

「それと…なんですかい？」

「いえ、素晴らしい人達だなんて伝えたくて。見返りも称賛も貰わず、命をかけて人を助けて消えていくだなんて…スパー・ヒーローみたいじゃないですか。社会つて、ああいう人達が裏で支えてくれているから成り立っているんですよ。きつと」

俺はついにヒーローにはなれなかった。

人間として魅音と共に生きることを選んだ。

だからこそ、我が身を犠牲にして、人知れず消えていった本物のヒーロー達にありがとうと言いたかった。

それは、もしかしたら一生叶わないのかもしれないけれども、そういう人達がいたことを、俺はきつと生涯忘れないだろう。

その言葉を静かに聞いていてくれたワシ鼻の社長さんは、優しい表情をして俺の肩に手を置いた。

「もし、彼らに会えたら…必ず伝えておきますよ。前原さん…さ、もうすぐ結納披露の時間でしょ？ 主役が遅れたらマズイ。早く行きなさい」

あ、そうだ。

少し話し込んだしまった。急がないと。

社長に頭を下げて、魅音に頼み簡易着替え室に向かうと、その場にいた造園所のスタッフさん達が俺に次々とエールを送ってくれた。

…頑張れ前原くん

…俺たちも裏から結納式を見ているぜ

…君の未来を応援しているよ前原くん

「ありがとうございます」

俺は手を軽く振って答える。

沙都子の件で色々あったけれど、  
やっぱり難見沢の人達って温かい人ばかりなんだよな。

俺は仮設の着替え室に到着すると魅音と別れて車椅子から立ち上がり、衣装スタッフに協力してもらいお内裏様の格好に素早く着替えた。

最近のリハビリで多少は歩けるようになったといっても、やっぱりまだ見知らぬ人と一緒に居るだけで体力の消費が激しくて、辛い。

俺の体調を懸念して結納披露は、奉納演舞の前と決まった。

この衣装を着たまま、奉納演舞が終わるまで待つのは結構きついでろうとの判断からだ。

着替えを終えて再び車椅子に座っていると、一組の男女が着替え室に入ってきた。

魅音の母親の茜さんと、父親だ。

俺の前にくると茜さんは会釈をしたので、俺も反射的に頭を下げる。

「話は全部、魅音から聞いたよ。」

ありがとう。魅音を選んでくれて」

そういつて茜さんは微笑んだ。

それを伝えるにわざわざ着替え室まで来てくれたのか。

なんだか、少し照れ臭い。

でも、俺が魅音を選んだと茜さんは言ってくれたけど、

それは少し違うかな。

「俺が選んだんじゃないんです。魅音の方が、俺を選んでくれたんです。」

俺が、ここにいるのも、全て魅音のおかげなんです」

本心だった。今ある全ては魅音のおかげと言っても良い。

魅音こそ、どん底にいた俺に手を差し伸べて救ってくれたんだ。

俺が選んだなんておこがましいぜ。

茜さんはそんな俺を見て、目を細めて薄く笑った。

「圭ちゃん、着替え終わった？」

あ、お母さんいたんだ」

お雛様の格好をした魅音がやってきた。

うん。なかなかキュートじゃないか。

「似合っているぜ魅音」

「あははは。圭ちゃんも、似合っているよ」

だらしなく笑う魅音のお尻を、茜さんは手にもっている扇子でピシッと叩く。

「まったく、これから人様の伴侶ってなろうって娘が、そんなだらしなくどうするんだい？」

ま、男を見る目があったところだけは褒めてやってもいいけれど  
「さ」

「いやくははは…ま、男を見る目はそりやありますって…」

一応、園崎茜の娘ですから…」

茜さんは「仕方がない子だね」と笑うと、

俺に一礼をして旦那さんと一緒に部屋から出て行った。

「じゃ、圭ちゃん。うちらもいこうか？」

そういうと、俺の車椅子を押し始める。

スタツフの一人が、慌てて自分が車椅子を押しと言ってきたものの、

魅音はやんわりと、しかし断固たる決意を含めて拒絶した。

「良いんです。」

これは圭ちゃんの妻である私の役目ですから」

そういえば、今日も一日、ずっと魅音が車椅子を押し続けてくれた  
いた。

入院してからこれまでも、いつも魅音が側にいてくれたので気  
にもしていなかったけど、

俺の車椅子を押ししてくれたのは、いつだって魅音だった。

「…魅音、ありがとうな。ずっと押し続けてくれて」

「あははは。何をいうかと思ったら。うちらさ、夫婦なんだから、あたり前じゃん。」

これからはずっと圭ちゃんの事を、おじさんが後ろからおしてあげるよ。

車椅子から降りた後も、ずっと、ずっと……」

ああ、そうだよな。夫婦だもんな。

本当に実感するぜ。お前が、魅音が俺の妻になってくれてよかったって。

舞台袖までやってくると、部活メンバーが勢ぞろいしていた。

富竹さんと鷹野さんを中心に扇型になってならんでいる。

そろそろ、梨花ちゃんの言っていたサプライズってのが始まるのか？

サプライズとわかって行かうサプライズなんて、そんなに意味が無いと思うが。

一体何をやるつもりなんだ。

富竹さんがレナに軽く背中を押されて、一歩前に出た。

「た、鷹野さん！」

「はい……？」

鷹野さんが不思議そうな顔をして振り返る。

富竹さんは顔を真っ赤にして口を開いた。

「た、た、た、鷹野さんッ！ぼくとおー結婚してくれませんかッ!!」

「……………」

しばしの、沈黙。

そして笑顔。

「…はい。」

よろしくお願いします。ジロウさん」

／わあああああああああ！／

部活メンバーとその場にいたスタッフが歓声をあげた。

もちろん、俺も「よしッ！」と叫んでガッツポーズをする。

これはたまげたぜ！

なるほど、こりやサプライズだ！

まさか、富竹さんのプロポーズが見られるなんて！

「ほ、ほ、本当に良いんですか!?!」



「…あら、ジロウさんには、よく聞こえなかつたみたいね。

なら、こうすれば聞こえるかしら？」

鷹野さんが、いつものミステリアスな微笑をたたえて突然舞台の上にあがり、

奉納演舞と結納披露のために集まっている観衆の前で、高らかと宣言した。

「奉納演舞と園崎家の結納披露の前に、私事ではございますが、皆様にご報告させて頂きます。

私、入江診療所の鷹野三四と、富竹ジロウが婚約する事になりました！」

／おおおおおおおおおおお！／

観衆から大歓声と拍手が鳴り響く中、

鷹野さんは悪戯っぽい笑みを浮かべ、髪をたなびかせて振り返った。

「…ね？これならジロウさんも、聞こえるでしょう？」

うふふふ

眼鏡をずり落とし、放心している富竹さんに、

部活メンバーが肘を入れたり、手を叩いたり、茶々をいれたりしている。

おいおい、鷹野さんって、こんな、お茶目な人だったのか？

驚いたぜ。もう少し若ければ、部活メンバーとして入ってもらいたかつたぐらいだ。

<<それでは、奉納演舞の前に、園崎家結納披露を行います>>

アナウンスがなると、

魅音が俺の車椅子の後ろに立ち、手押しハンドルを握る。

「さあ、次はおじさん達の番だよ」

「…ああー」

俺の顔を覗き込むように顔を寄せる魅音と見つめ合い、

ゆっくりと唇を重ねた。

スポットライトが四方から照らされ、舞台が輝いている。

多くの観衆がそれを見つめて、俺達を祝福しようとしている。

観衆の中には、海江田校長先生や知恵先生、

富田くんと岡村くんそしてクラスメイト達に亀田くんがいた。

舞台袖には、俺の両親、魅音の両親、お魎のバアさん、公由の村長さん。大石さんと入江監督、富竹さんと鷹野さん。

そして、部活メンバー達が：レナが、梨花ちゃんが、沙都子が、そして詩音が：俺達を笑顔で送り出してくれる。

全てが温かく、光に満ちていた。

ああ、そうか。

これが、これこそが、

ハッピーエンドってヤツなんだ。

「46日目（日）：綿流し祭：夜：北条沙都子」

なんとという美しい光景なのでしょう。

圭一さん、魅音さん、

あなた方二人は、幾たびの苦難を乗り越えて、ようやく結ばれるのですわね。

私も、ここまで誘導してきたかいるというものですわ。

ねえ、梨花、見えておりますか？この光景が。

北条沙都子は、古手梨花の手をしっかりと握る。

古手梨花は、これから行われる結納披露に向かう二人に見とれていた。

北条沙都子は、会心の笑みを浮かべる。

これならば、きっと梨花も考えを改めてくれるはずに違いない。

「ねえ、梨花：本当に、雛見沢は素晴らしい所ではありませんか。」

このように美しい光景を私達に見せてくれるだなんて」

「はい。沙都子の言う通りなのです。素晴らしいのです。」

二人の想いが、二人の意思の強さが、この幸せを生み出したのです」

ああ、梨花：

ようやくあなたもわかって下さいましたのね。

なら、ずっと私と共に雛見沢にいつまでも：

「沙都子、ボクには夢があるのです。」

あの二人を見て、ボクは確信したのです。夢は諦めてはいけない

と」

…え？

「いつか、雛見沢を離れて、外の世界に出て行きたいのです。

外の世界に出て、多くの物を見て回りたいのです。もちろん、その時は沙都子も一緒です。」

二人でいつまでも一緒に…どこまでも羽ばたくのですよ」

はあああああああああああああああああああああああ!?

梨花、貴方…貴方、何をおっしゃっておりますの!?

こんな奇跡を見せられても、まだ、貴方はそんな事をおっしゃるのですの!?

私が、このエンディングを迎えるまで、どれほどの選択をやりなおしたが…

貴方はご存知ないのですわよね！

ええ、無いのですわ！

記憶を引き継いでないのですから！わかっておりますよ！

初めて、この『圭一さんと魅音さんがお付き合いする』という欠片を見つけた時、

私は狂喜乱舞いたしましたわ。

貴方の見続けた、百年、その記憶に残っている世界には、こんなイレギュラーな世界は無かったのでございましょう!?

この新たな結末を迎え、奇跡を見れば、きっと貴方は雛見沢から出て行くなんて考えないはずだと思いましたが！

だからこそアナタを惨殺し続けて心を折るといふ計画を後回しにしてまで実行したというのにッ！

でも、これが、どれだけ大変な作業だったのか…貴方には理解できませんものね！

私は、ようやく迎えた、この結末のために、一体、何度、何十回やりなおしたのか!!

私が、園崎家に向かう葛西さんの車に乗るように勧めなかったら、圭一さんは理由をつけて逃亡し、婚約は破綻して結婚する未来は絶

たれていた。

私が、園崎家の結納の日に、富竹さんを連れて写真に撮るよう誘導しなかったら、

圭一さんはプロポーズを行った直後にミフネに拳銃で殺されていた。

私が、圭一さんがぎっくり腰で倒れた後に『常に部活メンバーが一緒にいる』と提案しなければ

圭一さんは、いつか嫉妬心を爆発させた魅音さんと大変なことになるっていた。

私が、ゴミ山で、圭一さんの中にある秘密を暴露させるように誘導しなければ

圭一さんは、秘密を抱え込んだ苦しみの果てに爆発して大惨事を引き起こしていた。

私が、玩具屋で大石殺害を企む魅音さんに合意に行くように言わなければ、

圭一さんは、大石を殺した魅音さんを見て絶望に苦しみ喘ぐことになつていた。

私が、玩具屋でカラフルな拳銃を魅音さんに返しに行くように指摘しなければ、

圭一さんは、大石を殺した若頭に撃たれて死んでいた。

私が、初デートの帰りの電車で疑心暗鬼になった圭一さんを諭さなければ、

圭一さんは、帰宅後に悲劇を引き起こしていた。

私が、ゴミ山でわざとらしくレナさんに、圭一さんへの想いを捨てる覚悟を示さなければ

圭一さんは、嫉妬した魅音さんがレナさんを事故で死なせてしまう場面を見る事になった。

私が、興宮の写真館で、わざとらしく梨花にだきついて誤解を解いていなければ

圭一さんは、梨花に嫉妬心を現した魅音さんの姿に引き大惨事を招いていた。

私が、唐突に魅音さんのご自宅にトラップをしかけていなければ、

圭一さんは、ミフネの襲撃事件の時に黒服に囲まれて死んでいた。私が、鉄平のおじさまを盾にするようにしむけなければ、梨花が死に、

圭一さんは、魅音さんと共に雛見沢大災害で命を失っていた。

私が、お魍のおばあ様と、魅音さんを銃撃しようとする若頭を指ささなければ、

圭一さんは、その目で、魅音さんが命を失う姿を見ることになっていた。

エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ…

………

もちろん、本宅で隠れている魅音さんとイチャラブさせて梨花をブチきらせて楽しんだり、

園崎本家でロケット花火を圭一さんに直撃させたり、そんなお茶目なことは致しましたわよ？

でも、それぐらいよろしいでしょう!?

私が鉄平のおじさまをそそのかして軟禁状態を演出し、圭一さんが救出したからこそ、あのような傷害事件を引き起こしたのにも関わらず、お魍の鬼バアさまに気に入られて、婚姻を許されたのですから！いえ、そもそもロツカーに入るという罰を私が考えつかなければ…二人がお付き合いするという未来はなかったのですわ！

ああ、もう！その他、細かいやり直しを考えていたらきりが無いほど、

私は何度も何度もやりなおしましたのに！

その苦勞は何のためだと思っておりますの梨花！

これも、全て、今日の終わりを迎えるためではございませんの！

貴方に、この土地が、雛見沢が素晴らしく、希望にあふれ、特別である、

教えて差し上げるためではございませんか!!!

なぜ、それがわからないのですの!?

なぜ、それほどまでに外の世界へと出ていきたいのでございますの  
!?

外の世界などに行かなくても良いと…

それをわからせるために、私は時を繰り返し、貴方を昭和58年の雛  
見沢に閉じ込めたというのにッ!

………

「…沙都子?」

古手梨花の首に、沙都子が両手を近づける。

………

………

わかっておりますわ。わかっておりますのよ。

そうやって、二人でいつまでも、どこまでも一緒に…と言っても、  
どうせ、貴方は私を裏切るのでございますわよね?

聖ルチーア学園に進学し、そこで素敵なお友達と出会い、

私なんて、あっさり捨てるのでございましょう?

ああ、梨花…

貴方が愛おしい、そして憎らしい。

貴方にとって私はなんですか?

友人ではございませんの?仲間ではございませんの?

それとも百年の絶望で、すさんだ心を癒すために飼っていた…ただ  
のペットなのでございますの?

なら、それならそれでも、全く、かまわないですわ!

梨花、貴方と一緒にいられるのなら!私は自尊心も、誇りも、面子  
も全て、かなぐり捨ててもよろしくてよッ!

…でも許しませんわ。

私を捨てる事だけは絶対に許しませんわ!

それならば、いつそ…また…

………

……

沙都子は両手を古手梨花の首の後ろに回し、そのまま抱きしめた。そして耳元でぼつりと呟く。

「ええ、梨花、私達はいつまでも一緒ですわ」

「…はい、ボクたちはいつまでも、ずっと一緒なのですよ！」

沙都子がゆつくりと体を離すと、

古手梨花の満面の笑顔がそこにはあった。

……

……

まだだ…まだ、早いですわ。

まだ始まって一か月半しかたっておりませんもの。

まだまだ、奇跡の種は幾つもありましてよ梨花？

ふふふ…次はどのような奇跡を見せてさしあげましょう？

ああ…そうですね…

次はにーと詩音さんを結びつけると致しましょうか？

これもまた貴方は見たことはいませんかでしょう？

にーにーが目を覚まし、どのような物語が始まるのか楽しみですわ

！

笑劇？喜劇？それとも悲劇？

考えるだけで、胸が高鳴りますわね。

きつと思ってもよらぬ展開が待ち受けているはずですよ！

でも安心して梨花。

私は梨花も、にーにーも愛しておりますの。

私の思う通りに世界が動けば、

二人はきつと、この雛見沢でいつまでも幸せにくらせるはずですよ。

わ。

そうでなければ、目を覚ます意味がございませんもの！

ええ…もちろん、

それらを見ても、心が動かされない、その時こそ…うふふふ。

でも、大丈夫ですよ。

貴方もおっしゃりましたわよね？

強い思いは、未来を確定させる。と。

だとするなら、まるで問題はありませんわ。

だって、私はこれほどまでに梨花と幸せになることを望んでおりませんもの。

なればこそ、この物語の結末はハッピーエンド以外にはございませんわ。

強い思いが未来を確定させるのであれば、

それ以外の結末なんて、あるわけがございませんですよ。

そうでしょ…ね、梨花？

END



# EXTRA カーテンコール

竜宮レナ

「全話読破。お疲れさまでした。

くひぐらしのなく頃にくだひたすら圭一と魅音がイチャイチャするだけ編く如何でしたでしょうか？少しでも楽しんでいただけただけなのであるなら、これにすぎるものはありません」

園崎魅音

「いやあくおじさんとしては、まだまだイチャラブが足りなかった気がするね！

だって結婚式も、妊娠もまだなんだよ？これはちよつと消化不良じゃないかな！」

前原圭一

「おいおい、結婚式から出産って…あと何年かけるつもりだよ。

一か月半の内容を書くのに、完結するまで6か月もかかっちゃったんだぞ…」

園崎詩音

「そうですねよお姉！散々、圭ちゃんといチャイチャしたんですから、

次回作は、私と悟史君がイチャラブする内容に決まっているじゃないですか！」

北条悟史

「ええ…僕と、詩音が…？」

園崎詩音

「いやあ、アプリゲーム『ひぐらしのなく頃に・命』って良いですよお悟史君関連の情報が一杯でてきますから！」

嫌いなものはブロッコリー！私と一緒にいるときはあくんさせてもらってる！

こうなんというか、これ、恋人っていうか、もう夫婦ですよね！」  
北条悟史

「でも、コラボで僕が巫女服きていたり、僕が男の娘だったり、  
世界観がバグっているときもあるから…」

園崎詩音

「私は全然、全く気にしませんよ！さあ、悟史君ッ！」

めくるめくるイチヤイチャ世界を私と共に巡りましょう！」

入江京介

「ははは。頑張るのも良いですが無茶をしないでくださいね」

前原圭一

「監督には今回、特にお世話になったよなあ。実質、恋愛の師匠じゃないか？」

入江京介

「いえいえ、そんなことはありませんよ。恋愛というカテゴリーでいえば、最後まで沙都子ちゃんをメイドさんにできませんでしたしね…」

前原圭一

「あ、ハイ…」

園崎魅音

「まあ、この世界ってエロとか恋愛担当って意外にいないんだよね…  
富竹さんとかカウント率、意外に低いし」

園崎詩音

「え？ここにいないじゃないですか？恋愛なら私にお任せですよ、お姉  
！」

園崎魅音

「あ、うん…」

園崎詩音

「なんで目をそらすんですか、お姉…」

北条沙都子

「うがー！！！！そんなことより、なんですのー！！」

私が諸悪の根源みたいに終わっているじゃありませんの！

作者に謝罪と賠償を求めますわー!!!

古手梨花

「実際、業・卒は、沙都子が諸悪の根源だから仕方がないのです☆にばー」

北条沙都子

「梨花にだけは言われたくないですわ!!!」

竜宮レナ

「あはははは。元々、このお話はアニメ『ひぐらしのなく頃に業』が終わった後に作られたものなので、その後の『卒』の設定などは、はいつていないんです。なので、沙都子ちゃんがラスボスのまま終わってしまうつて感じになっちゃたんだね。だね」

古手梨花

「みー☆なので、あくまでも『業』の二次創作なので『卒』後に見ると、なんでや!という場面が多かったりするので、気にはいけないのですよ!にばー」

前原圭一

「とはいえ、卒のラスボスは沙都子じゃねーのか?」

「といえば、違うとは言えない立ち位置ではあるよな…」

北条沙都子

「圭一さん、何かいいまして? (キレ)」

前原圭一

「え、エウアつて奴が全部悪いんだよな! うん! うん!」

富竹ジロウ

「あははは。そういえば、最後、唐突に僕たちのプロポーズがぶっこまれましたみただけど、あれってなんなのかな?」

鷹野三四

「ふふふふ、中々面白い体験だったわね」

竜宮レナ

「あれは、作者の『全員ハッピーエンドにしたい』という理由からそうなったようです。」

全員が全員、幸せに終わるつて、良いですよね!」

古手梨花

「無印本編では悲しい感じで終わっている二人も、この世界ではラブラブのままENDなのです。ちなみにアプリゲートの『命』でも、世界によっては富竹と鷹野はラブラブのままなので、気になる人は遊ぶと良いですよー」

北条鉄平

「そういえば、ワシも最後はなんとなく良い感じに終わっていたのお」

北条沙都子

「鉄平のおじさまがちよつとした英雄ですって…信じられませんかわね。作者は鉄平のおじさまを優遇しすぎではございせんこと?」

間宮リナ

「冗談じゃないわよ! 私なんて出番も無い上に、一行ぐらいで『殺された』とか書かれてスルーされていたじゃない! どこが全員ハッピーエンドなわけ!? うう…卒では善人キャラになっていたのに…」

竜宮レナ

「まあ、間宮リナさんの場合は、死んでもらわないと北条鉄平帰還フラグが立ちませんからね…」

ストーリー展開の都合上、絶対に貧乏くじを引いてもらわないといけないわけですし」

前原圭一

「でも、業の流れからすると別に間宮リナが死ななくても、北条鉄平のおっさんが戻って来た気もするんだよなあ…直接の原因は、毎夜悪夢を見た事だしさ」

北条沙都子

「おくほほほ…その通り! 卒では、ちゃんと私が誘導して雛見沢におじさまをおびき寄せる名演技をお見せしましたわ! リナさんの生死など、別に必要なかったのを証明してしまいましたわね」

間宮リナ

「むきー!!! 無駄死にじゃないのよ!!!」

古手梨花

「この話を作った時点では間宮リナが善人になるとは予想もしていな

かったので、仕方がないのですよ。リナ☆かわいそ、かわいそなので  
す」

園崎魅音

「設定上の変更というか、そういうのだとやっぱりこの物語で  
おじさんが雛見沢症候群を発症させたような感じだったのはなに  
？

だって、卒を見れば『今まで発症させた事無い』って言ってたし  
北条沙都子

「まあ、愛情拗らせは園崎家女性の伝統みたいなものですしね…」  
古手梨花

「ヤンデレ風で可愛いのです」

園崎魅音

「つまり、なに？発症もしていないのに、おじさん恋愛拗らせて『大石  
ぶっころす！』…とか言っちゃったわけ？やばくない？」

園崎詩音

「あははは。お姉、やばーい！

まあ、鬼隠し編でも『あいつ生かしておくんじやなかったな』って  
セリフもありますから

卒ではヤンデレキャラになったし、新たな魅力発見ですよね！」

園崎魅音

「むきー…あれはヤンデレじゃないでしょ！

沙都子に注射撃たれて強制発症させられた上に

詩音が圭ちゃんをオヤシロ様の祟りに引きずり込んだからでしょ  
！

まあ、発症を進行させたのは確かに嫉妬だったけどさ!!」

竜宮レナ

「あははは。こんな感じで『卒』を見た後では、設定に混乱や矛盾があ  
ります

ので、そのあたりはご了承ください」

園崎魅音

「しかし、公式に『一度も発症してなかった』って声明が出たのは何気

に凄いやね

それって、おじさんが一度も皆を疑ったり、殺意を抱いたりしてなかったって

ことじやん？しかも、最後まで圭ちゃんには手を出さないし…ね？  
圭ちゃん」

前原圭一

「おう…やっぱり凄いやね魅音は！」

北条沙都子

「はいはい。ごちそうさま。ごちそうさま。でもまあ、やっぱりハッピーエンドにするなら、全部の因果を持って行ってくれる悪い奴らが出てこないとっ…てのはありますわよね」

古手梨花

「緩急あつてのハッピーなのですよ。」

そういう意味では悪役こそキモなのです」

若頭

「本当、本当、そういう意味では、みなさんはわしらに感謝してもらわんと」

三船（ミフネ）

「物語を終わらせるための機械仕掛けの人形ってヤツだな俺らは」

園崎お麴

「なくにが機械仕掛けの人形じや。最終決戦で、わしをこき使いおつて…年寄りをいたわらんかい…全く…」

園崎茜

「あははは。ま、お母さんも本当ならもつと暴れても良いキャラクターだからね。あれぐらいやっても良いんじゃないかい？そういうえば葛西も大暴れだったね。大したもんさー！」

葛西

「私としては、茜さんの出番がもつとあればよかったかと…」

小此木鉄郎

「ハハハ。ま、こっちは発散できたから良しですわ。たまには暴れないとストレスが溜まって仕方ないですさかいに」

「小此木隊長は良いですよね大活躍されて…我々は台詞が無いようなものですから」

南井巴

「13さんはいいでしょ？一応現場にいたんだし。私なんて出番は大石さんの回想シーンだけよ？」

大石蔵人

「ん〜ふふふ。まあ、どうしても全員出してしまうと主体性が無くなってしまうからねえ。キャラクターを絞る必要はあるんですよ。私も出てきたのは物語の中盤からでしたからねえ〜」

南井巴

「はあく大石さんは美味しい役ですよね…中盤から出てきた強キャラ扱いですから…こうなれば自棄食いかな。自棄食い」

亀田

「俺も、出番はすくなかったスけど、Kの親友ポジションとして美味しい所をもつていけたのは、悪くなかったスね。まあ、言わせてもらえば、Kと唯一ジャンボパフェを突つつく間なんですから…みなさんも、もうちよつと、俺をリスペクトしても良いとは思うんスけどね…」

前原圭一

「う〜ん。俺の親友ポジションはどうしても悟史になっちゃうからな。亀田くんが割に合わないことが多いってのは、仕方がない所ではあるんだよな」

亀田

「業卒では、沙都子ちゃんにホームラン打たれた一瞬のシーンのみの登場だったんスよ！冷遇しすぎじゃないっすか…！（号泣）」

北条悟史

「あの…ごめん…話の腰をおつてわるいけど…僕って、圭一くんの親友…だったの？」

前原圭一

「でた！アプリゲー『ひぐらし命』で100万個の欠片に居る全ての圭一を号泣させた台詞！悟史、そりゃあんまりだぜ！妄想の中でポツ

キーゲームした仲だろ!」

北条悟史

「も、妄想の中まで責任はとれないよ〜むう〜」

北条沙都子

「…まあ、皆さんよかったではないですか。鉄平のおじさまも、小此木のおじさまも、亀田さんも、要所要所で美味しい思いをされて。私なんて色々最悪ですよ」

前原圭一

「なにいつてんだよ。本来俺の役目である頭脳プレーの部分で魅音とお前がやっていただろ?おかげで俺は、周囲で驚く一般人Aみたいな扱いだっただぜ?」

北条沙都子

「そりやまあ、この時点で既に300年以上は生きているわけですし?それぐらい頭が回らなくてはおかしなものですわ」

古手梨花

「でも、カボチャは嫌いなのです。かわいそ、かわいそなのです☆」

北条沙都子

「りかあ〜」

羽入

「あああう!ボクの出番が少ないのですよー!ミフネを呪ったのをいれても、ちよっとだけなのです!これは抗議なのです!!」

田村媛命

「角の民の長はまだ良し…我など小さき社のみなりや…」

エウア

「存在無き我よりもよかろうぞ。業卒の黒幕にして沙都子を育てたフエクサーなのにもかかわらず、物語には名すらも登場しておらぬからの」

古手梨花

「…は?沙都子を育てた?どの口でいつているわけ?前歯全部おつてやるからこつちへきなさい!」

羽入



「あうあう！カーテンコールでケンカは止めるのですよ！」  
熊谷勝也

「皆さん元気ですね…あ、いっぱいどうですか？」  
海江田校長

「これはこれは、どうもすいません。貴方もどうですか？」

野村

「いえ、私は次のお仕事がありますので…」

富田くん

「そんなことよりなんなんですか！僕たちの扱いは！」

岡村くん

「そうですよ！全然ハッピーじゃないです！どこか全員ハッピーエンドなんですか！」

前原圭一

「なんか、メンドクサイのがきたぞ…」

竜宮レナ

「圭一くん、本音がもれちゃってるよ…!?!」

前原圭一

「そうはいつでも、こればかりは本人の意思だからなあ…梨花ちゃん？沙都子？」

古手梨花

「沙都子以外に興味はないのですよ☆にぱー」

北条沙都子

「…うーん。せめて圭一さん程度の力量と包容力があれば、考えてもよろしいですが…ねえ？」

前原圭一

「程度とはなんだ程度とは…」

富田くん&岡村くん

「うわーーーーーん！」

前原圭一

「まあ、富田くんと岡村くんがそれぞれ、梨花ちゃんと沙都子をゲットしちまうと、レナが残るし、それは仕方がない所ではあるよな…」

鳳谷菜央

「なら、私がレナちゃんとかくつつけばいいじゃない」

竜宮レナ

「はうく！菜央ちゃん♡」

鳳谷菜央

「レナちゃんーん♡」

赤坂美雪

「やつほー！元気？」

公由一穂

「おにぎり美味しい…（もぐもぐ）」

前原圭一

「お前ら、別世界のキャラの上に、この作品に登場してもいないじゃねえか！なんでいるんだよ！」

赤坂美雪

「いやあ、うちら当初は出る予定だったらしいんだけど、なんか私ら出ると主体がどうしても『命』よりになるからって急遽撮影がキャンセルになっちゃったらしいんだよね」

赤坂衛

「残念だよ。娘と一緒に出演したかったんだけどね」

赤坂美雪

「ちなみに、私には結婚相手がいるからカップリングの必要無いよ」

公由一穂

「え!?美雪ちゃん、恋人がいたの！」

赤坂美雪

「いやいや、未来の話だから…今は清廉潔白な十代半ばの少女だって！」

鳳谷菜央

「清廉潔白ね…」

赤坂衛

「クツ…美雪が結婚するなんて…おのれ、龍ノ介くんツ!!」

荒川龍ノ介

「いやいや、全然俺、関係ないですよね赤坂さん!?確かにちよつとはいいなーとはおもっていましたけれど」

公由一穂

「え?小さい女の子が好きなの系なんですか?」

荒川龍ノ介

「ちがーう!!あの時は、美雪ちゃんも、俺も20歳超えていたのツ!ほら、乙部!少しはフォローしろよ!」

乙部彰

「あははは…てか、撮影終わっていないのに、お疲れ会…もとい、カーテンコールに出ていいんですか僕ら?」

園崎魅音

「お、龍ちゃんに、乙部じゃーん!元気してた?てか宵越し編の面子あつまっているけど、なんか別撮りでもあんの?」

荒川龍ノ介

「あ、魅音さんですか?!いや、これは…」

乙部彰

「若い…ですね…!?!」

園崎魅音

「ククク…花も恥じらう女学生ったー、おじさんのことよ!」

園崎詩音

「こうやってみると、乙部くんってやっぱり、悟史くんに似てませんよお姉。悟史くんは優しく、包容力があって、責任感があって、思いやりがあつて…もう、最高なんですから!」

北条悟史

「あ、あははは…詩音…そのへんで…」

乙部彰

「いいんです。悟史さん…詩音さんの言う通りですから…はあ…」

園崎魅音

「まま、人間誰しも間違えるってえくのはあるってことさ乙部くん!そこから立ち直るのが大事ってことよ!」

乙部彰

「…えつと、本当に魅音さん本人なんですか？」

園崎魅音

「乙部え…アンタも大概失礼だね？（威圧）」

乙部彰

「…ひっ!?!（怯）」

荒川龍ノ介

「あ、その感じ。間違いない魅音さんっす…（震え声）」

園崎詩音

「宵越し編といえば、お姉…」

園崎魅音

「…なによ?！」

園崎詩音

「また、私達、双子に生れかわれて良かったですね♥」

園崎魅音

「ブハツ!?!あんた、今、その話を言うわけ!?!てか、抱きつくな!キスするな!ほおずりするなああああ!」

古手梨花

「そういうながら、詩音になすがままの魅い…可愛い、可愛いのです☆」

前原圭一

「うーむ。しかし、お前ら乙女三人組が入ってきてても…一穂ちゃんが残っちゃうよな…誰か好きな人とかいるのか?」

公由一穂

「え?私ですか?…えつと、その…圭一くんには、よく助けられているので、頼りになるなあ…とは思っていますけれど…」

前原圭一

「…え?俺?！」

園崎魅音

「…なに、圭ちゃん?一穂ちゃんに好かれているの?」

前原圭一

「…いや、まて魅音。なんで目がすわっているんだ?」

園崎魅音

「いや、わかるよ。一穂ちゃん可愛いし、小動物みたいだし、ふるふるしているし、守ってあげたくなるってのは、おじさんも、うん。でもさ、やっぱり好きっていうのはお互いの心というか、気持ちっていうのが大事なわけじゃん？だからさ、そのあたりをもう少し考えてカップリングすると良いとおもうんだよね。たしかに、世の中には“けーかず”とかってタグがあるよ？圭ちゃんと一穂ちゃんのカップリングのタグね？否定する気は全然ないよ。むしろ、どんなカップリングでも良いと思う。でもさ、こういうのって色んな視点で見てもいいかと思うんだよね。例えば見る角度によっては、ちよつと合わないかなーってのもあると思うんだ。いや、これは別に“けーかず”が悪いとか、そういう意味で言っているわけじゃなくて、ただの一般論なんだけどさ、でも、そういう普段では見えない方向性で考えてみるのって大切だと思うんだよね。うんうん。」

赤坂美雪

「うわ…めっちゃ早口でしゃべってる」

鳳谷菜央

「想像の2. 56倍ほど、この世界の魅音さんはヤバい感じね…」

公由一穂

「あははは、たったの2. 56倍なんだ」

古手梨花

「まあ、魅いはノーマル状態でも、圭一が絡むと結構大変なので仕方ないのです」

北条沙都子

「てか、レナさん。そろそろ菜央さんと抱き合うのを止めて司会進行して下さいませ」

竜宮レナ

「はう、じゃあ菜央ちゃん。終わったら一緒に帰ろうね♥」

鳳谷菜央

「うん！レナちゃん♥」

竜宮レナ

「…と、命のメインキャスト三名が登場する混乱がありました。実を言うとコレもオムニバス方式だったのを、途中でストーリーものとして方針が変わった弊害なんですよ。当初の予定では、この三人が活躍する読み切りのプロットもあつたんです。ちなみに、この作品のコンセプトは『イチチャラブ』『因果応報』『壮大な勘違い』で構成されています」

前原圭一

「作中に出ていたから、イチチャラブと、因果応報ってのはわかるけど、壮大な勘違い。ってなんだ？」

竜宮レナ

「それはね圭一くん。作者が天邪鬼だから『神様じゃないんだから、登場人物全員が正しい情報を知っているわけがない』ってことで、登場人物が何かしらの勘違いや、思い違いをしているという設定にしちやっただよ」

前原圭一

「たしかに劇中で俺は北条鉄平を悪い奴だと勘違いしていたよなあ」

知恵先生

「私も、前原君が自殺を考えているのかと思っていましたわ」

大石蔵人

「私も、ミフネを最後まで“オヤシロ様”だと考えていましたからねえ」

竜宮レナ

「本編を遊んだ方は、この作品の後半で出てくる真実が、必ずしも全て本当とは限らない。ということがわかるはずですよ」

でも、実際には完全に世界の情報を把握できる人なんて、そうはいないですよ？

だから、この世界では全ての人が、なんらかの形で、とんだ勘違いをしているんです」

大石蔵人

「そういう意味では、本編で園崎家が犯人だと思いついていた私は、この世界の“間違ったオヤシロ様の真相”を知って、ハッピーエンドを

迎えた。とも、言えますな。たくはははは！」

園崎魅音

「ちえー。結局園崎家が悪いで終わるのかよー  
もういいよ、それで。圭ちゃん、慰めて〜♥」

前原圭一

「お、おい。皆の前でひつつくな！」

「恥ずかしいだろうが！」

園崎詩音

「よし、悟史くん！私達も負けていられませんよ！」

次回作の主人公として、お姉と圭ちゃんに、私達のいちやらぶパワーを見せつけましょう！」

北条悟史

「ええ…それって決定事項なのかい…？」

園崎詩音

「もちろんです！次回作は、

ひぐらしのなく頃に〜いちやらぶ大戦！圭魅（けーみい）VS悟詩（さとしおん）〜これに決定ですよ！どちらの、イチヤイチャパワーが世界を救うのか！壮大な叙事詩がはじまるんです！」

北条悟史

「む、むう〜〜〜」

竜宮レナ

「それでは次が本当に〜圭魅VS悟詩〜になるかはわかりませんが、また次回作でお会いできましたら、よろしくお願いいたしますね！ちなみにこの後、オムニバス用に作ったプロットで乗せられそうな話を再構築したオマケの話を3話ほど掲載する予定です。よろしければ、それらもご賞味下さい。それでは、みなさん。良いカップリング生活を〜！」

全てのカップリングは、オンリーワンで、ナンバーワンです！

## e x. 大学生・綿流し祭

「昭和×年・綿流し祭：古手神社：夕方：前原圭一」  
今年も綿流しの祭の日がやってきた。

あれから様々な出来事がおきたものの、昭和58年の雛見沢襲撃事件以降は例年通り、六月末に祭りは行われていた。

この場には、俺とレナと梨花ちゃんがいる。

屋台が立ち並ぶ屋台とを見て、レナが嬉しそうに手を叩く。

「今年も、お祭りにこれてよかったね☆よかったね☆」

梨花ちゃんも服をひるがえして、喜びを表している。

「今年も盛大なお祭りなのですよ。魅いがいないのが残念なのです」

沙都子の声も俺の耳に聞こえてくる。

「まったく、魅音さんも雛見沢御三家の次期当主なのですから、綿流しの祭りぐらい戻ってくるべきですわね」

沙都子は結構手厳しい事をいうな。

俺は梨花ちゃんの頭を撫でる

「まあ、魅音も大学で色々忙しくてなかなか帰ってこれないんだらう」

そうは言ったが、実は魅音は大学へ行った後も、土日は雛見沢に戻り

俺と一緒に過ごすのが習慣となっていた。

土曜日の何時に来るかは未定だが、どんなに遅くても特に用事がない場合は

俺の家に泊まりにくるのが通例だ。

ちなみに、両親も気をきかせて、土日は外に出ていることが事が多い。

つい先週も魅音は土曜日の夕方ごろに俺の家「前原屋敷」に泊まりにやってきた。

「圭ちゃん♥♥♥」

語尾にハートマークを三つほどつけた魅音は、ドアの前にいた俺に勢いよく抱き着く。



それを正面からだきかかえた俺は、3. 4周ほどくるくる回した後  
に静かに降ろして2. 3回ほどキスをした。

「待っていたぜ魅音」

「うん、うん。早く入ろう」

魅音の腰に手を回して、家に入る。

そのまま、部屋にお持ち帰りすると、魅音はすでに敷かれていた俺  
の布団にダイブした。

「いやいや、これだよ！これ！

はあく圭ちゃんの匂いが染みついた布団。

おじさん、本当に感動だよ」

俺は苦笑すると、魅音の横に座る。

「大学は、どうだ魅音？」

勉強にはついていけているか？」

「うん。大丈夫だよ圭ちゃん。電話でも何度も話たけど、向こうでも  
友達できたしね。

なんか、小難しい話を聞いて、論文？なんか書かなきゃいけないみ  
たいけど、

まあ、なんとかやっていける」

そうか。それはよかつたぜ。電話でも言っていたもんな。

そりゃ、魅音なら大学で友達なんて何人でもできるだろうぜ。

魅音はコミュニケーション能力が高いから。

女や、その…男との友達なんかも…

「クククク、圭ちゃん、何を考えているの？」

魅音がいやらしい笑みを浮かべて俺の顔を見ている。

言わなくてもわかるくせに、わざわざそう聞いてくる。

全く、意地悪なヤツだぜ。

「…戻ってくるたびに、垢ぬけて洗練されていく妻に対する  
夫の複雑な気持ちを答えろ。30点問題な。コレ」

だが、その問題には答えず

魅音は、俺の首に両手を回して抱きついた。

「それじゃあ、私からも質問。

帰ってくるたびに、どんどん大人びてかっこよくなる夫に対する妻の複雑な感情を答えて。これ50点問題だから」

俺達は見つめ合うと、そのまま口づけを行う。

魅音は離れた唇を、そのまま俺の耳元に寄せた。

「大丈夫だよ、圭ちゃん…だつてさ、

圭ちゃん以上にかっこいい男の人だつて全然いないから。

あははははは！」

俺は何と言って良いかわからない。

魅音はさらに話を続ける。

曰く、井の中の蛙大海を知らず。とは言うものの、

実際に大海に出てみれば、俺ほどの覚悟と信念持った男はおらず、見ためはそれっぽく着飾って、背伸びをしている子供ばかりだとう。

まあ、これは事実というよりも、むしろ俺が嫉妬しないために見繕った方便だろう。

しかし、俺の心配した通り、言いよる男がいないわけでも無いらしい。

ただ、魅音に言わせれば、その手の男達は『園崎魅音』という個人そのものが目的では無いと言う。

大学に入学して、わりと早い段階から、魅音は『雛見沢襲撃事件で婚約者を守って負傷したM』の婚約者その人だと知られたらしい。

それによって話題の人として注目を集めたわけだが、

婚約者がいるし、またヤクザの娘ということで、いわゆる『女漁り』の標的にされることは無かった。しかし、逆に「だからこそ」魅音を狙うという挑戦者も何人かいたという。

つまり、そいつらは『人妻大学生』や『有名人』という肩書の女を落したいという低俗な目的の奴らだ。

「まあ、おじさんも、それなりに周囲に悪い人達がいるなかで育ったからね。

その手の輩は、目を見るだけでも、雰囲気だけでもよくわかるんだよ」

魅音も、そういう手合い相手にはのらりくらりとかわしてきたが、その内の一人が『あんたの婚約者が三発くらったんだって。俺なら銃弾五発をくらっても大丈夫だぜ』という奴がいたので、至近距離で改造モデルガンを空き缶に撃ち込んだことがあったらしい。

あまりの衝撃に驚いたそいつに魅音は「私の婚約者は、その十倍の衝撃がある実弾を三発くらったんだけど、あんたも体験する？」と  
いって、震えあがらせたという。

「ちよつと、それはやりすぎじゃないか。改造モデルガンを至近距離で撃つなんて」

「…うん。ちよつとイラツとしてたかな。圭ちゃんを馬鹿にされた気分になっていたから」

まったく仕方がない奴だぜ。

俺は魅音の頭を撫でる。

ただ、そのおかげですっかりとそういった輩は近づかなくなり、

逆に大学内で『姐さん』として男女に関わらず人気を博したらしい。それだけではなく、婚約者がいるということでも女子たちの恋愛の相談も受ける事も多く、大学内では恋愛マスターとしての尊敬を集めているだとか。

「…魅音が、恋愛マスターか。とてもじゃないが、雛見沢に住んでいた頃を知っていた人間なら、にわかには信じられない称号だな。それ」  
「いやあ、これでも圭ちゃんと、恋の駆け引きを散々してきたからね。」

おじさんは、もう恋愛のプロって言っても過言では無いよね」

「…つき合った人数が一人なのに、恋愛プロとかマスターとかって名乗って良いモノなのか？」

「あのね圭ちゃん。本当の達人なら自分にとって究極の1人を見つけてるものでしょ？そんなふらふらと、あっちこっちの男と付き合っている人って、それって逆に男を見る目が無いんじゃない？『人を知りたいのなら、複数の人とつき合うのではなく、一人をより深く知るべし』だよ」

返答に困るような事を言うなよ。

「圭ちゃんを早く、大学につくったゲームサークルの皆に紹介したい

な。

きつとき、驚くと思うよ。あの少年Mがって！クククク…」

「…一応、聞いておくが、ちゃんと俺の事を、誇張を言わずに伝えているんだらうな？」

「大丈夫だつて。ちゃんと…お互い一目惚れしたつて皆には話してあるからさ」

いや、そういう意味じゃねえ！

てか、ちゃんと設定を覚えていたんだな。偉いぞ魅音。

「あとは、オマケに、勝つためなら手段を問わないヤツ。取り込まれるからデイベートを避ける。

口先でひっくり返す魔術師だから口論するな。ぐらいは伝えてあるかな？」

おいおい、心象最悪じゃないかよ。

つて、なんでジト目で俺を見るんだ魅音。

「…予防線。圭ちゃんが他の女の子にとられないようにね。『有名人を誘惑したい』つていう人がいるつていつたでしょ？それは男だけじゃないんだよ。圭ちゃんも気をつけて、そういう奴らのターゲットにされると言うから」

なるほど、そういう手合いも女性にはいるつてことか。

中々複雑だぜ、男女社会つてのはさ。

「…それに言つたじゃん。圭ちゃん、来るたびにかっこよくなつてるつて…正直、心配なんだよね。圭ちゃん、優しいから…悪い女に騙されないか」

おいおい、まだ言っているのかそんなことを。

困ったフィアンセだぜ。

「俺も魅音以外に興味はないぜ？」

むしろ、どんどん魅音は美人になつていくから、ますますのめり込んじゃうかもな」

「あははは。それ、おじさんも同じ事言っちゃうけど、良い？圭ちゃんも、どんどんかっこよくなつていくからさ、もう他の男性なんて眼中にもないよ」

魅音は俺の目を見つめると、指を絡ませてきた。

「そういうことだから…圭ちゃん、全然、平気…圭ちゃんが気にするよ  
うなことは何も無いよ。私の体に触れても良いのは、圭ちゃんだけな  
んだから、さ…」

俺と魅音は、また唇を重ねる。

何度かキスをして、少し舌を入れると、陶醉したように俺の顔を見  
る。

「だからさ、圭ちゃん…おじさんの中を圭ちゃんで満たして欲しいん  
だ。」

来週は忙しくてこれないからさ…いいよね？」

魅音は口から熱い息を吐きだす。

唇を濡らして、俺の熱情を誘因する。

魅音と『初夜』を迎えたのは、大学に合格した日だった。

入学祝というわけでもなかったけれど、俺達は一線を越えた。

本当は魅音の誕生日まで待つはずだったけれど、そこはお互いに我  
慢できなかった。

最大の邪魔者だった大石がミフネによる『雛見沢襲撃事件』の後、園  
崎家を目の仇にしなくなったのも大きいだろう。俺達二人を邪魔す  
る者がいなくなった以上、遅かれ早かれこうなっていたのは間違いな  
い。

初めて一つになり、魅音が嬉しさのあまり泣きだしたのを今でも  
はっきりと覚えている。

その後は、タガがはずれたようだった。ダムが決壊したかのよう  
に、時間があえば毎夜のように愛し合った。

それは大学へ行った後も同じだった。

土曜日に返って来た魅音は、その夜、朝になるまで深く愛し合うの  
が俺達の約束事になっていた。

『太陽が黄色くなる』のを見たのも、1度や2度じゃない。

「いいぜ、魅音…今夜は寝かせないぜ？」

「うん、圭ちゃん…今夜はずっと一緒だよ…」

俺はゆつくりと魅音を押し倒した。

.....

時計を見る。午前4時だ。今日はいつもより早く終わった。とはいえ、俺も魅音も手を抜いたつもりはない。二人とも満ち足りている。

腕枕の中で、魅音が俺を見て微笑んでいる。少し息が上がって、顔が桜色にかわっている。

その姿が煽情的だ。くっそ。もう一回戦いくかもしれないな。

「…圭ちゃん。圭ちゃんが大学に来たら同棲しようね。」

一緒に朝ごはん食べて、一緒に勉強して、一緒に寝る…これってさ、最高だよね」

もちろん、俺としても同棲に異論はない。

さすがに雛見沢から大学へはいけない。

興宮で魅音と一緒に住んだ方が両親も安心するだろう。

「俺はもちろん嬉しいけど、良いのか？」

一人暮らしできる機会は今だけだろ？

どのみち結婚したら二人で暮らすことになるんだぜ？」

「…そうだね。卒業したら二人一緒に暮らすことになる。」

でも、普通の結婚生活にはならないよ、圭ちゃん」

真面目な顔で魅音は答えた。

そうか。魅音の場合、特殊な家の事情がある。

魅音は園崎家の当主代行だ。大学を卒業して立派な社会人ともなれば、常人のような新婚生活はおくれないだろう。おそらくそれは、一般家庭とはかけ離れたものになるに違い。

「だからこそ」大学にいる間は、普通の新婚生活を味わいんだな。

「それにね…帰るとき。家の中に誰もいないんだよ」

「…え？」

「こんなこと、前は考えもしなかったんだけどさ。大学にいつてゲームサークルでバカやって、みんなと楽しく帰って来た家の中に、挨拶をしてくれる人がいないって…なんか、すっごく寂しく感じてさ」

「…魅音」

そうか。だから毎夜、俺に電話をかけてくるのか。何かあったのか、どんな騒ぎを起こしたのか。

毎夜、毎夜、何時間も。

「圭ちゃんがいけないんだよ。おじさん、こんなに弱い人間じゃなかったのに…圭ちゃんのせいで弱くなっちゃったんだよ？だからさ、圭ちゃん…責任、とってよね…」

「あたりまえじゃないか。俺はお前の夫なんだぜ…」

俺はノータイムで魅音に返し、頭を撫でた。

魅音は嬉しそうに、俺の頬に顔をすりつけてくる。

そして俺は…

……………

……………

「……………くん、圭一くん」

レナの呼ばれて振り向く。

ずっと先週との魅音とのイチャイチャに思いを馳せてしまったよ  
うだ。

「大丈夫、圭一くん？どうかしたの？」

「ああ、魅音も来ればよかったのにな。って思ってたさ」

レナに笑顔で返す。魅音は今頃、大学の方で色々忙しく動いている  
んだろう。

それはわかるが、せっかく綿祭りの日なのに、合えないのは少し寂  
しい。

…と、思っていたら。

ドガッ

「圭ちゃんッ!!!」

うわ、なんだ!?誰だ抱き着いたのは!

魅音か!なんで魅音がここにいるんだ!?今日は忙しいんじゃない  
かったのか!

「はあ、はあ、圭ちゃんに知らせたいことがあって、タクシーをすつと  
ばしてきたんだよ!

「一大事！これ、もう大変なニュースだって！」

「な、なんだよ。大ニュースって」

「じゃーん。という言葉と共に、魅音は懐から体温計のようなものを取り出した。」

しかし、温度表示がある部分には何も表示されていない。赤紫のラインが二つ出ているだけだ。

…って、これ。妊娠検査薬か!?

「そうだよ！圭ちゃん！おじさん、妊娠したんだよ!!あはははは!!」「そうか！あはははは！やったな!!」

周囲で歓声があがる。レナも梨花も手を叩いて喜んでくれる。

俺は魅音を抱きしめて、くるくると、その場で三回転位した。そうか。ついに俺も父親になるのか！

「そうだ！はやくお魘のバアさんにも知らせてやらないと！行こうぜ！」

「うん、だねー！ばっちゃん、喜ぶよーきつとー！」

その時、沙都子のツツコミの声がオレの耳に届く。

「喜ぶのは良いですけども、圭一さん、まだ結婚式もあげて無いんでございませぬの?」

あ、そうだ！なんてこつたい。今まで実際に子供を妊娠する魅音の事ばかり考えていて、結婚式をあげてなかった！

てか、よくよく考えたら婚姻届けも出していないじゃないか!?

すると、魅音のお腹の子はどうなるんだ！

「み、魅音。どうしよう！俺、まだ結婚してないし、婚姻届けも出してない！もしかして生まれてくる子供って、父親無しになるのか!」

俺は慌てたが、魅音はあきれた顔をする。

「圭ちゃん、圭ちゃん。」

世の中に、婚姻届けを出してなくても子供ができちゃう人だって結構いるんだから、気にしなくても大丈夫だよ。ていうか、結婚式だってさ、デキちゃった結婚?とか、そういうのもあるんだからさ」

「そ、そうか…まったく、沙都子も驚か…」

俺は振り返って初めて気が付いた。



沙都子が、いない…？

「おい、沙都子は…？」

レナと梨花ちゃんが視線を合わせて悲しい顔をする。

「圭一、沙都子は…」

ちよつと待って、どういうことだ？

俺は確かに沙都子の声を聞いていたよな？

あれ…沙都子の姿を俺は、見て…いない？

どういうことだ…

沙都子は…でいて…いた…？

だとすれば、俺は一体誰の声を…

キーーーーーー

頭の中で、何か金属音が響くような音が鳴り響いた。

一体、これは…俺は…

………

………

………

「チャン…！圭ちゃん！起きている？」

…あ。

俺は名前を呼ぶ方に顔を向ける。

魅音が立つて、俺を笑顔で見ている。

左右を見渡す。ここは病院のベンチか。

＜産婦人科＞と書かれたプレートが見える。

すると病院の中か？俺は…寝ていたのか？

今までの全部…夢、だったのか？

「今日の検診おわったよ。お腹の子、順調だった！」

俺は視線を魅音のお腹に視線を落とす。

魅音のお腹が、少し膨らんでいるのがわかる。

ゆっくりと手を差し伸べ、やさしくそのお腹に手を触れる。

「…結構目立ってきちやったね。お腹。」

大学の友達もさ、結構触りたがって困っているんだよね。

ま、男にはふれさせないけどね。男でさわってOKなのは圭ちゃん

ただだよ」

そうか。この中に、俺と魅音の子供がいるのか。感慨深いぜ。子供は愛の結晶とは言うけどさ。

本当に深く、俺達は愛し合ったんだもんな。

やばい。なんか、涙が出て来たぞ…

「…んもう。泣き虫だなあ、圭ちゃん。

ここで涙目だと、出産の時は号泣するんじゃない？」

「…かもな。あははは」

「圭ちゃんったら、あはははは」

俺と魅音は二人を顔を見合わせて笑った。

「そうだ。圭ちゃん、子供の名前、考えて来てくれた？」

「そうだな。男だった圭太郎ってのは…どうだ？」

「ふむふむ。女の子だったら…？」

あ、女の子パターンは考えていなかった。

「け、圭女郎…？」

「…圭ちゃん、全くノープランだったでしょ？んもう、しょうがないな」

「わりい。鬼の文字を入れるって、中々ハードルが高くてさ」

それを聞いた魅音が、うつむき憂いを帯びた哀しそうな顔をする。

その表情には、ただ哀しみだけでは無く悲痛な叫びのようなものが込められているようだった。

…なんて悲しい顔をしているんだ魅音。

一体、何でそんな表情をするんだ。

「み…」

その表情の意味を知ろうと声をかけようとしたその時、廊下を誰かがパタパタと歩いてこちらにむかってくるのに気が付いた。

あれはレナと梨花ちゃん…

「魅いちちゃん！検査はどうだったのかな？どうだったのかな？」

「魅い。安産のお守りを持って来たのです。身に着ける良いのですよ」

そして、一番後ろにいるのは…

沙都子！沙都子がいるじゃないか！

「沙都子!?!お前…無事だったのか!」

「圭一さん…!?!あ、ああ…おーほほほ!あんなポンポンの痛みぐらいでなんでもございませんわ!」

「沙都子は、おなかゴロゴロ。ピーピーで雷様だったのですよー☆にばー」

「り、梨花あく余計なことは言わないで下さいませ!私達、もう小学生ではございませんのよ!」

…やっぱり、そうか。夢だったのか。そうだよな。沙都子が死ぬわけが無い。

でも、なんであんな夢を俺はみてしまったんだろうか。

沙都子が俺の顔を覗き込む。

「圭一さん、何を気にされているのか、ご存じありませんが、悪い夢なら気になさらないほうがよろしくてよ。あの欠片の世界はもう”無くなった”ので、ございますから…」

…沙都子?

俺は、言葉にならない異様な何かを感じていた。

何かがおかしい。だが、それを口にだせないもどかしさがある。

沙都子は何も言わなかった。

そこにいた沙都子は、ただただ微笑していた。

e x. 平成18年・雛見沢廃村

「平成18年6月：旧園崎本家：昼：園崎圭一」

目を覚ますと、日本家屋の天井が見える。  
体が動かない。縛られている？

違う、車椅子に乗っている。そして下半身が動かない。  
首を動かす。

ここは広間か。屏風が見える。下は畳。

しかし、荒れ果てている。蜘蛛の巣が見える。

ここは見覚えがある。園崎本家の邸宅か？

だが、この家屋の状態は一体何なんだ。

思い出そうとするが、頭が痛みだす。

どこかにぶつけたのだろうか。

ふと、横路を見ると、サングラスをかけた黒服の男が正座をしてこちらを見ている。

この男は何者だ。敵意は感じられない。

「御目覚めですか。オヤジ」

親父？俺はこいつの父親か？いや、多分、違うな。

きつと、こいつはヤクザだ。すると俺は…ヤクザの親分ってことか？

「俺が誰だか知っているのか…？ここはどこだ？」

「へい。オヤジ…もちろん、皆さんが園崎組組長だとは誰もが知るところではございます。」

誰にも文句は言わせません」

「……………」

「ここは旧園崎本家のお屋敷です。今、三船が襲撃しないか警戒を行っております。皆さんは例の『宝？』を探しに出かけておりやすが、直ぐに戻ってこられることでしょうか」

微妙に話がかみ合っていないようだな。

というか、三船が襲撃？ミフネは死んだんじゃないのか？

いや、行方不明になっただけか。

そうすると日本にいたってことか？

それとも海外から戻って来た？それを魅音が許している？

ダメだ。頭が痛くて何も考えられない。

そもそも、今は、いつなんだ？

「今は、何年の何日だ？」

「平成18年の6月21日です」

平成？聞いた事も無い年号だ。

西暦で言うとなん年だ？

「西暦ですか？2006年です」

西暦2006年！

さて、昭和58年が西暦1984年だから…

あれから20年以上たっているってことか。

外から足跡が聞こえてくる。

黒服は懐に手を入れたが、障子が開くと黒服は一礼して下がった。

そこには黒い和服を着た一人の女性が立っていた。

一瞬、魅音の母親の茜さんかと思っただが違った。

魅音だ。

そこにいたのは20年後の魅音だ。

かなりの…いや、とてつもなく美人になっている。

「遅れてすまないね。アンタ…どうかしたのかい？

そんな顔をして？」

「いや…魅音があまりにも美人になっているんで

ちよつと驚いただけさ」

「はあ？…あはははは！さすがに太いねアンタ。

こんな時まで、おノロケかい？」

魅音は、顎でしゃくり黒服を外に出るように命じると、

俺の耳元に口を近づけて、囁いた。

「アンタだって、年々渋さがまして、かつこよくなっているじゃないか

…」

顔を横に向けると、頬を染めた魅音の顔がある。

おいおい、20年たって美人組長になっても、

言っていることが昔と、あまり変わらないじゃないか。俺と魅音はごく自然に唇を重ねわせる。

キスの仕方が激しくワイルドで、かなり熱を帯びている。ううむ。これが大人のキスというものか。

唇を外すと、胸からハンカチを取り出して俺の唇を拭く。魅音の口紅がたつぷりについているんだろう。

なんだか気恥ずかしい。

足音が聞こえてきた。

今度は誰だ？

障子を開けて、二人の男が入って来た。

1人は眼鏡をかけた男。

もう一人は、若い男でなんだか見た事ある気がする。

この感じは・・・

魅音がニヤリと笑う。

「悟史に似ているだろうか？」

悟史！北条悟史か！

いや、待て、北条悟史がこんなに若いはずがない。

だとすると、彼は一体何者だ。

「あ、あの僕は…乙部彰と言います。その、そんなに北条悟史っていう人と似ていますか？」

別人か。

そうだよな。当たり前だ。あれから20年後の世界だ。

20歳は歳をとっているはずだ。全く魅音の奴め。からかいやがって。

「あはははは！そうだろう？」

私も最初に見た時には驚いたもんさ」

魅音め、なにを笑っているやがる。

驚いたにきまつているだろう。

こういうところも昔と一緒だ。

俺の知っている部分が残っていると、なんだか安心する。もう一人の眼鏡をかけた男は誰だ。

この悟史似の若者のツレか？

「あ、俺はオカルトライターの荒川龍ノ介と言います。前原圭一さん……ですか？」

俺の名前を知っている？

いや、一時有名人になっていたらしいからライター業の人間に知られても不思議じゃないが。

魅音は俺に耳打ちする。

「ほら、前に……アンタが入院したときにずかずか入り込んで失礼な質問した週刊誌のジャーナリストがいたろう？こいつは、そいつの息子だそうだよ」

ああ……いたな。そんな奴。

病室にいた俺達に失礼な質問を投げ込んできた週刊誌のジャーナリスト。

たしか、あんまり苛々したんで、水難にあうって予言してやったんだよな。

「そうか。アンタは、あの週刊誌の息子さんか……」

で、親父さんは俺の予言通り、水の事故にはあつたのかい？」

「あ、ははは……ええ、まあ……クルーザーに乗っていた時に、海に落ちて危うく死ぬところだったらしいです。前原さんに呪われたって、それ以来水辺には近づこうともしませんよ」

そうか。少しは苦しんだのなら良い気味だな。

なら、それで許してやろうか。

魅音が男の脇をつつく。

「こいつの親父さんは、その体験を元に『雛見沢・呪いの里』とか何とか書いて、大儲けしたそうだよ。まったく、取材費ぐらい払えっただ」

俺は笑った。

まあ、確かに人の不幸で飯をくっているなら、それなりの見返りは欲しいもんだ。

そうだ。それはともかく所で誰か水を持っていないだろうか？

先ほどから喉が渴いて仕方がない。

「誰か飲み物をもっていないか？」

喉がカラカラで困っているんだが」

その場の全員が顔を見合わせている。

どうやら全員飲み物をもっていないようだった。

乙部と名乗った少年が、ポケットから何か取り出した。

「あの、よろしければこれでもどうぞ」

眼の前に出されたのは、木苺だ。

村の中に自生していたのを拾ってきたんだろう。

「ありがとう。助かる」

無いよりはマシかな。

とりあえず一つ口に入れる。

季節や物によつては酸っぱかったりするが、

この木苺は意外に甘くていける。

「ごめんねアンタ。急いできたもんで持ち合わせなくて」

「良いんだ。それよりも…」

魅音に聞きたいことがある。

三船が生きているってどういうことだ。

「魅音、ミフネが生きていたんだな？」

アイツはてつきり死んだかと思っていたぞ」

「…残念ながらまだ生きているよ。さつき連絡があつた。

興宮の実家が襲撃されて母さんが殺された。

三船の奴ら、こっちに向かっているようだ。

アンタを連れてきて大正解だったよ」

魅音の母さん！

茜さんが殺されたのか。なんてこつた。

その時、記憶の扉が開いた。

…そうだ。思い出した…なぜ、こんなことになったのかを！

俺達、俺と魅音は昭和58年7月のあの日、婚前旅行で名古屋のホテルに泊まっていた。

だけど、雛見沢で大災害が起きたというニュースが流れ、俺と魅音は雛見沢に急いで戻った。



周囲は自衛隊により封鎖されて、近づくことはできなかったが、俺は何としてもレナや沙都子、梨花ちゃんを助けようと、山間から雛見沢に近づこうとして転落。腰の骨を折る重傷を負ってしまった。

後でわかったことだが、雛見沢は火山性の猛毒ガスの流出により全員死亡。

レナ、沙都子、梨花ちゃんを含む部活メンバーと雛見沢分校の皆も

：

それに当日村にいた、園崎のお魎バアさんと、俺の両親も全員亡くなっていた。

こんな痛ましい状況の中にも関わらず、俺は間抜けにも自損により下半身不随となる始末だった。

それでも、雛見沢に入ったら有毒ガスで死んでいたことを思えば、まだ幸運だったと言えるだろう。

ただ、魅音の精神的疲弊は相当なものだった。

家族が死に、俺を介護していた魅音は一時的に精神に失調をきたしてしまった。

それを知った三船は「魅音の年齢の若さと精神失調」を理由に、

園崎家当主にふさわしくないと反乱を起こしたのだ。

詩音と茜さんに支えられ、魅音が復調すると、三船に対抗すべく活動を開始した。

俺達は、園崎家を継ぐために必要な宝？『振鈴』を探しに、20年ぶりに封鎖が解かれた

この雛見沢を訪れ、園崎本家を探索していたのだ。

魅音は手に持っていた刀を俺の前に突き出した。

「随分、遠回りをしたけれど、古手神社の宝物殿でカギとなる刀を手に入れたよ

これで『振鈴』を手に入れられるはずさ」

この刀があれば、『振鈴』を手に入れることができる。

これで、魅音の正統性を確立できるはずだ。

そうすれば名実ともに、園崎魅音が園崎家の当主の座に座ることができる。

そうならば、俺達の勝ちだ。

「なるほど。それじゃあ、その刀を渡して貰おうか」

声に振り返ると、障子が開き、黒服達が続々と入って来る。

そして奥からは、三船と若頭が現われた。

若頭は俺の後頭部に拳銃を当てる。

三船は、勝利を確信したかのようにニヤリと笑った。

「魅音ちゃんよお。これでゲームは終わりだ。その刀を渡せば命だけは助けてやるぜ？」

アンタの大事な亭主…死なせたく無いだろう?」

「くっ…この卑怯者ッ!それでもアンタ極道かい!」

「はははは。勝てば良いのよ!」

てめえの母親のように、人を殺さない甘ちゃんに極道は務まらねえよ」

この男は、俺と、そして魅音を殺す気だ。

今、刀を渡したところで同じだろう。いや、渡した瞬間に殺すに違いない。

それじゃ、なぜ今殺さない?

抵抗されるのを恐れているからだ。

なら、俺が取るべき方法は一つだろう。

俺は魅音の目を見て叫んだ。

「魅音、構わんツ!俺ごと、こいつらを斬り捨てろ!」

「なっ…!てめえ、余計な事を言うんじゃねえ!」

若頭を銃口を押し付けてくる。

しかし、俺の腹は決まっている。顔を歪める魅音の顔に俺は口端をあげた。

「魅音、愛している。生きろ」

グギッ!!!

俺の口から赤い物が噴出し、俺は項垂れた。

それを見た瞬間、三船が絶叫した。

「バカがてめえッ!!!」

—アンタああああああああああ!!!—

魅音の電光石火の居合抜きがさく裂した。

若頭の首が飛び、さらに勢いよく飛び出した魅音の手によって、黒服達が次々と倒されていく。

それを見ていた三船が、情けない声を出して逃げ出す。

：ああ、そうさ。お前は結局“そう”なんだ。

圧倒的に有利な立場位にいなながらも、結局は最後に負ける。

それはどこの世界でも変わらない事実なんだよ。

俺は口端をさらに大きく歪めた。

三船の逃亡はすぐに終わった。

後ろ向きでゆつくりと、俺の前に倒れる。

その腹には深々と赤ヒ首が突き刺さっていた。

三船と視線が交差する。その目には恐怖がありありと浮かんでいた。

黒い和服を着た一人の美人が、別の一団を引き連れてあるいてきた。

あれは詩音か？？これまた凜とした美人に育ったもんだな。

「三船、往生しな。極道なら最後ぐらいいきばらんかい」

魅音と詩音。そして敵対する黒服達に囲まれて、三船は怯えた目で懇願した。

「：わ、わかった！俺が悪かった。認めるぜ。お前の当主就任をツ！

お、俺を殺したら、俺の縁者が許さねえ、それを分かっているんだろうな」

だが、魅音は無表情で言い放った。

「血の天秤。極道のルールを忘れたのかい？喧嘩の仲裁には血の量に見合う対価が必要なんだよ。当主代行していた母を殺し、私の夫まで自裁に追い込んだアンタが生き残れるわけがないだろう？」

「よせッ！…おッ…」

三船が最後まで良い終わらないうちに魅音は刀を振り下ろした。

ゴロリ。と、三船の首が畳の上に転がる。

：全てが終わったんだ。これで。

俺の方を向いた魅音は涙にくれていた。

「なんでアンタはいつも…私に命を捧げようとするのさッ!!!  
圭ちゃんが生きた世界なんて、私、生きていけないのにッ!!!」  
俺に抱き着いた魅音に、俺も照れ臭そうにつぶやいた。

「俺も、同じさ魅音…」

「…え?」

俺は口から、先ほど食べた木苺の葉っぱを出した。

呆然とする、魅音にウインクをする。

魅音は、何が起きたのか理解できなかったのか、

振り返って、詩音と、荒川・乙部の三人の顔の顔を見る。

「あくお姉、気が付かなかったのかな? 私は見た瞬間わかったけど」

「いやあく圭一さんの演技、上手かったですよね。口からイチゴの汁を出して。あははははは」

「あははは。前後の見境が無くなるなんて意外でした。魅音さんて、そういう乙女チックな一面があるんですね」

黒服達も笑い始め、

皆の笑い声が一面にひびく。

ようやく、理解が追いついた魅音の顔が、みるみる真っ赤に染まっ  
ていく。

すつと立ち上がると、すぐ近くにいた黒服の脛を蹴り上げた。

「なに笑ってんだい! まだおわっちゃいないよ!

『振鈴』を取りにいく、さっさと用意しな!」

魅音が怒声をあげて、皆を散開させる。

鬼のような形相で振り向き、のっしのっしと俺に近づいて来る。

「いい。アンタ…二度と…いや三度目か、あんな真似したら許さない  
んだからね!」

「わかっている。でも、俺はこんな体だから、命以外にお前に尽くす方  
法を知らないんだ。すまないな」

「ああ…もう、本当、アンタって男はさ…!」

魅音は俺に抱き着き、頬をすりよせる。

俺の顔は魅音の化粧で真っ白になっていないかコレ?

魅音は三度ほど、俺の頬にキスをするとゆっくりと離れ、

車椅子を押し始める。

向かう先は『振鈴』のある部屋だ。

俺達が部屋に入ると、既に黒服達が整列し、詩音が直立不動で俺達を待ち受けていた。

詩音の後ろに、刀を収める鞘みたいなものが置いてある。

その鞘の両脇に荒川・乙部の二人がたっている。

その鞘に、魅音が古出神社の祭具殿から持って来た宝刀を差し込めば良いのだろう。

魅音が車椅子のストッパをかけて離れると、刀を抜いて、その鞘にゆつくりと入れる。

全て収まった次の瞬間。

鞘から温かな光が溢れ、それが人の形になった。

あれは…梨花ちゃん…？

確か、雛見沢大災害で死んだはず…

なら、今日の前にいるのは…

“クスクス、圭一久しぶりね。いえ、違うかしら…？”

貴方は迷い込んだ子猫ちゃんみたいね”

…迷い込んだ子猫？

何を言っているんだ？

「…魅」

俺が魅音に声をかけようとして気が付いた。

この場にいる全員の動きが止まっている。

あたかも時間が停止したかのように。

“ 貴方はここにいないべき人では無いわ。

ちよつとした混線で、ここにいただけ

早く帰りなさい。貴方の愛しき人が

待っているでしょう？”

…でも、魅音を置き去りにするわけには。

“クスクス…やはり貴方は圭一ね

大丈夫、こっちの園崎圭一も、貴方と同じぐらい

魅いを愛しているから…心配なくて良いのよ”

俺は急激に意識が落ちていくのを感じる。

まるで沼の底に沈んでいくような…

“気をつけて、沙都子は…”

沙都子？沙都子は…なんだ…？

梨花ちゃ…

……………

……………

……

俺は目が覚めた。

正面には白い天井。俺はベッドの中にいる。

右を向くと眠そうに目をこする魅音の顔があった。

「ふわぁ、どうしたのこんな夜中に…」

「なあ、魅音。今は、昭和58年7月、俺は前原圭一で…あっているよな？」

「そうだよ。ついでにいうと美人妻と名古屋まで婚前旅行中。

数年後には前原じゃなく、園崎圭一に代わる予定。あと聞きたいことは…？」

俺は魅音の頭を優しく撫でる。

そうか。全部夢だったのか。

しかし、えらく生々しい夢をみたもんだぜ。

「変な夢を見ちまった。ミフネと若頭が生きて、反乱を起こしたって夢だ」

「ふぁくそうなんだ。まあ、そういうこともあるかもね。印象深かったし」

「でさ、あいつら、園崎家を継承するために『振鈴』を狙って…」

「ちよつと待って圭ちゃん…！園崎家を継承するために『振鈴』が必要だって話…まだしてなかったよね!?どこで聞いたの」

魅音が目を大きく見開く。

まさか、そんな…もしかして、あれはただの夢では無かった…？

そういえば、夢の中では、婚前旅行中に雛見沢で大災害が起きていたはず。

だとするなら…

俺はベッドから降りてテレビに向かうと、  
恐る恐る起動スイッチに指をあてる。

ゴクリ…

唾をのみ込み、ゆっくりとスイッチを押す。

だが、テレビはつかない。

まさか、やはり何か起きたのか!?

「み、魅音…?」

俺はベッドにいる魅音に振り返ると、

魅音は何かを俺の足元に放り投げた。

「圭ちゃん、そのテレビ…」

お金が必要なヤツ…ふあゝ」

足元の小銭を拾いテレビをつけると

今日の天気予報が軽快に映し出された。

俺は大きく息を吐く。

どうやら、今日は絶好の旅行日和になりそうだ…

## e x . T E A K E 2

「昭和58年5月：雛見沢分校：朝：前原圭一」

気が付くと俺は、教室の入り口の前にたっていた。

ここは、どこだ？学校？

俺は確かに、死んだはずだ。

死ぬ直前の時のことを覚えている。

老境となり倒れ、家族に見守れながら俺はゆっくりと意識が遠のき、そして…

「前原くん、どうしましたか？」

後ろを振り返ると知恵先生がいる。

知恵先生が、なぜ？

知恵先生は、だって…

いや、待て、ここは見覚えがある。

まさか、ここは…雛見沢分校か？

「せ、先生。今年は何年でしたっけ!?!」

俺はかすれた声で知恵先生に尋ねると

知恵先生はニツコリと笑った。

「あらあら、前原君は転校初日で緊張しているようですね。

今年は何年58年5月ですよ」

昭和58年5月。

そして、転校初日…？

だとするならば、それじゃあ…

俺、教室のドアの上の方を確認する。

そこには、黒板消しが挟まっている。沙都子の罨、だ。

俺は、その黒板消しを手にとると教室の中に入る。

クラスメイトの目が一齐に俺の方を向く。

特に沙都子は大きな目で俺を見ていた。トラップが破られたからだ。

前の俺なら胸を張っていただろうが、さすがにそんな気にはなれない。



よくよく考えれば、こんな初歩的なトラップに俺もよくひっかかりたもんだ。

「それでは皆さん。今日は新しい友達をご紹介しますね。

今度、雛見沢に引っ越してきた前原圭一君です」

レナ、沙都子、梨花ちゃん…そして魅音。

部活メンバーが全員そろって、ここに…教室にいる。

俺は涙が出るのを抑えて、一歩前に出だ。

「園崎圭一です。よろしくお願ひします」

クラス中がざわめく。

しまった。人生の大半を園崎圭一で過ごしたんで、つい癖で出しちまった。

今の俺は、前原圭一だ。

「す、すいません。間違えました。

前原圭一です。よろしくお願ひします」

俺は、慌てて頭を下げる。

「前原くんは、転校初日で緊張しているようですね。

クラスの皆さんも、前原くんが馴染めるようにフォローしてあげてくださいね」

＼はい／

元気な声がクラスから聞こえてくる。

知恵先生の指示されて席に向かう。俺の席は一番後ろの方だ。

そういえば、確か椅子には画びょう、机の中にはカエルの玩具が入っていたんだっけ…

俺はそれらを何事もなく全て片付ける。

沙都子が一人驚愕している。

なぜ自分のトラップがわかったのか理解できていないのだろう。

ふふん、甘いぜ沙都子。

この世界の俺は一味も二味も違うんだぜ？

俺が席に座ると、

その横には、魅音が、いた。

「こんにちは、私は園崎魅音。よろしくね。

ゲーム部の部長をやっているんだ。良かったらさ入ってみない？」  
「あ、ああ…よろしく頼むぜ。魅音」

魅音がニツコリと微笑んで挨拶をしてくる。  
俺はというと、あの当時のノリを思い出すのに一苦労だ。

声をかけてくれた魅音も、

俺が、まさか見た目は十代半ばで、

中身がおっさんだとは思わないだろう。

「ところで、初めまして…かな？」

さつき、園崎って言ってたみたいだけど…

どこかで会った事、あるっけ？」

答えに窮するぜ。

どうしようか。ここは、少しスピリチュアルな返事をした方が良  
か？

こういう時は煙に巻こう。

「実はさ、ここだけの話なんだけど…」

「うん、うん。なに…？」

「実は前世で、俺達付き合っていたんだ」

「…はあ…なにそれ!？」

魅音が顔を真っ赤にしている狼狽している。

反応が初々しくて実に楽しい。

まだ恋人もいない時代の魅音だからな。

この手の話には弱いだろう。

「…それって、あれ？都会流のナンパの手口ってやつ？」

おじさん、そういうのにはひっかからないよ！」

少しムっとした感じで怒っている。

この時代の魅音には多少刺激の強い言い方だったかもしれない。

そりやそうだ。詩音と違って女性週刊誌なんて読まないタイプだ。

魅音が、こんな話を正面から受け取るわけがない。

…例え事実だとしてもだ。

「圭一が転校初日で沙都子のトラップを解除するなんて初めて見たわ  
…本当に、前世の記憶があるようね」

その声に振り返る。

俺の机のすぐ横に梨花ちゃんが立っていた。

魅音と話している内に、朝礼は終わったようだ。

知恵先生はいなくなっている。

俺はどう返答したらよいか思案したが、

相手は“オヤシロ様の化身”たる梨花ちゃんだ。

それはこの世界でも変わらないだろう。

なら、嘘やごまかしは言わない方が良い。

「…ああ、覚えている。前も、ここで皆と一緒に部活をしていた」

「それで…?」

「分校を卒業して…大学にいったって魅音と結婚して…」

「け、け、結婚!?私とアンタが結婚!」

魅音が顔を真っ赤にして顔から湯気をだしている。

いや、いや、さすがに少し先走り過ぎたか。でも、まあいいや。

せっかくだから全部伝えておこう。

「おう、そうだぜ!魅音とつきつて、そのままゴールインだ!

子供も出来たぜ!」

「わー!!!ちよつと待った!ストップ!ストップ!

ナンパの手口も、そこまでいくと、ちよつとやりすぎだよ!

お付き合いから結婚のストレートゴールインって、いつの時代の話

さー!

いつの時代と言われても、

昭和の時代としか言いようがないけどな。

「しようがないだろう。俺とお前も、生涯つき合ったのはお互い一

人つきりだったんだから」

「へ…生涯、その…本当に圭ちゃんと一緒にだったの?」

「ああ、何度か大げんかはしたけどな。まあ、基本はイチラブだった

ぜ?」

「そ、そう…ふーん。そうなんだ…」

魅音が顔をそむける。

可愛いな。本当に魅音は。

いつの時代でも。

ポロ：

あ、くそ…なんだ。涙がこぼれてきやがった。

なんてこつたい。これだからガキの体は…すぐに感情に反応しやがる。

近くによつてきたレナが俺の涙を見て驚いている。

「あの、前原くん。どうかしたの？」

「いや、俺の知っている園崎魅音と、今、ここにいる園崎魅音が違うつて思うとな。」

なんだかな…くそ…」

俺が何を言っているのよくわからず首を傾げているレナを放置し、あふれ出る涙目をなんとか止めようと試みた。

でも、どうやつても無理だ。涙が止まらない。

天井を見上げても、両目からあふれる涙がポロポロと零れ落ちる。

ああ、そうだ。ここは別の世界で、俺の愛した園崎魅音はこの世界にはいないんだ。

ここにいるのは、同じ姿をして、同じ性格をした。全くの別人だ。

ちくしょう。なんで、また過去に戻ってきちまったんだ。

魅音と心から愛し合った俺の一生が台無しじゃないか。

人生に二度目なんて必要ねえんだよ。

「圭一、その…ごめんなさい。卒業したと言いましたけど…」

僕は、昭和58年6月を…生きのびられたのですか？」

何かに怯えるように、おずおずと口をひらく梨花ちゃんの頭を撫でて、

俺はとびつきりの笑顔で答える。

「当たり前だろう？俺達は仲間の力で、どんな困難だって乗り越えてみせたぜ」

だから安心しな梨花ちゃん。ちゃんと梨花ちゃんは分校を卒業したぜ」

梨花ちゃんは分校を卒業して…それからどうなったんだっけ？

そのあたりの記憶があいまいでよくわからない。

だけど、確実に言える。

梨花ちゃんは助かる。来月を生き延びられる。

ああ、それはこの前原圭一のお墨付きだぜ！

「圭」…ありがとうなのです…そう言ってくれれば、ボクも嬉しいのです。

…そうですか。僕は、分校を卒業できるのですね☆にはー！」

周囲が困惑している最中で、俺と梨花ちゃんが笑い合う。

そりゃ、そうだ。俺達は何を言っているか、誰も理解できないだろう。

ふと、俺の背中を引つ張られた。

誰だ？魅音か。

魅音が顔を背けながら、俺の背中のシャツを引つ張っている。

「どうした魅音？」

「あの、圭ちゃんさ…もし…もしも、だよ？」

おじさんにも前世の記憶があるって言ったら…どうする？」

…ドツクン。

胸の鼓動が高鳴る。

え？まさか、本当に、魅音…お前、記憶があるのか？

俺とつき合った記憶が、俺と生涯を共にした記憶が？

魅音は顔を真っ赤にして、視線を背けている。

本当か嘘かはわからない。

いや、もうどっちだってかまわない。

俺がこの場で言う台詞は一つしか無いだろう。

「魅音、その…だとしたら。お前の人生…

もう一度、俺に出来ないか…？」

俺は真顔でそう伝えた。

これは告白じゃない無い。プロポーズだ。

それは皆もわかったんだだろう。

レナは真っ赤になって両手で顔を覆い。

沙都子と梨花ちゃんは絶句している。

そして、魅音は…

こつくりと頷いた。

「その…うん…いいよ…」

／＼とおおおおお／＼

周辺から歓喜の声上がる。

というか、いつの間に俺の周りにクラスメイトが集まってきていたんだ！

そして、一部始終を見ていたのか！

レナと沙都子が困惑気味に祝福してる。

「あ、あの…よくわからないけれど、二人ともおめでとう！おめでとう！」

「し、信じられないですわ。転校初日って…過去最速のカップリングでございますわよ」

そして梨花ちゃんが満面の笑みで喜んでいる。

「おめでとうなのですよ圭一！」

俺は、魅音の肩に腕を回して、体を寄せる。

目の前に魅音の顔がある。

「ありがとう。レナ、沙都子、梨花ちゃん。

俺、この世界でも魅音を幸せにしてみせる。絶対だ！」

「えっと、圭ちゃん…んっ!？」

俺は何か言おうとした魅音の唇を塞ぐ。

さらに周囲で歓声があがった。

もし、これが初めてキスを経験する魅音だったのなら安心していただけに違いない。

だけれども違った。魅音は俺の背中に両手を回した。

これだけで十分確信できた。

魅音は、俺の愛した魅音なんだと。

唇を離した魅音は、

顔を朱に染めながらも茶目つ気たつぷりに片目をつぶった。

「あははは、圭ちゃん…だからさ、言ったじゃん」

「…え？何がだよ？」

「何度生まれ変わっても、圭ちゃんは絶対におじさんに告白するって」

やられた。

なんだよお前…：全部分かった上で演技していたのかよ。  
ズルイ奴だな。

魅音は優しく微笑み。

俺も微笑みを返す。

まったく…：魅音にはかなわないぜ。

俺はつくづくそう思った。

END